



抱月全集

第五卷



最近の抱月氏

第五卷『飜譯』集に就て

抱月氏の逝去前、七八年間に亘る晩年期は、先づ文藝協會の事業を貧け、更に自ら藝術座を創めて、始終一貫專ら新劇運動の爲めにその全精、全力を傾け盡し、所謂斃れて後止んだ最も悲壯的な、叉最も徵象的なシーンで、氏の生涯の幕切れとなつた、それは恰も地平線下に沈み入る夕陽の、やがてその燦爛たる最后の輝きと、無言の輓歌の返照を、大空に殘し行くさまを想はせるものであつた。

本卷はこの時代に氏が、その心を跳らせる歡喜を以て飜譯した、西洋の傑作戯曲のすべてを集めた、そしてその大部分は、我國の劇場の舞臺に上演せられて、藝術的に、乃至文化的にそれ〴〵重要な意味を持つたものである、將來に於てもその價値は決して失はれないであろう。

氏の譯筆を着けた時日から云へば『人形の家』が最も先きであるが、玆では完成して書物の形式で、發刊された順序に從うて編纂した、尙頁數の都合上、『人形の家』の序論は相當の長編であるから『文藝雜纂』の方へ收錄する事とした。自分は自ら校讀しながら當年の舞臺上の實演の幻影がまざ〳〵と再現されつゝあるやうな感じがして、刹那のセンチメンタリストたる誘惑から免れる事が出來なかつた、それも序に附記する事を許して貰ひたい。

大正八年七月十九日

中村吉藏

凡　例

一、本集は故島村抱月氏の文藝上の業績を永久に傳へるため編纂したものである。

二、本集はすべて八卷、第一卷及第二卷『文藝評論』第三卷『美學及歐洲文藝史』第四卷『新美辭學概論』第五卷『飜譯』第六卷『創作』第七卷『文藝雜纂』第八卷『隨筆日記書簡』の順序である。

三、本集全體の編輯について金子馬治氏を顧問とし中村吉藏、片上伸、相馬昌治、中村將爲、本間久雄の五名各その勞を分つた。

但し第一卷所載の『抱月島村瀧太郎先生小傳』は相馬昌治の筆になつたものである。

又第五卷の編輯は中村吉藏主としてこれに當つた。

四、本集の出版について高田早苗、坪内雄藏兩先生を始め早稻田大學出版部、春陽堂、新潮社、金尾文淵堂、南北社、忠誠堂等の厚意を受けたところが多い。こゝに明記して謝意を表す。

五、本集の裝幀は抱月氏の令孃君子氏の手に成つたものである。

抱月全集第五巻目次

一、故　郷（スーダーマン原作）明治四十五年六月　一頁
一、人形の家（イブセン原作）大正二年三月　一三一頁
一、ペレアスとメリサンド（マーテルリンク原作）同　五月　二五三頁
一、七王女（同上）同　五月　三二七頁
一、モンナ、ヴンナ（同上）同二年九月　三五九頁
一、海の夫人（イブセン原作）同三年二月　四四一頁
一、復　活（トルストイ原作）同　三月　五八三頁
一、クレオパトラ（シエーキスピアー原作）同　十月　六六七頁

故郷

（スーダーマン原作）

此の脚本の原本ハイマート(Heimat)は千八百九十三年の著で、作者ズーダーマン(Hermann Sudermann)氏は千八百五十七年ドイツ國東プロイセンの一地方に生れ、ベルリンに來るまでケーニヒスベルグ大學に學んだ、そのケーニヒスベルグが此の劇の舞臺と假定せられた土地であるといふ。氏は初め小說家として聲名を博し、續いて千八百九十年以後更に脚本家として成功し、遂にハウプトマンの詩人的方面と相并んで、問題劇、舞臺技巧等の方面からドイツの劇壇を世界に代表する人となつた。

而して『故鄕』は種々の點から此の作家の最好代表作と見るべき劇で、また最も廣く行はれた劇である。イギリス譯は劇中の女主人公の名を取つて『マグダ』と題し、女優カムペル夫人が之れを演じ、フランス譯はサラ、ベルナールが演じ、イタリヤ譯は、ドウゼが演じ、其の他歐洲諸國の有名な女優が競つてマグダに手腕を示さんとしてゐる。此の點は、イブセンの『人形の家』に於けるノラと相似てゐる。ズーダーマンにはスクリーブの技巧もイブセンの思想も跡を殘してゐるであらう。また思想上の時事問題を右から左から綴ぢ合せた氣味の所もあるであらう。併しそれらは凡て問題の外として『故鄕』が近世の舞臺上の產物として、最も光彩あるものゝ一たることは爭はれない。

勿論此の劇にも種々の思想問題は含まれてゐて、樣々の解釋を容れ得ると共に、大摑みに言へば、中心の問題はシュワルツェの世界とマグダの世界と、而して此の矛盾した二つの世界を調和せんとする牧師の世界と、三樣の思想道徳が、終に統一を得ずして悲劇に了る所に存してゐる。歐洲の批評家の傳へる所によれば、サラ、ベルナールのマグダは、最後に舞臺の中央に其の新世界の威儀を歸かして直立し、以て暗に新道徳の前途をマグダの勝利に求めるやうな解釋で演じたといふ、之れに反してカムペル夫人のマグダは舞臺に泣き崩れて、悔恨の意を見はしマクグの世界の挫折すべきことをほのめかしたといふ。文藝協會が明治四十五年五月三日から十日間東京有樂座で公演したのでは、むしろマグダとシュワルツェ一家と牧師と、三樣の世界が分裂のまゝに殘り、各々自分をも棄て得ないで新道德の前途に尚ほ幾多の曲折のあるべきことを提示して幕を閉ぢた。此のときの役割は下の如くである。

シュワルツェ	土肥庸元氏	フォン、ケラー學士	東儀季治氏
マグダ	松井須磨子氏	ベックマン教授	西原勝彦氏
マリイ	林千歳氏	フォン、クレブス	戸田猿仁氏
アウグステ	和泉房江氏	フォン、クレブス夫人	橫川唯治氏

フランチスカ　都郷道子氏　エルリヒ夫人　森英治郎氏
マックス　林長三氏　シューマン夫人　泉新一氏
ヘフターデキンク　佐々木積氏　テレーゼ、森英治郎氏

然るに此の劇が提出する思想は日本の國家道德の基礎たる忠孝の教に背くといふ理由で、政府は其後の興行を禁止する旨を協會に內達した。よつて譯者は協會幹事の一人として內務省を訪ひ當局者に就いて精しい說明を聞いた上、協會の事情已むを得ず、脚本に小部分の變更を加へると共に、結末に女主人公悔恨の一節を補足して、禁止を解いて貰ふことにした。本書はすなはち其の改删本であつて最終幕に於ける「お父さんの柩に禱をお上げなさるのを誰れも止めるものはありますまい」といふ牧師の詞までの原作の趣意では、日本現在の道德心が滿足しないといふので其の後を加へたのである。本文中でも餘りに露骨な語句は舞臺の上では削除し又は變更することにした。ただ本書は教養ある社會を相手とする讀物であるから、本文では不穩當と認められる語句の重なるものを削除するだけにして置いた。讀者と原著者の諒恕を乞ふ。
尙此の譯を作るにあたり Charles Eward Amery Winslow の英譯及藤澤古雪君の邦譯をも參照した。

明治四十五年初夏

人物

シュワルツェ（退職陸軍中佐）
マグダ（中佐の先妻の娘）
マリイ（同前）
アウグステ（中佐の後妻、フォン、ウエンドロウスキー家の出）
フランチスカ、フォン、ウェンドロウスキー（アウグステの妹）
マックス、フォン、ウェンドロウスキー（陸軍中尉、アウグステ等の甥）
ヘフターデ井ング（聖マリー教會の牧師）
フォン・ケラー學士（參事官）
ベックマン教授（休職校長）
フォン、クレブス（退職陸軍少將）
フォン、クレブス夫人
エルリヒ（地方裁判所部長）夫人
シユーマン夫人
テレゼ（シュワルツェ家の女中）

場所

ドイツの或地方の首都

時

現代。

第一幕

場面　シュワルツェ中佐家の居間。品よく簡素で古風な飾りつけ。正面左に硝子戸、白い窓掛がかゝつてゐてその硝子戸越しに食堂が見える。並んで廊下への戸、そのうしろに二階への階段が見える。右手、隅を斜に見切つて白い窓掛を垂れた窓、その周圍には蔦がからんでゐる。左手、中佐の室への戸。壁には聖書にある事、愛國的の事件など鋼鐵版で刷つた繪を、小さな錆びた金縁の額に入れたものや、軍人の寫眞や、蝶を採集した函やが掛けてある右、ソーファの上には亡くなつたシュワルツェ夫人の肖像が、他の繪と共にかゝつてゐて、若い惚々する容貌、千八百六十年代の服裝をしてゐる。ソーファの奥には古風な圓筒臺形の机。窓の前には小卓の上に裁縫箱と手ミシンとが載せてある。正面二つの戸の中間に古風な高い大時計。左の隅には乾いた花環をかけた柱、その前に魚を飼ふ硝子箱を置いた卓。左、前に寄つて隅椅子、その背に小さなパイプ棚。次に暖爐、其の上に剝製の鳥が置いてあつて、その奥には本箱、その上にウ井ルヘルム老帝の半身像が据えてある。

第一場

マリイ　テレゼ

テレゼ　（入口でそつと呼ぶ）　お孃さま！

マリイ　（しきりにミシンをかけながら）　なあに？

テレゼ　旦那さまも奥樣もまだお晝寢で居らつしやいますか？

マリイ　お客さま？

テレゼ　いゝえ。ですけど、また斯んなものが參りましたよ、――御覽遊ばせ（見事な花束を持込む）

マリイ　（びつくりして）あら、まあ！早く私の部屋へ持つて行つてお置き。お父さまに見つからうものなら――だけどお前、昨日のが來た時これからそんな物を受取つてはいけないつて、さう言つたぢやないの？

テレゼ　私も存じてゐましたら、花屋の小僧をおひかへしたのでございますけど、ちやうど、國旗を出しに梯子の上へ登つてゐたのでございますよ。するとその間にこれを置いて――小僧はもう行つちまつたのでございます。ですけどまあ何といふ綺麗な花でございませう。私の察しでは、是れはあの、中尉さまが――。

マリイ　そんな察しなんか、餘計なことですよ。

テレゼ　はい、はい。あ、何でございましたつけ、あの、國旗はあんな風で宜しうございませうか？

マリイ　（外を覗く――うなづく）

テレゼ　それからあの、町は國旗と花とで一杯でございます……そして大變お金のかゝつた織物を窓から懸けましてね…まるで天長節のやうでございますよ……そしてそれがみんな、あの、馬鹿々々しい音樂祭の爲なんでございますよ……お孃さま、一體音樂祭つて、何んなものでございます？　唱歌祭といふのとは違ひますか？

マリイ　あゝ違ふとも。

テレゼ　もつと立派でございますか。

マリイ　あゝ、もつと立派よ。

テレゼ　（悲しさうに）おやまあ――そんなに立派なお祭でございますと――（戸を叩く音が聞える）

マリイ　お這入んなさい。（マックス入り來たる）

テレゼ　さあ、もう、是れで此の花も茲に置いて行つていゝだらう。（獨りで笑ひながら出て行く）

第二場

マリイ　マックス

マリイ　マックスさん、あなた、氣の利いた事をなすつたわねえ。

マックス　何うしたと言ふんです？　僕には分からない。

マリイ　此の花を私に贈つたのは、あなたぢやなくつて？

マックス　飛んでもない事。それは、僕だつて時々菫の花の五ペンニヒ位なら、贈ることも出來るが、斯んなものは、まるで僕の知らん事です。

マリイ　（呼鈴の方へ行きながら）ぢや昨日のも？

マックス　まるで知らない。

マリイ　（呼鈴を押す、テレゼ出で來たる）此の花を掃溜へ棄てゝおしまい。

テレゼ　まあ、斯んな結構なものを！

マリイ　さうね、それもさうだわ。（マックスの方へ）あの牧師さんなら、斯んな場合に屹度さう仰しやるでせうね。神さまの下すつたものが自分の氣に入らなかつたら、せめて他の人の喜びになるやうに、心がけなくちやならないつて、ね、さうは仰しやらないでせうか。

マックス　屹度さう言はれるでせう。

マリイ　お前、その花を、も一度花屋へ持つてお出で。やつぱりチムメルマンの店だらう？（テレぜうなづく）賣れるならそれを賣つてね、そのお金をヘフターデキンクさんへ差上げて、病院の費用に寄附した方がいゝ。

テレぜ　今直ぐでございますか？

マリイ　その前にコーヒーを拵へて置いてお呉れ、出すのは私が出すから。（テレぜ去る）ほんとに失禮な！　私、申し上げるまでも無いでせうが、他人に斯んな事をされる覺は、影ほども無いのですから。

マックス　それは分つてるさ。

マリイ　それからお父さまが大變怒てましたよ……怒鳴りつけてゐましたの……けれど私は内心、貴方かと思つたものだから、默つてゐたのですよ……その男が若しお父さまの指の股につかまりでもしやうものなら、かわいさうに、ひどい目に遭つたのですよ。

マックス　私の指の股でつかまへたら何うでせう。

マリイ　そんな事をする權利があなたにあつて？

マックス　（賴むやうに）マリイさん！　（手を把る）

マリイ　（靜に其の手をはづしながら）ね、あなた――後生ですから――さうしないでゐて頂戴。私の心持はようく分つてゐるでせう。――たゞ私たちはね、行を愼まなくちやならないのですよ。

マックス　（ため息をして）行を愼む――つまらない！

マリイ　貴方だつて分つてるでせう、私達が何んな世界に住んでゐるか。此の土地では、みんなが他の人に氣兼をしてるな

くちやならないのですもの、みんなが、他の人に善く言はれやうといふ事ばかり頼みにしてゐるのですもの……あれつばかしの花束でも、悪名なんかで噂の種にならないとは限らないのですから、此のうへ――。

マックス　（考へてうなづく）

マリイ　（男の肩に手をかけて）ね、あなた、今一度保證金の事を叔母さんに話したらいゝでせう?。

マックス　もう話しちやつた。

マリイ　で?

マックス　（肩をすくめて）あの人が生きてる間は、一文だつて駄目です。

マリイ　さうなると、私達を助けて呉れるものはあと一人しか居ないのねえ。

マックス　お父さん?

マリイ　とんでもないこと、父にそんな事なぞ、決して言はないやうにして下さい……。あなたの入らつしやるのを差とめて了ふかも知れないから。

マックス　私が此の家へ何んな害をするといふのでせう?

マリイ　でもねえ、家にあのごた／＼があつてからといふもの……父はただもう、家名の汚れを雪ぐといふことばかし氣にかけてゐるのですよ。そして丁度今、町中が音樂で騒ぎ立つてるでせう?、あれがみんな、父には姉さんの事を想ひ出させる種です――。

マックス　さうねえ。それで若し何日かマグダさんが歸つて來たとしたら?

マリイ　十二年もたつたのですもの。もう歸つては來ません。（泣く）

マックス　マリイさん！

マリイ　さうですわね。つまらない事、よしませう〳〵。

マックス　そして誰れといふのです、吾々を助けて呉れるのは？

マリイ　きまつてるぢやありませんか、あの牧師さん。

マックス　成程さうだ、あの牧師。

マリイ　あの方なら何でも出來ます。人の心を動かす力と言つたら――それに私に取つてはあの方は親類のやうなものでもあるし。義理の兄になりかけた人ですからね。

マックス　それはさうだが、併しマグダさんの方で嫌つたぢやありませんか。

マリイ　そんなにひどく言はないで下さい。姉さんも今ぢや乾度それを償ふだけの事はしてゐませうから。（手鈴が鳴る）

マックス　さうぢやない僕、話すのを忘れてゐたが、參事官のフォン、ケラー君が、今日此所へ紹介して呉と言つてたんです。おや、牧師さんかも知れませんよ。

マリイ　へえ、何の用でせう？

マックス　傳道の事で何か――さうさね、重にこちらでする事に就いての用でせう。確かには知らないが――多分――さうさ、兎に角明日の委員會に出たいと言ふのさ。

マリイ　ぢや、お父さまやお母さまを起して來やう。（テレゼ名刺を持つて這入る）お通し（テレゼ去る）[illegible]いあひだお相手してゐて頂戴ね（握手させて）それから牧師さんの事も後でまたお話しませうね。

マックス　（笑つて）行を愼まなくてもいゝかね。

マリイ　まあ私――出過ぎた事を――言ひますわね？

マックス　マリイさん！

マリイ　もう、もう――、その事は話しつこなしですよ――さよなら。（去る）

第三場

マックス　ケラー

マックス　（向き迎へて）どつか少しの間僕のお相手で我慢してゐて下さい。（握手する）

ケラー　飛んだことを、どうかお構ひなく。（腰をかける）此の穩かな町も、お祭り騒ですつかり調子が狂つてしまひましたね。何となく廣い世間へ出たやうですね。

マックス　（笑つて）氣をつけなくちやいけませんよ。そんな事は大きな聲でおつしやらない方がいゝです。

ケラー　何をでせう？全く何の意味もあつた譯ぢやないのですが、どうもさういふ誤解は困りますね、世間に傳はりますと――

マックス　いや、僕は御心配に及びませんがね！

ケラー　あ、それは勿論ですとも……だが結局何ですねえ、一番いゝのは、廣い世間なぞ初めから知らないでゐるに限りますね。

マックス　何のくらゐあちらにお出になりました。

ケラー　五年です。其のあひだ、試驗だの、委員の方へ引つ張り出されるのと、色々な事がありましてね——やつとまあ斯うしてまた尻を落ちつける事になつたのです——故郷のビールを飮んで、故郷の裁縫師が仕立てた服を着て、死も恐れないといふ標榜で季節の鹿の肉でも喰ひ盡せば、それが卽ち快樂なのだ——勿論、若い時は二度は無いし、女、旅行、みんな好いものには相違ないが、併し世の中はそれぢやあ治まりませんからね。眞面目な人が必要です。君なども今にその時代が來ます。名望に生きる時代が近づいて來る。さうです、就中宗教社會に關係しますとね。

マックス　あなたもその方に御關係のおつもりですか？

ケラー　さう思ひ立つたのです——精神的の立場から行きたいと思ひましてね——君にですから打ち明て申しますが——私にはその必要があるのです——つまり——宗教問題に興味を持つて見やうといふのです。先達ても私は——もう分らう御存知でせうが——その意見を發表しましたよ。それから、ちやうど此のお家で保つてお出でになる地位や關係——それを私は實際のところどんなにか誇りにしてゐるでせう——。

マックス　（半ば冗談のやうに）それほど誇りにして居らつしやつたのは、以前の事でせう。

ケラー　と云ふと、私の邪推かも知れんが、何だか批難のお言葉のやうにも聞えますね。

マックス　全くさうぢやないです……けれども遠慮なく申すと、時々僕にはさう見えたのです——そして僕ひとりさう思つたのでは無いのですが——あなたは成るべく伯父の家のものが出這入る先を避けてお出でのやうでした。

ケラー　そんな！　では斯うして今日來つた事が其の反對の證據になりませう。

マックス　御もつともです——では僕も思つてる通りを忌憚なく申しませう。從姉のマグダが家出をしてから、旅で最後に

お逢ひなすつたのは、あなたださうですな。

ケラー　（狼狽して）何ういふ譯で――？

マックス　でも、さうでせう、あなた自身でさうお話になつたと聞きましたから、それに、そのころ陸軍大學に入つてゐた僕の友人でハイデブランドといふのが、あなたと御一緒でマグダに逢つたといふ話ですな。

ケラー　さうでした〳〵。全くさうです――。

マックス　實はその事をもつと明さまに伺へばよかつたのですが、躊躇したといふ理由は……僕自身今では此の家のものゝやうに思つてゐるものですから、家の恥辱になるやうな事は何だか聞くのが恐ろしいやうな氣がしたのです。

ケラー　おゝ――つまらない事、ちつともそんな事はありません！　事實はただ是れだけです、私が高等文官試驗を受けにベルリンに行つてゐた時の事ですが、或る日ライプチッヒの通りで不圖見識りの顏に出會つたのです――いはゆる――故郷顏ですね……御承知でせうが他郷でさういふ場合には、實にうれしいものです――で、お互に話し合つたといふ譯で――其話の樣子では、マグダさんは、オペラの女優になる稽古をしてゐられやうです、そして家出をされたのもそのためだと聞きました。

マックス　いや、全然さうでもありません。家出をしたのは。或る老婦人の附人になりたいといふ爲でした。（躊躇して）父親と意見の合はない事があつたのです、

ケラー　屹度結婚問題でせう？

マックス　まづさうです……老人は男の側に立つてゐたものですから、無造作に言ひ切つたのです、命令に從ふか、否なら家を出て行けつて。

ケラー　それでマグダさんが出て行つた。

マックス　さうです、けれども最初一年ばかり經つてから手紙をよこして、舞臺に立たうと思ふといふ事を言つて來ました。それで愈々家との緣は切れてしまつたのです。――それはさうとして、あなたのその先のお話は？

ケラー　實際それだけです。

マックス　それだけですか？

ケラー　えゝ――えゝ、それから折々例へばマグダさんが自由に出入してゐるオペラなぞで逢つた事もある。

マックス　そしておれの身の上については全く何も御承知ありませんか？

ケラー　（肩をすくめて）君の方へも、何のたよりもないのですか？

マックス　なんにも！　が、兎に角ありがたうございました。もつとも、此の事は、伯父が直接お尋ねしたい限は、どうか伯父へはお話なさらないやうに願ひます。無論承知はしてゐますが、たゞ、家出した娘の名を、家では決して口にしないやうにしてゐますから。

ケラー　それは君、おつしやるまでもなく、心得てゐますよ。

マックス　そしてマグダはその後何うなつたでせう？

ケラー　さあ、音樂といふ奴は富籤のやうなものですからねえ。一萬本の空籤の中から一本しか當り籤は出ない。始めるものは多勢あつても、一人本當に成功すれば……全く、一人パテキーが出ても、セムブリッヒが出ても又は――ちやうど今度の音樂祭に來るくらゐの――。

第四場

前の二人　シュワルツェ　（續いて）シュワルツェ夫人

シュワルツェ　（ケラーと握手して）やあ、フオン、ケラーさんよく俺の家へ來て下すつた。（這入つて來た妻君を前へ進めて）參事官のフオン、ケラーさん――俺の妻です。

シュワルツェ夫人　さあ何うかおかけ下さい。

ケラー　奥さん、どうも無遠慮に御面會を願ひまして、實は私も皆さんと御一緒に、公益的な宗教上のあの御事業に加はらせて頂きたいといふ、熱心な希望でございましてね、それにお宅さまがその中心ともなつて居らつしやることは、全市民の認める所でございますから、それで斯うして伺つた譯で、だしぬけの失禮はどうかお容しを願ひます。

シュワルツェ　いや、もう、――痛み入つたお言葉で、それはわしどもの當るところぢやあござんせん。此の事業の中心と言へば、あのそれ、牧師のヘフターデキンク君、あれを措いて他にはありませんぢや、あの男には凡ての人が動かされる、あの男には凡ての人が支配せられる、――あの男には――。

シュワルツェ夫人　あなたその牧師の方を御存知で入らつしやいますか？

ケラー　はい、お話を拜聽したことは度々ございます。そしていかにも誠の確信と、人間に對する純撲な信念とに撲たれました。けれどもあの方がそれ程の感化力を持つてゐられるといふ事は、まだ聞きませんでした。

シュワルツェ夫人　おや〳〵、今に分つて參りませう。そりや、もう、あの方の天性と言つたら、全く純潔な、誠實なものですよ、一寸見ただけではとても分らないくらゐです、誰れでもあの方にはすつかり歸依して了ひます。

ケラー　(丁寧に)　私も伺つただけで、もう殆ど、そんな氣がいたします。

シュワルツェ　それからわし等に取つてもな、有りがたい事にはあの人のお蔭で此の衰へた用の無い手を、立派な事業に捧げることが出來ますぢや、今ではそれが唯一の仕事でな、つまりさう思ひますのさ、一個の老軍人が幾分たりとも用ゆるに足るだけの力を陛下から剩して頂いた、それを今度は神の御前に捧げる――それが即ち――えゝ――相並んで俺等のやるべき仕事だと思ふのです――な、さうではあるまいか？

ケラー　高大なお考へです。

シュワルツェ　いや、どうして、どうして、併し――もう其の事は茲では言はんことにしませう！――あゝ、俺もな、ちやうど――えゝ――さうさ今から十年前、退職になつた頃は、まだこれで、がむしやらだつたか！　えゝ、これ、マックス――何だらうな。舊の俺の隊では、今でも俺の事を言ふと、話へ上がるだらうな――マックス――何だと？

マックス　はい、さうです、伯父さん――。

シュワルツェ　さうさな、君方のやうな文官には、年限の來ないうちに退職になるなぞといふ事は、無い事だ。固より――何等の過失があつた譯ではない――(考へて)全く過失の影もないのだからなあ！――そこへ持つて來て、ちよつとした卒中が起つたのです。これ御覽なさい、今だに震へてをる(右の手を高く差しあげて)さうなると、もう何を爲やうと言つた所が――なあ――仕事が何で出來ますかい。そこへ來て呉れたのが、即ちあの若い感心な友人のヘフターデキンク君。あの人のお蔭で俺は仕事と新に導かれて、新しい生涯の道に這入りましたぢや。あの人が來て呉れなんだら、とても俺ひとりで出來ることぢやあごさんせん。

シュワルツェ夫人　宅が申す程でもございませんから、一々眞にお受けなさいますな、一體宅が不斷からあゝまで自分を卑下

してばかり居ませんでしたら、上流社會の方にも、もつとは重く見られてゐましたらうにねえ。

ケラー　何ういたしまして、奥さん！　上流社會にも下層社會にも、御主人の名聲は響き渡つて、尊敬せられて居ります

シュワルツェ　（心地よげに）さうかな？――いや、虚榮はいかんて！あゝ、いかん〳〵、虚榮はいかん――人間に蟲のつくのは其爲だ。

シュワルツェ夫人　實際そんなに惡い事でせうか、少しばかり尊敬されたいと思ひますのが？

ケラー　おゝ！

シュワルツェ　尊敬されるつて、何うするのか？――お前の言ふのは、例へば會席で知事に引き廻して貰ふとか、宮樣方の見えた時宮中の茶に召されるとか、さういふ事だらう。

シュワルツェ夫人　それが、つい先達ても、私だけ除けものにされましたのを、あなた、御存知ぢやありませんか。

シュワルツェ　さう〳〵、俺が惡かつた。それをお前が氣に病んで居つたなあ。言ひ出さないやうに、注意すべきであつたな。

シュワルツェ夫人　ねえ、あなた、參事官、お聞き下さいましよ。あの、小兒科醫院のファンニー、ヒルシュフェルト夫人へは殿下からお招きの沙汰があつたのですよ――そして私にはそれが無いのです。

ケラー　（氣の毒げに）おゝ！

シュワルツェ　（笑ひながら夫人の頭を撫でて）これ〳〵、さつき言つた通りだ、蟲がつきますよ。

第五場

前の人々　マリイ（コーヒー道具を載せた盆を持つて出る、立ち上つたケラーに親しげに默禮する）

シュワルツェ　フォン、ケラーさん――俺の娘です――たつた一人の娘です。

ケラー　先刻もうお目にかゝりました。

マリイ　あの、失禮でございますが、握手の御挨拶はいたしませんから、その代りどうかコーヒーを一つ召しあがつて下さいませ。

ケラー　（自分でコーヒーを注ぎ、そして人々の顔を見廻しながら）いやどうも、久しいお近付か何ぞのやうなおもてなしで恐れ入ります。

シュワルツェ　近づきといふよりもな、此の家に取つては、親しい友人になつて貰ひます。――これは決してお辯ちやらではありませんぞ、つまり君の人となりを識つて居るからですぞ、參事官、今のやうに道徳や權威の手綱が危く千切れかゝつて居る時勢には、一層その必要がありますぢや、昔からの善良な、この家庭的道徳を維持しやうとする我々は、互に相協同して行かなくちやあならん。

ケラー　いかにも熱誠な、御もつともなお言葉です！　斯ういふお說は今の世間では容易に伺へるものぢやございませんちよいとした小錢で極安値に所謂現代思想が仕入れられる世の中ですから。

シュワルツェ　現代思想！　へ…、へ、、へ、、へ、、全く其通り！　併し君はこちらの靜な方面へ御出でなさるがいゝ。この方面から、陛下のために勇敢な兵士を育てゝ、そして貞淑な嫁を宛てゝやりませうぞ。やれ遺傳だの、やれ生存競爭だの、やれ個人の權利だのと、無益な事を騷ぎ立てる者は、こちらには居りません――數萬中俺はこちらには無い――現代

思想なぞといふものは追つ拂つてある、そして祖國の生命と力とは茲に宿つて居る……まあ此の家を見て下さい、――奢侈と見られるものは一つも無い――殆どいはゆる立派な趣味と稱すべきものもない、――色の褪せた敷物――樺の木造りの家具――古ぼけた繪畫――それで居て――なあ君、夕日の影があの白い窓掛を通してさも親しげに此のがらくた道具の上に一杯差し込んで來るのを見なすつたら「こゝにこそ幸福は宿つて居る」といふ聲が心の奥の方で聞えはすまいか？

ケラー　（いかにもといふ風にうなづく）

シュワルツェ　（ひとりごつと考へ込む）こゝにこそその幸福が宿つて居る筈であつたが。

マリイ　（急いで父の傍に寄り）お父さま！

シュワルツェ　よし、よし！なあ、君此の家では、今以て全く古風な父の權力といふものが行はれて居りますぢや――そして俺が生きて居る限りは續きませう。それで何うだ、俺は壓制者かな！えゝ？言つて御覽！――お前が一番よく知つて居る。

マリイ　お父さまが一番いゝ方、一番私の愛してる方――

シュワルツェ夫人　宅はもうすぐ激して了ふのでございますよ！

シュワルツェ　お前等だけは間違なく仕つけられたらうな！　俺等だけは離れはすまいな、俺等三人だけは？　併し現代の嵐は底止する所を知らん、兒共の心には反抗心を植えつける、夫婦の間には不信用が生ずる（立ち上り）到頭最後まであらゆる家庭を廢滅の中に沈めて了はなければ休まん。そしてみんなが、淋しいおづ／＼とした樣子で、喪家の狗のやうに街道をうろつき廻る。（興奮してよろ／＼と後ろざまに椅子の上に沈む）

シュワルツェ夫人　そんなに興奮なすつちやいけないと言ふのにねえ――。體に障ることは知れてるぢやありませんか。（夫の

方へ行く)。

マックス　(ケラーに合圖をする)

ケラー　(靜に)行きますか?

マックス　(うなづく)

ケラー　此の事に關しては、まだ色々面白い議論があらうと思ひますがね、中佐——私はどうもあなたが、少し酷に失して居らつしやるかと思ひます——併し今日は殘念でございますが時間が——

シュワルツェ　酷に失する——へ、酷に失する! まあ〳〵、年寄の事だ、少々熱して物を言つても惡く取つて下さるな。

ケラー　若いものこそ熱するのでございます、中佐……私などはあなたの前に出ます・老ぼれに過ぎません。

シュワルツェ　まあ、まあ! (手を押しつける)

ケラー　では奥さん! お孃さん! (去る)

マックス　(一緒に行うかとする)

シュワルツェ　それから、隊のものに宜しく言つて呉れよ。

マックス　畏りました。(去る)

第六場

シュワルツェ　同夫人。マリ〆

シュワルツェ夫人　氣持のいゝ方ねえ。
マリイ　善すぎる位ですのね。
シュワルツェ　家へ來たお客樣だよ。
シュワルツェ夫人　（マリイに合圖をして言葉に氣をつけさせる）
マリイ　お父さま、お煙草は？
シュワルツェ　おゝ、貰はうかな。
シュワルツェ夫人　もう追つつけ骨牌會の方が見えませう。ほんとによかつた、鹿の肉を日曜に食べて了はなくて――物といふものは取つて置くことねえ！　それから少將がお見えだからと思つて、赤葡萄酒を誂へて置きました。二マルク半、高くは無かつたでせうね？
シュワルツェ　善いのならな――フランチスカさんは今日來るか？
シュワルツェ夫人　多分――參りませう。
シュワルツェ　たしか、あれは、昨日知事の家へ招かれたと言つたな？
シュワルツェ　（ためいきをしながら）えゝ。
シュワルツェ　そして俺等は呼ばれなかつた。かわいさうなものだ！――それで今日は、フランチスカさんがまた自慢をするか（つぶやくやうに）古猫め――あいつ！
マリイ　（父の前に跪いてパイプに火をつける）優しくして下さいね、お父さま！――そんな事、何でもありせんわ。
シュワルツェ　（撫でながら）おゝ、おゝ、優しくするとも、マリイや！――何んなにでも優しくする。けれども（身をそらして）

此の胸が片意地になつてるてな。（呼鈴が鳴る、マリイ急いで出て行く）

シュワルツェ夫人　皆さんが見えたのでせう。

第七場

前の人々　フオン。クレブス少將　ベックマン教授　マリイ

少將　やあ、是れは失禮を致しますなあ、あゝ奧さん。（其手に接吻する）

シュワルツェ夫人　皆さま、よく入らつしやいました。

少將　よう、中佐、相變らず御機嫌かなり？——えゝ？——おゝ、マリイさんや、戰の仕度はすつかり出來ましたかね？もう少しこちらへ寄つたり……さう！　それでよろしい！　併しよつ程遲れる所ぢやつたなう——音樂祭の混雜の中へ陷つてな！　その騷ぎと言つたら！　俺はちやうど、校長を連れて來るところで——その——その——ちやうど俺等が——ドイツ館の所まで來るとな、その邊一杯の人で身動きも出來ん、みんな一生懸命に見て居る樣子が少くとも皇族方のお着とでもいふ風ぢや——ところがそれが——何——何——何の爲ぢやつたと思ふ？　オペラの女優ぢやが……是れはまあ、俺に言はすれば、年代記ものぢやなう——一人の女優の爲に！　一體何といふ女ぢやらう？

教授　併し少將閣下、今日は野蠻國へでもお這入りのつもりならいゝでせう。

少將　實に吾々は呪を受けたやうなものですなあ、奧さん！　罪に汚されたやうなものですなあ、奧さん！（皆々腰をかける）

教授　併しあなたはあのダローールトーの事を御存じでせう？有名なイタリヤのオペラ女優で、あちらでワグネル、オペ

ラの大きなものを歌つてゐます。今度の音樂祭にあの女優を招くことになつたのは吾々の仕合せです。若しあの女優が來なかつたら――。

少　將　ほう、ほう！　成程、若しあの女優が來なかつたら、何うなるぢやらう？　えゝ？　俺はさう信じて居つたな、少くとも吾々の社會は平生から道德を重んじて居るのぢやから――、斯ういふ事には全然近づかんぢやらうとな。所が今になつて見ると、知事が此の婦人に敬意を表するために夜會を催すといふ。それから――さうさ、是れが一番大出來ぢや――大出來の頂上ぢや！　まあ當てゝ見なさい。誰が今日その、熱心な見物の中にまじつて、首を長くして立つて居つたか？えゝ？とても見當はつくまい。あんまり意外ぢやから。あの牧師よ。

シュワルツェ　牧師が？

少　將　さうぢや、さうぢや。あの牧師が。

シュワルツェ　不思議な事だ。

少　將　君に聞くがなあ。一體あの人は何の爲にあそこに居つたのぢやらう？　それから。他のものどもゝ、何を爲うと思ふのぢやらう？　全體音樂祭といふのが、何を主要の目的にして居るのぢや？

教　授　それは、私の信ずる所では、國民の理想的精神を養ふといふ事が、一つの目的です――。

少　將　國民の理想的精神を養ふのなら、軍人會を組織するに如くは無い。

シュワルツェ　けれ共閣下、不幸にして軍人になり得ないものもありませうな。

少　將　（自分の骨牌札を選り分けながら）お互は軍人であつたのぢや、な、中佐。それから俺は、何人と雖も軍人で無かつたものは知らん、また軍人で無かつたものを知らうとも願はん！――さあ！――そして此の、いはゆる藝術なるものは

全體、君、學者先生――何が本來の目的なのかなあ？

教　授　藝術の目的は社會の道德的精神を高めるのですよ、少將！

少　將　それです、奧さん――やられたな、――ケーニヒグレッツの勇士にやられましたな……併し俺に言はすればぢや、藝術といふものは、軍人になることの恐ろしい手合が、國家に何等かの意味を得やうと思つて工風したものに過ぎん………休みぢや！

シュワルツェ　休みだ！

教　授　（熱心に）ではあなたは藝術を目して――（靜に）スペードの九（驚きの叫び聲。此のとき呼鈴が鳴る。マリイ急いで出て行く。少將はせき込んだ身振をする、シュワルツェ之れをなだめる。皆々又骨牌を始める）

第八場

前の人々　フランチスカ　（續いて）牧師

少　將　あゝ！　フランチスカさんぢや、（小聲で）是れでお仕舞ぢやらう。

シュワルツェ　いや、いや、いや――あれは庭の方へ行かせます。

フランチスカ　（椅子に身を投げかけながら）おゝ暑い、まあ少し息を入れさして頂戴。

教　授　さあ――スペードの九。

少　將　ほう、牧師もござる。

牧　師　今日は（皆々握手して挨拶する）

少　將　何うです、君、何時からあの女優達の跡を追つかけてお出かな？

牧　師　何をです――？あ、さう――さうです、女優達の跡を追つかけて居ります――それが目下私の職務でございます。

シュワルツェ　さうかも知れんが、兎に角この骨牌會に加つて、一つおやんなさらんか、へえ？

牧　師　殘念ながら、やれません……それよりも中佐にちよつと、重大な事件でお話がございます。

少　將　何うしたと？　そんな事は後にしてもよいぢやらう？

フランチスカ　あなた、まあ――大事件なのです――直ぐでなくちやいけません――。

シュワルツェ　では、フランチスカさんも――その話に關係して居るのかい？

フランチスカ　一層深い關係ですよ。

少　將　は――それでは俺等は音なくして歸らうよ。

シュワルツェ夫人　あら――それでは私どもが困つて了ひます――。

シュワルツェ　牧師、あなたのお話だから致方は無いが、皆さんに相濟まんことになつたな。

シュワルツェ夫人　けれど皆さんに伺つて、マリイに少し庭を御案内させたら好くはございませんか？

少　將　それはいゝ。全く、面白い。名案ぢや。さうしやう。マリイさん、何うかさうして下さい。先鋒になつて下さい。

教　授　併し――骨牌はそのまゝになつて居ますが、あゝして置きますか？

少　將　さう／＼、あなたはスペードの九ぢやつたなあ。さあ來たり／＼。（出て行く）

第九場

シュワルツェ　同夫人　牧師　フランチスカ

シュワルツェ　そこで？

フランチスカ　隨分ねえ、私が斯んなに逆上あがつてるのが、あなた方に見えないの？　水の一杯くらゐ下すつたつて可いぢやありませんか（シュワルツェ夫人水を持つて來る）

牧　師　中佐、どうか前以てお約束が願ひたうございます、たとひ何んな事が起らうとも、あなたは冷靜を保つて居て頂きたい……此の際それが最も必要でございます。切にお願ひして置きます。

シュワルツェ　分りました、分りました――けれども一體、何事です？

牧　師　それはフランチスカさんから、お話の方がようございます。

フランチスカ　（水を飲んで）さうよ、今日はまあ大變な日ですよ。今日こそ運命の神さまが敵を討つて呉れたのですよ。此の人なんぞが、何年となく私の貴い〳〵感じを殺してゐた。――此の人が私に――けど今日といふ今日は私、此の人に恥入らせてやりますよ。（感動した樣子で）兄さん握手して下さい、姉さん、握手して下さい。

牧　師　失禮ですがあなた――その――お話の事件は、非常に重大な事ですから……

フランチスカ　（やさしくなつて）まあ怒らないでさ……怒らないでさ。私興奮しちやつたのですもの。私――あの昨日、知事さんの所へ行きましたよ。招かれたのは貴族方や立派な官吏の方ばかりでしてね――。あなた方は入らつしやなかつ

たのね？

シュワルツェ　（怒氣を含んで）いゝや。

フランチスカ　あら、惡い意味ぢやなかつたのですよ……そんな不信用な。私全く興奮してゐるのですよ……（泣きかけて牧師からの日くばせで語りつゞける）さうですく——私あのそら、外國製のレースの着いたね、あの黄いろい絹の服を着て行つたのですよ、そら、裾を短く切らせたでせう？　あれですよ——そして大廣間へ這入ると（泣いて）まあ誰が居たと思ひます？

シュワルツェ　ふむく——誰が居つた？

フランチスカ　（啜りあげながら）あなたの娘？　マグダレーナ（シュワルツェ後へよろめき、牧師に支へられる。夫人叫ぶ。しばらく沈默）

シュワルツェ　（先づ氣を取り直して）牧師！

牧　師　事實のお話です。

シュワルツェ　（立ち上つて）マグダレーネは、もう俺の子ではありません。

フランチスカ　けど、まあ、よくお聞きなさいよ、今にその考が變つて來ます。斯んな子供なら兩手を出して迎へたくなります。

シュワルツェ　マグダレーネは、もう俺の子ではない。

牧　師　けれども結局——何でせう——何んな風でしたかその次ぎをお聞きになつたらいゝでございませう。

シュワルツェ　（きよとんとして）ふむ、それは聞きませう。

牧　師　（フランチスカに合圖をする）

フランチスカ　さうですよ――あの大廣間が一杯の人で――それが大抵は知らない人ばかしでせう?　するとそこへ部室の向ふの方から知事閣下が來られたのですよ。するとその閣下の腕に一人の貴婦人が――。

シュワルツェ夫人　閣下の腕に?

フランチスカ　髪の毛の黑い背のすらつとした、氣高い容子をした婦人が一緒にあるいて居る。そのまはりと言つたら後から左右へかけてぐるつと人が取り卷いて、ちやうど皇族方のお傍を見るやう……そしてみんな機嫌を取るやうに喋つたり笑つたり……その婦人から言葉をかけられるのを、非常な幸福にしてゐる樣子なんざ、そつくり皇族方のやうですよ……それから勳章が五つ六つ肩から懸つてゐて、首の所には橙色の紐のついたメタルが下つてゐて……私實際何所の妃殿下か知らとさう思ひ〳〵見てゐると、顏を半分こちらへ向けたぢやありませんか――ねえ、するとそら、私、ちやんと、マグダの眼に見覺えがあつたのですよ。

シュワルツェ　お斷だ?

フランチスカ　それが現在あつたのです。

牧　師　事實はその通りでございますよ、中佐。

シュワルツェ　あなたがそれを――（兩手をしぼつて）では娘は墮落もせんで居つたか、天にまします父よ、あなたは、娘を墮落もさせんでお置き下さつた!

シュワルツェ夫人　そしてマグダは何になつたのですか?　そんなに尊敬せられるやうな。

牧　師　マグダさんは外國で高名なオペラの歌手になられたのです。そしてイタリヤの名でマッダレーナ、ダロールトー

と呼んで居られるのです。

シュワルツェ夫人　まあ、あなた、お聞きなさいよ。あの有名なオペラの女優で、いつも新聞に出てゐるのが、家の子どもでございますとさ。

シュワルツェ　マグダはもう俺の子では無い――。

牧師　それはあなた本心の底から出るお言葉でございますか。

フランチスカ　それですよ。あなた、一體何といふお心でせう！――私の例にお倣ひなさいよ。もとあの娘はねえ、何かにつけ私にひどい事をする阿魔でしてね、えゝ、阿魔とその頃は言つてもよかつたのです……。それが今では――先方は私を見なかつたけれど、若し見つけたら――おゝ！

シュワルツェ夫人　あなた、知事閣下が自身に腕を貸して案内せられたのですもの！

シュワルツェ　けれど俺はお前に言つて置く――フランチスカさんにも――それから牧師、あなたにも、俺はな、娘が若し哀れな零落した態で俺の前に泣き伏して、許しを請うて呉れたら、その方が何層倍うれしいか知れん。さうあつてこそ、あれがまだ、心は俺の子であるといふ事が知れる……何と思つて此の町へ來居つたか――えゝ？　勝利を誇るつもりなら、廣い世界の何處へでも行ける！　こんな小都會の俺等が塒を荒すには及ばんことだ。けれども俺は知つて居る！――あいつめ、自分の慘な親父に見せつけて、世間はどの位まで子どもが親を踏みにじつても、成功して行かれるか、知らせやうといふ量見に相違ない。强情と高慢があいつの本音だ――たゞそれだけだ！

牧師　中佐、私はあなたに伺ひたいと存じます――あなたの本音は何でございませう？　父の情とでも言ふのでせうか？　いや、さうは決しておつしやる譯にまゐりますまい――或はあなたの權利でせうか？　それなら尚さら以て、あな

たの權利から申せば、あなたは何の遠慮もなくお子さんの幸福をお喜びになるのが當然でございませう――。或はまた習慣に違つたと申すのでせうか？……私にはよく分りませんが――お孃さんは、自分一個の力であれ程の事を成されて、結局は習慣もそれを承認せざるを得ないのであります。……併し私の見る所では、あなたの本音こそ、強情と高慢とたゞそれだけではございますまいか！

シュワルツェ　（怒聲にて）牧師！

牧　師　（打解けて）あゝお怒りになつてはいけません……それは無駄な事です。私が一旦申さうと思つた以上、どんな事があつても、申さなくては濟みますまい……。で、私は斯う考へたのでございます、あなたには、お孃さんがあなたの意志に背いて偉くお成んなすつたのが氣に入らない。何か赦してやるといふ點が無くては、あなたの自尊心が傷けられる、ところがお孃さんには何もさう見える點が無い、それがあなたに不滿足なのです。改めて伺ひますがあなたは果たしてお孃さんがあんな風になられるよりも、零落して故郷へ辿つて來られるのを、本心からお望みになりますか？　神の御前に立つて、さうだと立派におつしやる勇氣がございますか？　（沈默）いや、いや、さうではございますまい？　中佐、あなたは、よく冗談に私の事を、あなたの僞の善智識だとおつしやつた。どうか私をして、今こそ本當にその善智識たらしめて下さい。私の導く所に從つて下さい。――今日こそ。

フランチスカ　まあ、どんな風だか御覽にさへなれば――。

牧　師　（合圖してフランチスカの言葉を遮ぎる）

シュワルツェ　あいつがほんの一寸でも、自分から年よつた兩親の傍へ寄りつかうとした事があるか？　父の家を思ふ愛情の印を見せた事があるか？　俺が差し出す手を、輕蔑の笑ではね返すことが、無いとは誰も保證し得まいがな？

牧　師　それは私が保證いたします。

シュワルツェ　あなたが？　な、あなたこそ誰よりも、あれが仕末に了へん强情を經驗した證人でないか。

牧　師　（たぢろいて）その事は言つて頂かない方がようございました。

第十場

前の人々　マリイ（花束を持つ）　テレゼ

マリイ　お父さま〳〵、テレゼが申しますにはね――おや、お邪魔でしたか知ら？

シュワルツェ　（氣を取り直して）何だ？

マリイ　今日もね、また匿名の花束が參つたのですよ。それで私、テレゼに持たして花屋へ返しにやつたのでございますよ。すると、あれを誂へたのは男の方ではなくて、婦人だといふことが分りましたの……ですから、もう賣つて貰ふ譯にも行かないし、また持つて歸つたのでございます。（人々目と目を見かはす）

牧　師　花屋がその婦人の樣子をテレゼさんに話しはしなかつたかね。

テレゼ　はい、脊の高い方で、大きな黑い目を持つた――何所かしら水際立つた、外國人のやうな所のある方ださうでございます。

牧　師（花束を持つたマリイを進ませ、シュワルツェの腕に手をかけて）あなたは愛情の印がいるとおつしやつた！

シュワルツェ　（花束を見つめて）あれが！

シュワルツェ夫人　餘つぽどするでせうね。

マリイ　それから、まだ。テレゼは大變な事を聞いて來ました。

牧　師　あゝ、それを聞かして呉れ、急いで！

テレゼ　では申し上げますがね、只今私が歸つて參りますと、門番が私を呼び止めて申しますには、昨晩暮合の頃に、立派な馬車が一臺入口の所へ止まつたと思ふと……中には一人の御婦人が居らしつて、併し降りになさいませんでね、此のお家の明りのついてる窓を、一つ〳〵じいつと眺めて居らつしやつたさうでございます。そこで門番が出て何ういふ御用かと、お聞き申すと、其の方が何か馭者におつしやつて、馬車はすぐ行つて了つたさうでございます。(人々驚いて動搖する)

牧　師　よく分かりました！(テレゼ去る)

第十一場

前の人々　(テレゼを除いて)

牧　師　どうかマリイさん、今一度あなたを、小供扱にすることを、許して下さい、ちよつとの間此の席を外して頂きたいのです。

マリイ　牧師さま、私には、何だか心配でなりません。(嘆願するやうに)ねえお父さま！

シュワルツェ　(むしやくしやとして)何だ？

マリイ　お父さま！……お父さま、あなたその婦人が誰れだか、御承知でせう？

シユワルツエ　俺が？　いゝや――だと察して居るばかり。

マリイ　（聲を立てゝ泣き）マグダレーナ――マグダ――マグダが來たのです！（跪いて）あゝ、どうか姉さんを赦して上げて下さい。

シユワルツエ　これ、マリイや、お立ち。お前の姉さんはな、俺か小さな赦しよりは、ずつと高い所に立つて居る。

牧師　併し――あなたの愛以上には立つて居られません。

マリイ　マグダが來て居る――おゝ、マグダが來て居る！（母の首に寄りかゝつて泣く）

フランチスカ　私に水を一杯呉れるものは無いかねえ？　私逆上て了つて居るよ。

牧師　あなた、決心がつきましたか？（シユワルツエ身動きもせずにゐる）即ちマグダさんを其まゝ一人で行きたい道へお行かせなさるか――。

シユワルツエ　それがよいでせう。

牧師　さやう。今死ぬといふ間際になつて、萬一あなたの心に、家出したお娘御の事が思ひ出されて、懐しくなつたらどうなさる？　その場合あなたは、「いや娘は此家の閾の前に來て立つてゐた。それを俺が這入れと言はなかつた」とおつしやる外はありますまい。

シユワルツエ　（思慮亂れて半ば説伏せられたやうに）何うすればよいと言ふのかな？　出奔した子どもの所へ俺が頭を下げて行かねばならんのか？

牧師　いゝえ、それをあなたがなさるには及びません……私が――私が――マグダさんの方へは行きませう。

シユワルツエ　あなたが？　牧師、あなたが？

牧　師　私は今日、午後マグダさんのホテルの前に待ち受けて、見屆けて來ました、萬一フランチスカさんのお見違へではないかと思つたからです。するとちやうど四時十五分前にホテルを出て、馬車に乘られました。
マリイ　ぢや、あなた御覽なすつたのね？
シュワルツェ夫人　何んな容子でした？　何を着てゐました？
牧　師　演奏は四時に始まりましたから、もうそろ／＼終るでせう、私はこれからホテルにお待して、その事を申しませう、すなはち――すなはち、お家では兩手を擴げて待つて入らつしやる……さう申してようございませうね？
マリイ　えゝ、えゝ、ようございますとも、ね、お父さま？
シュワルツェ夫人　あなた、まあ、考へても御覽遊ばせ、誰れがあの娘を――。
シュワルツェ　牧師、あなたは俺に誓つて下さるか、あなたの此の擧動には、一毫も弱い名聞氣の考などは混じて居ないといふ事を！　あなたのなさる所は、そのまゝ主キリストの御名に於いてなさる所だと申す事を？
牧　師　誓ひませう、主も御助け下さるでせう。
シュワルツェ　それなれば神の御心だ、成就せしめ給へ。（マリイ喜びの叫聲を上げる）
牧　師　（シュワルツの方へ手を差出す）
シュワルツェ　（牧師の手を堅く握りながら和かに）あなたの行かるゝ道は、さぞ辛からう――俺は察して居りますぞ――青春の時代を無駄にして――自分の誇りも――。
牧　師　あゝ、中佐、私はつく／＼さう考へます。自分の誇りなぞといふ事はつまらないものです。そんな事を口にしてゐたつて、何の益する所もございません。茲に一人老いたる父がある、その父のために私はお娘御を連れ歸ります――ま

た茲に一人さまよへる精靈がある――さやう、その人の爲に、私は故郷を犠して上げます。それで十分でございませう――ではまたお目にかゝります。（去る）

マリイ　（父の胸に身を投げかけ狂喜し且つ泣く）

（幕下る）

第二幕

場面は前に同じ、夕暮で、たゞかすかな夕日の影が窓からさし込で居る。

第一場

マリイ　テレゼ

テレゼ　(火をともしたランプを持つて這入る)お孃さま！　いつまでも何をあんなに見つめてらつしやるのだらう？――お孃さま！

マリイ　(窓の前に立つたまゝ腹だゝしげに)何の用ですよ？

テレゼ　お夕飯のお仕度を致しませうか？

マリイ　まだいゝよ。

テレゼ　でも、もう七時半でございますよ。

マリイ　六時半ごろ行らつしやつたのだから、演奏は疾くに濟んでた筈だし……姉さんが來ないといふのか知ら。

テレゼ　何方がですつて？　お夕飯にまだお客さまが見えますか？

マリイ　いゝえ――いゝえ！(テレゼ行かうとする)テレゼや！――お前あの、お庭へ行つてね、花束を二つ拵へて來てお呉れでないか、まだ摘めるだらうか？

テレゼ　拵へて見ませう、けれども何んな花が集りますかは存じませんよ……眞暗でございますから。

マリイ　あゝ、あゝ——それでもういゝよ。

テレゼ　すぐ花を取りに參りませうか——それとも——？

マリイ　いゝえ——御飯はいらなくてよ。

テレゼ　何うなすつたのだらう？（去る）

第二場

マリイ　シュワルツェ夫人（入り來たる）

シュワルツェ夫人　ねえ、マリイや私兎に角やつぱり、他の帽子を被ることにしましたよ。あの紐の着いた方をちよつと見て頂戴、これでいゝか。

マリイ　えゝ、よございますよ、お母さま。

シュワルツェ夫人　フランチスカ叔母さんは、まだ見えないかえ？

マリイ　いゝえ。

シュワルツェ夫人　おや、おや、まあ、私どうしやう！　あのお二人の事をすつかり忘れてゐた——お父さんは閉ぢこもつて了つて、何を聞かうとも見やうともなさらないし、あゝ、とんだ事をした、少將が怒つては居らつしやらないか知ら！　家

のお交際の中では、あの方が一番御身分が高いんだから、間違があると困つた事になるがねえ。

マリイ　けれども、あの方だつて、その譯をお聞きになりましたら、ねえ、お母さま。

シュワルツェ夫人　さう――さう――さうねえ。それからあの牧師さんも一向に見えないのねえ。あゝ、マリイや、今一つ！あれがお前に聞くだらうから、其の時はねえ――。

マリイ　誰れが？

シュワルツェ夫人　マグダがさ。

マリイ　マグダが！

シュワルツェ夫人　わたし達二人の仲は何うだらう？　世間では私の事を繼母だと言はうけれど私は其のつもりでは居ないがねえ？

マリイ　それはもう、その通りでございますわお母さま。

シュワルツェ夫人　ねえ、あの頃は……私まだ、二人までも大きな娘を持つといふ事に慣れなかつたものだから……けれどももうそれは甘く治まつて居るわねえ、（マリイうなづく）そして私たちはお互に愛し合つて居るわねえ。

マリイ　えゝ、よく愛し合つて居りますわ、お母さま。（母に接吻する）

第三場

前の人々　フランチスカ（入り來たる）

フランチスカ　（ぢりぢりして）折角のいゝ場をまた打ちこわしてね。

シュワルツェ夫人　少將が何とおつしやつて？

フランチスカ　少將が？――は、ひどく怒つて居てよ。一時間半も人を座らせて置いて、隨分のおもてなしだつて、さう言ひましたよ。それは、私に言はすれば到底ねえ――。

シュワルツェ夫人　（悲しげにマリイに）それ御覽、私の言つた通り――。

フランチスカ　いゝえ、今度だけは、も一度私がうまあく治めてあげましたよ。みんな上機嫌で歸つて行つちやつた――。

シュワルツェ夫人　さう？――まあ、よかつた、ほんとに有りがたうよ。お禮を言ひますよ。

フランチスカ　えゝえ、ちやうど相當してゐますよ。走り使ひや皿洗ひくらゐの所ならね…………けれども家のものとなると年を取つた、人の善い、情合の深い叔母さんでも叶ひつこはありやしない――。

マリイ　おばさま、誰がお氣に障るやうな事をしたでせう。

フランチスカ　あい、やつとお氣がつかれたのね、けれどさつき私が、あんなにわくわくしてゐる時は、誰れひとり來て世話をする者もなかつたぢやないの？よござんすよ、其のお孃さんが結婚なさらうといふ保證金の事だつて私には――。

マリイ　あら、おばさま！

フランチスカ　私の生きてる内はね――。

シュワルツェ夫人　何の事を言つてるの？

フランチスカ　分つてゐますよ、わたし達二人の間柄。それから、お次は今日の事。誰れが此の家へ娘を連れて歸つたと思つて？

シュワルツェ夫人　まだ歸つては居ない――。

フランチスカ　私が娘を連れて歸つたのですよ。それに、私に禮を言つたものがありますか？それから私があの娘を赦してやつた、それに氣のついたものがありますか？實際私はあの娘を赦してやつた（泣きながら）私に對してした事をみんな――

第四場

前の人々　テレゼ（非常に興奮して入來たる）

マリイ　何うしたの、テレゼ？

テレゼ　大變でございますよ、お孃さま。

マリイ　（心配げに）何うして？

テレゼ　馬車が。

マリイ　何んな馬車？

テレゼ　そら、昨夕のでございますよ。

マリイ　來たかえ？來たかえ？（窓の所へ走り行き）お母さま〳〵、入らつしやい、姉さんが、あそこに居ます――馬車が――。

シュワルツェ夫人　本當にまあ、馬車が來てゐる！

マリイ　（左手の戸を叩いて）お父さま〳〵、早くいらつしやい、後生ですから早く來て下さい！

テレゼ　（フランチスカの目くばせで去る）

第五場

前の人々（テレゼを除いて）　シュワルツェ（出で來たる）

シュワルツェ　何事だ？

マリイ　マグダです――馬車です！

シュワルツェ　おゝ！（窓の方へ急ぐ）

マリイ　御覽なさい――御覽なさい――立つてゐます、何てすらつとしてゐるんでせう！――窓の內を見やうとして居ますこと！（兩手をしぼつて）　お父さま、お父さま！

シュワルツェ　そんなにして、何を言はうと思ふのだ？

マリイ　（おど〳〵して）私――何にも！

シュワルツェ　お前の言はうと思ふのは斯うであらう、「マグダはあなたの戶の前に立つて居た、それをあなたが這入れとお呼びなさらなかつた」――えゝ？

マリイ　はあ、私さう言ひますわ！さう言ひますわ！

シュワルツェ　これ、お母さんや、娘は戶口へ來て立つて居る。俺等の面目は……何うならうとも――えゝ？――呼び入れるか？

シュワルツェ夫人　あら、あなた、あれ程世間から尊敬されてゐますものを、無論家へ――

マリイ　（叫ぶ）あゝ、行つちまいますよ姉さんが！

シュワルツェ　いや／＼、行きはしない…………さあ、マリイに連れて來てやらう。

フランチスカ　あゝ、どうぞ――私にも會はせて下さい。（シュワルツェ夫婦出て行く）

第六場

マリイ　フランチスカ

マリイ　姉さんがまた座つちやつた！馬車が出てさへ吳れなければ善いんだが！長い事――長い事!!――もう下へ行らしつた筈だのに。（心配けに）そら――そら――（我を忘れて呼ぶ）行つちやいけませんよ――姉さん――姉さん、いけませんよ！……

フランチスカ　そんなに怒鳴つちやいけないよ！何うしたのさ？

マリイ　あ、見廻してゐますよ！そらお父さまやお母さまを見てよ！馬車を止めちやつた！戸を押し明けて、飛び下りた！そら！そら！お父さまの手につかまつてよ（顔を掩うて啜り泣く）ねえ、おばさま！ねえ、おばさま！

フランチスカ　全く父としてはねえ、あれより外、しやうもありますまいよ……たゞ私があの娘を赦してやつた許りに、あの人も――あの人もさう何時までは――

マリイ　姉さんはお父さまとお母さまの間にはさまつてゐます！まあ何て、すらりつとした姿でせう！……あ、來ました

よ、來ましたよ！……姉さんの前に出たら、私どんなにか見すぼらしい馬鹿者に見るでせうねえ……――私どうしやうか知ら！どうしやうか知ら！（左手の壁の方へ逃げる。しばらく間を置いて、外にマグダと兩親との聲が聞える）

第七場

前の人々　マグダレーネ　シュワルツェ　シュワルツェ夫人

マグダ　（きらびやかな社交服の上に大きなマントをはをりスペイン、ヴェイルを頭にかけてゐる、聲を立てゝマリイに飛びつく）お〻、お前！まあ！大きくなつたわねえ――まあ、お前！まあ！（激しく接吻する）だけど何うしたの！目まひでもするやうに！さあお座り！いえ、いえ、座つてお吳れ！椅子へ――さあ！お願ひよ！（マリイを肱掛椅子へすわらせ）可愛らしい此の手！可愛らしい此の手！（マリイの前に跪き兩の手を接吻し且つ撫でる）けれども硬いわねえ！荒れてるわねえ！そして顏色の悪いこと！眼の緣に輪が出來てさ！

シュワルツェ　（手を輕くマグダの肩に置いて）マグダや、他のものもみんな此所に居るぞ。

マグダ　あ〻、さう――私まるつきり――（立ち上り、情を込めて）お父さん！まあ、隨分白髮におなんなすつたわねえ！お父さん！（父の手を握り）お父さん――けど何うなすつたの？此の手は？震へてることねえ！

シュワルツェ　何でもない。そんな事は聞いて吳れるな。

マグダ　ふむ！でもお年がよつてから、あなたは綺麗におなんなすつたのねえ。幾ら見ても見足りないやう！こんな立派

なお父さんを持つて、私威張れるわねえ。(マリイの方を指し)あの娘は、もつとよく世話をしてやらなくちやいけますまいよ……まるで牛乳色をしてゐますのね……お前、何かえ鐵劑でも飲んでるの？え！飲まない？鐵劑を飲まなくちやいけませんよ！でなければ――(やさしく)まあ、それはいゝとして――ねえ、考へると私、家へ歸つたのだわねえ！お噺のやうだ。全くあなたのお考は立派ですよ、何にも言はないで私を家へお入れなすつて――昔の、あんなつまらない喧嘩は、もう疾つくに打つちやつてゐるのですから――ねえ、お父さん！

シュワルツェ　ふむ、つまらない喧嘩？

マグダ　私も實際惡かつたでせう――けれども是れだけの事はござんすよ、私戸口の所へ來て、そうつと――おとなしくそこらを搔きむしりましたよ、ちやうど家のレデ井ーが逃げ出した時のやうに。あゝ、レデ井ーは何うしました？――あれの居所が空ぢやありませんか！何所に居ます？(口笛を吹いて呼ぶ)

シュワルツェ夫人　おゝ、あれは七年前に死にましたよ！

マグダ　あら povera bestia (かわいさうに)……さう〳〵私忘れてゐた！それからおッ母さん！さう、おッ母さんだ！私まだあなたを見なかつたのね……かわいらしくおなんなすつてよ！元は少し若く見えすぎて似合はなかつたけれど、今ぢや年をお取んなすつて、いゝおッ母さんにおなんなすつたこと。あなたの前掛にじつと頭を押しつけて居たらどんなにいゝ氣持でせう！私もさうしやう、私のために何んなに誓いか……ねえ、昔は私たち隨分よく面白い喧嘩をしましたつけ。あゝ、私何うしてあんなに亂暴な、聞かん氣の小娘でしたらうねえ！もつともあなたも、よく意地をお張んなすつたつけ。だけれど、もう仲なほりにしませうねへ――え？

シュワルツェ夫人　いけないね、お前、冗談ばかり言つて

マグダ　いけなくつて？言つて惡いのですか？けれど、けれど、たゞ愛よ。たゞ愛よ！その他には何にも私たちにいるものは無いでせう？仲よしになりませうね――え？

フランチスカ　（先程からマグダの氣のつくやうに頻と力めてゐたか）それから私達もねえ、マグダさん？

マグダ　おや、おや！（柄眼鏡をかざしてしげ〳〵と眺め）さう〳〵玆にも……あなた相變らず活動してゐらしつて？相變らず家庭の中心になつてゐらつしやるの？

フランチスカ　あら、そんな――

マグダ　まあ、陽氣に握手しませうよ！さう！――實際あなただけは我慢が出來なかつたけねえ。是れからも出來ないかも知れませんよ。生まれつき性が合はないのだもの――へえ？

フランチスカ　でも私はもうお前さんをすつかり赦したのですよ。

マグダ　さう？まあ、寛大です事ねえ――そしてすつかり――引つくるめて赦して下すつたの？母がまだ此の家へ來ない先からよく私の事を突つついてゐらつしやつた、あの事もお赦しなすつて？それから、あなたが父に――（口を拳でたゝいて）Megl o tacere! Meglio tacere!（默つてゐやう！默つてゐやう！）

マリイ．（遮つて）後生ですから、姉さん！

マグダ．あい　あい――言ひませんよ、何にも言はなくてよ！

フランチスカ　大きく出たこと！

マグダ　どれ〳〵、少しそこらを見せて頂戴！まあ、そつくり、昔のまゝだわね！塵つぱ一本も動いては居ない！

シュワルツェ夫人　何うかねえ、マグダ、塵なんか無い積りですから。

マグダ　えゝえ、おッ母さん。私そんなつもりで言つたのぢやありません。十二年！何一つ起つた跡も無い……私が見て來た事はみんな夢であつたのか知ら？

シュワルツェ　お前は澤山俺等に話す事があらうな。

マグダ　（身を起して）何ですつて？さう、さうですね……さうですね。私あれを――さう、何でしたつけ？まあちよつと靜にして座つて居たいわ……何も彼も一時に頭の中へ出て來るんですもの……考へると……あの窓から、此の戸……此のテーブル、向ふの戸棚――みんな一度は私の世界であつたつけ。

シュワルツェ　な、マグダ、人は自分の世界を棄てゝ先へは出たくない、又出てはならんものだ――それをお前は不斷に心がけて居たらうな？

マグダ　それはお父さん、何ういふ事です？――それから何んな顏を遊ばして？あゝ、さう――あゝ、ちやうど時を得た御質問ね！私は全く馬鹿でした！あゝ、私は全く馬鹿でした。ねえ、お父さん、おかわいさうに、あなたのお喜ひはほんの一時の事でせうよ。

シュワルツェ夫人　何ぜさ？

マグダ　全體、あなたは私を何と思つて居らしつて？見えてる通りの自由な身だとお考へなすつて？私はねえ、疲れ果てゝ精も根も切れた奴隷に過ぎないのですよ、背中に鞭のあたる時だけ幸福な身の上なのですよ。

シュワルツェ　誰れの奴隷だ？何の鞭だ？

マグダ　お父さん、それは言へません。あなたは私の生活といふものを御存知ないのです……また恐らくあなたには分りますまい。つまり、日といふ日、時といふ時が、一々身動きの取れないやうに仕事を前に驅けて來るのです……えゝ……

そして――あゝもう私ホテルへ歸らなくちやならない。

マリイ　あら、姉さん、歸らないで。

マグダ　あい、ねえ、向ふにはお前、六七人の人がもう詰めかけて、會ひたいと言つて待つてゐるのですよ。けれど今夜は、私がお前を自由にするよ……ねえ？私と一緒に寢てもいゝでせう！

シュワルツェ　無論だ！それとも何か別の意味が――何所で寢やうといふのか？

マグダ　ホテルで！

シュワルツェ　何？此の家には居らんといふか？俺等に耻をかゝすつもりか？……

マグダ　あなた何とお思ひなすつて？私には供廻りが多勢附いてゐるのですよ。

シュワルツェ　その供廻りといふのに取つても。お前の兩親の家がやつぱりその家ではないか。

マグダ　さあ、何うでせう？少々賑かですからねえ……先づ第一にボーボーが居ませう、私の鸚鵡でね、かわいらしい奴――あれはそんなに困らないかも知れないが……其の次に私の小間使のジユリエツタ、小さい魔王のやうな奴ですよ――けれどもあれが居ないと、私何うする事も出來ないのです……それから私の從僕――これが大變な亂暴者で、ホテルといふホテルの主人が、おぞけを振つてゐます――えゝ、そしてその次にはあの方の事を忘れちやならない、私の先生のことを。

フランチスカ　其の方は屹度もう年を取つて居らつしやるだらうね。

マグダ　いゝえ、大變若い方。

シュワルツェ　(暫く沈默の後)それから今一つ――お前の附人の事を――忘れたらうがな。

マグダ　附人とは？

シュワルツェ　でもそれが居なくてはそんな若い人と一緒に諸國を旅行する事は。

マグダ　あゝ、それを御心配なさるのね？――出來ますよ、御安心なさい、旅行出來ますよ。私の世界ではね、そんな事は氣にかけないのですよ。

シュワルツェ　それは何んな世界だ？

マグダ　私の支配してゐる世界ですよ、お父さん――他に私の世界はありません、そこではね、何をしても私がすれば正しい事になるのです。

シュワルツェ　それは羨ましい境遇だ、が、お前はまだ若い女だからな、監督者のゐる場合があらう――つまり、その人の助言によつてやらなくてはならん事があるだらう？

マグダ　私に助言する權利を持つた人は一人もありませんよ。

シュワルツェ　では、マグダや、今日から此の父がも一度其の權利を持ちますぞ！（室外へ向いて呼ぶ）テレゼ！（室外でテレゼの返事をする聲）お前あのドイツ館へ行つてな、お孃さんの荷物を取つて來て吳れ！

マグダ（賴むやうに）あら、お父さん、あなたはその場合に私の命令の必要な事をお忘れなすつたのね。

シュワルツェ　何？　あゝ、なるほど、俺はそれを忘れてゐたやうだ……お前の思ひ通りにして吳れい。

マリイ　姉さん！――あゝ、姉さん！

マグダ（マントを取り上げ）ちよつとの間辛棒しておゐで、今に二人つきりで話が出來るぢやないか。それから明日は皆で私の方へ入らつしやい、一緒に朝飯を食べませう――よくて？　その時たんとお喋りをしたり、可愛がりつこをしたり、

ね。

シュワルツェ夫人　私たちがお前の所へ？

マグダ　私の部屋でみんな一緒に、ね、どうかさうして頂戴。

シュワルツェ　ホテルのお前の部屋で。

マグダ　はあ、でもお父さん、他に私の家は無いのですもの。

シュワルツェ　そして此の家は？

マリイ　ねえ、姉さん、お父さまが氣を惡くしてゐらつしやるのですよ。

第八場

前の人々　牧師

牧師　（入り來たり、立ち止まつて、胸の動悸を抑へやうとしてゐる）

マグダ　（柄眼鏡で見て）此の人も！どれ、どれ！

シュワルツェ夫人　ねえ、まあ！マグダはもうまた行くさうですよ。

牧師　或はまだ――お孃さんは私を御存知ないかも知れません。

マグダ　（嘲るやうに）牧師、あなたは大變御謙遜で入らつしやるのね。ではこれですつかり皆さんに逢へた譯ですねえ――（マントを被る）

シュワルツェ　（急いで、小聲で）あなた、あれを止めて下さらなくては。

牧　師　でも――あなたに其れが出來ませんくらゐなら、何して――

シュワルツェ　まあ止めて下さい！

牧　師　（氣を引き立てゝ――あわて氣味に）御免下さい、お孃さん、之は私の義務かと存じますので――えゝ、私が――如何でせう、二三分間私に、お話の時間をお與へ下さる譯にはまゐりますまいか？

マグダ　何んな話か私ども二人の間にあるでせう？ねえ、あなた？

シュワルツェ夫人　あゝ、どうぞ！萬事この方が一番よく御承知なのだから。

マグダ　（皮肉に）さう？

マリイ　他にはもう何にも、お願ひしますまいから、たゞ是れだけかなへて下さい、ねえ、姉さん、私がかわいさうだと思つて！

マグダ　（マリイの頭を撫で、他の人々を彼から此れへと見廻して）しやうが無い、この娘があんまり賴み上手だものだから！――あなた、お言葉に從ひますよ。

マリイ　（默つて禮をいふ）

フランチスカ　（小聲で、シュワルツェ夫人へ）さあ、是れからあの人がゆつくりと話して聞かせるのよ。行つてませう！

シュワルツェ　あの時はあなたへの申譯にあれを追ひ出したが、今日はまたあなたが、俺に代つてあれを引き止めて下さらなくちや。

牧　師　（疑ひの樣子をする）

シュワルツェ　マリイ
マリイ　はい。（四人出て行く）

第九場

牧師　マグダ

マグダ　（座つて牧師を柄眼鏡でよく見て）さう、茲に一人の男がゐて、二三分間の話で私の意志を粉微塵に壞さうと企てゝ居ます……ねえ、皆ながさうあなたを信用してゐるのを見ると、あなたがあなたの領分の王さまだといふ事はよく分りますよ。私あなたの前に平伏してよ！――さあ、あなたの術をお始めなさい。

牧師　いや、私は術などといふ事は知りません、またそれであなたを何うしやうとも……若し私が何か信用を得てゐるとすれば、それはただ私が一毫も自分の爲を望まないといふ點からです。

マグダ　（嘲つて）さう〳〵、あなたは、いつもさうでしたつけねえ。

牧師　いや、さうではございません、私も生れてたつた一度、大きな、そして心の底から湧いて來る望みを持ちました……即ちあなたを私の妻に貰ひ受けたいといふ望みでした。あなたにお目にかゝるにつけ、自分の身を振りかへつて見ると、その頃の私の無鐵砲であつた事が、よく分ります……それ以來、私はその望みを棄てゝ了ひました。

マグダ　あゝ、あなた私に敬意を表して入らつしやるのね。

牧師　あなた、私の申上げた事が失敬でなかつたとすれば――

マグダ　あら、靈魂のお守をなさる牧師でも、失敬な事をなさる場合があると見えますね。

牧　師　あゝ、私はあなたを取り卷いてゐる周圍のために悲しみます。

マグダ　(嘲弄するやうに上手から出て)さう？ぢや私の周圍の何ういふ事を御存じ？

牧　師　私の見ます所では、周圍があなたに、眞面目な人は眞面目に取扱へといふ事を、忘れさせて了つた。

マグダ　あゝ！(立ち上り)それぢやあ私、あなたを眞面目に取り扱ひませう、そして言つて了ひませう。元からあなたは私に取つては辛抱の出來ない方でしたのよ、その甘く出て來る單純な性質、その哀れつぽく柔和な人柄、その……それであなたは態々身を下して、私のやうなつまらないものに眼をつけて、結婚なんかお申込みなすつたものだから、私はとう〱家に居られなくなつて了つた。それ以來私はあなたが憎くなりました。

牧　師　その點から言ひますと、却つてあなたを偉くした原因は私にあるとも言へませう。

マグダ　なる程ねえ、それはさうに違ひありません。あの事が無かつたら、私は此の家で埃だらけな乾からびた生涯を送つてゐたかも知れない……何うして〱——私あなたを憎むどころぢやありません！……何であなたを憎んでよいものですか？そんな事はもう疾くの昔、疾くの昔になりました……あゝ、あなたにそれが分りさへすれば！あなたが此の部屋のなまぬるい空氣の中に座つて、毎日々々ラヴエンデルや煙草や薬の香を嗅いでゐらつしやる間——私は正面から暴風雨の荒れすさぶ中に立つてゐた！……ねえ、あなた、廣い世界の生活が何んなものだか、我々の持つてゐる力が何んな働きをするか、罪の味は何んなでせう、勝ち誇つたものゝ心持は何んなだか、快樂とは何んなものだか、あなたが、少しでもそれをお察しなすつたら、そんな説教じみたお話をなさる御自身がどんなにか滑稽に見えるでせうにねえ……は、は、は！おゝ、御免なさいよ……十二年このかた、斯んな笑ひ聲に　の上品な家庭には無かつたでせうねえ　この家には

笑ふといふ事の分るものは一人も居ません！[illegible]う笑つていゝか、知つてるものが居るでせうか――へえ？

牧　師　いや、殘念ながら居りません。

マグダ　殘念とおつしやるの……心から、さう言つてゐらつしやるやうだが、あなたはお笑ひなさらない方ぢやありません
か？

牧　師　はい、吾々の多くは笑ひ得ません。

マグダ　それから、笑ひ得る方に取つては、笑ひは罪ですのね。つまらない、あなたはお笑ひなさることが出來る筈だのに何をそんなに氣にかけてゐらつしやるか？そんなお葬式に立つやうな顏をして世間を眺める必要はありません……きつとお家には、可愛らしい綺麗な奥さんが、せつせと靴下でも繕つてゐらつしやる。そして五六人のお兒さんがその周を取り卷いてゐらつしやる。といふ類なのが、牧師さんの家です。

牧　師　いや、私は獨身で居ります。

マグダ　まア！――(沈默)　あの時の事が、それほどあなたを苦しめたのですかねえ？

牧　師　あゝ、それはもういゝでせう――長い昔の事です。

マグダ　(マントを落して)そしてあなたの仕事――それがあなたを幸福にはして吳れませんか？

牧　師　お蔭で――その幸福は得られます……併し本當の熱心でそれをやります限り、自分一人の爲の生活は出來なくなる、少くとも私にはそれは出來ません……自分の人格を滿足させてそれで喜び浮れて居るといふのは出來ない事です――あなたのおつしやる意味は何ちらでせう？そしてまた――私は色々の人の胸中に立入つて――そこに癒しがたい幾多の疵のあるを見ました、どうして自分ひとり幸福で居られませう。

マグダ　あなたは偉い方です……私どう言つていゝか……たゞ、何だかまだあなたが、僞善をやつてゐらつしやるやうな氣がします。

牧　師　では、お歸りの前に一つ伺つて置きたい事がございます。

マグダ　どうぞ！

牧　師　あなたが此の、自身の家へお這入んなすつてから、もう彼れ是れ一時間になりますね――いや、まださうはなりませんか――私がお待ちしてゐた時間がそんなに長くなかつたから。

マグダ　私を？あなたが？何所で？

牧　師　廊下で――あなたのお部屋の前の。

マグダ　何の御用で？

牧　師　いや、その用はなくなりました、斯うしてあなたが此所へ入らつしやつたので。

マグダ　では私を――連れに入らつしやつたとおつしやるのですか――あなたが……却つて私を遠ざけやうとなさるべきあなたが。

牧　師　はい、それであなたは、皆があなたの爲にする事を、すべて利己心の結果だとお考へなさいますか？

マグダ　勿論です。私がさうですから……（考へが浮んで來て）けれども或はあなたは――いえいえ、そんな事は信ぜられるものぢやない……（鋭く）下らない話……兒どものお噺見たいな事！ねえ、あなた、ありやう白狀しますとねえ、私、昔よりも今のあなたの方が、ずつと／＼好きですよ。昔あなたが――何といひませう？堂々として私に縁談をお申込みなすつた、あの頃よりも、ずつと／＼好きになりましたよ。

牧師　ふむ！

マグダ　あなた、せめて此所らで笑つて話の尻りをお括んなされぱいゝのに……そんな石のやうな顔をなすつて――少しも親しみがないぢやありませんか……全く困つて了ふ……何と言つていゝか？ Je ne trouve pas Le moi(言葉が見つからない)

牧師　では何うか、質問をお許し下さい。

マグダ　まあ、何て此の神さまのやうな人は、しつゝこく物を聞きたがるでせう。私ねえ、あなたにちよつと媚を呈して見たのよ。それをあなたは、まるで、お氣がつかないんだから。それはねえ、男一人の運命にもなつたと言へは、女は嬉しうござんすわ……お禮を言はなくちやなりませんからねえ。御覧なさい、私はその間に術を覺えたでせう。さあ、その質問といふのをおつしやい。

牧師　なぜ――なぜ、あなたは國へ歸つてゐらつしやつたか？

マグダ　ああ！

牧師　故鄕が戀しいからではありませんか？

マグダ　いゝえ。さうね、ほんの少しばかりはね……私お話しませう、私がミラノでこちらのお祭に加はるやうにといふ招待を受ましたとき――勿論なぜ私を招待したか、そんな事は私存じませんけれど――ふつと妙な氣が起つたのですよ――半分は好奇心で半分は臆病な――何だか悲しいやうな、高慢なやうな――その氣持がしきりと私に國へ行けといふのです――誰れにも知らさないで國へ行つて――夕まぐれに家の前に立つて見ろ、その家ではお前が十七年のあひだ○○○○○○○○○○。そこへ行つて昔のお前をづくづく考へて見ろ！けれど若し皆がお前を見知つたら、その時は皆に見せてやれ、その人たちの○○○○の外に、立派なもの、正しいものがあるといふ事を、とさういふのです。

牧師　それでは要するにたゞ高慢の心で？

マグダ　初めは――さうでしたらう……けれども途中で、私は不思議に胸の動悸の激しくなるのを感じました――ちやうど昔音樂の稽古がうまく行かない時に感じたのと同じ氣持です……そして、とう〳〵あのホテルの前に――あのドイツ館の前に立つた時――ねえ、あなた――ドイツ館といへば、有名な將軍や大藝術家の泊るに極つてゐる、その前に立つた時私は昔の小さい謙遜な心に戻つて了つて、その古い部屋に這入る資格が無いのぢやないかと疑つたのです……自分が今ではその大藝術家になつてゐるといふ事を、すつかり忘れて了つたのですよ……そして、それからといふもの、私は毎晩此の家の方へ忍んで來ました――けれども極おとなしく――極素直な心で――いつも涙が流れてゐました。

牧師　それでもあなた行か、とおつしやるか？

マグダ　行かなくてはなりません！

牧師　けれども――

マグダ　もう聞かないでゐて下さい。私、行かなくちやなりません。

牧師　誰れかあなたの威嚴を傷けましたか？何か、赦すといふやうな言葉でも出ましたか？

マグダ　いゝえ、また……さうね――あの古婆さんは數に入れませんからね。

牧師　たつた一時間で、またあなたを逐ひ出さうとする、その力は全體何でせう？

マグダ　私あなたに聞かせませう。私がね、初めて此所へ來た第一分から、もう○○○○といふものが、再び私の上に網をかぶせて――軛をつけて、私をその下に這ひつくばはせやうとしてゐるのですよ。

牧師　併し、軛だの網だのといふものは、此の家には決してございません。そんな幻を御覽なすつてはならない――此

の家にはたゞ、勘當した娘を再び胸に抱いてやらうと、それのみを、兩手を廣げて待つてゐる人しか居られません。

マグダ　あ、どうか、それはお止め下さい……勘當息子のおつき合ひは私、いやでございます——私が若し娘として、勘當娘として歸つて來ましたのなら、私は斯うして頭を上げて立つては居ません。私のすべての罪を悔いて、茲に、あなたの前に、埃の中を這ひ廻つて居ませう（段々激して）けれども、それは私はいやです、私には出來ません……（誇りを以て）私は私ですもの、私を無くしてなるものですか——（悲しげに）ですから私、もう家なんかはありません、ですから私は行かなくちやなりません、ですから——

第十場

前の人々　シュワルツェ夫人（後に）マリイ

牧　師　もし、靜かに！

シュワルツェ夫人　おや、御免下さいまし、——お夕飯の事を聞かうと思ひましてね（マグダの方へ訴へるやうにいふ、マグダは兩手を顏にあて傍を向いて座つてゐる）ちやうど都合よく今日は暖い肉があるのですよ——そら、御承知でせう？牧師、あの骨牌會の方、あの方たちが見える筈でしたけれども——ねえ、マグダ、兎に角行くにしても行かないにしても親の家で一口、御飯を頂いて——

牧　師　今はお聞きにならない方がようございます、奥さん。

シュワルツェ夫人　あら、お妨げをしたでせうか……私たゞさう思つたものですから……

牧　師　後ほど。

マリイ　（戸口の所に現はれて）居ることになりましたか？

マグダ　（聲を聞いて身をすくめ、じつとしてゐる）

シュワルツェ夫人　しつ！（出て行く）

第十一場

マグダ　牧師

牧師　マグダさん、あなたには全く家が無いでせうか？――お聞きになつたでせう――年よられた奥さんは、ありつたけの好意を盡してあなたをすかして見たり賴んで見たりしてゐられます、御馳走はつまらないものでも、その志はありがたい。それからマリイさんの聲をお聞きでしたか、恐れと涙で震へてゐました、私の力でもあなたをお止め申すことが出來ないかといふ恐れからです。みんな、私を信用しすぎて、私か、たゞ一二言言へば、それでよい事と信じてゐられるのです。私が斯うしてあなたの前に、何の勢力も無く立つてゐるやうとは、夢にも知られないのです。御覽なさいあの戸の向ふには、三人の人が心配と愛とに胸を焦してゐます……あなたが今此の閾をおまたぎなされば、それが爲にあなたは、あの體から生命を裂き取つてお了ひなさる……それでもあなたは、もう家は無い、と言ひ張らうとお思ひなさるか？

マグダ　私に家があれば、それは此所ではありません。

牧師　かも知れません……併し、それに拘らず、お留まりを願ひたうございます。あなたが此の家の人だといふ感じをお家の方から奪ひ去らないために、それ位はあなたの責任でせう！

マグダ　（悲しげに）私、もう、此の家の誰にも責任なんか負うて居ません。

牧師　居らつしやらない？さうかも知れません……が、私は、あなたにお聞かせ申す事件があります……もう十一年たちました……或日私は、此の家から急の使で、來て見ますと、中佐は死にかゝつて居られる。もう固くなつて、身動きもなさらない――お顔は眞蒼になつて、引きつつて居ますし――一方の眼はもう閉ぢて――一方の眼が僅に生命の輝きを見せて居ました。何か言はうとなさるが――唇が震へるばかりで、何をおつしやるか分らない。

マグダ　まあ！何うしたのでせう？

牧師　はあ、何うしたのでせうか、それをお話しいたします。ちやうどその日、一通の手紙が參りました、それがお娘御の、父を振りすてるといふ最後のおたよりだつたのです。

マグダ　おゝ！

牧師　それから大分かゝつて、やつと卒中が治りました。今では、先程御覽になつた通り、右の手に少しばかり震へが殘つてるばかりです。

マグダ　さう聞けば私の責任ですわね。

牧師　いや、それだけならまだしもですが、マグダさん！あゝ、御免下さい、またぶしつけにお名を呼びました、昔呼びつけた名が……覺えず口に出て來ます。

マグダ　どうとでも、お好きなやうにお呼び下さい。さあ、そのあとを！

牧師　必然の結果は起らざるを得ないで、退職を命ぜられました――ところが中佐はどうしても其の原因を本當の方へお考へにならない――その事は中佐におつしやらない方がようございますが……その爲中佐は、精神的にも衰へてお了ひ

なさいました。

マグダ　分りました、分りました、みんな私の責任です！

牧　師　そこで、私のやるべき事が始まつたのです。もつとも斯んなお話をするからと言つて私の手柄を吹聴するものとお取り下すつては困ります、さやうな必要は私には更に無いのでございますから。で、私は長いあひだ中佐を御介抱申して、その精神を今一度高く――（身ぶりをして）呼び起しました……初まづ薔薇の木から鋏を取るくらゐの事をおさせ申しました。

マグダ　（身ぶるひをして）おゝ！

牧　師　しばらくさうして置いて……それから金錢の管理をさせ、次に私が監督を托されて居る會の助手になつて頂きました……それには病院もあれば、ソツプ供給處もあり、療養館もあつて、仕事はいつも澤山あるのです……そんな風にして、中佐も再び一人前の人になられました……それから、又、あなたの御繼母に對しても、私は出來るだけの感化をお與へ申さうと努めました――斯う申しても固より私が勢力を欲するなどといふ意味ではございません、或はそんな風にお考へなさるかも知れないが、つまり奥さんとマリイさんとの仲に、古くからありましたこだはりを、次第に融和しまつたと申すのです、愛と誠とが家庭に歸つて來たのです。

マグダ　（牧師を見つめて）そして何の爲にあなたはそれ程の事をなすつたのでせう？

牧　師　さう、第一は私の務めだからです、次には中佐の爲に致しました、私はあの老人を愛してゐますから、けれども――最大の理由は――あなたの爲です。

マグダ　（驚いて尋ねるやうに自分を指す）

牧　師　はい、あなたの爲でした。何ぜと申すに、私は、あなたが、何時かは故郷へ歸られる日があると思つたからです。恐らくは勝利者として――併しひよつとしたらまた、敗北者として、傷いて、肉體も精神も墮落して歸つて入らつしやるかも知れない。……こんな事を考へたのは失禮ですけれども、あなたが何うして居らつしやるやら、全く存じませんでしたから、……兎に角何ちらにしても、あなたの爲には、家をこしらへて置く必要がある――それを私の務めにしたのです長い間の務めです……で今、斯うしてあなたに、お願ひするのです、何うかそれを破壞しないで置いて下さい……何うか!

マグダ　(煩悶して)私が何んな生活を經て來たかそれをお知りになつたら、引留めやうとはなさいますまい。

牧　師　それは世間の事です。此所はあなたの家だ、そんな事は抛つてお置きなさい、お忘れなさい。

マグダ　何うしてそれが忘れられませう?　忘れてゐものですか?

牧　師　みんなが、兒どものやうに喜んで兩手を延べて迎へてゐるのに、何ぜあなたはそれをお拒みなさる?……譯はないことぢやありませんか。もう少し眞心で周圍を御覽なさい、みんなあなたを取り卷いて、愛の泉を浴せかけて居ります!

マグダ　(淚を流して)あなたは、私をまた兒どもにしてお了ひなさる。(暫く間を置く)

牧　師　では、お留まりなさいませうね?

マグダ　(急に立ち上り)けれども、私に聞くことはなりませんよ。

牧　師　何を聞いてはなりませんか?

マグダ　(心配げに)彼地での私の生活をです。とても了解は出來ますまいから。誰れにも。あなたにだつて。

牧　師　承知しました――聞きもしますまい。

マグダ　それを誓つて下さい、あなた御自身と、それからあちらに居る皆に代つて。

牧師　皆に代つて――ようございます、誓ひませう。

マグダ　（息の塞つた聲で）みんなを呼んで下さい。

第十二場

前の人々　マリイ　（續いて）シュワルツェ夫人　フランチスカ　シュワルツェ

牧師　（左手の戸を明けて）マグダさんはお留まりですよ。

マリイ　（狂喜してマグダの腕に驅け込む）

シュワルツェ夫人　（同時にマグダを抱く）

シュワルツェ　それがお前の義務であつたのだ。

マグダ　えゝ、お父さん！（父の右の手を兩手に取り、やはらかに椅の所へ持つて來る）

フランチスカ　まあ、ありがたい事！これでみんな、やつとお夕飯が食べられます！（食堂への滑戸を明けると、向ふに夕飯の食卓の調つてゐるのが見える、緑の笠をかけた釣ランプが明るく照してゐる）

マグダ　（じつと見入つて）あゝ。あの、懐しい昔のランプ！（婦人等しづかにあちらへ行く）

シュワルツェ　（兩手を出して）牧師！大層なお骨折でお蔭を蒙ります！

牧師　あ、どうか、それは！そして是れには一つの條件がついて居ります。

シュワルツェ　條件？

牧　師　マグダさんが是れまで何んな生活をして來られたかは、一切聞いてはなりません。

シュワルツェ　（驚いて）何だと？何だと？聞いては――ならん――？

牧　師　なりません、なりません――お尋ねなさらないやうに、それでないと――（新しい考が浮んで來る）そのうちマグダさんが御自身で――お打明になるでせう！

（幕　下　る）

第三幕

場面前に同じ。左手のテーブルの上にコーヒー道具及花が載つてゐる。朝の心持

第一場

シュワルツェ夫人　フランチスカ　（後に）テレゼ

シュワルツェ夫人　（興奮して）まあよかつた、來て吳れて、今朝は大變ですのよ。

フランチスカ　そんな事でせう。

シュワルツェ夫人　でもねえ、ホテルから二人來た人があるのよ。一人は立派な紳士で――どこかの宮さまかと思はれる位――それから一人は妃殿下とでもいひたいやうな若い婦人でね。それが皆マグダの召使だとさ。

フランチスカ　贅澤ねえ！

シュワルツェ夫人　そしてね、二人で家中一杯に喋つたり怒鳴つたりしてゐるのですよ。――そして二人とも、ちつともこつちの言ふ事が分らないと來てゐるし――こつちは又向ふの言ふことが誰にも通じないだらう。――それで以て二人で喋るとも、喋るとも、喋るとも……さうしてゐると、こちらのお孃さまが命令を下してさ、お湯の仕度――といふと、お湯が十分に沸いてゐるか、ない――冷水浴といふと、それが十分に冷くなかつたり――それからお前、アルコールは窓から流

すやうに棄てゝ了ふし――化粧につかふ醋を――と言つた所で、そんなものはてんでありはしない。

フランチスカ　まあ、そんな事をするのかねえ！――でそのえらいお娘御は何所にゐるの？

シュワルツェ夫人　お湯が濟んでから、も一度寢床へ。

フランチスカ　そんな自墮落な眞似は、私の家ならさせやしない。

シュワルツェ夫人　私も言つてやらなくちやならない！つまり主人のためだから（テレゼ入り來たる）何だい？テレゼ

テレゼ　あの參事官の、フォン、ケラーさま――あの方からお使でございましてね、中尉さまは、もう此方へお見えでございませうか、それからお孃さまの御返事は如何でございませうか伺ひたいと申して參りました。

シュワルツェ夫人　何のお孃さまの事だい？

テレゼ　それは私存じませんでございます。

シュワルツェ夫人　ではね、たゞよろしく申上げて呉れつてね、そして中尉さまはまだお見えになりませんてね。

フランチスカ　あれは十二時までは引けないからそのあとで來るでせうよ。

テレゼ　（去る。その時戸を明けると、廊下の方に男と女とがイタリヤ語で言ひ爭つてゐる聲が騷しく聞える）

シュワルツェ夫人　まあ、あれを聞いて御覽（戸の方へ行つて）ちよつとお待ち！お孃さまが、もうすぐ來るよ。もう、すぐ來るよ！（戸をしめて）あゝ！（歸つて來て）こんどは朝飯！――ねえ、お前、あの人が何を飲むと思つて？

フランチスカ　コーヒーでせうさ！

シュワルツェ夫人　いゝえ！

フランチスカ　ではお茶？

シュワルツェ夫人　いゝえ！……

フランチスカ　ではチョコレートしかないぢやありませんか？

シュワルツェ夫人　いゝえ――コーヒーとチョコレートの混ぜたの。

フランチスカ　（驚いて）まあ、大變な……けれども、屹度おいしいよ。

シュワルツェ夫人　それから昨日ホテルから大鞄が五つ六つ來てねえ、まだあとにそれ位殘つてゐるといふのだが、一體何が這入つてゐるのだらう！一つの鞄なんか、一杯に帽子ばかり！それからすつかり本當の手編レースをかけた仕度服だの――金絲のぬひをした透しの靴下だの――（小聲で）絹の肌襦袢だの――

フランチスカ　え？絹の――？

シュワルツェ夫人　えゝ！

フランチスカ　（頭の上で手を拍ち）さうなると、罪惡ですよ！

第二場

前の人々　マグダ

マグダ　（眠りのさめるやうな朝着の仕度服を羽をつてゐる――外で話しながら戸をあける）Ma che cosa volete voi? Perche non aspettate finchè vi commando?（でも何うしやうと思つたつてね。なぜ言ひつけるまで待つて居ません？）……へえ？

シュワルツェ夫人　さあ、あの人たちも本職が始まるよ。

マグダ（癇癪を起して）No, no—e tempo!（いゝえ、いゝえ——まだ！）（戸をしめて、ひとりで）Va—bruto!（行つちまへ——しやうのない奴！）お早うさま、おつ母さん！（接吻する）私、朝寝坊ですわね——へえ？あ、おばさん、お早うさま。御機嫌よく——へえ？——私もですよ。

シュワルツェ夫人　あの見馴れない方、何うなさらうといふの？

マグダ　あゝ、あの馬鹿野郎め！あいつ、私が何時立つか知りたいといふのですよ。何うしてそれが分るものですか？（撫でながら）ねえ、あなた、おツかさん……あゝあ、ねえ、私寝ましたよ——耳を枕につけたまゝ、ぐつすり——死んだやうに！冷水浴がいゝ氣持、冷たくて氷のやう——元氣が體に溢れてるてよ——さあ、おばさん——そうら！（フランチスカの腰の邊を抱き高く持ち上げて投げ出す）

フランチスカ（怒つて）何をするんですよ——

マグダ（おほやうに驚いて）へえ？

フランチスカ（諂ふやうに）お前さん隨分おもしろい人ねえ！

マグダ　でせうか？（手をたゝいて）御飯だ！

第三場

前の人々　マリイ

マリイ（コーヒー道具を載せた盆を持つて出る）お早うございます！

フランチスカ　お早うよ。

マグダ　私、お腹がすいて死にさうよ――はあゝ！（胃のところを叩く）

マリー　（フランチスカの手に接吻する）

マグダ　（覆ひを取りのけ、うれしさうに）上等――ね！ジュリエッタがこしらへたといふ事が分つてよ。

フランチスカ　あの人、騒ぐことだけは、たしかに上手ね。

マグダ　いゝぢやないの？罪のない騒ぎでもしなくちやあの女は生きて行けないのですよ。それでね、若し非常に激して來ると、却つて靜かになつて、皿であらうが何であらうが平氣で頭へ投げつけますよ。……それがあの女の癖です、それはさうと、お父さんは何處？

シュワルツェ夫人　委員會の方の家へ、お詫に入らしつたのよ。

マグダ　相變らずね。あなた方の生活は半分はお詫で出來上つてるのね。その委員會といふのは、何のです？

シュワルツェ夫人　基督教扶助協會のさ。今朝早くから家で會議がある筈でしたのよ。けれども、それはよく無いと思つてね、ちやうど今日皆さんを家へ來て貰ふといふことが、何だかお前を皆さんへ引合せるためのやうに見えては拙いからね。

フランチスカ　ですけど姉さん！それでは、何だか娘の方が、あなたには一層大事なやうに聞えてよ――。

マグダ　ねえ、どうか、さうあつて欲しいものよ。

シュワルツェ夫人　それはさう、ねえ。けれども――さう〳〵――お前、先方がどんな人たちだか知らないのでせう？みんな地位の非常に高い人ばかりだからねえ――例へばフォン、クレブス少將の夫人なんかもその中に這入つていらつしやる。（誇つた樣子で）あの方と私たちは親しく交際してるのですよ。

マグダ　（わざと尊敬するやうに）さう！まあ！

シュワルツェ夫人　みんな明日見えるだらうから、お前、少將夫人の外にも信仰のある、上流社會の貴婦人方にお近づきになれますよ。そんな方と御交際をしてゐるお蔭で、私たちも、大變世間から尊敬を受けるからねえ。どんなにお前が、あの方たちに愛せられるか、私、それが見たいのよ。

マグダ　それはおつ母さん、さかさまでせう？どんなにその方たちが私に愛せられるかといふ意味でせう？

シュワルツェ夫人　さうねえ——といふと——けれども、喋り〱して行くのだから——。

マリイ　（立ち上り）お母さま、御免蒙りますよ。

マグダ　いゝえ、お前こゝにお出で。

シュワルツェ夫人　あゝ、さうおし。それからマグダや、お前のホテルに置いて來た鞄は？何か無くなりはしないかと、私、それが心配でならない。

マグダ　ぢや、取りにおやんなさいな。

フランチスカ　（シュワルツェ夫人へ小聲で）ねえ、是れからあれに聞きますからね、あなたはあちらへ行つてゐらつしやい。

（シュワルツェ夫人出て行く、フランチスカ坐つて勿體らしく）そこでマグダさんお前、馴染がひに此のおばさんに、すつかり話してお呉れでないか——

マグダ　へえ？あゝ……おつ母さんが手傳がいるでせうに！——行つておやんなさいよ、行つて！手傳つて上げたらいゝぢやありませんか。

フランチスカ　（毒々しく）お前さんが命令なさるといふなら！

マグダ　たゞお願するのですよ。

フランチスカ　（立ち上り）けれども、お前さんのお願は何だか押しつけるやうね。

マグダ　（笑ひながら）全く。（フランチスカぶり〱して出て行く）

第四場

マグダ　マリイ

マリイ　だけど姉さん！

マグダ　あいよ！私はお前、斯うして世間を渡つて來たのですよ――自分を曲げるか、それでなければ壞して了うか、私は決して自分を曲げない。それより外に、道はないのよ。

マリイ　まあ、姉さん！

マグダ　かわいさうに！お前たちはじめ此の家では、そんな事は思ひ出しもしないのね。私までが昨日はとう〱不名譽な目にあつて、自分を曲げさせられて了つたのよ。……ねえお前――けれどまあ、御覧よ、私たちの昔のおつ母さんは――ほんとに美しいわねえ。（母の肖像を指して熱心に）そら、あそこに……お前覺えてゐるかい？

マリイ　（頭を振る）

マグダ　（考へ込んで）餘まり早く死んで下すつた！――お父さんは何處に？私お父さんがゐらつしやらないと氣がかりだし、ゐらつしやれば恐いやうだし……それやさうと、お前、さあ今までの事を話してお聞かし。

マリイ　話せないんですもの。

マグダ　ちよつとその胸にかけてる寫眞入をお見せ！

マリイ　（思ひ切つて）さあ！

マグダ　（明けて見て）中尉か、さうあるべきだわねえ。私たちの方だと、いつもテノアの役よ。

マリイ　あら姉さん、そんな浮ついた話ぢやないのですよ。私の運命になる人。

マグダ　ぢや此の運命さん。何といふ方？

マリイ　從弟のマックスさ　ですよ。

マグダ　（口笛を吹いて）ぢやあ何ぜそのいゝ人と結婚しないの？

マリイ　フランチスカおばさんが、もつといゝお嫁さんを探せといつて、保證金を出して下さらないんです。それが無くてはマックスさんは結婚出來ないのですから、何うにもしやうがありませんわ。

マグダ　まあ、ひどい奴！そして何時ごろからお前たちは愛し合つてゐるの！

マリイ　もう想ひ出せない程早くから。

マグダ　そして何所で逢つてゐます？

マリイ　此の家で。

マグダ　いゝえ、こゝでなく、――他で――二人きりで。

マリイ　二人きりで秘密に逢つたことなんぞは一度もありません。それだけの愼みの出來たのは、私たちが自重心を失はなかつたからだと思ひますわ。

マグダ　まあ、こつちへお寄り……もつと近く……正直に言つて御覧……お前全く思つて見た事もないかえ、そんな窮屈な慎みだの自重心だのといふものをすつかり打つちやつて了つて愛する男と一緒に、そんなものの無い所へ行きたいといふ氣は起らないかえ――何所へでも――全く自由に――そしてじつと其の男の胸に抱かれて、自分の跡に沈んで行く世間を嘲笑つてやる氣は無いかえ？

マリイ　いゝえ、姉さん、そんな考は私には起りません。

マグダ　けれども、その男のために死にたいとは思はないの？

マリイ　（立ち上り、胸を張つて）死にたうござんすわ、いつでも死にますわ。

マグダ　かわいさうに！（ひとり言のやうに）○○○○○○○○○○○○、何だつて堪りつこはありやしない。あれほど強い戀の力でさへ、あの連中の手でさいなまれると、色のさめた、あきらめた、死にたい氣持になつて了ふ。

マリイ　誰れのこと、姉さん？

マグダ　いゝの、いゝの！お前――で、その保證金といふのは何のくらゐいるの？

マリイ　六萬マルク

マグダ　何時なら結婚が出來るの？今すぐでなくてはいけないの、お午からでは？

マリイ　私眞劍なのですから、からかはないで頂戴。

マグダ　少くとも電報を打つだけの時間はいりますよ、それ位のお金になると、不斷手元に持つてはゐないからねえ。

マリイ　（やつと其の意味が分かつて狂喜の叫び聲を立てゝ）姉さん！（其の足元に沈む）

マグダ　（暫く沈默の後）幸福でおいで――夫を愛してやるのですよ――そしてね、總領がうまれたら大威張りで、兩手一は

いに其子を差上げて、世間に面と向つて、見せてやつてお呉れ――(怒りの熱情で兩手を伸ばし)斯うして面と向つてね――
――そして想ひ出してお呉れ、他に一人――ああお前は仕合せですよ！(驚いて)人が來る！お立ち！

第五場

前の人々　牧師(紙挾を持つ)

マグダ　(牧師の方へ行つて)あゝ、あなただつた。ちやうどいゝ、お目にかゝりたいと思つてゐたのですよ。

牧師　私に！何の御用でせう？

マグダ　たゞあの――私ね、あなたとお喋りがしたかつたのですよ、お上人さま。

牧師　家へお歸んなすつて、善い氣持でせう、マグダさん！

マグダ　えゝ――あのおばの古猫さへ、うろつき廻つてゐなければねえ。

マリイ　(朝飯の道具を片づけながら、驚いて、併し笑つて)まあ、姉さん！

牧師　マリイさん、お早うございます。

マリイ　お早うございます。(盆を持つて出て行く)

第六場

マグダ　牧師

牧　師　何うしたのです、マリイさんの生々した顔は！

マグダ　譯があるのです！

牧　師　お父さまはまだ此所へは見えませんか？

マグダ　いゝえ。

牧　師　御不快ででもいらつしやる？

マグダ　さうかも知れません。私まだ會はないけれども。昨日は隨分長くまで話してゐましたよ。話せるだけの事はもう話して了ひました。それでもまだ父は何だか氣にかゝるやうな樣子で、斷えず氣をつけて探るやうな目付をしてゐましたつけ。ひよつとすると、あなたの誓ひも反古になりさうね。

牧　師　さうおつしやると、私が叱られるやうに聞えます――何うか、あなたが御後悔なさるに及ばないやうに――。

マグダ　後悔はいたしませんよ。けれども、妙な心持ですのね。なまぬるいお湯の中に坐つてゐるやうで、弱々しい、そして溫い氣分になります。ドイツ氣分といふのが、また回復して來るのでせう、もう久しく忘れてゐたのですよ。今の私の心は、まるで雜誌のクリスマス號を見るやう――いゝ月の夜、戀、若い士官、いろんなものが出て來る。けれども一番いゝのは私が私ひとりでやつて居るといふことです、いつでも嫌になれば打つちやて了ふ、ちやうど兒どもが人形を打つちやるやうに、そして元の私に戻つて了ふ。

牧　師　それは私等に取つては、よいことでございますまい。

マグダ　まあ、さう言はないでゐて下さい。私は傷ついて、根こぎにされてゐるやうで、何だか氣にかゝつてなりません――。

牧　師　何がです？

マグダ　私、到底……到底こゝに居馴れることは出來ません。たゞ一時割り込んでゐる許りです。（低い聲で、心配げに）外からちよつと幻の影でもさせば、こんな穩かな、田園の歌のやうな世界が、一燃に燃えて了ふ。

牧　師　（びつくりする、そしてそれを抑へる）

マグダ　私には窮屈すぎる――狹い――狹い。何だか私も臆病者になりかけたやうな氣がする。わざと、自分を小さくしてゐなくちやならない、段々さう思はれて來る。

牧　師　それをあなたは恥と思つてゐらつしやるか。子としての愛がそれほど忌むべきものでございませうか。私はさうは考へません。

マグダ　子としての愛ですつて？私は、あの〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、と言つてやりたいのですよ。それを却つて私が小さくならなくちやならない……小さくなるなんてそんな事は私、不得手なのです。相手は必ず負かしてやらなくちやならない――歌つて歌ひ負かしてやる――一人殘らず歌ひ負かして私の思ひ通りにしてやります、それが私の歌ひかたです、それが私の命です。歌ふのも生きるのも、私に取つては同じ事、愛も憂も、喜ぶにも嘆くにも、私と同じ事をさせるまで押しつけてやる、それを承知しない者は呪つてやる。歌ひ負かして――地べたに平伏させて、奴隷にしてやります、私が手すさびのおもちやにしてやります。私、馬鹿な事を言ふやうですけれど、意味はお分りになつたでせう！

牧　師　自己の人格で、押つけやうといふのがあなたの意味でございませう！

マグダ　さうです〳〵。あゝ、私、すつがり、あなたに言つて了ひたい。あなたは分る人ですよ、分る人ですよ――時々ぱあんなに單純に見えてゐて。あなたの胸には蔓が生えてゐて他人の胸に巻きついて、それを引き寄せる力を持つてゐる

……それをあなたは自分の爲になさるのぢやない。あなたが何れほど大きな力を持つてゐらつしやるか、恐らく御自身には分りますまい。それがいゝのです、それがうれしいと思ひます……世間の人はみんな獸ですよ、愛するにしても憎むにしても。其の中であなたは人間です、あなたの傍へ行くと、其のものまでが人間のやうな感じを起します、ねえあなた、昨日あなたが入らしつた時には、私には、あなたが小さく〳〵見えたのですよ――けれども、其のうちに、あなたの身から一種の力が現はれて來て、それが次第に大きくなつて、今ぢや私に取つては大きすぎる程になりました。

牧　師　ほう！何でございませう？

マグダ　何と言ひませうか――犧牲、自己を無くする。兎に角自己といふことに關したものですよ――或は自己の反對の事だと言つてもいゝでせう――それが私を動かしたのです。私があなたのおつしやる事を聞かなくちやならないのも、其のためです。

牧　師　不思議な事です。

マグダ　え？

牧　師　打ちあけて申すと……實は――つまらない事ですが……私はまた昨晩あなたにお目にかゝつて以來、何うかあなたのやうになりたいといふ、羨しい心が起つて來ました。

マグダ　はゝはゝ！あなたは模範的な人間でせう？それが私のやうに？

牧　師　はい――私は――是れまで私といふものゝ大部分、私の靈魂の大部分を殺してゐました。私の平和は死人の平和です。所へ昨日あなたが立ち現れて、その新しく自然から生まれ出たやうな鮮かさ、その飾りけのない力、その――その、偉大な本性を見せて下すつた。その時私は自分に向つて「あゝ、あれだ、若し私が青春の時に人生の喜びを嘗めたら

恐らくあゝなるべきであつたらう」と言ひました。

マグダ　（さゝやくやうに）それから今一つあります罪といふ事。吾々が大きくなる爲には、〇〇人にならなくちやなりません。罪惡以上に大きくおなんなさい、それが、あなたのお說法なさる清淨潔白よりも、ずつと貴いぢやありませんか？

牧師　（感じて）ではあなたは——（戸の外に聲）

マグダ　（びつくりして、耳そば立て）しつ！

牧師　何うなさいました？

マグダ　あゝ、つまらない事にびく／＼するものねえ！——別に私の身が恐いとも思ひませんけれど——あちらに居る人たちに、斯んな事を聞かぜるのがかわいさうだと思つたからですよ（牧師の手を握つて）そこであなたは、やつぱり私の友人でゐらつしやいますか？

牧師　私に御用のある限りは——

マグダ　用が無くなりましたら？

牧師　私に取つては、少しも變りはございません。（行かうとして戸の所でシュワルツェに出逢ふ）

第七場

前の人々　　シュワルツェ

シュワルツェ　おゝ、牧師。お早うございます。お出かけなら、あの庇の所でちよつと待つてゐて下さい。跡から行きますか

ら（牧師去る）どうだ、よく眠れたかい、マグダ？（額に接吻する）。

マグダ　非常によく。私の昔の部屋で、久しぶりに、昔のやうに眠りましたよ。

シュワルツェ　ふだんは昔のやうに眠れないのか？

マグダ　あなたは？

シュワルツェ　さう言ふではないか、善き心には――まあ、茲へお出で。

マグダ　えゝお父さん――いゝえ、足の所へ坐らせて下さい。その方が、あなたの、その見事な白いお髯を見るに都合がよござんす――私あなたを見るたびに、クリスマスの晩を想ひ出しますよ。それから雪に埋もれて靜かな野原を想ひ出しますよ。

シュワルツェ　マグダや、お前は話を面白く聞かせる法を知つて居るな……お前が話をすると、聞手はそこら一杯に繪を廣げて見せられるやうな氣がする。此の邊のものは、さういふ氣の利いたことをし得ない……其の代り、また、此の邊には、包み隱すべき事といふものが何も無い。

マグダ　私たちだつて……けれど、まあ、靜にお話しなさいな、お父さん。

シュワルツェ　よし／＼……それで、お前はあの牧師さんに何んな條件を約束させたか、おぼえて居らうな。

マグダ　それをあなたはお守り下さいますか？

シュワルツェ　約束した事は俺は守る。併しマグダや、疑ひといふものがな――守るべき事は守るとしても、魔のやうにそこへ横たはつて居つて――

マグダ　では、何をお疑ひなすつて？

シュワルツェ　それは俺にも分らん　お前はさうして光り輝く身になつて俺等を驚かして居る……けれどもその眩いほどの光りや、俗世間の名譽や、そんなもので此の父の眼は、くらまされまいぞ　お前の心も今以て溫みはあるやうだ、少くともお前の話すところを聞いて居るとな……併し、お前の眼に何かある、俺の氣に入らんものがある。それからお前の口元に、人を人とも思はん高慢氣が見える。

マグダ　まあ、あなた、私の大すきなお父さん！

シュワルツェ　それ御覧！其の優しい言葉からして娘が父に對する態度ぢやあない――そんな風にしてよく兒どもをすかす、兒どもなら小さくとも大きくともそれでよからう……俺は是でも一家の主だ、足はきかず、職はやめられた一個の軍人に過ぎんけれども、家では相當の尊敬を受けなければならん。な、マグダ。

マグダ　（立ち上り）私少しもそれを否とは申しません。

シュワルツェ　おゝ、それでよい、それでよい……俺等も、お前が思つて居るほど單純な人間ではない――眼も見えれば耳も聞えるから、世間では今、道徳に對する革命の精神が漲つて居る事も知つて居る……人の心に蒔くべき種子が腐り始めたのだ……初めは罪惡であつたものも、すぐそれが當り前になる……な、マグダ、お前も今に行くだらう――出て行つて――何處をあてに落ちつくか――俺は知らん――も一度歸つて來るやら來ないやらも知らん――が、若し歸つて來ても、俺はもうその時墓場へ行つて居らう。

マグダ　まあ、そんな事を、お父さん。

シュワルツェ　それは神の御手にあることゝして――俺はお前に賴みがある――まあ、こゝへお出で――もつとずつと近く――さう！（マグダを跪づかせて頭を兩手の間に挿み）俺はお前に賴むが、な――もう俺も長くはあるまいから、どうか其

の前に俺に平和を與へて呉れんか、お前は肉體に於ても精神に於ても清淨潔白だといふ事を一言俺に言つて呉れい。さうして、俺が祝福の祈を受けた上で何所へなりとお前の行く道へ行つて呉れい。

マグダ　お父さん、私は――自分を僞らないだけの生活をして來ました。

シュワルツェ　何んな風に？善くか惡くか？

マグダ　それは――私に取つては――善くですよ。

シュワルツェ　（解し得ないで）お前に取つて――それが――何うしたと？

マグダ　（立ち上り）もう私の事ば心配しないでゐて下さい！一日か二日の事ですから、靜に心一杯樂んで過さうぢやありませんか……それ位の日數は、すぐにたつて了ひます。

シュワルツェ　（想ひに沈んで）お前はやつぱり――かわいゝと思ふ――永年お前につけて悲しい想ひをしただけ、一倍愛情も増して來る――（威嚇するやうに直立して）併し俺は是非聞かなくちやならん、お前は何んな女か？

マグダ　（顏をそむけて）お父さん――（呼鈴が鳴る）

第八場

前の人々　シュワルツェ夫人

シュワルツェ夫人　（驅け込んで）あなた、何うしたらいゝでせう？委員會の奧さん方が見えたのですよ！お目にかゝつてお悅びを言ひたいとおつしやるのですからねえ、何かお仕度をしなくちやなりますまいか…

シュワルツェ　俺は庭へ出やうよ。

シュワルツェ夫人　あら、まあ――皆さんが此所へ見えるのですから――あなたお悦びの御挨拶をなさらなくちや。

シュワルツェ　いけない――いけない――俺には出來ん！（左手へ出て行く）

シュワルツェ夫人　お父さん、何うなすつて？

第九場

マグダ　シュワルツェ夫人　フォン、クレブス少將夫人　エルリヒ地方裁判所部長夫人　シューマン夫人

フランチスカ

フランチスカ　（戸を明けながら）どうぞ皆さん――

少將夫人　（シュワルツェ夫人の方へ手を出して）何といふおめでたい日でせうねえ、奥さん。町中が自分の事のやうにして喜んでゐる騷ぎですよ。

シュワルツェ夫人　失禮でございますが、私どもの娘でございます――フォン、クレブス少將の奥さま――エルリヒ地方裁判所部長の奥さま――シューマンの奥さん。

シューマン夫人　私は、たゞもう商人の家内に過ぎないのでございますけれども――

少將夫人　宅も自身で敬意を表しに伺ふ筈で、いづれ、後ほど――

シュワルツェ夫人　どうか皆さん、おかけ下さいませんか？（すわる）

フランチスカ　（落ちついて）まあ、全くこの度の事は、家内中のおめでたでございますよ、ねえ。

少將夫人　（つんとして、而も親しげに）此たびの音樂祭には、私ども殘念ながら參り得なかつたのですよ。ですからあなたに對して世間並に御賞讃申し上げることも出來ませんやうな次第で、もつともそんなことには、もう慣れ切つてゐらつしやるのですからねえ。

シューマン夫人　存じてゐましたら、必ず切符を誂へたのでございますにねえ。

少將夫人　暫くこちらにお留りのお積りでいらつしやいますか？

マグダ　それが全く分つてゐませんのよ、奧さん――御免なさいよ――奧さんなんてねえ、令夫人閣下？

少將夫人　いゝえ――どうか、もう。

マグダ　おや／＼、御免遊ばせ！

少將夫人　どうか、もう！

マグダ　私たちは、渡り鳥のやうなものですからね、先の事なんか到底はつきりと決められるものぢやございませんのよ

エルリヒ夫人　ですけれど、自分の落ちつく家といふものがなくちやなりますまい。

マグダ　なぜでせう？職業は誰れにも無くちやならないが、それで澤山ぢやありませんか？

フランチスカ　それは、見やうによることだらうよマグダさん。

少將夫人　私どもの意見は、さういふお考とは大分違つてゐますよ。もつとも時々此の邊へも婦人の方が見えて、講演をなさることはございます。併し善い家庭では一切さういふ事に關係致しません。

マグダ　（丁寧に）あゝ、それは私よく分るのでございますよ、善い家庭には食物が充分におあんなさるから、他には何も

いりません。（沈默）
エルリヒ夫人　ですけど、少くともお住ゐはございませう？
マグダ　塒の事ですか、それはコーモーの湖水の傍に別莊が一軒と、ナポリに地所家屋を持つてゐます。（人々驚く）
シュワルツェ夫人　その事はちつとも私たちに話さなかつたのねえ。
マグダ　めつたに使ふことは無いのですよ、お母さん。
エルリヒ夫人　藝術といふものは、隨分お骨の折れる仕事でございませうねえ？
マグダ　（親しげに）それば、やりやうにも依りますわね、奥さん。
エルリヒ夫人　私どもの娘も唱歌のお稽古に參つて居りますが、なか／＼樂ぢやないやうでございます。
マグダ　（丁寧に）おかわいさうにねえ。
エルリヒ夫人　勿論、娘のは、自分の慰みにやるのでございますけれども。
マグダ　結構なお慰みですよ（傍に腰をかけてゐるシュワルツェ夫人に小聲で）この人たちをあちらへ連れて行つて下さいな
それでないと私、失禮な事をするかも知れません―。
少將夫人　本當は、何ちらかの劇場へ御出演なさることになつてゐるのですか？
マグダ　（思ひ切つてやさしく）時々さうなのですよ。
少將夫人　では唯今は、お口がかゝつてゐないのですね？
マグダ　（つぶやくやうに）驚いた！――（聲を高めて）えゝ、唯今はごろついてゐるのでございますよ。（婦人等互に顏を見合はす）

少將夫人　いゝ家庭の娘さんで劇場へ出てゐますのは少なうございますのね。

マグダ　はあ、さうですよ、大抵は馬鹿娘さんですから、出やうたつて、出られやしません。

シュワルツェ夫人　だけど、お前！

第十場

前の人々　マックス

マグダ　あゝ、此の人はマックスさん！（その方へ行つて手を差出し）ねえ、どうしたんだらう、私、お前さんの顏をすつかり見忘れて了つたよ……だつてさうでせう。あの頃は大の仲よしだつたんでせう？

マックス　（驚いて）僕は少しも――

マグダ　ぢや、是れから仲よしになるのよ。

エルリヒ夫人　（低く）あの調子がお分りになりますか。

少將夫人　（肩をすくめる）

（婦人等立ち上り暇乞をする。シュワルツェ夫人及フランチスカと握手し、マグダへは首を下ける）

シュワルツェ夫人　（うろたへて）もう、皆さんお歸りでございますか――宅がどんなにか殘念がるでございませう――

マグダ　（平然として）さやうなら、皆さん！（夫人等地位の順序で出て行く）

第十一場

マグダ　マツクス　シュワルツェ夫人　フランチスカ

シュワルツェ夫人　（戸の所から返つて來て）少將夫人は屹度お怒りに、なつたのよ、でなければ、もつといらつしやる筈だもの。マグダお前少將夫人を怒らせたのですよ。

フランチスカ　他の奥さん方もやつぱり怒つてゐたのよ

マグダ　おツ母さん、私の鞄の世話をして下さらなくつて？

シュワルツェ夫人　さう／＼、私自身でホテルへ行きませう。どれ／＼（出て行く）

フランチスカ　お待ちなさい、私も一緒に行かう。（憎らしげに）私手助をしなくつちやならないからねえ。

マグダ　あ、おばさん、ちよつと一言。

フランチスカ　はい？

マグダ　今日是から許嫁の式を擧げますのよ。

フランチスカ　誰れの許嫁？

マグダ　此の人とマリイとの。

マツクス　（喜びの叫びて）マグダさん！

フランチスカ　併しおれに對しては、私が母に代つて責任を持つてゐるのですから、私の權利かと思ふのですよ、その事は

マグダ　いゝえ、權利はいつも與へる人の手にあるのですよ、おばさん。ですから取り逃さないやうになさいよ。

フランチスカ　（おこつて）ではよござんすよ、お前さんに――（出て行く）

第十二場

マツクス　マグダ

マツクス　お孃さんに對して、僕、何とお禮を言つてようございますやら。

マグダ　お孃さんなんて、たゞマグダさんと、さうお言ひ。マグダさんと。

マツクス　御免なさい、禮を失してはならないと思つたものですから――

マグダ　あんまり禮なんか無い方がいゝのよ。そんなものは私大嫌ひ。もつと強い力、もつと強い人格！分つて？

マツクス　だつて、マグダさん、二十五マルクの手當で借金も出來ない程な、つまらない一中尉が、どうして人格なんか持ち得ませう？そんなものにたゞ邪魔になる許りです。

マグダ　おゝ！

マツクス　部下を間違なく率ゐることが出來て、聯隊の舞踏會で舞踏が間違なく踊れて、そして勇氣のある奴といふことにさへなれば、それで澤山なのです――

マグダ　妻君を幸福にする爲めにはねえ、全くよ――行つてよの娘を見つけてお出で、さあ／＼！

マックス　（行きかけて戻つて來て）申譯がありません僕、あんまり嬉しかつたものですから、用事をすつかり忘れて了つて……實は今朝……それはさうと町中があなたの爲に何んな騷ぎをしてゐるか、到底想像がつきますまい。そこで今朝――まだ私が寢床の中にゐると――一人の友人が飛び込んで來たのです――その人はあなたとも古くから懇意なのですがね――其の男が非常に興奮して、顏の色を變へてやつて來て實際かと聞くのです。そしてあなたにお目にかゝりに來てもよからうかと言ふのです。

マグダ　ぢやおよこしよ。

マックス　併し先に私から聞いて吳れといふのです――よかつたら午前中に正式にお尋ねすると言ひます。

マグダ　なんて此の邊の人は形式ばるのだらう！一體誰れ？

マックス　參事官のフォン、ケラー

マグダ　（やつと聲を出して）あの――さう――あの！

マックス　（笑つて）御免なさい、あなたも顏の色が變りましたよ、ちようどフォン、ケラー君のやうに。何だか――僕には――

マグダ　（靜に）私が？顏の色が？（テレゼ名刺を持つて來る）

マックス　それです。ドクトル、フォン、ケラー

マグダ　通してお吳れ。

マックス　（微笑しながら）僕マグダさんに是れだけ言つて置きませう、フォン、ケラー君はえらい人物です、前途多望な人で、吾々の宗教的事業の爲にも一光明になられる人です。

マグダ　ありがたうよ！

第十三場

前の人々　ケラー（花束を持つて入り來る）　マックス

マックス　や、參事官――是れがマグダさんです大層喜んで居ります――僕は之れで失敬しますから――（二人に挨拶して出て行く）

第十四場

マグダ　ケラー（ケラー戸の所に立つたまゝでゐる。マグダはじつとしてゐられないやうに歩き廻る、沈默）

マグダ（獨言のやうに）幻が立つてゐる（左手のテーブルと椅子を指し、自分は其の向側に腰かける）

ケラー　何よりも、まづ、お喜びを申させて下さい、私の最も温かな、最も眞實な心からお喜びを申し上げます。今度の事は實に意外の出來事で、こんなめでたい結果にならうとは夢想も及ばなかつたらうと信じます――で、私の、特別な志を表するために、どうか、この、つまらない花をあなたに獻じたいと思ふのです。

マグダ　まあ、お氣のつく事ねえ！（笑ひながら薔薇の花を取りテーブルの上に投げ出す）

ケラー（困つて）あ、――さう取つて下すつては實に心外です、私からお尋ね申したのを、あなたは誤解なすつたのでせう――何か私のやり口にぶしつけな事でもございましたか？斯んな狹い土地では、どうせ何處かでお會ひ申すことは避けがたいのですから、いつそお互に打ち明けて、關係を明にして置いた方がよからうと思ひましてね――

マグダ　（立ち上り）御もつともですよ――たゞ今の私はまだ充分に――私といふものゝ本性にもどつてゐなかつたのですよ……あれが若し其儘の私だつたら、なぐさまれて棄てられた、昔のグレトヘンの役は、私、あなたに對して勤めたかも知れない……やつぱり故郷の道德にかぶれてゐたのですよね……けれども今ではもう自分の本性に戻つてゐます。さあ、大膽に手を握りませう……ちつとも恐れるには及びません、私なんにもしやしない。さう――しつかりと――さう！

ケラー　これで私も安心です。

マグダ　私は是まで、斯うしてお目にかゝる日を、幾たび心に畫いたでせう、そして久しい間その日の仕度をしてゐました、今度國へ歸るにつけても、何となく私はさう思つたのですよ……勿論こゝで斯うしてお目にかゝらうとは――ねえ、一體あなたは、私たち二人の間にあんな事があつて、何うして此の家の閾をお跨ぎなすつたか？――何だか少し――

ケラー　いや、私もつい此の頃までは成るべく避けるやうにしてゐました。併しもと／＼社交の範圍が同じで、それにこちらの御家族と意見も合するといふやうな譯で――（言譯のやうに）少くとも主義に於きましてね――

マグダ　ふむ！なるほどねえ、まあ、お見せなさい、かわいさうに、あなた變りましたのねえ！

ケラー　（どぎまぎとして笑ひながら）私もあなたの眼には滑稽な人物としか映らないやうですな、みじめなものです

マグダ　どう致しまして／＼――すつかり譯は分つてゐますよ。あなたは、そんな位地に立つてゐて、それで威嚴を保たうとなさる――良心が咎めて來るのでせう？あなたは、今の清い身分の頂邊から若い時の罪惡を見おろしてゐらつしやる、宗教上の光明だなんて人が言ひますからね。ねえ。もし。

ケラー　（戸の方を見て）どうかそんな調子で話すことは止めて下さい、馴々しすぎて――人が聞くと惡い、――それよりか――

マグダ　(悲しげに)聞くなら聞かせておやんなさいな。

ケラー　(戸の所で)困つて了ふ――まあ(また腰をかけて)聞いて下さい、察して下さい、私がどんなに此の苦痛の中から、眞實なあこがれの心で昔の樂しかつた春を想ひ出すか……

マグダ　(半ば獨語のやうに)樂しかつた春――さう――全くね。

ケラー　あの時私は、まだ他に果たすべき高い使命があると感じたのです、そして――何を隱しませう、參事官の地位を得たのです、而も年は若いし、普通の虚榮心ならそれで滿足したでせうが、他のものはつぎ／＼中央政府へ這入つて行くのに、私は斯うしてくすぼつて、待つて居なくちやならない、それが堪へられない。その上此の邊の周圍といふものがたまりません！古い因襲と偏狹な思想とで固めつけて――どちらを向いても、たゞもう一面の灰色です！それから土地の婦人がまた――少しでも優美な趣味のあるものには――それは兎も角、今朝新聞であなたの事を讀んだ時には、實際私は飛び立つほど嬉しかつたのですよ。そのあなたに、あゝした懐しい思ひ出を持つてゐる私は――

マグダ　何うかして、その懐しい思ひ出の助けで、も一度あなたの灰色な周圍へ色彩をつけやうとお考へなすつたの？

ケラー　(笑つて)あゝ――どうかそんな事は！

マグダ　構はんぢやありませんか、親友の間柄ですもの。

ケラー　實際――私を親友と見て下さいますか？

マグダ　實際ですとも！ Na, warum!(わる氣でなく)――それは、若し私が別の立場から見たら、嘘つき、卑怯者、謀叛人といふやうな名を殘らず並べても、足りないかも知れません――けれど、考へ方によつては、私、あなたにお禮をこそ言ふべきですよ。

ケラー　（喜んで併し解しかねて）とおつしやると、その考は――。

マグダ　其の考は、あなたに大へん都合がいゝのですよ。けれど、それが當然なのだから、私が何で故障を入れませう？ねえ、私たちが初めて逢つたそも〳〵から、あなたは、私に義務を負うてはいらつしやらなかつたのですものね、私が家を出た時は――まだ若い、無垢な小娘で、血は熱してゐるし、量見は無いし、たゞもう人のする通りを眞似て生活してゐたのですよ。そして私はたゞあなたを愛したから、あなたに身を任せた。恐らくあの時私にぶつ付かつた男なら、あなたに限らず、誰れをでも私は愛したでせう……そんな風にして私等の生涯も通つて行かなくちやならなかつたのでせう。そしてたゞ面白おかしく浮かれてゐたのですよ――ねえ、さうぢやなくて？

ケラー　あゝ、その事を考へると、私は胸が塞がるやうです。

マグダ　あのシユタインメッツ通りの古い小屋の――五階に、――私たち三人の小娘が部屋借をして、貧しい世帶ながら樂しくやつてゐた。損料で借りたピアノが二臺あつて、夕飯のパンや滴脂や……エムミーがそれを石油焜爐で暖めてくれて――。

ケラー　それからケーテは、歌に夢中になつて――あゝ――あの二人は何うなりました？

マグダ　Chi lo sa？（誰が知つてゐませう？）ひよつとしたら唱歌の先生にでもなつてゐませう。それとも物眞似芝居にでも出てゐるか。さう〳〵あの頃は、みんないい相棒で、ちやんと一かたまりになつてゐましたつけ！そしてその遊び事が半年も續きましたらう。すると、或日、突然、私の愛してゐる男が消え失せて了つた。

ケラー　全く思ひがけない不幸が生じたのですよ――誓つてもようございます。父が病氣になつて、私は旅行をしなくちやならなかつたのです――その事は精しく書いて上げたぢやありませんか？

マグダ　ふむ！私、あなたを非難するのぢやありませんよ……お禮を申さなくちやならない理由といふのはね――私、そのころはまだ何も知らないぼんやり者で、たゞ野放しの猿のやうに跳ね廻つてゐたのですよ。けれどもそれが、あなたのお陰で一人前の女になりました。私の藝術が何うにかなり、私の人格が何うにか出來たとすれば、それもあなたのお陰です……私の心はちようど……さう〳〵此の下の穴庫には、もと、古い自奏琴が一臺仕舞つてありました、父が嫌ひなために埃の中へ打つちやつてあつた筈です、その穴庫の中の風奏琴、それが私の心です……そしてあなたのお陰で、それが嵐のやうに音を立てゝずた〳〵に――ちぎれるまで鳴りました……凡そ女として持つべき感情は、一つ殘さず搔き鳴らされたのです――愛も憎みも、復讐も、野心も(立上り)それから貧乏も、――ありたけの貧乏も――それから最後に一番高い、一番強い、一番神聖な――母としての愛までも――みんなあなたのお陰で經驗したのですよ。

ケラー　な、なんですと？

マグダ　ねえ、あなたは、エムミーやケーテの事はお聞きなすつても、あなたの兒どもの事はお聞きなさらないのね。

ケラー　(驚いて立ち上り、心配げに見廻して)私の兒ども？

マグダ　あなたの兒どもッ！誰れが言ひましたッ！あなたの！は、は、は！あなたがそんな權利をでもお求めなすつたら、私此の手であなたを殺して了ふ！あなたは一體何者ですッ！あかの他人ぢやありませんか、自分の肉欲を滿足させて、笑つて逃げて行つた人ぢやありませんかッ！　私こそ子供を持つてゐます、私に取つてはその子が光です、神さまです、凡てのものです――そのため許りに、私は、生きもし餓えもし、大道をうろつき廻りもしました、其のためには、私、客席へ出て歌ひも踊りもしました――兒どもは食物が無いと言つて泣いてゐたのですよ！(引き釣るやうな笑ひが次第に泣聲に變り、右手の廊に身を投げかける)

ナラー　（暫く沈默の後）　私は實に腸を抉られる思ひです……ちよつとでも氣がついてゐたら――さうです、ちよつとでも氣がついてゐましたら――此の上は、私、何でもします、償ひが出來れば、どんな事でも厭ひません。けれども今は、どうかお願ひですから、靜まつて下さい……私が來てゐることも知れてゐますから……若しこんな所を人にでも見られたら私の（言ひ改めて）あなたの身の破滅です。

マグダ　御心配には及びません――決してあなたを危險な目には合せませんから。

ケラー　あゝ、私の事を兎やかく申すのぢやありません、全くさうぢやないのですよ。けれども、考へて御覽なさい――萬一こんな事が評判になつたら、此の町は何うなるでせう、あなたの御親父は何うなるでせう？

マグダ　かわいさうに、あの年寄が！どちらにしても、心の平和といふ者は無くなつて了ふ。

ケラー　それからまた、あなたは、今の地位が花々しければ、花々しいだけ零落の程度も強い譯です。

マグダ　（狂氣のやうに）　零落、結構です、零落しませうと言つたら？

ケラー　何うしたのです？――、誰か來ます！

マグダ　來るなら來させませう！みんな來させませう！私、構やしない、ちつとも構やしない！面と向つてあなたの事を話してやりませう、あなたや、あなた方の其の立派な社會に就て、私の考へてる事を話してやりませう……なぜ私は、あなた方にも劣つて、嘘をつかなければ玆に生きてゐられないのでせう？なぜ私の體についた黄金や、名前に添うた光りが私の不名譽を增さなくちやならないのでせう？それを得るためには、私、十年のあひだ夜晝かけて働いたぢやありませんか？（着物の胴のところを引張つて）此の着物一枚こしらへるにも、私は夜の目も寢なかつたぢやありませんか？私の是れだけの地位も他の人たちと同じやうに、一歩々々に築いて來たのです。何で私は人の前に顏を赤くする必要がありませう

？私は私ですもの――自分の力で立つてゐる私ですもの。

ケラー　御もつともです！其の點に於ては、あなたは威張つていらつしやることが出來ます。併し少くとも斯ういふ事はお考へなさらなくちや――

マグダ　何をです？（ケラー默す）何をです？……光明さま！は、は、は、は、光明さまが心配して消えかゝつてゐます。安心していらつしやい、私、あなたに復讐をしやうとは思ひませんよ。けれども、あなたの、その卑怯な氣取つた樣子を見ると――自身で仕出かした事に對してちよつとも責任を引受けまいとなさる、それに比べて、私はまた、その同じ愛のために、零落して、名譽ある社會からは突き出されて人外のやうになつて了つた――へつ！あなた、恥を知るものですよ！――恥を！

ケラー　そら、お父さんです！斯んな所を見られでもしやうものなら！

マグダ　（悶へて）お父さん！（ハンケチを顏にあて、食堂の口から逃げ出す）

第十五場

シュワルツェ　ケラー

シュワルツェ　（喜ばしげに興奮して廊下口から入り來る、ちやうどマグダが去つた後である）やあ、君、參事――今出て行つたのは娘ですか？

ケラー　（非常に狼狽して）はあ、あれは――

シュワルツェ　では何うして俺を見ると逃げ出しました？（あちらへ呼ぶ）ヤグダ！

ケラー　（その前に立ち塞がるやうにして）あ、いかゞですか、あなた――お孃さんは何かちよつとの間ひとりでいらつしやりたいのださうでございます。

シュワルツェ　え〻？何ぜな？お客さまがあるのにそんな――何ういふ譯で――

ケラー　あ、それは少し逆上せていらつしやるのでして――

シュワルツェ　のぼせて？

ケラー　はい――たゞそれだけでございます

シュワルツェ　では玆に誰れが居りました？

ケラー　誰れも――私の知つて居る限りでは、誰れもゐませんでした。

シュワルツェ　それなら、君との間に何ういふ話があつて、のぼせる程になつたのですか？

ケラー　何も重要な事ではございません――全く何でもないのですから――その點は保證いたしますから。

シュワルツェ　では君は何うしてそんな顏をして居られる？殆ど立つて居られるのが苦しいやうではありませんか？

ケラー　私がですか？――それは、あなたのお考へ違ひです――實際――あなたのお考へ違ひです。

シュワルツェ　な、參事官、一つ伺つて置きたい事がある、君はたしか娘と――まあ、どうか腰をかけて下さい！

ケラー　失禮ですが、時間がございませんので――

シュワルツェ　（殆どおびやかすやうに）どうか、腰をかけて下さい。

ケラー　（拒み得ないで）ありがたうございます（すわる）

シュワルツェ　君は、何年か以前、ベルリンで娘にお逢ひなすつた事があるとな？

ケラー　たしかに。

シュワルツェ　俺は、君が鋭敏な、そして思慮のある方といふことはよく承知して居るが――併し、沈默を守るといふ事は、場合によつては一種の惡事になりますぞ。で、君にお尋ねする於た――恐らく久しい間の馴染甲斐に是れは許して下さるだらうし、又その秘密から言つても――俺が今――要するに、お尋ねといふのはな、君は何な娘があちらに居る間の身の上について、不都合な事を御存知ですか？

ケラー　おゝ――どうしてあなた――そんな事を――

シュワルツェ　何うして何處に生活して居つたか、御存じですか？

ケラー　いや、まるきりさう言ふ事は――

シュワルツェ　君は一度もあれの家をお尋ねなすつたことはありませんか？

ケラー　（段々狼狽して）いゝえ、一度も、一度もございません

シュワルツェ　きつと？

ケラー　それはその、たゞ一度お尋ねした事はございますが、併し――

シュワルツェ　君と娘とは親しい關係であつたのかな？

ケラー　（力を入れて）えゝもう、極親しい間柄で――勿論、たゞ親しいと申すだけですけれども、（間を置く）

シュワルツェ　（額を抑へじつとケラーを見つめて氣の抜けたやうに）えゝ。ちやあたしかに――さうであつたとすれば――そ
れなら君――それなら――（立ち上りケラーの方へ行つてまたすわり、氣を靜めやうとする）フォン、ケラーさん、俺等二

人は、斯うして同じ世界に住んで居る、讒誣や中傷は俺等の世界には行はれて居らんのだ、俺も年を取りました――老ひ込んで來ました。そのため、今では自分で自分の考を指揮することが出來なくなつてな――、抑へなくちやならん事も抑へ得ないやうな場合が多い……それから――折々ふいと妙な疑惑なんぞが浮んで來ると、もう何うしても抑へることが出來ん……ちやうど今、俺は、一つ大きな喜びを抱へて居るので……何うか、それを、氣まづいものにしたくないと思ひますぢや……此老人の心を落ちつけさすためにどうか君――俺に誓つて下さい、心からのお誓ひだから――

ケラー　（立ち上り）失禮ですがね、それぢやまるで――裁判所へ引出されたやうなものです。

シュワルツェ　では結局俺が――君にお尋ねしやうといふのは――

ケラー　御免蒙ります！私は何も存じて居りません、私は何も知つてゐたくございません。たゞもう無邪氣に出て參つて友人として御挨拶を申し上げやうと思つたのです。……それをあなたは、不意打をお喰はせなさる……さう思つて下さい私は不意打を喰はされることはお斷りです。（帽子を取る）

シュワルツェ　フォン、ケラーさん、それでは、君のそのお斷りが何ういふ意味になるといふ事は、御承知だらうな？

ケラー　御免蒙りますよ、若し何かお聞きなさらうとお思ひなら、どうかお孃さん聞いて下さい――そしたらお孃さんがすつかりその――えゝ――えゝ――兎に角私はこれでお暇を頂きます……私の住所は御存じでいらつしやいませうね、――萬一――御用のあつた節は――えゝと――私實に遺憾に存じます、斯んな羽目になりまして。併し――えゝ――それでは中佐、是れでお暇にいたします（出て行く）

第十六場

シュワルツェ　（後に）マリイ

シュワルツェ　（しばらく、思ひに沈んで、すわつてゐて、突然呼ぶ）マグダ！

マリイ　（心配して駈け込み來り）まあ——何うなすつたの？

シュワルツェ　（咽ぶやうに）マグダ——マグダをおよこし。

マリイ　（戸口へ行き戸を明けて見廻し）今來るところですよ——梯子段を降りてゐますから

シュワルツェ　さうか！（つとめて平靜にしてゐる）

マリイ　（兩手をしぼりながら）姉さんを何うもなさらないやうに、ねえ！（戸が明いたまゝ暫く間を置いて、マグダが階段を下りて來るのが見える）

第十七場

前の人々　マグダ

マグダ　（旅行服を着て、帽子を手に持つてゐる——顏蒼ざめて、極めて冷靜な樣子で）私をお呼びなすつたでせう？お父さん。

シュワルツェ　俺は——少しお前に——話がある。

マグダ　私もあなたにね！

シュワルツェ　向ふへお出で——俺の部屋へ。

マグダ　えゝ！（左手の戸の方へ行くシュワルツェ續く。マリイは驚いて食堂に引つ込み、そこから嘆願するやうな動作をする、シュワルツェはそれに氣づかぬ様子）

（幕　下　る）

第四幕

場面、前と同じ

第一場

シュワルツェ夫人　マリイ。

シュワルツェ夫人　（帽子をかぶり、マントを着て、左手の戸を叩いてゐる）あなた！――まあ、何うしやう、這入るどころの騷ぎぢやないよ。

マリイ　えゝ、えゝ、這入らない方がよござんすよ！お父さまの見まくと言つたら見せたうござんしたわ！

シュワルツェ夫人　そしてもう、半時間以上も、あすここに這入つてるのだとお言ひぢやないか？

マリイ　えゝ、もうさうなりますよ。

シュワルツェ夫人　あゝ、マクダが何か言つてゐる（聞耳を立て恐ろしげに）まあ、どうしたんだらう、お父さんがあれをおどかしつけてゐらつしやる！マリイや、お前、ほら、お聞き、ね、だからすぐお庭へ行つてねえ――此の所に牧師がお出でだから――譯を話して――フォン、ケラーさんが先程まで此所に見えてゐたといふ事も話してね――すぐお大急ぎで來て頂くやうにお願ひしておいで、

マリイ　はい（廊下口の方へ急ぐ）

シュワルツェ夫人　(呼び返して)それからねえ、テレゼは何も知つてやしまいね？　いろ／＼な噂なんか立てられると困るから

マリイ　あれは、さつき使に出して置きましたよ。

シュワルツェ夫人　ぢや、よかつた／＼。

マリイ　(出て行く)

シュワルツェ夫人　(また戸を叩いて)あなた——ねえ。ちよいと、あなた！(あとへ下つて)おや、來てよ！

第二場

シュワルツェ夫人　シュワルツェ

シュワルツェ　(よろめきながら出て來て、苦しげに屈んでゐる)

シュワルツェ夫人　まあ、あなた、何うなすつたの？

シュワルツェ　(椅子に沈んで)さうだ——ちやうどさうだ——薔薇のやうなものだ。ナイフが來て——幹を切つて了ふ——其の疵はもう治らない——俺は何を言つたかな——何を

シュワルツェ夫人　正氣を失つてゐらつしやる！

シュワルツェ　いや／＼、俺は正氣を失つては居らん……決して居らん。みんなよく知つて居るぞ……よく知つて居るて。

マグダ　(左手の口に現はれる)

シュワルツェ夫人　(其の方へ)お前はお父さんに何をしたの？

シュワルツェ　さうだ――お前は何をした――何をした？……あれが俺の娘だ！――娘を是れから何うしやう？

マグダ　（謙遜に殆ど賴むやうに）ねえ、お父さん、斯うなつた以上は、つまり、私にお暇を下すつて、大道へ逐ひ出してお了ひなさるのが一番いゝでせう？私との緣を絕つて、お了ひなさいな――若し此の家をも一度淸淨にしやうとお思ひなさるなら、ねえ。

シュワルツェ　それ〳〵！――お前は　自分ひとり出て行きさへすればよいと思つて居る――お前が出て行つて――それで跡はみんな元のやうになるだらうか？……此の家は？此の家の皆のものは？俺等は何うなるだらう？――俺は――あゝ――俺はもう墓へ這入りかけて居る身だ――間もなく形がつくだらう――併しこゝに――お母さんが居る、それから――お前の妹が居る――妹が。

マグダ　マリイは望み通りの夫を持つて

シュワルツェ　いや、斯ういふ姉を持つた娘には、人が結婚して吳れん（厭はしげに）だめだ〳〵。そんな事は考へんがいい。

マグダ　（ひとり言のやうに）どうしやう

シュワルツェ　（夫人へ）御覽――やつとあれに分りかけて來た、自分の犯した罪が、

シュワルツェ夫人　えゝ、それは――

マグダ　（哀れな同感の氣持で、而もなほ内心には何所か立ち優つたものゝ態度がある）かわいさうに、お父さん――まあ、お聞きなさい……今までの事は、私どうすることも出來ません……私は――マリイに私の財產を半分分けてやりませう――今日あなたに苦しみをさせた償ひは、私どんなにしてでもします……けれども是れで……どうか――私は自由に行かせて下さい。

シュワルツェ　ほう！

マグダ　もう私に用は無いでせう？あなたのに役には立たないでせう？昨日の今頃までは、まだ私が此の世に生きてるかさへ知らずに居らつしやつたのが——今日になつて——歸つて來るともうすぐ、元の私にして了つて、あなたと同じやうに考へたり感じたりさせやうとなさる、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇——けれども私はお父さんが恐くなりました、此の家が恐くなりました……もはや、私自身でなくなつたのです——もはや前ほどに自分を信ずることが出來なくなりました……(苦しげに言葉を切つて)私——もう、とても、堪えられません……

シュワルツェ　は、は、は、は！

マグダ　ねえ、お父さん、あなたの前になら、私、喜んで平伏します……今日あなたに心配をかけた罪は、心からお詫をします、私の肉と血はやつぱりあなたのものですもの——けれどもそれでゐて私は、自分で作つて來た自分の生活も續けなくちやなりません！——それが私に對する私の義務です——自分と自分の——ではお達者で！——

シュワルツェ　(遮つて)何所へ行くといふのか？

マグダ　どうぞ、通して下さい！

シュワルツェ　いつその事、俺が殺してやる……(マグダを捉へる)

シュワルツェ夫人　あなた！

第三場

前の人々　牧師

牧　師　(驚怖の叫び聲で兩人の間に身を投げ入れる)

マグダ　(老人の手から離れて、牧師の方へ眼を向けたまゝ靜に左手の席へ行き腰を下す、そして暫時身動きもしないでゐる)

牧　師　(沈默の後)まあ、何といふ!

シュワルツェ　な、御覽でしたらう、牧師……實に見事な家庭の圖ではないか。へえ?まあ、あの女を見て下さい。あの爲に俺の名は汚れて了つた。もう何んな卑怯な奴が來て俺の劍を折つても、どうすることも出來ん。それが俺の娘だ。あれが俺の――

牧　師　中佐、私には合點が參りません、また合點したいとも思ひません……併し私の見ます所では、――まだ何か爲すべき事が殘つてゐるやうでございます、そんな事をなさる代りに――

シュワルツェ　おゝ、爲すべき事――さうだ〳〵――澤山爲すべき事がある……俺も爲すべき事が澤山ある……なぜ茲に斯うして立つて居るか、さつぱり理由が分らん……殘念な事は――殘念な事は――あの男がさう言ふだらう、貴公は、片輪者だ――其の手は震へて居る……もう相手にするには足らん。……娘はこつちの存分にしてやる……いや〳〵俺が何うするか見せてやる……見せてやらなくらやあならん……俺の帽子は何處にある!

シュワルツェ夫人　何處へいらつしやらうと言ふのですよ、あなた!(マグダ立ち上る)

シュワルツェ　俺の帽子!

シュワルツェ夫人　(帽子と杖を持つて來て)こゝに、こゝに。

シュワルツェ　さう！（マグダに）お前は神さまに、お禮を申すことを、習つて置け、お前は神さまを信じなかつたが、神さまは此の父を、今日まで生きながらへさせて下すつた、今日こそ、父はお前の名譽を取り返してやるぞ！

マグダ　（椅子の傍に跪き父の手に接物して）お父さんそれはやめて下さい！私、あなたにそれ程の事をして頂く値打はございません！

シュワルツェ　（泣て娘の頭の上に屈む）かわいさうに、かわいさうな奴！（戸口の方へ行く）

マグダ　（跡を追つかけて）お父さん！（シュワルツェ急いで出て行く）

第四場

シュワルツェ夫人　牧師　マグダ

シュワルツェ夫人　ねえ、此の上どんな事があらうとも、私たち、女は――みんな一緒になりませうよ。

マグダ　ありがたう、ね、お母さん――このお芝居も、もうすぐ片がつきますよ（すわる）

牧師　奥さん、外でマリイさんが氣を揉んでゐられます。行つて一言慰めて上げて下さいませんか？

シュワルツェ夫人　何と言つて慰めたらいゝでせう？あれも、生涯の幸福を無くして了つたのですからねえ。

マグダ　（悶へて身を起す）

シュワルツェ夫人　あ、どうか、牧師！（出て行く）

第五場

マグダ　牧師

マグダ　（沈默の後）あゝ、私、もう疲れた！

牧師　マグダさん！

マグダ　（じつと考へ込んで）あのぎら／＼する血ばしつた眼は、もういつまで立つても、私の眼さきから、消えないだらう、何處へ行つても、何處に立つてゐても——ついて廻るだらう。

牧師　マグダさん！

マグダ　あなたは、嘸私をさけすんでいらつしやるでせうねえ——へえ？

牧師　あゝ、マグダさん、さけすむなんといふ事はもう疾つくに棄てゝ了ひました——私等は、みんな一樣に憐むべき罪の人でございます。

マグダ　（苦みの笑ひで）さう、さう、それはお說の通りですよ……あゝ、私、疲れて了つた？……頭から押し潰されてゐるやう。私の生命が私の頭を押し潰してゐる。お父さんは、私のために、一發の彈丸で死ぬ覺悟をして出て行つた！へ！あの人の體一つで、私の罪が償へるものなら！——あゝ、あゝ、私、疲れちやつた。

牧師　マグダさん——すべての事は——たゞ推察して居ります：けれども、あなたは、友人としてお話する權利を私にお與へ下すつた。のみならず、私はそれ以上の責任をすら感じて居ります。私は、あなたの罪を分擔しなくちやなりま

せん。

マグダ　まあ、またそんな事を氣に病んでいらつしやるの？

牧師　あなたは、此の家へ名譽と平和とを取返してお上げなさるのが義務だとは感じませんか？

マグダ　(苦悶を抑へ得ない樣子で)あれ程苦んで來たあなたがそれを私にお聞きなさるの？

牧師　中佐は屹度其の方から確答を得て歸られるだらうと思ひます、何か平和な滿足な解決法を講ずるやうに、

マグダ　は、は、は！此の聖人は！けれどもそれが私に何になるでせう？

牧師　あなたはたゞ——その方が差出される手を——斥けないやうにして下さい。

マグダ　何ですつて？あなたはよもや……あんな人間を、あんな卑怯な、緣もゆかりも無い人間を——どうして——どうして——私が——

牧師　マグダさん、我々の一生には、殆どあらゆる人に取つて、一つの時期があります。一旦破れて了つた自分の生涯を、も一度拾ひ集めて、新しい生活を造るべき時期があります。私みづからそれを經驗して來ました。あなたにもその時が來たのです。

マグダ　いゝえ、いゝえ、私はそんな事はしません。

牧師　さう爲くてはならなくなります。

マグダ　そんなことをするやうなら、兒どもを抱いて海へでもはいります。

牧師　(激しい驚きを抑へる——しばらく沈默の後、かすれた聲で)ではそれが——一番簡單な解決法に相違ありません——そしてお父さんもそのあとを追はれるでせう？。

マグダ　かわいさうだと思つて下さい！あなたにさう言はれると、私、なんだかその通りにしなくちや濟まないやうな氣になります。なぜさうなのだか、自分にも分らないけれど……あゝ、若しあなたが少しでも昔經驗なすつた心持を思ひ出して自分の若い時代を尊敬なさることが出來たら、私をさうまでして犧牲にしやうとはなさらないでせうに。

牧師　いや、あなた一人を犧牲には致しません。

マグダ　(漸く氣がついて)まあ！

牧師　他に道はありません。行く所はたゞ一つです。御老人が到底跡に生き殘られるものでない事は、あなたにも御分りでせう。さうなつたら、お母さんは何うなさるでせう、かわいさうなお妹御は何うなさるでせう――マグダさん、それでは、あなたの手であなたの家に火をおつけなさるも同然です。自分で家中のものを燒きつくしてお了ひなさるも同然です。そしてその家があなたの家に外ならない

マグダ　(段々不安になつて)いけません！いけません此の家は私の家ぢやありません！――わたしの兒どもの居るところが私の家です、わたしの兒どもの居るところが。

牧師　そのお兒さんも大きくなつて――父無し兒におなんなさる――他人から父御は何處にかと聞かれたら、あなたの所へ來て、私のお父さんはと問はれるでせう……その時あなたは何とお答へなさる？――マグダさん初めから心に安心のないものは、一生その心を持ち直すことが出來ないものです。

マグダ　それは噓です、みんな噓です……若しそれが本當なら――私にだつて心はあるぢやありませんか？――私だつて自分の生活を持つてゐるぢやありませんか……私が私の滿足を求めることが出來ないでせうか？

牧師　(はげしく)いや、いや、決してさうは行きません。併しやりたければ、思ひ通りにやつて御覽なさい。家を亡ぼ

し、父を亡ぼし、妹も兒どもも亡ぼして、それで尙やれるものなら、やつて御覽なさい、あなた自身の滿足を、求めて御覽なさい。

マグダ　（顏を伏せて啜り泣く）

牧師　（マグダの方へテーブル越し身を延ばし、手で髮を撫で憐む如き樣子で）おかわいさうに――

マグダ　（その手を取つて）ねえ、あなた、聞かせて下さい――あなたは私の爲に生涯の幸福を犧牲にして下すつたでせう？それで今も――私の過去はよし何うならうとも、私にその犧牲を受ける値打があると思つていらつしやるか？

牧師　（懺悔でもするやうに固くなつて）先程申し上げた通り、私も言はど――あなたと同じ罪の人です。

マグダ　（しばらく間を置いて）あなたのおつしやる事なら、何んな事でも爲ませう。

牧師　ありがたうございます。

マグダ　ではさやうなら！

牧師　さやうなら！（去る、マリイと、話て中へ這入らせるのが戶の明てる所から見える）

マグダ　（兩手を顏にあて、牧師の去るまで身動きもしないでゐる）

第六場

マグダ　マリイ

マリイ　何うしたらいゝんでせう、姉さん？

マグダ　牧師は何處へ行つて？

マリイ　お庭でお母さまと話していらつしやいます。

マグダ　お前ね、お父さんが私をお探しなすつたら（左手を顎で示して）あすこでお待ちしてゐますと言つてお呉れ。（去らうとする）

マリイ　それから私には――何にも言つて下さらないの？姉さん。

マグダ　あゝ、さうか？何にも心配することはありませんよ（額に接吻する）もう、すつかり都合よく行つたのだから……すつかり都合よく……いえ、いえ、いえ（疲れた苦々しい氣持で）もう、すつかり――都合よく行つたのだから――（左手へ出て行く。マリイは食堂の方へ行く）

第七場

シュワルツェ　（續いて）マツクス

シュワルツェ　（入り來たり、ピストル箱を出してそれを開き、一挺のピストルを取り出す。やつと打金を引き筒を廻し、壁の一點に覘ひを定めて見る。腕が激しく震へて居る。怒つてその腕を叩き、ピストルを下げる。そこへマックス入り來たる、シュワルツェは振り向かないで）誰だ？

マックス　叔父さん、僕です！

シュワルツェ　マツクスか、あゝ、はいれ！

マックス　叔父さんマリイさんがね――何うなさるんです、そのピストルは？

シュワルツェ　みんな役に立つたピストルだ――よいピストルだ。な、俺は是れで二十歩の距離からハート札の一點でも射ぬいたものだが――併しまあ十五歩がな……十五歩なら充分だ……今に庭へ出てそれを見せてやるのだ――併し――併し(たより無さゝうにその震へる腕を撫で殆ど涙ぐんで)併し、もう駄目だ――

マックス　(シュワルツェの方へ急ぎ行つて)叔父さん！(暫く互に相抱く)

シュワルツェ　おゝ、おゝ、大丈夫――大丈夫！

マックス　叔父さん、僕があなたに代つてやつて見せます、指でさして下さい、誰れでも僕のピストルの前に立たせて見せます、當然ぢやありませんか？それが僕の權利です。

シュワルツェ　お前の――どうして？何の緣故で？――お前は、この汚れた一族と結婚をする氣か？――えゝ？

マックス　叔父さん？

シュワルツェ　そして、隊の軍服を釘にかけて、平服に着かへやうといふのか？――さうなると、まあさしあたり一緒になつて博打宿でも開業するか、それとも商人の仲間入でもするか……何にでもなるだらう……お前のその美しい立派な家名を犧牲にして、俺がそのお陰を蒙つて、へつ、へつ、へつ、……いかん／＼、お前はさうしやうと言つても、俺がさせん……此の家も、中に居る者も、もう皆な零落するやうになつてをる。お前は獨りで行きたい方へ行くがよい。シュワルツェの家と緣故などは決してつけるなよ。

マックス　叔父さん、是非とも僕は――

シュワルツェ　待て／＼！今でなく(戸の方を指して)……ぢきに友人としてお前の助を借る必要が生じて來やう、併し今ぢや

あない、今ぢやあない。第一にあの男に逢はなくてはならなん……家に居なかつた、あの男、家に居なかつた……――併し俺を避ける氣では無からう。若し二度目にまた留守だつたら、その時お前の仕事が始まるのだ……それまでは辛抱して居れ……辛抱して居れ！

テレゼ　（廊下から入り來る）參事官のフォン、ケラー樣が入らつしやいました。

シュワルツェ　（驚く）

マックス　やつて來ました、さあ――

シュワルツェ　こちらへ通せ（テレゼ去る）

マックス　叔父さん！（非常に興奮して自分を指す）

シュワルツェ　（頭を振る――目くばせで室を去らせる）

第八場

シュワルツェ　ケラー

ケラー　（マックスと出會ふ、ケラー丁寧に禮をする、マックスは此奴といふ氣合を抑へて出て行く）中佐、先刻は失禮いたしました、ちやうど出違つて、お目にかゝりませんで。倶樂部から歸つて參りますと、えゝ、僕はいつも倶樂部に居ることに極めて居りますので――あちらなら必すお目にかゝれたのでございますが――宅へ歸つて參つて御名刺を拜見いたしました、こやうな譯で――何か重大事件の御話だらうと察しまして、早速急いで、出て參つた次第で……。[illegible]――何か大急ぎと云ふ事で、

た次第でございます――

シュワルツェ　あゝ、参事官、この家にはもう君に薦める席は無いかも知れんが、併しそんなに急いでお出でなすつたのだから疲れてお出でだらう、何うかおかけ下さい。

ケラー　有りがたう（開いたまゝのピストル箱の傍に坐り、中を見て驚くそしてシュワルツェの方をじつと見て、氣のついた樣子で）ふむ！

シュワルツェ　そこで君は、何か俺におつしやる事はありませんか？

ケラー　まづ伺ひたいのは、お孃さんが、その後私に關して何かお打明けになりましたか？

シュワルツェ　參事官、君は何か俺におつしやる事はありませんか？

ケラー　あ、それはもう澤山申上げる事がございます。例へば、喜んで申上げたいと思ふ或る希望がございます、お願がございます――けれども果してそれが……兎に角この一點だけお聞かせ下さいますまいか、お孃さんのお話は、私に取つて結局善い方でございますか惡い方でございますか？

シュワルツェ　（怒つて）君？何と思つて居られる、俺等二人は今こゝで、如何なる地位に立つて居るか――俺は如何に君を遇すべきであるか、御承知か？

ケラー　あ、どうも失禮いたしました、それで御趣意がよく分りました、（段々調子づいて）中佐、私は人生を眞面目に考へる人間でございます……若い時代には血氣にまかせて――（シュワルツェ怒りの眼で見あげる）あ、御免下さい、私の申上げやうと存じますのは、今朝から一種の神聖な、そして――言つて見れば――喜ばしい決心が私に生じて來たのでございます。中佐、私は決して駄辯を弄するものではございません、斯んな事を申すのが既に要點を逸して居る譯でございます

が、私は名譽を重んずる男子が名譽を重んずる男子に對する、若しくは——簡短に申しますと、中佐、私はお孃さんの手を把ることをお許し下さる名譽を擔ひたいのでございます。

シュワルツェ　（じつと坐つたまゝ重い息づかひをし、涙を呑む）

ケラー　失禮ですが、御返事下さいませんのは……到底私がその名譽に相當しないのでございませうか——？

シュワルツェ　（ケラーの手を採りながら）いや、いや、いや、さういふ譯ではない——俺はもう老人の事だ……先程から少し考へすぎて居つたのでな……何うか、氣にかけないで置いて下さい。

ケラー　ふむ、ふむ！

シュワルツェ　（立ち上り、ピストル箱の蓋を閉ぢて）握手させて下さい。君のお蔭でひどい心配をしたが——全くひどい心配をしたが——併し君は男らしく突進して、それを圓滿に治めなすつた。さあ、そつちの手もお出しなさい。——さう——さう！それで君は、娘とお話になる事がありませう？澤山話がある筈だ——えゝ？

ケラー　どうか、お許し下さいますなら。

シュワルツェ　（廊下の戸をあけて何か言ひ、後、左手の戸をあけて）マグダ！

第九場

前の人々　マグダ

マグダ　何でございます、お父さん？

シュワルツェ　マグダや。此の方がお前の手を――（言ひかけて二人を見くらべ、苦々しい氣持に制せられて、腹立たしげな眼光を二人の上に注ぐ）

マグダ　（心配げに）お父さん！

シュワルツェ　な、もう、すつかり落着したぞ！――此のうへ長びかすなよ！……（一層多くマグダに對して）もう、すつかり落着したぞ。（出て行く）

第十場

ケラー　マグダ

ケラー　あゝ、マグダさん、斯ういふ結果にならうとは、夢にも想はなかつた事ですねえ！

マグダ　私たちは結婚するのですね。

ケラー　何よりも、どうか誤解して下さらないやうに。斯ういふ結果になつたのは、決して私が巧んでやつた事でもなければ、過つてやつた事でもないのですから。勿論斯うなつたのを私は喜んで歡迎してゐるものですが――

マグダ　私はあなたを責めて居るのぢやありません！

ケラー　さうでせうとも、あなたに其の理由は無い筈だから。

マグダ　えゝ、少しもありません。

ケラー　それから何よりも、まづ申上げて置きたいのですが、私は此の年月、衷心から、神の引合せで今一度あなたと一

緒になれるやうにと願つてゐました。

マグダ　では、私を愛していらつしやることは、そののち少しも變らなかつたとおつしやるのですか？

ケラー　いや、さうは、名譽にかけて斷言する譯に參りません、誇張に流れる嫌ひがあります……けれども、今朝から私には一種の神聖な、そして——そして——喜ばしい決心が湧いて來ましてね——

マグダ　ちよいとお待ち下さい、その神聖な喜ばしい決心とおつしやるのは、萬一私が貧苦に窘れて墮落して歸つて來ても、同じやうにあなたに湧いて來るでせうか？

ケラー　どうか、マグダさん、私は地位を漁るものでも、持參金を漁るものでもありません。けれども私の身分や位置が何ういふ責任を有してゐるかといふ事は、考へなくちやなりませんからね。若し是れが斯ういふ事情でなかつたら、我々の關係を正しいものにするといふ事は、到底社會的に不可能な事なのです。

マグダ　では十年といふ長いあひだ、私は知らず〳〵そんな高尙な目的に向つて働いてゐたのですねえ、仕合せものですわね。

ケラー　感じ過ぎるのかも知れませんが、何だかそれぢやあ、皮肉を言つてらつしやるやうに聞こえます。そしてどうも——

マグダ　細君に適してゐるとは思へないとおつしやるのですか？

ケラー　(しよげて)あゝ！

マグダ　まあ、大目に見て置いて下さいな。勘忍づよい、辛抱のいゝ細君なんて役は、私には初めてなのですから。將來の事も相談して置かうぢやありませんか（腰をかけ、ケラーにも坐れと手で合圖する）——將來の事——何っしやっとあ

なたはお考へすなつて？

ケラー　さあ、その事ですよマグダさん、私は大計畫を持つてゐるのです。こんな片田舍にゐては、到底私の手腕を揮ふ餘地が無い……のみならず、あなたの爲にも、その社交的手腕を發揮させるに好都合な地位を作るのが私の義務です！そして、もう舞臺や音樂會に出ることは廢めて了ふ――それは言ふまでも無い事でせう。

マグダ　さう――言ふまでも無い事でせうか？

ケラー　けれども、ねえ、あなたにはまだ事情が分つてゐないのだ……それを廢めないと私の邪魔になるのです――あ、それが廢められなければ、私がその場で職を拋つ外はない。

マグダ　拋つてお了ひなすつたら？

ケラー　そんな事を言つて、眞面目ぢやあないでせう？奮闘的な、功名心の盛んな人間が、前途に希望の光を認めながら地位も名譽も拋つて、細君のお供になつてごろ〳〵してゐる――たゞ妻の夫といふだけで生きて行く、そんな事が出來るでせうか？あなたの爲に樂譜めくりでも勤めるか、それとも勘定場に坐つて入場券でも調るか？いや〳〵、あなたは餘りの私の人物と地位とを輕く見すぎていらつしやる。けれども御心配には及びません。後悔なさることは無い……あなたの是れまでの成功に對しては、あらゆる尊敬を拂つてゐます、たゞ――(丁寧に)あなたが婦人の功名心で望んでゐらつしやる最高の報酬は、應接間でのみ得られるものですよ。

マグダ　(ひとり言のやうに)まあ私は一體何をしてゐるのだらう。

ケラー　何ですつて？

マグダ　(頭を振る)

ケラー！　それから、ねえ、細君といふものが、理想的細君といふものが、近世の要求では、夫に對する全くの相手でなくちやなりません、自分を犠牲にして厭はない本當の助手でなくちやなりません——私に例を取つて見ると、あなたがその立派な容貌と、人を魅する歌の力とで私の敵を征服して下さる、私の味方を一層密接に引きつけて下さる。そして我々が大社交界を率ゐて、我々の家を其の中心にして行く、有名な社交界の人々は、みなそこに集つて來る、其の連中は、すべて祖先傳來の、嚴格な優美な風習を守つてゐる人たちで——もつとも嚴格と優美とは一見矛盾するやうですが、必ずしもさうでないのです。

マグダ　あなたは兒どもの事をお忘れなすつたでせう？　私たち二人が一緒にならうといふのも兒どもの爲ですよ、その兒どもが居て、嚴格な風習とやらの人たちが寄りつくでせうか？

ケラー　さう〳〵、——それは——分つてゐますさ、あなたは辛いだらう、けれどもその兒は、言ふまでもなく私たち二人の仲の大秘密にして置かなくちやなりません。誰れも氣のつくものはないから——

マグダ　（思ひもがけない樣子で、半信半疑に）え、何ですつて、何とおつしやるの？

ケラー　でも、それがあつては、私たちの身を亡ぼす本です？　そんな事を考へるのが既に無法です！　けれども——えゝ、年に一度ぐらゐづゝ、ちよつとした旅行をして、育てさせてある兒どもを見に行くことは出來ます——宿帳には何か假名を書いて置けばいゝ、そんな事は外國では珍しくない事で（考へて）また罪になるほどの事でもない——そして我々が五十歲に達して他の法律上の條件が具備したら——（笑つて）その事を片つけて了ふ、それでいゝでせう？——つまり、何等かの名義の下に、養子にするのです——いゝぢやありませんか？

マグダ　（突き通すやうな笑ひ聲を上げ、手を拍ち額を見つめて）あのかわいゝ！　かわいゝ私の兒をMio bambino! Mio povero

him――(私の兒！私のかわいさうな、――)私、この男を――この男を――は、は、は、は、は、――出ていらつしやい、出ていらつしやい(疊戸をあけやうとして)出ていらつしやい！

第十一場

前の人々　シュワルツェ

シュワルツェ　何事だ？

マグダ　おゝ、お父さん！早く此の人を出して下さい、此の人をつれて行つて下さい。

シュワルツェ　何事だ？

マグダ　私、出來るだけの事は盡しました、あなたのお望通りにしたのですよ、自分の誇りも見識も捨てゝ……羊のやうになつて屠殺場へ牽かれて行きました……けれども、兒どもだけは、私、棄てられません……此の人の立身のために、私があの兒を棄てるなんて、そんな事があるものですか。(肱掛椅子に身を投げかける)

シュワルツェ　フォン、ケラーさん、何うか俺に――

ケラー　いや、中佐、私は當惑して居ります。併し私が、双方の利益を計つて提出いたしました條件は、御同意を得ませんで――

シュワルツェ　娘はもう、自分で自分の條件を選び得る地位には立つて居りません。ですから、フォン、ケラーさん、何うか、飛んだ目にお逢はせ申した事は、御容赦下すつて……お宅で暫らくお待ち下さるまいか。俺が自身で娘の同意を得て、御

返事を君に申上げませう。それは屹度俺が受合ひます、俺の名譽にかけてな！（一座動搖する、マグダすつくりと立ちあがる）

ケラー　では、あなたのお考では――えゝ――？

シュワルツェ　（手を差出して）いやありがたう、ありがたう。

ケラー　何ういたしまして。私は、たゞ私の義務を果たしたに過ぎません。

（辭儀をして去る）

第十二場

マグダ　シュワルツェ

マグダ　（身を伸して）さう！是れでまた元のマグダに戻つた。

シュワルツェ　（しばらくじつとしてゐて、後沈默のまゝ二方の戸の錠をおろす）

マグダ　お父さんあなたは、戸を締めたら、私がすなほになると思つていらしつて？

シュワルツェ　さあ！是れでいよ／＼二人きりだ、誰も見ては居らん。たゞ、かしこにござる神さまだけ、ようく見て居つて下さる。……氣を落ちつけてとつくりと話し合はなくてはならぬぞ。

マグダ　（すわつて）分りました！――それで始めて、家と私といふものゝ關係がはつきりして來ませう。

シュワルツェ　俺は今、全く冷靜になつて居るが分かるかい？

マグダ　たしかに。

シュワルツェ　全く冷靜だらう？――腕も今は震へて居らん。まあ出來た事は出來た事として、俺は今、お前の許嫁に約束をしたが――

マグダ　私の許嫁？――まあ、お父さん！

シュワルツェ　あい、お前の許嫁に、名譽をかけて誓つたらう。だから是非ともさうしなくてはならん、な、分かつたか？

マグダ　えゝ、けれど若しそれがあなたの力に及ばなかつたら？お父さん。

シュワルツェ　その時は、死なくてはならん、……その時には、たゞもう――死ぬる計りだ……その場合に生きながらへて居るものは……お前も軍人の娘だから、分かつたらうな？

マグダ　（哀れな氣持で）おゝ！

シュワルツェ　けれども、死ぬる前に、俺は此の家を整理して置きたいと思ふがな、マグダや、凡そ誰れでも自分に取つて、神聖だと思ふものを何かは持つて居る筈だが、此の世の中で、お前の本心に本當に神聖だと思はれるものは、何だな？

マグダ　私の藝術！

シュワルツェ　いゝや、まだ／＼、もつと神聖なものがあらう。

マグダ　私の兒ども！

シュワルツェ　さうだ、お前の兒ども……お前の兒ども……それをお前はかわいいと思つて居るか？（マグダうなづく）復た逢ひたいと思つてをるか？（マグダうなづく）そして――その――お前がその兒の頭に手を置いて（兒どもの頭に手を置くやうな動作をする）誓ひをする場合には、一毫も僞りは交へまいな？

マグダ（微笑しながら頭を振つて見せる）

シュワルツェ　おゝ、それで分つた！（立ち上り）茲で一つ、その兒の頭に手をかけて、俺に誓をして呉れい、その兒の父たる人に、立派な妻となるといふ誓をして呉れい、それが出來なければ――俺等二人は、生きて此の部屋は出まいぞよ！（肱掛椅子に倒れ沈む）

マグダ（ちよつと沈默の後）かわいさうに、お父さん！どうしてあなた、そんなに苦しい思ひをなさるの？あなたは、斯うして戸をたて切つて置いたら、○○○○○○○○○○○○○たらうとお思ひなすつて？……それは駄目ですよ。

シュワルツェ　まあ、見てお出で。

マグダ（段々激して）一體あなたは、私をどうしやうとおつしやるのです？なぜそんなに私の事をお勞になさる？……實を言へば、○○○○○○○○○○○○○○○？

シュワルツェ　まあ今に見てお出で！

マグダ　あなたは、私があなたや家のものゝ許しを受けないで、自分の思ひ通りの生活を途つたといふことをお責めなさる。けれどもなぜそれが悪いのでせう？私にはもとから家が無いぢやありませんか、知らぬ他郷へ私を逐ひ出して、自分で稼いで自分で生きて行くやうになすつたのは、あなたぢやありませんか？そしてその生きて行く道があなたの好みに合はないと言つて、私を突き放しておしまひなすつたでせう？誰れを私は害したでせう？誰れに對して私は罪を犯したでせう？……それも私がマリィと同じやうに箱入娘で育てられて、家の屋根下にでも居なければ、何でもない人間になり何にも出來ない人間になつて、父の手から眞つすぐに夫の手に渡されて、家から凡てのものを給して貰つて、食物も、思想も、性質も、何もかもみんな家からあてがはれて、ねえ、あなた、それで育てられたわたしなら、それこそ、○○○○○

〇〇もありませう、そんな人間だと、ほんのちよつとした過ちで、もうすぐ全體が傷物になります——良心も、名譽も、自尊心も、みんな傷ついて了ひます……けれども私は何うでせう？よく見て下さい……獨立した自由な女ですよ……久しいあひだ、世界をうろつき廻つて我れと我が手で働いて生きて來た、あの、家もない放浪の人たちと、同じ道をあるいて來た私ですよ……若し〇〇〇〇、私たちを饑えさせる權利があるなら——そして私は現にその爲にかつえたぢやありませんか、——〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、なぜ私たちには、男を愛する權利が無いのでせう？なぜ私たちには自分の幸福を求める權利が無いのでせう？

シュワルツェ　お前は自分が獨立した大藝術家だといふので、一切世間構はずやつて行かうと——

マグダ　いゝえ、藝術家なんて事は問題外ですよ！お針や女中と少しも違つちやゐません、同じやうに他人の中に立ちまじつて、僅かばかりの食物とちよつとした愛を求めて生きて行く女です——それがまあ、何といふ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇でせう？たゞ私たちを困らせて、幸福も與へなければ、隱家一つも與へては吳れない、そして寂しい獨りぽつちの私たちを〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇私たちは隅の方に小さくなつて、音なしくして待つてゐなくちやならない、何時かは、えらい男が向ふから愛を求めて來るかも知れない、それまでじつとして待つてゐなくちやならない……待つてゐるのです？さうしてゐる內には、精神も肉體も、生きて行くための戰ひに疲れ果てゝ了ふ——眼の前には絕望と悲しみの外なんにも殘りはしない、それでやつぱり、私たちは、此の若い心と溢れるやうな力を誰れに遠慮もなく愛する男に捧げてやるのが惡いでせうか？心から愛する男に捧げてやるのが惡いでせうか？——いつそ私たちに猿轡でも、おはめなさいな、神經を利かなくしたらいいでせう、女部屋か尼寺にでも閉ぢ籠めてお了ひなさい——
——それが一番いゝ方法です！——けれどもねえ、一旦、自由を私たちに與へて下すつた以上は、それを私たちが〇〇〇〇

○○○○○○○○○○○○○○○○○のは間違ですよ。―

シュワルツェ　あゝ、それだ！今の世間に廣がつてゐる○○思想がそれだ！お前――マグダや、お前どうか一言俺に聞かせて呉れい、お前の今言つた事は、あれはみんな眞面目ぢやないと言つて呉れ――お前は――お前は――俺をかわいさうだと思つて呉れ――若しか――（ピストル箱の方に眼をやつて）何んな事になるか分らんから……マグダや、俺を憫んで呉れい！

マグダ　お父さん、お父さん、静にして下さい、私、もう聞いて居られないから。

シュワルツェ　いかん、いかん……そんな事は出來ない……（やはりピストル箱の方を見て）それをあつちへやれ、あつちへやれ！

マグダ　何ですつて？お父さん

シュワルツェ　何でもない、何でもない。それよりか――最後に今一ど聞くことがあるが――

マグダ　まだそれを言ひ張つていらつしやるの？

シュワルツェ　是れ、マグダ、よく聞いて呉れ、俺には、その外にもう道は無いではないか。

マグダ　えゝ、あなたはその外の道を私に殘して下さらなかつたのですよ。もう、ようござんす……それで、あなたは、首に綱をつけても私をあの人の所へ引つ張つて行かうとおつしやるのですか？……（シュワルツェ聞耳を立てる）あなたのお眼鏡で、私をあの人に相當するものと御覽なすつたの？（躊躇して、當てどなく眼を据え）ねえ、お父さん、是れまでに私が身を許した男は、あの人一人だと思つていらつしやるの？

シュワルツェ　（ピストル箱を手探り、一挺のピストルを取り出す）おのれ阿魔め！（マグダの方へ身を進め、ピストルを差

つけやうとする、途端に椅子に仆れかゝり、身動きもしないで眼を見張つてゐる、ピストルを握つた手はそのまゝ垂れ下つてゐる)

マグダ　(聲高く叫んで)お父さん！(煖爐の方へ逃げて父のピストルを避けやうとする、そして顏に兩手をあてたまゝ二三歩進み)お父さん！(膝を椅子の上につき、顏を椅子の背にあてゝ沈む。戸の外で呼ぶ聲及叩く音が聞え、やがて戸が破り開かれる)

第十三場

前の人々　牧師　マックス　シュルツェ夫人　マリイ

シュルツェ夫人　あなた、何うなすつたんですよ？　あなた(牧師の方へ)あゝ、また何時ものですよ！

マリイ　お父さま　お父さま、一言返事をして下さい！(右手に身を投げ伏す)

牧師　急いで醫者を呼んで下さい、マックス君。

マックス　一時の發作でせうか？

牧師　さうらしいです？

マックス　(出て行く)

牧師　(小聲でマグダに)お父さんの方へいらつしやい(マグダ躊躇する)傍へいらつしやい。是れが御最期かも知れません(悶へ震へてゐるマグダをシュワルツェの椅子の方へ寄らする)

シュワルツェ夫人　（ピストルを取り離さうとして）お放しなさいてばねえ！こんなもので何をしやうとなさる？――御覧なさい、ピストルを握つたまゝ、どうしても放さないんですよ。

牧　師　（低い調子で）痙攣けてゐるのです、放せますまい……あなた、私の言つてる事が分りますか？

シュワルツェ　（頭を少し垂れる）

マグダ　（父の左手に沈む）

牧　師　大慈悲の神が、天からあなたを召されました。あなたはマグダさんに捌きを與へる人ではありますまい……それよりか許すといふ一言のしるしをお與へなさらないか？

シュワルツェ　（ゆるく頭を振る）

マリイ　（マグダの傍に沈んで）お父さま、姉さんの身を祝してあげて下さい、ね、お父さま！

シュワルツェ　（顔に微笑が浮んで和かな顔つきになり、ピストルが手から落ちる、ゆるく手を上げてマリイの頭に置かうとする時、體中に痙攣が起る、手は再びもとへ下り、頭、前へ沈む）

シュワルツェ夫人　（叫んで）あなた！

牧　師　（夫人の手を取つて）いよ／＼天へ歸られました……（兩手を疊み、默して禱りをする、其のあひだ、婦人等の啜り泣く聲）

マグダ　（飛び上るやうに立つて、絶望の樣子で兩手を高く差し伸べ）あゝ、歸つて來なければよかつた！

牧　師　（マグダに靜にしてゐよと手眞似で合圖をする）

マグダ　（それを誤解して）あなたは、もう私を逐ひ出さうとなさるのですか？……父は私が死なせたも同じ事です、――

せめて、殘つてゐて　野邊送りがしたいと思ひます。

牧　師　（簡單に穩かに）　お父さんの柩に禱をお上げなさるのを、誰れも止めるものはありますまい！

マグダ　あゝ、お父うさん、お父うさん！（父の屍の前に泣き伏す）

牧　師　（じつと見て靜に）マグダさん

マグダ　（氣がついたやうに頭を上げる）

牧　師　御覽なさい、是が獨立した自由な女の齎らした結果です……獨立と自由の外に犧牲の精神のない……あなたが世間は皆な獸だと仰しやつたのもそれではありませんか、神の御言葉には愛と犧牲の二つしかありません、マグダさん、あなたはお子さんが可愛いとおつしやる、それでゐて何ぜお父さんのあなたに對する恩愛を思ひやつてお上げなさらない？あなたの御子さんが若しあなたと同じやうになられたらあなたの運命は何うなるでせう？

マグダ　あゝ、もう分りました、何にも言はないでゐて下さい、わたし、もう堪えられません。

牧　師　ではマグダさん、今一度親子の愛にお歸んなさい、人間の愛にお歸んなさい、あなたは獨立した自由な女だと仰しやりながら心の底に矛盾した煩悶を持つてらつしやるではありませんか。淋しいのでせう？愛に飢えていらつしやるのでせう？、まことの自由はやはり愛の花園にしか求められません。

マグダ　あゝ……どうか……もう何も……

牧　師　愛の爲に身を果たされたお父うさんを御覽なさい、此の家庭はこれから何うなるでせう、お母さんやお妹御は、何うなります？中佐の靈魂もこのまゝ安んじて眠られませうか？

マクダ　あゝ（恐怖の表情）

牧師　お父うさんの死を無駄になさらないやうに……

マクダ　（良心の呵責に苦しみ）みんなわたしの罪です、あなたのお指圖に從ひます。

牧師　ありがたうございます。では御一緒に神の赦しをねがひませう。そして中佐の爲に祈りませう。

マクダ　（無言のまゝ祈禱する）

（幕しづかに下る）

人形の家

（イブセン原作）

明治四十四年九月二十二日から三日間、文藝協會はその研究所の舞臺開を兼ねて、第一回私演に此の脚本を演じた。但しこの時は第一幕と第三幕のみで、中間の幕が省かれたため、劇全體としての印象は不完全たるを免れなかつたが、それでも我が國に於いては新劇として殆ど前例のない程な成功を得、引きつゞいて同年十一月二十八日から一週間、同協會第二回公演として、帝國劇場で『人形の家』三幕全部を上場した。

これが我が國に於ける『人形の家』の最初の興行であると共に、廣く近代劇としても、在來の女形と稱する男優を用ひず、女優を主として成功した眞面目な劇の最初である。その時の役割は

ヘルマー……………………土肥庸元
クログスタッド……………東儀季治
ランク………………………森　英治郎
使の男………………………西原勝彦
子供……………………{きよ子 / ていて子}
エレン………………………横川唯治
アンナ………………………佐々木積
リンデン夫人………………廣田濱子
ノラ…………………………松井須磨子

同じ一座は、翌明治四十五年三月十四日から一週間、大阪中座で同じく『人形の家』を開演し、これまた好成績であつた。

『人形の家』の歴史は大體以上のやうなものである。

大正二年三月

人物

トルヴルド、ヘルマー (Torvald Helmer)

ノラ(ヘルマーの妻) (Nora)

醫師ランク (Doctor Rank)

リンデン夫人 (Mrs. Linden)

ニルス、クログスタッド (Nils Krogstad)

ヘルマー家の三兒

アンナ(三兒の保母) (Anna)

エレン(女中) (Ellen)

使の男

場所

ノルウェーの首都クリスチアニアなるヘルマーの家（大建物の内部を幾家屋かに仕切つた一つ）

第一幕

居心地よく趣味に富んで、それで贅澤でない設備の一室、奥、右手は廊下へ通ふ扉、左手はヘルマーの書齋へ通ふ扉兩入口の中間にピアノが一臺置てある。左側の壁の中程にも扉、それから前に寄つて窓、窓の傍に小さい圓テーブル、二三脚の肱掛椅子、小さい一臺のソーファ。又右側の壁には少し奥に寄つて扉、ずつと前に寄つて瀨戸で疊んだストーヴ、その前に二脚の肱掛椅子と一脚の舟底椅子とがあつて、ストーヴと扉の中程に小さいテーブル、双方の壁には版畫が懸つてゐる。置棚には陶器、骨董品など、又見事な釘裝の書物を詰めた小さな本箱が据ゑてある。敷物は絨氈、ストーヴには火が燃えてゐて冬の日である。

廊下の方でベルが鳴ると、すぐ外の扉の明く音がして、ノラがはしやいだ樣子で鼻唄を唄ひながら這入つて來る。外出服のまゝで、幾つかの小包を提げてゐる。それを右手のテーブルの上に置く。廊下への扉は明け放したまゝで使の男の立てゐるのが見える。其の男は持つて來たクリスマス、ツリーと提籠とを戸を明けに出た女中に渡す。

ノ　ラ　そのクリスマス、ツリーをよく隱してお置きよ、エレン。晩にすつかり火を點すまでは、兒共等に見せちやいけないよ。(金入れを出しながら使の男に向つて)幾ら?

使の男　二十五錢。

ノ　ラ　はい、五十錢。いゝえ、おつりは取つてお置き。(使の男禮を言つて去る。ノラは戸を閉めて、默つて嬉しげに、にこ／＼し續けながら、外出仕度のものを脫ぐ。隱しから一袋のパン菓子を取り出し一つ二つ喰ひながら、夫の居る室の

扉の側へ爪立足で歩み寄り、聞耳を立て)さうよ、家に居てよ。(右手のテーブルの方へ行きながら又鼻唄をはじめる)

ヘルマー　(自分の室で)

そこで囀つてるのは家の雲雀かい。

ノ　ラ　(忙しげに手近の小包を開きながら)　さうですよ。

ヘルマー　跳ね廻つてるのは栗鼠さんかい。

ノ　ラ　えゝ

ヘルマー　栗鼠さん何時歸つて來たんだい?

ノ　ラ　今歸つたばかし。(パン菓子の袋を隠しに忍ばせ、口を拭ふ)入らつしやいよ、あなた、買物をして來たから御覧なさいよ。

ヘルマー　うるさいな。(暫くして扉を開けペンを持つたまゝ此方を覗いて)　買物をした?　えゝ!　それを皆んなかい?
家の無駄使家が又お錢を撒き散して來たね。

ノ　ラ　だつて、あなた、もう可いわ、少しぐらゐお錢をつかひに出かけたつて。やつとクリスマスが樂に出來るやうになつたんですもの。

ヘルマー　おい〳〵、無駄にお錢を使つてよくはないよ。

ノ　ラ　いゝんですよ。少しでいゝから無駄づかひをさして頂戴、極少こしでいゝから。ね?あなた、今に山ほどお金を儲けるんぢやありませんか。

ヘルマー　そりや新年からはさうだが、併し、給料の手に入るまでには、まだ全三月もあるからな。

ノ　ラ　構ひませんわ。その間借金して置けば。

ヘルマー　ノラ！（女の方へ行つて、戯れに耳を引つ張り）相變らず暢氣だなあ。まあ假りに今私が五百圓も借りたとするぜ。それをお前がクリスマスの間に使つて了つて、そして年越しの晩に屋根から瓦が落ちて來て、私の腦天を割つたとする――

ノ　ラ　（男の口に手を當てゝ）しつ！何でそんな恐いことをおつしやる？

ヘルマー　まあさ、さうなつたと假定する――さうすると何うなるだらう？

ノ　ラ　そんな大變な騒になつて、借金の事なんか考へてやしません。

ヘルマー　けれども貸した人は何うする？

ノ　ラ　貸した人？誰れが構ふものですか。赤の他人ぢやありませんか。

ヘルマー　これ、ノラ！お前、何んて女だらう。まあ眞面目に考へて御覽、私の主義はお前も知つてるぢやないか。一切負債をしない、借りをしないといふのが私の主義なんだ。家庭が借りや負債で出來上るが最期、自由な美しい生活といふものは亡ひて了ふ。私達は斯うして今まで踏ん張つて來たんだから、土俵際になつて負けちやあならない。

ノ　ラ　（ストーヴの方へ行きながら）畏まりました――あなたの、お氣に召すやうに。

ヘルマー　（跡につきながら）おい／＼、家の小雲雀はそんなに羽を落として悄げちやおいけない。おや！栗鼠さん、拗ねてるのかい？（金入を取り出し）ノラ、是れは何？

ノ　ラ　（急に振り向いて）お金！

ヘルマー　そうら！（紙幣を幾枚か與へて）無論クリスマスには色んな物の入ることは分つてるよ。

ノ　ラ　（勘定しながら）
五圓、十圓、十五圓、二十圓、まあ！有りがたう、有りがたう、ね。是れだけあれば當分大丈夫ですわ。

ヘルマー　何うかさうして貰ひたいね。

ノ　ラ　實際ですよ、當分大丈夫。まあ此處へ入らつしやいな、買つて來た物を見せますから。非常に安いんですよ。それから。此の新しい服と小さい劍とがイヷールのでこちらの馬と喇叭がボブの。それからエンミーには人形と搖籠、是れは餘んまり平凡でしたけれども、直ぐ毀はしちまふんですからねえ。それから女中達のは着物と襟飾りにしました。もつとも婆やには、も少し善いものが遣りたかつたんだけれど。

ヘルマー　そのこちらの包は？

ノ　ラ　いけませんよ。それは晩まで見せないで置くの。

ヘルマー　あゝ、はあ。それで今度はお前の番だが、何を買つたえ。いたづら家さん。

ノ　ラ　私？ええ、私は何もいらないの。

ヘルマー　馬鹿を言ひなさい。氣の利いたもので何か欲しいものがあるなら言つて御覽。

ノ　ラ　いゝえ本當にいらないの――さうね、ちよいと、あのね――

ヘルマー　ふむ？

ノ　ラ　（男の上着のボタンをいぢくりながら、顏を見ないで）あなた本當に何か買つて下さるつもりなら、あのれ、こらあのれ――

ヘルマー　ふむ、ふむ、言つて御覽。

ノ　ラ　（早口に）お金を下さる方がいゝわ。あなたが呉れやうと思つてらつしやる丈でいゝから。さうすると私、自身で跡から何か買ひますわ。

ヘルマー　だけれど、お前――

ノ　ラ　あら、さうして下さいよ、ね、どうか。さうすればそのお金を綺麗な金紙に包んでクリスマス、ツリーに吊り下けますわ。いゝ思ひ附でせう？

ヘルマー　えゝと、いつも金を撒き散らしてるものを何とか言つたつけな。

ノ　ラ　知つてますよ。無駄つかひ家といふでせう。けれどもね、あなた、何うかさうして下さいよ。さうすると、何が一番先に買ひたいか、私ゆつくりと考へますわその方か利口でせう？

ヘルマー　（微笑しながら）全くさうだ。たゞお前が自分のものを買ふ時までその金を持つて居られゝば可いがさ。みんな家の用だの、くだらない買物だのに無くして了つて、そして私がせびられるんだからな。

ノ　ラ　あら、あなた。

ヘルマー　嘘だといふのかい？（女を片手に抱いて）こんな可愛らしい雲雀が隨分夥しい金をつかふものだ。お前ほどの小鳥を一羽蓄ふ爲めに何れくらゐ金がかゝるか、人に言つたつて本當にはしないからねえ。

ノ　ラ　およしなさいよ、そんな事。私、殘せるだけは殘しますわ。

ヘルマー　（笑ひながら）可かつたね――殘せるだけ殘しますわ――所が一向殘せません。

ノ　ラ　（穩かに滿足の體で、鼻唄、にこ〳〵しながら）ふむ、私のやうな雲雀や栗鼠が何の位お金をつかふか、今に分かるでせうよ。

ヘルマー　お前は不思議な人間だ。丁度お前のお父つさんのやうだ。何時も金ばかり欲しがつてゐて、それで金が手に入ると、もう、指の間からでもこぼすやうに無くして了ふ。何に使ふんだか分らない。が、まあ、いゝさ、それがお前の性分なんだ。血統なんだ、ねえお前、斯ういふ事は遺傳するものだ。

ノ　ラ　お父つさんの性質なら遺傳して貰ひたかつたのが幾つもありますわ。

ヘルマー　私はまた、そんな事は何うでもいゝから、お前はいつまでもお前で居て貰ひたいな。斯うやつて、可愛らしい小鳥のやうに囀つてね。それはさうと――何だな――お前は斯う――何と言つていゝか――斯う、變に怪しいぜ、今日は。

ノ　ラ　私？

ヘルマー　あゝ、さうだ。此方を向いて御覽。

ノ　ラ　（夫の方を見ながら）はい。

ヘルマー　（指で突く眞似をしながら）此奴今日は、可けないといふ物を喰べましたな。

ノ　ラ　嘘ですよ、ひどい人。

ヘルマー　菓子屋をちよつぴりと覗きやしなかつたか？

ノ　ラ　嘘ですよ、あなた、本當に。

ヘルマー　ゼリーを一甜やりはしなかつたか？

ノ　ラ　嘘、誰がそんな事をするものですか。

ヘルマー　パン菓子を一つ二つ摘みやあしなかつたが？

ノ　ラ　嘘ですつてばねえ。

ヘルマー　よし〳〵。冗談さ。

ノ　ラ　（右のテーブルの方へ行く）あなたが可けないといふ事を、何で私がするものですか。

ヘルマー　さうだらう〳〵。それからお前は誓つたつけな――（女の方へ行きながら）ぢやあ、まあお前がたくらんでる事はクリスマスの秘密として取つて置くさ。今にクリスマス、ツリーが出れば、みんな分かる事なのだらう。

ノ　ラ　あなた、ランク先生をよぶことを忘れはなさらなくて？

ヘルマー　忘れちやつた。けれどもいゝよ。無論來るだらう。今日にも來たらさう言はう。それからね、上等の葡萄酒を誂へて置いたぞ。私が何んなに今夜を待ち焦れてるか、お前には想像出來まいね。

ノ　ラ　私だつてさうですわ。兒供が何んなにか嬉しがるでせう、ねえ。

ヘルマー　あゝ、地位は固まるし、金は取れるし、素晴らしい勢だ。考へると實に愉快ぢやないか。

ノ　ラ　えゝ豪勢ですわ。

ヘルマー　お前去年のクリスマスの事を覺えてるかい。全三週間も前から、お前はみんなを驚かさうといふんで、部屋に引込んだまゝ夜中過ぎになつても寢ないでクリスマス、ツリーの花だの、色んな飾りだのを拵へたつけ。私はあの時ほど退屈したことは無い。

ノ　ラ　私はまた退屈する段ぢやあなかつたわ。

ヘルマー　（笑ひながら）
それで結果は何うかといふと、全で形なしでねえ。

ノ　ラ　あゝ、あなたは、またそんな事を言ひ出して、私をからかふつもり？だつて仕やうが無かつたんですもの、猫め

が這入つて來て、すつかり壞しちまつて。

ヘルマー　さうだつたな、可愛さうに。お前は、みんなを喜ばせてやらうと思つて、一生懸命になつたんだから、まあその志だけで澤山さ、兎に角去年は苦しかつたが、それが昔話になつたのは目出たいよ。

ノ　ラ　ねえ、豪勢ですわね。

ヘルマー　もう私も玆に座つてゝ、獨りで退屈してゐる必要もなし、お前だつてその可愛らしい眼や、細つそりした指で夜業をする必要もなしさ——

ノ　ラ　（手を拍ちながら）えゝ、そんな必要も無くなりましたわねえ。全く、考へると豪勢ですよ。（男の腕を取り）だから私、今日はあなたに話しますわ、是れから先何ういふ風にやつて行くといふ私の考を、ね。クリスマスが濟むと——

（廊下の入口のベルが鳴る）ベルが鳴つてよ、（室内を片づけながら）誰か來たんですよ。厄介ですねえ。

ヘルマー　私は留守のことにしてあるよ、忘れちやいけないよ。

エレン　（室の入口で）奥さま、御婦人の方がお出でになりまして、お目にかゝりたいと仰つしやいます。

ノ　ラ　誰れだらう？お通し申しな。

エレン　（ヘルマーの方へ）それからお醫者樣が丁度入らつしやいました。

ヘルマー　書齋の方へか？

エレン　はい。

ヘルマーは書齋にはいる。エレンが旅行服姿のリンデン夫人を通して、跡の扉をしめる。

リンデン　（おづ〳〵とためらひながら）ノラさん御變りもなく。

ノーラ　(不審げに)お變りもなく。

リンデン　お忘れなすつたでせうねえ。

ノーラ　はあ、つい――あ、さう〳〵――たしか――(俄に元氣づいて)まあ何うしたんでせう、クリスチナさん！本當にあなたなんでせうか？

リンデン　全く私なのですよ。

ノーラ　クリスチナさん、まあ、あなたを見忘れるなんて、何うしたんでせうねえ、だけど全つきり――(一層柔かに)あなた隨分お變んなすつてよ。

リンデン　えゝ、さうでせうとも。九年か十年のあひだ――

ノーラ　お別れして、もうそんなになりますかねえ。さうね、さうなりますのね。あゝ此の八年ばかりは、私ほんとに幸福でしたのよ。で斯うして、あなたが入らしつて、よくまあ此の冬空に遙々と出てゐらつしやつたわねえ。勇氣がありますわ。

リンデン　今朝の汽船で着きました。

ノーラ　クリクマスを愉快にしやうと思つてでせう。よかつたわね。えゝ、愉快にやりませうよ。まあそんな物をお取んなさい。冷えるでせう。(手つだひながら)さあ、是でよござんす、火の側でくつろいで話しませうよ。いゝえ、あなたその肱掛椅子におかけなさい。私は此の動く方がよござんす。(リンデンの兩手を取つて)成るほど、斯うやつて見ると、やつぱり昔の懐しい顔ですわね――初めちよつと見た時には、さう思はなかつたけれど――唯少し顔色が昔よりか惡いやうですよ、それから幾らかお痩せなすつたでせう？

リンデン　それにね、お婆さんになつたんですよ。

ノ　ラ　さうね、幾らか年もお取んなすつた――けど、そんなぢやありませんわ――ほんの少うしばかり。（突然話を切り眞面目になつて）おや私何といふ浮つかり者でせう、お喋りばかり爲てゐて――クリスチナさん、勘忍して下さいよ。

リンデン　何をです？

ノ　ラ　（柔かに）あなた、お氣の毒ねえ。わたしは忘れてゐた。未亡人にお成んなすつたのでせう。

リンデン　えゝ、あの人が亡くなつてから三年になります。

ノ　ラ　さう〳〵、私、新聞で見ましたの。それでね、本當はね、手紙を差上げるつもりでしたの。ところが延ばし〳〵して居る内に、色んなことが起こつたもんですから。

リンデン　それは、ノラさん、よく承知してゐますよ。

ノ　ラ　いゝえね、申譯が無いんですよ。でも本當にあなたはお可愛さうねえ。隨分いろんな目におあひなすつたでせう？そして。遺産てなものも無いのですか？

リンデン　何もありません。

ノ　ラ　お兒供さんは？

リンデン　兒供もないんですよ。

ノ　ラ　全つきり何も無いんですね？

リンデン　無いつたら、それこそ、心配の種も無ければ、是れから先何うといふ望一つも殘つては居ないんですよ。

ノ　ラ　（不思議さうにリンデンを見て）だつてクリスチナさん、何うしてさうなんでせう？

リンデン　（微笑しながら髮の毛を撫でて）それは、あなた折々そんな事になるものですよ。

ノ　ラ　全で一人ぼつち！何んなにか心細いでせうねえ、私は三人兒供を持つてるますが可愛いんですよ。今乳母と外へ行つてるますから、お眼にはかけられないけれど　それはさうと、まあ、あなたのお話をすつかり聞かせて下さい。

リンデン　いえいえ。あなたこそ、聞かせて下さいませ——

ノ　ラ　いけませんよ、あなたからお始めなさいよ。今日は私、自分にかまけた話はしたくないんですから。今日はあなたの事ばかし考へて居たいんですから。あ、さう／＼一つだけお話することがありますわ——だけど、もう、お聞きになつたでせう？私どもで大變な出世をしましたことを。

リンデリ　はあ？何うなさいました。

ノ　ラ　まあ何うでせう宅が株式銀行の支配人になつたんですよ。

リンデン　お宅で？ほんとにお仕合せですことねえ。

ノ　ラ　はあ、ねえ？辯護士なんてものは、極まつた宛のない職業ですからね。ちよつとでも暗いとこのある仕事はすまいとなると、尚のことさうですし、宅は勿論暗いことが大嫌ひで、私だつて其主義ですから、到底やり切れませんわ。それで今度は私ども、何んなにか喜んだでせう？新年から其方へ行くことになつてるのですよ。給料もどつさり取れて、配當もあるんですからねえ、是れからは、すつかり今までと違つて、見違へるやうな暮しが出來ます——實際何んな嬉しいこも好きなことが出來るんですよ。あゝ私、本當に氣が浮き／＼して、幸福ですの。お金が澤山あつて、心配事は少しも無し、申分は無いでせう。

リンデン　えゝ、いる丈のものが取れゝばね、幸福に相違ありません。

ノ　ラ　いる丈ちやありませんよ、お金が山ほど——山ほど取れるんですもの。

リンデン　(微笑しながら)　ノラさん、あなたは、いまだに、ねんねえですのねえ。御一緒に學校に行つてる頃から、大變お金をつかふ事の好な方でしたつけが!

ノ　ラ　(靜に微笑しながら)　えゝ、今でもさうですつて、トルヴルドが言つてますのよ。(指にて突く眞似をしながら)けれどもね、この『ノラさん』はみんなが考へてる程馬鹿ぢやあないんですよ。ほんとうは私まだそれほど無駄づかひ家になれる身の上ぢやないんです。夫婦共稼ぎでしたもの。

リンデン　あなたがですか?

ノ　ラ　えゝ、ちよつとした手細工仕事をよ、編み物だの、刺繍だの、まあそんな事とね、(意味ありげに)それから、もつと外の事もしましたの。無論御存知でせうがトルヴルドは結婚するとすぐ役所の方を引きました。といふのは、あんまり立身の見込もなかつたし、お金は段々いつて來ますしね。それや是れやで、結婚した當座一年といふもの、あの人が無理な仕事をしたんですよ。何でも構はないからといふので朝早くから、晩くまで色んな事を爲て、とう〳〵病氣になつて倒れちまつたのです。それで醫者は是非南ヨーロッパの方へ轉地しろといひませう?

リンデン　はあ〳〵、たしかイタリアに、一年、行つてらしやつたでせう?

ノ　ラ　行つてましたの。ですけど、それまでの算段が容易ぢやなかつたんですよ。丁度イヴールが生れたばかりでしてね。それかと言つて止す譯にはゆかないから、まあ工夫をして出かけたんですが、旅行はいゝ旅行でしたよ。トルヴルドの命もそのお蔭で引き留めますし。たゞクリスチナさん、費用が大變でしてねえ。

リンデン　さうでせうとも。

ノ　ラ　千二百弗、といひますと一寸二千四百圓ですわ。隨分でせう?

リンデン　そのお金があつたのですから、結構です。

ノ　ラ　それは私の父の手元から出たのです。

リンデン　成るほどね。あなたのお父つさんは、丁度あの時お亡くなりでしたね。

ノ　ラ　はあ、さうですよ。それで何うでせう、私、行つて看護することも出來なかつたんですよ。イヷールの生まれるのを今日か／＼と待つてた時でしてね、そしてそれが濟むと今度は宅があの病氣で、私はその方へ附きつきりでせう。わたしをあんなに可愛がつて呉れた父ですけれど　可哀さうに、それつ切り會へないで、死んぢまひました。結婚してから一番つらかつたのは、あの時ですわ。

リンデン　お父つさんが一番あなたのお氣に入りでしたつけねえ。でそれからイタリヤへ入らつしやつたの？

ノ　ラ　えゝ、金は出來ますし、醫者は是非といふもんですから、一ケ月ばかりして立ちました。

リンデン　それで、お宅ではすつかりよくお成んなすつたのですか？

ノ　ラ　鍛へたやうに達者になりました。

リンデン　ですけれど――先つきのお醫者さまは？

ノ　ラ　彼の人が何うして？

リンデン　私こちらへ參つた時に、丁度お女中かさう申してるやしませんでしたか？

ノ　ラ　えゝ、えゝ。ランク先生。あの人はね、病氣を見に來るんぢやありません。私どもの親友でして、毎日缺かさずあゝやつて話しに來るんですよ。トルヷルドはその後一日でも病氣で寢ことなんかありません。それから兒供も丈夫で元氣ですし、私も此の通りぴんぴんして居るでせう？（飛び上つて、手を叩き）ねえ、まあ、クリスチナさん、生きてるて、

それで幸福でさへあれば、これほど結構なことはありませんねえ。あら、私まあ、ほんとうに何うしたんでせう。自分の事ばかり喋つてゐて（すぐ前にある足載臺の上に座わりクリスチナの膝に兩手をかけて）何うぞ、ね、怒らないでゐて頂戴。さあ今度は私が聽き手ですよ。實際ですか、あなたはお連れ合を愛して居らつしやらなかつたといふのは？それで何うして結婚なすつたの？

リンデン　その頃はまだ私の母が生きてまして、床へ就いたきり動けなかつたのですよ。で、一方には二人の弟の世話もしなくちやならないし、いつその事あの人から申込んで來たのを幸ひ、身を固めるのが私の義務かと思つたのです。

ノ　ラ　それはねえ。で、その方は金持だつたんでせう？

リンデン　工面が好かつたやうですよ。けれども、やつてる事業が手固く行かなかつたものですから、あの人が亡くなると一緒に滅茶々々に壞れて了ひましてね、塵一つ殘らない目に逢ひました。

ノ　ラ　それから――？

リンデン　それから色々工風しまして、店を開いて見たり、小さな學校もやつて見たり、出來るだけの事はして見ました。この三年間は私に取つちや、長い一續きの戰爭でしたよ。けれども、もうそれも終へました。心配してゐた母は、もう私に用の無い身になつて、墓場へ行きますし、子供たちは實業の方に口があつて、獨立してやつてゐます。

ノ　ラ　まあ！自由な身になつたとお思ひでせうね。

リンデン　いゝえ、ノラさん。何とも言へない淋しいものですよ。誰を宛に生きてるといふぢやなし。（いら〳〵した樣子で立ち上り）私があんな邊鄙に居堪えられなくなつたのもそのためです。こちらへ參つたら、本當に爲甲斐のある仕事が見つかるだらうと思ひましてね、何でもいゝから、私の氣を外へ散らさせない仕事が爲たいと思ひますのよ。何か樣まへた

勸め口でもあればいゝんですがねえ——會社へでも出るやうな——

ノ　ラ　だけどクリスチナさん、そんな事は氣の詰るものでせうよ。あなたは大變疲れてゐらつしやるやうだから、それよりか溫泉にでも行つて保養した方がよござんせう？

リンデン　（窓の方へ行きながら）私にはお金を出してくれる父も居りませんし。

ノ　ラ　あら、お氣に障つたら御免下さいよ。

リンデン　（ノラの方へ行きながら）ノラさん、ねえ、私こそお氣に障つたら御免下さいよ。私のやうな不幸な身になりますとね、氣むつかしくばかりなりましてね。誰を宛ともなく、それで居て、いつも油斷しては居られないし。第一生きて行かなくちやなりませんから、何うしても利己主義になります。先つきも、あなた方がお仕合な身分にお成りだと聞いた時は申すもお恥かしいのですが——私、あなた方よりも自分の爲に、まあ、よかつたと思つたのですよ。

ノ　ラ　と言ひますと？　あゝ、分りました。宅があなたの爲に盡力して呉れやうと仰つしやるのでせう？

リンデン　はあ、さう考へたのですよ。

ノ　ラ　盡力させますとも。その事はすつかり私にお任せなさい。私が何かあの人の氣の向くやうに甘い事をこしらへて、見事にやらせて見せます。ほんとに、まあ、私、何かあなたのお爲になるやうな事がしたいわ。

リンデン　美しい御親切ですわねえ。美しいと言へば、あなたの御氣性はほんとに美しい。浮世の荒い波風に揉まれて居らつしやらないから。

ノ　ラ　私が？　揉まれて居ないんでつて——？

リンデン　（微笑しながら）さうですね、少しばかりの手細工仕事、くらゐのものでせう？　全くのねんねえでゐらつしや

るのですよ。

ノ　ラ　（頭を立て室内をあるく）　おや〳〵、そんなにねんねえ扱ひにするものぢやありませんよ。

リンデン　ぢやあないんですか。

ノ　ラ　あなたも外の人と同じことねえ。みんな寄つてたかつて、私を全で眞面目な事の出來ない人間にして了つてよ。

リンデン　それはね――

ノ　ラ　私、この窮窟な世間の苦勞を全で知らないと思つてゐらつしやるのね。

リンデン　だつてノラさん、あなたは今、是れまでの苦勞をみんなお話しなすつたぢやありませんか。

ノ　ラ　ほゝ、――あんなつまらない事！（柔かに）私まだ大事件をお話して居ませんわ。

リンデン　大事件ですつて？何んな事？

ノ　ラ　あなたが私を見くびつて居らつしやるのは知つてますけれどね、あなたにその權利はなくつてよ。おつ母さんの爲に長い間一生懸命お働きなすつたといふのが、あなたの誇りでせう？

リンデン　私決して人樣を見くびりなんか爲ません。もつとも、私が母の最期を安樂にさせたと申すことは、考へると嬉しくもあり、誇りとも存じてゐます。

ノ　ラ　それから、あなたの御兄弟の爲めにお盡しなすつた事も誇りでせう？

リンデン　當然ぢやありませんか。

ノ　ラ　無論ですとも、で、今度は私の番ですがね私も嬉しく思つて、誇りにしてゐる事があるのですよ。

リンデン　さうでせうとも。何うかそれを聞かせて下さい。

ノ　ラ　しつ！大きな聲をしちや、いけませんよ。トルヴルドが聞かうものなら大變です。あの人には何んな事があつても聞かせられない事なんです――誰にも知らさないで――たゞあなたに許しですよ。

リンデン　何んな事でせう？

ノ　ラ　まあ此所へ入らつしやい。（自分の傍へ、ソーフアに座らせて）さうですよ――私誇りにして喜んでゐる事が一つあるのですよ。トルヴルドの命を救つたのは私です！

リンデン　命を救つたと仰つしやると？何うしてゞす？

ノ　ラ　私どものイタリアに行つた事はお話ししたでせう？あの時若しイタリアに行かなかつたら、トルヴルドは死んで了つたのですよ。

リンデン　はあ――それで、あなたのお父つさんがお金を下すつて。

ノ　ラ　（微笑しながら）えゝ、トルヴルド始め、みんなさう信じてゐますけれどね――

リンデン　けれども、何うしました？

ノ　ラ　父は一錢も呉れたのぢやありません。私がそのお金を拵へたのです。

リンデン　あなたが？すつかりそのお金を？

ノ　ラ　千二百弗。二千四百圓。何うでせう？

リンデン　まあ、ノラさん、何うしてそれが出來ました？富籤でも當つたのですか。

ノ　ラ　（下すんだ様子で）富籤ですつて？は、そんな事なら、どんな馬鹿にでも出來ます。

リンデン　ぢや何處からそのお金を手に入れました？

ノ　ラ　（鼻唄を唄ひ、不思議な微笑を見せる）ふむ、ツラ、ラ、ラ、ラ。

リンデン　無論借りる譯には行かなかつたでせうし。

ノ　ラ　借りられませんて？何ぜ？

リンデン　だつて、妻が夫に内證で借金をする譯には行きますまい？。

ノ　ラ　（頭を立てゝ）ですけどね、少し實際の事を知つてゝ、手管をさへ心得てゐれば、何でもありませんわ――

リンデン　ですけれどノラさん。私分かりません――

ノ　ラ　えゝ、お分かりにならないで、ようござんすよ。私、借金をしたとは申しません、何か外の事で儲けたんでせうよ。（ソーファにかけたまゝ後へすがつて）誰か私を崇拜してる男からでも貰つたんでせう。是れでもねえ――私くらゐの女なら――

リンデン　ノラさん、餘んまり駄々つ子過ぎますよ。

ノ　ラ　そうら、ね、分からないでせう？不思議でせう？

リンデン　まあお聞きなさい、ノラさん。あなた、少し亂暴ぢやなかつたんですか？

ノ　ラ　（眞直に座わり直して）夫の命を救ふのが亂暴ですつて？

リンデン　亂暴といふのは、御主人に知らせないで――

ノ　ラ　けれども知らせたら命に障つたかも知れない場合ですもの。分つたでせう？あの人は自分で何のくらゐ悪いか知らなかつたんです。醫者がそつと私の所へ來て命が危いから南ヨーロッパの旅行でもしなくちや、救ふ道は無からうと言ふのです。ですから私、最初に外交術を使ひましたの、それくらゐの事を爲なくて何うするものですか。若い内は何所の

甚だでもやるやうに、外國旅行が是非したいと言つて頼みました。泣いてせがんでやつたのですよ。私の事も考へて下さい、私のいふ事に逆らつてはなりませんてね。そしてお金は借りたら可からうと、それとなく言つたのです。さうすると、あなた、怒鳴らないばかりに怒こりましてね、輕燥な奴だ、そんな出來心や空想は止めるのが夫の役目だといふのです、出來心や空想ですとさ。そんな風ですから、私は、よろしい、兎に角命は救つて上げなくちやあならない、と決心しましてね、その方法を立てたのですよ。

リンデン　そしてお宅では、その事を、先方からお聞きにはならなかつたのですか?

ノ　ラ　いゝえ、ちつとも。ちやうどその間際に父が死んだのですよ。私父に話して、宅へは何も言はないやうに頼んで置かうと思つたのですが、病氣が募つて――可哀さうに、口止めする必要もなくつて了ひました。

リンデン　で、御主人には何も打ち明けては入らつしやらない?

ノ　ラ　飛んでもない事。あなた一體何を考へてゐらつしやるの?借金といふ事をあんなに嫌つてる人に、そんな事でも言つて御覧なさい。それにトルヴルドのあの男らしい獨立心の勝つた氣性で、幾らかでも私の世話になつてるといふことを聞いたら、どんなにか心苦しく、肩身が狹いでせう?それこそ私たち夫婦の仲を打ちこわして了ひますわ。私どもの美しい幸福な家庭は二度と見られなくなりますわ。

リンデン　おやあ一切話さないお積もりですか?

ノ　ラ　(熟考の樣子で半ばほゝ笑みながら)さうですね、何時かは話すかも知れません――幾年か立て、私がもう――餘んまり美しく無くなつたら。あなた笑つちやあ可ませんよ。つまりね、ドルヴルドが今のやうに私を愛して呉れなくなつて幾ら私が跳ね廻つて、衣裳をつけたりお芝居をして見せたりしても、もう面白いと思はなくなつたら、その時取つて置き

の材料があると都合がいゝでせう？（急に話を切り）あゝ、馬鹿々々しい！そんな事になつて堪るものか。それで、あなた、何う思つて？私の大秘密を。やつぱり私には何も出來ませんかッ？是だけの事をするには、私、隨分苦心しましたよ。きちん〳〵と義務を果たして行かうと思へば、冗談事では出來ません。貸借上の事でね、年賦拂といふのと年四季の利子勘定といふのとがあります。それを間違なく濟ませて行かうとすると實に骨ですよ。そのために、手の屆く限り、そこら中から、少しづゝ掻き集めなくちやならず、それかと言つて、トルヴルドにそんな非道い暮しもさせられませんから、家の費用を剩すといふ譯にも行きませんしね。兒供にだつて餘まり非道い裝をさせて出したくもありませんから、あれ等に宛てた金は、みんな、あれ等のためにつかつて了ひますし。

リンデン　骨が折れたでせうね、ノラさん。つまり、みんなあなたのお小遣から出たことになるんですね。

ノ　ラ　無論さうなのです。つまり何もかも私獨りでやつた事になるでせう？家で着物を買へとか何とか言つて呉れますお金を、半分以上つかつた事はついぞありません。いつも、一番手輕な品、手輕な品と選つて買ふのですけれど、仕合と何を着ても私に似合ふものですから、トルヴルドも氣が付かないで濟みますの。けれど、實際つらい時がありましたよ、クリスチナさん。いゝ着物は着たうござんすからね。さうぢやありませんか。

リンデン　全くさうですよ。

ノ　ラ　まあそれはいゝとして、その外にも私、別口で金をこしらへましたのよ。去年の暮、大變好い都合でしてね、寫し物をどつさり頼まれました。毎晩、夜晩くまで閉ぢ籠つて書きましたつけが、時々隨分疲れて、仕やうのない事がありましたよ。けれどもあんな風に働いてお金を儲けた時は、いゝ氣持ですことねえ。全で男になつたやうな氣持ですわ。

リンデン　そんなにして今までに何のくらゐ辯償しました？

ノ　ラ　さうね、精確には分かりませんわ。そんな事といふのは、はつきりさせて置くことのむつかしいものですからね私ただ丹念に集めて來ただけの金を、すつかり拂つて來たことは知つてゐます。時々は、實際何處へすがつていゝか分からないこともありました。(微笑して)その時には私、何時もこゝに座つて、想像して見ますの、誰かお爺さんの金持があつて、私を愛して呉れて——

リンデン　え！誰れですつて？

ノ　ラ　なあに誰れでもないんですよ、——そしてその人が死んぢやつて、遺言狀を明けて見ると、大きな文字で、「予が死する時所有せし一切の財產を直ちに彼の愛らしき人ノラ、ヘルマー夫人に拂渡すべし」と書いてある。

リンデン　ですけど、ノラさん、あなた、誰のことを言つてるのです？

ノ　ラ　おや／＼、分からないのですか？誰もお爺さんが居るのぢやありません、たゞ、いつも私がお金の工面に惱きた時、獨りで、想像して見る人なのですよ。だけど、もうそんな事もいらなくなりました——あの辛氣くさい爺さん、私に用があるなら何處にでも待つてるがいゝや。私、そんな人に用もなければ、遺言狀にも用はない、私の心配事はもう、すつかり無くなつたのですからね。(飛上がりながら)ねえ、クリスチナさん、考へると、本當に大した事なのですよ。心配事が無くて、自由の身になつて。自由です、すつかり自由なんです。是でもう兒供と一緒にきやつきやと騷ぎ廻つて居ても差支なし、トルヴルドの好きなやうに家の中も綺麗に飾つたり。さうしてる內に春が來て、あの廣い青い空が見えて來ます。その頃には一寸した休みも取れるでせうし、も一度海も見られるでせう。實にねえ、生きて行つて幸福であつて、何といふ素ばらしい事でせう。

(廊下のベルが鳴る)

リンデン　（立ち上りながら）ベルが鳴ります、私はお暇した方がいゝでせう。

ノ　ラ　いゝえ、まあ、よござんすよ。來たのは屹度トルヴルドの客ですから。

エレン　（入口の所で）奥さま、お客さまが見えまして旦那さまにお目にかゝりたいと仰つしやいます。

ノ　ラ　何方？

クログスタッド　（廊下への入口で）私です奥さん。

（エレン去る、リンデン立つて窓の方へ向ふ）

ノ　ラ　（一足男の方へ行き、心配氣に、稍聲高く）

あなたですか？何です、宅に何んな御用があるんです？

クログスタッド　銀行の用事――と言つてもいゝでせうな。私はあの株式銀行でちよつとした仕事をしてゐますが、今度御主人があすこの新支配人にお成んなさると聞きましてね。

ノ　ラ　それで――？

クログスタッド　一向に面白くもない用事ですがね、奥さん、たゞそれだけですがね。

ノ　ラ　ぢや何うか書齋にゐますからお通り下さい。

（クログスタッド行く、ノラ無雜作に腰を屈め廊下への扉をしめる。そしてストーヴの傍により、火をおこす）

リンデン　ノラさん、何方でした？

ノ　ラ　クログスタッドさんといつて、もと辯護士をしてゐた人です。

リンデン　ぢや、やつぱりさうだ。

ノ　ラ　あなた御存じ？

リンデン　もと知つてました――餘程前の事です。私どもの町の辯護士の所に居ましたつけ。

ノ　ラ　はあ、さうですつてね。

リンデン　あの人も隨分變りましたねえ。

ノ　ラ　たしか、結婚をして、うまく行かなかつたんでせう？

リンデン　ぢや今は獨身？

ノ　ラ　大勢の子供をつれてね。さあ、やつと燃えつきました（ストーヴの戸を閉ぢ、船底椅子を少し側によせる）

リンデン　あの人のやつてる事業は、あんまり立派なことぢやあ無いつてますわ？

ノ　ラ　さうですか。さうかも知れません。私知りませんわ。事業の話なんか止しませうよ――面白くないから。

（ランクがヘルマーの室から出て來る）

ランク　（入口に立つたまゝ）なあに／＼。私にお構ひなく。私はちよつと奧さんの所へ行つてお喋りをして來るから（扉を閉ぢる。リンデン夫人の居るのを見て）や、失禮、こちらもお邪魔をしさうだな。

ノ　ラ　いゝえ、ちつとも（二人を紹介する）ランク先生――リンデンの奧さん。

ランク　あ、さうですか。お名前は度々伺ひました。先つき此方へ上つて來るとき梯子段でお先へ失禮したのが、たしかあなたでしたね。

リンデン　はあ、私ゆつくり／＼と歩くものですから。梯子段は全く思ひでしてね。

ランク　餘んまりお丈夫でない？

リンデン　たゞ無理な仕事をした爲ですけれど。

ランク　あゝ、それでこちらへ來て少し呑氣に保養をなさらうといふのですね？

リンデン　いえ、こちらへ參つたのは職が求めたいと思ひまして。

ランク　無理な仕事をなすつて疲れてお出でのに、それぢやあ療治になりますまい。

リンデン　でも生きなくてはなりませんもの、先生。

ランク　さやう、世間ではさう言つてますね。

ノ　ラ　あら、先生、あなただつて生きてゐたいと思ひませう？

ランク　さうに違ひありません。私の生涯が何んなにみじめだらうが、やつぱり出來るだけは長く引つ張つて居たい。それから私の所へ來る患者がみな、さういふ熱に罹つて居ます。道德上の患者だつて同じこと、今ちやうどヘルマー君が話してゐる人物なども、その死に損ひなのです。

リンデン　（柔かに）まあ！

ノ　ラ　誰のことですか？

ランク　あのそれクログスタッドといふ奴さ。あなたは何も御存知ないが――心のどん底まで腐つた奴です。所があんな奴までが、話の冒頭に眞面目くさつて、生きなくちやあなりませんから、なんて言つてましたよ。

ノ　ラ　さう？そしてトルヴルドに何んな用事があると言つてました？

ランク　實は私何も知らないのですがね、話の樣子では、何でも銀行の事務に關したことらしかつたですよ。

ノ　ラ　私はちつとも、あいつが――あのクログスタッドさんが銀行に關係してゐるといふことを知りませんでしたわ。

ランク　何かちよつとした仕事をして居るのです。
(リンデン夫人の方へ)何ですか、あなた方の地方でも、わざ〳〵道徳上の傷物を嗅ぎ出して掘ちくり廻す連中がありますか?そして、何か事件が見つかると、其の男を善い地位に据えて置いて、見張つてゐるに都合のいゝやうにする。そんな連中に限つて無傷なものはみんな投げ出して了ひます。
リンデン　はあ、それはさうでせうけれど――傷のある人間ですと尚のこと看護してやる必要があるのでせう。
ランク　(肩を揺すつて)それだ!其の考からして、社會を病院にして了ふのです。
(ノラは自分ひとりで何か考へ込んでゐたが、半ば押潰したやうに笑ひ出し手を拍つ)
ランク　何をお笑ひなさる?何か社會に就いてお説がありますか。
ノラ　社會なんて、そんな面白くもないものに、何でかゝり合ふものですか。私の笑つたのは他の事ですよ――非常におもしろい事。ねえ、先生、何ですか?あの銀行に使はれてるものは、みんなもうトルヴルドの自由になるのですか。
ランク　それが、あなたに非常に面白い事なのですか?
ノラ　(微笑、鼻唄)いゝんですよ〳〵。(室内を歩き廻る)さうなの、全くさう思ふと愉快ですよ、トルヴルドが、そんなに多勢の人を自由にする身分になつたと思ふと(隠しから袋を取り出す)ランク先生お菓子を召し上がりませんか?
ランク　おうや、おや――菓子?菓子は此の家ぢやお禁制品だと思つてたが?
ノラ　さうです、けれどもクリスチナさんが持つて来て呉れましたの。
リンデン　あら!私が?
ノラ　いゝえ、よくてよ。びつくりしなくとも、よござんすよ。あなたは宅で是れを禁じた事を御存知なかつたんです

もの。實はね、私の齒に惡いからといふんで、宅でそれを心配したのですよ。けれど、構ふ者ですか、一度つきり――是はあなたに、ランク先生（パン菓子を一つランクの口に入れてやる）それからクリスチナさんにも。それから私の番――ほんの小さいのを一つ、精々で二つ（又歩き廻る）あゝあ、實際私は幸福ね、けれど世の中にたつた一つ、是非と思つてることがあるわ。

ランク　へえ、何です？

ノ　ラ　トルヴルドの聞いてる前で――是非言つて見たいと思ふ事があるんですよ。

ランク　ぢやあ何ぜ言はないのです？

ノ　ラ　言へないのですもの、非常にいやな事。

リンデン　いやな事とは？

ランク　それなら言はないもよからうが、私たちには言へませう？ヘルマー君に聞かせたいといふのは何んな事です。

ノ　ラ　馬鹿つ！と言つたら何んなにいゝ氣持でせう。

ランク　あなた、氣が違やしませんか？

リンデン　まあ、何うしたんです、ノラさん。

ランク　言つて御覽なさい――ちやうどあすこに見えたから。

ノ　ラ　（菓子を隱す）しいつ！

（ヘルマー手に帽子を持ち、腕に外套をかけて自分の室から出て來る）

ノ　ラ　（ヘルマーの方へ行きながら）ね、あなた、あの男の用は濟んだのですか？

ヘルマー　あゝ、あの男は今歸つたよ。

ノ　ラ　御紹介申しますよ、此方はクリスチナさんです、ちやうど此方へお出になつて――

ヘルマー　クリスチナさん？失禮だが、何方だつたか――

ノ　ラ　リンデンの奥さんですよ、あなた――クリスチナ、リンデンと仰しやつて。

ヘルマー　（リンデン夫人の方へ）さうしますと、たしか、妻の學校友達でいらつしやつたのですな。

リンデン　はい、子どもの時分から御懇意にいたして居ります。

ノ　ラ　でねえ、まあ何うでせう、此の遠い所を、あなたにお話がしたいつて、入らつしやつたのですよ。

ヘルマー　私に話がしたい？

リンデン　は、いゝえ、さういふ譯でも――

ノ　ラ　ね、あなた、クリスチナさんは算盤が非常にお上手なんですよ。ですから何うか第一流の事業家に使つて貰つてもつと修業がしたいといふお考なのです――

ヘルマー　（リンデン夫人の方へ）それは結構ですな。

ノ　ラ　それから、あなたが今度支配人にお成んなすつたといふことをお聞きでね――それは勿論電報で知れたでせうから――それで直ぐ思ひ立つてお出でになつたのですよ。ですからね、あなた、よござんすか、私を助けると思つて何うぞして上げて下さらなくちや可けませんよ。出來ますか？

ヘルマー　出來ないことも無いが。未亡人でお出でのやうですね。

リンデン　はあ。

ヘルマー　で、會社などの業務に御經驗がありますか？

リンデン　充分ございます。

ヘルマー　ははあ、それなら、何處かへお世話が出來さうですな。

ノ　ラ　（手を拍ちながら）さうら御覽なさい！　さうら御覽なさい！

ヘルマー　ちやうどいゝ時にお出でになつたのですよ、奥さん。

リンデン　ほんとうに、お禮の申しやうもございません。

ヘルマー　（微笑しながら）何ういたしまして（外套を着る）私はちよつと御免蒙りますから――

ランク　待ち給へ、私も一緒に行かう。（廊下から毛皮の外套を取つて來て火に暖める）

ノ　ラ　直ぐ歸つて來て下さい、よござんすか？

ヘルマー　ほんの一時間ばかり。

ノ　ラ　あなたもお立ち？　クリスチナさん。

リンデン　（外出の支度をしながら）えゝ、是れから下宿を探さなくちやなりませんから。

ヘルマー　では御一緒に出かけませうか。

ノ　ラ　（リンデンの世話をしながら）家に明いた部屋があるといゝんですけどねえ、とても都合がつきますまい。

リンデン　とんでもないこと、こちらへ、そんな御迷惑をかけて濟むものですか。さやうなら、あなた、色々と御親切にありがたう御座いました。

ノ　ラ　さやうなら、又すぐお目にかゝりますよ。無論今晩また入らつしやるでせうね？　それからあなたもね、先生。え？

達者で居たらですつて？お達者に極まつてるぢやあ、ありませんか。着物を着て、暖にさへして居らつしやれば大丈夫ですよ。（皆々話しながら廊下へ出て行く。外では梯子段の上で兒供等の聲が聞こえる）來た〳〵。（ノラ走つて行つて扉を開ける）お這入り〳〵。（屈んで兒供に接吻する）おゝ、いゝ子〳〵。御覽なさいよ、クリスチナさん。かあいゝでせう？

ランク　吹きさらしでお喋りをして居ちやいけませんよ。

ヘルマー　さあ、リンデンの奥さん、母親でなくちやあ、此の寒さにあゝして居られるものぢやありません。

（ランク、ヘルマー、リンデン夫人皆々階段を下りて行く。アンナが兒供を連れて室に入る。ノラも一緒にはいつて來て、扉をしめながら）

ノラ　お前たち、まあ元氣だわねえ。頬つぺたの赤いこと――林檎か薔薇の花のやうですよ（次の言葉のあひだ兒供も母に話をする）

非常におもしろかつたつて？それは可かつたね。お前がエミーとボブを橇に乘せてやつて！――二人一緒に？まあねえ！おや〳〵、イヴールはすつかり大人だわねえ。アンナ、その子を少し私にお貸し、いゝ子の人形さん（末の子を媬母から取つて抱いたまゝ踊る）あいよあいよ。おつ母さん今にボブとも踊るよ。え！雪投をしましたつて？おゝ、私もお仲間に這入りたかつたね。いゝえ、みんな、さうしてお置きよ、私が脫がせてやります　あゝ、ね、私にさせてお呉れ、おもしろいことねえ。お前、寒さうぢやないか、兒供の部屋へお出で、ストーブの上にコーヒーの熱いのがありますよ。

（媬母は左手の室にはいる。ノラ兒供の着物などを脫がせて、そこら中に投け出す。其のあひだ兒供等同志話し合ひまたノラとも喋べる）さう！大きな犬が家まで追つかけて來たつて？けれども坊やに喰ひつかなかつたつて？あゝ、犬はね、坊やのやうないゝ子に喰ひつきませんて。いけませんよ、イヴールは其の包を覗いては　何だらうねえ、見たか無くつて？あ

ゝ用心おし――喰ひつくよ。え! おつ母さんも一緒に遊ぶのかい? 何をして遊ばうね。隠れんぼ? よし〳〵隠れんぼをしませう。ボブが先へ隠れるのですよ。私が? ぢやあ私が先に隠れますよ。

(ノラ兒共と一緒になつて、其の室及び右手隣りの室で笑ひ聲叫び聲の大騒をする。ノラ終にテーブルの下に隠れる。兒供等が駈け込んで來て探すけれども見つからぬ。其のうちノラのくす〳〵と笑ふ聲を聞きつけ、テーブルの方へ駈けて來て、覆ひの布を持ち上げ、母を見出す。一しきり大騒ぎ。ノラは兒供を恐ろしがらすやうな風で這つて出る。また一しきり大騒ぎ。其のあひだ廊下への扉を叩く音が聞こえてゐたが、誰も氣のつかぬ様子。やがて扉が半ば明いて、クログスタッドが出て來る。しばらく待つてゐると、遊び事がまた始まる)

クログスタッド　奥さん、御免下さい。

ノ　ラ　(押しつけたやうな叫聲で振り向き、半ば飛び上る)お! 何か御用ですか?

クログスタッド　失禮致しました。外の戸が明きかゝつて居ましてね。誰かしめることを忘れたのでせうが――

ノ　ラ　(立ち上りながら)　宅は今留守ですよ。

クログスタッド　承知して居ります。

ノ　ラ　ぢや何ういふ御用で入らつしやつたの?

クログスタッド　あなたに少しお話し申すことがありましてね。

ノ　ラ　わたしに?・(兒供の方へ向いて柔かに)アンナの方へ行つてお出で。何ですつて?・いゝえ、餘所のおぢさんは母あちやんを何うもしやしませんよ。あの人が歸つたらまた遊びませうね(兒供を左手の室へやり跡をしめる。心配さうに、息を潜める)わたしにお話があると仰しやるのですか?

クログスタッド　はい。

ノ　ラ　今日？だつてまだ一日には、ならないぢやありませんか——

クログスタッド　なりません。今日はクリスマスの宵祭です。そこで、あなたのお考へ一つで、クリスマスが愉快にも不愉快にもやれやうといふお話です。

ノ　ラ　何うなさらうと言ふんです？今日は私少しも用意してゐませんから——

クログスタッド　其の方は今御心配には及びません。御話は外の事ですが、ちよつとの間お差つかへありますまいか。

ノ　ラ　さうですね、差つかへは無からうと思ひますが、たゞ——

クログスタッド　よろしう御座います。私この向ふの料理屋に待つてゐて、御主人のお出かけになるのを突きとめたのですからな。

ノ　ラ　それで？

クログスタッド　一人の御婦人と。

ノ　ラ　それが何うしました？

クログスタッド　若しやあの御婦人は、リンデンの奥さんといふのぢやありませんか　。

ノ　ラ　えゝ。

クログスタッド　此方へお出でになつた許り？

ノ　ラ　えゝ。今日

クログスタッド　御懇意にしてお居でなさるのでせう？

ノ　ラ　えゝえ。ですけど、あなた、何ういふ譯で――

クログスタット　私もあの婦人とは、もと知り合ひでしてな。

ノ　ラ　それは聞きましたよ。

クログスタッド　あゝ、すつかりお聞きなすつた？そんな事だらうと思つた。ぢやあ打ち明けて申しますが、あの方が今度銀行へお這入んなさるのですね？

ノ　ラ　クログスタッドさん、何で、あなたは、そんなに嵩にかゝつて吟味なさるの？私共に取つちやあ使用人の癖に。だけど聞きたきや聞かせて上げます。はい、リンデンの奥さんは銀行へお勤めになるのですよ。それからあの方を推薦したのは私。わかりましたか、クログスタッドさん。

クログスタッド　やつぱり、思つた通りだな。

ノ　ラ　（歩き廻りながら）　ねえ？是れでもちよつと勢力があるでせう？女だからつて何時もさう――ね、クログスタッドさん、下に立つ者は氣をつけて、失敬な事のないやうにしないと、私のやうに――

クログスタッド　勢力のある場合にですか？

ノ　ラ　えゝ。

クログスタッド　（調子をかへて）　奥さん、何うか、あなたの勢力で、私をお助け下さる譯には參りますまいか。

ノ　ラ　え？何ですつて？

クログスタッド　お慈悲で何うか、目下に立つてる私ですから、銀行の地位が保つて行けるやうに、御盡力下さいませ。

ノ　ラ　何ぜそんな事を仰しやる？　誰もあなたの地位を奪やしないでせう？

クログスタッド　お、そんなにしらを切らなくともようがす。あなたのお友達が私に會ふのを嫌がつてることも、その爲私が逐ひ出され無くちやあならないことも、私はよく呑み込んでゐますよ。

ノ　ラ　たつて私や決して――

クログスタッド　まあ、さ、ちよつとの事です。まだ後れては居ませんから、一つ、そんな目にあはないやうに、あなたの勢力を揮つて下すつたらと、御相談申すのです。

ノ　ラ　ですけどクログスタッドさん、私何も勢力なんかありやしません。

クログスタッド　勢力が無いつ。しかし唯今伺つた所ぢやあ――

ノ　ラ　勿論そんな意味ぢや無かつたのですよ。私なんぞ――何うして主人に對してそんな勢力があるものですか。

クログスタッド　いや、御主人の事は學校に居た頃からよく知つて居ますが、妻君に對してさう強硬な態度を取る方ぢやありませんな。

ノ　ラ　あなた手前共に對して失敬なことを仰るなら、お歸りを願はなくちやなりませんよ。

クログスタッド　思ひ切りがようがすな、奥さん。

ノ　ラ　私もう貴方を怖がつちや居ませんよ。新年が濟むと早々すつかり片をつけて了ひますから。

クログスタッド　（我慢しながら）ま、お聞きなさい、奥さん。場合によつちやあ私は命賭けでも銀行のあの小ほけな地位を爭つて見せますぜ。

ノ　ラ　えゝ、そんな風に見えますよ。

クログスタッド　單に金錢のため許ぢやありません、金のことは何うでもいゝ。もう少し違つた意味があります。さうさな

すつかり言つちまつた方が良いか知らん。無論誰も知つてることだから御承知でせうが、五六年前、私に取つて少し面倒な事が持ち上りましてね。

ノ　ラ　何か其んな話を聞いたやうですね。

クログスタッド　其事件は裁判沙汰とまではならなかつたが、併し其れからといふもの私の前途はぱつたり塞がつて了ひました。そこで御承知の通りの事業を始めたのですがね、つまり何か行らなくちやあならなかつたのです、そして自分ではさう拙かつたとも思はないんです。けれども、もうあの方はすつかり止さなくちや仕方がありません。伜共が段々大きくなつて見ると、彼等のためにも、是非出來る丈の信用は取り返して置いて遣らなくちやなりませんからな。で、銀行に入つたのがその第一歩と言ふ譯なのです。處が、そこへ此方の主人が出てお出でなすつて、折角登りかけた梯から溝泥の中へ突き落してお了ひなさらうと言ふんだ。

ノ　ラ　ですけど、クログスタッドさん、實際私は、あなたを救ふ力はないんですよ。

クログスタッド　救つて下さる氣が無いんだ、併し是非共救つて戴く方法はありますな。

ノ　ラ　借金の事を宅にお話なさらうといふのですか？

クログスタッド　ふむ、若し左樣するとしましたら？

ノ　ラ　そんな不德義なこと（目に涙をためて）私が悦んで誇にしてゐる秘密を——そんな淺間しい非道い仕方で、それもあなたの口から打明けて了ふなんて！そんな事になつたら私は何んなにか不愉快な身の上になるでせう。

クロスグタッド　只不愉快な許ですか。

ノ　ラ（激して）まあ、行つて御覧なさいな、一番困つて來るのはあなただから。宅ではあなたを悪人だと思ふでせう？

さうするとあなたの地位は無くなつちまうに決まつてます。

クログスタッド　いや私のお尋ねしたのは、あなたが只家庭の不愉快といふ事許氣にかけて居らつしやるのぢやないかと言ふのです。

ノ　ラ　萬一、宅がその話を聞いたら、無論、お金は一時に拂つちまうでせう。そして、それで、もうあなたとは關係を絶つて了ふのですよ。

クログスタッド　（一歩進みながら）お聞きなさい奥さん。あなたは健忘症で被在るやうだ。それとも實務上の事はまるで御存じないのですか。まあ私がすつかり事情を呑込ませて上げませう。

ノ　ラ　何うしたと言うんです？

クログスタッド　御主人が御病氣の時にあなたは私の所へお出でになつて、千二百弗貸して呉れいと仰つた。

ノ　ラ　他に懇意の方もなかつたものですから。

クログスタッド　で、私はその金を拵へて上げませうとお約束をしました――

ノ　ラ　そして拵へて下すつたぢやありませんか。

クログスタッド　其のお約束をする時に私は條件を持ち出しましたよ。あなたはその時御主人の病氣に氣を取られて、旅行の費用が拵へたい一心でお出でになつたから、細かい事には碌々氣が附かなかつたかも知れません。ですから私がそれを此處でお話して上げます。其の時の約束は、私が書いた手形と引換にその金を拵へて差上げやうと言ふのでしたな。

ノ　ラ　えゝ、それで私は其の手形に署名しました。

クログスタッド　それに相違ありません。けれども其の時私は後から二三行附け加へて、あなたの御親父さんに保證して貰

くやうにしました。そして御親父さんが、それに署名をなさる筈になつてました。

ノ　ラ　署名する筈ですつて？署名したぢやありませんか。

クログスタッド　日附の處を明けて置きましたらう？卽ち御親父さんが、自身で署名の上に日附をお入れなさるやうになつて居ました。御記憶ですか？

ノ　ラ　えゝ、さうのやうでしたね――

クログスタッド　其處で私は其の手形をあなたに差上げて御親父さんの方へ御送りを願つた。さういふ順序でしたな？

ノ　ラ　えゝ、

クログスタッド　それで無論あなたは直ぐ其の通りになすつたでせう？といふのは、五六日經たない中に其の手形を私のところへお返しになつて、ちやんと御親父さんの御名前が座つてゐたからです。そこで私は金をあなたにお渡し申しました。

ノ　ラ　それで何うしたと言ふんです？私、拂ふものはきちん／＼とお拂してるぢやありませんか。

クログスタッド　先づねえ。所で、話の要點に戻ると、其時あなたは大變お困りのやうでしたね、奥さん。

ノ　ラ　實際さうでしたよ。

クログスタッド　あなたの、御親父さんは大病だと言ふし。

ノ　ラ　とても助からないといふ時でしたからね。

クログスタッド　そして間もなくお亡くなりになつたでせう？

ノ　ラ　えゝ。

クログスタッド　何ですか？奥さん。あなたは御親父のお亡くなりになつた日を覺えてゐらつしやいますか。月の幾日といふ

ことを？

ノ　ラ　父は九月の二十九日に亡くなりました。

クログスタッド　確にさうです。私はすつかり檢べて來ました。所で、茲に一つ重大なことが起つて來る――（手形を取り出す）何うも私には理由がわからない。

ノ　ラ　重大な事つて何ですか？何んなことか知りませんが――

クログスタッド　重大な事と申すのはね、奧さん、御親父が此手形に署名なすつたのは、お亡くなりになつてから三日後のやうですぜ！

ノ　ラ　何ですつて？私未だ理解らないんですが、――

クログスタッド　御親父は九月の二十九日にお亡くなりになつたでせう？處が、御覽なさい、此の署名は十月の二日になつて居ます。重大な事ぢやありませんか、奧さん。（ノラ默つてゐる）何か理由がありますか？（ノラ尙默つてゐる）その上注目すべき事は、十月二日といふ文句とその上の年號とが何うも御親父の手蹟でないやうに見えます。何處か見覺えのある筆ですね。が、これは說明がつきます。御親父は署名なすつた時に、日附を入れることをお忘れなすつた、それをお亡くなりの後、まだその事の知れない時に、誰か勝手に日附を入れたのでせう。尤もそれ丈なら一向惡い事ぢやありません。大事なのは名前ですからな。名前の方は確でせうな奧さん？實際あなたの御親父が御自分の手でちやんとこゝへ名をお書なすつたんでせうな？

ノ　ラ　（暫く默つて居て、頭を後ろへそらせ、決然たる樣子でクログスタッドを見る）いゝえ、父の名を書いたのは私です。

クログスタッド　もし！奥さん、あなた、それは危險なことを仰るもんだが、ようございますか？

ノ　ラ　構はないでせう？お金はぢき拂ひますから。

クログスタッド　尙一つ伺ひたいことがあります。何故此の手形を御親父の方へお送りにならなかつたのですか。

ノ　ラ　それは、送るわけに行かなかつたからです。父は大病でせう？そこへ署名の事など言つてやるとなると、金の要り道も話さなくちやなりませんから、宅が病氣で命が危ないといふやうなことは、とても言つてやられなかつたのです。

クログスタッド　そんなら旅行をお止しなすつたら、よかつたでせう。

ノ　ラ　何うして、そんな事ができるものですか。其旅行一つで宅の命は何うにもなるといふ場合でしたもの。到底止めるわけには參らなかつたのです。

クログスタッド　で、あなたは、私に對して詐欺をしてお出でになるとは氣が附かなかつたのですか。

ノ　ラ　そんな事は私、何とも思はなかつたのですよ、あなたのことなんざ、まるで考へて居ませんでした。あなたは宅が大病であると知りながら殘酷な、面倒なことばかし言つておよこしになるもんだから、私我慢が仕切れなかつたのですよ。

クログスタッド　奥さん、あなたは現に行つてお出でなさる事が何んな事だか御存しないやうですね。私が斯うやつて社會から投り出されたのもあなたと同じ事をしたからてすぜ。

ノ　ラ　まあ、此人は！妻君の命でも救ふために立派なことをしたやうな顏をして。

クログスタッド　何のためだらうが、そんな事は法律は關係しません。

ノ　ラ　それぢやその法律は大間違の法律です。

クログスタッド　間違つて居やうが居まいが、此證書を裁判所へさへ持ち出せば、あなたは法律の罪人におなんなさらなくちやならない。

ノ　ラ　そんなことがあるものですか。あなたの仰るやうだと、娘が大病の父に苦勞をさせまいともする權利はないわけですね、――妻が夫の命を救ふ權利もないわけですね。私、法律のことはよく知らないけれど、屹度何處かに今言つたやうな事が許してあると思ひますわ。それをあなたは御存じないんだから――あなたのやうな法律家が！あなたはきつと碌な法律家ぢやないんですね、クログスタッドさん。

クログスタッド　さうかも知れません。けれども、斯ういふ事になると――今起つてるやうな事件になるとよく知つてるますよ。わかりましたか？それぢやお宜しい。それから先は御隨意になさいませ。只申上げて置きたいのは、私が尙一度泥溝へ落ちるとなると、貴女も御一緒にゐらつしやらなくちやなりませんよ。

（一寸腰を屈めて廊下から出て行く）

ノ　ラ　（暫く考へながら立つて居て、そして頭を立てる）何んでそんな事が！彼奴、私を威嚇さうと思つてやがる。私、そんな間拔ぢやないよ。（兒供の衣服を疊み始める。その手を止めて）けれど――？否、そんなことの有らう筈はない。愛のためにしたんだもの！

小　供　（左手の扉の處で）お母さん、餘所のお爺さん、もう行つちまひましたよ。

ノ　ラ　あいあい、知つてますよ。けれどね、餘所の小父さんの來たことを誰にも言つてはいけませんよ。わかりましたか。お父さんにだつていけません。

小　供　えゝ、だから一緒に遊びませうよ、ねえお母さん？

ノ　ラ　いゝえ、今はいけないの。

小　供　ねえ、遊びませうよ、お母さん、約束したんですもの。

ノ　ラ　さうですけどね、今は不可ませんよ。乳母の居る方へいらつしやい、お母さんは澤山御用があるから。さ、さ、いらつしやい。温和しくして居るんですよ、可いかえ！（小供等を靜に向ふの部屋の方へ押しやり、あとの戸を閉め切る。ソーフアに座り、刺繡を取り上げて二針三針動かして直ぐ止める）そんな事かあるものか！（仕事のものを投げ出して立ち上り、廊下の扉の方へ行つて呼ぶ）エレン！クリスマス、ツリーを持つてお出で！（左手のテーブルの處へ行つて抽出を開ける、また其の手を止める）何んでそんなこと、何う考へたつてそんな筈はない。

エレン（クリスマス、ツリーを持つて）何處へお立て申しませうか。

ノ　ラ　そこへ、部屋の眞中の處へ

エレン　何かまだ他のものを持つて參りませうか。

ノ　ラ　否、可くてよ、それですつかり揃ひます。

（エレンは木を置いて出て行く）

ノ　ラ（忙しげに木を飾りながら）こゝは蠟燭にして、向ふの方へ花を懸ける。彼奴本當に怖ない奴！つまらない事〳〵。何でもありやしない。クリスマス、ツリーを斯うやつて綺麗に飾つて。あなたの氣にさへ入れば、何私でもしますわ。ねえあなた。歌も歌ふ、踊もおどる、それから――

（ヘルマーが一束の書類を持つて廊下の扉の處から入つて來る）

ノ　ラ　あら！もうお歸んなすつて？

ヘルマー　あゝ。誰か來て居たかえ？

ノ　ラ　此所へ？否。

ヘルマー　奇體だな。クログスタッドが此家から出て行つたが。

ノ　ラ　お會ひなすつて？さう〳〵、何でしたつけ、一寸の間來てゐたのですよ。

ヘルマー　ノラ、お前の樣子でちやんとわかるよ、彼奴め、お前に口をきかせやうと思つて來たな？

ノ　ラ　えゝ。

ヘルマー　で、お前はそれを自分の一料簡のつもりでやらうと思つたんかい？お前は彼奴の此處に居たことを知らせまいとして居るやうだが、それも彼奴の入智慧ぢやなかつたか。

ノ　ラ　えゝ。ですけどね――

ヘルマー　これノラ！何うしてお前そんなことが出來るんだ！あんな奴と話をして約束までするなんて、それで私には嘘をついて、ごまかさうとする！

ノ　ラ　嘘ですつて？

ヘルマー　誰も來ないと言つたぢやないか、（指で突く眞似をして）家の小鳥さんは二度とそんなことを言つちやなりませんぞ。小鳥が調子の違つた歌なんか囀つちや仕樣がない。（片手に女を抱きながら）え、さうぢやないか――左樣だらう、左樣なくちやならない。（女を手放す）

ぢや、もう其の事は言はないことにしやうね。（ストーヴの前に座る）あゝ、靜かで、いゝ氣持だな！（持つてゐる書類を覗き込む）

ノ　ラ　（クリスマス、ツリーに氣を取られて居る、暫く默つて居てゝあなた！

ヘルマー　え

ノ　ラ　私本當に、明後日のステンボルグさんの假裝舞踏會が待遠しいわ。

ヘルマー　私はまた、お前が何んな珍らしいものを買つといて私を驚かすだらうと、そればつかり考へてゐる。

ノ　ラ　其の方は、全く思案に盡きて了つてよ。

ヘルマー　何うして？

ノ　ラ　いくら考へても甘い思付が出ないんですもの。何を見ても下らない、平凡な物ばかりですから。

ヘルマー　ノラさんが左樣いふ發見をしたんだな？

ノ　ラ　（夫の椅子の後から腕をもたせかけて）貴方非常にお忙しくつて？

ヘルマー　さうさな――

ノ　ラ　其の書類は何の御用？

ヘルマー　銀行の用事だ。

ノ　ラ　もう？

ヘルマー　今度辭職する支配人に相談して、少し役員の出し入れなんかさせて貰つたもんだからね。其の方がクリスマス中かゝるだらう。新年になると悉皆片が付きさうだ。

ノ　ラ　ぢや、そのためですわ、可哀さうに、あのクログスタッドが――

ヘルマー　ふむ。

ノ　ラ　（搖椅子の脊の裏にもりかゝり靜かに夫の髮を搔きながら）あなた餘り忙しくなかつたら大々的にお願したい事があるんですけれどね。

ヘルマー　何だらう？言つて御覽。

ノ　ラ　誰だつて、あなた程趣味の高い人はゐないんだから、私今度の假裝舞踏會には思ふ樣立派にして行きたいと思ふんですが、あなた何ですか？　一緒にゐらしつて私が何になればいゝか決めて、衣裳を見たてゝ下さるわけにはいきませんか？

ヘルマー　あはあ！家の剛情屋さんが、途方にくれて悄け始めて來ましたね。

ノ　ラ　えゝ、何うかね、あなたが入らしつて下さらなくちや何うにもならないんですもの。

ヘルマー　よし、よし、考へて見やう。その中何か見つかるさ。

ノ　ラ　まあ可かつたあなた親切ですわね！（またクリスマス、ツリーの方へ行く。立ち止まる）赤い花がいゝこと！ですけどね、あなた、あのクロックスタッドが惡いことをしたといふのは、大變情ないことでしたか？

ヘルマー　私書僞造と言ふ丈だがね、それは何んなことか知つてるかい？

ノ　ラ　何か已むを得ない事情でそんな事をしたんでせうね？

ヘルマー　さうか、又は、よくある奴でほんの不注意からそんな事になつたのかも知れない。私、何にも、それ一ツの過失で絶對的に人に難癖をつける程冷酷ぢやないんだがね。

ノ　ラ　でせう？私もさう思つてますわ。

ヘルマー　けど自分の罪を自白して、それだけの刑罰を受けさへすれば、それですつかり性格を持ち直すことが出來るんだが。

ノ　ラ　罪をですつて？

ヘルマー　所がクロッグスタッドは白狀といふことをしなかつた。彼奴は小細工やごまかしで逃れやうとした。それが彼奴を腐敗させて了つたんだ。

ノ　ラ　あなたそれでは何ですか――？

ヘルマー　ま、考へても御覽！一度良心でさういふ事をした奴は、一生涯噓をついて眞面目な顏をして、居なくちやならない。理を非に言ひ曲げて、やつて行く。彼奴は自分の妻子に迄假面を被つて居なくちやならないんだ。第一兒供にとつて、これ程惡いことはないだらう。

ノ　ラ　何故です？

ヘルマー　何故つてお前、そんな噓言僞妄が這入つて來ると、家庭の空氣はすつかり腐つて了つて、毒を行つて來るからな。兒供が呼吸する度に、罪惡の黴菌を吸ひ込むやうなものだ。

ノ　ラ　(夫の後の方へ近寄つて行つて)さう思ひますか？

ヘルマー　辯護士をしてる間に私は幾度もさういふ例を見たよ、子供の時分に惡いことをする奴は、十中八九まで母親が噓をつくのに原因してるやうだ。

ノ　ラ　へえ――母親がですか？

ヘルマー　先づ概して母親の方から來るやうだな。けれども無論父親の感化だつて同なじ事には相違ない。あのクロッグスタッドなんざ、これまで何年となく噓と僞善の生活で自分の兒供を毒害して來たんだ。それさ、私が彼奴を道德的に破產した奴といふのは(兩手を女の方に差出して)其んな理だから、家のノラさんは、もう彼奴の辯護なんか暫つて已めなくちや

いけないよ、さあ誓の印に握手しやうか。これこれ、何うしたんだ。手をお出し。それでよし〳〵、それで契約濟だよ。實際私は彼奴と一所に仕事をすることは不可能だつたんだ。あゝいふ奴に會ふと私は體が痛んで來るほど苦しいからな。

（ノラは自分の手を退いてクリスマス、ツリーの向ふ側へ行く）

ノ　ラ　此の部屋は暑うござんすことね。私まだ澤山爲ることがある。

ヘルマー　あゝ、私も夕飯までに此の書類の中から必要な分丈すつかり見て置かなくちやならない。それからお前の衣裳のことも考へなくちやならないし。クリスマス、ツリーに金紙で下げるものも何か思ひ付くかも知れない（女の頭に手を置いて）家の大事な小鳥さん。

（ヘルマー自分の室に入り後の扉を閉める）

ノ　ラ　（暫く間を置いて柔かに）大丈夫そんなことはない。あらう筈がない。そんなことがあつて堪るものぢやない。

アンナ　（左手の扉の處で）お小さいのが、お母さんの方へ參りたいんですつて、温順しく左樣言つてらつしやるんですよ。

ノ　ラ　いけませんよ、いけませんよ、此處へよこさないで置いておくれ。お前の方に止めておいておくれ、可いかえ、アンナー

アンナ　畏りました。（扉をしめる）

ノ　ラ　（恐怖で顏が蒼白くなつて）私の子供を腐敗させる！私の家庭に毒を撒く！（ちよいと句切を置いて頭を上げる）嘘！嘘！そんなことがあるものか！

第二幕

前幕と同じ室、隅、ピアノの傍にクリスマス、ツリーが所々捥り取られて、燃えさしの蠟燭のついたまゝ立つてゐる
ノラの外出世度のものがソーファの上に置いてある。

（ノラは落ちつかない樣子で步き廻つて居る。ソーファの傍に立ち止り、外套を取り上げて、また下に置く）

ノラ　誰か來たやうだ（廊下の方へ行つて、聞耳を立てる）誰も來やしない。今日はクリスマスだから來る人は無いだらう。明日だつて來やしない。けれども、ひよつとすると――（扉を開けて外を見る）さうぢやなかつた、郵便箱には何もありはしない、空つぽ（前の方へ出て來て）私、馬鹿な事を考へるわね。あいつ私を嚇かさうと思つてるに違ひない。そんな事になる氣づかひはありはしない。出來ない事だもの。だつて私には兒共が三人も居るぢやないか。

（アンナが左手から大きなボール箱を持つて這入つて來る）

アンナ　踊衣裳の箱をやつと見つけました。

ノラ　有りがたうよ。テーブルの上に置いてお吳れ。

アンナ　（さうする）ですけれども大變ひどくなつて居ります。

ノラ　仕やうがないね、ずだ／＼に引つ裂いてやれ。

アンナ　いけませんよ。わけなく直ります――ちよつとの間待つて居らつしやい。

ノラ　ぢや私、リンデンの奥さんにお手傳を賴んで來やう。

アンナ　またお出かけなさいますか？此んな天氣にまあ、お風を召したら何うなさいます？

ノ　ラ　風よりも、もつと悪い事があるかも知れないよ。兒供は何うしてゐるかい？

アンナ　みんなクリスマスのお土産を持つて、遊んでゐらつしやいます。お可愛さうにね。ですけれども――

ノ　ラ　私の事を聞くかえ？．

アンナ　それは、もう、ねえ、何時もおつ母さまと御一緒で入らつしやつたのですから。

ノ　ラ　さうねえ。けれどもアンナや、是からはね、私、あんまり兒供と一緒には居られませんよ。

アンナ　それはもう、お小さい内なら、何うにでも、仕つけやう一つでございますからね。

ノ　ラ　さういふ風に仕つけられるとお思ひかえ！母樣が全く居なくなつたら忘れて了ふだらうか？

アンナ　まあ、何を仰しやいます。居なくなつたらですつて？

ノ　ラ　あのねえ、アンナ――私いつもさう思ふが――何うしてお前は、自分の兒供を他人にやることが出來たえ？

アンナ　ノラ樣をお育て申すことになつて否應なし、さうしたのでございます。

ノ　ラ　けれども何うして其の決心がつきました？

アンナ　それはあなた、そんないゝ口が見つかつたのでございますもの。女の身で、年は行かず、賴る所はなし、不幸つゞきでゐたのでございますから、何たつて、見つかつたものを取り逃してはなりません。あの薄情男めは、何一つ私の世話をしやうともしなかつたのでございますよ。

ノ　ラ　それでは、お前の娘さんはお前を忘れて了つたゞらうね。

アンナ　所がさうでございませんよ、奥さま。忘れないものと見えまして、彼れが堅信式を受けました時と結婚しました

時には手紙をよこしました。

ノ　ラ　（アンナを抱きながら）ねえ、婆や、お前も年を取つたねえ――私小さい時は、ほんとに母も及ばない世話になつたつけ。

アンナ　あの頃のノラ様はほんとにお可哀さうでしたよ、おつ母さまは入らつしやらず、私がたよりだつたのでございますからね。

ノ　ラ　私の兒供が、また、母を無くするやうなことがあつたら、お前屹度、何だらうねえ――よさう〳〵、馬鹿らしい。（箱を開ける）兒供の方へお出で。さあ是れから――明日は私何んなに綺麗だか御覽よ

アンナ　屹度明日の舞踏會には、ノラ様より綺麗な方は無いに極まつて居りますよ。（左手の室にはいる）

ノ　ラ　（箱から衣裳を取り出すけれ共直ぐまた下に投げ出す）あゝ、思切つて出て行つちまつたら。誰も來なければいゝがねえ。其れまで、何事もないで居て呉れるといゝがねえ。馬鹿なこと、誰れも來やしない。考へないでさへ居ればいゝ。何ていゝマフだらう。綺麗な手袋だこと、綺麗な手袋だこ　。えゝ、あつちへ行つちまへ、あつちへ行つちまへ。一、二、三、四、五、六――（叫び聲を立てゝ）おや、來たよ――（扉の方へ行つて、躊躇しながら、そこに立つ）

（リンデン夫人が廊下で外出仕度のものを脱ぎ這入つて來る）

ノ　ラ　おやあなた？クリスチナさん。外には誰れも來ませんでしたか？まあよく入らつしやつたわね。

リンデン　私の所へお見えになつたさうですね。

ノ　ラ　えゝ。ちやうど通りかゝつたものですからね。私、あなたに是非手傳つて頂きたい事があるんですよ。さあお掛けなさい、ソーファがよござんす――さう。明日の晩ね、此の二階に居る領事のステンボルグさんで假裝舞踏會があるの

ですよ。それでね、トルヴァルドが私にナポリの漁師娘になれといふんです。そして私がイタリアのカプリで習つたタランチラ踊をやれといふのですよ。

リンデン　さうですか、――立派な、もう、本物ですわね。

ノ　ラ　えゝ、トルヴァルトがそれがいゝと言ひますから。御覽なさい、是れが其の衣裳ですよ、イタリアで私に拵へて呉れたのです。けれども、もう斯んなにぼろになつちやつて、何うしていゝか――

リンデン　あなた、直ぐなほせますよ。ただ縁が所々ほぐれた許しですもの。針と絲がありますか？あゝ此處にあります。

ノ　ラ　まあ、濟みませんねえ。

リンデン　では明日は、すつかり衣裳をお着けなさるのね、ノラさん。何んなにか――私、拜見に來ますよ、ちよつとでいゝから、お仕度の出來上つた所を。おや、お禮を言ふのを忘れてゐた、昨晩は御馳走さま。

ノ　ラ　（立ち上り室を向ふへ歩く）いゝえ昨日はね、不斷ほどおもしろくなかつたのですよ。もう少し早く入らつしやるとよかつた。トルヴァルドは實際、家庭を愉快にする腕があります

リンデン　あなただつて、さうに違ひありません。でなければ、お父うさんの子ぢやありませんもの。それはさうとね――ランク先生は何時もあんなに、昨晩のやうに沈んでゐらつしやいますか？

ノ　ラ　いゝえ、昨晩は特別でしたのよ。あの方はね、恐ろしい病氣を持つてゐます。脊髓癆ださうです、かわいさうにねえ。噂ではあの方のお父さんが非道い放蕩をなすつてね――妾を置いたり色々な事をして――其のためにお子さんが幼少から病氣だつたのですつて。そんな話ですよ。

リンデン　（縫物を前掛の上に落としながら）まあ、ノラさんあなたは、何うしてそんな事をお知りです？

ノ　ラ　（歩きながら）それは、あなた是れでも兒供の三人も持つてるのですもの、醫者のことを知つた婦人だつて出はいり爲やうぢやありませんか――其の人たちが色々の事を話します。

リンデン　（縫物をつゞける。ちよつと經つて）ランク先生は毎日こちらへ見えますか？

ノ　ラ　えゝ、毎日。あの方はね、トルヴルドが兒供の折からの友人で、私も大變御懇意にして居るのですよ。全で家のもの同樣にして居ます。

リンデン　ですがね、あなた――あの方は全く眞面目な方ですか？空世辭を言ふ人ぢやありませんか？

ノ　ラ　あべこべですよ。何うしてそんな事をお考へなすつて？

リンデン　昨日あなたがお引き合せ下すつた時に、あの方は、何度も私の名を聞いたと言つたでせう？所がお宅では少しも私を御存じなかつたでせう？それで何うしてランク先生が――？

ノ　ラ　あ、それはランク先生の言ふ通りですの、クリスチナさん。全體トルヴルドが私を愛してることと言つたら、一通りや二通ぢやないんですからね、私の體を全く自分のものに爲きらないと承知しないのですよ、何時も自分でさう言つてゐます。ですから結婚した當座なんか、私が里に居る頃懇意にした人の名でも言はうものなら、もうすぐ妬きもちをやくのですよ。そんな風で自然に其の方は言はないやうにして置いたのですけどね、ランク先生にはよく昔の事なんか話しましたよ、あの方はそれを聞くのが大變好きですから。

リンデン　ですけどねえ、ノラさん。あなたはまだ、何うしてもねんねえですよ。私、あなたよりは年も上だし、經驗も幾らか餘計に積んでゐますから、申しますがね、あなたはランク先生との關係を、きちんとして置く必要があります。

ノ　ラ　何んな關係？

リンデン　あなたは昨日、金持で、あなたを崇拜して居る人に、お金を拵へて貰ふといふことを言ひましたらう？——
ノ　ラ　はあ、實際居ない人にねえ、お氣の毒さまでせう？それが何うしました？
リンデン　ランク先生は金を持つてますか？
ノ　ラ　えゝ、持つてます。
リンデン　そして、遺る人と言つては誰れも居ないのでせう？
ノ　ラ　誰れも居ません。ですけれど——
リンデン　それで以て、あの人は毎日この家へ來るでせう？
ノ　ラ　えゝ、毎日。
リンデン　私は、あの人が今少し立派なたしなみを持つてゝ呉れるといゝと思ひますよ。
ノ　ラ　私まだあなたの仰しやる意味が分らない。
リンデン　白を切つちや可けませんよ、ノラさん。あなたまだ、千二百弗のお金をあなたに貸した人が誰だか私に判斷がつかないと思つてゐらつしやつて？
ノ　ラ　はゝはゝ、何うかして居らつしやるの？あなた、さういふ考でゐたのですね。毎日家へ來るお友達から借金をするなんて！何んなにか苦しい事でせうねえ。
リンデン　ぢやお本當にあの人ではないのですね。
ノ　ラ　えゝ本當に。そんな事は今まで考へて見たこともありません——それに其の頃はまだ、あの方には、人に貸すやうな金は無かつたのですよ。財産の手に入つたのは後のことですもの。

リンデン　それなら尙の事、其の方があなたの爲には仕合せだつたと思ひます。

ノ　ラ　全く私、ランク先生の事なんぞは、考に、はいらなかつたのですよ。ですけれど若しあの方に賴んだら、屹度――

リンデン　けれども、あなた、賴む氣は無論ないのでせう？

ノ　ラ　無論ですとも。そんな必要のある譯はないのですから。けれども屹度何ですよ、若しランク先生に話したら。

リンリン　御主人の居らつしやらない所で？

ノ　ラ　私ね、今一つ切りぬけなくてならない事がありますの、それも矢つ張り主人の居ない所での事ですよ。是非其の方の片をつけなくちやならない。

リンデン　それがよござんすよ。私、昨日もさう言つたでせう？たゞ――

ノ　ラ　（あちらこちらと歩きながら）こんな事を運ぶのは、女よりもずつと男の方がいゝけれど。

リンデン　夫なら無論さうですとも。

ノ　ラ　下らない事（じつと立留る）あのね、借りたものをすつかり返せば、證書は返つて來るでせうか？

リンデン　無論でせう。

ノ　ラ　返つて來たら、あの汚れた嫌なものをずたずたに引き裂いて、燒いて了ひたいわ！

リンデン　（じつとノラを見て、仕事の物を下に置いて、徐々と立ち上かる）ノラさん、あなたは私に何か隱して居らつしやるのね？

ノ　ラ　さう私の顏に見えてゐますか？

リンデン　昨日の朝からこつちへ、何か變り事がありましたね？何です？ノラさん。

ノ　ラ　（リンデン夫人の方へ行きながら）クリスチナさん——（聞耳を立てる）しつ！トルヴルドが歸つて來ましたよ。さ、乳母の部屋へ行つてゝ頂戴。あの人は裁縫なんか見てゐることの出來ない人ですからね。それから、アンナに手傳はせて下さいな。

リンデン　（手近のものを取り集めて）はい〳〵。ですけれども、すつかりお話を聞くまでは歸りませんよ。

（リンデン夫人は左手に出て行く、引ちがへにヘルマーが廊下から這入つて來る）

ノ　ラ　（走り寄つて迎へる）何んなにか、あなたを待つたでせう

ヘルマー　仕立屋が來て居たのか？

ノ　ラ　いゝえ、クリスチナさんですよ、私の衣裳を手傳つてゐます。今に綺麗に出來上りますから、見てゐらつしやい。

ヘルマー　あゝ。私のあの考はいゝ思ひ付だつたらう？

ノ　ラ　ほんとによござんしたわ。けれども私があなたの考に贊成したのも、えらいでせう？

ヘルマー　（ノラの顋の下を捉へながら）えらい？夫の考に贊成したのがつ？まあ、よしよし、此の氣違家さん、お前の本當の意味は分かつてゐる。が今そんな事を言つてお前の邪魔をしてはならない。お前は是れから着物を着て見るのだらう？

ノ　ラ　それから、あなたは仕事におかゝんなさるの？

ヘルマー　あゝ、（一束の書類をノラに示す）是れを御覽（自分の室の方へ行く）今銀行から歸つた所だ。

ノ　ラ　あなた

ヘルマー　（立止りながら）えゝ？

ノ　ラ　あなたの栗鼠さんがね、大變可愛らしくして、何かあなたにお願ひをすると言つたら——

ヘルマー　ふむ？

ノ　ラ　叶へて下さいますか？

ヘルマー　まあ何んな事だか聞かなくちやあ。

ノ　ラ　たゞあなたが優しくして、言ふことを聞いて下さればね、栗鼠はそこら中跳ね廻つて、何んな藝當でもしますわ。

ヘルマー　ぢやあ、さあ、言つて御覽。

ノ　ラ　あなたの雲雀は朝から晩まででも囀つてゐますわ――

ヘルマー　いや、其の雲雀は、何時でもよく囀づるやうだよ。

ノ　ラ　わたし、可愛らしい魔になつて、月夜に踊つて見せますわ、ね、あなた。

ヘルマー　ノラ――お前の言ふのは、今朝遠廻しに言つてゐた、あの事ぢやあるまいな。

ノ　ラ　（傍へ寄つて來て）あの事ですよ、ね、あなた、どうか、御願ひですから。

ヘルマー　お前は實際、また其れを言ひ出す勇氣があるのかい？

ノ　ラ　さうなのですよ。ですから、私を助けると思つて、是非クログスタッドを銀行に置いてやつて下さい。

ヘルマー　でもお前、私がリンデンの奥さんに向けやうと思ふのは、あいつの地位なんだよ。

ノ　ラ　えゝ、それは有りがたいんですけれどね、クログスタッドの代りに、誰れか他のものを免職にして下さいな。

ヘルマー　何うしたんだ、分からないにも程があるな。お前がよく考へもしないで、あんな奴に約束をするものだから、其の爲に私が――

ノ　ラ　さうぢやないのですよ、あなた。あなたの爲なのです。あの男は幾つかの惡徳新聞に關係してゐるのでせう、あな

たが自身でさう仰しやつたのよ。ですからあなたに何んな害をするかも知れません。私、あの男は、身震ひする程おつかなうございますわ。

ヘルマー　あゝ分つたよ。お前は昔の事を思ひ出して、それで怖がつて居るのだね。

ノ　ラ　何ういふ譯です？

ヘルマー　知れてるさ、お前のお父つさんの事を考へてるのだらう？

ノ　ラ　あゝ、さうですとも。まあ考へて見て下さい。あの悪人どもが、いつも父を引合に出しては色々な淺ましい事を書き立てたでせう？あの時、もしあなたが取調べに派遣されて、父を救つて下さらなかつたら、乾度もう、あれは免職になつたのですよ。

ヘルマー　でもねえ、ノラ、お前のお父つさんと私とは全で話が違ふぜ。お前のお父つさんは全然批難の無かつた人だとは言へない。私はさうぢやない。また今後とも私は其の通りでゐたいと思ふ。

ノ　ラ　そんな事を言つたつて、悪人どものすることですもの、何を掘り出すか知れやしません。私たちは是れから、睦じい、穏やかな家庭で幸福に暮らせるのでせう？あなたも私も兒供も、ね、ですから私、お願なのよ。何うかね――

ヘルマー　さういふ風にお前が、あいつの辯護をするから、却つて益々あいつを置いとくことが出來なくなるのだ。私がクログスタッドを出すといふ話はもう銀行へ知れてるのだから、萬一、新支配人は妻君の小指で引き廻はされたといふやうな噂が立つと――

ノ　ラ　さうすると、何うします？

ヘルマー　爲やうがあるものか、我儘女が剛情を言ひ張つてる間はだめです。私は人の物笑ひになつて、妻君政治で踊はさ

らないと言はれるだらう。さうなると、屹度其の結果は生じて來る。のみならず、今一つ私が到底クログスタッドと一緒に仕事の出來ない理由がある。

ノ　ラ　何んな事？

ヘルマー　私は、已むを得なければ、あいつの暗い性格は我慢も出來たかも知れない――

ノ　ラ　はあ、さうでせう？

ヘルマー　それから仕事にかけては立派だといふことを聞いてゐる。たゞ斯ういふ事があるのだ　あいつは、元、私の學校友達でね――よく跡で後悔することだが、其の頃の亂暴な向ふ見ずの交際をやつたものだ。茲で白狀しても構はないが――あいつと私とは、實は、其のため、君、僕のつき合をするのだ。所が、あいつめ、誰が居ても構はず、それをやらなくちや承知しない。私とさも親しげに振舞ふのを面目にしてゐやがる――トルヴルド君、君斯うし給へ、君彼うし給へといふ。それが私に取つては實際苦痛で堪らない。あのまゝで行くと私の銀行の地位は持ち切れなくなるかも知れないよ。

ノ　ラ　あなた眞面目ですか？

ヘルマー　ですかつて、なぜ？

ノ　ラ　そんな事は小つほけな理由ぢやありませんか。

ヘルマー　何だつて？小つほけな？お前は私を小ほけな人間だと考へてるのか。

ノ　ラ　いゝえ、其の反對ですわ。ですから私は――

ヘルマー　いゝよ、お前は私の理由を小つほけだと言たから、卽私が小つほけなのに相違ない。小つほけな！宜しい。此事件はもう茲らで思ひ切て、最後の極りを附やう。(廊下の扉の所に行き、呼ぶ)エレン！

ノ　ラ　何の御用？

ヘルマー　（書類の中を探しながら）事を極めるのさ。（エレンが這入つて來る）さ、此の手紙を使に賴んで、持たせておやり。直ぐやるんだよ。宛はそれに書いてある。これがお錢。

エ レ ン　はい、畏りました。（手紙を持つて出て行く）

ヘルマー　（書類を重ねながら）さあ、剛情奧さん。

ノ　ラ　（息をしないで）あなた、あの手紙は、何んな用ですよ。

ヘルマー　クログスタッドの免職さ。

ノ　ラ　呼び返して下さい、よ！まだ間にあひますから。ねえ、あなた、取り返して下さいよ。私の爲です、それからあなたの爲にも、兒供の爲にも、ねえ、聞こえましたか？ねえ、何うぞ、あなたは、其の手紙が私達に何んな祟りをするか、御存知ないんですもの。

ヘルマー　もう遲い。

ノ　ラ　もう遲い。

ヘルマー　これ、ノラ。お前のしてる心配は、私に取つて少しも有りがたく無いんだが、それはまあ可いとするよ。何で私が惡德記者の怨なんか恐れる必要があるか、けれども、それはそれとして、お前の言つた事は構はない、私が非常に愛して呉れる證據なのだから。（ノラを兩腕に取り）それで先づ片は、ついたと言ふものだ、な、ノラ、何うしたつて、なるものはならせて置くさ。時機が來れば、必要に應じて力も出せば、勇氣も出す。まあ見てお出で、私の廣い肩で、何んな重荷が來ても背負つて立つてやるから。

ノ　ラ　（恐怖に打たれて）　あなた、それは何を仰やるのです？

ヘルマー　重荷をすつかりといふんだ。

ノ　ラ　（決心して）あなたにそんな事は決してさせません、決して。

ヘルマー　よし〳〵、ぢやあ二人で分擔するさ、夫と妻とでねえ。（ノラを手で輕く叩きつけながら）それで得心が行つたかい。さあ、さあ、さあ。神さまの鳩のやうな顔をしないで。今言つたやうな事は何でもない、みんな空想だ。さあ是からタランテラをすつかり彈いて、手皷の稽古をしなくちや。私は、奥の私の部屋に引込んで、兩方の扉をしめて置くから、何も聞こえる氣づかいは無い。幾らでも騒ぎたい程騒いでいゝよ。（入口の所で振り向いて）それから、ランク君が見えたら、私の部屋に來るやうに言つて呉れ（ノラ點頭して見せて、書類を持つて自分の室に入り扉を閉ぢる）

ノ　ラ　（恐怖に度を失つて、地から生えたやうに突つ立つ、そしてさゝやく）あの人は、やるに違ひない。屹度、やるに違ひない。何んな事があつても構はず、やるに違ひない。可けない、そればかしは、どんな事があつても、させやしない。それを爲すやうなら、何んな事だつて出來る。あゝ、何かそんな事にならない法は無いか知ら。何うしたらいゝだらう？（廊下のベルが鳴る）ランク先生よ――そんな事を爲すやうなら、何だつて、何だつて、何だつて出來ないことはない

（ノラ、兩手で顔を撫でゝ、氣を取り直し、扉の方へ行つてそれを明ける。ランク外に大外套を掛けながら立つてゐる。次の臺詞のあいだ段々暗くなる。）

ノ　ラ　先生、今日は！ベルの鳴り具合で、あなたと言ふことが分かりますよ。けど、あなた、今はトルヴルドの方へ入らしつてはいけませんよ。忙がしさうですから。

ランク　あなたはお暇ですか。

ノ　ラ　私はもう、何時だつて、あなたの時間を明けてるぢやありませんか。

ランク　有りがたう。ぢや、御深切に甘へて、出來るたけゆつくりして行きませう。

ノ　ラ　何ですつて？　出來る丈ゆつくりですつて？

ランク　はあ、それが氣に障りますか。

ノ　ラ　何だか變な仰りやうぢやありませんか。何か變り事でもありさうですか。

ランク　前から仕度をして待つてゐた事が、來さうですよ。只こんなに早く來やうとは思はなかつた。

ノ　ラ　（ランクの腕を取りながら）それは何んなことです？　先生。聞かせて下さい。

ランク　（ストーヴの側に座りながら）私は今、急な坂を驅け下りてるやうなものです。助けやうといつたつて、道はありません。

ノ　ラ　（ホツと息を引く）あなたが——？

ランク　私でなくて誰のことを言ふものですか——自分で自分を欺いて居たつて仕やうがない。家へ來る患者の中で一番みじめなのは私ですよ、奥さん。私は久しい間、自分の命勘定をやつてゐましたが——とう／＼破産です。一月たゝない中に私は墓場へ行つて腐らなくちやならない。

ノ　ラ　まあ！　何て、いやなことを仰る！

ランク　事柄が全體情ない、いやな事なんですからね。只困つたことには、其外にまだ／＼いやなことを澤山通り越さなくちやなりません。それからもう一つ最後の研究が殘つてゐて、それが濟むと意識破滅の始まる日限も決まつて來ます。そ

れで一言あなたに申上げて置きたいが、ヘルマー君は、あゝいふ蒲柳の質ですから、凡て恐ろしいもの避ける傾を持つてゐます。だから、あの人を私の病室へは入れたくないものです

ノ　ラ　ですけれど先生――

ランク　いや、來さゝないやうに仕なくちやいけません。――何んな事が有つても、それだけはいけませんよ。來たつて戸をしめて入れない。それで私が愈可けないと決まつたら、直ぐ名札の上に墨で十字架をかいて送りますから、その時には愈恐ろしい事が始まつたと思つて下さい。

ノ　ラ　何ですね、あなた、今日はまるで駄々つ子ですのね。今日こそ愉快にして居て下さるといゝのに。

ランク　正面から死といふものに睨まれてゐてですか？そして他人の罪惡の爲に私が苦しんで、天道なんてものが何處にあるか。尤もあらゆる家庭に斯ういふ風な、人の手に了へない應報は付いて廻るものです。

ノ　ラ　（兩方の耳をふさぎながら）もう〳〵そんな事は止して下さい。さあ快活になさいよ。

ランク　あゝあ、要するに世の中のことと言ふものは可笑なものだ。何も知らない私の脊髓が親父の放蕩の償ひをしなくちやならないなんて。

ノ　ラ　（左手のテーブルに向つて）多分あなたのお父さんは獨活やストラスブルグのパイがお好きであつたでせうね？

ランク　えゝ。それから菌も好きでした。

ノ　ラ　さうでせうね菌も。それから、きつと牡蠣もお好きでしたらう？

ランク　えゝ、牡蠣。牡蠣は勿論ですとも。

ノ　ラ　それから葡萄酒、シャンペン、皆お好きでしたらう？全くみんな結構なものばかしだけど、それが脊髓を悪くす

るなんてね。

ランク　それも悪くなつた脊髄が、自分でそんなものを喰つたわけぢやないですからね。

ノラ　えゝ。それが何よりもね。

ランク　（探るやうな目付で、女を見る）ふむ――！

ノラ　（一寸して）何をお笑ひなすつて？

ランク　いゝや。お笑ひなすつたのは、あなただ。

ノラ　いゝえ。あなたですよ、先生、お笑ひなすつたのは。

ランク　（立ち上りながら）あなたには思つたよりも深い所がある。

ノラ　私、今日は氣が違ひさうなんですよ。

ランク　さういふ樣子ですね。

ノラ　（兩手を男の肩にかけ）ね、先生、死の力でもあなたを私共から連れて行くことは出來ませんね。

ランク　何あに、居なくなれば譯なく忘れてお了ひなさる、去るものは日々に疎しでね。

ノラ　（心配氣に男の方を見る）さうでせうか。

ランク　新らしい友達を拵へて、そして――

ノラ　誰が新らしい友達を拵らへます？

ランク　あなた方がさ、私の居なくなつたあとでね。現にあなたは、もう、機敏にその機合を捉らへやうとしてお出でのやうに見える。あのリンデンの奥さんといふのは、昨日こゝで何をしてゐました？

ノ　ラ　あら、なんなこと、！クリスチナさんのことを嫉いてらつしやるんですか。

ランク　えゝ。嫉けますね、あの婦人が後繼になつて此家へ這入り込むんでせう。私か居なくなると、きつとあの人が――

ノ　ラ　叱ッ！そんな大きな聲をして。あの方がそこに居ますよ。

ランク　今日も來てゐるんですか。そうれ御覽なさい！

ノ　ラ　只私の衣裳を直ほしにですよ――何うしてあなた、そんなに駄々をお揑ねなさる！（ソーファにすわる）さあ、いゝ子におなんなさいよ、先生。私明日はね、ほんとに甘く踊つて見せますよ。其時にはあなた、御自分の想像でね、私があなたを喜ばせいばつかしに踊つて居るのだと思つていたらつしやい――無論それはトルヴルドにもさうですけれど

ランク（すわりながら）何です、それは？

（箱の中からいろ〳〵の物を取り出す）先生、こゝへお掛けなさい。お目にかけるものがありますわ。

ノ　ラ　さ、これ！

ランク　絹の靴下。

ノ　ラ　肉色。綺麗でせう？おや、何うしやう、暗くなつたこと。けど明日はね――あらいけませんよ、足の方許見てるらつしやい。あゝ、よござゐます、外も御覽なすつ差支ありませんわ。

ランク　ふむ――

ノ　ラ　何うして、そんなに批評的に眺めてゐらつしやるの？私に似合はないと思ひますか？

ランク　其の點は何うだか、私には、はつきり斷言が出來ませんね。

ノ　ラ　（暫く男の方を見て居て）あなた非道いわ！（靴下で男の耳の處を輕く打つ）それが罰ですよ（靴下をもとのやうに

巻いておく）

ランク　また外に珍らしいものがありますか。

ノ ラ　もう、あなたには見せない。禮を知つてらつしやらないから（一寸鼻唄をうたひ、いろ／＼な物を探しまわす）

ランク　（暫く默つて居た後）斯うして、あなた方と親しくして、無駄口でも利いて居ると私はつく／＼さう思ひますね、これが、もしまるで此の家に出這入りをしなかつたら、私の身體は何うなつてるでせう？

ノ ラ　（微笑しながら）さう思ひませう？あなたは私共へ入らつしやると、全く、樂しさうに見えますよ。

ランク　（眞直に自分の前を見ながら一層柔かな調子で）所が、もう、すつかりそれも見切らなくちやならない――

ノ ラ　下らないこと、私共を見切つて行らつしやるには及びますまい。

ランク　（前と同じ調子）そして後には、何一ツ禮を言はれるやうなこともして置かないし、せめて當座だけでも氣の毒と思つて呉れる人もありません――只もう居なくなつて空席が出來たと言ふ丈で、そんなものは代りが來さへすれば直ぐ埋まつて了ふ。

ノ ラ　それでもし私がお頼みすることがあつたら――？止しませう――

ランク　何ういふ御頼み？

ノ ラ　あなたの御親意の印に。

ランク　ふむ――といふのは？

ノ ラ　止さう／＼。ほんとうはね――大變な大變な役目。

ランク　一生の思出に是非それをさせて下さい。私はどんなにか嬉しいでせう。

ノ　ラ　だつて、あなた、どんな事だか、ご存じないでせう？

ランク　ぢや、聞かせて下さい。

ノ　ラ　いけませんよ。ほんとうに、言へないんですよ。全く大變な事ですもの――たゞ役目をして頂くといふのでなく、助けて頂いて、助言をして頂くといふのですからね――

ランク　愈結構です。何ういふ意味だか一寸私には見當が付かないが、まあ〳〵お話なさい。私を信用して下さらないか。

ノ　ラ　ほかに信用する人はありません。私に取つては、あなたが、一番眞實な友人でゐらつしやるのだから、私、お話しますわ。それでね、先生、お願といひますのは、玆に一つ事件が起りかゝつてゐましてね、それを止めて戴きたいのです。トルヴルドはあんな風ですから、私を愛してることといつたら全く不思議な程でせう。ですから何か起りでもしやうものなら、私のために命を捨てる位は何とも思つてゐませんの。

ランク　(女の方にかゞめながら)ノラさん、あなたはヘルマー君の外には誰も――

ノ　ラ　(一寸身體を起して)誰も――？

ランク　あなたの爲に命を捨てゝ厭はないものは居ないと思つてゐらつしやるか。

ノ　ラ　(悲しげに)まあ！

ランク　私は、是非此の事を、お別れする前に言つて置かうと、心に誓つたのですよ。こんないゝ機會は又と無からうから――さうだ、ノラさん、これ丈申したら、私の心持は分かりましたらう？それから、他に信用するものがなければ、私を信用して下さいといふ譯も分かつたでせう？

ノ　ラ　(無造作に靜かに立ち上りながら)一寸ご免下さい。

ランク　（女の通れるやうに道を開ける。けれども自分は座つたまゝでゐる）ノラさん――

ノ　ラ　（入口の處で）エレンやランプを持つてお出で！（ストーヴの方へ横切る）まあ先生惡いことを言つて下すつたわね。

ランク　（立ち上りながら）あなたを愛してるといふことがですか、愛してる點では誰にも讓らない。それがそんなに惡いことですか。

ノ　ラ　さうぢやありませんけれど、私にさう言つて下すつたのが惡いんです。仰る必要はなかつたのでせう？――

ランク　何ういふわけで？あなた、知つて居ましたか？――

（エレン、ランプを持つて入つて來る。それをテーブルの上に置いてまた出て行く）

ランク　ノラさん、ヘルマーの奥さん――あなた、知つて居ましたか？

ノ　ラ　だつてそんな、私が知つて居たか居ないかなんて事は言へませんわ。實際それは言へませんの。何うしてまあ、あなたはそんなに分からないんでせう？ほんとに美しく治まつて居たものをねえ！

ランク　まあ、とにかく、私は、斯んなにして精神も肉體もあなたに捧げてゐるのですから、さ、お話しの先きを聞かせて下さい。

ノ　ラ　（男の方を見ながら）話の先きをですつて――今になつて？

ランク　何うか、あなたの願といふのか聞かせて下さい。

ノ　ラ　今となつては、私、もう何も申し上げられませんわ。

ランク　いや／＼、そんな風にして私を罰しなくてもいゝでせう。男として出來ることなら、何でもしますから、あなた

のために働かせて下さい。

ノ　ラ　もう、私のためになんて事は、駄目ですよ。それに、本當は私、助けていたゞく必要はありません。只私の空想でそんなことを考へただけですから。えゝさうに決まつてます。無論さうですわ。（船底椅子にすわり、微笑しながら男の方を見て）あなたは好い人なんですけれどね、先生。あんなことを仰つて、お恥しくはなくつて？こんなにランプがテーブルの上で點つてゐると。

ランク　いや、さうも思ひません。が、もう私はお暇した方がよささうです――永のお暇を。

ノ　ラ　いけませんよ。そんなことはなりません。今迄通りに入らしつてゐて下さいな。あなたがいらつしやらないと宅で困ることは能く御承知でせう。

ランク　それは分かつてますが、あなたは？

ノ　ラ　それは知れて居ますわ、私斯うやつてあなたとお話するのが何よりも好きですもの。

ランク　これだ、私に思ひ違をさせたのは。あなたは私にとつちや謎だ。殆どヘルマー君と同じやうに私がお好きなのぢやないかと、そんな事を思つたのも何度か知れません。

ノ　ラ　ね？さうでせう？自分の愛する人も好きですけれど、話をして面白い人も好きですわねえ。

ランク　左樣――さういふ理窟もありはある。

ノ　ラ　私、小供の折には自然とお父さんが一番好きでしたわ。けれど女中達の部屋へ密つと這入つて行くのが大變面白かつたのですよ。第一女中達は私にお説法をしないでせう？それにあれ等の色々な話を聞くのが非常に面白かつたものですから。

ランク　おや、おや。ぢや私がその女中代りといふわけですね？

ノ　ラ　（飛び上つてランクの方へ急ぎ行く）あらまあ、先生、そんな意味ぢやないんですよ。ですけれど、お分かりでしやう？トルヷルドは丁度私に取つては、お父さんのやうなものですからね――

（エレンが廊下から入つて來る）

エレン　奥さま――（ノラへさゝやく。そして一枚の名刺を渡す）

ノ　ラ　（名刺を一瞥しながら）おや！（名刺を隱袋に入れる）

ランク　何か變つたことですか。

ノ　ラ　いゝえ。何でもないのですよ。只――私の注文して置いた衣裳が來たのですよ――

ランク　だつて、衣裳はそこに在るぢやありませんか。

ノ　ラ　あ、其の方は、さうですよ、けれど、これはまた別なのです――注文して置いたのです――家に内密なのですよ――

ランク　あはあ、ぢや、大秘密なんですね。

ノ　ラ　えゝ、さうですとも。あなた一寸トルヷルドの方へ行つてらつしやいよ、奥の部屋に居ますから。そして出來るだけ長く、出て來ないやうに引き止めてゐて下さい。

ランク　安心してるらつしやい。ヘルマー君を取り逃さないやうにして置きますから（ヘルマーの室へ行く）

ノ　ラ　（エレンの方へ）彼奴は臺所で待つてゐるのかえ？

エレン　はい。裏の梯子段から上つて參りました――

ノ　ラ　私今手が塞かつてると言へばよかつたに。

エレン　さう申しましたけれど、利目がございませんでした。

ノ　ラ　彼奴、歸らないつて言ふのかい？

エレン　はい。あなたにお話のすむ迄は歸らないと申して居ります。

ノ　ラ　ぢやお通し！靜かにね！それから、彼奴の來たことを言つちやいけないよ、家へ聞えるとびつくりするからね。

エレン　はい、承知いたしました。（出て行く）

ノ　ラ　來た、來た、とう〳〵近寄つて來た。いや、いや、そんな事があるものか。そんな事をさせやしない！

（ノラはヘルマーの室の扉の處にぬき指錠を下す。エレン廊下への扉を開き、クログスタッドを通す。そして後をしめ切る。クログスタットは旅行上衣を着、長靴を穿き毛皮の烏打帽子を冠つて居る。）

ノ　ラ　靜かにお話下さい。宅で家に居りますから。

クログスタッド　承知しました。私は構ひません。

ノ　ラ　何んの御用ですか。

クログスタッド　少しお知らせ申すことがございましてね。

ノ　ラ　ぢや早くして下さい、何ですか。

クログスタッド　御承知かも知れませんが、私は免職になりました。

ノ　ラ　それはね、私、止めることが出來なかつたのですよ、クログスタッドさんぎり〳〵まで爭つては見たけれど、役に立ちませんでした。

クログスタッド　そんなにお宅では、あなたのことを氣に懸けてお出でなさらないのですか。私があなたを何んな目にお會

はせ申すかも知れないといふことは、御承知でせうが、それでやつぱり――

ノ　ラ　あなたは私がすつかり宅に言つたと思つて入らつしやるの？

クログスタッド　いや、實はあなたが、それを話してお出でなさらないといふことはよく承知して居ました。私の知つてるトルヴルド、ヘルマー君なら、それを聞いてゐては、それ程の勇氣は出ませんからな――

ノ　ラ　クログスタッドさん、何うか宅のことを除り失敬なことは言はないやうにして下さいまし。

クログスタッド　勿論ですとも、充分相當の敬意を拂つて居ります。が、とにかく、あなたがさう心配して、事件を秘密にしやうとなさる所を見ると、昨日よりは、大分あなたに事の性質が分かつて來たと見えますな。

ノ　ラ　あなたに伺つたよりは、づつと能く分かつてゐますよ。

クログスタッド　左樣、私のやうな碌でない法律家にお聞きなさるよりはね――

ノ　ラ　あなたの御用と言ふのは？

クログスタッド　只、あなたが何うして居らつしやるかと思ひましてね、奥さん、私は一日あなたのことを考へて居りましたほんの金貸の、新聞ごろつき――まあ言つて見れば私のやうな奴でも――世間でいふ、人情といふ奴を少しは持つて居りますからな。

ノ　ラ　ぢやそれを見せて下さい。子供等のことを考へて下さい。

クログスタッド　それで、あなた方は、私の子供のことを考へて下さいましたか。併しもう其の事はよろしうございます。私は只、此の事件を除り重大に御考なさるなと申し上げた許りです。私は、今の處ぢや、裁判沙汰にしやうなどとは思つて居りませんからな。

ノ　ラ　さうでせう。そんなことをなさる筈はないと思つてました。

クログスタッド　元來全部極穩かに落着させられる事件です。誰にも知らす必要はありません。私共三人の間で纏められますよ。

ノ　ラ　ですけど、宅にだけは何うあつても知らせられません。

クログスタッド　何うしてさういふ事が出來ますか。あなた、御自身で、すつかりお拂になりますか？

ノ　ラ　それは、直ぐといふ譯には參りませんが。

クログスタッド　それとも此の兩三日の中にその金を拵へる手段がお有んなさるか。

ノ　ラ　それも直ぐといつて間に合ひさうなのはありませんけれど。

クログスタッド　また、それがお有んなさるにしても、今となつちや役に立ちますまい。すつかり金を積んで返さうと仰つても、證文はあなたの手には返しません。

ノ　ラ　それを取つて置いて何になさらうと言ふのです？

クログスタッド　只保存して置きたいのです。私の所有物としてね。世間の人には何も知らせやしません。さうして置いて、萬一あなたが無法な考なんかお起しなすつた場合に――

ノ　ラ　起こしたら何うします？

クログスタッド　例へば夫や子供を棄てゝ了つて、といふやうなことを考へるとか――

ノ　ラ　若し捨てゝ了つたら何うなります？

クログスタッド　または――何かもつと亂暴な事をお考なすつた場合に――

ノ　ラ　何うしてあなたそれを知つてゐます？

クログスタッド　そんなことは殘らず頭の中から打つ捨つておしまひなさい。

ノ　ラ　何うしてあなたは、私の心で思つてることを、ご存じですか。

クログスタッド　誰でも、始めは、さういふ事を考へるものです。私もそれを考へましたっけれども私には勇氣がなかつた――

ノ　ラ　私にも、それがない。

クログスタッド　その上――始めの嵐が過ぎて了ふと――そんな事は至つて馬鹿らしいものです。私こゝに御主人に當てた手紙をポケット入れて來て居ます――

ノ　ラ　すつかり打ち明けやうと言ふのですか。

クログスタッド　あなたは出來るだけ庇護つてあります。

ノ　ラ　（早口に）どんな事があつても、その手紙をあの人に渡して下すつちやならない。引き裂いて下さい。私何うにかしてお金は拵へますから。

クログスタッド　相濟みませんな、奥さん。併し私はさう申し上げたと思つてゐますが――

ノ　ラ　いゝえ、何も借りてゐるお金の事を言つてるのぢやありません。一體あなたは宅から何の位金を取らうと思つてらつしやるのですか――私がそれを差上げませう。

クログスタッド　私は御主人から金を貰はうとは思つてゐません。

ノ　ラ　何がそれぢや欲しいのです？

クログスタッド　では申しませう。私は世間に出る脚場か取り返したいのです。立身しなくつちやなりません。それで御主人

に助けて貰はうと言ふのです。此の十八ヶ月間私の履歴には一點の汚れもありません。其の間私は始終ひどい貧乏をしてゐました。けれども、一歩々々地位を作つて、もがいて行かうといふ一心で、滿足して居りました。處をかうやつて突き落とされて了つた。ですから、私は、もう一度もとの地位に這ひ戻らしてさへ貰へは良いといふ譯には、今ぢや參りません。立身させて貰はなくちやならん。ようございますか。今一度銀行へ入れて貰つて、もとよりも高い地位に据えて貰はなくちやなりません。御主人は私の爲めに地位を工夫して下さらなくちやならん――

ノ　ラ　宅が、そんな事をするものですか。

クログスタッド　いや、なさるでせう。私は御主人の人物を存じて居ります――よもや拒みはなさるまいと思ひます。そして私が銀行へ入れば、見て居らつしやい、直に支配人の右の片腕にはなつて見せます。トルヴルド、ヘルマーでなくニルスクログスタッドが株式銀行は切り廻してゐるんだといふやうにして見せます。

ノ　ラ　そんな事が出來るものですか。

クログスタッド　では何でせうなあなた――？

ノ　ラ　もう、よござんす。今こそ私、勇氣が出ましたよ。

クログスタッド　私を嚇かしちやいけませんよ。あなたのやうな華奢な、荒い風にもあたらないものが何うして――

ノ　ラ　まあ見てゐらつしやい！

クログスタッド　恐らく氷の下にとぢ込められて？あの冷たい黑い水の底に沈んで？翌年の春になつて浮き上つて來ると、醜い、いやあな姿にかはつてゐて、髮の毛は無くなつて、誰だか見分けもつかないやうになつて――

ノ　ラ　私を怖がらせやうたつて駄目ですよ。

クログスタッド　あなたも私を怖がらせやうたつて駄目です。さういふことは出來るものぢやありません、奧さん。また、やつた所で何の役にも立ちません。何んなことにならうとも、こちらの御主人はもう私の隱袋の中へ入れてゐるも同然です。

ノ　ラ　後々までも？私がゐなくなつてからも――？

クログスタッド　あなたの名譽は私の手に握つて居ることを忘れましたね。（ノラ無言で立ち上り、クログスタドを見る。）よろしい、覺悟がついたと見えますね。馬鹿なことはなさるなよ。ヘルマー君は、私の手紙を受取つたら、直ぐに返事を下さるでせう。よく覺えてゐて下さい。私がまた、こんな事をしなくちやならないのも御主人のお蔭ですよ。何うあつても其儘には濟まされませんからな。さやうなら、奧さん。（廊下から出て行く。ノラは扉の方へ急ぎ足に行つて、細目に開けて聽き耳を立てる）

ノ　ラ　彼奴、行つてしまふ。手紙は郵便箱に入れないらしい。何うして、何うして、そんな事の出來やう筈はない。（扉をだん／＼大きく開ける。）おや何うしたんだらう？彼奴まだ立つて居る。梯子段を下りて行かないやうだが、考へ直しでもしたのか知ら？ひよつとしたら――？（郵便箱の中へ手紙が入る。クログスタッツトの階段を下りて行く足音がだん／＼だん遠くなつて聞える。ノラ押しつけたやうな叫聲を上げる。暫く間を置いて）、郵便箱に！（おづ／＼と扉の所へ拔足して行く。）入つてゐる――あなた、あなた――逐々私達の破滅になりました！

（リンデン夫人が踊衣裳を持つて左手から入つて來る。）

リンデン　さあ、もうすつかり直りました。一寸着けて御覽なさいますか。

ノ　ラ　（嗄れ聲て、柔かに。）クリスチナさん、一寸來て下さい。

リンデン　（衣裳をソーファの上に投げて）何ぅなすつたんです？あなた、まるで顏色が變つてゐますよ。

ノ　ラ　こゝへ入らつしやい。あの手紙が見えますか？それ、ね——あの郵便箱のガラスから。

リンデン　はあ、はあ、見えます。

ノ　ラ　あの手紙はクログスタッドから來たんですよ——

リンデン　ノラさん——あなたに金を貸してるのはクログスタッドでしたね？

ノ　ラ　えゝ。ですからもう、愈、トルヴルドが何も彼も知つて了ふことになります。

リンデン　ノラさん、惡いことは言ひません。きつとその方があなた方二人のおためですよ。

ノ　ラ　あなたはまだ、すつかり御承知ないから、そんな事を仰しやるけれど、私實は名前を僞署してゐるのですよ——

リンデン　何うしたんですつて！

ノ　ラ　ですから、ねえ、クリスチナさん、あなた聞いてゐて下さい。私のために證據人になつて下さいな——

リンデン　證據人とは？何のです——

ノ　ラ　若し私が氣でも違ふやうだつたら——そんな事になるかも知れませんから——

リンデン　まあ、ノラさん！

ノ　ラ　それでなくとも何か私の身の上に變り事が起つたら——そして私がもう、斯うして居られない場合にでもなりましたら！——

リンデン　まあ、ノラさん、あなたは、まるで本心を失つてらつしやる！

ノ　ラ　若し誰か出て來て何もかも自分が引き受けやうといふ場合には——凡ての罪をね——わかりましたか——

リンデン　えゝ。けれども、何うしてあなたは、そんなことをお考へなさる——？

ノ　ラ　其時には、あなた、證據人になつてね、それは嘘だと言つて下さいよ、クリスチナさん。私は一寸も本心を失つちや居ません。斯うして言つてることは、私よく知つて居ますよ。それで言つて置くのですがね、此の事件は、ちつとも他人の知つたことぢやありません。私が何も彼もしたのです、私自身の罪です。何うか其の事を忘れないで居て頂戴

リンデン　それは忘れますまいけれど、何うしてさう言ふことを仰るか、私には分かりません――

ノ　ラ　それが何うしてあなたに分かりませう？　これから見られて來やうといふ奇蹟ですもの。

リンデン　奇蹟ですつて？

ノ　ラ　はあ、奇蹟。けれどもね非常に怖い事ですよ、クリスチナさん。何んな事が有つても、起つて呉れちやならない事です。

リンデン　おや、私、クログスタッドさんの方へ直ぐ參つて、話して見ませう。

ノ　ラ　いけませんよ。あの男はあなたに害でも加へますよ。

リンデン　あの人は、私の爲めなら何でもした時代がありましたのよ。

ノ　ラ　彼奴が？

リンデン　家は何處ですか。

ノ　ラ　そんな事を何うして私が――？　さう／＼（隠袋を探る）こゝに彼奴の名刺があります。けれ共、あの手紙を何うしませう――！

ヘルマー　（外から戸を叩きながら）ノラ！

ノ　ラ　（恐怖の叫）何うしたんですか？何か御用ですか。

ヘルマー　喫驚しなくてもいゝさ、這入つて來やしないから。お前、戸の差錠を下ろしちやつたな。衣裳を着て見てる所かい？

ノ　ラ　さうです、さうです、着て見て居るんですよ。大變よく似合つてよ、あなた。

リンデン　(名刺を讀んで)　ぢや、あの人の家は直ぐ近くですね？

ノ　ラ　さうですよ。けれ共、もう、そんなことは無駄ですよ、手紙があゝして郵便箱に入つてるんですもの。

リンデン　そして鍵はお宅で持つておいでなのですか。

ノ　ラ　何時もさうですよ。

リンデン　それぢや、クログスタッドさんにさう言つて、あの手紙を讀まない中に取返させませう。何か言譯をさせればすみますから――

ノ　ラ　けれど、もうトルヴルドが何時も郵便箱を開ける時刻ですから――

リンデン　引き止めてお置きなさいよ。いつも手を塞かせて置くとよござんす。私出來る丈早く歸つて來ますから。

(急いで廊下の扉を開けて行く。)

ノ　ラ　(ヘルマーの室の扉を開けて中を覗く)　あなた！

ヘルマー　うむ、もう何時もの部屋へ歸つて行つてもいゝかね。さあ、ランク君、行つて見やう、(入口の處で)おや、何うしたんだ？

ノ　ラ　何に？あなた。

ヘルマー　ランク君の話で、大變な衣裳稽古を見る積だつたが。

ランク　（入口の所で）私もさう思つて居た。聞き違へたと見える。

ノ　ラ　いけませんよ、明日の晩までは、私の晴衣裳は誰にも見せないの。

ヘルマー　何うしたんだ、お前は大變疲れてるやうに見えるよ。稽古を爲過ぎたんかえ？

ノ　ラ　いゝえ、未だ少しも稽古なんか爲やしません。

ヘルマー　けれども、お前、行らなくちやいけないだらう――

ノ　ラ　はあ、是非やらなくちやならないんですよ！けれどもね、あなた、來て助けて下さらなけりや、行れないんですもの、私皆忘れちやつた。

ヘルマー　あゝ、それはまた直に覺へるさ。

ノ　ラ　ですから、助けて下さいな、ねえ、よござんすか。それぢや約束して下さい――ほんとうに私、氣にかゝつてならないのですもの。あんな大勢の人の前で――今夜はあなた、すつかり私のために身體を空けて置いて下さいな。これつばかしでも仕事をしてはいけませんよ。さ、約束して下さい。よござんすか、あなた？

ヘルマー　約束するよ。今夜はすつかりお前の奴隷になります。可愛さうに、弱い人だな――！それはさうと、先づ――（廊下の扉の方へゆきながら）

ノ　ラ　そこへ行つて何をなさるの？

ヘルマー　手紙が來てやしないか見るのさ。

ノ　ラ　いけません、いけません。そんな事をしては。ねえ。

ヘルマー　何故さ？

ノ　ラ　あなた、お願ひですから止して下さい。手紙なんか來ては居ませんよ。

ヘルマー　ま、ま、見て來るよ（行かうとする）

（ノラはピヤノの前に座つてタランテラ踊の音樂の第一小節を奏べる）

ヘルマー　（入口の處に立ち止まる）おや！

ノ　ラ　私、最初にあなたとお浚へをして置かなくちや、明日踊れませんもの。

ヘルマー　（女の方へ行きながら）お前ほんとにさう神經に病んでゐるのかえ、ノラ？

ノ　ラ　えゝ、じつとして居られないんですよ。さ、直ぐお浚へにかゝりませう。お夕飯までにはまだ時間があります。よ、座つて彈いて下さいよ、あなた。何時ものやうに指圖して下さいよ。

ヘルマー　爲ろと言ふんなら、それはもう悦んでするさ。（ピヤノの臺の前に座はる）

（ノラ箱の中から手皷を取り出す。そして急いで長い雜色織のショールを身に纏ふ。そして一飛して、床の眞中に立つ。）

ノ　ラ　さあ、彈いて下さい踊りますよ！

（ヘルマーが彈きノラが踊る。ランクはピヤノの前ヘルマーの後に立つて眺めてゐる。）

ヘルマー　（彈きながら）もつと、ゆつくり、ゆつくり！

ノ　ラ　ゆつくりは踊れませんよ！

ヘルマー　これノラ、そんなに亂暴でなく。

ノ　ラ　いゝんですよ、いゝんですよ。

ヘルマー　(止める)ノラ！それぢや到底ものにならないよ。

ノ　ラ　(笑つて手鼓を振り動かす)だから、さう言つたぢやありませんか。

ラ ン ク　私が彈いて上げませう。

ヘルマー　(立ち上りながら)　あゝ、何うか――そうすれば私が指圖をするに都合がいゝから。

(ランクがピヤノに向つて彈ずる。ノラは段々、氣違ひのやうに踊り出す。ヘルマーはストーブの側に立つて居て、絶えずノラの踊振りを直すやうに差圖する。ノラは其の言葉が聞こえないやうに見える。其の髮の毛がほぐれて兩肩に垂れかゝる。ノラはそれに氣も付かない様子で踊り進む。そこへリンデン夫人が入つて來て、入口の處に呪はれたやうに立ち竦む。)

リンデン　まあ――！

ノ　ラ　(踊りながら)こんなに面白いことをしてゐるんですよ、クリスチナさん！

ヘルマー　何うしたんだ、ノラ、お前の踊るのはまるで、生死の騒ぎのやうだ。

ノ　ラ　全くそうなんですよ。

ヘルマー　ランク君、止めたまへ！これぢやまるで氣違だ。おい君、止したまへ！

(ランク、ピヤノを彈き止める。ノラ、それと同時に突然立止つて身動きもしない。)

ヘルマー　(女の方へ行きながら)こんなだらうとは思はなかつたが、お前は私が教へてやつたのを、すつかり忘れてしまつたな。

ノ　ラ　(手鼓を投げ出して)　ね、御覧なすつたでせう。

ヘルマー　これぢやあ、實際教はる必要がある。

ノ　ラ　ね、教はる必要があるでせう、だから、愈といふ間際まで、あなた、すつかり稽古をして下さらなくちやいけません。その約束をして下さいよ、ね。

ヘルマー　よろしい。よろしい。

ノ　ラ　今日と明日とは私の事のほか何も考へないで居て下さい。手紙一本だつて開けちやいけませんよ――郵便箱なんか見ちやいけませんよ。

ヘルマー　あゝ、お前、やつぱり、あの男を怖がつてるんだな――

ノ　ラ　さうですよ。私、怖いんですよ。

ヘルマー　お前の顔でちやんと判かつてるよ、ノラ――彼奴から來た手紙があの郵便箱の中にあるな。

ノ　ラ　何うですか。さうかも知れませんわ。けれどもあなた、今は何だつて讀んぢやいけませんよ。すつかり濟んで了ふまでは、私とあなたの間には、外の事は一切挿まないんですよ。

ラ ン ク　(ヘルマーに向つて柔かに)反對しないで置いた方がいゝ。

ヘルマー　(手を女にかけながら)赤ん坊だからな、爲たいやうにさせて置くさ。けれども、明日の晩、踊りがすんだら……

ノ　ラ　其の時はあなたの自由よ。

(エレンが右手の入口の所に出て來る。)

エ レ ン　奥さま、お夕飯の仕度が出來ました。

ノ　ラ　シャンペンを出してお置きよ、エレン!

エレン　畏りました。(出て行く。)

ヘルマー　おや／＼！宴會のやうだな。

ノ　ラ　えゝ、そして明日の朝まで飲み續けませうよ。(外の方へ向いて呼ぶ)それからね、エレン、パン菓子も出してお置き――どつさりだよ！これ一度つきりだから。

ヘルマー　(ノラの手を捕へながら)これ、これ、さう亂暴に興奮しちやいけない！もう一度家の小雲雀におなんなさい。

ノ　ラ　えゝ、なりますよ。けれども、まあ、食堂の方へいらつしやいよ。それから、あなたもね、ランク先生。クリスチナさん、あなたは、髮を解かすから手傳つて頂戴。

ランク　(彼方へ行きながら柔かに)此先き何か變り事でもあるのぢやないかね？何もなければいゝが――と言ふのは――

ヘルマー　何あに、なに、そんな譯ぢやない。何時も話したのがあれなんだよ、物を氣にかけて來ると、まるで赤ん坊になつて了ふ。

(兩人、右手の方へ出て行く)

ノ　ラ　それで？

リンデン　あの人は旅行してゐて此方に居ません。

ノ　ラ　そんな事だらうと、あなたの顏を見た時に思ひました。

リンデン　明日の晩は歸つて來ますから、手紙を殘して置きました。

ノ　ラ　そんな事は、なさらない方がよかつたつけ。出來かゝつたことなら、投とくより他に仕方がありません。けれども、なんですねえ、奇蹟を待つてる氣持といふものは何だか言ふに言はれない晴れがましいものですねえ。

リンデン　その待つてらつしやる奇蹟といふの、聞かせて下さい。

ノ　ラ　それは、あなたには分かりませんよ。食堂の方へいらつしやい私も直ぐ行きますから。

（リンデン夫人は食堂に入る。ノラは考を落ちつけるやうな様子で暫く立つてゐる。そして懐中時計を眺める。）

ノ　ラ　五時だ。夜半までもう七時間。それから明日の夜半まで二十四時間。さうすると丁度タランテラがお仕舞になる二十四時間と七時間？みんなで後三十一時間の命たわ。

（ヘルマーが右手の扉の所に現はれる）

ヘルマー　家の小雲雀は何うしたんだい？

ノ　ラ　（兩腕を擴げて夫に走りすがる。）此處に居ますよ！

第三幕

同じ室。中央にテーブル、其廻りに二三脚の椅子。テーブルの上にはランプがともつて居る。廊下への扉は開いたまゝで、二階から舞の音樂が聞こえる。

(リンデン夫人はテーブルの側に座つて、呆心の體で書物を繰り擴げてゐる。讀まうとして見るが注意が集まらない樣子。度々聞き耳を立てゝ廊下の扉の方を氣遣はしげに見る。)

リンデン　(懐中時計を見て)。まだやつて來ない。時間はもう無くなりかけてゐるのに。若あの人が來なからう者なら――(また聞き耳を立てる)あ、やつて來た――(廊下に行つて、徐つと外の扉を開ける。靜かな足音が階段の方に聞える。リンデンは囁く。)お入んなさいよ、誰も居ないから。

クログスタット　(入口の所で)あなたの手紙が來て居ました。あれは何ういふわけでおよこしになつたのですか。

リンデン　是非あなたに、お話したい事がありまして。

クログスタット　さうですか？そして此家で？

リンデン　私部屋借をしてゐますけど家では、お目にかゝれないのですよ、別に入口がないものですから。まあお入んなさい、二人きりですよ。女中達はもう寢て居ますし此の家では夫婦とも二階の舞踏會に行つてゐますから。

クログスタット　(室に入り來りながら。)はゝあ！それぢや、ヘルマー夫婦の人達は、今夜舞踏會に行つてゐますか。さうですかい。

リンデン　えゝ。行つたつていゝぢやありませんか。

クログスタッド　いゝですとも。何で悪いものですか？

リンデン　ぢや一寸あなたにお話がしたいんですが。

クログスタッド　私達二人の間に、話しがあると言つたら何でせう？

リンデン　澤山ありますよ。

クログスタッド　私はさうは思ひませんな。

リンデン　それは、あなたが私をほんとうに理解して下さらないからです。

クログスタッド　理解することが、何かありますか。これ程當り前のことは無かつたでせう？――薄情な女が好い相手を見つけて前の男を投げてしまう。

リンデン　あなたは實際私をそんな薄情者だと思つてらつしやるの？私があなたと別れたのは、そんな手輕なことだつたと思つて居らつしやるの？

クログスタッド　手輕ぢやありませんか。

リンデン　ほんとうにさう思つて居らつしやるのですか？

クログスタッド　若しさうでないなら何故(なぜ)あんな手紙をよこしました？

リンデン　だつて、あれが一番いゝ手段ぢやありませんか？別れなくちやならない事情になつた以上、私に對するあなたの愛を無くさすのが、一番よかつたでせう？

クログスタッド　（自分の兩手を握りしめながら）さういふわけでしたか？そしてその起りはといへば――皆金のためだ――

リンデン　私には頼りない母と二人の弟があつたことをお忘れなすちやいけませんよ。私達はあなたの行末を當にして、待つてゐるわけに行かなかつたのです。

クログスタッド　それであなたには、私を投げて他人に見更へる權利があるのですか。

リンデン　何うですか。私も其事については折々自分が惡かつたか知らと思ひ直して見ますの。

クログスタッド　（一層柔かに）あなたに捨てられた當座は、大地が足の下から沈んで行くやうな氣持でした。まあ、私を見て下さい私は今ぢや帆柱にすがりついてる難船者だ。

リンデン　今に救助船がやつて來るでせう。

クロクスタッド　來かゝつて居たんだ。所へあなたが出て來て立ち塞がつて了つたんだ。

リンデン　私は一寸も知らなかつたのですよ、あなた。あの銀行で私と入替にされたのが、あなただといふことを今日まで知らなかつたのですよ。

クログスタッド　ふむ、それぢやあ、その方はさうと爲て置いて、いよ〳〵それと判かつて見れば、何うです、私にそれを讓らうと仰るのですか？

リンデン　いゝえ。そんな事はあなたを救ふ道でなからうと思ひます。

クログスタッド　あゝ、その救ひです――私は是非ともさうして頂きたい。

リンデン　ですけど私も用心といふ事を覺えましたからねえ。生活と切迫詰まつた必要とが私を教育したのですよ。

クログスタッド　それから、私には口前の立派なのを信用するなと生活が教へて吳れました。

リンデン　ぢや生活はあなたに大變氣の利いた事を教へましたね。けれども實行の方なら信用なさるでせう？

クログスタッド　といふと――？

リンデン　お話によると、あなたは今難船して帆柱に縋りついて入らしやるでせう？

クログスタッド　さう言つてよい譯が澤山あります。

リンデン　さうすれば、私も難船して帆柱に縋がつてゐる女でせう？誰を愛するといふ當もないで。

クログスタッド　それは、あなたがすき好んで、おやんなすつたことだ。

リンデン　好き嫌ひを言ふ暇はなかつたのですよ。

クログスタッド　まあ、さうとして、それで何うすると言ふのです？

リンデン　斯うやつて難船した二人が手を握り合ふことが出來たら、何んなものでせう？

クログスタッド　何ですと？

リンデン　一本一本の帆柱にすがりついて居るよりか、それを組み合せて筏にした方がいゝ譯でせう。

クログスタッド　クリスチナ！

リンデン　私が此の町へ來たのは何ういふ譯だと思つて居らつしやるの？

クログスタッド　何か私の事でも考へて來たのか？

リンデン　何によりも仕事をしなくてはなりますまい？仕事をしなければ生きて行けませんからね。私の記憶してゐる限りでは、私は一生仕事のし通しですよ。仕事が私にとつては非常な樂になつて居ました。所が、かうして唯一人になつて見ますと、自分で自分を當に仕事をするといふことは、ちつとも幸福なものぢやありません。ですからね、あなた何うか當にして働く甲斐のある人を私に見付けて下さいな。そんな風にして仕事をさせて下さいな。

クログスタッド　いや、いや、其れは駄目だ。只もう女が自分を犧牲にしやうといふ、小說的な考に過ぎないんだ。

リンデン　あなたは、私を小說的な女だと思つて入らつしやつて？

クログスタッド　ではお前實際――？全體お前は私の過去を知つてゐますか。

リンデン　はあ。

クログスタッド　そして世間の奴が私を何う言つて居るか、それも知つてゐますか。

リンデン　ですけど、あなたは今、私と一所だつたらまるで別な人になつて居たらうとおつしやつたぢやありませんか？

クログスタッド　確にさうだらうと思ふ。

リンデン　今ではもう遲うござんすか？

クログスタッド　クリスチナ、お前は自分で今何を言つてるか、知つてゐるのか。あゝ知つてゐるに違ない。お前の顏にさう見えて居る。本當にお前にはその勇氣を持つてゐるか――？

リンデン　私には縋る男かいるし、あなたの子供には母が要るでせう？あなたには私といふものが必要だし、私には――私にはあなたが必要です。ね、あなた私はあなたの立派な本心を賴りにしますよ。あなたと一緒なら、私は何にも怖いものはありません。

クログスタッド　（女の手を取りながら）有りがたう――有りがたうクリスチナ。これから一つお前が見て吳れた本當の私に立ち戾つて世間の奴を見返してやるよ。あ、私は忘れてゐた――

リンデン　（聞き耳を立てながら）叱ツ！タランテラ踊よ。早くお歸んなさいよ。

クログスタッド　何うして？何うといふんだ？

リンデン　二階で踊つてるのが聞えませんか。あれが濟むと、直ぐこゝの人達が歸つて來るでせうよ。

クログスタッド　わかつたわかつた、歸らう。だが今となつては、もう手遲れだよ。私が此のヘルマーの家に對して行りかけてゐる事が何んな事だか無論お前は知るまいが。

リンデン　いゝえ、知つてゐますよ。

クログスタッド　お前それで以て、あゝいふ事をする勇氣が――

リジデン　それはね、あなただつて絶望すれば、何んな事もしたらうぢやありませんか。それは私察して居ますよ。

クログスタッド　あゝ何うかして取消すことが出來るといゝがな。

リンデン　出來ますよ――あなたの手紙はまだ郵便箱の中にあります。

クログスタッド　たしかに？

リンデン　えゝ。けれどもね――

クログスタッド　(探るやうな目付で女を見ながら)あはあ！分かつた。お前は、何んなことをしてゞも、お前の友人を救はうといふ腹なんだな。言つておしまひ――それがお前の本心なのかい？

リンデン　あなた、女は一度他人のために身を賣れば二度とそんなことはしないものですよ。

クログスタッド　ぢやあ兎に角、私は手紙を返して貰はう。

リンデン　お止しなさい。

クログスタッド　いや。さうするのが當然だ。ヘルマー君の見える迄待つてゐやう。そして返して貰ふやうに賴まう――それから用事は只私の免職に關する事だといつて――讀んで貰ふ必要のない事だと言つておかう――

リンデン　いけませんよ。その手紙は取り戻さない方がいゝのです。

クログスタッド　けれ共、お前が私をこゝへ伴れて來たのは、そのためぢやなかつたか。

リンデン　はあ。始め、びつくりしたものですから。けれ共ね其の後私は、此の家にいろ〳〵變な事があるのを感附きましたよ。是は何うしてもヘルマーさんに何も彼も聞かせて置かなくちやいけません。あの二人は、すつかり打明けて理解し合はなくちや駄目ですよ。こんな小細工や隱し事ばかし爲て居た日には、二人とも屹度今にやり切れなくなります。

クログスタッド　では、それもよからう。危險を冐してやつて見やうと言ふのならね。只私のすぐに、やれることが一つ有るが――

リンデン　（聞き耳を立てながら）早く、早く行らつしやい！踊が濟みました。もう一寸たつと、斯うしちや居られません。

クログスタッド　ぢや、通りで待つてるやう。

リンデン　えゝどうぞ。家へ連れて行つて下さない。

クログスタッド　あゝ今夜程幸福なことは、一生涯になかつたよ。

（クログスタッド、外の扉から出て行く。廊下と室の間の扉は開け放した儘）

リンデン　（器具を直ほして、自分の外出仕度のものを一つ處へ寄せながら）すつかり變つちやつた。すつかり變つちやつた。賴りにして働く人も出來るし、幸福な家庭も作られる。私これからは一生懸命で働かなくちやならない。早く歸つて來て吳れればいゝに。（聞き耳を立てる）あゝ歸つて來た！さあ、仕度をしなくちや。

（リンデン夫人は帽子と外套をとる。ヘルマーとノラの聲が外側できこえる。鍵を錠前に挿し込んで回はす。そしてヘルマーがノラを殆ど引きづるやうにして廊下に入つて來る。ノラはイタリヤ衣裳を着て黑い大きなショールを上

に羽織つてゐる。ヘルマーは燕尾服で、黒いドミノ上衣をかけて居る）

ノ　ラ　（入口の處でヘルマーと爭ひながら）いやですよ、いやですよ、いやですよ！私入りませんよ！も一度二階へ行きたいんですから。そんなに早く歸るのはいやですよ。

ヘルマー　だつて、お前！

ノ　ラ　ね、どうかね、あなた。もうたつた一時間でいゝから！

ヘルマー　もう一分もならないよ。約束したことを覺えてるだらう！さ、さ、入つたり！こゝに斯うしてゐては風をひくよ！

（男は女の抵抗するにも係らず、なだめるやうにして部屋の中につれて入る）

リンデン　今晩は。

ノ　ラ　クリスチナさん！

ヘルマー　おゝ、リンデンの奥さん！あなたこんなに晩く、こゝにゐらつしやつたのですか。

リンデン　はい、御免下さいませ。私、ノラさんの衣裳をつけて居らつ　やるのが、是非拜見したかつたものですから。

ノ　ラ　あなたは、こゝに座つたまゝ、私を待つてらしやつて？

リンデン　はあ。生憎と私、遲く參つたのですよ。あなた方は、もう二階に行つてらつしやるし、お目にかゝらないで歸るのも殘念しでたから。

ヘルマー　（ノラのショールを脱がせながら）ぢや、まあ、見てやつて下さい。充分見る値打があると思ひますよ。奇麗ぢやありませんか奥さん？

リンデン　はあ、ほんとうに――

ヘルマー　美しいぢやありませんか。皆かさう言つて居ました。只、此の女が恐ろしく剛情で困りましたよ、此奴めが。何うしてやりませうな？殆ど腕力で引張つて來たんですよ。

ノーラ　今に見て居らつしやい。後悔なさる時が來るから。もう唯半時間でいゝものを、殘らせて下さらないんだもの。

ヘルマー　それ！お聞きなすつたでせう、奥さん？あの通りです。併しタランテラを踊つた時には、皆が狂氣のやうに喝采しましたよ。そしてまた、充分それ丈の値打はあつたと言つていゝでせう——只、其の思想を具體させる場合にですな、少うし實感が出過ぎた嫌はあるかも知れませんが——つまり厳に申すと、藝術的といふよりも、少し行き過ぎて居たのですね。けれ共、そんな事は何うでもいゝ——とにかく、大成功をしました。そして、それが主要の目的なんですからね。で其の後と來てゐますから、ほうつて置いては、拙いでせう？——折角の印象を弱める事になりますからな？氣がついた以上、さういふ事はさせられません。で、私は、此小さい可愛らしいカプリ娘を脇の下に抱へて、大急ぎで部屋を一巡りしまして　、各方面へ挨拶をして、そして、——よく小説に書く奴ですが——その美しき幻は消えにけりでした！引込みといふものは、何時もぱつとしなくちや、いけませんからね、奥さん。所がノラには何うしても其の譯がわかりません。いやあ！此處は暑いな！（ドミノ上衣を椅子の上に投げかけて、自分の室の方への扉を開く。）おやこちらには、燈火がついて居ないな？うむ、其筈か！御免下さいよ——（入つて蝋燭に明りをつける）

ノーラ　（息の聞えないやうにつぶやく。）何うしました？

リンデン　（柔かに）あの人に話しましたよ。

ノーラ　そして——？

リンデン　ですけれどね、ノラさん　あなたは、すつかり御主人に打明けてお仕舞ひなさらなくちや。いけませんよ——

ノ　ラ　(殆ど聲を出さないで)さうだらうと思ひました！

リンデン　クログスタッドの方は少しも怖がる必要はありません。けれ共、兎に角すつかり言つてお仕舞ひなさる方がよござんすよ。

ノ　ラ　言ひますまいよ！

リンデン　だつて手紙が言つてしまひますよ。

ノ　ラ　クリスチナさん、何うもいろ／＼御心配下すつたわね。それで、もう、私のする事は分かりました。叱つ！

ヘルマー　(歸つて來る)そこで、奥さん、見てやつて下さいましたか！

リンデン　はあ。ぢや私はもうお暇申しませう。

ヘルマー　え？もうですか。此の編物はあなたのですか。

リンデン　(それを取る)はい、何うもありがたう。私、餘程忘れる所でしたよ。

ヘルマー　ぢや、あなたは編物をなさるのですね？

リンデン　はい。

ヘルマー　それよりか刺繍をなさる方がいゝでせう？

リンデン　さうですか！何うしてゞせう？

ヘルマー　何故といつて、其の方がづつと綺麗です。ご覧なさい！刺繍の時には左の手にそれを持つて。さう。そして右の手を長いなだらかな曲線にして針を働かす。さうぢやありませんか？

リンデン　はあ、さうのやうですね。

ヘルマー　けれ共、編物となると、何うも見惡い。ま、御覽なさい――兩腕を脇腹にくつ付けて、そして針が上に行つたり下に行つたり――其樣子が何だか支那人的ですね、時に今夜のシャンペンは實際素的だつたな。

リンデン　ぢや、お休み遊ばせ、ノラさん、もう剛情を張つちやいけませんよ。

ヘルマー　よく言つて下すつた、奧さん！

リンデン　あなた、お休み遊ばせ。

ヘルマー　（戸の處まで、リンデン夫人と一緒に行きながら）お休みなさい。氣をつけてお出でなさいよ。お送り申すといゝんだが――實際直ぐそばですから。さよなら、お休みなさい！（リンデン夫人去る。ヘルマーは後の戸を閉めて再び出て來る。）やつと、あの女を歸しちやつた。隨分、厄介だつたな。

ノ　ラ　あなた大變疲かれては居ませんか？

ヘルマー　いや、些つとも。

ノ　ラ　眠くもなくつて？

ヘルマー　少しも眠くない。却て非常に愉快だね。が、お前はッ・疲れて眠さうに見えるな。

ノ　ラ　えゝ。非常に疲れちやつた。もう直ぐ寢ませう。

ヘルマー　そらご覽！つまり、何時までも殘つて居させなかつたのが本當だらう？

ノ　ラ　それは、あなたのなさる事なら、何でも本當ですよ。

ヘルマー　（女の額に接吻しながら）それで、家の雲雀も大人しくなりました。お前ランクが今夜非常に愉快さうだつたのを注意したかえ？

ノ　ラ　さうでしたか？私、あの人と話をする折がまるで無かつたのですよ。

ヘルマー　私だつて、餘まり話はしなかつたがね、しかし、あの男があんなに上機嫌なことは久しい間見たことがないよ（暫くノラの方を見て、そして傍へよつて來る）斯うして自分の家へ歸つて、二人つきり差向ひで居ると、何とも言へない、いゝ氣持だな！此の罪作りめ。

ノ　ラ　そんな風に私の方を見ちやいけませんよ。

ヘルマー　私の一番貴い寶物を見て居るのぢやないか――美の塊だ、そしてそれが私のものなのだからな、全然私一人で占領して居るのだからな。

ノ　ラ　（テーブルの向側にゆく）今夜はそんなことを言つちやいけませんよ。

ヘルマー　（後に跟きながら）まだ、お前の血管の中にはタランテラが踊つてるな――それで益々お前が美くして見えるんだ。そら、聞こえるだらう他の人も、もう歸りかけてる。（一層柔かに）ノラ――もう直ぐ、家中が靜かになるよ。

ノ　ラ　何卒ねえ。

ヘルマー　ねえ、早く靜になるといゝだらう？それ私達が大勢の人の中に交つてゐるときには、私は殆ど御前と口をきかないやうにして居ただらう。そして遠く離れてゐて、只時々お前の方を窃み見をして居たゞらう――あれは、何いふわけだか知つてるかい？實はね、私が空想を畫いてゐたのさ、私達は秘密に相愛して居て、秘密に結婚約束をしてゐて、そしてそんなことを誰も知らないでゐる、と言つたやうな事を想像するからさ。

ノ　ラ　わかりましたよ、わかりましたよ。あなたは、すつかり私の事ばかり考へてゐらつしやるのでせう！

ヘルマー　さうして、歸る時には、お前の其のつる〳〵した柔かな肩から、輝くやうな首の邊へショールを掛けてやつて、

私はお前を花嫁だと想像して見る。結婚式が丁度濟んで、お前を始めて私の家へ連れて來る、そして始めて、たつた二人で全く他人を交ぜないで差向ひでゐると、お前の傍へて居るのが何とも言へず美しい。こんな事を考へて、今夜は、私、夜中、只もうお前の事ばかし思ひつめて居たよ。お前がタランテラを踊つて身體を搖つたり、ぐる／＼廻つたりして居るのを見た時には――私の血は煮えくり返つた――愈我慢がし切れなくなつて、それで私はあんなに早くお前を連れて歸つたんだよ。

ノ　ラ　あなた！あちらへ行つて下さいよ。そんな事は聞き度くないから？

ヘルマー　何ういふ譯なんだい？あゝ、お前は私をぢらしてるな！いけないよ――いけないよ。私はお前の夫ぢやないか。

（外の戸を叩く音）

ノ　ラ　（立ち上る）聞えましたか？

ヘルマー　（廊下の方へ行きながら）何方？

ランク　（外で）私ですよ。一寸入つてもいゝですか？

ヘルマー　（低い調子で、いら／＼して）えゝ、何の用事なんだらう！（高聲　）一寸待つたり。（戸を開ける）さあ、何卒、よく寄つて下すつた。

ランク　君の聲が聞こえたやうだつたから、それで、ふつと思ひ出してね。（見廻す）あゝ、此の部屋も隨分古い馴染だな。お二人で、睦じさうですね。

ヘルマー　君は二階でも隨分愉快さうに見えたね。

ランク　非常に愉快だつたよ。さうでなくつてまた何うするものかね。此世で得られる丈の愉快をしないといふ法は無い[illegible]

出來る丈の愉快を出來る丈永く行るがいゝさ。今夜の葡萄酒は結構だつたね――

ヘルマー　シャンペンが特別によかつたね。

ランク　君にも氣がついたかね？私が喉へ流し込んだ分量だけでも隨分なものだらう。

ノラ　トルヴァルドも隨分シャンペンを飲みましたよ。

ランク　さうでしたか？

ノラ　えゝ。シャンペンを飲みますとね、何時も非常な上機嫌になるんですよ。

ランク　結構です。働き甲斐のある一日を送つたあとで、一晩愉快を盡すに不思議はありませんからね。

ヘルマー　働き甲斐がある！さうさな、私は餘り(あんまり)その自慢も出來なかつたが。

ランク（ヘルマーの肩を叩きながら）けれども私は働き甲斐があつたよ、君。

ノラ　きつと、あなたは科學上の研究をやつてらつしやつたのでせう、先生？

ランク　さうですよ。

ヘルマー　おや、おや！ノラさん科學上の研究なんて事を言ひ出したね！

ノラ　結果はお目出度い方でしたか。

ランク　申分なく。

ノラ　おや、いゝ方でしたね。

ランク　極上々です、醫者に取つても患者にとつても、確實といふ結果です。

ノラ（早口にそして探ぐるやうな樣子で）確實と言ふと？

ランク　絶對的に確實だといふことを確めました。ですから其の後で私がお祝をするのも當然ぢやありませんか。

ノーラ　えゝ。全くさうですよ、先生。

ヘルマー　私も、それに異議はないが、只併し翌日になつて償ひをしなくちやならないやうなことの、無いやうにして貰ひたい。

ランク　それは君、此の世の中で、何だつて償なしに得られるものはないよ。

ノーラ　ランク先生、あなたは假面舞踏が大變お好きですか。

ランク　はい、滑稽な風をしたのが澤山出て來ると面白いですね。

ノーラ　ではね、此の次の假面舞踏には、私もあなたは何になりませうね？

ヘルマー　悠張りやさん！もう次の舞踏會のことを考へてゐるのかい！

ランク　私とあなた？それぢや、言ひますがね。あなたは天人にお成んなさい。

ヘルマー　成程な、しかし何んな衣裳を着たら天人に見えるだらう？

ランク　只もう不斷の着物を着てゐればいゝさ。

ヘルマー　そいつはいゝ！けれ共君は何になる積りか、まだ決まつてゐないか。

ランク　いや、其の方はもう、すつかり、決まつて居るよ。

ヘルマー　といふと？

ランク　此の次の假裝會には私は見えない物にならうと思ふ。

ヘルマー　隨分妙な考だな！

ランク　それ、あの大きな黒い帽子――君はあの目に見えない帽子の話を聞いたかね、其奴が上から降りて來て、お互の上に冠さるといふと、誰も見得ないやうになつて了ふ。

ヘルマー　(押しつぶしたやうな微笑で)見えない。それに違ない。

ランク　所で私はこゝへ來た用事を忘れる所だつた。ヘルマー君、私に葉巻を一本下さい。其の黒いハバナを一つ。

ヘルマー　さあ、さあ、どうぞ(箱を渡す)

ランク　(一本とつて端を切る)有りがたう。

ノ　ラ　(蠟マッチを摩りながら)火を點けさせて頂戴。

ランク　有りかたう。

(ノラがマッチを差し出す。ランクは其れで葉巻に火をつける。)

ランク　それぢや、さやうなら!

ヘルマー!　おゝ、君さやうなら。さやうなら。

ノ　ラ　よく、お休み遊ばせ、!先生。

ランク　御好意、ありがたう。

ノ　ラ　私にも、挨拶して下さいな。

ランク　あなたに?承知しました。お望みなら――よくお休みなさい。それから火のお禮も申して置きます。

(ランクは二人に頭を下げて挨拶して出て行く)

ヘルマー　(小聲で)あの男も餘つ程飮んだやうだな。

ノ　ラ　（外の事に氣を取られて居る體に）さうねえ。（ヘルマーは隠しから一束の鍵を取り出し廊下の方へ行く）あなた、そこで何をなさるの？

ヘルマー　郵便函を明けなくちや、一杯になつて居て、明日の朝の新聞が入らない。

ノ　ラ　今夜是れから仕事をなさるつもりですか？

ヘルマー　まさかねえ、――おや、何うしたんだらう。誰れか錠前をいぢつたな。

ノ　ラ　錠前を――？

ヘルマー　さうに違ひない。何うしたのだらう。女中どもがいぢる譯もなしと――ピンの折れたのがあるぞ。ノラ、お前のゝやうだが――。

ノ　ラ　（早口に）ぢや、子供でしやう――

ヘルマー　是れから斯ういふ惡戯は止させるやうにしなくちや、いけないよ。うむ――ね、そら、やつと明いた（中のものを取り出し、臺所の方に向つて呼ぶ）エレン、エレン、表の明りを消しな。（室に歸り、戸を閉める。手には數通の手紙を持つて居る）どうだ、御覧、溜つてるぢやないか。（手紙を繰りかへしながら）何だ是れは？

ノ　ラ　（窓の方で）手紙！　あゝ、いけません／＼あなた。――

ヘルマー　名刺が二枚、――ランクのだ。

ノ　ラ　ランク先生の！

ヘルマー　（名刺を見ながら）醫師ランク。是れが一番上に載つて居たところを見ると、入れて間もないのだらう。

ノ　ラ　何か書いてありますか？

ヘルマー　名の上に墨で十字架が、書いてある。御覧　縁起でもない思ひつきぢやないか。是れで見ると自分が死ぬといふ知らせとも取れる。

ノ　ラ　さうなのですよ。

ヘルマー　何だと！何かお前は知つてるか？何かあれが話したか。

ノ　ラ　えゝ、その名刺を寄こしたのはね、私共に暇乞のつもりですよ。あの人は是からひとりで閉ぢ籠つて死ぬ覺悟で居るのです。

ヘルマー　可哀さうに。無論長くは引き留められまいと思つたが、併し斯う急にとはねえ——まるで手を負うた獸のやうに逃げ出して穴の中に隱れて了ふ。

ノ　ラ　ですけど、成るやうには何うせ成るのですから、くど〳〵と言はないで行く方がよござんすよ、さうは思ひませんか？あなた。

ヘルマー　（あちこちと歩きながら）あの男とは別して懇意にしてゐたのだから、居なくなつたと聞いても本當とは思へないあの男の身に附いて居た色んな苦しみだの淋しさだのが雲の懸つたやうに私達の幸福な日光を包んで居たんだが、さうさな、詰りは斯うなるのが一番よかつたらう——少なくとも當人の爲には（突つ立つて）それから、恐らく私達にだつて其の方がいゝかも知れない、ねえノラ。さあこれで愈私達二人は、全く差し向かひになつたといふものだ。（兩手に女を抱き）ねえ、お前、私は何だかまだお前をしつかりと私のものにし得なかつたやうな氣がする。あのねえ、ノラ、私は折々さう思ふが、何かお前の身の上に非常な危險が降りかゝつて來て、そして私がそれを救ふために身體も生命も、其の他ありとあらゆるものを擲つて見たら何うだらう。

ノ　ラ　(身をすり抜け、確乎とした調子でいふ)さあ、あなた、其の手紙をお讀みなさい。

ヘルマー　いや／＼、今夜は止さう、お前のお伽をするよ、ねえ。

ノ　ラ　死にかゝつてる友人の事を考へながらですか？

ヘルマー　それもさうだな。お蔭で二人とも飛んだ目に遭つた。私とお前の仲にまで、何だか厭なものが出て來て、死ぬるの亡びるといふことを考へさせる。何うかして此の考を打ちやる工風をしなくちやならないが、それまではまあ、別々に居やうよ。

ノ　ラ　(たゞ首に兩腕を卷いて)あなた、おやすみなさい。

ヘルマー　(女の額に接吻しながら)おやすみよ、家の小鳥さん。よくおやすみ。どれ行つて手紙でも讀まう。

(ヘルマーは自分の室に入り、扉をしめる)

ノ　ラ　(狂氣の如き目付で身の廻りを手探り、ヘルマーのドミノ上衣を掴んで自身に打ちかけ、早口に、しやがれた、切れ／＼の口調で囁く)もう二度とあの人には逢へない。もう／＼、何んな事があつても(頭からショールを被る)兒共にももう逢へない、もう逢へない。おゝあの黑い氷のやうな水！あの底の知れない――！あゝ、是れが濟んで了つた事だつたら何んなにか！あゝ丁度今あの人が手紙を取つて、讀んで居る、いや／＼、まだ／＼。おさらばですよ、あなた。――そして兒共等も達者でお出で――。

(女は廊下から走り出やうとする。其の瞬間にヘルマーが手荒く扉を明け、開いた手紙を手に持つて立ち見はれる)

ヘルマー　ノラ！

ノ　ラ　(叫びながら)あゝ！

ヘルマー　是れは何だ？此の手紙の中に書いてあることをお前は知つてるか。

ノ　ラ　はい知つて居ます。ですから、わたし、もう行きます　通して下さい。

ヘルマー（引き留めながら）何處へ行くといふんだ？

ノ　ラ（振り離さうとして）私を救ふ必要はないのですよ、あなた！

ヘルマー（よろきめきながら）　本當だ！この中に書いてあるのは本當かい？――いや、いや！こんなことが本當である筈はない。

ノ　ラ　本當です。それと言ふのも私、あなたを愛する爲には何をしてもいゝと思つたからです。

ヘルマー　淺薄な逃口上は止めなさい。

ノ　ラ（一足夫の方へ進んで）あなた――！

ヘルマー　なさけない奴！何たる事を爲でかしたのだ！？

ノ　ラ　だから私は行かして下さいよ、――私を救ふ必要はありません。あなたが自身で私の罪を着て下さるには及びません。

ヘルマー　お芝居ぢやないよ。（扉の錠を下ろす）こゝに居て、すつかり自分のした事を話すがいゝ。お前には自分の爲た事が分かつてゐますか。返事をしなさい。自分のした事が分かつてゐますか。

ノ　ラ（固くなつてじつとヘルマーを見る）はい、今始めてよく分かりかけました。

ヘルマー（あちこちと歩きながら）氣がついて見れば、實に何といふ恐ろしい事だらう此の八年があひだ、――私の誇りにして喜んでゐた其の女が――僞善者、噓つき――そればつかりならいゝが、もつとなさけない、なさけない、罪人なのだ

――えゝ、この惡黨め、うゝ、うゝ。

（ノラは默つてじつと男を見てゐる）

ヘルマー　これ位の事があらうとは、氣がつかなくちや、ならなかつたんだ。すつかりお前の親父の不正直を――默れ！お前の親父の不正直を受け繼いだのだ――宗教も無ければ、道德もなく、義務といふものもない。私はそんな人間を庇つた爲に飛んでもない刑罰を受けなくちやならない。それも畢竟はお前の爲に行つた事だ。そしてお前の返禮は此の通りだ。

ノ　ラ　えゝ――此の通りです。

ヘルマー　お前は私の幸福といふものを、全く打ち壞して了つた。私の將來は亡びて了つた。あゝ、考へても恐ろしい。私は惡漢の手中に陷つてゐるのだ。そいつの爲たいまゝに爲せられ、そいつの欲しいだけ食られても、私は默つて聽いて居なくちやならない。そして此の災難はみんなお前のお蔭なのだ。

ノ　ラ　私が居なくなつたら、あなたの御迷惑は無くなります。

ヘルマー　甘いことを言ひなさんな。お前のお父つさんも、何時も口前がよかつた。お前は口癖のやうに居なくなる〳〵と言ふが、それが私に對して何の役に立つか。何にもなるものぢやないよ。あいつはそんな事に頓着なく此の事件を公にするだらう。さうなると、私は共犯人と見られまいものでもない。世間では私が此の事件の底に居て、お前を教唆したのだと思ひます。そして、それがみんなお前のお蔭なのだ。お禮を言つて置くよ――結婚して以來たゞもう大事にして可愛がつてやつた、そのお前のお蔭なのだ。さあ、是れで分かつたら、お前のした事が分かつたらう。

ノ　ラ　（冷靜に）はい。

ヘルマー　實に、あるまじき事だ。事實とは思へない。併し兎に角打ち合せをして、片を付けなくちやならない。その肩掛

を脱いでおくれ。脱げと言ふぢやないか先づ何うかして彼奴を宥める必要がある――何んな事をしても秘密に包くさても保たなくちやならない。それから私とお前とは、今まで通りにやつて行く、併しそれは勿論世間體だけの事だ　お前もやつぱり此の家に居るのは無論だが、兒共の教育はお前には任されない。こいつは何うも、お前に頼む譯に行かない――あゝ、此んな事を、あれ程愛してやつた女に言はなくちやならんとは、何うしたことだらう。今だつて愛してやる心は違はないのだが、併しもう駄目だ。今日からは幸福といふ問題は無くなつて了ふ。たゞもう零落して、ぼろ／＼になつた、影のやうなものを維持して行くだけだ。（ベルの音がする、ヘルマー身を起こす）何だあれは？此んなに遲く！愈やつて來たのかな、彼奴か知ら――ノラ、お前は隱れなさい。病氣だと言ふんだ。

（ノラは身動きもしないで立つて居る。ヘルマー扉の方へ行つて明ける）

エレン　（着物を引つかけたまゝ、廊下で）奥さまにお手紙が參りました。

ヘルマー　私に寄越しな。（手紙を引つかんで、扉をしめる）さうだ、あいつからだ。お前はいけませんよ。わたしが讀む。

ノ　ラ　讀んで下さい。

ヘルマー　（ラムプの側で）讀む勇氣も出ない。二人の身の破滅だらう、私もお前も。いや、讀む必要がある。（急いで手紙を荒く開く。二三行讀んで封入してあるものを見る。喜びの叫び聲）ノラ！

（ノラは不思議さうに男を見る）

ヘルマー　ノラ！何うしたんだらう！待つたよ、もう一度讀んで見やう。さうだ／＼違ひない。私は助かつたよ。ノラ、私は助かつたよ。

ノ　ラ　私は？

ヘルマー　無論お前もだ。二人とも助かつた、二人とも。これ御覧、あの男がお前の證文を返して來た。手紙には後悔して詫をすると書いてある。是れから幸福な生涯に這入ると書いてある――まあ、あの男の事は何うでもいゝが、私達は助かつたな、ノラ。是れでもう、誰れもお前を苦しめるものは無いよ。ねえ、ノラ――だが先づ何よりも此のいやな物を七里けつぱいとしやう。も一度見て――(證文をちよつと見て)いや、見まい〳〵、今までの事は、私に取つてはほんの夢のやうなものだ。(證文と二通の手紙とを裂いてずた〳〵にする、そして火の中に投じて燃えるのを見つめる) さあ、無くなつちやつた。手紙によるとクリスマスの晩から――して見ると、ノラ、此の三日といふもの、お前は隨分つらかつたらうな。

ノ　ラ　此の三日のあひだ、全く死物ぐるひでしたのよ。

ヘルマー　そして外に苦しみを逃れる道といつては無いんだから――いや、もう、あの恐ろしい事は考へまいね。私達はたゞ愉快に祝して繰り返して置かう――もう濟んだ事だ。もう濟んだ事だ。これノラ、お前、私の言つてることが聞こえないかえ。まだ充分に事柄が分つてるないやうだな。さうだよ、もう何も彼も濟んだよ。何うしたのだ、其のむつかしい顏付は。あゝ、分かつた、可哀さうにお前は私がまだ怒つて居ると思つてるね。私はもう堪忍してやつたよ。誓つて許したよ。一切許してやつたのだからね。お前の爲た事はみんな私を愛する心からだ、それは私もよく知つてるよ。

ノ　ラ　それだけは本當です。

ヘルマー　お前は妻として充分私を愛して呉れた。たゞ手段を誤まつたのだ。けれども私はそんな弱點のためにお前を疎略にするやうな男ぢやないよ。そんな男ぢやないから、たゞ私に寄り縋つてさへ居ればいゝ。私はお前の相談相手にも案内者にもなるよ。萬一この女らしいお前の弱點が一倍あはれに見えないやうな私なら、ほんとうの男でないさ。先つきはだしぬけで、びつくりしたものだから、非道いことも言つたが、あれを氣にかけちやいけないよ。あの時は、全く、世界

が耳元で、でんぐり返るかと思つた。私はもうお前を許したよ、ノラ、誓つて許したよ。

ノ　ラ　お許し下すつて、ありがたうございます。

（右手から出て行く）

ヘルマー　あ、これ、お待ち。（覗き込んで）そつちへ行つて何をするつもり？

ノ　ラ　（内から）人形の衣裳を脱ぐのですよ。

ヘルマー　（入口の所で）あゝ、さうお爲、少し靜にして、落ちつくといゝんだよ、家の小鳥さん、じつとして休むがいゝ。私の廣い翼で覆うてゐてやるから。（扉の傍をあちこち歩きながら）あゝ、實に美しい――平和な家庭たな、ノラ。斯うしてゐさへすれば、お前は安全なものだ。鷹に追つかけられた鳩のやうなお前を、斯うやつて、私が救つて、庇つてゐてやる。今に其の胸の動悸も靜めてやるよ、ノラ。今すぐ靜めてやるよ。明日になると、何も彼もすつかり一變したやうになるよ――みんなもと通りになつて來るよ。お前を許したといふことも、此の上私が言ふ必要もなく、お前自身で納得されるやうになります。全體、何うして私はお前を追ひ出すの、叱りつけるのと、そんな氣持になつたらう。ノラさんは生粹の男の胸中といふものを知るまい。男が自分の妻の過ちを――心の底から、眞つ正直に許したときの、其の氣持といふものは言ふに言へない美しい、穩かなものだよ。女は其の時から二重の意味で男の持ち物になる。言はゞ二度生れたやうなものだ。妻であると同時に兒共になる。お前も此の後は私に對してさういふ關係になるよ、いゝかい。もう何も氣にかけないでおいで、たゞもう其の胸を開いて、私に任せて居れば、私がお前の意志にも良心にもなつてやる。（ノラ不斷着に着かへて入り來たり、テーブルの方へ横ぎる）おや、何うしたんだ？寢間へは行かないのか。着物を着かへたね。

ノ　ラ　えゝ、あなた、やつと着物を着かへましたよ。

ヘルマー　けれども何うしてこんなに遅く？

ノ　ラ　今夜はわたし寝ないのです。

ヘルマー　でもお前――

ノ　ラ　(懐中時計を見て)まだそんなに遅くはありません。ちよつと座つて下さいな、あなた。お互に言ひたい事が澤山あるから(テーブルの一方の椅子に腰をかける)

ヘルマー　ノラ、何うした譯だ。其の冷たいむつかしい顔付で――

ノ　ラ　座つて下さい、幾らか暇が取れるでせうから。私、澤山あなたに話したい事があるのですよ。

(ヘルマーはテーブルの向ふ側に腰をおろす)

ヘルマー　だしぬけに變ちやないか。お前の言ふことはさつぱり分らない。

ノ　ラ　分かりますまい！つい今夜まで――あなたには私といふものが分からないし、私には、あなたといふ者が分からなかつたのですよ。いゝえ、邪魔をしないで居て下さい。私の言ふことを聞いててさへ下さればいゝのです。私達はいよいよ最後の極まりをつける時になりましたよ、あなた。

ヘルマー　それは何ういふわけだ？

ノ　ラ　(しばらく默つてゐた後)あなたは、斯う二人向き合つてゐて、一つ不思議な事があるとはお思ひなさらないの？

ヘルマー　何だらう？

ノ　ラ　私達が結婚してから、もう八年になりますね。それに、不思議ぢやありませんか、あなたと私が夫婦同士向ひになつて眞面目な話をした事は、ついぞ一度もありません。

ヘルマー　眞面目な話！ふむ、何ういふ話？

ノ　ラ　全八年、もつと經つたでせう――始めて私達が近づきになつて以來――私達はたゞの一度も眞面目な事を眞面目な言葉で話し合つたことはありませんよ。

ヘルマー　ぢや、お前の何うすることも出來ない心配事まで持ちかけてお前を苦しめろといふのかい？

ノ　ラ　私、心配事を言つてるのぢやありません。私達は、何んな事だつて、ついぞ底の底まで眞面目に話し合つたことが無いといふのですよ。

ヘルマー　でもお前、眞面目な事をお前が何うすることも出來ないぢやないか。

ノ　ラ　さあ、そこですよ。あなたは少しも私といふものを理解して居らつしやらなかつたでせう？私は今まで大變不法な取扱を受けて居りました第一は父からですし、其の次はあなたからですよ。

ヘルマー　何をいふ？お前のお父つさんと私から不法の取扱をされたと？――あれ程深くお前を愛してゐた私達に？

ノ　ラ　（頭を振りながら）あなたは決して私を愛して居らつしやつたのではありません。愛するといふことを慰みにしてお出でなすつたのです。

ヘルマー　何うしたんだ、ノラ。何といふ言葉だ？

ノ　ラ　いゝえさうですよ、あなた。私がまだ父の家に居た頃は、父が色々と自分の考へを話して呉れまして、私は其の通りを守つてゐました。たとひ違つた考へはあつても父が好みませんから、自然隱すやうになります、で父は私を人形つ子だと言ひましてね、ちやうど私が人形と遊ぶやうに、私と遊んでゐたのですよ。其うしてゐる内にあなたの家へ住居を替へたのです。

ヘルマー　結婚したものを、何といふ物の言ひやうだ――

ノ　ラ　(それに構はず)さうです、私は父の手からあなたの手に移りました。するとあなたが、何も彼も自身の好みで極めてお了ひなすつて、私はあなたと同じ好みになつて了ひました、時々はそんな風に見せかけてゐたこともありませうし――何ちらか本當だか分かりませんが――兩方ともあつたのでせう。其の頃の事を振りかへつて見ると、私はまるで手から口へ入れる乞食のやうな生活をしてゐたと思ひます　私はあなたの前で藝當して居たのですよ、ねえ。もつともあなたがそれを望んでゐらつしやつたのだから。そんな風で、あなたと父として私に害をお加へなすつたのです。私の一生が無駄に費えたのはあなたの罪ですよ。

ヘルマー　何うしたんだ、ノラ、随分不條理な恩知らずの言ひ方ぢやないか。お前は此の家へ來て幸福だつたとは思はないか。

ノ　ラ　いゝえ、ちつとも、そんなことは思ひません。始めはさう思つてゐましたけれど、間違でした。

ヘルマー　幸福でなかつたと?

ノ　ラ　えゝ、たゞ愉快だつた丈です。あなたには何時も親切にして頂きましたけれど家は兒共の遊び部屋でしか無かつたのですよ。其中で私はあなたの人形妻になりました。ちやうど父の家で人形子になつてゐたのと同じことです。それから兒共がまた、順に私の人形になりました。そして私が兒共と一緒に遊んでやれば、喜ぶのと同じやうに、あなたが私と遊んで下されば面白かつたに違ひありません。それが私達の結婚だつたのですよ。

ヘルマー　誇張して言ひ過ぎた所はあるが、お前のいふことにも道理はある、しかし今日からはこれを一變させる。遊び事の時代が過ぎて、今は教育の時代が來たのだ。

ノ　ラ　誰れの教育です？私のですか兒共のですか？

ヘルマー　それはお前、兩方さ。

ノ　ラ　あなたの力では、私を教育してあなたに適する妻になさることは出來ません。

ヘルマー　お前がそんな事を言ふのか。

ノ　ラ　それから私は――兒共を教育するに適當して居るでせうか？

ヘルマー　ノラ！

ノ　ラ　あなた御自身で、つい二三分前に、兒共は私に托されないと仰つたぢやありませんか。

ヘルマー　激した機につい言つたのだ。どうしてお前そんなことにこだはつてゐるのだ。

ノ　ラ　實際私には兒共は托されません――あなたの仰る通りです。さういふ問題は私の力に及ばないのです。私にはそれより先に解釋する問題があるのですよ――私は自分を教育する工風を爲なくちやなりません。それにはあなたの助けは役に立ちませんから、私ひとりで始めます。私が是れ切り玆でお暇を貰ひますのは其の爲ですよ。

ヘルマー　（びつくりして飛び上り）何だと？――何ういふ意味だか――

ノ　ラ　自分自身や周圍の社會を知りますため、私は全くひとりになる必要があります。ですから、此の上あなたと一緒に居ることは出來ないといふのです。

ヘルマー　ノラ！　お前！

ノ　ラ　私はすぐ行かうと思ひます。今夜はクリスチナさんが泊めて呉れませうから――

ヘルマー　お前は氣が違つな。私がそれは許しません、禁じますぞ。

ノ　ラ　今となつて何を禁じやうと仰つても、私にそんな事は無用ですよ。それでは私、自分の所有品だけ持つて行きます。あなたからは、此の後も一切お世話にならない積りでゐます。

ヘルマー　狂氣の沙汰だな。

ノ　ラ　明日私は郷へ行きます。

ヘルマー　郷へ！

ノ　ラ　郷と言つても昔の事ですけど、何かの便宜が見つかり易からうと思ひますから。

ヘルマー　お前のその盲目的な無經驗で――

ノ　ラ　ですからあなた、經驗を積む工風をしなくてはなりません。

ヘルマー　それで家も夫も兒共も振り捨てやうなんて、お前は世間の思はくといふものを考へない。

ノ　ラ　そんな事には構つて居られません。私はたゞ爲やうと思ふことは是非爲なくちやならないと思つてる許りです。

ヘルマー　言語道斷だ。お前は全體そんな風にして、お前の一番神聖な、義務を棄てることが出來ますか。

ノ　ラ　私の一番神聖な義務といふのは何でせう？

ヘルマー　それを私に尋ねるのかい。夫に對し兒共に對するお前の義務さ。

ノ　ラ　私には同じやうに神聖な義務が外にあります。

ヘルマー　そんな事があり得やうか。何んな義務といふのだ。

ノ　ラ　私自身に對する義務ですよ。

ヘルマー　何よりか第一にお前は妻であり母である。

ノ　ラ　それは私、もう信じません。何よりも第一に、私は人間です、ちやうどあなたと同じ事です――少なくとも是れから、さうならうとして居る所です。無論世間の人は大抵あなたに同意するでせう。書物の中にも書いて居ませう。けれども是れからもう、私は大抵の人の言ふことや、書物の中にあることで滿足しては居られません、自身で何でも考へ究めて明かにして置かなくちやなりません。

ヘルマー　お前は家庭に於ける自分の地位といふものを明かにしては居ないのか。此ういふ問題に間違この無い案内者をお前は持つて居ないか。お前には宗教といふものは無いか。

ノ　ラ　それはね、あなた、私は充分に宗教が何んなものだか知らないのですよ。

ヘルマー　何だつて？

ノ　ラ　私はあの聖禮式の折に牧師から聞かされた事の外には、何も知つて居やしません。牧師は宗教といふものを斯うだの彼あだのと說明しました。私、こゝを離れて獨りになりましたら、其の事も檢べて見ませう。牧師の敎へたことが本當か少なくとも私に取つてそれが本當か、見て見ませう。

ヘルマー　驚き入つた話だ！が萬一宗敎がお前を導くことが出來なければ、お前の良心に訴へやう――お前だつて　等かの道德心は持つて居やうから。それとも何かえお前には良心も無いのだらうか。

ノ　ラ　さうですね、それは、むづかしい問題でせう、私は實際知りません――そんな事には全く方角が立つて居ないのですよ。たゞ私、あなたのお考へなさるのと全で違つて考へてゐるといふことだけは申されます。それからまた、法律だつて、私の思つてた事とは全で違ふといふぢやありませんか。そんな法律は私、正しいとは信じられません。女が死にかゝつてる父を痛はる權利も、夫の命を救ふ權利もないといふのですから、信じられませんわ。

ヘルマー　お前の言ふ事は兒共のやうだ。お前は自身の住んでる社會を理解し無い。

ノ　ラ　はあ、理解して居りません。是れから骨折つて見ます。社會と私と――何ちらが正しいか決めなくてはなりませんから。

ヘルマー　ノラ、お前は病氣になつたのだ、熱病に罹つたのだ。殆ど本心を失つて居はしないかと思はれるよ。

ノ　ラ　今までに今夜ほど氣分のはつきりしてゐることはありません。

ヘルマー　それほど、はつきりした考で、夫や兒共を棄てるといふのかい。

ノ　ラ　さうですよ。

ヘルマー　では、もう、說明の途はたゞ一つかし殘つて居ない。

ノ　ラ　何ういふのですか？

ヘルマー　お前はもう私を愛しない。

ノ　ラ　愛しません、それが肝要の點です。

ヘルマー　ノラ！お前、さう言ひ得るかい。

ノ　ラ　あなた、お氣の毒です、何時も親切にして下すつて。けれども何うすることも出來ません。もうあなたを愛して居ないのですから。

ヘルマー　（辛うじて氣を取り直しながら）其の點も、はつきりと考へたのかい？

ノ　ラ　えゝ、確かに。もう此の家に居まいといふのも、其の爲です。

ヘルマー　では序でに、何うして私がお前の愛を失つたか、聞かせて吳れまいか。

ノ　ラ　はあ、聞かせませう。それは奇蹟の見はれなかつた今夜の事です。其の時始めて私は、あなたが、思つて居たとは違つた人だと氣がつきました。

ヘルマー　もつと明白に說明して吳れ、私には分からない。

ノ　ラ　私ね此の八年のあひだ、じつと辛抱して待つてゐたことがあるのですよ。それは勿論、そんな奇蹟が不斷に見はれるものでないのは、知れて居たからです。所へ今夜の大さはぎが起こつて、私を嚇したものですから、其のとき私は、固い信仰で以て、「さあ愈奇蹟が見はれて來る」と自分にさう言ひました。クログスタッドの手紙がまだ郵便箱にあつた時は、私は、あなたがよもや彼奴の申し出しにへこたれるやうな考をお起こしなさらうとは思はなかつたのですよ。あなたは彼奴に對して「其の事を世間殘らず公にしろ」と仰るだらうと信じて居ました。そして――

ヘルマー　けれどもさうして自分の妻の名を恥辱や不名譽の中に曝すといふことは――

ノ　ラ　そして、あなたが進み出て何も彼も身に引受けて「罪人は私だ」と仰るだらうと信じてゐました。

ヘルマー　ノラ！

ノ　ラ　あなたは、私が、そんな犧牲は決して受けなかつたらうと仰るでせう？勿論それは受けませんとも。けれども私がさう言つたからといつて、あなたの決心が固ければ、それに反對して何うすることも出來ません。それです、私が、見たくもあり、恐ろしくもあつた奇蹟といふのは。そして、それを防ぎ止めるためには、私死なうと覺悟してゐたのです。

ヘルマー　ノラ、お前の爲なら、私は晝夜でも喜んで働く――不幸も貧乏もお前の爲なら我慢する――けれども、幾ら愛する者の爲だつて、男が名譽を犧牲には供しない。

ノ　ラ　それを、何百萬といふ女は、犧牲に供して居ます。

ヘルマー　あゝ、お前の考へることや言ふことは、駄々つ子のやうだ。

ノ　ラ　さうかも知れません。けれど、あなたの考へてゐらつしやることや、言つてゐらつしやることも、私が生涯を共にすることの出來る人のやうぢやありません。恐ろしい騷ぎが通り越して了つて――私にでなく、あなた御自身に――もう大丈夫となると――あなたはけそけそとして、何處を風が吹いたかといふ風にして入らつしやる。私はまた元の雲雀や人形になつて了ふ――弱い脆い人形だといふので、是れからは前よりも一倍痛はつてやらうと仰る。(立上り)あなた、其の時に私は眼が覺めました、此の八年といふもの、私は見ず知らずの他人と斯うやつて住んで居て、そして其人に三人の子まで生した。あゝ、其の事を考へると私はたまらなくなつて――自分の身を引き裂きたいやうに思ひます。

ヘルマー　(悲しげに)分かつた。私達の間には深い淵が出來たのだ。けれどもノラ、其の淵は何うかして埋まらないものだらうか？

ノ　ラ　私の今の身では、あなたの妻になれるものぢやありません。

ヘルマー　私は一變した人に成る力を持つてゐる。

ノ　ラ　さうかも知れません――人形とお分かれなすつたらね。

ヘルマー　分かれる――お前と分かれる！　いけない、ノラ、いけない。私は、さういふ事は考へられない。

ノ　ラ　(右手の室に入りながら)　仕方がありません、理由があれば何んな事でも起こつて來ます。

(ノラ外出仕度のものと小さい旅行鞄とを持つて出て來、それ等を椅子の上に置く。)

ヘルマー　ノラ、ノラ、今でなく、明日まで待つて呉れ。

ノ　ラ　(外套を着ながら)　見ず知らずの他人の家に泊れはしません。

ヘルマー　けれども兄と妹のつもりで住まつては行けなからうか？

ノ　ラ　（帽子を冠りながら）そんな事が長續きするものでないのは分つて居ませう？あなた左樣なら。いゝえ、兒共の方へは行きません。彼れ等は私が世話をするよりも却つてよく世話して貰つて居ます。今の私の身ではあれ等に何の役にも立ちません。

ヘルマー　併し何時かは、ノラ、何時かは――

ノ　ラ　そんな事が何うして分かりませう。私は、自分が是れから何うなることやら、少しも考へては居ません。

ヘルマー　けれども、お前は何時までも私の妻だ。

ノ　ラ　あなた聞いて置いて下さい――今私が出て行くやうに、妻が夫の家を去れば、法律の上から、夫は妻に對して、義務といふものが全くなくなるさうですね。兎に角私は、あなたの義務をすつかり無くして了ひますから、私が自由なのと同じに、あなたも自由にして下さい。双方とも少しも制限を置かないことにしませう。はい、これがあなたの指輪です。私のを下さい。

ヘルマー　それまでもかい？

ノ　ラ　それもですよ。

ヘルマー　さあ、是れ。

ノ　ラ　はい、それで、すつかり濟みました。鍵は玆にありますよ。女中が凡ての事は知つてゐます、私よりも精しく知つて居ます。明日私が立ちましてから、クリスチナさんが來て私の荷物を荷造りして吳れませう、跡から送つて貰ふことにして置きます。

ヘルマー　あゝもう駄目だ！もう駄目だ！ノラ、お前はもう何んな事があつても、二度と私の事は考へて與れなからうか。

ノ　ラ　それは、あなたの事も兒共の事も此の家の事も度々考へるでせうよ。

ヘルマー　手紙をやつてもいゝか。

ノ　ラ　いけません、決してなりません。

ヘルマー　けれどもお前に送らなくちやならないものが――

ノ　ラ　何にもいけません、何にもいけません。

ヘルマー　若し必要な場合には助けなくちやならないから。

ノ　ラ　可けませんてばね。見ず知らずの他人からは何んなものだつて貰ひません。

ヘルマー　私はもう、何うあつても、お前には、見ず知らずの他人とより以上の事は出來ないか。

ノ　ラ　（旅行鞄を取りながら）それは、あなた、そんな事の出來る時には、本當の奇蹟が見はれなくちやなりますまい。

ヘルマー　本當の奇蹟とは？

ノ　ラ　私達が二人ともすつかり變つて――あゝもう、私、奇蹟なんか信じない。

ヘルマー　けれども私は信ずるよ。私達がすつかり變つて――

ノ　ラ　二人の仲が本當の結婚にならなくてはなりません。左樣なら。（ノラ出て行く）

ヘルマー　（顏を兩手に埋めて扉の傍の椅子に沈む）ノラ！ノラ！（見廻はして立ち上る）誰も居ない。行つて了つた（一の希望が吹き込まれて來る）あゝ！奇蹟、奇蹟――?!（下から重い戸を閉ぢる響が聞える）

（幕）

ペレアスとメリサンド

（マアテルリンク原作）

『ペレアスとメリサンド』は千八百九十二年、マーテルリンクが三十歳のときの作である。純粋な戀愛悲劇として、題材は、必ずしも此の著者を須たないものであるが、其の取扱方は徹底的にマーテルリンク式で、しかも其の肉となり動となつて見はれる外形の豐富、場面の美しさは著者の作中でも他に類の尠ない劇である。著者特有の重さ、深さ靜さの上に劇的要素を加へた作の好例と信ずる。

『七王女』は其の前年の作で、之れは更に露骨にマーテルリンク式な劇の一つである。全篇が透きとほつた畫のやうな作である。

人物

アルクエル(アルモンドの王)

ジュネヴヰーヴ(ペレアス及ゴロウドの母)

ペレアス
ゴロウド　}(アークエルの孫)

メリサンド

幼きイニョールド(ゴロウドの初の結婚で生れた子)

醫　師

門　番

女中、乞食、等

第一幕

第一場　城の入口

女中二三人（内で）　戸を開けてお呉れ！戸を開けてお呉れ！

門番（内で）　誰れだい、そこに居るのは？何でこゝへ來て起こすのだい？その幾つもある小さい戸口から出なさい、小さい戸口から出なさい、澤山あるぢやないか！

第一の女中（内で）　入口の敷石を洗ひに來たのだよ、戸や段々を洗ひに。明けてお呉れよ、明けてお呉れよ！

第二の女中　大へんな事がある筈なのよ

第三の女中（内で）　大へんなお祝ひがある筈なのよ！お明け、早く！……

女中一同　明けてお呉れ！明けてお呉れ

門番　待つて居な！待つてゐな！俺にその戸が明けられるか、分らないよ。……ついぞ明けた事が無い戸だ……夜の明けるまで待つてゐな……

第一の女中　外はもう一ぱいに明るいよ、隙穴からお日さまが見えて……

門番　こゝに大鍵がある……おゝーおゝ！なんて軋りやうだ、差金と錠前と！……手を貸しなさい、手を貸しなさい！

女中一同　引つぱつてゐるよ……

第二の女中　明かないのだらう……

第一の女中　あゝ！あゝ！明いて來た！少しづゝ明いて來た！

門番　何てきい／＼言ふ音だらう！家中を起こして了まふ……

第二の女中　（閾の所へ立あらはれ）。おゝ！外はもう明かるいこと！

第一の女中　日が海の上へ昇りかけてゐる！

門番　明いた……一ぱいに明いた……

（女中殘らず閾の上に立ち出で、それを越す）。

第一の女中　私手始めに敷石を洗はう。

第二の女中　とてもみんな是を綺麗にする事は出來ない。

他の女中等　水を持つてお出で！水を持つてお出で！

門番　さうだ／＼、水をかけな、水をかけな、洪水のやうに流しかけな、お前がたには到底それは出來まいから……

第二場　森林

（メリサンド泉の傍にゐる、ゴロウド入り來たる。）

ゴロウド　もう二度と森から出られさうぢやないな、あの畜生め、何所へ私を引つぱつて來たのだやら、死ぬだらうと思ふほど手を負はせたのだが、こゝに血の跡はあつても、見失つてしまつた。私は道に迷つたらしい――たゞ私を見つけ得ない。跡へ戻らうか……誰か泣いてる聲が聞えるやうだが……おゝ！あれは何だ水の端にゐるのは？乙女ぢやないか、水の

端でしく〳〵泣いてゐるのは？（咳拂をする。）聞こえない樣子だ、顏が見えない（段々近くよつてメリサンドの肩にさはる）。なぜ泣いてゐるのだ。（メリサンドびつくりし、逃げ出さうと身構へる。）ちつとも恐れるには及ばない。恐れる譯はない。なぜお前は一人でこゝに泣いてゐるのだ？

メリサンド　いけません〳〵、私の體にさはつては！

ゴロウド　少しも恐れるには及ばない……　私は何にも……おゝ！お前は美しいな！

メリサンド　私にさはつちやいけません！私にさはつちやいけません！さうでないと私、水の中へ飛び込みます！……

ゴロウド　さはるといふのではない……　この通りこゝへ木によりかゝつて直立してゐる。恐れてはいけない。誰れかお前に害でも加へたのか？

メリサンド　あ！さうです！さうです！さうです！（深くすゝり泣く）

ゴロウド　お前に害を加へたのは誰れだ？

メリサンド　みんなで！みんなで！

ゴロウド　何うして害を加へたか？

メリサンド　申しません、言へませんもの！

ゴロウド　これ、そんなに泣いてはいけない。何所から來たといふのだ？

メリサンド　逃げ出したのです！逃げ出したのです！

ゴロウド　ふん、だが何所から逃げ出して來たのだ？

メリサンド　道に迷つたのですよ！……迷つたのですよ！おゝ！こゝで迷つて了つて……私ここのものぢやありません……

あそこで生れたのでもありません……
ゴロウド　何所から来たのだ？何所から来たのだ？何所で生れたのだ？
メリサンド　おゝ！おゝ！ずつと遠い所です……遠い……遠い……
ゴロウド　水の底で光つてるのは、あれは何だ？
メリサンド　えゝ？あゝ！あれはあの人が呉れた冠です、泣いた拍子に落ちたのです……
ゴロウド　冠？――誰れが呉れたのだ――手が届くなら私が取つて見やう……
メリサンド　いえ、いえ、もういりません！もういりません！……それよりか、先へ死んで了ひます……すぐ死んで了ひます……
ゴロウド　わけなく取り出せる。水はさう深くない。
メリサンド　いりません！それをあなたがお出しなさるなら、私其代りに飛び込んで了ひます！……
ゴロウド　やめた、やめた、其まゝにして置くよ。たかたやすく手が届くのだがねえ。大さう見事な冠のやうだ――お前が逃げ出してから余程になるのかね？
メリサンド　えゝ、えゝ……あなたは何ういふ方？
ゴロウド　私は皇子ゴロウド――アルモンドのアルクヱル老王の孫だ！
メリサンド　おゝ！あなた、もう髪の毛が白くなりかゝつてをります……
ゴロウド　あゝ、少しばかりこゝに、両鬢に……
メリサンド　それからお髭も……なぜあなたそんな風に私を御覧なさるの？

ゴロウド　お前の眼を見てゐるのだ、お前はついぞ眼を閉ぢた事はないのか？

メリサンド　あります、あります、夜は閉ぢます……

ゴロウド　どうしてお前はさうびつくりしてゐるのだ？

メリサンド　あなたは巨人ですか？

ゴロウド　並の人と同じ人間だ……

メリサンド　なぜこゝへいらつしやつたの？

ゴロウド　私にも分らない。森林で獵をしてゐたのだ。猪狩りをしてゐたのだ。道に迷つたのだ　―お前は大さう若く見える――幾つだ。

メリサンド　私、寒くなつて來た……

ゴロウド　私と一緒に行かうぢやないか？

メリサンド　いえ、いえ、私はこゝにゐます……

ゴロウド　お前一人ぎりでこゝにはゐられません。夜中こゝにはゐられない……名は何と云ふ？

メリサンド　メリサンド

ゴロウド　ひとりだと怖いだらう。こんな所で何があるか知れたものぢやない……夜中ひとりきりで……到底出來ない事だ。

メリサンド、さあ、其手を……

メリサンド　あゝ　私にさはつてはいけません！

ゴロウド　泣いちやいけない――もうさはらない――たゞ私と一緒にお出で。夜は眞暗な上に隨分寒いだらう。私と一緒に

お出で……

メリサンド　どちらの方へいらつしやるの？

ゴロウド　分らない……私も迷つてるのだから……（二人出て行く）

第三場　城内の廣間

（アルクエルとゼネヴヰーヴがゐる。）

ゼネヴヰーヴ　あれが弟のペレアスに書いてよこしたのは斯うですよ――或る夕方予は道を失ひて森林の中に迷ひ入り、とある泉のほとりにて泣きくづれたる彼の女を見とめぬ。歳も知らねば如何なるものなるかをも、また何れより來たるかをも知らねど、敢て尋ねんともせず、何物にか甚しく怖れてありしやうなればなり。また何事のありしかを問はるゝたびに彼の女は小兒の如く聲を立てゝ泣き、氣味わるきまで深く啜りむせぶ。恰も余が泉のほとりに彼の女に出あひしとき、彼の女の髪にのせたる黄金の冠すべり落ちて水底に沈みぬ。且つ其の裝ひは王妃とも見えたり、重ねし衣は荊棘に裂かれたれども。さて予は彼の女を娶りてより既に六ケ月を經たれども、はじめて相逢ひし日の事のほか何事をも知らず、我が親愛なるペレアスよ、我等が生みの父は同じからざれども、予が御身を思ふことは弟といふよりも更に深し。されば予が還る日を用意して……母上は喜んで予を許したまふべし、たゞ恐るゝは我等の畏敬する祖父君國にておはすなり。祖父君アルクエルの親切はさることながら、予がこれを怖るゝはこの尋常ならぬ結婚によりて凡てその政治上の計劃を畫餅に歸せしめたればなり。また恐らくはメリサンドの美貌も王の慧眼に對しては予の愚を言ひ釋くに足らざるべし。されども若し國王にして生みの娘を迎ふる心もてメリサンドを迎ふることを許したまはば此の書狀の着せし日より三日目の夕べ、海

に臨める塔の頂に燈火を點ぜよ。予は船の甲板より其を望み見るべし。若し事かなはずば予は更に遠く去りて再び還らざるべし……』ねえ、あなたは何うお考へなさいます？

アルクエル　何んでもない。恐らくあれが僞なくちやならなかつた事を僞たのだ。私も隨分歳をとつたが、それでもまだついぞ一度だつて自分といふものゝ中をはつきり見た事がない。まして他人の僞たことを何うしてお前、私に判斷させられやう？私は墓場から遠くない身だ、そして私には自分を判斷する力もない。……人といふものは自分の眼を閉ぢてゐなくては、いつも間違をする。ゴロウドが僞た事は私たちに變に見えるかも知れない、たゞそれだけの事だ。あれももう分別の出る年配で子供のやうに、自分から泉の傍で逢つたといふ小娘と結婚した。……是れは私たちには變に見える、畢竟私たちはただ運命といふものゝ惡い方ばかり見ることが出來るからだ。……自分自身の上でさへ惡い方ばかりを……ゴロウドは是れまでいつも私の忠告に從つてゐた、當人をやつてウルシュラ姫を貰ひ受けさせたら、當人の幸福だらうと思つたのだ……あれは到底孤獨に堪えられる男でなかつた。だから妻が死んでからといふもの、獨り身の寂しさを嘆いてゐた。此の結婚で長い間の戰爭と昔からの敵意も息むだらうと思つたのだが……あれはそれを望まなかつた。望み通りにならせるがいゝ。私は今まで曾て運命の道を妨げた事はない、それにあれは私よりもよく自分の未來を知つてゐる、恐らく世の中に意味の無い出來事といふものは一つもないだらう……

ゼネヴキーヴ　ゴロウドは不斷からあんなに用心深くてあんなに眞面目で、あんなにしつかりしてゐたのです……是れがペレアスなら分りますけれど……あれが……あの歳で……どんな人間を私どもの中へ連れ込まうといふのです？路ばたから拾つて來た素性も何も知れない者を……あれの妻が死んでからは、たゞ小さいイニヨールドを力に暮してゐたのです、だから結婚しやうとしてゐたのも、あなたのお望みだつたからです……それがまあ……森の中の小娘と……何もかも忘れて

了つたのですよ……何うなる事でせうねえ?

(ペレアス入り來る。)

アルクエル　這入つて來るのは誰れだ?

ゼネヴヰーヴ　ペレアスです。泣いてゐたのです。

アルクエル　お前か、ペレアス。もう少し傍へ來い。明りで見えるやうに……

ペレアス　祖父さま、私は今一本手紙を貰ひました、兄のと同時に、友人のマーセラスからです、あの男は死にかゝつてゐます。私に來て呉れといふのです。死ぬる前に私に逢ひたいといふのです……

アルクエル　お前の兄の還るのを待たないで行かうといふのか?……その友人も思つてるほど惡いのぢやなからう……

ペレアス　手紙は隨分悲慘です、死といふ事が文字の間にあり／＼と見えてゐます……死の來る日を明かに知つてゐると書いてゐます……私に其氣さへあれば其前に來ることは出來るが併しぐづ／＼してゐる時間はないと書いてゐます。道が遠いのですから、兄の歸るのを待つてゐたら遲くなりませう……

アルクエル　でも暫く待つがよからう。ゴロウドの今度の歸宅が何ういふことになるか分らないのだから。その上お前の父もこゝにゐないで、上で病んでゐる。恐らくお前の友人よりも一層重態なのだらう……父と友人とどちらが大事と思ふか?……

ゼネヴヰーヴ　今宵あのランプを點すのを間違へないやうに、ペレアスや……

(思ひ／＼に出て行く。)

第四場　城の前

（ゼネヴヰーヴとメリサンドが入り來たる。）

メリサンド　お庭は薄暗くなりました。それにまあ、何といふ大きな、大きな森が御殿の周を取り卷いてゐるのでせう……

ゼネヴヰーヴ　然い、私も初めてこゝへ來た時はびつくりしたよ。誰だつてびつくりします、場所によると少しも日の見えない所がある。けれどももぢきにすつかり馴れて了ふ……長いこと、長いこと昔ですよ……私がこゝにゐることになつたのは彼れこれ四十年になる……あちらを御覽、海の光るのが見えるだらう……

メリサンド　下の方で物音が聞えます。

ゼネヴ井ーヴ　然い、誰れかこちらへ上つて來る……あゝペレアスだ……あんまり長くお前等を待つて居たためにまだ疲れてゐるやうです……

メリサンド　まだ私等に氣がつかないやうです。

ゼネヴ井ーヴ　もう氣はついたらう、たゞ何うしてよいか途方にくれてゐるのです……ペレアス、ペレアス、お前かい？

ペレアス　えゝ……海の方へ行きかけた所です……

ゼネヴ井ーヴ　私たちもさうなの、明るい所を探してゐたのですよ、こゝは他よりは幾らか明るいが、それでも海が陰氣でね。

ペレアス　今夜も暴しがありますよ、此あひだから毎晩一度づゝ暴しがあります。併し今の靜なことつたら、どうです……何も知らないで出て行つて、永久に歸つて來ないものもありませう。

メリサンド　何か港から出て行きます……

ペレアス　船の大きなのに違ひない……明りが大へん高い、今にあの光線帶の所まで進行すれば見えます……

ゼネヴヰーヴ　見えるかどうだか分らないよ……海の上にはまだ霧がかゝつてるから……

ペレアス　霧が少しづゝ上つて行くやうに見えます……

メリサンド　はあ、少さい明りが一つ向ふに見えます、先つきまで見えなかつたのが……

ペレアス　あれは烽光です、まだ他にも見えないのが幾つかあります。

メリサンド　船が明りの所へ來ました……もう遠方まで行つたのですね……

ペレアス　外國船だ。此の邊の船よりはずつと大きいやうに見えますね……

メリサンド　私をこゝへ連れて來た船ですよ！……

ペレアス　帆を一杯に張つて走つてる……

メリサンド　私をこゝへ連れて來た船です、大きな帆が幾つもあつて……帆で見おぼえがあります……

ペレアス　今夜はしけに逢ふでせう……

メリサンド　どうして今夜出るのでせう？……もう見えなくなりました……屹度難船して了ひますよ……

ペレアス　日がずん／＼暮れて行きます……

（沈默。）

ゼネヴ井ーヴ　誰ももう話をしなくなつたのかい？お前二人ともお互にもう何も言ふことが無いのかい？……もう這入る時刻ですよ、ペレアスはメリサンドに道を敎へておやり。私は一寸行つてイニョールドを見てやらなくてはならないから。

（出て行く。）

ペレアス　もう海の上には何にも見えなくなりました。

メリサンド　私には別の明りが幾つか見えます。

ペレアス　あれが他の烽光です…　海の音が聞こえますか？……風が高くなつて行くのです……此の道を降りて行きませう手を把らせて下さい。

メリサンド　でも両手とも塞がつてゐますもの……

ペレアス　腕を把つて行きませう、道が急だから、それに恐ろしく暗い、……私は明日の朝多分旅へ立つことになりませう……

メリサンド　おゝ！なぜお立ちなさるの？

（二人出て行く。）

第二幕

第一場　公園の泉水

（ペレアスとメリサンドが入り來たる。）

ペレアス。何所へあなたを連れて來たか、あなたには分らないでせう？私はお午頃になるとよくこゝへ來ます、庭が暑くてたまらなくなると。今日は木の陰でも暑くて空氣が息づまるやうですね。

メリサンド。まあ！水が綺麗ですこと……

ペレアス。そして冬のやうに冷たいのですよ。古い荒れた泉水なのです。昔は不思議な清水――盲の眼が開いたと言ひ傳へてゐます――で今も「盲の井」と呼んでゐます。

メリサンド。今ではもう盲の眼は開かないのですか？

ペレアス。國王が殆んど盲であるために、誰もここへ來るものがないのです……

メリサンド。なんてこゝは淋しいのでせう……物音一つ聞えない。

ペレアス。いつも不思議なほど森としてゐます、水の眠る息が聞えるかと思ふ程です……あなたその大理石の池の縁に坐りませんか、日の少しも通さない菩提樹があります……

メリサンド。私、大理石の上に横にならうとしてゐるのですよ。――水の底が見たいのです……

ペレアス　見えたことがありません。海ほども深いのでせう。この水が何所から來るかも知つてるものはないのです。屹度大地の底から……

メリサンド　何か底で光つてゐたら見えるでせう……

ペレアス　さうあんまり乘り出しちやいけません……

メリサンド　水に觸つて見たいのです……

ペレアス　滑り落ちないやうに氣をおつけなさい、手をつかまへてゐて上げませう……

メリサンド　いえ／＼、兩方の手を浸けたいのです……私の手は今日は何だか病んでるやうですこと……

ペレアス　あゝ！あゝ！氣をおつけなさい！氣をおつけなさい！メリサンドさん！……おゝ！あなたの髮の毛！……

メリサンド　(身を引き上げて。)届かない、水まで届きません……

ペレアス　あなたの髮の毛が水に浸りました……

メリサンド　えゝ／＼、私の腕よりも長いのですよ……私の丈よりも長い……

(沈默。)

ペレアス　あれがあなたを見つけたのも、やつぱり泉の傍でしたね？

メリサンド　えゝ……

ペレアス　あれが何と言ひました？

メリサンド　何にも――私おぼへてゐません……

ペレアス　あなたのすぐ傍に居ましたか？

メリサンド　えゝ、私に接吻しやうとして。

ペレアス　それをあなたがいやだと言つて？

メリサンド　えゝ。

ペレアス　なぜいやでした？

メリサンド　あゝ！あゝ　水の底に何かちらつと見えました……

ペレアス　氣をおつけなさい！氣をおつけなさい！落ちますよ！手で弄んでゐらつしやるのは何です？

メリサンド　貰つた指輪ですよ……

ペレアス　氣をおつけなさい、失くしますよ……

メリサンド　いゝえ、いゝえ、私の手がたしかですから。

ペレアス　そんな風にいぢくらないやうになさい、こんな深い水の上で……

メリサンド　私の手がしつかりしてゐますから。

ペレアス　日を受けて光るぢやありませんか！そんなに高く上げちやいけません……

メリサンド　おゝ！

ペレアス　落ちましたか？

メリサンド　水の中へ落ちました！……

ペレアス　何の邊へ？……何の邊へ？……

メリサンド　沈んで行くのが見えません……

ペレアス　光つて見えるやうです……

メリサンド　私の指輪が？

ペレアス　えゝ／＼、あそこに……

メリサンド　おゝ！おゝ！すつと手の届かない所です！いえ、いえ、あれぢやありません……無くなりました……無くなりました……水の上に大きな輪を殘したつきり。何しませう？何うしたらいゝでせう？……

ペレアス　指輪一つくらひでそんなに心配しちやいけません。氣にかけないで……屹度また見つかるでせう。でなければ別のを見つけませう……

メリサンド　二度と見つかりはしません、別のだつて到底見つかりはしません……手に攫んだと思つたのですけれど……もう手をつぼめて了つたのです、そしてそれつきり落ちて了ひました……あんまり高く日に向けて投げたのです……

ペレアス　さあ、さあ、また來られるから……さあもう時刻です。私たちを尋ねてるかも知れない。おの指輪が落ちた時正午の時計が鳴つてゐました。

メリサンド　夫にどう言ひませう？指輪を何所へやつたと聞かれたら。

ペレアス　眞實をおつしやい、眞實を、眞實を……

（出て行く。）

第二場　城内の一室

（ゴロウドは寢臺の上に横になつてゐる。メリサンド其の傍にゐる。）

ゴロウド　あゝ！あゝ！すつかりよく行つてゐる、大した事ではないだらう。併しどうして斯んな事になつたか私には分らない。森の中で靜に狩獵をしてゐると、私の馬が何の理もなく突然狂ひ出した。何か違つたものでも見たのか……其の時私はちやうど午の十二時を打つのを聞いた。第十二が鳴ると思ふと突然あれが駭いて走り出して、盲で氣でも違つてゐるやうに立木に向つて走りかゝつた。それきり私は何も聞かなかつた、また何うなつたかも知らない。私が落ちてその上にあれが倒れたのに違ひない。森林が全部私の胸の上に落ちかゝつたかと思つた。けれども私の心臟は丈夫だ。大した事はないやうだ……

メリサンド　少し水をお飲みなさらないの？

ゴロウド　ありがたう、ありがたう、飲みたくない。

メリサンド　他の枕がよくはありませんか？——是れには少し血がついて居ます。

ゴロウド　いや、いや、構はない。ちやうど今口から出血したのだ。また出るかも知れないから……

メリサンド　大丈夫ですか？そんなに苦しくはないのですか？

ゴロウド　いや、いや、私はもつとひどい事に慣れてゐる。血と鋼鐵の味はよく知つてゐる……これでも子供のちつぽけな肋骨とは違つてゐるからね、心配してはいけない……

メリサンド　眼をつぶつて眠らうとして御覽なさい。私は夜中こゝにゐます。

ゴロウド　いや、いや、さうしてお前を疲らせたくない。何にもいらない。子供のやうに眠らうから……何うしたのだ、メリサンド！何ぜだしぬけに泣くのだ！

メリサンド　（涙を流して泣きつゝ）私も……私も氣分が惡いのです。

ゴロウド　お前も氣分が……何うして惡いのだ、何うして惡いのだ？メリサンド……

メリサンド　分りません……こゝにゐると氣分が惡いのです…… 今日はあなたに言つた方がよいと思ひます。あなた、あなた、私はこゝで樂しくはしてゐられないのです……

ゴロウド　えゝ？何うしたのだ、メリサンド？何事だ？……私には何も氣がつかないから……でも、何うしたと言ふのだ？……誰れがお前に氣に入らないやうな事をしたか？……誰れかお前を怒らせたか？

メリサンド　いゝえ、いゝえ、ちよつともそんな事をしたものはありません……さうぢやないのです……さうぢやないのです……けれど私はもうこゝにゐる事は出來ません。何ぜか私にも分らないけれど……私は出て行きたいのです、出て行きたいのです！……ここに留まつてゐたら、私は死ぬでせう……

ゴロウド　でも何事か起つたのだらう？何か私に隱してゐるに違ひない？……すつかり聞かせて呉れ、本當の事を、メリサンド……國王か？……母か？……ペレアスか？……

メリサンド　いえ、いえ、ペレアス樣ぢやありません……誰れでもありません……あなたには私の事は分りません……

ゴロウド　なぜ私に分らない？……何も言つて聞かせないで何うして私に分りやうがあるか？……すつかり言つてお聞かせ
さうすればすつかり私に分かる。

メリサンド　私自身にも何だか分りません……たしかに何だと言ふことは分りません……言へれば言ひますけれど……何だか私自身よりも力の強いものゝやうです……

ゴロウド　これ、聞きわけて呉れ、メリサンド、――私がどうすればよいといふのだ？――お前ももう子供でないのだから――行きたいといふのは私の傍にゐたくないからか？

メリサンド　あゝ！いえ、いえ、そんな事ぢやありません……あなたと一緒に行つて了ひたい……私、こゝではもう生きてゐられないのです……もうさう長く生きてゐないやうな氣がします……

ゴロウド　でも併し何か譯がなくては、人は氣が違つたかと思ふだらう、子供のやうな夢を見てゐるといはれるだらう――これ、ひよつとしたらペレアスなのか？――あれはあんまりお前と話をしないやうだが……

メリサンド　話します、時々私と話します。あの方は私をすかないのだと思ひます。眼にさういふ樣子が見えます――けれど私に會ひさへすれば話はします……

ゴロウド　お前それを思ひ違へてはならない、あれはいつもさうなのだ。どちらかといへば變つた男でね。それにちやうど今ふさいでゐる、友人のマーセラスが死にかゝつてゐるのに、行くことが出来ないといふので、其事を考へてゐる……今に變るだらう、今に變るだらう、見ておいで、あれも若いから……

メリサンド　でもそんな事ぢやありません……そんな事ぢやありません……

ゴロウド　では何だね？……こゝで斯ういふ生活に慣れて行くのがむづかしいといふのか？こゝがお前に憂鬱すぎるのか？――なる程此の城は非常に古くて非常に陰氣で……非常に冷たい、非常に奥深い。それから中に住んでゐるものもみんな年が行つてゐる、それから土地がまた光りの射さない森林一杯で憂鬱に見えるだらうけれどもそんな事はみんな愉快にしようと思へばせられる。さうした所で歡樂だ歡樂だと、毎日歡樂を求めてゐられるものではない。物事はありのまゝに從つて行くより外はない。が、まあ、何だか言つて聞かせて呉れ、何でも構はないから。お前がしろといふなら何んな事でもするから……

メリサンド　えゝ、えゝ。全く……こゝでは空といふものは見られないのですね。私、今朝はじめて見たのです。……

ゴロウド　それでお前は泣くのか？かわいさうに、メリサンドに――たゞそれだけかい？――空が見られないといつて涙を流したのかい？――さあ、さあ、お前ももうそんな事位で泣いてゐる歳ではない……それにこゝだつて夏もあるではないか？ぢきに毎日空が見えるだらう――そしてまた翌年も……さあ、手をお出し、其のかわいらしい手を兩方ともお出し。（兩手を把つて）あゝ！あゝ！この小さい手、花びらのやうに押しつぶされさうだ……――おや、私がやつた指輪はどうした？

メリサンド　指輪？

ゴロウド　然、結婚の指輪、どこへやつた？

メリサンド　多分……多分落ちたのでせう……

ゴロウド　落ちた？どこへ落ちた？なくしはしまいね？

メリサンド　いゝえ、いゝえ、落ちたのですよ、え……落ちたに違ひない……けど何所へ落ちたか知つてゐます……

ゴロウド　何所へだ？

メリサンド　そら……そら……あの海の側の窟？……

ゴロウド　ふむ。

メリサンド　えゝ、あそこです……あそこに違ひない……さうです／＼、思ひ出しました……私、今朝イニヨールドにやらうと思つて貝殼を拾ひにあそこへ行きました……あそこには綺麗なのがあります……指輪が私の指から拔けたのですよ……そこへ海が高まつて來て、まだ見つからないうちに逃げなくてはならないやうになりました。

ゴロウド　お前たしかにあそこにゐたのかえ？

メリサンド　えゝ、えゝ、たしかです……抜けたと思ふと……さうするとだしぬけになみの音が……

ゴロウド　お前すぐ行つて取つておいで。

メリサンド　すぐ行つて取つて來るのですか？

ゴロウド　あゝ。

メリサンド　今？……すぐに？暗いのに？

ゴロウド　今、すぐ、暗いのに。すぐ行つて取つて來なくてはならない。私はあの指輪をなくするやうなら、寧ろ私の持つてゐるすべての物をなくした方がいゝ。お前はあれがどういふ品だか知らない。何所から來たのかも知らない。海が今夜は荒いだらう。高まつて來てお前より先に持つて行くかも知れない……急いでおいで。すぐに行つて取つて來なくてはいけない。

メリサンド　私、行けません……ひとりでは行けません……

ゴロウド　おいで、おいで、誰れとでもいゝから。兎に角すぐに行かなくてはいけません、分つたか？——急いで。ペレアスに賴んで一緒に行つてお貰ひ。

メリサンド　ペレアス　ペレアス樣と？　けれどもあの方は行きたくないでせう……

ゴロウド　ペレアスはお前が賴めば何でもする。お前よりも私があれの事はよく知つてゐる。おいで、おいで、急いで。指輪の來ない內は私は眠らない。

メリサンド　おゝ！おゝ！私、悲しい！悲しい！……(泣きながら出て行く。)

第三場　岩窟の前

（ペレアスとメリサンドはいつて來る）

ペレアス　（ひどく心配げに語る。）さうです、これが其の場所です、そこまで來ました。非常に暗くてそこいら一杯、どこが窟の入口だか分りません……その方角には星一つもない。月があの大きな雲を破るまで待ちませう。さうしたら窟中明るくなつて危險がなく這入れるやうになりませう。所々あぶない所があつて、道が非常に狹いのです、其の兩側は昔から深さの知れないといふ湖水になつてゐます、松明か提灯を持つて來ることに氣がつかなかつた。併し空の明りで行けませう。――あなたはまだ此の窟に這入つたことがないでせう？

メリサンド　えゝ。

ペレアス　這入りませう、さあ……指輪を無くした場所を聞かれて、說明することが出來なくてはいけない。……非常に大きな美事な窟ですよ。鐘乳岩が植物や人の並んでるやうに見えて、青い影がそこら中に漂つてゐます。ついぞ奧底まで行つて見たものがない。何か大へんな寶が隱してあるのぢやないかと思はれます。それから大昔の難破船の遺物がありますけれども案内者がなくては深入りは出來ない。這入つたきり歸つて來ないものも折々ある。私自身だつてあんまり深くは這入られません。浪や空の光りが見えなくなつた時に止まりませう。中で小さい火をともすと、天井が一杯星のやうにきら〳〵して空かと思はれます。是れは岩に水晶や鹽の塊がついてゐて光るのださうです。――御覽なさい。御覽なさい、空が晴れるやうです……手をお出しなさい、震へてはいけない、そんなに震へないでさ。少しもあぶなくはありません。海の光が見えなくなつたらすぐ止まりませう……窟の響が恐いのですか？あれは夜の音です、沈默の音……後の方で海の

鳴るのが聞こえますか？——今夜は何だか氣が引き立たない……ああ！明るくなつた！……

（月が窟の入口及洞内の一部を限なく照す。稍奧に白髮の老いた乞食が三人岩石の棚に寄りかゝり並び坐つてもたれかかりながら眠つてゐる。）

メリサンド　おゝ

ペレアス　何です？

メリサンド　あそこに……

（三人の乞食を指す。）

ペレアス　然〳〵。私にも見えました……

メリサンド　歸りませう！……歸りませう……

ペレアス　えゝ……年とつた乞食が三人眠つてゐるのです……土地は今飢饉で……どうしてあれ等はこゝへ寢に來たのだらう……

メリサンド　行きませう！……さあ、さあ、行きませう！……

ペレアス　氣をおつけなさい、さう大きな聲をしてはいけない……眼をさまさしてはよくない……ふだふく眠つてゐる……さあ。

メリサンド　先へいらつしやい、先へいらつしやい。私ひとりであるく方がいゝから……

ペレアス　別の日にまた來ませう……

（出て行く。）

第四場　城内の一室

（アルクエルとペレアスがゐる。）

アルクエル　御覽、凡ての事が此の際お前をこゝに引きとめるやうに向いて來る。凡ての事がその無益な旅行を差しとめてゐる。お前の父の樣子についても、本當の事は今まで聞かせないでゐつたが、恐らく望がなからう、此の事だけでもお前をこゝに引きとめるに十分だらう。併しまだ他に幾つも理由がある……敵が起つてゐる。人民は餓ゑて死にかゝつてゐて到る所に不平の聲が聞える、斯ういふ際にお前が國を去る權利はない。それにどうしてそんな旅行をするのだ？マーセラスは死んでゐる。人生には墓まゐりよりも重大な務がある。お前は無爲の生活に疲れたといふが、活氣と務めとは路ばたにころがつてゐるものではない。通り過ぎる時に呼び込む仕度をして閾の所で待つてゐなくてはだめだ。さうすると活氣や努めは毎日そこを通る。お前まだそれを見た事がないか？私自身は殆ど盲目だが、それでもお前に見ることを敎へてやらう。お前が呼び込みたいといふ日に見せてやらう。併し、よく聞いて吳れ、お前が、今度の旅行はお前の生命のどん底から出た求めだと信ずるなら、私は其の企を禁じない。なぜかといふと、お前の存在なり運命なりの上に何んな事が起こるべきだといふことは、お前の方が私よりも一層よく知つてゐる筈だから、私はたゞ其の起こりかけてゐる事が何んな事だか知れるまで待つ樣にお前に賴まう……

ペレアス　何時まで待てはいゝのですか？

アルクエル　二三週間、或ひは二三日かも知れない……

ペレアス　待ちませう……

第三幕

第一場　城内の一室

（ペレアスとメリサンドがゐる。メリサンドは糸捲を持ち室の一隅で糸を紡いでゐる）

ペレアス　イニヨールドが歸つて來ませんね、何所へ行つたのです？

メリサンド　這入道の方で何か聞き付て其を見に行きました。

ペレアス　メリサンドさん……

メリサンド　何です？

ペレアス　……あなたまだ仕事が出來る位物が見えますか……

メリサンド　私は暗闇でも同じやうに仕事が出來ます……

ペレアス　城内のものはもうみんなよく眠つてるやうです。ゴロウドは獵から歸つて來ません。夜が更けてゐるのだが……

……兄はまだ馬から落ちた時の痛みが出るのですか？……

メリサンド　もう痛まないと言つてゐます。

ペレアス　もつと用心しなくてはいけない。あれの骨節はもう二十代のもののやうにしなやかではないのだから……窓から星が見えます、木に月の光が射して、夜が更けた、もう兄は歸つて來ないだらう（戸を叩く音）誰だ？……お這入り！

……(イニヨールドが戸を明けて這入る。)あんなに叩いたのはお前かい?……戸を叩くにあんな風にするものではないよ。何か變事でも起こつたやうだ。御覧、お前のかはいらしいお母さんをびつくりさせて了つた。

イニヨールド　僕ほんの少うしばかり叩いたのよ。

ペレアス　もう晩いからお父さんは今夜は歸つて來ないだらう、寢床へお出で。

イニヨールド　叔父さんが入しやらない内は僕も行かない。

ペレアス　何?……何を言つてるの、そこで?

イニヨールド　僕ね……叔父さんがいらつしやらない内は……叔父さんがいらつしやらない内は……(涙を流して泣きメリサンドの傍へ逃げて行く。)

メリサンド　何うしたの、イニヨールド?何うしたの?……なぜそんなにだしぬけに泣くのさ……

イニヨールド　(すゝり泣きながら。)なぜつて……おゝ　おゝ!なぜつて……

メリサンド　なぜさ?……なぜさ?……言てお聞せ……

イニヨールド　お母さま……お母さま……あなた出て行つちまうのでせう?……

メリサンド　まあ、お前、何うしたの?……私、夢にも出て行かうなんて思つた事はないよ……

イニヨールド　うそ、うそ、お父さまは行つちやつた……お父さまは歸つて來ないのだ、それから今度お母さまも行つちまふ……僕には分つてる……僕には分かつてる……

メリサンド　けれどイニヨールドや、そんな事は跡かたもないのですよ……何うしてお前、私が行つちまふといふ事が分かつて?

イニヨールド　分かつたの……分かつたの……僕が聞かなかつた時に叔父さんに言つた事があるでせう？………

ペレアス　眠いのだ……歩を見てゐるのだ……お出で、イニヨールド、お前もう眠つてるのかい？来て窓の外を御覧、白鳥が犬と喧嘩してゐます……

イニヨールド　（窓に向つて。）あゝ　あゝ！追つかけてゐる、犬が！……追かけてゐる……あゝ　あゝ…水が！……羽を…羽を！……びつくりしてゐる……

ペレアス　（メリサンドの方へ歸つて來て。）眠いのだ、眠るまいとしてあせつてゐるが、眼が閉ぢて來る……

メリサンド　（糸を紡ぎながら低く歌ふ。）

Saint Daniel and Saint Michael, O!……

Saint Micoel and Saint Raphael too…………

イニヨールド　（窓で。）おゝ　おゝ！お母さま……

メリサンド　（急いで立ち上り。）　何ですイニヨールド？……何です？………

イニヨールド　窓から何か見えたの！（ペレアスとメリサンド窓の方へ走せて行く）

ペレアス　窓の所に何があるの？……見えたといふのは何だ……

イニヨールド　おゝ！おゝ！何だか見えたの！……

ペレアス　だつて何もゐない、何も私には見えない……

メリサンド　私にも見えない……

ペレアス　何所に其者が見えたのだ？何の邊に？……

イニヨールド　彼所に、彼所に……もうゐなくなつたの。

ペレアス　自分で何を言つてるかもう知らないのです。森の上に月が射してるのを見たのに違ひない。よく不思議な影が映るから……でなければ何か道を通つたのかも知れない……それとも眠つたのか。そら御覧なさい、ね、到頭眠りかけたやうです……

イニヨールド　（窓に向いて。）お父さまがあそこに！お父さまがあそこに！

ペレアス　（窓に行つて。）さうだ、兄が丁度庭へ這入つた所だ。

イニヨールド　お父さま！……お父さま！……僕行つてお迎へしやう！（走つて出て行く沈默。）

ペレアス　二人で上がつて來る……

（ゴロウドとランプを持つたイニヨールドと這入つて來る。）

ゴロウド　お前たち、まだ待つてゐるのか暗闇の中で？

イニヨールド　僕明りを持つて來たの、お母さま、大きな明り、！（ランプを差出してメリサンドを見る。）泣てゐらつしやつたのお母さま？……（ランプをペレアスの方へも差出して見る。）叔父さんも、叔父さんも泣てゐらつしやつたの叔父さんも……お父様、御覧さない、お父様、叔父さんとお母様と、二人とも泣てゐたの……

コロウド　そんなに明りをあれらの眼に差しつけるな。

第二場　城の塔の一つ

（塔の一方の窓下は物見の塔に通ずる道である。）

ペレアスとメリサンド

メリサンド（泉の所で髮を梳りながら）

Thirty years I've sought, my sisters,
  Far his hiding-place,
Thirty years I've walked, my sisters,
  But have found no trace........
Thirty years I've walked, my sisters,
  And my feet are worn,
He was all about, my sisters,
  Yet he was unborn........
Sad the hour grows my sisters,
  Bare my feet again,
For the evning dies, my sisters,
  And my soul's in pain
You are now sixteen, my sisters,
  Time it is for you,
Take my staff away, my sisters,
  Go and seek him too...............

（物見の塔への道からペレアスが上つて來る。）

ペレアス　ほーらー！ほーらー！……何をしてゐるのです、その窓際で？小鳥のやうに歌つて。此邊では聞き馴れない鳥のやうに。

メリサンド　夜の髪を解かしてゐる所です……

ペレアス　それですか、壁の上に見えるのは？……私は明りをあなたの側に置いてあるのだと思つた……

メリサンド　窓を明けたのです、塔の中は暑すぎて……いい夜ですこと……

ペレアス　星が一杯出てゐます、今夜のやうに澤山の星を見たことがない……けれども月はまだ海の上にゐます……暗闇の中にゐないで、少し前の方へお出でなさい、あなたの髪の毛のすつかり解けたのが見えるやうに……

メリサンド　いやな恰好ですよ……

（窓から首を垂れる。）

ペレアス　おゝ！おゝ！メリサンドさん……おゝ！あなたは美しい……實にあなたは美しい　前に倚りかゝつてお見せなさい！……倚かゝつてお見せなさい！……もう少し私が近よれるやうに……

メリサンド　もう近くは寄れません……私、出來るだけ體を延ばしてゐるのです……

ペレアス　私もこれより高くは登れない……せめてあなたの手を、今夜は把らせて下さい……私が出發する前に……明日の朝私は立ちます……

メリサンド　いけない、いけない、いけない……

ペレアス　いゝのです、いゝのです、いゝのです。私は行かなくちやならない……あなたの手を把らせて下さい、あなたの

手を、あなたのかはいらしい手を私の唇に……

メリサンド　私、手を把らせません、旅へいらつしやるやうなら……

ペレアス　把らせて下さい、把らせて下さい……

メリサンド　ではお立ちなさらない？

ペレアス　延ばします、延ばします……

メリサンド　暗いところに薔薇の花が見えますのね……

ペレアス　何所にゥ……私にはたゞ塀の上に出てゐる柳の木の枝が見えるばかりです……

メリサンド　下の方、下の方のお庭に、あそこに、すぐ其の蒼暗い中に……

ペレアス　あれは薔薇ではありません……今行つて見て來ませう。けれど先にあなたの手を把らせて下さい、先にあなたの手を……

メリサンド　さ、さ、……もう之より低くは屈めません……

ペレアス　私の唇が手まで届かない……

メリサンド　もう之れより低くは屈めません……落ちさうです……あゝ　あゝ　私の髪が塔から下がつてゐまー！

（メリサンドが屈むと同時に髪の毛か突然垂れ下つてペレアスの上に着さりかゝる。）

ペレアス　おゝ！おゝ！是れは何ですゥ……あなたの髪、毛、あなたの髪の毛が私の上に落ちて來た！――あなたの髪の毛がすつかり、メリサンドさん、あなたの髪がすつかり塔から下つて來ました！……私か兩手で摑んでゐます、私か口に啣へてゐます……兩の腕で抱いてゐます、頸に卷きつけてゐます……今夜は此の摑んだ手を二度と開かない

メリサンド　お離しなさい！お離しなさい！私、落ちますよ！……

ペレアス　いけない、いけない、いけない……私、あなたのやうな髮の毛を見た事がない！……御覽なさい、御覽なさい、あんなに高い所から下つて來て、それでまだ波をうつて私の胸まで屆きます……私の膝までも來ます！……そして柔なこと、天から落ちて來たかと思ふほど柔です！……あなたの髮の毛で、空が見えませんね、御覽なさい、ね、御覽なさい……私の兩手では持ちきれません、柳の枝に迄房毛がかかつてゐます……小鳥の樣に私の手の中で生きてゐる……そして私を愛して吳れる、あなたよりもずつとよく私を愛して吳れる！

メリサンド　お離しなさい、お離しなさい……誰れか通るといけないから……

ペレアス　いや、いや、いや。今夜は私、あなたを放さない……夜中私の虜です、夜の明けるまで、夜の明けるまで……

メリサンド　ペレアスさま！ペレアスさま……

ペレアス　髮の毛を結びつけてゐます、柳の枝に結びつけてゐます……あなたがこゝからもう行けないやうに……こゝからもう行けないやうに……御覽なさい、御覽なさい、私、あなたの髮の毛に接吻してゐます……あなたの髮の毛に包まれて私の心の苦しみはみんな消えてしまひました……私の接吻が髮の毛を傳はつて這つて行きます、聞こえますか？……あなたの髮の毛のつゞいてる限り登つて行きます……一本々々の毛筋か一つづゝ私の接吻を傳へて吳れる……御覽なさい、御覽なさい、私はもう手を開いてもいゝのです……私の手は放してゐます、それでゐてあなたは行かれません……

メリサンド　おゝ！おゝ！あなたは私をひどい目に合はせて……（幾羽かの鳩が塔から出て暗中で二人の周りを飛び廻る）何でせう、あなた？――私のまはりを飛んでるのは何でせう？

ペレアス　鳩が塔から出たのです……びつくりしたのです、向ふの方へ飛んで行きます……

メリサンド　それは私の鳩ですよ――行きませう、離して下さい、鳩が歸つて來なくなるかも知れない……

ペレアス　どうして歸つて來なくなるでせう？

メリサンド　闇の中で迷つて了ふかも知れません……さあ、私の頭を上げられるやうにして下さい……足音が聞こえます……離して下さい！……ゴロウドです！ゴロウドに違ひない……私たちの聲を聞きつけたのですよ……

ペレアス　お待ちなさい！お待ちなさい！……あなたの房毛が枝に絡まつてゐる……暗い中でからませたのです……お待ちなさい！暗いものだから

（ゴロウド物見塔の道から這入つて來る）

ゴロウド　お前こゝで何をしてゐるのだ？

ペレアス　私こゝで何をしてゐる？……私は……

ゴロウド　お前等は子供だな……メリサンド、そんなに窓から乘り出してはいけない、落ちるよ……遲いのが分からないのか？もう夜中に近い――暗い中でそんないたづらをしてはいけない。お前等は子供だな……（神經的に笑ふ）何といふ子供等だ！……何といふ子供等だ！……

（ペレアスと共に出て行く）

第三場　城内の窖

（ゴロウドとペレアスが這入つて來る）

ゴロウド　氣をおつけ、こつちへ、こつちへ――お前はまだ一度もこの穴庫へ下りた事はないね？

ペレアス　一度ありますけれどもう久しい前でした……

ゴロウド　びつくりする程大きな室ばかりだ、幾つかの大きな洞穴がつゞいて、何所まで通じてゐるやら分らない。城はすつかりその洞穴の上に立つてゐるのだ。お前香ふかい、死人のやうな香ひが一杯するぢやないか？お前に見せやうと思つたのは是れさ。私の考では此の香ひは地の下の小さい湖から出るのだらうと思ふ。今に其の湖が見える。氣をおつけ私の前におあるき、この提灯の光りでね。そこまで來たら私がさう言ふよ（二人は無言で歩きつゞける）へい！へい！ペレアス止まれ！止まれ！（ペレアスの腕を捉へる）恐ろしい！……でもお前見えたらう？——もう一足で淵へはまる所だつた！……

ペレアス　私には何も見えない！……提灯が私の行く道の方を照らしてゐなかつたのです……

ゴロウド　私は足を踏みはづしてゐた併し私がお前の腕をつかまへなかつたら……あゝこれが今いつた水だ、じいつと淀んでゐる……中から死の香がして來るだらう？——あの突き出てゐる岩の端へ行つて少し乘り出して御覽。香ひが立ち昇つて來てお前の顔にぶつかるから。

ペレアス　もう香つてゐます……墓場の香ひだと言つていゝでせう。

ゴロウド　もつと、もつと……時々きまつて城内にひろがる病毒は此の香ひだが、國王がこゝから來るのだといふことを信じない——この淀み水のある洞を塞いで了へばいゝのだ。それに此の洞穴も驗べて見るべき時だ。どの穴ぐらの壁にも柱に裂目が見えるだらう？是れには何か隠れた、人の知らない細工がある。若し氣をつけなかつたら城が一夜のうちにすつかり呑まれて了ふだらう。併しどうしたらいゝか？みんなこゝへ降りて來ることをいやがる……どの壁にもどの壁にも不思議な裂目が這入つてゐる……おお！こゝに……死の香ひの出るのが分かるだらう？

ペレアス　えゝ、死の香ひが私たちのぐるりに這ひよつて來るやうです……

ゴロウド　前に出て、恐れるには及ばん……私が摑んでゐてやる……さあ出せ……いや、いや、手ではない……手はすべるから……お前の腕をお前の腕を……深い淵が見えるか？（不安さうに）ペレアス？ペレアス？……

ペレアス　はあ、淵の底まで見通せるやうです……あの震えるのは明りですか？あなたが……

（直立して向き直りゴロウドの方を見る）

ゴロウド　さうだ、提灯だ……こら、私が隅々の見えるやうに明りを動かして見せたのだ……

ペレアス　私は斯うしてゐると息がつまるやうです……歸りませう……

ゴロウド　然、歸らう……

（沈默のまゝ出て行く）

第四場　窖の入口にある平臺

（ゴロウドとペレアス入り來たる）

ペレアス　あゝ！やつと息がつけた！……私は一時あの大變な洞穴の中で氣が遠くなるかと思ひました。あぶなく卒倒しかけたのです……あの空氣の濕つぽくて重いことと、鉛の露のやうです、そして闇が毒を持つた糊のやうに濃く……それがこゝへ來るとひろい海に一杯の空氣！新鮮なやはらかい風が吹いて、御覽なさい、其の新鮮なこと、小さい綠の波の上に、開いたばかりの若葉を見るやうです……おや！あゝ、平臺の下の花に水をやつたものだから葉の綠や濡れた薔薇から香ひがこゝまで昇つて來ます……午に近いと見えて花がもう塔の蔭になつてる……午です、時の鳴るのが聞こえます、

子供等が水を浴びやうとして濱へ下りて行きます……そんなに長くあの洞穴の中にゐたとは知らなかつた……

ゴロウド　十一時近くに下りて行つたのだ……

ペレアス　もつと早かつた筈です、十時半の鐘の打つのを聞きましたから。

ゴロウド　十時半か十一時十五分前か……

ペレアス　城の窓が殘らず明きました、今日の午後は格別に暑いでせう……おゝ、塔の一方の窓にお母さんとメリサンドさんがゐる……

ゴロウド　あゝ、二人で蔭つた方へ避けて來たのだ――メリサンドといへば、私はお前等二人の間にあつた事や、昨夜話した事をみんな聞いた。それが子供の遊び事だといふ事はよく知つてゐるが、併し二度とあゝいふ事をしてはならない。メリサンドはまだ全く若いし非常に感じ易いのだからね。そしてひよつとしたら丁度母になりかけてゐるのだから、もつともつと優しく取扱つてやらなくてはいけない……あれは大へん弱い女で、殆どまだ一人前の女になつてゐない、極少しの感情でも取りかへしのつかない事になるかも知れない。私がお前等二人の仲に何事かありはしないかと思ふやうになつたのは、今初めてではない……お前はあれよりも歳を取つてゐるのだから、お前に言つて置けば十分だ……出來るだけあれを避けて呉れ、併し必ず氣のつかないやうに、氣のつかないやうに……あれは何だ、森の方角の街道に見えるのは？……

ペレアス　あれば羊の群です、町の方へ連れて行かれるのです……

ゴロウド　迷子になつた子供といふ風に泣いてゐる。もう早くも屠殺者の香ひを嗅ぎつけたのだとも見える。內へ這入つて晝食をする時刻だ――何といふ美しい日和だらう！實に申分のない收獲日和だ！（出て行く）

第五場　城の前

（ゴロウドとイニヨールド入り來たる）

ゴロウド　さあ、茲へ坐らう、イニヨールドや。私の膝の所へお出で。茲から見てゐると、森の中である事がみんな見えるだらう。私はこの頃さつぱりお前に會ないやうだ。お前も私をふりすてゝゐる、お前はいつもあのかはいらしいお母さんの傍にゐる……おや、私たちはちやうどお母さんの窓の下にゐるね――お母さんは多分今時分宵の祈りを捧げてゐらつしやる……それはさうとイニヨールドや、お母さんと叔父さんのペレアスとよく一緒に居るねえ、さうだらう

イニヨールド　えゝ、えゝ、いつも一緒にゐますの、お父さまの留守のときね……

ゴロウド　あゝ！――御覧、誰れか提灯を持つて庭を通つてゐる――けれども、あの二人はお互に仲よくないといふぢやないか……二人はよく喧嘩をするだらう……え？本當にさうかえ？

イニヨールド　えゝ、えゝ、本當です。

ゴロウド　本當？――あゝ！あゝ！――けれども二人は何の喧嘩をするのかい？

イニヨールド　戸の事で。

ゴロウド　何？戸の事？――といふのは、一體何の事かい？――さあ／＼、精しく話してお聞かせ、どうして二人は戸の事で喧嘩をします？

イニヨールド　それは戸を明けて置いてはならないから。

ゴロウド　誰れが戸を明けて置いてはならないと言ふ？――これ、二人はどうして喧嘩をするのだ？

イニヨールド　僕明りの事は知らないの、お父さま

ゴロウド　明りの事を言つてはゐない、その事もぢきに話すが、今は戸の事を言つてゐるのだよ。私の聞くことをお話し。言つてよい時には言はなくちやいけない。今言つていゝのだから……口をふさいでゐてはいけない……さあ……

イニヨールド　お父さま！お父さま！……僕もうしませんから……

（泣く）

ゴロウド　さあ／＼、なぜお前は泣くのだ？どうしたのだ？

イニヨールド　おゝ！おゝ！お父さま、僕をひどい事をして……

ゴロウド　ひどい事をした？——どこをひどい事をしました？ちつともそんなつもりはなかつたが……

イニヨールド　こゝ、こゝ、僕の腕を……

ゴロウド　ちつともそんなつもりはなかつたのだ、さあ、もう泣いてはいけない。私が明日いゝものをやらう……

イニヨールド　何を、お父さま？

ゴロウド　矢箱と矢をやらう。けれども、さあ、戸の事を言つた聞かせなくては。

イニヨールド　大きな矢？

ゴロウド　あゝ、あゝ。非常に大きな矢——けれども、どうしてあの二人は戸を開けて置いてはいけないのだらう？——さあ、言つてお聞かせ！いや、いや、口を開けて泣いてはいけない。私は怒つてゐはしないよ。音なしく話さうね、ちようどペレアスとお母さんとが一緒にゐる時のやうに。あの二人は一緒にゐて何を話すかい？

イニヨールド　親父さんとお母さまと？

ゴロウド　あゝ！何を二人は話すかい？

イニヨールド　僕の事、いつも僕の事。

ゴロウド　それではお前の事を何といつてゐる？

イニヨールド　僕は大へん大きくなるでせうつて。

ゴロウド　あゝ！なさけない！……私は斯うして盲が大海の底に沈んだ寶を探すやうなものだ！……生れたばかりの幼子が森の中で迷子になつたやうなものだ、そしてお前が……けれど、これ、イニヨールドや、私はいろ／＼に考へてゐた。眞面目に話さうね。ペレアスとお母さんと、二人は私のゐない時私の事は何も話さないかい？……

イニヨールド　話してよ、話してよ、いつもお父さまのことを話してよ。

ゴロウド　あゝ！……それで私のことを何う言ふのかい？

イニヨールド　お父さまくらゐ僕も大きくなるでせうつて。

ゴロウド　お前はいつも二人と一緒にゐるのか？

イニヨールド　えゝ、えゝ、いつも、いつも。

ゴロウド　お前に何所か行つて遊んでおいでと言つたことはないかい？

イニヨールド　いゝえ、お父さま、二人は僕がゐないと恐がつてるの？

ゴロウド　恐がつてゐる？……何うして二人の恐がつてゐることがお前に知れるか？

イニヨールド　お母さまがいつもさう言つてゐらつしやるの、行つちやいけない、行つちやいけないつて……二人ははつきりないといふの、それでゐて笑ふの……

ゴロウド　でも、それだけだと恐かつてゐるかどうか分からないぢやないか？

イニヨールド　ゐるの、ゐるの。お母さまは恐がつてゐらつしやるの……

ゴロウド　何ういふ譯で、お前、お母さまが恐がつてゐるといふのかい？

イニヨールド　二人はいつも暗闇で泣いてゐるのですもの。

ゴロウド　あゝ！あゝ！……

イニヨールド　それを見ると泣きたくなるの……

ゴロウド　おゝ、おゝ。

イニヨールド　お母さまは眞蒼よ、お父さま。

ゴロウド　あゝ！あゝ！……堪忍が大事だ、堪忍が……

イニヨールド　何うしたの、お父さま？

ゴロウド　何でもない、何でもない――狼が森を通るのを見たよ――それから二人は仲よしになつたのだね？仲直りをしてよかた――二人は折々接吻するだらう？しない？

イニヨールド　二人接吻したら、お父さま？いゝえ、いゝえ――あゝ！さう／＼、一度……一度雨の降つてるとき……

ゴロウド　接吻したか？――けれどどんな風に？――

イニヨールド　斯して、お父さま、斯して！……(笑ひながら父の口に接吻する)あゝ！あゝ！お父さま、其の髯！……ちか／＼して痛いこと、痛いこと！すつかり白くなりかゝつてね、えそれからお父さまの髪の毛もみんな白髪になりかけてゐる……(坐つてゐる上の窓に明りがつき、其光りが父子の上に射す)あゝあゝ！お母さまがランプを點してよ！これで明

ゐくなりましたよお父さま／＼、明るくなりましたよ！……

ゴロウド　あい、光りが段々さして來る……

イニヨールド　私たちもあそこへ行きませう、ねえ私たちもあそこへ行きませう……

ゴロウド　何所へ行かうといふのだ？

イニヨールド　明りのある所へ、お父さま。

ゴロウド　いや、いや、こゝに陰の所にもう暫くゐるやう……何とも言へない、まだ何とも言へない……あれを御覽、向ふにゐるあのあはれな奴等が森の中で小さな火を着やうとしてあせつてゐるだらう？――雨が降つてゐたのだ。それから片一方では老爺さんの植木屋が風で道路の上に吹き倒された樹を起さうとしてゐるのが見えるだらう。あれはだめだ、樹が大きすぎる。樹が重すぎる。倒れてゐる所に倒れてゐるより外はない。全く仕方はないのだ……ペレアスは正氣を失つてゐるやうだ……

イニヨールド　いゝえ。叔父さんは氣なんか何ともなつてゐないの、大へん親切なのよ。

ゴロウド　お前お母さんが見たいか？

イニヨールド　えゝ、えゝ、お母さまが見たいの！

ゴロウド　聲を立てるな、私が窓まで差し上げてやるから。私の脊でも窓が高すぎる……（子供を差上げる）少しでも聲を出してはいけないよ、お母さんがびつくりして恐がるから……見えたかい？――内にゐるかい？

イニヨールド　えゝ……えゝ！明るい！

ゴロウド　お母さんひとり？

イニヨールド　えゝ……いゝえ、いゝえ、叔父さんも居るの。

ゴロウド　あれが！……

イニヨールド　あゝ！あゝ！お父さま！僕痛いもの！……

ゴロウド　いゝ、いゝ、靜かにしろ。もうしないから見ておいで、見ておいで、イニヨールドや！　私は蹶つまづいた。小さい聲で。二人は何をしてゐるかい？

イニヨールド　何もしてゐないの、何か持つてゐます。

ゴロウド　二人そばに寄つてゐるか

イニヨールド　いゝえ、お父さま

ゴロウド　それから……それから寢床は？寢床の傍にゐるか？

イニヨールド　寢床ですか？――寢床は見えないの。

ゴロウド　小さい聲で、小さい聲で。聞こえるよ。何か言つてゐるかい？

イニヨールド　いゝえ。何にも言つてゐないの。

ゴロウド　だが何をしてゐるか！――何かしてゐる筈だが……

イニヨールド　二人で明りを見てゐます。

ゴロウド　二人とも？

イニヨールド　そゝ。

ゴロウド　そして話しをしないで？

イニヨールド　えゝ、眼をつぶらないでゐます。

ゴロウド　兩方から寄つて行かない？

イニヨールド　いゝえ、動かないでゐます。

ゴロウド　下に坐つてゐるかい？

イニヨールド　いゝえ、二人とも立つて壁によりかゝつてゐます。

ゴロウド　何か身振りをしてゐないかい？——お互で見てはゐない？合圖をしてはゐない？………

イニヨールド　いゝえ、お父さま——おゝ！おゝ！二人とも少しも眼をつぶらないでゐる……僕おつかなくなつた……

ゴロウド　靜にしろ、まだ二人とも動かないか？

イニヨールド　いゝえ、——僕怖いの、下してちやうだい！………

ゴロウド　何が恐いのだ——見ておいで　見ておいで！………

イニヨールド　僕もう見られないの……下してちやうだい！………

ゴロウド　見ておいで！見ておいで！………

イニヨールド　おゝ！おゝ！僕、聲を立てゝよ、お父さま！……下してちやうだい、下してちやうだい！……

ゴロウド　さあ、行つて何んな事になつたか、見て來やう。

（二人出て行く）

第四幕

第一場　城内の廊下

（ペレアスとメリザンド入り來つて出會ふ）

ペレアス　何所へ行くのです？今夜是非あなたにお話したいのです。お目にかゝれますか？

メリサンド　えゝ。

ペレアス　ちやうど今父の部屋から出た所ですが父はいい方です。醫者がもう危險はないと言ひました。併し今朝、今日は結局悪いだらうといふ前兆があつて、不幸といふことが耳元を離れなかつたのです……するとそこへ、突然非常な變化が起こつて來たのです、今ではたゞもう時間の問題です。父の部屋はすつかり明け放して、父は話しをしてゐますがいゝ氣持のやうです。まだ話ぶりは人並でないが、考へはもうあんな他の世界からでも來やうな風がなくなりました。……私を見知つて手を把つて、あの病氣以來の癖の不思議な顏をして『ペレアスお前か？どうしたのだ、今まで少も氣がつかなかつたが、お前は長く生きられない人のやうな、悲しい和しい顏をしてゐる……旅行をしなくてはいけない、旅行をしなくてはいけない……』といふのです。不思議です、私は父のいふやうにしやうとおもひます……母も聞いてゐて喜んで泣きました――あなた氣がつかなかつたのですか？もう家中が生きかへつたやうで、話聲や足音が聞こえて來る……お聞きなさい、戸の向ふで聲がします。さ、さ、聞かせて下さい、何所で會ひませう？

メリサンド　何所がいゝでせう

ペレアス　公園の『盲の井』の傍はッ、――いゝですかッ來ますか？

メリサンド　えゝ。

ペレアス　今夜がおしまひです――私は父の言ふ通り旅へ立たうと思ひます。二度とお目にかゝれますまい。

メリサンド　あなた、そんな事を言つてはいけません……私はいつもあなたにお目にかゝるつもり、いつもいつもあなたの方を眺めてゐます……

ペレアス　眺めてゐるのはいゝでせう……私は二度とお目にかゝれないやうな遠方へ行きます……思ひ切つて遠い所へ行くやうにしませう……私の胸は喜びで一杯です、天も地もみんな私の體に載せてゐるかと思はれる、今日は……

メリサンド　何うしたのですッ――私にはもうあなたのおつしやる事が分りません……

ペレアス　さあ、お行きなさい、別れませう。あの戸の後で聲が聞えます……今朝お城へ着いた旅の人たちが出て行く所です……向ふへいらつしやい。あちらには旅の人たちがゐます……

第二場　城内の一室

（アルクエルとメリサンドがゐる）

アルクエル　さてペレアスの父も危篤は通りすぎて了つて病ひといふ古い死神の召使もこの城にゐなくなつたから、やつと少しは喜びも日の光りも家の中へ這入るだらう……時節が立つたのだ！お前が來てからこのかた、いつも私たちは閉ぢた部屋のそこゝで、ひそひそ話はかりして生きてゐたやうなものだ……で、私は實にお前がかはいさうだと思つてゐたよ

……お前が來た時は、非常にうれしさうで、面白い遊び事を探してゐる子供のやうだつた、それが內へ這入るや否や、顏色が變つて了つた、恐らく魂まで變つたらうと思はれる。ちやうど日中に陰氣な〳〵、冷たい〳〵洞穴へ這入つたものが我れ知らず顏色を變へるやうなものだ……それ以來、それ以來、そんな譯で、私はも早お前が分らなくなることがしばしばだつた……お前をよく見てゐると、お前は何の氣もないだらうが、いつも何か大きな不幸が來やしないかと待ち設けてゐる人のやうに、不思議な、途方に暮れた顏をして、あそこの見事な花園の、日光の中に立つてゐた……私にも譯は分らないが……お前を見ると氣の毒でならなかつた。今からもう死神の息を晝夜吸はすには、お前はまだ若すぎる、美しすぎる……が併しもう凡て一變するだらう。此の歲になつて――恐らくこれが私の一生で一番たしかな收穫だらうと思ふが――此の歲になつて、私は世の中の事件の常住不易といふ漠然とした信仰を得たよ、そして私はいつも見てゐるが、若い美しいものは、やはり自分の周圍に若い美しい、幸福な事件をこしらへて行く……それで今私のぼんやり豫期してゐる新時代の戶を明けやうとしてゐるのがお前だ……ここへお出で、なぜ返事もしないで、同じやうに眼も擧けないでそこに立つてゐるのだ？……私は今日までにたゞ一度お前に接吻してやつたな、併し老人も時々唇を婦人の額や子供の頰に着けて今一度人生の新しさをたしかめる必要がある。一時でも嚇しつけられてゐる氣持を刎ね除ける必要がある……お前は私の唇が恐いか？この幾月といふもの私はどんなにお前をかはいさうだと思つたか！……

メリサンド　お祖父さま、私は不仕合だと思つた事はございません……

アルクエル　お前も多分自身で知らずに不仕合せでゐる仲間であらう……さういふ人々が一番不仕合なものだ……まあよく私に見せて御覽、ちよつとの間ずつと近くよつて……死といふものが傍に來てゐると、それだけ美しいものが必要になる……

（ゴロウド入り來たる）

ゴロウド　ペレアスは今夜立ちます。

アルクエル　お前の額に血が着てゐる——何をしたのだ？

ゴロウド　何でもありません……茨垣の間を拔けたのです。

メリサンド　少し頭をお下げなさい、あなた……私が額を拭いてあげませう……

ゴロウド　（押しのけて）お前が私の體にさはらせたくない分つたか？あつちへお出で、あつちへおいで！——お前に話してゐるのではない。私の劍はどこにあるか——私に劍を取りに來たのだ……

メリサンド　こゝに經机の上に。

ゴロウド　持つておいで（アルクエルに）今また一人かはいさうな奴が濱邊で餓死してゐるのが見つかりました、あいつらは私たちの見てゐる眼の下でみんな死にかかつてゐるかと思はれる程です——（メリサンドに）さあ、私の劍は？——何故お前は顫へてゐる？——お前を殺すのではないよ。たゞ刄をしらべて置かうと思つたから。私はそんな事に劍は使はない。なぜお前、そんなに私を乞食でゞもあるやうによく見るのだ？私はお前のお恵みをこひに來たのではないよ。私の眼の内から何か讀まうといふのか、私がお前のを讀む先に？——私が何か知つてゐると思ふか？——（アルクエルに）この大きな眼を御覧なさつたか？人は言葉を語る眼だと言ふかも知れません……

アルクエル　私にはたゞ貴い無邪氣といふより外何も見えない……

ゴロウド　貴い無邪氣！……無邪氣よりももつと貴い！……羊の眼よりももつと純潔な……神に無邪氣を教へることでも出來ます！貴い無邪氣、お聞きなさい、私はあの眼がまたゝきをすると睫のあざやかな氣をさへ感ずる程それに近づいてゐる

るものです。それでなほ、あの眼が持てゐる秘密となると、どんなに少しでも、他の世界に關する大秘密よりも私には遠いのです！……貴い無邪氣　無邪氣よりも以上です！……あの眼の中には、天の乙女が永久に洗禮の祭りをしてゐるといつてもよいくらゐです……私はあの眼をよく知つてゐる、あの眼を！あの眼が働いてゐる所を見ました！塞いでしまへ！塞いでしまへ！でないと私が永久に塞いでやる……さう右の手を喉の方へやるな、私の言つてゐるのは極單純な事だ私は決して二重の考は持つてゐない……若し二重の考を持つてゐるやうなら、なんでそれを言はないで置かう？あゝ！逃げ出さうとしてはいけない！これ！――其の手をお出し！――あゝお前の手は非常に熱い……あつちへ行け！お前の肉にさはるとぞつとする……これ！――逃げ出さうとするのに違ひない！――（髪の毛を取つて引すゑる）――お前は膝まづいて私について來るのだね！――膝まづいて！――私の前に膝づいて！――あゝ！あゝ！お前の長い髪の毛がとう／＼何かの役に立つ……最初に右へ、それから左へ、アブソロム！アブソロム！――前の方へ！……後の方へ！下へ地べたへ！下へ地べたへ！……そら、そら、私はもう老人のやうな笑ひかたをしてゐる……

アルクエル　（走り寄つて）ゴロウド！……

ゴロウド　（わざと突然靜になつて）あなたのお好み通りにして下さい、どうか――私は何とも思つて居りません――私はもう歳をとりすぎました。それに、私は間諜ではありません。何ういふ事がひよつと起つて來るか待つてゐてそれから……おゝ！それから――……たゞもうそれが習慣だから、たゞもうそれが習慣だから……

（出て行く）

アルクエル　ゴロウドは何うしたのだ？――酒に醉つてをるのか？

メリサンド　（涙を流して）いゝえ、いゝえ。けれどあれはもう私を愛して呉れません……私、悲しい！……悲しい！……

アルクエル　神さまであつたら、私は人間の心を可哀さうなものだと思ふだらう……

第三場　城の前の平臺

（イニヨールドが一塊の岩を持ち上げやうとしてゐる）

イニヨールド　おゝ！この石は重たい！……僕よりも重たい……世界よりも重たいや……いろ〳〵な事のあつたのをみんな寄せたよりも重たい……岩と此の重い石の間に僕の金の毬があるのが見えてゐて、手が届かない。……僕の小さい腕が短かすぎる……石は持ち上らないし……僕に持ち上げられないんだ……持ち上げられる人は一人もゐないんだ……家みんなよりもこの石の方が重たい……土に根が生えてるかも知れない……（遠方で羊の群の鳴くのが聞こえる）あら！あら！羊の鳴くのが聞こえる……（見やうとして平臺の端に行く）なんだ！お日さまが行つちやつた……やつて來る、小さい羊が、やつて來る、……隨分澤山ゐる！……隨分澤山ゐる！……暗いのが恐いんだ……ごちや〳〵と一緒になつてゐる！ごちや〳〵と一緒になつてゐる！少しつゝしか先へ行けないんだ！鳴いてゐる！鳴いてゐる！……一生懸命に走つてゐる……一生懸命に走つてゐる！……もう大きな四辻へ來た。あゝ！あゝ！どの路へ行つていゝか知らないんだ……もう鳴かなくなつた……待つてゐる……右へ行かうとしてゐるのがある……みんな右へ行かうとする……行つちやいけないのだ！……羊飼が土を投げてゐる……あゝ！あゝ！この路を通らうとしてゐる……言ふことを聞いた！言ふことを聞いた！平臺の前を通らうとしてゐる……近くで見てやらう……おゝ！おゝ！隨分澤山ゐる！隨分澤山ゐる……路が一杯になつてゐる……もうみんな默つて了つた……羊飼！羊飼！何ぜその羊は話をしなくなつた？

羊飼　（見えない所で）羊小屋へ行く道でなくなつたからですよ……

イニヨールド　何所へ行くんだ…？羊飼　羊飼！――何所へ行くんだい？――僕のいふのが聞えないのだ。もうずつと遠くの方へ行つて了つた！…一生懸命に走つてゐる……もう少しも音をさせなくなつた……羊小屋へ行く道でなくなつた…何所で今夜寢るのだらうなあ？おゝ！おゝ！こゝいらが暗いこと！……僕行つて誰れかに何か言つて來やう……

（出て行く）

第四場　公園の泉水

（ペレアス入り來る）

ペレアス　今夜が最終の晩だ……最終の晩だ……一切の事が玆に終らなくてはならない……私は思ひも寄らなかつた事で子供のやうな振舞をしてゐた……夢を見て運命の穽で遊んでゐた……だしぬけに私を呼び醒ましたのは誰れだ？私は喜びと苦しみの兩方で叫び聲を上げて逃げ出すのだ。盲が自分の家の燒ける中から逃げ出すやうに……私は逃げ出さうとしてゐるとあれに言つて聞かせやう……父は危險でなくなつた。そして私はもう自分を欺く道もない……夜が更けた、あれは來ないやうだ……もうあれに逢はないで行く方が私の爲にいゝかも知れない……今度こそはよくあれを見て置かなくてはならない……思ひ出せない事がいろ／\ある……人が百年も會はなかつたのかと思ふかも知れない……でも私はまだあれのこちらを見る顏を見つめたことが無い……このままで行つたら私にはもう何も殘らないだらう。それから殘つてる記憶もみんな……ちやうど紗の袋に少しばかりの水を入れて運ぶやうなものだ……是非とも最後に今一度會つて、心の底まで見おぼえて置かなくてはならない……言はなかつたことを殘らず言つて置かなくてはならない……

（メリサンド入り來る）

メリサンド　ペレアスさま！

ペレアス　メリサンドさん！あなたですか？メリサンドさん

メリサンド　えゝ。

ペレアス　さあこゝへ、そんな月明りの縁に立たないで、こゝへいらつしやい。お互に言ひたい事が澤山あるのだから……
こゝへ、菩提樹の蔭のところへいらつしやい。

メリサンド　光りのところに置いて下さい。

ペレアス　櫓の窓から見えるかも知れない。こゝへいらつしやい、こゝだと少しも心配はない。氣をつけて、人が見るかも知れないから……

メリサンド　人が見て呉れるといゝと思ひます……

ペレアス　なぜさ、どうしたといふのです？見つからないで出て來られましたか？

メリサンド　えゝ、あれは眠つてゐました……

ペレアス　今夜はおそいから、一時間もすると戸をしめるでせう。氣をつけなくてはならない、どうしてそんなに遲く來ました？

メリサンド　ゴロウドが惡い夢を見たのです。それから私の着物が戸の釘に引つかゝつたり。御覧なさい、裂ました。そんな事で時間を取つたものだから、私、駈け出しました……

ペレアス　かはいさうにメリサンドさん……私はあなたの體にさはるのが勿體ないやうな氣がする……あなたまだ息を切らして、獵人に追はれた小鳥のやうに……さうまでして下さるのは、みんな私のためでせう、私のためでせう？あなたの

胸の動悸が私のゝやうによく聞えます……さあ、こゝへ……もつと傍へ、もつと傍へ……

メリサンド　なぜあなたは笑つて？

ペレアス　笑つてはゐません——笑つたら、それは嬉しいからです、知らずにです、却つて泣かなくてはならない譯があるのだから……

メリサンド　前にこゝへ來たことがありますね……私、おぼえてゐる……

ペレアス　さうです……さうです……幾月か前に……その時には知らなかつたが……あなたなぜ私が今夜來て下さるやうにお頼みしたか、知つてゐますか？

メリサンド　いゝえ。

ペレアス　多分これがお目にかゝる最後でせう、……私は永久に出て行かなくてはなりません……

メリサンド　なぜあなたそんなにいつも出て行くとおつしやるの？……

ペレアス　話さなくとも、あなたにはもう知れてゐる事です。私の話さうと思つてることが分かりませんか？

メリサンド　少しも分りません、少しも分りません、何も知らないのですから……

ペレアス　なぜ私が行かなくてはならないか、知らないのですか？……其譯を知らないのですか……（突然烈しくメリサンドに接吻する）……私あなたを愛してる……

メリサンド　（低い聲で）私もあなたを……

ペレアス　おゝ！おゝ　メリサンドさん、あなた何といひました？……仰つた事がはつきり聞えなかつた……氷が灼熱した鐵の鎖で破られたやうに……あなたがそれを仰つた聲は世界の果からでも來たやうです！微に聞えました……私を愛して

下さる？あなたも私を愛して下さる……何時から愛して下すつたか

メリサンド　それは……いつも……初めてお目にかゝつてから。

ペレアス　おゝ　何んな風にしてそれを仰しやる！あなたの聲が春の海をわたつて行つたのだとも言ひませう！……今まで一度も聞いた事のない……何だか雨が心臟の上に降りかゝりでもしたかと思ふやうな……あなたの言ひかたのあの單純さ！……其の乙女が物を聞かれて……メリサンドさん、私は信じられません……なぜ私を愛して下さらなくてはならないかけれども何うして私を愛して下さるか　あなたのおつしやることは眞實か？あなたは私をだましてゐるのではないか？私に笑顏をさせやうと思つて、ちよつと嘘を言つて見たのでせう？……

メリサンド　いゝえ、私は決して嘘なんか言ひません、ただあなたの兄さんにだけ嘘を言ひました。

ペレアス　おゝ　其のあなたの言ひやう……あなたの聲！あなたの聲！……水よりも新鮮な、水よりも眞實な！……唇に清い水を注いだやうな感じ！……手に清い水を注いだやうな感じ……私に、私にその手を把らせて下さい……おゝ！あなたの手の小さいこと……あなたがそんなに美しいとは知らなかつた！……あなたに會ふまでは、そんな美しいものを見た事がない。私は氣がふさいでゐて家中を殘らず尋ね、國中を殘らず尋ねても……美しいものは見つからなかつた……それが今あなたといふものを見つけました！……あなたといふものを見つけました！地球の上にこれより美しい婦人があらうとは信じません！……あなた、何處にゐますか？もうあなたの息が聞えないが……

メリサンド　それは私があなたを見てゐるからです……

ペレアス　どうしてさうおごそかに私を見てゐますか？私たちはもう蔭に這入りました。此の木の下は暗すぎる。光の中へ入らつしやい。私たちがどれ程幸福だか見えない。さあ、いらつしやい、時間が非常に少ないから……

メリサンド　いえ、いえ、こゝにゐさせて下さい……暗い中だと一層あなたの近くにゐられます……

ペレアス　あなたの眼はどこです？あなたは私を棄てゝ逃げ出さうとしてはゐませんか？丁度今あなたは私の事を思つてゐないでせう。

メリサンド　ほんとにさうです、ほんとにさうです、あなたの外の事を考へてゐます。

ペレアス　何所か餘所の方を見てゐました……

メリサンド　私、餘所の方にあなたを見たのです……

ペレアス　あなたは有頂天になつてゐらつしやる……何事です？幸福でないやうに見えるが……

メリサンド　いゝえ、いえ、私は幸福です、けれど悲しい……

ペレアス　人は戀をするとよく悲しくなります……

メリサンド　私はあなたの事を考へるといつも泣かなくてはゐられません……

ペレアス　私も……私も、ね、……私はあなたのすぐ傍にゐます、喜びで泣いてゐます、けれど……（再びメリサンドに接吻する）私が斯んな風にあなたに接吻してゐると、あなたは不思議に見えます……さながら死んで行くのかと思はれる程美しく見えます……

メリサンド　あなたも……

ペレアス　それが、それが……思ふやうに出來ないで……私は初めてあなたを見た時は戀ひはしなかつた……

メリサンド　私もです……私もです……私は恐ろしかつたのです……

ペレアス　私はあなたの眼を迎へることが出來なかつた……すぐ行つて了はうと思ひました……さうすると……

メリサンド　私は來やうとは夢にも思ひませんでした……何ぜだか今に分らないけれど、來るのが恐ろしくつて……

ペレアス　世の中には少しも人の知らない事が澤山あります……私だちはいつも待つてゐる、さうしてゐると……あれは何の音です？戸をしめてゐるのだ！……

メリサンド　えゝ、戸をしめました……

ペレアス　歸れなくないでせう　差金の音が聞こえますか？お聞きなさい！お聞きなさい！あの大きな鎖！……大きな鎖！もう間に合はない、もう間に合はない！……

メリサンド　いつそ其の方がいゝのです！いつそ其の方がいゝのです！いつそ其の方がいゝのです！……

ペレアス　あなたが？……御覧なさい、御覧なさい……もう、望んでゐる私たちとは違つて來た！……すつかり駄目になつて、すつかり救はれました？今夜といふ今夜すつかり救はれました！さあ　こゝへ……私の胸が氣違のやうに動悸してゐる、すぐ喉の所まで……（女を抱く）お聞きなさい！お聞きなさい、私の胸が息づまるやうです……さあ！さあ！……あゝ！なんて美しいことだらう、この暗い中に！……

メリサンド　誰れか私たちの後にゐます！……

ペレアス　私には誰れも見えない……

メリサンド　音が聞こえました……

ペレアス　私にはたゞあなたの動悸が闇の中で聞えるばかりです……

メリサンド　私、枯葉の鳴るのを聞いたのです……

ペレアス　風が一時に靜まつたのです……接吻してゐる間にないだのです……

メリサンド　私たちの影が今夜は長いこと！……

ペレアス　二人の影がすぐ向ふの花園の端に絡まつてゐます……おゝ！接吻してゐる影が遠くに見えること！……御覧なさい！……御覧なさい……

メリサンド　（息のとまつた聲で）あゝゝ木の後にゐます！

ペレアス　誰が？

メリサンド　ゴロウド！

ペレアス　ゴロウド？何所にさ？――私には何も見えない……

メリサンド　あそこに……影の頂邊の所に……

ペレアス　然、然、見えた……あんまりだしぬけに振りかへつてはいけない……

メリサンド　劍を持つてゐます……

ペレアス　私には無い……

メリサンド　私たちが接吻してゐるのを見ました……

ペレアス　私たちが見つけたことはまだ知つてゐない……動いてはいけない、頭を向けかへないでおいでなさい……突進して來るかも知れないから……私たちが氣がつかないと思つてゐるあひだはあゝしてゐるでせう……こちらを見つめてゐる……まだじつとしてゐる……私が待ちうけて喰ひとめます……

メリサンド　いえ、いえ、いえ……

ペレアス　お行きなさい！お行きなさい！何もかも見られたのです！……私たちを殺すでせうから！……

メリサンド　いつそ其の方がいゝのです　いつそ其の方がいゝのです！………

ペレアス　やつて來る、やつて來る、………あなたの口を、あなたの口を！………

メリサンド　えゝ！………えゝ！えゝ！………

（狂熱的に接吻する）

ペレアス　おゝ！おゝ！最後になつて來た！………

メリサンド　私も！私も！

ペレアス　も一度　も一度！……下さい！下さい！………

メリサンド　みんな！みんな！みんな！

（ゴロウド劍を持ち二人の方へ突進してペレアスを撃つ、ペレアス泉水の傍に倒れる。メリサンド怖れて我を失つて駈け出す）

メリサンド　（逃げながら）おゝ！　！私には堪えられない………私には堪えられない！………

（ゴロウド默つて森の中を追つかける）

第五幕

第一場　城内の低い廣間

（女中が集つてゐる、外では幾つかある空氣穴の一つの前で子供等が遊んでゐる）

第一の年取つた女中　待つて御覽、待つて御覽、今夜だらうよ。今に來て知らせるだらうから……

第二の女中　知らせて來はしないでせうよ！……あの人たちはもう自分が何だやら、知らないのだから……

第三の女中　こゝで待つてゐやうよ……

第四の女中　二階へ行くとよくすつかり分かるだらう……

第五の女中　時が來れば私たちひとりでに上つて行く……

第六の女中　家中物音一つ聞こえなくなつた。

第七の女中　空氣穴の前で遊んでゐる子供にさう言つて靜にさせなくては。

第八の女中　今にひとりでに靜になるよ。

第九の女中　まだ時が來ない……

（別の年取つた女中が這入つて來る）

年取つた女中　もう誰れも部屋へ這入れない。私は一時間以上氣をつけて聞いてゐたが……アの上を蠅のあるく音でも聞こ

えるくらゐだのに何にも聞えない……

第一の女中　お妃ひとり部屋の中にゐるのかね？

年取つた女中　いゝえ、いゝえ、部屋の中は人で一杯のやうだ。

第一の女中　あの人たちも今に來はじめるだらう、今に來はじめるだらう……

年取つた女中　あゝ　あゝ　此の家にも不幸が這入り込んで來た……言へはすまいが、知つてゐることだ……していゝなら……

第二の女中　お二人を入口のところで見つけたのはあなただつけ？

年取つた女中　さうとも、さうとも、あれを見つけたのは私だつたよ。門番は自分が先に見つけたのだといふけれど、あれを起こしたのは私だよ。あいつは腹這ひになつて寢こけてゐて容易に起きやしなかつた——それに今になつて出て來て、最初に見たのは自分だなんて言やがる。ひどいだらう？——私は穴庫へ行かうと思つて、ラムプを點す拍子に火傷をしてねえ——何だか傷に穴庫へ行きかけたのだが？——何をしに穴庫へ行きかけたのだか、今思ひ出せない、兎に角私早く起きたのさ。まだ十分明るくなつてゐなかつた。そこで私は庭を越して行つて戸を明けやうと、さう考へて[illegible]拔き足し差し足で下へ降りて、ただ[illegible]戸のつもりで戸を明けたのさ……びつくりしたよ！ねえ、何を私は見つけたのだら[illegible]？察してお呉れ……

第一の女中　お二人はちやうど戸の前にいらつしやつたの？

年取つた女中　二人とも戸の前に倒れていらつしやつた！……ちやうど哀れな乞食が長く饑えてるたといふ風に……子供が恐ろしい時にするやうに二人しつかり絡みついていらつしやつた。小さいお妃は死にかゝつて、大きなゴロウド樣は[illegible]た傷

腹に劍を突つ込んだまゝ……敷石の上には血が流れてゐた……

第二の女中　子供にさう言つて靜にさせなくては……空氣穴の前で力一杯叫んでゐる……

第三の女中　もう人の言ふ事が聞えない……

第四の女中　どうも仕方がない、いろ／＼言つてみたが靜にならない……

第一の女中　あの方はもう大抵治つてゐるのかえ？

年取つた女中　誰の事？

第一の女中　ゴロウド樣

第三の女中　えゝ、えゝ、みんなでお妃の部屋へ連れて行きました。私、ちやうど今廊下で逢つたところ。醉どれか何かのやうに、みんなであの方を支へてゐましたよ。まだ獨りではおあるきになれませんでした。

年取つた女中　自殺がうまく行かなかつたのだ、あの方は大きすぎるから。けれどもお妃はまるで傷なんかないくらゐ、それでゐて死にかゝつてゐらつしやるのはお妃だよ……分かつたかえ？

第一の女中　傷を見て？

年取つた取中　斯うして向あつてゐる程はつきりと――何もかもみんな見た、分かつたかえ……誰よりも一番先に私が見たのだよ……左の胸のところに小さい小さい傷が一つ。鳩だつてあんな小さい傷で殺されはしない。だゞ事だらうか？

第一の女中　さう／＼斯ういふ事の起るのは何かあるからだ……

第二の女中　えゝ、けれどあの方は三日ばかり前押しこめられてゐらつしやつたのです……

年取つた女中　それだ！……自分の死床の上に押しこめられてゐらつしやつたといふことが、何かの知らせぢやあないか、

――そしてまるで子供のやうに！お前さん見たかえ？――小さい弱々しい娘さん、乞食だつて生みたがりはすまいと思はれるやうだつた、――月足らずに出て來た小さい臘細工の人……小羊の綿毛の中に住む小さい臘細工の人……そんなだつたよ、そんなだつたよ。この家にも不幸が這入りこんで來たのだ……

第一の女中　さうだ〳〵、神さまのお手が動いたのだ……

第二の女中　斯いふ事は譯がなくては起りませんねえ……

第三の女中　それからあのやさしいペレアス樣……あの方はどこにゐらつしやるでせう？誰も知つてゐるものがない……

年取つた女中　それはお前誰でも知つてゐるよ……たゞ誰も話さうとしないのだ……是れは誰れも話してはならない……もう誰も何も話さなくなつた……もう誰も眞實を話さなくなつた……けれど私はあの方が古井の底から見つかつた事を知つてゐる……たゞ誰も〳〵一目も見ることが出來なかつたのだ、それだよ、それだよすべて、事の知れるのはたゞ一番最後の日ばかり……

第一の女中　私はもう玆では寢る氣がない……

年取つた女中　不幸が一度家へ這入つて來たら、おとなしくしてゐるのが一番いゝ……

第三の女中　えゝ、それでも不幸が見わけて行きます……

年取つた女中　さうだ、さうだ。けれど私たちは行かうと思ふ方へは行かない……

第四の女中　私たちの思ふやうには爲ません……

第一の女中　あの人たちは私等を恐れて來た……

第二の女中　みんな寄つて相談をしてゐるのです……

第三の女中　あの人たち、廊下では眼を伏せてゐました……

第四の女中　ひそ〳〵話ばかりしてゐます。

第五の女中　みんなでもうすつかり爲るだけの事をし了へたのかも知れません。

第六の女中　何をしたのか少しも知れない……

第七の女中　御主人が恐れてゐらつしやるのに何をしていいのだか？……

（沈默）

第一の女中　もう子供の聲も聞えなくなつた。

第二の女中　みんな空氣穴の前に座はりました。

第三の女中　みんな一所に押し合つてゐます。

年取つた女中　もう家中に物音一つ聞えなくなつた……

第一の女中　子供の息さへ聞こえなくなつた……

年取つた女中　さあ、さあ、二階へ行くときが來た……

（默つて出て行く）

第二場　城内の一室

（アルクエル、ゴロウド及び醫師が室の一隅にゐる。メリサンドは寢床の上に寢てゐる）

醫師　お崩れになればこの小さい傷のためではございません、小鳥だつてこれでは死にません……ですから此方をお殺

しになつたのはあなたではございません。さうあなた御自身でお悶えなさるには及びますまい……この方が生きてらつしやる事が出來ないのです……理由なくしてお生れになつたのです……死ぬるために。そして今理由なくして死んで行かれるのでございます……さう申しましても、お救ひ申すに及ばないといふのではございません……

アルクエル　さう、さう。私の見る所ではあれの部屋だと、みんなが自分の意志に背いてまで默りすぎてゐる……惡い前兆だ……御覧、あんなに眠つてゐる……ゆつくりとゆつくりと……さながらあれの靈魂が永久に冷たくなつたやうだ。

ゴロウド　原因もなく殺して了つた！原因もなく殺して了つた！……それだけで石をも泣かせるではないか！……あれ等は小さい子供のやうに接吻し合つた　たゞ接吻し合つたばかりだ……兄と妹に過ぎなかつた……それを私が、それを私が即座に……でも私は自分の意に反して、それをやつた……自分の意に反してそれをやつた……

醫師　お氣をおつけ下さい、お目が醒めるやうです……

メリサンド　窓を明けて……窓を明けて……

アルクエル　此の窓を明けて呉れといふのかい、メリサンドや

メリサンド　いえ、いえ、其の大きい窓……其の大きい窓……私に見えるやうに

アルクエル　今夜は海の空氣が冷えすぎはしないか？

醫師　あの方がおつしやる樣になさいませ……

メリサンド　ありがたう……今、日の入りですか？

アルクエル　然、日が海へ沈みかけてゐる、夕方だ。氣分はどうか、メリサンド？

メリサンド　さうですね、さうですね、なぜそんな事を私にお聞きなさるの？私は少しも快くなつたと思ひません。けれど。

何か分かつたことがあるやうに思ひます……

アルクエル　何ういふ事だ？私には分からないが……

メリサンド　でも、私も自身で言つてることがさつぱり分かりません……何を言つてるのか存じません……自分の知つてる事が分かりません……もう私は望んでゐることは言ひません……

アルクエル　さあ、さあ……お前がそんな風に話すのを聞くとうれしい。この二三日お前は少しぼうつとしてゐた、お前のいふことが私たちには分からなかつた……併しもう、ずつとそんな事はなくなつてゐる……

メリサンド　私、分かりません……部屋の中にはあなた一人ですか、お祖父さま？

アルクエル　いや、お前を療治したお醫者さまもこゝにゐる……

メリサンド　あゝ！

アルクエル　それから、外にまだ一人ゐる……

メリサンド　誰れですか？

アルクエル　それは……恐れてはいけないよ……其の人が少しもお前に害を加へやうとするのでないことはたしかだから…若しお前か恐ろしいといへば、其の人はあちらへ行くだらう……其の人は大へん悲しんでゐる……

メリサンド　誰れです？

アルクエル　それは……それはお前の夫……ゴロウド……

メリサンド　こゝにいらつしやるの？なぜ私の傍へいらつしやらないの？

ゴロウド　（寝床の方へいざり寄り）メリサンド……メリサンド……

メリサンド　あなたですか？私もうはつきりあなたが分らない……夕日が私の眼にきらきらしてゐるのです……あなたなぜ壁の方を見つめていらつしやるの？瘠せて了つて、年をお取んなさつたのね……此の前お目にかゝつてから餘つほどになりますか？

ゴロウド　（アルクエルと醫師とに）少しの間部屋を出てゐて下さい、どうぞ、どうぞ……戸は明け放して置くから……ほんのちよつとの間、私はあれに言ひたい事がある。それを言はなくては私は死ねない……どうか、廊下の端の所まで行つてゐて下さい。すぐに歸つて來て下さつていゝから、すぐに……お拒みなさらないで……私はみじめな奴ですから……（アルクエルと醫師と出て行く）メリサンドお前は幾らかでも私を不憫だと思つて呉れるか、私はお前を不憫だと思ふが？……

……メリサンド？……私を許して呉れるか？

メリサンド　えゝ、えゝ、許します……許すつて何をです？……

ゴロウド　メリサンド、私はお前に對してこんな大惡事をした……お前に加たこの惡事を、私は言ふことが出來ない……併し私は最初の日からこのかた……今日といふ今日見えて來た、はつきりと見えて來た……これまで知らなかつたすべての事が今宵、私の眼に這入つて來た……みんな私の過だ、すでに起こつた事、之れから起こらうとしてゐる事、みんな私の過ちだ、言ふことさへ出來たら、どんなにはつきりと私の眼に映つてゐるか、お前にも分かるだらうが！……私にはみんな見えて來た！……けれど私は隨分深くお前を愛した！……隨分深くお前を愛した！……そして今こゝに一人死なうとしてゐるものがある……その死なうとしてゐるものは私だ……それで私は知りたいのだが……お前に聞きたいのだが……お前思ひ違へはしないだらうね？……私は……死にかかつてゐる人には眞實を言つて聞かせなくてはいけない……其の人は眞實が知りたいのだから、それでなければ眼をつぶれないのだから……お前、眞實を話すと言つて呉れるか。

メリサンド　えゝ。

ゴロウド　お前はペレアスを愛してゐたか？

メリサンド　えゝ、えゝ、私あの方を愛してゐました。どこにいらつしやるのです？

ゴロウド　お前私の言つた意味が分からないのか？私の見る所では……私の見る所では……さうだ、斯いふのだ、お前は僞てならない戀でおれを愛したのか、それが聞きたいのだ？……お前は……お前は罪を犯したのか？言つて呉れ、言つて呉れ、さうだ、さうだ、さうだ？……

メリサンド　いえ、いえ、私たちは罪を犯しません。なぜそんな事をお問ひなさるの？

ゴロウド　メリサンド！眞實を言つて呉れ、神の愛のために！

メリサンド　でも私、眞實を言つたではありませんか？

ゴロウド　死ぬ間際にそんな嘘を言つてはいけない！

メリサンド　誰れが死ぬ間際です？……私がですか？

ゴロウド　お前が、お前が！そして私も、私もお前の跡を追うて！……だから眞實が知りたい……私たちは最後に眞實を知らなくてはならない、分かつたか？……みんな言つて呉れ！みんな言つて呉れ！私は何でも許すから！……

メリサンド　なぜ私は死にかけてゐるのでせう？私、知りませんでした……

ゴロウド　今、お前に分かつた！……ちやうど時が來た！ちやうど時が來た！早く！早く！……眞實を！眞實を！……

メリサンド　眞實……眞實……

ゴロウド　お前どこにゐる？メリサンド！どこにゐる？之れが自然のことゝも思へない！メリサンド！どこにゐる？どこへ

行くのだ？（アルクエル、と醫師が部屋の入口にゐるのを見とめて）さう〳〵お這入りなさい……私は何も知らない……無用のことだ……もう間にあはない、メリサンドは最早私たちと離れすぎて了つた……私には到底知れないでせう！……私はこゝで盲人のやうに死ぬる……

アルクエル　何をした？お前はあれを殺すだらう……

ゴロウド　私はもうあれを殺しました！……

アルクエル　メリサンド……

メリサンド　あなたですか？お祖父さま？

アルクエル　おゝ娘や……何か私に用はないか？

メリサンド　こゝには冬があるといふのは本當ですか？

アルクエル　なぜそれを問ふのか？

メリサンド　でも寒くて木の葉がなくなりましたから……

アルクエル　お前寒いか？――窓をしめた方がいゝか？

メリサンド　いえ、いえ……日が深く海に沈むまではしめないで下さい――ゆつくりと沈んで行きますこと。で冬が初まつたといふのは本當ですか？

アルクエル　然しお前は冬は好まないか？

メリサンド　いゝえ。私は寒さが怖いのです……ひどい寒さが怖くてなりません……

アルクエル　氣分がよくなつたか？

メリサンド　えゝ、えゝ、私もうあんな胸の苦しみなんか一つも感じません……

アルクエル　お前の子供が見たいか？

メリサンド　何の子供？

アルクエル　お前の子供――お前はもう母だ小さい娘を生んだのだ……

メリサンド　どこにゐます？

アルクエル　こゝに……

メリサンド　變ですこと……子供を取らうと思つても手が上りません……

アルクエル　それはお前がまだひどく弱つてゐるからだ……子供は私が持つてやる、御覽……

メリサンド　笑ひませんね……小さい子供……この兒も泣かうとしてゐます……かはいさうですね……

（室には女中が段々入り込み壁に沿ふて列を作り默つて待つてゐる）

ゴロウド　（急に立ち上り）何事だ？――此の女どももみんなここで何をするのだ？……

醫　師　女中どもでございます……

アルクエル　誰れが皆を呼んだか？

醫　師　私ではございません……

ゴロウド　何でお前たちはこゝへ來たのだ？――誰れも呼びはしない……こゝで何をしやうといふのだ？――それで何うしたのだ、返事をせい……

（女中等一言も答へず）

アルクエル　おんまり聲高に話すな……あれが眠りかけてゐる、眼を閉ぢた……

ゴロウド　若しや是れが？……

醫　師　いや、いや、御覧なさい、息をしてゐらつしやいます……

アルクエル　眼に涙が一杯ある――今泣いてゐるのはあれの靈魂だ……どうして兩腕をひろげるのか？――何か欲しいのだらう？

醫　師　屹度お兒さまの方へです、母として藻かいて……

ゴロウド　ふん？――ふん？――そのあとを言はなくてはいけない、お話しなさい！お話しなさい！……

醫　師　多分……

ゴロウド　すぐに？……おゝ！おゝ！言つて置かなくてはならない……メリサンド！メリサンド！……行つてゐて下さい！あれと私だけにして、行つてゐて下さい！

アルクエル　いや、いや、近よつて來てはいけない……あれを苦しめるな……二度とあれに物を言ふな……お前は靈魂が何んなものだといふことを知らない……

ゴロウド　私の罪ではありません……私の罪ではありません。

アルクエル　靜に……靜に……今はそつと話さなくてはいけない――あれの靈魂を此の上苦しめてはならない……人間の靈魂は非常に沈默なものだ……人間の靈魂は好んで寂しい内にぬけて行く……おど／＼して苦しむものだ……併しその悲哀は、ゴロウドよ……その見る限りに於いての悲哀は！……おゝ！おゝ！おゝ！

（こゝで女中殘らず突然部屋の端に膝まづく）

アルクエル　（向き直りながら）何事だ？

醫　師　（寢床に近より體にさはつて見ながら）女中たちが本當でございます……（長い沈默）

アルクエル　私は何も見なかつたが――たしかゝね？

醫　師　はい、はい。

アルクエル　私は何も聞かなかつた……そんなに急に、そんなに急に……だしぬけに……あれは一言も言はずに行つて了つた……

ゴロウド　（すゝり泣きながら）おゝ！おゝ！おゝ！

アルクエル　こゝにゐない方がいゝ、ゴロウド、あれには今沈默が必要だ、來い、來い……恐しい事だが、併しお前の罪ではない……あれは小さい優しい人であつた、あんなに靜で、あんなにおづ／＼と、あんなに沈默して……全世界と同じやうに哀れな小さい不可思議なものであつた……自分の子の大きな姉といつてもいゝやうに、あそこに寢てゐる……さあ、さあ……おゝ神よ！おゝ神よ！……私も一切分からなくなつたやうだ……あちらへ行かう、さあ、子供はこゝにゐてはいけない、此の部屋にゐては……今度はこれが生きなくてはならない、あれの代りに……哀れな小さいものゝ番が來たのだ……

（沈默のまゝ皆々出て行く）

（終　り）

（此譯は Laure de Alma Tadema の英譯により、第三幕の歌は英文のまゝを挿入して置いた。此の歌は原著者が特に指定したものだといふから、成るべく此のまゝで歌ふことにしたい。又劇中の人名は舞臺上の邪魔にならぬやうイギ

リス讀みとフランス讀みとを混用した。例へばゴロウをゴロウドとした如きである。

七王女

（マーテルリンク原作）

人物

老いたる王
老いたる王妃
王子
七人の王女
使者
水夫等の合唱團

（宏壯なる大理石造の大廣間、月桂樹、ラヴエンデル、百合等の植物が陶器の鉢に植ゑてある。室は長さに添うて七段の白大理石の階段に由て限られてゐる。七人の王女、白のゆるやかな上衣に兩腕をあらはして、其の階段に眠つてゐる。階段には一つ／＼薄青色の絹の褥が敷いてある。一臺の銀のラムプがまどろんでゐる王女等を照す。廣間の端手に大きな横木のついた扉があり、其の左右の大きな窓は下まで一ぱいに透けてゐる。窓の先は壇になつてゐて、夕日が沈みかけてゐる。向ふに沼や柏、松などの森のある暗い濕地が窓硝子を通して見える。一方の窓と垂直に非常な柳並木の間を、眞直な黑い運河が通じてゐる。其の果てから一艘の大きな兵船が進んで來る。）

（老王、老王妃及び使者、壇の上に出て來て兵船の近づくのを見まもる。）

王妃　帆を一杯にあげて參ります……

王　私には霧でよく見えない……

王妃　多勢で漕いでゐます……多勢で漕いでゐます……もうすぐに宮殿の窓下へ着けるのでございませう……大變な足があるやうですこと……帆が柳の枝にさはります……

王　運河よりも大きく見える……

王妃　止めやうとしてゐます……

王　あれでは廻はることが出來なくはないか……

王妃　止めやうとしてゐます……止めやうとしてゐます……錨を卸してゐます……柳の木に括りつけてゐます……あゝ！あゝ！王子が出て來るやうですよ……

王　あの白鳥を御覽、……みんなで王子を迎へに行く……誰れだか見に行くやうだ……

王妃　あれ等はまだ眠つて居りますか？

（二人窓の所へ行き廣間の内を透して見る）

王　起こしてやらう……ずつと前に私はさう言つたが、みんな目を醒ましてゐなくてはいけない。

王妃　王子が茲へ見えるまでお待ち遊ばせ……あゝ、もう、後れました……王子は來ました、王子は來ました！――あゝ！あゝ！何うしたらいゝでせう？――とても起こされません！……あれ等の病氣ではとても……

王　戸をあけやうか？……

王妃　いゝえ！いゝえ！お待ち遊ばせ！おゝ、まあ眠つてゐること！……まあ、いつまでも眠つてゐること！……王子の歸て來るのを知らないのです……起こしますまい……醫者が禁じてゐます……起こさない方がようございます……まだ起こさないで置きませう……あゝ！あゝ！橋の上に足音が聞こえます！……

王　王子が來た！王子が來た！壇の下に來てる！……

王妃　何所にゐます？何所にゐます？――あれが王子ですか？――見おぼえが無くなりました！……さうです！さうです！まだ知つてゐます！おゝ、脊が高いこと！脊が高いこと！階段の下へ來ました！マーセラス！マーセラス！お前かえ？――――上がつておいで！上がつておいで！私たちは、もう、みんな、誰れも彼れも年寄つて了ひました！……もう降りて行くことが出來ない！……上がつておいで！上がつておいで！

王　落ちないやうに氣をおつけ！……階段が古くなつて了つて……ぐら〳〵してゐる……氣をおつけ！……

王妃　上がつておいで！上がつておいで！上がつておいで！

（王子壇の上に登り王と王妃との腕に擁せられる。）

王子　おゝ、お祖母様！おゝ、お祖父様！

（互に相抱く）

王妃　まあ、お前立派になつたねえ！――大きくなつたねえ！――マーセラス、脊が高くて！――私、涙が一ぱいになつてはつきりとお前を見ることが出来ない……

王子　おゝ！お祖母様、あなたの髪の毛の白くなつたこと！……おゝ、お祖父様、あなたのお髯の白くなつたこと！……

王　私たちは哀れな老ぼれたものだ、今に私たちの番が来れば……

王子　お祖父様、お祖父様、なぜさう屈んでゐらつしやるのです？

王　私はいつも屈んでゐる……

王妃　私たちは長い／＼間お前を待つてゐました！……

王子　おゝ、お祖母様、あなた、まあ今夜は顫えてゐらつしやること……

王妃　私はいつも斯んなに顫えてゐるのですよ！……

王子　あゝ、お祖父様！お祖母様！も少しで見忘れるやうです……

王　私もさうだ、私もさうだ、私にはもうはつきり分らない……

王妃　お前はあんなに長く何所にゐました？――おゝ、脊が高くなつたこと！……――私たちよりも高くなつた！……それ、それ私は泣いてゐる、お前が死にでもしたやうに！

王子　なぜそんなに涙を流して私を迎へて下さるのです？

王妃　いゝえ、いゝえ、涙ではないのですよ。之は同じ涙ではありません……何でもない……何でもない……

王子　従妹の七人の人たちは何所にゐます？

王妃　こゝに、こゝに、氣をつけて、氣をつけて……あれ等のことをあんまり高い壁で話さないやうに、みんなまだ眠つてゐる、眠つてゐるものゝ事は話さない方がいゝ……

王子　眠つてゐるのですつてッ……七人ともみんなまだ生きてゐるのですか？

王妃　あい、あい、あい、氣をおつけ、氣をおつけ…　みんなこゝに眠つてゐるから、永久に眠つてゐるから……

王子　永久に眠つてゐるのですつて？どうして？どうして？どうして？――あなたのおつしやるのは？……七人みんな！七人みんな！……

王妃　あゝ！あゝ！あゝ！お前、何を考へたのです！……マーセラス、お前、まあ、何を考へやうとしたのです！氣をおつけ！――あれ等はこゝに居るのですよ。來て窓から見て御覽……早く！早く！早く來て御覽！見る時間はあるから……

（皆窓の方へ行つて室内をのぞく、長い沈默）

王子　これが七人の従妹たちですか……よく見えないが……

王妃　然、然、あすこに、七人ともみんな階段の上にゐる……見えるかえ？見えるかえ？

王子　私にはたゞ幾つかの白い影が見えるばかりです……

王妃　あれが七人の従妹たちなのですよ！……鏡に映つてゐるのが見えるかえ？……

王子　あれが七人の従妹たち？……

王妃　まあ、鏡を御覽、廣間のずつと端の所にかけてある……見えるだらう、見えるだらう……こゝへお出で、こゝへお出で、一層よく見えるかも知れない……

王子　見えます！見えます　見えます！七人みんな見えます！……一人、二人、三人(ちよつと躊躇して)四人、五人、六人、七人……殆んど見わけられません……まるつきり見わけがつかない……あゝ！なんて、眞白でせう、七人とも！……あゝ！なんて、綺麗でせう七人とも！……あゝ！なんて蒼白いのでせう、七人とも！……けれどもなぜ七人ともみんな眠つてゐるのでせう？

王妃　あれ等はいつまでも眠つてゐる……午ごろから眠つてゐる……みんなひどく病氣なのですよ！……だから誰も起さないで置く……あれ等はお前の來ることも知らなかつたのですよ……私たちも起こしてやらうとしなかつたのですよ……待つてゐるがいゝ……ひとりでに眼を醒させなくてはいけない……あれ等は幸福でないのだけれども、それが私たちの過ちといふのでもない……私たちが年を取りすぎたのですよ、年を取りすぎてゐるのですよ、誰れも彼れも、あれ等に取つては年を取りすぎてゐる……人といふものはそれと知らずに年を取りすぎてゐる。……

王子　あゝ！なんて綺麗でせう！なんて綺麗でせう！

王妃　あれ等は、こゝへ來てからといふもの、生きてるやうぢやない――兩親が亡くなつてから、ずつとここにゐたのです……このお城の中は寒すぎる……あれ等は暖い土地から來て……いつも／＼日光を求てゐる、けれどもこゝでは殆どそれが無いのです……今朝少しばかり運河の上に出てゐたが、樹があんまり高すぎて、蔭が多すぎる、蔭しか何もないのですから……霧の日が多すぎて、ついぞ晴れた空といふものが無い……――あゝ、お前、見てゐること！――何か變つたものを見てゐるのか？

王子　あゝ！なんて蒼白いのでせう、七人ともみんな！

王妃　あれ等は、まだ何も食べないでゐる……芝生が眩しくてお庭にゐられなくなつたのです……熱か出てお午ころ手を引

いて這入つて來ました……もう獨りではあるけない程弱くなつてゐる……七人とも熱で震へてゐるが……なぜ苦しいのだが一人も知つてゐるものはない……あれ等はこゝで毎日眠つてゐます……

王子　みんなの樣子が不思議です……もう私は見ますまい……これがあの人たちの寢室ですか？

王妃　いゝえ、いゝえ、これは寢室ではない……よく分かるだらう、寢臺が一つもないのが……あれ等の小さい寢臺七つはずつと上の方にある塔の中に——こゝにゐるのは唯夜までゞすよ……

王子　みんなが分りかけました……

王妃　もつと近くおいで、もつと近くおいで、でも窓にさはつてはいけない……太陽が沈むと却つてよく見えるでせうよ……外はまだ明るすぎるから……今によく見えるでせうよ。窓硝子に顏をつけておいで、でも少しでも音をさせてはいけない……

王子　なんて明るくなるのでせう、廣間の中が……

王妃　夜になる程段々明るくなります……もう落ちかけてゐる……

王　誰れが落ちかけてゐる？

王妃　夜がですよ——(王子へ)何が見えて？

王子　三脚臺の上に大きな水晶の鉢があります……

王妃　あれは何でもない、水ですよ、あれ等が眼をさますと、たいへん咽を渴かしてゐるから……

王子　ではあのラムプはなぜ點してあるのですか？

王妃　あれ等はいつもラムプを點してゐる。自分たちが長く眠ることを知つてゐて、晝中から點して、目のさめた時暗くな

いやうにしてゐる……あれ等には暗闇が怖いのです……

王子　みんな脊が高くなりました！

王妃　まだ大きくなりかけてゐる……高すぎる位大きくなりかけてゐる……あれ等の氣分がすぐれないのは其の爲めかも知れない……お前、みんな見分けがつきますが？

王子　晝の明で見たら、きつと見分けられるでせう……

王妃　あれ等が小さかつた頃、お前はよくあれ等と一緒に遊びましたよ……眼をあいて御覽……

王子　何もはつきりとは見えません、たゞ跣足でゐる小さな足が見えるばかりです……

王　（一方の窓を覗き）今夜は、あまりよく中が見えない……

王子　あんまり私たちの所から離れてゐるのです……

王妃　今夜は鏡に何か映つてゐるが、何だか私に分りません……

王子　窓硝子に露がかゝつてゐます……拭ひ消せるか見て見ませう……

王妃　いゝえ、いゝえ、窓にさはつてはいけない！びつくりして眼を醒すかも知れない――內側にかゝつてゐるのですよ、向ふ側に、部屋の熱なのですよ……

王子　あの中六人はよく私に分かりますが、眞中に一人ゐます……

王　あれ等はみんな同じやうだ、私はたゞ頸飾で見おぼえてゐる……

王子　あの中一人、私にはよくはつきりと見えないのがあります……

王妃　お前、誰れを一番すきだと思ふ？

王子　一人よくはつきりと見えないのを……

王妃　何れを？私、少し聞くのが骨が折れるやうになりました……

王子　一人よくはつきりと見えないのを……

王　お前がよくはつきりと見えないといふのは何れかい？私には何れも殆んど見えない。

王子　眞中のです……

王妃　お前が見たいと思ふのはたゞあれ一人だといふことを、私はよく知つてゐた！

王子　誰れですか！

王妃　誰れだかお前にはよく分つてゐる、私が言ふまでもない……

王子　ウルシユラですか？

王妃　然、さうですよ、さうですよ！ウルシユラだといふことはよく分かるだらう？ウルシユラですよ、七年間お前を待つてゐた！その間夜ごと！そのあひだ夜ごと！そのあひだ毎日！そのあひだ毎日！……お前あれが分かつたかえ？……

王子　私にはあの人がはつきり見えません、上から蔭がさしてゐる……

王　然、あれの上には蔭がさしてゐる。何だか私にも分らない。

王子　柱の蔭かと思ひます……今に、日が沈み切つたらもつとよく見えるでせう……

王　いえ、いえ、あれは日から射す蔭ではありません……

王子　あの蔭が動くか見て見ませう……

王　私には何だか分かつた、あの蔭はラムプから射すのだ。

王妃　ウルシュラは他のものと違つた風に寢てゐる……

王　他の者よりも一層深く眠てゐる、それだけだ……

王子　小さい兒どものやうに眠つてゐます――

王　この窓へおいで、こゝからがよく見えるかも知れない……

王子　（一方の窓へ行きながら）少しもよくは見えません、私にはつきり分らないのは顏ですから――

王妃　この窓へおいで、こゝからがよく見えるかも知れない

王子　（一方の窓へ行きながら）少しもよくは見えません――あの人を見やうとするには非常に骨が折れる……自分で隱れてゐるのかとも見えます……

王妃　あれの顏がまるで見えない……

王子　僕はよく見えるが、顏が見えません――眞直に空の方へ向いてゐると思ひますが……

王妃　けれどもお前はたゞ一人つきり眺めてゐるのだね……

王子　（尚見つめながら）あの人は他のものよりも脊が高いやうです……

王妃　けれども、見えない一人の人ばかりいつも〳〵眺めてゐないで……まだ他に六人ゐるから！

王子　其の人たちも見てゐます――おゝ、他の人たちはなんてはつきりと見えるのでせう！

王妃　みんなお前に分かるかえ？――居るのにゼネヴヰーヴとヘレンとクリスタベル……それから片一方にはマデレーヌ、クーラ、グラリベル、青玉の飾りをしてゐます……幽靈、まあ、みんなに七人とも互ひ互ひに手を把つてゐる――手を繋いだまゝ眠つたのです――あゝ！あゝ！あの可愛らしい姉妹ども！　眠つてゐる中に死ぬことにならはしないかとそれを心

配したとでもいふ風に……おゝ！おゝ！眼をさまして呉れるといゝがね！……

王子　さうです、さうです、起こしませう……私が起こしてやりませうか……

王妃　いえ、いえ、まだ、まだ……もうあれ等の方を見ないでゐやう、さあ、もうあれ等の方を見ないでおいで、ちよつとの間あれ等はいやな夢を見たかも知れない……私はもうあれ等を見たくない、私はもうあれ等を見たくない……窓を壊したくなるかも知れない！もう、見やうとしないで置かう、さうでないとびつくりするかも知れない！……おいで、壇の下までおいで、行つて何か他の事を話しませう、お互ひに話しは澤山ある……おいで、おいで、あれ等が氣がつくとびつくりするだらうから、私たちがみんな窓の前にゐるのを見たら、びつくりするだらうから……(老王に)あなたも、あなたもおいでなさい、其の年取つた白いお髯をそんなに硝子に挿しつけないでいらつしやい……あなたは御自分がどんなに人をびつくりさせるか、御承知ないのですよ！後生ですから二人とも窓の前にゐないで下さい！……さあ、いらつしやい！さあ、いらつしやい、分かりましたか……何んな事が起こるか御承知ないのだから……こゝへいらつしやい、こゝへいらつしやい、こちらへお向きなさい、こちらへお向きなさい！違つた方を御覽なさい、ちつとのあひだ違つた方を御覽なさい！あれ等は病氣たのです、あれ等は病氣なのです！……あちらへ行きませう……あれ等をそつと眠らせて置きませう！……

王子　(振りかへりながら)何うしたのです？——何うなつたのです？——あゝ！外の暗いこと！……あなたどこにいらつしやるのです？もう、あなたが分からなくなりました……

王　ちよつとお待ち、まだお前の眼の中に部屋の明りが殘つてゐるからだ……私ももう少しも見えない……おいで、私たちはこゝにゐる！……

(二人窓から離れる)

王子　眞黒ですことね、田舍の方角は！……どこに私たちはゐるのでせう？

王　太陽が沈んだから……

王妃　マーセラス、なぜお前は、もつと早く歸つて來なかつたか　マーセラス？

王子　使の者が申しましたらう、私の唯一つの想ひは歸るといふ事でした……

王妃　あれ等はあんなに、長い年月お前を待つてゐたのですよ　いつもあの大理石の大廣間にゐて、夜となく晝となく運河の方を眺めてゐたのですよ　照る日にはみんなで向ふ岸へ行くのがきまりで……あそこには一つの丘があつて、そこから遠方が見える、海は見えなかつたが、岩が見えました……

王子　あの木の下に薄光りのするのは何です——

王　お前が來た運河さ、あの水の上にはいつも薄光りがある……

王子　どうして斯う今夜は眞黒なのでせう！——今どこにゐるかも私には分りません、初めての旅人のやうです……

王　空が急に一杯曇つて來た……

王子　柳の木に風が吹いてゐます

王　晝でも夜でもあの柳の木には風がある、こゝは海からあまり遠くない——お聞き、もう雨が降つてゐる……

王子　涙が石垣の縁りに落ちてゐるとも思へませう……

王　雨が水の上に降つてゐるのだ。大へん和かい雨だ……

王妃　涙が空中にたまつてゐるとも思へる……

王子　まるで水が岸と岸との間に眠つてゐるやうです……

王妃　あの水はいつも眠つてゐる、そしてまた隨分年を經てゐる……

王子　白鳥が橋の下に這入りました……

王　御覽、百姓が家畜の群をつれて歸つてゐる……

王子　あれ等は非常に年を取つてゐるやうですね、非常に貧しいやうですね……

王　非常に貧しい、そして私は非常に貧しい人民の王なのだ……段々寒くなつて來る……

王子　水の向側にあるのは何です？

王　あそこにか？――あそこには花が咲いてゐたが、寒さに殺されて了つた……

（丁度その時、遠い田舍の方に單調で非常に遙かな唄の聲が聞こえる、一定の間を置いて合唱で繰り返へされる唄の捨言葉のほかは、凡てはつきりと聞取れない）

遠い聲　The Atlantic! the Atlantic!

王　あれは何だらう？

王子　水夫どもです――兵船を返さうとしてゐるのでせう、出帆の仕度をしてゐるのです……

遠い聲　We shall never come back again!
We shall never come back again!

王妃　もうすつかり帆を上げた……

王子　今夜出るのです……

遠い聲　The Atlantic the Atlantic!

王　あれ等は本當にもう二度と歸つて來ないのか？

王子　私は知りませんが、恐らく返つて來ても同じ船ではありますまい……

遠い聲　We shall never come back again!

We suall never come back again!

王妃　お前、幸福なやうに見えないね……

王子　私が――なぜ幸福でない筈がありませう？――私はあれに逢ふために來ました、そして逢つたのですもの――若しさうしたければ、もつと近く寄つてでも逢へる……若し望みならあれの傍へでもすわれる――戸を開けてあれの手を把ることも出來やうではありませんか、さうしたければあれを抱いてやることも出來る、二度とあれの眼をさましてさへやればいゝのです、なんで私が幸福だと思はない譯がありませう？

王妃　それに拘らずお前は幸福なやうに見えない！――私はもう七十にならうとしてゐる……それでいつもいつもお前を待つてゐました！……その人がお前でなくなつた！お前でなくなつた！……もうお前でなくなつた！……

（頭をそむけて啜り泣く）

王　何事だ？これ、何事だ？なぜお前、さう突然泣きはじめたか？

王妃　何でもありません、何でもありません――泣くのは私ではありません……氣にかけて下さいますな――人はよく何でもない事に泣くものですよ――私は今ではもう大さう年を取りました――ですから、もうお了ひになつて――

王子　私はすぐ、もつと幸福な氣持になりますから…

王妃　さあ、さあ、あれ等も眼をあいてゐるでせうからお前の手をお出し、私を皆の方へつれて行つてお呉れ、皆の方

へ行つて見て見ませう……

遠い聲　The Atlantic the Atlantic!

（皆々窓の方へ見に戻る）

王子　あれはまだ見えない……光りすぎてゐる……

王妃　廣間の中が何か違つてゐる……

王　私には中が少しも見えない、

王子　先よりも光つてゐます……

王妃　前と同じぢやない、何か知ら廣間の中が違つてゐる……

王　私の眼がまだ明りに慣れてゐない……

王妃　あれ等のうち誰れか元の場所にゐないものがある……

王子　はあ、はあ、少し動いたやうです……

王妃　あゝ！あゝ！クリスタベルとクラリベル……御覧、御覧！二人でウルシユラの手を把つてゐたが……今見ると其の手を把つてゐない……他の側へ向き直つてゐる……

王子　ちやうど眼をさましかけてゐたのです……

王妃　私たちの來るのが遲かつた！私たちの來るのが遲かつた！……

王　私には窓傍の百合のほか、何も分からない——花は閉ぢてゐる……

王子　あれ等も夕暮れになつたことを知つてゐます……

王　併しまだ明りがある……

王子　一方の手をあれが變な風にしてゐるやうです……

王妃　誰れが？聞かしてお呉れ……

王子　ウルシュラが……

王妃　その手がどうしたのです？……私丁度それを見なかつたが……

王子　他のものがそれを隱してゐましたから……

王　どういふ話だか、私には分からない、私は鏡の方を見ることが出來ない……

王妃　あれは怪我をするだらう！——あれは怪我をするだらう……あんな風に眠れるものぢやない、自然でないから……あの手を少しばかり下へさげさせたい——神さま、あのかはいさうな手を少し下げさせて下さい！……あのかはいさうな手が怪我をするでせう、あゝして置いたら……

王子　上に支へて置くものが何もないやうです……

王妃　この上あれをあんな風に眠らせては置けない……あれは善い前兆ぢやない！……自分で手を動かすことが出來ないだらう……

王　これほど邪魔になるものはないから……

王子　他のものはずつと樂に眠つてゐます。

王妃　あれ等の眼の閉ぢてゐること！あれ等の眼の閉ぢてゐること！——あゝ！あゝ！あの姉妹たち、あの姉妹たち……私たちは何うすればいゝのでせう？……私たちはこゝで何うすればいゝのでせう？

王　さうだね、さうだね、さう窓に近づいて物を言はないやうにおし……

王妃　あなたが思つてらつしやる程近づいてはゐません……

王　お前は口を窓硝子につけてゐます……

王子　何かまだ他に見えますが、どうもはつきりしません……

王妃　私にも、私にも、何か見えはじめたものがある……まつすぐに戸の所へ届いてゐるものが

王子　床の上に何かあります……陰ではない……何だか分らないものです……あれの髪の毛かも知れません……

王妃　けれども、何うしてあれが髪を結ばなかつたのだらう？……他のものは皆髪を結んでゐるのに……御覧

王子　たしかに髪の毛です！浪をうつてゐます……おゝ！あれの髪の綺麗なこと！……病人の髪の毛とは見えません……

王妃　寢るときには髪の毛をあんな風にするものぢやない……あれでは出て行くつもりだつたとも見える……

王子　あれが何もあなたに言ひませんでしたか？……

王妃　お午ごろ、戸をしめる時にさう言つて、「何よりも、私たちを起こさないやうにして下さい」と言ひましたよ――で私は、あれのどんなにか悲しさうな樣子を見ないやうに抱いてやつた……

王子　みんな寒いでせうね、敷石の上の小さな足が殆んど跣足です！

王妃　さう、さう、寒いだらう！――おゝ！さう一生懸命に見ないでおいで（王の方へ）あなたもね！あなたもね！――一秒も目を離さないで見てゐてはいけません！絶えず見てゐてはいけません！……私たちは全く見ないでゐなくてはなりません！……あれ等は幸福でないのですから！……

王　でも何うしたといふのだ？――お前だけ見てもいいといふのか？――今夜はお前どうしたのだ？――正氣を失つて了

つてゐるな……お前の言ふことは分らない……他のものはみんな他を向いてゐなくちやならない、他のものはみんな眼を塞いでゐなくちやならない……併しこれはお前と同じやつに私たちにも關するものだと思ふが……

王妃　あなたにも關することは知つてゐますから……どうぞ／＼二度とそんな風に言はないで下さい……おゝ！おゝ！……私の方を見ないで！今は私の方を見ないで下さい！……おゝ！おゝ！みんな、なんて靜なことだらう！……

王　あれ等は今夜はもう、目をさまさないでせう、わたしたちも行つて寢た方がいゝ……

王妃　まあお待ち遊ばせ。まあお待ち遊ばせ！……どうなるか今に分かるでせうから……

王　私たちは永久に窓硝子をすかして見て居る事は出來ない、何かしなくてはならない……

王子　こゝからあれ等を起す事が出來るでせう……

王　私は戸のところへ行つてそつと叩かうと思ふ。

王妃　いゝえ！いゝえ！決して！決して！……いけません！あなたはいけません！あなたはいけません！あなたはあんまりひどくおたゝきなさるかも知れない……氣をおつけなさい！氣をおつけなさい！……あれ等は何にでもびつくりします……叩いてよければ私が自身で窓のところを叩きませう……誰がたゝいて居るのか分らせなくてはいけません……お待ちなさいお待ちなさい

（窓のところを極めてやはらかに叩く）

王子　目をさまさない……

王　私にはまるで何も見えない……

王妃　私がもつとひどく叩いてやりませう……（今一度窓をたゝく）まだ聞えない……（更に窓をたゝく）……暗闇の中は一

ばい綿毛でつまつてゞもゐるのか……お前たしかに眠つてゐるのだと思つてッ——みんなが氣絶してゐるのではないか知ら……息をする樣子が見えない……(また一方の窓を叩く)もう少しひどく叩かう！……片つ方の窓硝子を叩かう！おゝおゝ！此の小さい窓硝子の厚いこと！(妃と王子とで心配さうに兩方の手で叩く)何んて靜かなのだらう！病氣から來た重くるしい眠り……何時までも除かない熱病の眠り……もつと近くよつて見たい！もつと近くよつて見たい！あれ等には私たちの物音が聞えないのです……自然な眠り方ぢやない……無事な眠り方ぢやない……私、之れよりひどくは叩く氣がない……

王子 (硝子の所に耳をつけて)少しの物音も聞えない……

(長き沈默)

王妃 (窓硝子に顔をつけてゐて突然泣き出し涙を流す)おゝ！何うしてこう眠つてゐるのだらう！……あゝ！あゝ！神樣、あれ等をお救ひ下さい！あれ等をお救ひ下さい、何うして斯う眠つてゐるだらう、かはいさうな人たち！——あれ等のあはれな胸の動悸も、もう聞こえない——恐しいほどよく眠つてゐる！——おゝ！おゝ！何といふ恐しさだらう、眠りといふものゝ恐しさ！……あれ等の寢る部屋に這入ると、私はいつも恐しくなる！……あれ等のあはれな靈魂を見ることが出來ず！……あれ等のあはれな靈魂は何處にゐるのかと思ふ！……私は恐しくなる！私は恐しくなる！——そして今やつとその譯が分つた！……あのあはれな姉妹ども、何んてよく眠つてゐるのだらう！おゝ！何んてよく眠つてゐるのだらう！何んてよく眠つてゐるのだらう！……永久に眠つてゐるのかも知れない！……あゝ、あゝ、かはいさうに……あれ等は幸福でない樣だ！あれ等は幸福でない樣だ！……そしてみんなあれ等が！……七人のかはいさうな者等が夜一夜……七人のかはいさうな。たよりないもの！……七人のかはいさうな、たよりないもの！……七人のかはいさうな、淋いもの！みん

な口を大きく開いてゐる……七人のあはれな口が開いてゐる……おゝ！咽が渇いてゐるに違ひない！非常に咽が渇いてゐるに違ひない！……そしてみんな閉ぢたあの眼！……あゝ七人ともどんなにか淋しいだらう！七人とも！七人とも！……よく眠つてゐること！よく眠つてゐること！……よく眠つてゐるあはれな王女たち！……どうも眠つてゐるのではないに違ひない！……何んといふ眠り方だらう！……何んといふ深い眠りだらうぞ……かはいさうなあれ等を起こしてやりませう！……あはれな王女たちを起こしてやりませう！あはれな姉妹たちを起こしてやりませう！七人とも！七人とも！……此上あんなになつてゐるのを見ては居られない！あゝ　あゝ！かはいさうに！かはいさうに！けれども私には起こされない！……おゝ、明りが小さいこと！……あんなに小さく！……あんなに小さく！……けれどもやつぱり私には起こされない！……

（妃　窓によりかゝつて激しく啜り泣く）

王　どうしたのだ。——これ、どうしたのだ。——おいで、おいで、もう見ないでおいで、もう見ないがいゝ……おいでおいで、おいで。

（妃をあちらへ連れて行かうとする）

王子　お祖母さま！お祖母さま！……何を御覽なすつたの。何を御覽なすつたの。私には何も見えません……何もありません、何もありません……

王　（王子に）何でもない、何でもない、氣にかけるには及ばない、年を取つたのだ、夜だからだ……心が亂れてゐるのだ——婦人は泣くことを求めるものだ、あれはよく夜になると泣く。（王妃に）おいで、おいで、こゝへおいで！倒れさうだ！——氣をおつけ！……私に倚りかゝつておいで！……泣くのをおやめ、泣くのをおやめ、さあ……（やさしく妃を抱く）何

でもない、みんな眠つてゐるのだ！……私たちも眠る、我々はすべてあんな風に眠る……お前は眠つてゐる人を見たことがないか？

王妃　ございません！今夜のやうなのは見たことがございません！――戸を明けて下さい！戸を明けて下さい！……あなたはあれ等を十分に愛していらつしやらない……愛することが出來ないのです！――戸を明けて下さい！戸を明けて下さい。

王　よし、よし、明けやう……しつかりおし、しつかりおし――その事を考へるのはおやめ、戸を明けやう、戸を明けやう。私もそれに越した望みはないのだから。ちやうど今私がそれを明けやうと言つたら、いけないと言つたのはお前でないか……これ、これ、泣くのをおやめ！――量見がなくてはいけない……私も年は取つたが、量見はある。これ、これ、泣くのをおやめ！……

王前　さあ、さあ、やめました、私もう泣きません！……あれ等が目をさまして、泣聲を聞いてはいけません！……

王　おいで、おいで、極靜に明けやう、みんな一緒に這入つて行かう……（戸を明けやうとする差錠の軋る音が聞こえ室内の差錠の上下するのが見える）あゝ！あゝ！錠前がどうしたのだらう？――戸が明かない！……少し押して御覽！……何うしたのか分からない！……そんなに此の部屋へ這入るのがむづかしいとは知らなかつた！……お前やつて御覽！（王妃が代つて押して見ても明かない）私はまだそこへ這入つたことが無い！……明かない！……横木を差しこんだに違ひない！……さうだ、さうだ、戸がしまつてゐる、明かないだらう……

王妃　あれ等はいつも戸をしめてゐます！……おゝ！おゝ！そのまゝにして置いてはいけません！……長く眠つてゐます！

王子　窓を明けることが出來るかも知れません！……

王　窓は開かない。

王子　部屋の中が少し明くなくなつたやうに見えます。……

王　部屋が暗くなくなつたのではない、空が晴れて來たのだ――星が見えるかい？

王子　どうしたらいゝのでせう？

王　私にも分からない！……――今一つ別の路があるか！……

王子　別の路がありますか？

王妃　いえ！いえ！あなたのおつしやるのは分かつてゐます！あの路はいけません！あの路はいけません！私は降りて行きますまい！……

王　私たちは降りて行くまい、こゝに殘つてゐやう、マーセラス一人で行くがよい……

王妃　あゝ！いけません、いけません！……いけません……待つてゐませう……

王　どうしたのだ？どうしやうといふのだ？――他には窖へ這入る路はない！……よく分かつてゐる事だ！――

王子　別の路があるのですか？

王　さうだ。今一つ小さな路がある！……こゝからは見えないが！……併しすぐ分かる。降りて行かなくてはならない！

……

王子　何所へ降りて行くのですか？

王　こちらへおいで。（少し傍へ引よせる）――これは戸口ではない――唯戸口といふことは出來ない！――鼠のやうなものだ！……敷石を一枚持ち上げるのだ。窖の這入口は塔の脚にある……階子を通つて行かなくてはならない……

つたらう！……それから上つて行く！――ラムプを持つて行く必要がある！……でないと迷つて了ふ……ぶつゝかる恐れがある……大理石に……分かつたか？……氣をつけるがいい、鎖がかけてある……小さい路に……併しお前はその路を知つてゐる筈だ……お前は何度も降りて行つたことがある、むかし……

王子　むかし私が降りて行つたことがあるのですか、何度も？

王　おゝ、さうとも、さうとも、お前のお母さんがゐたころ……

王子　お母さんがゐらつしやつた頃？……あゝ！あそこですか、私が

王　（うなづきながら）それだ！――それからお前のお父さんもゐた……

王子　さうです、さうです、私、思ひ出しました！……そして他のものも……

王　すつかり分かつたな！……石は密閉してないからたゞちよつと押せばよい……けれども注意しないと平でない石が幾つもあるから……道の方へ少し頭の傾いた半身像があるから氣をおつけ……大理石で出來てゐる……それから十字架もある、兩腕が少し長すぎるから……氣をおつけ……急いではいけない、時間は十分にあるのだから……

王子　では私が……行かなくてならないのは其の路ですか？

王　其の路だ！……ラムプがいるだらう（壇の端に行つて呼ぶ）ラムプを！ラムプを！小さいラムプを！……（王子に）私等はこの窓の所で待つてゐるやう……私たちはもう年を取すぎて、降りて行けない……も一度登つて來ることが出來ない……

（火をともしたラムプが運ばれる）あゝ！あゝ！ラムプが來た、この小さいラムプを持つておいで……

王子　はあ、はあ、小さいラムプを……（其の途端に突然外で水夫等の高い歡呼の聲が聞こえる。兵船の帆柱、帆桁及び帆がすべて夜の暗い中に柳の樹の間から運河の地平線上へ照し出されて見える）

王　おゝ！おゝ！あれは何だらう？

王子　水夫どもです……甲板の上で踊つてゐるのです、醉つぱらつてゐるのです……

王　兵船に明りをつけたやうだ……

王子　出帆のお祝ひです……ちやうど出る所です……

王　では　お前降りて行くか？……斯う行くのだ。

王妃　いけない、いけない、そこから行かないことにおし！……その路を行かないことにおし！……あれ等を起こさないでお置き！あれ等を起こさないでお置き！あれ等に安息の必要なことは分かつてゐるだらうから！私、氣にかゝる！……

王子　お望みなら他のものは起こさないで置きませう……私はたつた一人起こしませう……

王妃　おゝ！おゝ！おゝ！

王　這入つて行くとき、ちつとでも音を立てないやうに……

王子　あれ等がもう私を見おぼへてゐまいかと思ふと心配です……

王　そんな心配はない……あゝ！あゝ！其の小さなラムプに氣をおつけ！……御覽、風が……風がそれを消さうとしてゐる！

王子　みんな一時に目を醒ましはしないかと思ふと心配です……

王　そんな事は構はない……手荒く起こさないやうにさへすればよい。

王子　私たつた一人であれ等の側にゐなくてはならない……私はさながら——あれ等が恐がるかも知れません……

王　お前その石を元の所へ置いて了ふまで、あれ等を起こしてはいけない！——あれ等の氣のつかないやうにするがいゝ

……あれ等は自分たちの寢てゐる部屋の下に何があるか知らないのだから……

王子　私を初めて會つたものと思ふでせうね……

王　私たちは窓の所にゐやう――降りておいで、降りておいで――ランプに氣をつけて――暗で迷はないやうにおし、非常に奧深いから……敷石を元の所へ戾して置くことを忘れないで……出來るだけ急いで上つておいで…… 私たちは窓の所で待つてゐやう、降りておいで降りておいで――氣をつけて！氣をつけて！……

（王子壇を去る、老王と老妃は顏を硝子につけて窓から覗いてゐる――長い沈默）

遠い聲　The Atlantic! the Atlantic!

王　（頭を轉じて運河の方を見る）あゝ！あゝ！出て行つた……今夜はいゝ風があるだらう……

遠い聲　We shall never come back again!
We shall never come back again!

王　（運河の方を見ながら）夜半にならない前に海へ出るだらう……

遠い聲　（段々遠く）The Atlantic! the Atlantic!

王　（廣間を覗いて）あれが暗やみに迷はなければいゝが……

遠い聲　（殆ど聞こえない程に）
We shall never come back again!
We shall never come back again!

（沈默、兵船が柳の樹の間に見えなくなる）

王　（運河の方を見て）もう見えなくなつた――（廣間を覗いて）――あれはまだ這入つて來ないか？――（運河の方を見て）もうあの兵船も居なくなつた！――（王妃に）御前は見てゐなかつたか？――返事をしないか？――どこにゐる？運河の方を御覧――あれ等も行つて了つた、夜半までには海へ出てゐるだらう――

王妃　（茫然として）夜半までには海へ出てゐませう――

王　（廣間を覗き）あれが持ち上げる筈の敷石がお前に見えるか？――上に文句が一杯彫つてある、月桂樹の下に隠れてゐるのだらう――マーセラスは大きくなつたね、さうではないか？――あれが艀から降りない内にみんなを起して置いたがよかつたかも知ない――私はお前にさう言つたらう――さうしたらこんな騒ぎはしなくて濟んだのだ――今もあれが何うして幸福な様子に見えないのか、私には分からない――あれ等も横木などを差さないで置けばよかつたに、あんなものは、取除いて貰ひたい――あれのランプが消えなければいゝが――お前はどこにゐる？何か見えるか？――なぜ返事をしない？――あれが暗やみに迷はなければいゝが――お前、私の言ふことを聞いてゐるか？

王妃　あれが暗やみに迷はなければいゝのですが……

王　さうだ――段々寒くなるとは思はないか？――あれ等は大理石の上で寒いだらう――あれは可なり長くかゝつてゐるやうだが――小さいランプが消えさへしなければいゝが――お前なぜ返事をしないのだ？何かお前は夢を見てゐるのか？

王妃　たゞあれの小さいランプが……あの石が？あの石が！あの石が！

王　あれはゐるか？――中へ這入つたか？――私にはあの方が見えない……

王妃　持ち上がつてゐます！持ち上がつてゐます！　明りが見えます……御覧なさい！……お聞きなさい！……お聞きなさい！――[illegible]の[illegible]が鳴つてゐます！――

王　極靜かに這入れと言つたが……

王妃　さうです！大へん靜かに這入つて行きます……御覽なさい、御覽なさいラムプを持つた手から先へ入れてゐます……

王　さう、さう、私にも小さいラムプが見える……なぜ一いきに這入らないのだらう？……

王妃　這入れないのですよ……石をそつと〳〵持ち上げてゐます……さうです、さうです、極もうそうつと……おゝ！なんて軋むのでせう！なんて軋むのでせう！……なんて軋むのでせう！……あれ等がびつくりして目を醒ますでせう！

王　何をしてゐるか、私にはよく見えないが……石の非常に重いことを、私は知つてゐる……

王妃　這入つてゐます……攀ぢ登つてゐます……段々そうつと登つてゐます、さあ、石が軋んでゐる……おゝ！おゝ！軋んでゐる！軋んでゐる！兒供のやうに泣いてゐる！……あれの體が半分部屋の中へ這入りました……もう三段！もう三段！（手を拍ちながら）中へ這入りました！中へ這入りました……御覽なさい！御覽なさい！……あれ等が目を醒ましかけました……みんながびつくりして目を醒ましかけました！……

王　あれは敷石をまた下したか？

（王子は今持ち上げた敷石を下に置いて、ラムプを手に持つたまゝ大理石の階段の下に立ち止まる。蝶番の軋る最後の音で六人の王女等目を開く、ちよつとの間ぼんやりして、半睡半醒のさまでゐる。そして王子が近よつて來るのを見て一齊に立ち上り、目の醒めた時の懶い樣子で腕を上げてゐる。たゞ一人、ウルシユラのみは、大理石の階段に仰向に横たはつたまゝ、姉妹等の間に挿まつて少しも動かない其のあひだ他のもの等は王子と暫く顔を見合せて驚いて、度を失つた、啞然としてゐる。）

王妃　（宮の所で）ウルシユラ！ウルシユラ！ウルシユラ！……あれは目をさまさない！……

王　我慢しておいで！――我慢しておいで！――あれは一層ぐつたりして眠つてゐるのだ……

王妃　（窓硝子に顔をつけて叫びながら）ウルシュラ！ウルシュラ！――あれを起こしてお呉れ！（窓を叩きながら）マーセラス！マーセラス！――あれを起こしてお呉れ！あれも起こしてお呉れ！ウルシュラ！――マーセラス！マーセラス！……あれに聞こえない！……ウシルユラ！ウルシュラ！お起き！あれが來たよ！あれが來たよ！　もう時刻ですよ！……もう時刻ですよ！……（別の窓を叩いて）マーセラス！マーセラス！前を御覧！そら！あれがまだ眠つてゐるよ！……（別の窓を叩いて）――おゝ！おゝ！――クリスタベル！クラリベル！クラリベル！……クララや！クララやお前、クララや！あれには聞こえない！……（兩方の窓を續けざまに激しく叩きながら）ウルシュラや！ウルシュラ！あれが歸つて來たよ！あれがこゝにゐるよ！あれがこゝにゐるよ！　時刻ですよ！時刻ですよ！……

王　（同じく兩方の窓を叩いて）さうだ、さうだ、あれを起こしてやれ！……あれを起こしてやらないか！……私たちは待つてゐる……

（王子は外の物音には少しも構はず、默つたまゝ起き上らないでゐる王女の傍に行き、暫くじつと見て、躊躇して、ひざまづき、絹の褥の上に素肌のまゝたれかゝつてゐる一方の胸にさはる。さはると共に彼れはだしぬけに飛び上るやうにして立ち、暫くのあひだ戰慄して周圍の六人の王女等を見てゐる。王女等に默つて死人のやうに蒼白くなつて立つてゐる。彼等は、初めは譯が分からないで、逃け出さうとする心持に妨げられてゐたが、終に寢てゐる王女の上に一齊に身を投げかけ、最も深い沈默の中に其の腕を持ち上げ、七階段の最上の所に連れ、その時、王女の髪はもう髄はつて頭は亂髪になり固くなつてゐた）

（王、王妃をひきずり上つて來た城内の召使等、廣間の凡ての窓を叩いて激烈に叫び初める）

（此等の二つの事柄は同時に行はれる）

王妃　あれは眠つてゐない！――あれは眠つてゐるのぢやない！あれは眠つてゐるのぢやない！今度はあれは眠つてゐるのぢやない！（歸路を失つた動物のやうに窓から窓へ走り廻つて、それを叩き鐵の柵棒を搖り、足踏みをする、そして窓硝子によりかゝつた白い亂髪の震へるのが見える）あれはもう眠つてゐるのぢやない、たしかにさうです！（王に）おゝ！おゝ！あなたは石のやうな人です……お呼びなさい！お呼びなさい！お呼びなさい！どうか後生ですから呼んで下さいよ！私は血を吐くほど呼んでゐても、分からないと見える！走つて下さい！走つて下さい！走つて下さい！呼んで下さい！呼んで下さい！何も見えないのだ！何も！何も！少しも！少しも！……少しも！……

王　何うした？何うした？何がいけないのか？何がいけないのか？何所で呼べばいゝのだ？

王妃　あそこで！あそこで！何所でも！何所でも！壇の上で！水の上で！野原で！……呼んで下さい！呼んで下さい……

王　（壇の端で）ハロー！……ハロー！……おいで！おいで！……こゝへ！こゝへ！……ウルシユラ！ウルシユラ！……何かあるやうだ……

王妃　（窓の所で）ウルシユラ！ウルシユラ！水を少しかけておやり……さう、さう、さうしておやり……多分さうではないだらう！――おゝ！おゝ！おゝ！――かはいさうなその頭！……（召使、兵士、農夫、婦人等松明や提灯を持つて壇の上に馳け上がる）ウルシユラ！ウルシユラ！多分さうではないのだらう……多分何でもないのだらう！……あゝ！あゝ！クラリベル！クラリベル！氣をおつけ！……あれが落ちかゝつてる！……髪の毛を踏まないやうにおし！……明けてお呉れ！明けてお呉れ！――目を醒まさせやう！目を醒まさせやう！水！水！水！――お明け！お明け！戸を！戸を！戸を！――私が這入れない！何もかもみんな塞がつてゐる！何もかもみんな塞がつてゐる！……お前等は死人のやうに耳が聞こえな

い、助けてお呉れ！――（周圍の人々に）お前等は恐ろしい人たちだ！私の手を！私の手を！……私の手はたしかに見えるだらう？……手傳つてお呉れ！手傳つてお呉れ！おゝ！おゝ！あれが遅かつた！……遅かつた！……遅かつた！……塞がつて了つた！塞がつて了つた！塞がつて了つた！

皆々　（戸をうごかし凡ての窓を叩いて）明けて下さい！明けて下さい！明けて下さ、！明けて下さい！……

（黒い幕が無造作に降りる）

（William Metcalfe の英譯より）

モンナ・ヴンナ

（マーテルリンク原作）

イプセンが死んで以來の歐洲劇壇の最高地位は誰れに與へれるか。ハウプトマン氏か、ショー氏か、メーテルリンク氏か。今日の所では少〻とも其の作風に新機軸のある點で、メーテルリンク氏が第一の候補者に推される。けれども玆で其の等級を極めようとするのではない。

『モンナ・ヷンナ』(Monna Vanna)はメーテルリンク氏が四十歳のとき、千九百二年の作で、其の作風及びそれに見はれた思想に一變化を來たす回轉期の產物であると稱せられる。時も處も分らない、夢のやうな、神秘な世界から、明確に事物の影の見える世界へ出て來た作である。此の作に至つて、始めて十五世紀の末のピザといふ、明かな時處を指定すると共に、形式もシェークスピア以來の史劇の組織に近づいた。暗に死の沈默が運命の最高象徴であるといふ思想から、生の喜び、靈智の光り、愛の潤ほひ、新生活の美しい夢といふやうな明るい思想に移りかけたのである。斯うして夢幻と現實との間を出入するところに此の作の味がある。近年に出た歐洲の新史劇中で、此の作の如きは最も模範的なものゝ一つである。個人の運命の回轉する高潮時を、華やかな史劇の形式に包んで現代的な人生問題と傳來の劇的興味とを調和せんとしたものと言つてよい。此の劇の出た年に、パリーで初めてヷンナに扮して有名な女優は、作者の夫人ルブランである。

作者メーテルリンク(Maurice Maeterlinck)氏は千八百六十二年ベルギーのガンに生れた。

此の譯は Alfred Sutro 氏の譯に Friedrich von Oppeln-Bronikowski 氏の獨譯と原文を參酌したものである。「モンナ・ヷンナ」の邦譯は、數年前山岸荷葉氏が川上一座のために飜案して、明治座で演ぜしめたものがある。今回のは勿論全部原作によつたもので、「藝術座」の第一回上演として大正二年九月十九日から十日間有樂座で演ぜられることゝなつた。其の主なる役割は下の通りである。

モンナ・ヷンナ　　松井須磨子氏

プリンチヴルレ　澤田正二郎氏
ギ　ド　ー　嫌野誠一氏
マ　ル　コ　ー　笹本甲午氏
ツリヴルチオ　倉橋仙太郎氏
ボ　ル　ソ　ー　宮島文雄氏
ト　レ　ル　ロ　ー　波多譲氏
ヴ　ェ　デ　ィ　オ　中井哲氏

人物

ギドー・コロンナ　（ピザ守備軍の司令官）
マルコー・コロンナ　（ギドーの父）
プリンチヴルレ　（フレンチェの雇聘大將）
ツリヴルチオ　（フィレンチェ共和國の辨務官）
ボルソー・トレルロー　（ドギーの副官）
ヴェディオ　（プリンチヴルレの秘書官）
ジオ・ヴンナ　（モンナ・ヴンナ）（ギドーの妻）

時代

十五世紀の末

場所

第一幕と第三幕とはピザ、第二幕は其の市外

（譯者いふ、人名地名等は必ずしも一貫した原音によらず、日本の舞臺に適するやう便宜の、發音法を混じて譯した）

第一幕

ギドーコロンナの殿中の一室

ギドー及び其の副官ボルソーとトレルローとが開いた窓の側に立つてゐる。窓からはピザの周圍の田舍の景色が見える。

ギドー　我々は目下非常な危急の場合に瀕して居る。政府もとう〳〵、已むを得ないで、今まで隱して居た敗北を私に打ち明けたがヴェニスから派遣した援軍は二軍ともフィレンチェ人の爲に圍まれてゐる、一軍はビビエナで圍まれ、一軍はエルチーで圍まれた。キウシー、モンタローネ、それからヴェルニア、アレッゾーの山道、カゼンチーネの谷間――殘らず敵軍に占領せられて了つた。我軍は孤立してゐて、手の出しやうが無い。フィレンチェ人の思ひのまゝになるのだ。フィレンチェ人といふ奴は、自分等が大丈夫となると、少しも容赦をしない。我が軍隊も人民も、まだこんな敗北は知らないでゐるが、併し怪しい噂は立つてゐる、そして日を追うてそれが明かになつて行く。本當の事が知れたら、ピザの人民は何をし出すか知れない。彼等の怒りは我々や政府の上に向いて來る、恐怖と盲目的な絶望に驅られて、眞先がけに我々を犧牲にするに違ひない。三月以上も續いた長い籠城を、彼等は我慢して來たのだ。あれ程勇敢に困難を忍んで來たのだから、今となつて彼等が饑と不幸のために狂氣の振舞をしたからと言つて、少しも驚くに足らない。一つの望みが彼等に殘つてゐた、それが無くなつたのだ、それと共に我々の權威も地を掃つて了つた。我々はどうする事も出來ない。敵はピザの城壁を破壞して了ふ。ピザは亡ひて了ふ…………

ボルソー　我軍はもう最後の矢まで射て了ひました。彈藥も盡きましてございます。穴庫の隅々まで探したつて、一オンスの火藥を見つかりつこはございません……

トレルロー　大砲の丸も、もう二日以前にサント・アントーニオの砲戰で打つて了ひました。スツラヂオーテのものどもまで今では劍一つになつて砦の守備に立つことを承知しません……

ボルソー　プリンチヷルレの爲に、やられました城壁の裂目が、此の窓から見えて居ります……約五十歩の廣さで、羊の群が通れるほどでございます……あそこは、もう到底支へられません。ロマニヤ人、スクラヴォニヤ人、アルバニヤ人などは今夜中に條約が調はなければ一團になつて逃走する氣色が見えて居ります……

ギドー　政府は此十日間に三度まで學寮の長老たちを派遣して、條約を締結させようとしたが、今だに一人も歸つて來ない……

トレルロー　プリンチヷルレは副官のアントーニオ・レノーがこちらで虐殺せられたのを、其まゝに濟さないのです、逆上した百姓どもが、通りで首を切つて了つたのですから、フィレンチェ人は此の虐殺を口實にして、我々を法に背いたものだと宣言するでせう、我々を野蠻人として遇するでせう……

ギドー　私は現在の父をプリンチヷルレに送つて、我々　深厚な悲みを表させた、そして假に騙られて亂心した暴民を、到底我々の力で取り鎭めることの出來なかつた譯を說明させた。父は神聖な人質であつたのだ、それがまだ歸つて來ない……

ボルソー　もう一週間以上も此の町は明放しでございます、あらゆる方面が敵前に露されて居ります。城壁に廢墟の塊で、大砲は沈默して了ひました。プリンチヷルレはなぜ攻擊の命令を下さないのでございませう？　勇氣を失つたのでござい

ませうか、それとも伏兵でも恐れて居るのでございませうか。或はフィレンツェから何か、秘密の命令が來たのかも知れません……

ギドー　フィレンツェの命令はいつまで立つても秘密だが、併し其の計畫は明白だ。ピザがヴェニスに對して堅く信義を守つてゐるのは、フィレンツェの小さい町々には危險な手本になる。だからピザ共和國は亡ぼさなくてはならない……そこでフィレンチェが非常な策略と權謀とを用ひはじめたのだ。謀をめぐらして段々この戰爭を激しくし、黠詐と殘忍の奇怪な所行でそれを毒しようとしたのだ、それを賴みにして無慚な復讐を遂げようとしたのだ、ピザの百姓どもがレノーを虐殺したのも、フィレンチェの廻しものに教唆せられたかと思はれる理由がある。プリンチヴァルレに此の城攻めをまかせたのも、やつぱりフィレンチェの策略の一部だつた。プリンチヴァルレといへば、フィレンチェで雇つた軍人の中でも一番野蠻な男だ――フラチェンザの侵略で、凡そ武器を取つたものは殘らず斬つて了つて――後になつて、あれは自分の命令に背いてやつたのだと辯解をして――それから五千人の普通の女子を奴隷に賣つたといふ、惡い評判の男だ……

ボルソー　さういふ話でございました、併しそれは正確ではございません。プリンチヴァルレではなくて、フィレンチェの辯務官等が其の虐殺と婦人賣買の責任者ださうでございます、私はまだプリンチヴァルレを見たことはございませんが、私の兄弟のうちによく彼を知つて居るものがございます。彼れの血統は野蠻人でございますが、父はバスケ人かブレトン人で、ヴェニスで金細工の店を持つてゐたさうでございます。生れは卑しいに相違ございませんが、でも世間でいふほど野蠻ではございません。聞きました所では、隨分危險な人物で、品行などに頓着しない、空想的な激烈な男でございますが、それに拘らず信義を守る點に於ては安心してこちらの劍を渡される男でございます……

ギドー　まあ、お前の腕で持ち切れなくなるまで、劍を渡すことは待つ方がいゝ！　其のうち今に彼奴がじつとして居ら

れなくなつて、本性を現はして來る！　それから我々の方では、取るべき道が一つ殘つてゐる、少くとも死を恐れないでそれに向つて突進しようとする我々には……さうだ、我々は軍隊にも市民にも、それから城内へ逃げ込んでゐる百姓にも凡ての眞實を打ち明けなくてはならない。條約の申出などはまだ受けてゐないといふ事を知らせなくてはいけない。我々はこゝで一種の擬戰をやつてゐるのぢやないからな。二大軍が朝早くから晩まで戰つて、戰場には手負が三人しか殘らないといふ、まゝ事戰をしてゐるのぢやない。勝利軍がお客になつて、敗軍の隊へ名譽ある友人としてやつて來るといふ、兄弟づくの籠城ぢやない。死ぬか生きるの猛烈な爭鬪なのだ、其のあひだに慈悲といふやうなものは少しも無い、我々の妻子は……

（マルコー入り來たる、ギドーそれを見て走りより、熱心に抱く）

ギドー　お父さん！……どうした仕合で、どうした不思議で、この不幸の中に、どうした幸運のめぐりあはせで、あなたは歸つて入つしやつたか、私はもう殆ど絶望して居りました……手傷を負うては入らつしやらないか？　足を引きずつておいでになるが、敵の爲に害をお受けになりましたか、どうしてお遁れなすつた？　敵がどんな事をしましたか。

マルコー　何もしないよ。仕合せと、敵は野蠻人でなかつたよ！　彼等はな、私を名譽ある賓客として過して呉れた。プリンチヴルレは私の著述を讀んでゐたとよ。それからあの私が發見して飜譯をしたプラトーの對話篇が三篇ある。あれに就いても話してゐた。なる程私は跛足を引いてゐるが、それは遠い路をあるいたからで、其の上年を取つてゐるからな……時に私がプリンチヴルレの營所で逢つたのは誰だと思ふかい？

ギドー　無慈悲なフィレンチェの辯務官どもでせう！

マルコー　あゝあれらもゐた――えゝと、少くとも其の一人はゐた、私が逢うたのはたゞ一人だつたからな……けれども私

が第一に聞いた名はマルシリオ・フィチーノーだつたのさ、あの、プラトーを初めて世界に知せた男よ……プラトーがマルシリオ・フィチーノーによつて生き返つたといつてよい位の男よ……私はあの男に逢ふためなら、他のどこへ行くよりも先に私の生涯を十年でもそれに費したらうと思ふ。……二人は、やつとめぐり逢つた兄弟のやうだつたよ……ヘシオッドの話をする、ホーマーの話をする、アリストートルの話をする……それから、あの男はな、アルノー河の岸はづれで、營所から遠くない橄欖の森の中から、胴ばかりの女神の像を掘出したさうだ、何でも砂の中に埋れてゐたのだといふ、それが何とも言へない見事なものでな、それを見てゐると、戰爭の事などは忘れて了ふくらゐよ。私たちは其の少し先を掘り起して、あの男が腕を一本見つけるし、私が手を二つ見つけた……其の手がまた實に純粹で實に美妙で、幸福な笑ひを與へるために造られたといはうか、露を撒き曙を愛撫するために造られたといはうか……一方は優しく曲つて、女の胸にでもかけてゐたかと見える。一方は鏡の柄を摑んだまゝでゐた……

ギドー　お父さん、お父さん！　どうかお忘れなさらないやうに、人民は今餓えて死にかゝつてゐます。美妙な手や胴ばかりの銅像が何の役にも立ちはしません。

マルコー　いやそれは大理石像でな……

ギドー　結構です！けれども、それよりか三萬の人命を何うしたらいゝでせう？一瞬間時がおくれても、一點不注意な行動があつても、彼等は滅亡です。たゞ一言で彼等を救ふことが出來るのですから、たゞ一日の吉報で……あなたが先方へお出かけなすつたのは、胴ばかりの石像や折れた手などのためではなかつたのです！　敵はあなたに何と申しましたか？　何ういふ計畫をしてゐるのですフィレンチェは、プリンチヴァルレは？　早く聞かせて下さい！　敵はなぜ斯う躊躇してゐるのでせう？　あの、窓下で叫んでゐる聲が聞えますか？　みじめな奴等が石の間に生へてる草を奪ひ合つてゐるので

す……

マルコー　さうだつたな、私は忘れかけてゐた、人間がお互同志戰をしてゐるあひだに、世の中は今になつた、嬉しさうな空が地上に笑つてゐる、海は青空に續いて廣がつて、さながら女神が天の神々に捧げる杯のやうに輝いてゐる。そして地は人間に對する愛であんなに麗しく、あんなに充ち滿ちてゐる！……併しお前にはお前の樂みがある、私はあんまり自分の事にかまけ過ぎてゐました……それにお前の言ふことも當然だ。私はすぐにも聞いて來た報道を話さなくてはならなかつた……私の持つて來た使命はな、三萬の人々に對しては救ひであるが、或る一人に對しては重い苦みになる……併し其一人はな、私の見るところでは、戰爭のすべての光榮よりも遙に偉大な光榮を荷ふべき、非常に貴い機會をそれが爲に得るだらう……一人に對する愛も善いことで、それに伴ふ幸福もある、けれども多數を包擁する愛は更に偉大で更に美しい……すべての人の賞讃する美德も善いに相違ないが、いつか我々の思が更に其の先へ走る日が來たら、其の美德の價値も減つて行く……これ、よく氣をつけて！……そして覺悟して私の言ふことを聞いて呉れよ、ひよつとしたら、私が口を開く第一の言葉が、もうお前をして否應なし、一歩も退くまいと誓はせて了つて、喜んで思ひかへすべき理性の力を縛つて了ふかも知れない……

ギドー　（身振りで士官等を去らしめながら）あつちへ！

マルコー　いや！　其のまゝにしておいで……　是れから決めようとしてゐるのは、私たちの運命だ、私たちみんなの運命だ、實のところ私は此の部屋一ぱいに、其の救つてやらうとする犧牲の人たちが、溢れて居ればよいと思ふ、集めてやらうとする、其の哀れなともがらが、殘らずあの窓のところに來てゐて、私が齎らす報告を聞いて呉れゝばよい、そして永久にそれを記憶して呉れゝばよい。私は救ひを齎らしたよ、たゞ理性が承知してさへ呉れゝばよいが。一萬の道理もたゞ

一つの過に比べて重さの足りない事がある、其の重さに引かれさうで、私自身が……

ギドー　謎のやうな事は止めて下さい、お父さん、お願ひです！　どうしてさう言葉數を多くなさるのですか。みんな言つて下さい！　もう何も恐れる事はありません！

マルコー　さうか！　ではな！　私はプリンチヷルレに逢つて、話して來ましたよ……不思議なもので、世間が恐れてゐる人の事を傳へると、まるで違つた形にして了ふ……私は昔のプリアムーがアキリスの陣屋へ行くやうな氣持で、あの男の所へ出かけた。亂酒漢の血なまぐさい野蠻人に逢ふつもりでな――戰爭をするのが唯一の能である狂人に逢ふつもりでな……そんな風にいつも私は聞いて居たから……戰爭の鬼のやうな、片意地な、剛腹な、放埒な狡猾殘忍な男に逢ふつもりでな……

ギドー　その通りの奴です、たゞ謀叛人でだけはないかも知れませんが！

ボルソー　はい、謀叛人ではございません、フィレンチェに仕へて居りますが忠義は盡くして居りますので……

マルコー　私が逢ふと、その男は私の前に頭を下げた、その樣子がさながら私の弟子でゝもあるやうに、私を先生として尊敬してゐた、なかなかの學者でな、勉強家で聰明で熱心で、研究心に富んで居て、じつと人の說も聽くし、美しいあらゆるものに向つて兩眼を開いてゐる、人情に篤く寬大で、戰といふ者を好かない、良心が強くて、眞率で、非道な共和國に仕へてゐるのは本意でないらしい、此の世の行きがゝり、運命とも言はうか――それがあの男を軍人にして、其のよゝ名譽の中に囚へて了つた、それをあの男は悲んでゐて、いつでも喜んで投げすてる、たゞ併しあの男に一つの願があつてな、それがかなはない中はそんな事をしない。その願といふのが激烈な願で、たとへば高大な、無邪な、手も逮ばないやうな遠い愛の星の下に我人が生れた人間の願と言ひませうか……

ギドー　お父さん、お父さん、あなたは餓えて死にかゝつてゐるものどもがいつまで斯うして引つぱられてゐるか、お忘れなすつた――プリンチヴァルレの性質がどんなだらうが、それが我々に何の役に立ちませう？　あなたは救ひだとおつしやつた、それを早く聞かして下さい！

マルコー　もつともだ、長びかすのは私が悪い。たとひ是れが私に取つては地上の誰れよりも大事な二人のものに殘酷な事であらうとも……

ギドー　私の受けるものは受けます、たとへ何んな事であらうとも。たゞ其の今一人といふのは誰れです？

マルコー　聞いて呉れ、話さうから……私はな、此の部屋に這入つたとき、何とも言へない、堪え難い氣持になりました。が、救ひといふものを目の前に見て、それに氣を取られて了つた。

ギドー　お話しなさい？

マルコー　フィレンチェは我々を皆殺しにしようと決心してゐる。軍總督等はそれが必要だと決定して、議政官も其の決議を承認した。もう取りかへしのつかない決議になつてゐる。けれどもフィレンチェはなか／＼用心深くて僞善の道に賢いから、之れから自分の文明に入れようといふ世界に對して、うつかりした口實は與へない。自分等の戸口で無差別な虐殺を行つたといふ非難の口實を與へない。彼等の方から申し出した寛大な條約を我々が拒んだと宣言して、此の町に總攻撃をかけるだらう、スペイン人やドイツ人の雇兵どもを押し寄せさせる。それも急く必要は無い。そのうちには掠奪も出來る、火もつけられる、分捕をする機會も虐殺を行ふ機會もある！　口輪をゆるめてさへやれば、それでよい。頭だつた連中は其日は氣をつけて、自分等の力に及ばない風をして居る、統御力を失つたといふ風をして居る、是が我々に對して仕組まれた運命なのさ。そして此の紅百合の都が、まつ先にその禍に苦んで、一圖に外國の雇兵どもが、思ひがけない放埒の結果

だとして了ふであらう、そこへフィレンチェ人が出て來て、さも／＼怖しいといふ樣子で、是等の雇兵どもは解散して了ふ。そのときにはもう、此の町は亡びて了つて、何等雇兵どもの助力を借る必要はなくなつてゐる……

ギドー　さうです、それがフィレンチェのやり口です……

マルコー　斯ういふ秘密の命令を、プリンチヴルレは共和國の辯務官から受けてゐる。この一週間といふもの、毎日最後の攻撃を開始するやうにと迫られてゐる。それをさま／＼の口實でこれまで延して來た。それからな、プリンチヴルレは種々の手紙を取り押さへた、それによると、辯務官どもがあの男の一擧一動を偵察して、叛逆といふ名で議政官に訴へてゐます。ピザは亡びる、戰爭は終る、フィレンチェであの男を待つてゐるものは罪科と刑罰と死の外はない。昔から危險と見られた人物は皆この通りであつた。プリンチヴルレは自身でよく此の運命を知つてゐる。

ギドー　分かりました、それであの男は何を申し出しましたか？

マルコー　プリンチヴルレの信ずるところではな――少くとも狡猾な野蠻人どもに對して信じられる範圍で――あの男が取り立てゝやつた弓の兵も可なり多い。併し何んな事があつてもあの男に一身を捧げてゐる護衛兵が百人はゐる。是等の兵には全然信頼することが出來るさうだ。そこであの男の條件はな、附いて來るだけの人數をすつかり引きつれてピザの町へ這入らう、そして今までの自分の軍に對して、ピザの爲に防戰をしよう……

ギドー　こちらは兵を求めて居るのではありません、そんな危險な援兵などに心を動かしてなるものか、彈丸と糧食と彈藥をよこさせませう。

マルコー　プリンチヴルレも自身の申出が、お前に疑はれるだらうといふ事を豫想して居て、多分拒絕せられる事と考へてゐました。その爲、こちらへ三百輛の貨車から成る輜重隊を入れようと云つて居る。その貨車には軍用品と食物とを積み込ん

で、ちやうど向ふの陣營へ來たばかりださうだ。

ギドー　どうしてそんな事が出來るのでせう？

マルコー　私は知らない、戰爭と政治の道は私には分らない。たゞあの男は自分のしたいと思ふことをする……フィレンチェの辨務官どもに頓着なく陣中ではあの男が最上の主君だから、議政官等があの男の司令權を剝がない限りはな、そして議政官等もちやうど今軍隊があの男を信賴して、覗つた獲物を摑まうとしてゐる勝利の間際に、そんな事をする勇氣は無いからフィレンチェは時機を待たなくてはならない！

ギドー　よろしい。分りました、あいつは自分を救ふために我々を救ふのですね、復讐を求めてゐるのですね。だが、それならもつと違つたやり方で、もつと巧みに目的が達せられさうなものだ。敵を救ふために何ういふ利益があるのでせう？　何處へあいつは行くつもりでせう？　自分は何うならうといふのでせう？　一體何を報酬に求めるのでせう？

マルコー　ギドーや、いよ〳〵時が來ました、言葉が殘忍になる、強い力を持つて來る、二口や三口の言葉が、忽然として運命の力を持つて來る、そして其の犧牲になるものを摑んで了ふ、さういふ時が來ました……私の聲の響き、私の話方一つが、それ程多數の人命を殺しもすれば活しもする、それを思うて私は戰慄して居る……

ギドー　なぜ躊躇なさる？　どれほど殘忍な言葉でも、我々の此の不幸に比べれば何でもありません……

マルコー　今も言つた通り、プリンチヴルレは聰明な男のやうだ、理性がある、人情がある、けれども如何に聰明でも、一點愚な所のない人間といふ者が何所にあらう、如何に善人でも、心の中に道ならぬ考を嘗て宿した事のない者が何所にあらう？……我々の理性や惻隱の心や正義の心は永久に欲望と戰ひ感情と戰ひ、此靈魂の傍についてゐる狂熱と戰つてゐるでないか？……私自身、何度か其の前に平伏して了つた、此の後もさうであらう、そして恐らくお前もまた其の通りにな

るだらう……みんなさうなるのが、我々の身の上だから……で今、一つの悲みがお前を待つてゐる、けれども恐らく其の悲みは、お前が正しく考へてさへ呉れたら、悲みにならないだらう……それから私は、明に、その悲みが、原因に不釣合のものだと認めながら、自分では其の愚な悲みよりも、もつと愚な約束をして來ましたよ……そして其の愚な約束を、私は聖人となつて喜んで守つて行く、理性の名で物を言はうとしてゐる聖人として…… 萬一お前が此の條件を拒むなら、私は敵の營所へ歸つて行かうと決心した。さうなつたら、先方で私が何うなるか、死と刑罰が私の世間並はづれた信義の報になることは疑ないだらう……それでも私は行かなくてはならない……自分自身に對しても、私はたゞ自分を惑はすために愚なことを尊い紫の色に塗り立てゝ居るに過ぎない。けれどもやつぱり私は、その悲むべき愚なことをしなくてはゐられない。つまり私も、力といふものを缺いてゐるのだ、理性の言葉にのみ耳を貸さうとするものが必ず持つべき力といふものを……そこで、私はまだお前に言はなかつたが、あゝ御覽、私は言葉の緒を失つて了ふ、どうして斯う文句に文句をつなぎ、言葉に言葉を重ねるのであらう？　最後の一言を言ふまいと僅かばかりの時間を延はしてゐるのだらう？　けれども私はお前を疑ひすぎた、申譯のない事をしてゐるかも知れない……まあ考へて見て呉れ！　私が現に見て來た、あのすばらしい輸送隊、穀物と葡萄酒と果物とを積んだ、あの無數の荷車、何十頭といふ羊や牛の群は、人民のために幾週間の食物を給して有り餘るほどだし、何十箱の彈藥、何十層の鉛は、フィレンチェ人を打ち破つてピサの好運を取り返すに充分だ。これだけの物が今夜中に此の町へ運び込まれるだ。たゞお前が其の報としてプリンチヴァルレの手許へあれを遣り屆けてさへ呉れゝば――そして夜明の第一の光りを合圖にあれは歸つて來る……もつともプリンチヴァルレは勝利と征服の標に、あれが唯一人外套を着たゞけで來るやうにと要求して居るよ――

ドー　誰れがです？　行くといふのは誰れです？　まだそれを仰しやらない……

マルコー　ジオ・ヷンナが。

ギドー　ええ！　私の妻が？……ヷンナが？……

マルコー　あい、お前のヷンナを……とう〳〵私は言ひました！

ギドー　しかし何うしてヷンナを？　女は他に何千でもゐるではありませんか？

マルコー　其の中でヷンナが一番美しい、そしてプリンチヷルレはヷンナを愛してゐる……

ギドー　あいつがヷンナを愛する？……何所でヷンナを見たのでせう？　知つて居る筈はない！

マルコー　プリンチヷルレはあれを見もしたし、知つても居る。けれども何時、何うして見知つたかは言はない……

ギドー　でも、ヷンナは、あれはあいつを見たのでせうか？　何所であれらは出會つたのでせう？

マルコー　ヷンナはあの男を見た事はないよ、少くとも、あれはそれを記憶してゐない……

ギドー　何うしてそれを御存じです？

マルコー　あれが自身でさう言ひました……

ギドー　何ですと？

マルコー　私がこゝへ來る前にさ……

ギドー　で、ヷンナにお話しなすつたか？

マルコー　殘らず……

ギドー　ええ！　あなたは、よもや此の不名譽な取り引を、あれに勸めはなさらなかつたらう？

マルコー　勸めました。

ギドー　それでヷンナは？……

マルコー　何にも言はなかつた……顏の色がさめて、出て行きました……

ギルー　あゝ！　さうなくては……あなたの足元に身を投げてあなたを言ひ罵るよりは、其の方がまだよかつたのでせう……さうです、顏の色をかへて出て行つた……天の乙女もさうするでせう、ヷンナらしい仕方です……何を言ふことがありませう？　何もない！　私たちも何も言ひますまい……さあ、諸君、また守備に就かう、そして、死なう、少くとも死なくてはならないわれ／＼だ、そんな不名譽に身を汚してなるものか。

マルコー　おゝ、ギドーや、つらい境遇に立つてゐるといふ事は、私もよく知つて居る！　が、それが身の上に落ちかゝつて來た以上、忍耐が大事だ。理性に思ひ直す時間を與へて、義務と私情の悲みとを、はつきり區別させて呉れ……

ギドー　義務ですと！　私の義務は明白です、あなたの其の奇怪千萬なお話が、否應なし一つの義務を私に押しつけますたゞ一つの義務を。この上思ひ直す時間の必要はないのです。

マルコー　いや、やつぱりお前は、自身に聞いて見なくてはならない。人民を舉げて犧牲に供する權利がお前にあるか、數千の人命をそれに代て顧みないのは、あんまり高い價でないか……お前の幸福がたゞそれのみに存して居るといふのならお前が寧ろ死を選ぶといふ譯も分からうが、もつとも私はもう人生の終りに近づいて居る。人間も澤山見て來た、人生の悲みも澤山見て來た。私に取つては、どんな害惡も、死といふ事に比べればみんな勝つてゐる。あの冷い怖しい死といふものに這入れば永久に默つて了ふ……そこで今、幾萬といふ人命が危殆に瀕してゐてそれがみんな武器を取つたお前の同胞等の身の上だ、其の妻や子の身の上だ！　お前が一狂人の狂態をさへ許してやれば、お前に取つて奇怪に見える事が、後の人の眼には勇敢な事柄として稱へられるだらう。後に來るものは、一層冷靜な眼で見て呉れる、一層正しい、一層人情

のある心で攔いて呉れる。考へて御覽、人の命を救ふほど貴と事はない。美德も理想も、名譽た信義だと呼んでゐるものも、みんなそれに比べれば物の數でもない……お前は此の苦境を、勇士のやうに、少しの汚れも受けないで通過したいであらう。けれども死といふ事が勇氣の最高の頂だと思つては間違になる……一番勇敢な行爲は、一番我々に困難な事をすることが、死はしばしば生よりも遙に容易いものだ……

ギドー　あなたは私の父上でせうか？

マルコー　おゝ、お前の父たる事を誇りとしてゐるものだ……が今日、私はお前に反對する、其の結果私自らにも反對してゐる、若しお前があんまりたやすく私の言ふ通りなつて呉れたら却つてそれ程お前を大切に思はないかも知れない……

ギドー　あゝ、あなたは私の父上だ、よい證據を見せて下すつた、あなたが自身の境遇として死を覺悟してゐらつしやる私が此の惡むべき條約を拒めば、あなたは敵の營所へ歸つていらつしやる、そしてそこでフィレンチェがあなたの爲に取つて置いた運命にお出あひなさる。

マルコー　ギドーやそれはな、私一人の身上だから——幾ばくも餘命の無い弱い、無用な、何の値打も持たない一老人の私だから——やつはり昔氣質の愚かさを守つて、眞に聰明であらうとするものが取るべき道は行かないでもよいかと思つたが……私が必ず先方へ行かなくてはならないといふ譯はない……私の靈魂はこの老いぼれた體に不似合なほど若くてゐる私はこれでまだ理性が口を利かない時代に屬してゐる……併し悲しい事には、無數の過去といふものゝ力が私を引きとめて、あの愚かな約束を破ることを妨げる……

ギドー　私もあなたの爲さるやうにしませう……

マルコー　といふと？

ギドー　あなたの例にならひませう。私もあなたがくだらないものだと仰しやる其過去といふものゝ力に服しませう、あなたも仕合とまだ其の力に支配せられておいでなさる。

マルコー　他人の身に關することなら、私は過去の力を投げすてるよ、それにお前の魂は私の力で勵まされようとしてゐる私の約束した言葉を貧しい犧牲にして、お前を勵ます必要がある。私は心からあの約束の實行を斥ける、そして、何とでもなれ、どちらにでも決めて呉れ、私は先方へ歸らない事にする……

ギドー　澤山です！　子として迷つてゐる父に言つてならない事もある……

マルコー　言ひたい事は言つて呉れ、憤りの言葉も自在にお前の胸から溢れさせて呉れ、私はみんな矢をお前の至當の嘆きとしてあやしまない……が、たゞ私を呪ふあひだも、理性と寛かな慈悲の心はお前の靈魂の中に留めて置いて、吐き出す呪ひの跡を埋めて呉れ……

ギドー　澤山です、もう聞きたくありません……お考へなさい。篤と考へて御覧なさい、あなたは私に何をさせやうとなすつたか、差　あなたの理性を缺いてるのはあなたです、貴い高い理性を缺いてるのは。あなたの智慧は死の恐れで晦まされてゐる　私は死を恐れない……私は今もおぼえてゐます、あなたがまだ老年と無益な書物の研究で勇氣を失つておしまひなさらない以前、あなたから勇氣をつけて貰つた事のあるのを、記憶してゐます……此室には私等しか居ないから誰もあなたのみじめな弱い様子を目撃したものはありません、私と二人の副官等は、秘密を守ります、其の秘密も、かはいさうに、もう長くは守る必要がないでせう、一切の事は我々の胸に葬つて置いて、さあ、最後の斷罪にかゝらう……

マルコー　いや、ギドーや、それは葬られません、お前がそれ程無益だといふ年齢と學問とが、私にはさう教へて呉れた、

理由は何とあらうが、人一人の生命を葬るといふことは決して正當のことぢやない、それから實際私はもう、お前の眼に唯一の大事と見られる、勇氣といふものを持つてゐないが、併し私には今一つ他のものがある。勇氣ほど華々しくないかも知れないし、多くの場合、人といふものは、苦みを與へるものを稱讃する、さういふ功能は少いかも知れないが……其のお蔭で私は殘つゐる義務を果したいと思ふ……

ギドー　それはどんな義務です？

マルコー　初めは至つて不成功であつたが、でも私は此事を完成したいと思ふ……お前も判決者の一人には相違ないが、併しお前一人ではない。死生を此の時にかけてゐる人々は、みんな彼等の運命を知る權利を持つてゐる、あれ等の救ひが何に基いてゐるかを聞く權利を持つゐる。

ギドー　あなたのおつしやることが分らない、少くとも分りたくありません。あなたのおつしやるのは……

マルコー　此の部屋を出るとすぐさま、ブリンチヴルレの申出とお前がそれを拒んだ次第を人民に告げやうといふのさ……

ギドー　よく分かりました、くだらない言葉をかはしてゐる間に、こんな結果になつたのは殘念です、同時に、あなたの迷ひが、あなた方の年配の人についてゐる尊敬を無くして了ふのも殘念です……併し迷つた父なら、其の意志に逆つても保護するのが子供の義務です、のみならず、ピザが存する限り、私はこゝに主人として立てゐる。ピザの名譽を擁護するのが私の任だ……ボルソー、トレルロー、君等は父上を監視して吳れい、父上の良心が覺醒して來るまで。それで他には何事も無かつた事にする！　誰れにも此の事は知らすな……お父さん、私はあなたを許してあげます、あなたも私を許して下さるでせう。嘗てあなたは、私に自分を支配する人になれと敎へて下すつた、恐れない人になれと敎へて下すつた、結局、あの事を思ひ出して、私を許して下さるでせう……

マルコー　いや、私はお前を許す爲にそんな結局まで待つ必要はないよ……私もお前と同じやうにすればよい……それからお前は私を監禁することは出來ても、私の秘密を監禁することは出來ない。それは私の自由で、もう押へることが出來ないのだから……

ギドー　何の事です？　何をおつしやる？

マルコー　ちやうど今頃。プリチヴルレの提供した。條件が政府で議せられてゐるといふ事さ……

ギドー　政府で！　誰れが政府へ知らせました？

マルコー　私が知らせた、こゝへ來る前に……

ギドー　あなたが！　いや、いや、そんな事の出來やう筈がない！　いかに怖氣づいたからと言つて、老耄したからと言つて、あなたはよもや、私のたゞ一つの心の喜びを、私の愛を、私たち夫婦の純粹な美しい生活をよもや他人の手に委ねはなさるまい、あの憫れむべき町人共の手に。あいつ等は、愛も喜びも、たゞ鰯や油と同じやうに秤にかける儕です……そんな事をなさらうとは信じられない……眼のあたり見る迄は私は信じない……眼のあたりに見たら！　その時は、父として、愛も理解も崇拜もしてゐたあなたを、恐れと憎みの目で見るでせう。こんな禍を今日ここに惹き起した張本人の、あの卑劣卑怯な惡魔めに劣らないあなただと思ふでせう！

マルコー　お前は本心を語つてゐる、私といふものが分かつてゐないのだ。もつとも其の責は私にある。老の波が私の身に寄せてから、はじめて私は日に〳〵愛と人生の事を知り、人間の哀樂について學びました。それをお前に知らさなかつたのが惡い……若し私がもつと早く心の變化を話して、虛榮の次第に消えて行くことや、眞理の見えて來る樣子を言つて置いたら、今日斯うしてお前から、緣もゆかりもない不幸な人のやうに取扱はれて、嫌はれて行く愛は無かつたらう……

ギドー　少くとも早くあなたの事に氣がついたのを喜びます……其の他には……政府が何う決議するかといふことは豫想するに難くない。自分等を救ふ唯一の道は一人の人を犠牲にすることだ……單純極まつた話だ！　斯んな誘惑があれば、あの憫むべき町人どもが分相應に持つべき勇氣よりも、遙に高尚な勇氣ですら曲げられて了ふ。だが、あいつ等も氣をつけるがいゝ！　あんまり無理な要求をする、あいつ等が要求する權利以上の要求だ。あいつら等の爲に、私は私の血を濺いだ、日となく夜となく私は苦勞も忍耐もした、此の長い／＼籠城のあひだ、私は曾て自分の身を惜んだ事はないが、併し、それで澤山だ　もう私は何も爲ない！　ヴンナは私のものだ！　私の所有だ、それから私はなほ司令權を持つてゐる！　少くともストラヂオーテの兵どもは私に忠義をつくして呉れる、私一人の命を聽いて、臆病者等の相談に耳を貸さないものが三百人は居る！

マルコー　ギドーや、それはお前が過つてゐる。ピザの政府や、お前の賤む市民たちは、自分等の決議がどうなるかをすら知らない前から、この危急の場合に驚くべき立派な勇氣を示して居る。一婦人の愛を犠牲にして自分等の安全を計ることを拒んでゐる。で、私がこゝへ來た後で、あの人々は、ヴンナを呼んでピザの運命をヴンナの手に委ねました……

ギドー　何だと！　そんな事をしましたか！　私のゐない所で、あの憎むべき獣めが言ひ條をあいつの口から繰り返したのですか！　ヴンナよ……一目見られても紅くなるその優しい顏と、美しさのまゝ行く、そのしとやかさで、ヴンナはあの淫な老人どもや蒼い顏をした小さい僞善者の町人どもが、前に立たされたか、あいつ等は不斷あれを神聖なものゝやうにして居やがつたが、そのあいつ等がヴンナに對して「行け、裸でただ一人、あの野蠻人の營所へ出かけて行つて、そいつの言ふまゝになつて來い！」と言つたのだらう！　あゝ、あゝ暴力を用ゐなかつただけか、なるほど、まだしも立派な事だ！　私がまだ斯うしてこゝに居ることを知つてゐるからね。あいつ等はヴンナの承諾を乞うたのだらう！　それで私

の――一體私の承諾を誰れが求めやうとするのだ?

マルコー　私が、求めたではないか、ギドーや、それで從はなければ今度はあの人たちが來る……

ギドー　來させて下さい! ヷンナは私たち二人の意志を言つたでせう……

マルコー　どうかさうしたいと思ふよ、お前もあれが答へに同意して呉れ……

ギドー　あれが答へ! それに疑がありますか! あれほどよく知つてゐて、あれ程毎日逢つてゐたあなたが、ヷンナの答に疑ひをお持ちなさるか、兩眼に愛の笑を湛へて、始めて此の部屋の閾を跨いだ、その部屋であなたは、ヷンナを疑らうとなさる、あれの答を疑つておいでなさる……

マルコー　これギドーや、我々はな、お互にたゞ他人の上に自分の姿を見るものだ、自分自身の心の屆くだけしか自分も分からないものだ……

ギドー　たしかに其のためです、あなたなんぞの心が私に分からなかつたのは! 併し私の眼がこの上また欺かれるよりは、いつそ神に誓つて永久につぶした方がましです!

マルコー　其の眼はちやうど今大きな光の下に開かうとしてゐるかも知れない……といふのはな、ヷンナにはお前の眼に入らない或る力がある、それを見て、私はヷンナの答は、もはや疑ふ餘地のないものだと思ひました……

ギドー　疑ふ餘地がない! あゝ、たしかに私もさう思ひます! だから私は前以て躊躇なくあれの答に盲從して置きます! 萬一ヷンナの答が私と違つたら、私等二人はそもそもから此の悲慘な間際まで、お互に欺されてゐたのです……私たちの愛はほんの僞りに過ぎなかつたのです、敗北になつて了ひます。私があれに對して崇拜してゐた事は、みんなたゞ此の信じ易い哀れな私の頭でこしらへたものに過ぎなかつた、此のかはいさうな義理固い胸が、たゞ一つの本當を賭つて

幻を崇拜してゐたのです……

（ヴンナ、ヴンナといふ叫び聲が戸外の群集から揚がる、初めはつぶやく樣に、そして段々高く〳〵なつて行く。正面の戸が開いて、ヴンナ唯一人、室に進み入る。顏が蒼白く見える、其の間多勢の男女が、室に入ることを恐れるやうに、戸にすがつて隱れやうとする。ギドーはヴンナを見てはげしく驅け寄り、兩腕をヴンナに投げかけて狂熱的に抱く）

ギドー　あゝ、ヴンナ……あいつ等が何をしたか、あいつ等が何を言つたか！……いや、〳〵、言はないでおいで……私はたゞお前の眼が見やう――あゝ、まだ、みんな純潔な、貞節なままだ、天の乙女が浴びてゐる泉のやうに……あゝ、あの馬鹿な奴等が！　あいつ等は私の愛するものを何うすることも出來なかつた、小兒のやうに、空に向かつて石を投げて、天まで達くと思つてゐやがる！……じつとお前の眼を見たとき、あいつ等の言葉が唇の上にいぢけて了つたらう……お前は答へる必要もなく、たゞあいつ等を見てやつたらう……それだけで、あいつ等とお前の間には、あいつ等とお前の心の間には、湖水が出來たらう、愛と人生の限りもない海が出來たらう　けれども御覽、こゝに一人の人がゐる、父と呼ぶ人がゐる……頭を垂れて、白い髮の毛に蔽はれてゐる……私たちは此の人を許してやらなくちやならない、年を取つて、眼が見えない、慈悲をかけてやらなくちやならない、つとめてさうしてやる必要がある。お前の眼は何も此の人に言つてゐない――私たちはすべて離れた人だ？緣もゆかりもない人になつた。私たちの愛は、四月の群雨が堅い石の上に濺ぐやうに、此の悲しい老人の上を通りすぎて了つた……そんなものは、もう此人に取つては何でもない、みんな消え失せて了つた。私等は愛といふ言葉の意味も知らないで愛してゐるのだと思はれた　分からないのだ、説明の言葉がいるのだ……言葉を聞かせておやり、お前の答を！

ヴンナ（マルコーに近づき）お父さま、私は今夜まゐります。

マルコー （ヷンナの額に接吻しながら）娘や、私は知つてゐました……

ギドー 何！ お前、何を言つた？

ヷンナ あなた、私はまゐります、行かなくちやなりません、從はなくちやなりません……

ギドー 從ふ？ 誰れに從ふ？ 言つて御覽！

ヷンナ 私は今夜プリンチヷルレの營所へまゐります……

ギドー あいつと死ぬるつもりでか、あいつを殺すつもりでか！ それは私に氣がつかなかつた。さうだ〳〵それで分かつた！

ヷンナ あれを殺さうとしたら、ピザの町は救はれますまい……

ギドー えゝ！ お前、お前は、それではあ奴を愛してゐるか！ 何時からあ奴を愛してゐる？

ヷンナ 私、その人は知りません、一度も見たことがありません。

ギドー でも聞いたことはあらう。さうだ〳〵。お前は聞いたことがあらう、人が言つて聞かせたらう……

ヷンナ いゝえ、少しも、ちやうど今、誰れかゞさう言ひました、大層年とつてゐるさうです——

ギドー 年を取つちやゐない！ 若い、綺麗た、私よりも、ずつと若い。あゝ、あいつの望が他の事たつたら、何であらうと、私はあいつの所へ行つて、手と膝で這ひつくばつても、此の町を救つてやる。！ さうでないなら、私はヷンナを連れて流浪して、誰れにも知れず、世間からも忘れられて、人道の辻に袖を乞ひ——も餓生が食らう—— けれども此の事だけは、此の事だけは！ 世界の歴史で、いつ、征服者が斯ういふ事を——（ヷンナの方に行き、兩腕を擴げて）あゝ、ヷンナ、ヷンナ、私は信じられない！ 私の聞いたのはお前の聲ぢやない、お父さんの聲だ、ただそれだけだ！ いや〳〵

私は何も聞きはしない、すべて舊のまゝだ……さう言つて呉れ、私の間違だと言つて呉れ。愛はお前のすべてであつた、その愛で頰を染めながら、『行かない、行かない』と叫んだと言つて呉れ！　私は何も聞かなかつた、沈默はもとのまゝに續いてゐる……けれども、御覽、今こそお前が口を開かなくちやならない……みんな謹聽してゐる……誰れもまだ何も聞かない……みんなお前の言ふ言葉を待つてゐる、さ、早く言つて呉れ、ヷンナ、お前といふものを知らせるために！　私等の愛を宣言して呉れ、それで此の夢を破つて呉れ、私が望む通りの言葉を言つて呉れ……其の言葉一つで、廢滅の中に崩れ込む私の周圍を防ぐことが出來る！

ヷンナ　おゝ、あなた、我慢なさるのがつらいでせう、察してゐます……

ギドー　(我れ知らずヷンナを突き離して)つらいでせう……お前にも分かつてゐるか、お前にも分つてゐるか。我慢して來た私には愛がある、お前は初めから私を愛してゐなかつた！　愛してゐなかつた、それが私に分りかけて來た！　一體何うすればいゝのか……お前は喜んで私を棄てようとしてゐる。あの男を愛してゐるのだ、誰れが嘘だといはう！　あゝ併し私はまだ主人としてこゝに立つてゐる、誰れが何と言はうと！　それをお前は、私が靜に傍觀して成行にまかせてゐると思ふのか！　此の部屋の下には穴牢がある、暗い、冷たい穴牢だ、あそこでお前はじつとしてゐるがいゝ、ストラヂオーテの兵どもに番をさせて置く、お前のその義勇主義の夢がさめて、どこにお前の義務があるか分かるまで、あそこにゐるがいゝ……ヷンナを連れて行け……屹度言ひ渡したぞ、私の命令だ、行け、服從せい！

ヷンナ　あなた、あなた、私が言ふまでもない事ぢやありませんか……

ギドー　誰れも命令に服しないな？　玆にゐるものは一人も私の命令を行はないな！　こら、ボルソー、トレルロー、君等の腕は石にでもなつたか？　私の聲が通らなくなつたのか？……そつちに居る他のものも、立つて謹聽してゐるが、み

んな私の言ふ事が聞えないか？　これほど叫んでゐるのに、身動きもしない……　ヷンナを連れて行けといふに！　あちらへ、あちらへ！……あゝ、分つた！　みんな恐れてゐるな、生きたいのだ――　生きたい、それがみんなの望みなのだ！　あれ等を生かすために、私は死ななくちやならない、併し斯うしては死なない……さうだ、是れではたゞ徒に容易すぎる……斯うして私は、たゞ一人群衆を相手にしてゐる、そしてそれ等の爲に私が償ひをしなくちやならない……なぜ私がそれをして、貴様等はしないのだらう！　貴様等も皆な妻を持つてゐる……（劍を拔きかけながら、ヷンナに近づき）若し私が不名譽にかへて死を選んだら何うするか？……貴様等にそんな事は思ひつかなかつたらう！……併し、それ、私が手をさへ上げれば――

ヷンナ　ねえ、愛の力でなさるのなら、愛の力でなさるのなら……

ギドー　愛の力でなさるのなら！……　あゝ、さうだ、愛といへ、お前は今まで愛といふ言葉の意味を知らなかつた！　お前は、お前の魂には、ついぞ愛といふものがなかつた！　斯うしてお前を見ると、砂漠を見るやうだ――何もかもみんな吸ひ込まれて、死んで了ふ――一滴の涙もない、一滴の涙もない……私は何だつたらう、私はお前に取つて何だつたらう！　腕に宿りを貸してやつた唯の人、それだけだ！　お前がたゞ一瞬間でも……

ヷンナ　あなた、よく私を見て下さい！　見えませんか、何と言つたらいゝでせう？　私の感情を論る言葉があるでせうか？　たゞ一言本當に言つても、私の力はつきて了ふ……言へない……私はあなたを愛してゐます、みんな／＼あなたのものです　でも、やつぱり私は行きます、行かなくちやならない、行かなくちやならない……

ギドー　（ヷンナを突き放しながら）それがいゝ！　行け、あつちへ行け、あつちの方へ行け、私はお前と縁を切る。行け、もうお前は私のものぢやない……

ヷンナ　（ギドーの手を攫みながら）　あなた！

ギドー　（ヷンナを押しのけ）　あゝ、その溫い柔かな手で私にさはつて呉れるな……お父さんの言葉が本當であつた、お父さんには、私よりもよくお前が分かつてゐた……お父さん、玆にヷンナがゐます、斯うなつたのもあなたの細工です、仕舞までそれを仕上げて下さい……ヷンナをあいつの營所まで連れて行つて下さい。私はこゝに殘つてゐて、二人出て行くところを見て居らう……けれどもヷンナに代へたパンと肉とを、私が分けて貰ふと思つてはなりませんよ……私のする事はたゞ一つです、今すぐに分かるでせう……

ヷンナ　（ギドーにすがりつきながら）　あなた、私を見て下さい、眼をそらさないで――さうされると恐しくなりますから……あなたの眼を見せて下さい……

ギドー　では御覽！　よく此の眼を見て、意味を讀んで御覽……出ておいで、もうお前といふものは私に分からない！　時刻が迫つて來る……あそこであいつが待つてゐやう、日は暮れかゝつて來た……行け、何が恐しい？　私は自殺はしない、狂人ぢやない、理性のぐらつくのは愛が勝つた時ばかりだ、愛の亡びた時にそんな恐れはない……私は愛のどん底まで見通した、さうだ、愛と貞操のどん底まで……もう、何も言ふことはない。いけない／＼、お前の指を廣げて了へ。いくら攫んでゐても消えて行く愛は引き留められない。萬事終つたのだ、完結した、すんで了つた、一毫の跡も留めない！……過去は離れて了つた、未來も離れて了つた……あゝ、さうだ、その純白な手の指、その貴い眼、その唇、一度は私もそれを信じたが……もう何も殘らない……（ヷンナの手をはねのけ）　何も、何も、全く何も！　さやうなら、ヷンナ、行け、さやうなら……敵へ行くのかお前が？

ヷンナ　えゝ……

ギドー　もう歸つては來まい！

ヷンナ　いゝえ、歸つて來ます………

ギドー　どうなるか見て居らう……さうだ、見て居らう……お父さん、やつぱり私よりもよくヷンナを知つてるのはあなたでした！

（よろめいて大理石の圓柱の一つにすがりつく。ヷンナは其の方に眼をくれないで、靜にひとり出で行く。）

第二幕

（プリンチヴァルレの幕營。目の醒めるやうな亂雜、絹と黄金の陣幕、武器や高貴な毛皮がそこらに取り散らしてある。大きな幾　かの櫃が半ば蓋を開いたまゝ置いてある。澤山の寶玉燦や爛たる品物が其の中から見えてる。幕營の入口は正面にある。そこにはどつしりした帷帳がかゝつてる。プリンチヴァルレがテーブルの傍に立つて書類や地圖や武器を整理してる。ヴェディオ入り來たる。）

ヴェディオ　お手紙が參りました。國の辨務官から。

プリンチヴァルレ　ツリブルチオから？

ヴェディオ　はい、次席辨務官のマラドーラ殿はまだ歸られません。

プリンチヴァルレ　ヴェニスの兵がカゼンチーネの山道から我が國を威嚇してゐるが、ひよつと、するとあれは意外の抵抗をするかも知れない。その手紙をお見せ（取つて讀む）あの男、私に正式の命令をよこした、明日の未明に總攻撃をかけろといふ、これが最後の命令で、聞かなければ直ちに捕縛するといふ……よろしい、少くとも今夜一夜は私のものだ……直ちに捕縛する……あゝ、彼等は何も知らない……そんな陳腐な平凡な言葉が何になる！　今正に人生たつた一度の最高の潮時を待つてゐるのに、そんな嚇しが利くと思つてゐるのか……強迫、捕縛、誹謗、吟味、裁判――そんなものが何になる……彼等は出來ることなら、勇氣さへあつたら疾くに私を捕縛してゐたのだ……

ヴェディオ　ツリヴルチオ殿は、そのお手紙と一緒に私に御傳言がありまして跡からすぐお出でださうでございます、お目にかゝりたいと申されました……

プリンチヴルレ　あゝ、では彼れもいよ〳〵決心をしたね……會見したら色々の事が決するだらう。それからあの萎びた小さい役人先生、こゝではフィレンチェの隠れた權力を、すべて代表してゐるが、でも嘗て正面から私と眼を見合せた事がない。憐れむべき白面の小男さん、私を死ぬよりも嫌がつてゐる。それが思ひがけなくもこゝへ來なければならない……何か重大な命令が來たに相違ない、それで怪物を其の洞穴に尋ねて對決しようといふのだらう……入口を堅めてゐるのは誰れか？

ヴェディオ　あなた樣のガリシア隊の古参兵が二人で固めてをります、一人はヘルナンドーのやうに見えました、今一人はディエゴーでございませう。

プリンチヴルレ　さうか、あれらなら大丈夫だ、あの二人ならたとひ天の使者を縛れと命じても反對しない……暗くなりかけて來た。ランプをともせ、何時だらう？

ヴェディオ　九時をすぎました。

プリンチヴルレ　マルコー老人はまだ歸らないか？

ヴェディオ　濠外の歩哨兵が到着次第連れて參ることになつてをります。

プリンチヴルレ　あの老人は、私の條件が容れられなかつたら、疾くに歸つて來る筈だが……今に一切の事が定まる。私の一生もそれに引きつけられてゐる、譬へば囚人が眞暗な暗闇を見つめてゐるやうに、大きな船が帆に浪を打たせて見ほれてゐる、さうした風に彼等の一生を引きつけられて行くのと同じ事。人間は斯うして、自分の運命も、智識も、靈魂も、喜びも、悲みも、みんなあの果敢ない一婦人の愛に任せてしまふ！　不思議なものだ――笑つてそれに勝てるものなら、私は自分を笑ひもする……マルコーは歸つて來ない――では、あの人が來るだらう……行つて灯火を見て來い、[illegible]

知したといふ合圖の烽火を……明りがあるか見て來い、その明りに、震へる足を導びかれてあの女が來るのだ、自分の身を捨てゝ他人をまかす、人民を救ふと共に私を救ふ……いや、行くな私が行かう。私は少年の頃から今日の此の時を待つて居た、待ちあこがれてゐた、私の眼より先には、たとへ友人の眼でも、あれの來るのを見迎へてはならない……（入口の所に行き帷帳をまくつて夜の景色を眺める）御覽、明りが！ 眞つ暗な中に照り輝いて搖いでゐるぢやないか……カムパニーレの塔から――よし／＼、さうなくちやならない……御覽、陰欝な闇の中を貫いてゐる！ ピザの町を照してゐる唯一つの光り……あゝ、ピザの空に始めて咲いた莊嚴美麗な花といはうか、かすかな望で長く長く待たれてゐたのだ……あゝ、勇敢なピザの人々よ！ 今夜は祝宴を開いて、おん身の歴史に長い記念を殘すであらう、私も、自分の故郷を救つたよりも遙かに神聖な喜びを今宵味ひ知るだらう。

ヴェディオ （プリンチヴルレの腕にさはりながら） あちらへ參りませう、ツリヴルチオ殿が向ふから見えます。

プリンチヴルレ （退いて帷帳を下ろしながら） さうだ、我々はまだ……會見は簡單にしよう……（テーブルの方へ行き、そこにある書類をいぢくる） あの男からの三通の手紙はどうした？

ヴェディオ そこには二通しかございません。

プリンチヴルレ 差押へた二通と今夜の命令のと

ヴェディオ こゝにその二通がございます。今一通はあなた樣が手で採んでおいでになります……

プリンチヴルレ やつて來たね……

（番兵が帷帳を揭げる、ツリヴルチオ入り來たる）

ツリヴルチオ 君はあの怪い明りを見ましたね、カムパニーレの塔からの合圖のやうですな？

ブリンチヴルレ　君はあれを合圖だと思ひますか？

ツリヴルチオ　疑ひもなくさうですよ……ところで、私は君にお話がある。

ブリンチヴルレ　聞きませう、ヴェディオはあつちへ行つて居れ、でも、あまり遠くへ行かないでな、用があるかも知れないから。

（ヴェディオ出て行く。）

ツリヴルチオ　ブリンチヴルレ君、君にも分つてゐませうが、私が君に對して多大の尊敬を拂つてゐるといふことは、實際是れはもう一度ならず私が事實の上に證據立てた事だが、それでも、また其の他に澤山御存知ないことがある。なぜといふに、フィレンチェの政策は、世間では權謀術數だといふが、それはたゞ用意周到だからで、大抵な事は秘密にして置いて本當に機密に與かるものでも知らない事が多い。我々はすべて國からの深遠な命令に從つてゐるのだから、お互に默つてこの重大な秘密政策を助けなくちやなりません、フィレンチェ秘密はその最高知識の發現なのだからね、で斯う言つて置けば十分だと思ふが、私は君を選出するに就て隨分骨を折りましたよ。君の若い時の事と系圖の明かでない事が邪魔をしたに拘はず、フィレンチェ共和國が嘗て繰り出した事のない强壯大な軍隊の出陣に、君を總司令官として推薦したのです、それで、今までに何等その推薦を悔いるやうな事もなかつた。所が近來君に反對の一派が生じましてね、こんな事を君に漏らすのは、私が君に深厚な友情を持つてゐるため、義務をお留守にした事になりはしないかと思ひますがね、併し、あまりに嚴格に義務ばかり追つてゐると、往々にして思ひ切つて寛大にするよりも却て害の多い事があります。だから、此際御參考を願ひたいといふので、君に對して一段激烈に君を非難して、忠實に乏しい、ぐらついてゐる、などいつてゐる、と言つてゐます。中には君の忠義心に對して、疑ひを挿むものさへある。巧に仕組んだ惡い風説が流布せられて其疑

ひに色をつける。いろんな事が面白くない結果を來して議會の一部が君に不利益な眼を向けてゐます。それがとう〳〵君を捕縛して吟味するといふ議論にまでなつた。所が、都合よく私がいゝ時に相談を受けたものだから、急いでフィレンチェへ出かけて、譯もなく其の反證を擧げて來ました、私は君の味方ですよ。此の上はたゞ君が私の眞意を認めて下さるか下さらないかにあるので、私に取つては、一時だつて二心を持つた事はない、君が働いて下さらないと我々は困るのだから同僚のマラドーラ君はヴェニスの輜重隊のためにビビエナで喰ひとめられてゐるし、今一軍は北方からフィレンチェへ進んで來てゐる。フィレンチェも危險な形勢に陷つてゐます。けれども君が明朝總攻擊をさへ開始して下さればすべて好都合になるでせう、隨分長く待つてゐた總攻擊だからね。それで我が軍の最も精鋭なのが手が明くし、同時に嘗て負けた事のない唯一の大將が他へ廻されるといふものです、さうしてフィレンチェに凱旋したら、盛んな歡呼と名譽の中に、昨日までの君の敵は、最も熱心な君の身方になり、稱讃者になつて了ふ……

プリンチヴルレ　それだけですか、君の言はれる事は？

ツリヴルチオ　まづさうです。もつとも、御交際以來、實際君に對する友情は日を追うて增しました、その事だけはわざと申し上げなかつたが、是れは隨分困難な地位に立つてゐても、さうでしたよ。君と私とは法律上妙な關係に立たされてゐましたからね。矛盾した樣に見える法律で、大將の權力が屢々――危急な場合だと――フィレンチェの秘密な力で牽制せられる、其の秘密力のお恥しい代表者が、今日のところ私たちものだから……

プリンチヴルレ　私がちやうど今落手した此の命令は、君がお書きでしたか？

ツリヴルチオ　さうです。

プリンチヴルレ　君御自身で？

ツリヴルチオ　疑ひもなく。なぜそれをお尋ねです？

プリンチヴルレ　此の二通の手紙は――御承知か？

ツリヴルチオ　かも知れません。分らないが、何が書いてあります？……先づ中を見て……

プリンチヴルレ　それには及ばない、分つてゐます。

ツリヴルチオ　二通とも君が差押へた手紙ですか、私の豫定通りに？……試驗がうまく行つたね。

プリンチヴルレ　君は、子供を相手にしてゐるのではないよ。まあ、こんな愚劣な小細工の事などは論じないとしよう。でないと君の合見　徒らに長びくから、早く切り上げたいものだ。到底フィレンチェの凱旋などゝ比べものにならない報酬が得られる、それが延びるのだ――此の手紙で、君は私の一擧一動に對し、思ひ切つて卑劣な讒誣を逞うしてゐる、是れは單に君の惡意からか、それともフィレンチェの狡猾極つた貪慾の爲めに、雇人將たる私の勝利を値切らうと思つて、必要な準備をしたのか？……此の手紙で見ると、實に恐しい程巧に一切の事が織いてある。私自身でさへ自分の身を疑ふほどた私のすべての行動が不具な、卑劣な、汚れたものにされてゐる。それが此の包圍攻擊の始まる第一週から、ずつと今日にまで及んでゐるのだ。その今日、私は眼があいた――幸福な今日、私は君の疑ひを事實にしようと決心した。君の手紙は註意して寫し取つてフィレンチェへ送つて、その返事を差押へた。君の言ふ事が用ゐられて君の方が信用せられてゐる。罪證も簡條な擧けてあればある程、たやすく信用せられて、私は何等の審問も受けないで裁判せられ、死罪を宣告せられてゐる――それで、もうたとひ天使の證言を借りても君が提供した恐しい僞證を言ひ消す力はないと諦めた……だから私はこゝで飛躍をする、君の罰ひ鎖を切り放つて、機先を制してやる、百尺竿頭に一歩を轉ずるのだ。是れまで私は曾て殺人になつた事はない。併し、此の一通の手紙が手に入つて以來、私は君を亡ぼす仕度に取りかゝつた。今夜、私は、勇者

な議政官や君等を賣つてやる、君等の上に、私の力の及ぶ限り殘酷な痛手の打擊を喰はしてやる、そして私は、それを一生のうち最も高尙な仕事だと考へる、それによつて或る一都市を懲らしてやるのだ、陰謀を美德よりも尊んで、世界を詐欺と僞善と虛僞、忘恩、奸惡の力で支配しようとする、その都市を懲らしてやるのだ……今宵こそ、ピザの町が私に感謝する。ピザに君等の古い讐敵だ、腐敗を世界に廣げる君等をピザが防いでゐる、其の城壁の立つてゐる限り、永久に君等を防いでゐる。今夜こそピザの町は救はれて、頭をあげて今一度抵抗の息を吹きかへす……あゝ、これ立ち上らないで、無益な眞似をしないで……すべての手段が盡してある。避けられるものぢやない。君はもう私の手の中にゐる。君ばかりぢやない、フィレンチェの運命まで私の手で摑んでゐるやうだ……

（ツリヴルチオ短劍を拔きプリンチヴルレを覘つて急遽一擊を與へる。）

ツリヴルチオ　まだ／＼……私の手が自由である限りは……

（プリンチヴルレ、腕で其の搏擊を外し　武器を高く上げさせる、其のはづみに自分の顏に觸れる、ツリヴルチオの腰を捉へて）

プリンチヴルレ　こんな騷ぎが突發しやうとは思はなかつたね……さあ、もう摑まへた、片手で押しつぶすことも出來る……此の短劍を下しさへすればいゝのだ……もう君の喉に向つてゐるやうだ。何うした、何も言はないね、恐しくないといふのか？

ツリヴルチオ　（冷かに）恐しくない。其の短劍をつかへ、君の權利だ、私の命は無いものと思つてゐた。

プリンチヴルレ　（手をゆるめて）あゝ……併し、さうすると、君のやつてる事は實に不思議だ……珍しいことだ、軍人でもそれほど平氣で死の手に向ふものは、たんとはない、その弱い體にその氣力があらうとは思はなかつた……

ツリヴルチオ　君等のやうな武人は、動ともすると刀の切先より外に勇氣はないものと思ふ……

プリンチヴルレ　さうかも知れない……よし／＼……君は放つ譯には行かないが、害は加へないよ……君と私とは違つた神様に仕へてゐる。（顔の血を拭く）あゝ、血が出てゐる。切り込みやうは下手でもなかつたが……少し急き込んだね、併し力はないでもない……も少しといふ所まで行つた……だが、どうだらう若し危く君を嫌な世界へ送らうとした奴がおつてそれを君が捕まへたとしたら、何うする？

ツリヴルチオ　容赦はしない。

プリンチヴルレ　君は私には分らないが……よほど變つた人だ……こんな手紙を書くのは卑劣だと言つて了へ、私は、フィレンチェの爲めに血を注いで三度も戰爭をしたが、少しも自分の身を痛はつた事はない、全力を盡した、そして得た所はみんな國の爲だつた。私はフィレンチェの忠實な僕であつた、嘗て不忠の心は微塵も私の胸に入り込まなかつた……君にはそれが分つてゐる筈だ、いつも私を偵察してゐたから……所が君の手紙を見ると、恐ろしい惡意か憎惡かは知らないが、私の一擧一動を曲解してゐる。私はフィレンチェの事しか思つてゐなかつたのに讒言に讒言を重ね虚僞に虚僞を重ねてゐる。

ツリヴルチオ　事實は嘘でも――、そんな事は構はない、私は刻下の危急を防がうとしたのだ、軍人が二度や三度の勝利に思ひ上つて、自分の君主に服從しないやうになると、危險だ。君主の天職は軍人の天職よりも高いからね。さういふ時が果して今見るやうに偉い偶像視せられてゐた。フィレンチェの人民は君を大事にしすぎたよ。で、そんな人民の崇拜する偶像を破壊してやるのが私等の任務だ、一時は不興を買つても其の危險な氣まぐれは抑へてやらなくちやならない。それで私は愈々破壊すべき偶像を示してやる時期が來たと思つて、フィレンチェに警告を與へた。私の僞りの意味はフィレンチェに分つてゐる筈だ……

プリンチヴルレ　君の無慚な手紙さへなければ、其の時期は來なかつたのだ、永久に來なかつたのだ……

ツリヴルチオ　來たかも知れない、それだけで澤山だ……

プリンチヴルレ　何！　無罪の人が『かも知れない』だけで犧牲になるのか？　有るまじき危險呼ばりの下に、冷血漢が提供する犧牲になるのか？

ツリヴルチオ　フィレンチェの安寧のためには、一人の命ぐらゐ何でもない？

プリンチヴルレ　ぢや、君はフィレンチェの運命を信じてゐるか、其の事業を、其の存立を？　もしさうだと、フィレンチェは私には分らないものになる……

ツリヴルチオ　勿論、私はたゞフィレンチェだけを信ずる、其の他は私に取つて何でもない……

プリンチヴルレ　つまりはさうだらう……君の言ふ事も正しい、さう信じてゐるのだから……私には國といふものがないから分らない。時々私も自分の國のない事を悔いる……しかし其の代りに君等の決して持てないものを持つてゐる、それだけは何人も私に及ばない……それで凡てを補ふ事が出來る……さあ行くがいゝ、別れやう、こんな謎を考へてゐる時間はない……私等はお互に遠く隔つた人間だ、それでゐて殆ど接觸する點もある——人はみんな自分の運命を持つてゐる……或は思想を追ふものもある、或は欲望を追ふものもある、君の思想を變へよと言はれてもむづかしい、私の欲望を變へよと言はれてもむづかしい……では、ツリヴルチオ君、我々は別の道を行くのだ…　握手して別れやう。

ツリヴルチオ　まだ〳〵。私が君と握手するのは、刑罰の日だ……

プリンチヴルレ　それもよからう、今日は君が負けたが、明日は君が勝つかも知れない……（ヴェディオを呼ぶ）ヴェディオ！

（ヴェディオ入り來る。）

ヴェディオ　あなた樣……何うなさいました、傷をお受けになつて、血が流れてゐます……

プリンチヴルレ　何でもない……二人の番兵を呼べ、そして此の男を連れて行かせい。併し害を加へないやうにしてやれ……私の愛する敵だ……何所か安全な場所へ入れさせて、人に見られないやうにしてやれ、番兵どもが責任を持つて安全にしてやらなくてはいけない、そして私の命令が行つたら放免してやれ……

（ヴェディオ、ツリヴルチオを導いて去る、プリンチヴルレ鏡の前に立つて傷を驗する。）

プリンチヴルレ　成程血が出る。脈管でも切たやうだ。傷は深くないが、ただ顏に傷をつけたね……人は見かけによらないものだ。あんな弱いよろよろした男が……（ヴェディオ歸つて來る。）言ひつけた通りにしたか！

ヴェディオ　はい、是れが破滅の本になりは致しませんか！

プリンチヴルレ　破滅！……あゝ、私は斯うしてたら死ぬる日まで日々破滅を受けて行きたい！……破滅といふか、ヴェディオ！……でも、およそ此の世界に、正當な復讐をして私ほどの幸福を得たものは又とあるまい——歩みることを覺えて以來、ずつと夢みてゐた幸福を……私は待つてゐた、祈つてゐた！　それがためなら、如何なる罪も厭はなかつたらう、私のものとして、私に附屬して必ず來るべきものと極つてゐたのだから。其の幸福が今、遂に私の運命の星に送られて、正義と憐みの力で、銀の光をたよりに下つて來た。それをお前は破滅だといふ！　あゝ、哀むべきは血の冷い人々だ！——哀むべきは戀のない人々だ！……お前等には分るまいが、私の運命は今ちやうど、天の高潮に乘つてゐる、百の戀人、千の喜び、それが私一人の分け前になる！……あゝ私にはそれが分る！……私はその刹那に觸れてゐる、乾坤一擲の大勝負を試みる人々が、忽然として自分の地位を認めた時、彼等は人生の最高頂に立つてゐる、あらゆる物が彼等の下に集つて其の命を聽き、其の手に形づくられる、其の高潮の刹那に私が今觸れてゐる！……此の他の事は何でもいゝ、又其の後

に起る一切の事に何うでもいゝ！……心靈恍惚の或る刹那はあんまり高大で、それを感ずる人間が押し潰されて了ふ……

ヴェディオ　（麻の繃帶を持つてプリンチヴルレに近寄り）血がまだ流れて居ります、お顏を卷きませう。

プリンチヴルレ　然……それも已むを得なからう……併し御覽、お前の繃帶も私の眼を隱しはしない、（鏡を見込んで）あゝ、私は外科醫者の刀に僻易してゐる患者のやうだ、戀をするものが、やがて戀人を迎へようとして喜んでゐるのだとは見えない！　それからお前、ヴェディオ、かはいさうに、お前は何うなるだらう？

ヴェディオ　あなた樣のお出でなさる所へ私もついてまゐります……

プリンチヴルレ　いや、お前は私と別れなくちやならない……私も何所へ行くやら、何うなるやら、自分で分らない……お前はうまく逃げ了せい、誰れも追かけはすまい、けれども若し主人と一緒だつたら……おゝその函に金貨がある、お前にやるから持つて行け、私にはもう要のないものだ……貨車にすつかり用意が出來たか、家畜も集めてあるか？

ヴェディオ　殘らず天幕の前に居ります。

プリンチヴルレ　さうか、私が合圖をしたら、お前のすべき事だけして見れ、（遠くで發砲の音が一つ聞える）あれは何だ？

ヴェディオ　一發、前哨で射擊を致しました。

プリンチヴルレ　誰れが命じたのだ……過失に違ひない……萬一あの女を射擊したのぢやないか！　お前、さう言つたね……

ヴェディオ　いや。そんな事はない筈でございます。幾人も番人を出して置きましたから、あの方が見えましたら、すぐにこゝへ連れて參ります。

プリンチヴルレ　行つて見て來い。

（ヴェディオ、出て行く。暫くの間プリンチヴルレは一人である。ヴェディオ歸つて來て入口の帷帳を揭げ、つぶやくやう

に「あなたさま」といふ。彼れが引き下がるとモンナヴンナが長い外套に身を包んで現はれる。そして閾の所に立ち止まる。プリンチヴルレは身を震はせながらヴンナに近づく。）

ヴンナ　（押しつけた聲で）私は參りました。お差圖どほり……

プリンチヴルレ　あなたの手に血がついてゐる、傷を受けましたか？……

ヴンナ　丸が肩のところをかすりました……

プリンチヴルレ　何うして？　何時？……危い事でしたね――

ヴンナ　營所の近くへ參りました時。

プリンチヴルレ　誰れが撃ちましたか？……

ヴンナ　存じません、其の男は逃げて了ひました。

プリンチヴルレ　痛みますか……

ヴンナ　いゝえ。

プリンチヴルレ　傷を卷かせませうか

ヴンナ　いゝえ、何ともございません。

プリンチヴルレ　決心して來ましたか？……

ヴンナ　はい。

プリンチヴルレ　事情を申し上げませうか？

ヴナン　それには及びません。

プリンチヴルレ　少しも残念だと思ひませんか？……
ヴンナ　残念だと思はないで來るやうに、約束でもなさいましたか？
プリンチヴルレ　ギドー君は承知しましたか？
ヴンナ　はい。
プリンチヴルレ　いやだとお思ひなさるなら、さうおつしやい、まだ遲くはありませんよ……
ヴンナ　いゝえ。
プリンチヴルレ　でも、どうしてあなたは斯んな事をなさる？
ヴンナ　それは、ピザの人民が餓えて死ぬるのですもの、その上、明日になつたら見す〳〵一殘ぎに殺されて了ひます……
プリンチヴルレ　他に理由はありませんか？
ヴンナ　他にどんな譯がありませう？……
プリンチヴルレ　私の信ずるところでは、貞節な女として……
ヴンナ　はい。
プリンチヴルレ　夫を愛する女として……
ヴンナ　はい。
プリンチヴルレ　深くですか？
ヴンナ　はい。
プリンチヴルレ　あなたは、上に外套を着てゐらつしやるだけですか？

ヷンナ　えゝ。

プリンチヷルレ　天幕の前に澤山の車や家畜のゐたのを御覽なすつたか？

ヷンナ　えゝ。

プリンチヷルレ　あそこには、二百輛の貨車にトスカニアの小麥が一杯積んであります、あと二百輛の車には飼葉とシエンナの果實と葡萄酒が積んである、其他にまだドイツの火藥が三十臺と鉛が小さい車に十五臺ある、其のまはりにはアプリアの牛が六百頭と羊が千二百頭ゐます。それらがみんなピザの町に這入らうとして、あなたの命令を待つてゐる。出發させてお目にかけませうか？

ヷンナ　えゝ。

プリンチヷルレ　では、此の天幕の戸口へいらつしやい。（帷帳を掲げ命令をし、合圖をする。漠然として壯大な運動の起つた氣配の物音が聞える。無數の松明が點されてあちこちと動く。鞭の音　車の軋り、羊の鳴く聲、牛のうめく聲、ヷンナとプリンチヷルレは天幕の幽の所に立つて、暫らく見守つてゐる。巨大な輸送隊が星明りの夜に松明を振り照して出發する。）今宵はじめて、あなたのお蔭でピザの町は餓え死しなくなります、もう敗れる恐れはない。そして明日は何人も豫期しなかつた喜びと勝利の光榮に包まれるでせう……あなたは滿足しましたか？

ヷンナ　えゝ。

プリンチヷルレ　では、この天幕を閉めませう。そうして握手をさせてください。宵の氣候は未だ穩かですが、夜更けると寒くなります。あなたは身の周りに武器を隱してはゐないでせうね、毒藥を持つてはゐないでせうね？

ヷンナ　此處に外套の外、何もありません。御心配なら搜して御覽なさい……

プリンチヴルレ　心配するのは私のためじやありません、あなたのためです……

ヴンナ　私はピザの人民の命を、何よりも高くつもつてゐますから……

プリンチヴルレ　よろしい、あなたは立派な事をなすつた……さあ、こゝへおすはんなさい……荒くれ武士の長椅子です、硬くて粗末で、墓穴のやうに狹うて、あなたには不釣合です……こゝへ樂にゐらつしやい。此の虎の皮の上には、甞て婦人のしなやかな體が觸れた事がありません……此の柔かな毛皮を足にお敷きなさい……山猫の皮です、凱旋の一夜或るアフリカの帝王が私に呉れました……

（ヴンナ、外套にしつかり身を包んですはる。）

プリンチヴルレ　ランプ　光りがあなたの眼に射してゐます、側へよせませうか？

ヴンナ　構ひません……

プリンチヴルレ　（長椅子の下に膝まづき、ヴンナの手を取り）ジォ、ヴンナ！……（ヴンナ驚いて飛び立ち、じつとプリンチヴルレを見る）おゝ、ヴンナさん、ヴンナさん……私も斯うしてあなたの名を呼んでゐた事があつたが……今その名を呼ぶと私は震へます……久しい間私の胸に三重に祕められてゐた、それが圍ひを破つて出て來たのです……其の名が私の心です、私の持つてゐる凡てのものです……其の名の一句々々に私の命が這入つてゐる。それを口に出すと私の命が流れ出るかと思ふ……私には親しい名前でした、知つてゐる名前だと思ひました。何度かそつと繰り返して、しまひには恐しいとも思はなくなつて、毎日毎時それを口にしてゐました、譬へば長い間的もなく呼びかけてゐた、その女の面前で、たゞ一度でも言つて見たいと願ふ戀の言葉です、高大な愛の一言です……それを言ふためには、唇が自然に形をなして、望み通りの時が來ると、柔かに、優しく、謙遜に、そして深い大きなあこがれの心でそれを言ふ。女もそれを聞いたら、言葉

の中にある戀と懊惱を知つて呉れるでせう……それほど思つたものが、今日になつて見ると、影に過ぎない……同じものではなくなりました……恐れと悲みに傷はれて潰れてしまつた、其の言葉が私の唇から出ても自分で殆ど分らない。その中に籠つて置いたすべての意味と崇拜が、却つて私の力を壊さうとする、私の聲を枯らさうとする。

ヴンナ　誰れですか、あなたは？

プリンチヴルレ　私が分りませんか？……思ひ出して下さいないか？……あゝあれほどの大事を、時が拭ひ消して了ふ！……けれども、あの人を見たのに私一人に違ひない……恐いで忘られるのがいゝでせう……もう望みもしまい、悔いもしまい！……あゝ、私にあなたに取つては物の數でもない……哀むべき男だ、一生の目的であつたもの、ほんの一瞬間しみ〴〵と眺めてゐる、不幸な男だ、何の頼みもかけない、何を頼まうかさへ知らない、けれども、言ふ事はある、出來るならあなたがお行きなさる前に、聞かせて置きたい、其の男に取つてあなたがこれまで何れほどの思ひであつたか、此後も一生何れほどの思ひをするか……

ヴンナ　では、あなたは私を御存じ？　誰れでせう、あなたは？……

プリンチヴルレ　斯うして、あなたを見てゐる私が、思ひ出せませんか？　仙郷へ這入つたものが、生と喜びの源を見るやうに私はあなたを見ています……

ヴンナ　思ひ出せません……第一、信じられません……

プリンチヴルレ　さうです、あなたはお忘れなすつた……あゝ、思つて居た通り、疾くの昔に忘れておしまひなすつた！……初めて私がお目にかゝつたのはあなたが八つの時です、私は十二でした……

ヴンナ　何處で？

プリンチヴルレ　ヴェエニスで、六月の或日曜日に……私の父は年取つた飾屋でしたが、眞珠の頸輪をあなたのおつ母さんに持て行きました。おつ母さんはそれを好ましげに見てお出なさる、私は庭を歩いてゐました、すると池の傍に、あなたがいらつしやつた、ちやうど桃金孃の茂つた中でした……細い金の指環が水に落ちたといつて……あなたは緣で泣いていらつしやつた……私は池に飛び込みました……指環は大理石の水盤の上に輝いてゐた、それを取つて、あなたの指に差して上げました……私はも少しで溺れようとした……けれども、あなたは私に接吻して下すつた、嬉しさうでした……

ヴンナ　あれは金髪の美しい、ジアネルロといふ子供でした。あなたがジアネルロでせうか？

プリンチヴルレ　さうです。

ヴンナ　あなたが何うしてさう見えませう？……其上お顏は繃帶で隱れてゐます……たゞあなたの眼が見えますばかり…

プリンチヴルレ　（繃帶を動かして）傍へ寄せました、私といふことがわかりますか？

ヴンナ　えゝ、幾らか……さう思へます……あなたのお笑ひなさるのが、子供の時の面影を殘してゐます……まあ、あなたは手傷を受けていらしやる、血が流れてゐます……

プリンチヴルレ　あゝ、これ位、なんでもありません……たゞあなたに傷をつけては……

ヴンナ　繃帶を直して上げませう、曲つてゐます。（頰の周りに麻布を巻きつける）私は今度の戰爭でたび／＼手負を介抱してやりました……さう／＼、私おぼえてゐます……あのお庭をまた思ひ出しました、石榴の木や薔薇や月桂樹が澤山ありましたつけ、私たちは、よくあそこで遊びましたね、お午すぎ、太陽が熱い砂の上に照つてゐる頃……

プリンチヴルレ　みなで十二たび——私は數へてゐました……あの時した遊び事や、あなたのおつしやつ言葉は今でも一々言ふことが出來ます……

ヴンナ　それから、たしか或る日の事です、私はあなたを待つてゐました——あなたを思つてゐたのです、そしてあなたは眞面目な物靜かな性質で、私を小さい女王のやうに大事にして下すつた……けれども、あなたはそれつきり歸つて來て下さらなかつた……

プリンチヴルレ　父は私をアフリカへ連れて行きました——そこの大砂漠で私等親子は迷つて了つて……私はアラビヤ人の手に囚へられ、トルコ人の手に囚へられ、スペイン人の手に囚へられた——それが私の生涯でした。今一度私がヴェニスへ歸つた時は、あなたのお父さんは亡くなられ、あの庭も荒れ果てゝゐた——私は的もなくあなたを尋ねました……そしてとう／＼聞き出しました。あなたの美しさのお陰です、一度あなたを見たものは誰れでも永く忘れないからです……

ヴンナ　私が這入つて來たとき、あなたにすぐ分りましたか？

プリンチヴルレ　たとひ一萬人の女が此の天幕に這入つて來て、あなたと同じ顏をし同じ裝ひをして、同じやうに美しくても私はあなたを見分けます、一萬人の姉妹が親身に見分けられないほどよく似てゐても、私は立つてあなたの手を取つて「是れが其の人だ」と言つて見せます……不思議です不思議ぢやありませんか、愛する人の姿は、斯うして心の中に住み込むりを持つてゐる。私の心はあなたの姿が奧深く住んでゐて成長しました、變化しました……昨日のよりも今日のは違つてゐました、花が咲いて來た、美しさが增して來た、年がたつに從つてあなたの姿に飾りがつきました、ちやうど當前の樣な少年が、年を取るに從つて天から惠みを受けるやうに……そんなでありながら、私がさつきあなたを見た時、初めは自分の眼に欺されてゐるかと思ひました……記憶の中であれ程忠實にあなたの姿を守り立てゝゐた、その私の記憶も、まだ／＼貧弱でした、手ぬるいものでした、とても、是れほどの光彩をあなたに加へる勇氣はありませんでした、あの、忽然として目の前に閃き出た輝しさを。たとへは、一度薄明りのさす花園で一輪の花を見て、そして目くらやむ大日光の下

に千萬輪の花を一時に見るやうな心地がした……あなたが這入つていらつしやると、私は再びその忘れ難い眉が見ました、髪を見ました、眼を見ました、なつかしい顔に魂を見ました……けれども其の美しさだけは思ひも及ばない、日といふ日、月といふ月、幾年心に蓄へたあなたの美しさも——手ぬ　い私の記憶で育つたものに過ぎなかつた、事實に比べては數にも比較にもならなかつた……

ヷンナ　うね、あなたは、ちやうどあの年頃の戀をしていらつしやつた。けれど月日と遠い別れが、戀を一層美しいものにします……

プリンチヷルレ　人はよく一生に一度の戀をしたといひますが、まことはさうでないのが多い……自分等の無情や慾望を掩ふために、彼等は一つの戀に生まれたものゝ大悲哀を裝はうとする、その中に眞の一分の生活に喰ひ入つた、深い惱みの眞理を語らうとするものがあつて、、幸福な戀人等が自在に使つた言葉は。みんな力を失ひ、重みを失つてゐる。それを聞く女は、知らず〳〵其の哀れな、神聖な、時として痛ましい言葉を凡俗のつまらない戲れと聞いて了ふ……

ヷンナ　私はそんな事はしません。その戀の心は分ります、人間が命の始めからあこがれてゐる戀ですもの。それも年がたてば棄てゝ了ふ——私はまだ其の年にもならないけれど——年はすべてのものに終をつけて了ひます……まあそれはいゝとして、さあ、聞かせて下さい、あなたが二度めにヷェニスをお通りなすつて私の行方をお聞きになつて——それからどうなりました？　それ程深く慕つていらつしやつた女に逢はうともなさらなかつたのですか？……

プリンチヷルレ　ヷェニスで私は、あなたのおつ母さんが亡くなられた事や、身代のつぶれたこと、あなたがトスカニアの貴族と結婚しようとしていらつしやる事を聞きました、其の貴族はピザで一番富んでゐて、一番勢力のある人だといふ事も聞きました、あなたが其の女王として敬愛せられ祝福せられてるといふ事も聞きました……、私は家もなく國もない一冒險者

に過ぎなかつた――何を言ひ出す事がありましたらう？……運命は犧牲を求めてゐました、私はぐづ／＼しながら、愛の爲にそれを捧げました。あゝ何度私はこの町の城壁の周りをさまよひあるいたでせう、幾たび門の鐶に取りすがつたでせう、あなたに逢ひたさの餘り、我を忘れてあなたの折角の戀と幸福を妨げてはならないと、それが恐さに取りすがりました、私は劍に倚つて立つた、二度三度と戰爭に出た、雇はれの軍人として私の名は揚がりました……時の來るのを待ちながら、望みは無くなつてゐました。そしてとう／＼フィレンチェからピザへ派遣せられる日が來ました……

ヷンナ　何うして、さう男は戀をすると弱い臆病なものになるのでせう！……よく聞きわけて置いてください、私はあなたを戀してはゐません、是れまでだつて戀したことがあるか何うか分りません……けれども私は男が私と同じやうに戀して呉れると言ひながら、其の前に勇氣を出すことの出來ないのを見ると、この胸で戀の誠の魂が躍ります、叫ぶやうです……

プリンチヷルレ　私は勇氣がなかつたのぢやありません……行くには、あなたが考へていらつしやるよりも強い勇氣がいりました……併しもう遲かつたのです……

ヷンナ　あなたがヴェニスをお立ちなすつた時は、まだ遲くはありません。一生を蔽ふほどの戀をするものに、遲いといふことはない筈です……さうした戀は見すてゝ行くものぢやありません。來ないと知りながら望んでゐます。そして望みがなくなつてもまたもがいてゐます。私があなたのおつしやる程の戀をしたら、私は乾度……あゝ、何うしたかは、言へるものぢやない……でも是れだけはたしかです、運命の力でもさうたやすく私の幸福をもぎ取ることはさせません――運命に向つて「お退き、私がそこを通るのだ！」と言つてやります――邪魔になる石は其のまゝ私の都合のいゝ方へ轉がして見せます！

どんなに高い價を拂つても、私の愛する男なら、其の男に私の愛を教へてやります、そして男自身の口からそれを言はせて見せます、一度ならず、二度でも三度でも言はせて見せます……

プリンチヴルレ　（女の手を取らうとしながら）あなたはあの男を愛してゐないでせう？

ヴンナ　誰れを？

プリンチヴルレ　ギドーを。

ヴンナ　（手を引きこめながら）私の手を取つちやいけません、此の手はあなたに取らせられない。私といふものを明かにしなくちやなりません。ギドーが私と結婚しました時は、私は一人ぼつちで、貧乏でした。一人で貧しい女はすぐに世間の誹りに落ちて了ふ、中でも美しい女と手管や僞りを卑む女が取りわけさうなる……其の誹りをギドーは氣にかけないで、私に眞實を盡くしました、その眞實が私は嬉しかつた。私は幸福でした、人間の及ばない、ほんやりした、慾まゝの夢から醒めたものが感ずるやうな幸福を受けました。ですから私は、あなたにも聞いて頂きたい氣がします、誰も知らないやうな幸福を探して月日を費さずとも、人の世は樂しく過される。今日では、私はギドーを愛してゐます、あなたが自身の上に想像していらつしやる愛よりも、もつと尋常な愛です、少くとももつとしつかりした、靜な、信實な、たしかな愛です……それを運命が私に授けて呉れた、私は眼を開いてそれを受取つた、他にはもう何もいりません、若しそれを破すものがあつたら、私ぢやない……御覽なさい、あなたは……私を誤解なすつた私があなたの誤りとして申さうとしたのは、あなたのことでも私たちのことでもありません、私はたゞ愛の爲にいひました、第一の夜明から、心の上にさして來る微明りのやうな愛の爲です、ありはあつても、私のものでもあなたのものでもない愛の爲です。あなたは斯ういふ愛の取るべき道を取つていらつしやらなかつたから……

プリンチヴルレ　ヴンナさん、あなたは私を過酷にお捌きなさる、私といふよりも、むしろ私の戀を過酷にお捌きなさる、此の一刹那に比べては、どんな他所の戀も絶望に過ぎない、其の幸福な刹那を齎らす爲めに私の戀が何をしてどんなに苦んだか、あなたは少しも知つていらつしやらない……けれども、よし、其の戀は何もせず、何も企てなくとも、有ることは疑へない、私が其の犠牲です、私の生命はそれに捉へられてゐる、胸に其の戀を持つた私は、人間の喜びと榮譽の凡ての源を失ひました！……あゝ、私を信じて下さいヴンナさん、信じて下さらなくちやならない、私は何を求めるのでもありません、何を望むものでもありません！……あなたは今私の天稟の中にいらつしやる、私の心次第になる人だ……私がたゞ一言いへば、私の手を伸ばしさへすれば、世間の戀する人が求めるすべてのものを得られます……それに拘らず、私が言つた戀は他のものを求める、それはあなたには分つてゐませう、だから私は、此の上私を疑つて下さらないやうに願ひます……あなたの手を取つたのも、私を信じて下さるだらうと思つたからです、私は二度と其の手にさはりますまい目もつけますまい、併しヴンナさん、こゝでお別れしたらもう逢ひますまいから、少くとも、私の戀が何んなものであつたか知つて置いて下さい、到底出來ない事だときまつた時、始めて其の前で踏み止まつた戀でした！

ヴンナ　到底出來ない事だときまつた時にこそ疑つてもよくはありませんか？　疑つたからと言つて、私は人間以上の試しや、恐しい障害を通り越させて證據を求めようとは思ひません……ピザに一の話があります、或る婦人がカムパニーレの獅子の巣へ手袋を投げました、そして男の愛の證據にそれを取つて來て呉れといひました、男は、革の鞭一つで這入つて行つて獅子を追ひのけ、手袋を取つて來て、膝まづいて女に捧げました、そして一言も言はないで永久に去つて了ひました。……まことの戀の證據はそんなものぢやありません。私はそんな證據が欲いとは思ひません。私はたゞ信じたい、たゞそれだけの願ひです……それでゐて、私は疑はうとしてゐます、あなたの幸福のために、それから私の幸福のために

も……斯ういふ高大な愛には、何かしら神聖なものがあります、どれ程冷い女でも動かされずにはゐません……ですから私は、あなたの僞すつた事を穿鑿します、そして、其中に不運な果敢ない情欲の跡の無いのを見たら、私は却つて嬉しいでせう……たゞ斯うして、最後にあなたが僞すつた事の外は、何にもなかつたと信じたい。あなたは私を一時のあひだ天幕の下に連れて來たいばかりに、前後も顧みないで、あなたの未來をお壞しなすつた、あなたの名譽をお壞しなすつた、あなたが此の世に持つていらつしやる、すべてのものをお壞しなすつた、ですから私は、屹度あなたの愛が、おつしやる通りに違ひないと信じます……

プリンチヷルレ　私が最後にやつた此の事だけは、却つて何の證據にもなりません……

ヷンナ　何うして？……

プリンチヷルレ　本當の事を知つて置いて下さい。あなたをこゝへ來させて、ピザをあなたの名で救ふために、私に何も犠牲にしてはゐません。

ヷンナ　私分かりません……あなたは國にお叛きなすつたぢやありませんか、これまでの功勞を棄てゝお了ひなすつたぢやありませんか、未來を亡ぼしてお了ひなすつたぢやありませんか？　あなたの前に見えてゐるのは何でせう？　追放でせうか？　死罪でせうか？

プリンチヷルレ　第一、私は國といふものを持つてゐません。若し國があつたら、私の戀は如何に大くとも其爲に國に叛くはしなかつたでせう……所が、私は、一雇はれの軍人たるに過ぎません、向ふが信義を守れば私も守るし、向ふが裏切すれば私も謀叛人になる……私はフィレンチェの辨務官等が爲めに寃罪を蒙つて。あの商人どもの共和政府から調べも受けずに罰せられました、私はもう亡びたのだと覺悟しました、で、今夜の此の事は私の破滅を早めるよりも、却つて出來るこ

となら私を救ふ道になるかも知れません……

ヷンナ　私の爲に犧牲にして下すつたのは、そんなに僅かの事でせうか?

プリンチヷルレ　全く何もありません……う言ふ外はないのです。僞りで買つたあなたの恵みは、私に何の喜びにもならない……

ヷンナ　あゝ、あなた、あなた、それが愛よりもずつと貴いのです、何んな愛の證據よりもずつと嬉しいのです……此の上もう、あなたは、私の手を當てもなくお求めなさるに及ばない、さあ、此の手を……

プリンチヷルレ　私はむしろ愛で此の手が取りたい!……が、そんな事は何うでもいゝ!……もう、私のものです、ヷンナさん、斯うして私の兩手の間に摑んでゐます、私は其の香に醉つてゐます、其の命に生きてゐます、私と一體になつてゐます……暫くこの美しい幻に恍惚としてゐます……あゝ、此のなつかしい手! 私が開きも閉ぢもする、密かな不思議な愛の言葉で、此の手が私の間に答へる。私は此の手に接吻する、あなたはそれを其のまゝにしてゐらつしやる……では、あなたを此の苦しい地位におとした私の罪を許して下さるか?……

ヷンナ　私だつて、あなたの地位にゐたら、同じ事をしたでせう、結果はどうであらうと……

プリンチヷルレ　あなたは、此の天幕へ來るのを承知なすつた時、私が誰れだか御存じでしたか?……

ヷンナ　誰も知つてゐませんでした。變な噂があつて……プリンチヷルレは物凄い老人だといふものもあるし、非常に美しい若い王子だといふものもありました……

プリンチヷルレ　併し、ギドー君の父上は私と會ひましたが、何も言ひませんでしたか?……

ヷンナ　いゝえ。

プリンチヴルレ　問ひもなさらなかつた？……

ヴンナ　えゝ。

プリンチヴルレ　そして、あなたは氣も遠くならなかつたのですか、夜一人でこんな見ず知らずの野蠻人の營所へ來て？……

ヴンナ　犧牲は覺悟してゐました……

プリンチヴルレ　それから、私を見ても？

ヴンナ　最初は繃帶でお顏が見えませんでした……

プリンチヴルレ　えゝ、けれどもヴンナさん、後に繃帶を上げた時に？

ヴンナ　其の時には變りました、私にもうあなたが分つてゐました……それで、あなたは、私がこの天幕に這入つて來るのを御覽なすつて――どんな事を其の時思つてゐらしやつて？　何をしようと考へてゐらつしやつて？……

プリンチヴルレ　あゝ、何と言ひませう……私はもうだめだと覺悟してゐました、一切を私と一緒に引き倒してやらうといふ、狂妄な願を持つてゐました……そして此の私の戀のために、あなたを憎いと思つてゐました！　今考へると、自分で不思議なやうです……あなたの言葉でない言葉が、あなたの擧動でない擧動が、たゞ一つあれば、私の體內の野獸性は切り放たれて、私の憎みは煽ぎ立てられたでせう……けれども、一目あなたを見て、それが出來ない事だと分りました……

ヴンナ　私にもそれが分りました、そして恐れがすつかり無くなりました、私たちは一言も言はない內に、お互に解し合つたのです……不思議ぢやありませんか……私があなたのやうな戀をしたら、屹度あなたと同じ事をしたでせう……じつとしてあなたの言葉を聞いてゐる刹那には、私が話してゐるやうな氣がする、あなたの言葉が私の言葉になつて、私の話すのをあなたが聞いてゐらつしやるやうな氣がする……

プリンチヴルレ　私もです、ヴンナさん、私は一時に自分等と、他のすべてのものとを隔てる壁が透明になつたやうに感じました。さながら兩手を、滾滾として流れる水に突き入れて、そして引き上げると光明に燦いてゐる、縮みと皺に照りはえてゐる……人間といふものが一變したかと思はれました　是れまで考へてゐた事は間違ひたと思はれました……何よりも、私は私自身が一變したと感じました、とう／＼永い囚れから脫出しました。門は開きかゝつてゐる、無數の花と青葉が横木に絡んでゐる、雫は遥かの地平線に解けて行く、朝の爽かな空氣が私の魂に這入つて、私の戀に息をします……

ヴンナ　私も變りました。私は、お目にかゝつた最初からあんなに口を開いた自分が不思議でならない……私は不斷默つてゐます……これまで、父のマルコーの他はついぞ誰れともこれほど話した事はありません。父と話すのさへこんなではありません……あの人は、いつも數限りない夢に包まれてゐてめつたに私とも口をきかない……其の他の人々はみんな眼の中に何か一つの物かあつて、私の心を凍らせて了ふ。何うしてその人々を愛すると言へませう、その人々の心を　りたい氣が起りませう。……あなたの眼は私を押しのけない、私を嚇さない……一目見て私はあなたを見知りました、前に何處で逢つたかは分らなかつたけれど……

プリンチヴルレ　ヴンナさん、あなたは、若し不運の星が私をこんなに遅くあなたに引き合せなかつたら、私を愛して下すつたでせうか？……

ヴンナ　其の時愛したでせ　と言ふのも、今愛しますといふのも同じ事になりませう、ねえあなた、私にそれは出來ない事でせう？……でも、私たちは斯うして離れ小島に取り殘された心で語り合つてゐます……私が世界に一人ぼつちだつたら、此の上何も言ふ事は無いでせう……けれど斯うして二人で過去の想ひに笑みを交はしてゐれば、人の苦みも忘れてゐますが……私がピザを出た時のギドーの嘆きを思ふと、あの絕望の眼と衰へた顏と——おゝもう、待つてゐられない

……夜明に聞えないでせう、早く知りたい！……足音が聞えます、誰れか天幕の傍を通つてゐます……人民が帷帳の後で私語いてゐる……お聞きなさい、お聞きなさい！　何でせう？

（私語の聲と急な足音が天幕のそとに聞える。すると外からヴェディオの聲がする）

ヴェディオ　（あちらで）あなた様！

プリンチヴルレ　ヴェディオだ、這入れ！　それで？

ヴェディオ　（天幕の入口で）早くなさいませ、早くなさいませ、お逃けなさらなくてはいけません！　一瞬間の猶豫もなりません！　フィレンチェの次席辨務官マラドーラ殿が……

プリンチヴルレ　あの男はビビエナにゐたが……

ヴェディオ　歸つて參りました……六百のフィレンチェ兵を引きつれて居ります……通るところを見ました、陣營は大混雑を來たして居ります……マラドーラ殿が命令を持つて來られたのでございます……あなた様を叛逆人だと宣言いたしました……今、ツリヴルチオを探して居ります、ですから、若しあなた様がこゝにおゐでの内に探し出しますと……

プリンチヴルレ　さあ、ヴンナさん。

ヴンナ　何所へ行くのですか？

プリンチヴルレ　ヴェディオに信用の出來る兵を二人つけて、ピザまで送らせます……

ヴンナ　そして、あなたは、どうなさるの？

プリンチヴルレ　分りませぬが、そんな事は構はない、世界は廣いから――隠れ家を見つけませう。

ヴェディオ　おゝ、あなた様、氣をおつけ下さい！　市街の周圍の田舎はもうすつかり圍まれました。トスカニアは間諜で一

杯でございます……

ヴンナ　ピザへいらつしやい。

プリンチヴルレ　あなたと？……

ヴンナ　えゝ。

プリンチヴルレ　いけない……

ヴンナ　ほんの幾日か……行衛を晴ますために……

プリンチヴルレ　ギドー君が何うするでせう？

ヴンナ　ギドーだつて、賓客に對する禮は守るでせう……

プリンチヴルレ　あなたがお話しなすつたら、それを信じて呉れるでせうか？……

ヴンナ　信じます……若し私を信じて呉れなかつたら……けれども信ずるでせう……信じなくちやなりません。さあ……

プリンチヴルレ　いゝや。

ヴンナ　なぜ？——何を恐れてゐらつしやる？

プリンチヴルレ　あなたの爲めに恐れます……

ヴンナ　私のために？　私にとつては危險は同じ事です、一人で歸らうとあなたを連れて歸らうと。恐れなくちやならないのは、あなたの爲めです、ピザをお救ひなすつたあなたの爲めです。斯うなれば、ピザがあなたを救ふのは當然ぢやありませんか……私の保護の下にいらつしやい、私があなたを引き受けます

プリンチヴルレ　さうして下さい　一緒に行きませう……

ヴンナ　是に越した愛の證據はありません……さあ、後れないやうに……天幕を明け放しませう。

（プリンチヴルレ入口の方へ行つて、帷帳を一杯に開く。ヴンナつゞく。人聲と武器の打ち合ふ音とが廣漠なつぶやきのやうに聞える中に際立つて聞えるのは遠くの鐘の音である。それが鋭く夜の沈靜を破つて喜ばしげに鳴り響く。遙か向ふの地平線にピザが燦爛たる燈火を連ねて見える。祝賀の大篝火が幾つも暗い空に巨大な火影を投げてゐる。）

プリンチヴルレ　御覽なさい、ヴンナさん、御覽なさい！

ヴンナ　何です、あなた？……あゝ、分りました！……みんなピザの人たちが焚く喜びの火です、あなたが爲すつた事を輝かさうと思つて……城壁が光つてゐます、砦が輝いてゐます、カムパニーレの塔が喜びの松明のやうに闇を照してゐます、御覽なさい、あの照り輝いてゐる澤山の塔が星とさゝやいて！……町までが空に反射してゐます。宵に踏んで來た道がはつきり見えるやうです！……あそこの廣場には火の塔がある、カムポサントーの墓地は、影の島になつてゐる……思つても御覽なさい、ピザの命が、ちうど今最後の息を引きかけて、だしぬけによみ還つたのです、それが塔から塔へ飛び移り、四方の空を駈け廻つて、城壁に溢れ國中に溢れて來ます。そして私たちに歸れといふ合圖をしてゐます……お聞きなさい、お聞きなさい！……あの叫び聲を、あの嬉しさうな聲を、あの騒ぎを、大波がピザの町に押し寄せたやうです！……鐘の音が聞えます、私の婚禮の夜に聞いたやうな鐘の音が……あゝ、私は幸福です、幸福です、世の中で一番幸福なものは私です、それもあなたのお蔭です、本當に私を愛して下さる、あなたのお蔭です！……さあ、あなた、あなた！（頬に接吻する）それが、私の　あなたに上げられるたつた一つの接吻です……

プリンチヴルレ　おゝ、あなた、ヴンナさん、戀に、是れより美しい接吻が望まれませうか！……でも御覽なさい、あなたは震へてゐらつしやる、膝を縮めてゐらつしやる！……さあ、私にお縋りなさい、腕を私におかけなさい……

ヴァンナ　何でもありません、息切れがしたのです――無理な力を出したからです。手を貸して下さい、連れて行つて下さい！　私の幸福な第一の歩みを妨けないやうに……あゝ、何といふ快さでせう、今宵の曉の覺めぎはは！……さ、早く！　急ぎませう、時刻が來ます。ピザに喜びの色の消えない前に……

（二人一緒に出て行く、プリンチヴァルレはヴァンナを支へて。）

第三幕

（ギドー・コロンナの大廣間、高い幾つかの窓、廊、大理石の圓柱等、左手、背面に露臺がある。外からそれに上るには大きな二重の階段がある。露臺の欄干の上に花を一杯にさした大きな瓶が幾つか飾つてゐる。室の中央、圓柱の間に廣やかな大理石の段があつて露臺に通ずる。露臺からは市街の大部分を一目に見下すことが出來る。マルコー、ギドー、ボルソー、トレルロー入り來る。）

ギドー　私はあなたにもヴンナにも、あらゆる人に一歩を讓つてゐました。併し今度こそ私の番になるのが至當です。私は默してゐた、息を殺して隱れてゐた――臆病者が自分の家を賊に荒らさせながら隱れてゐたやうなものです……でも、私の屈辱で、名譽は全うして來ました……あなたは私を商人になすつた、小商人になすつた、惡賢い取引人になすつた……が、もう夜明が來ました……私は自分の立場を動かなかつた……約束が出來て、私はそれを承認する外はなかつた、あなた方の食物を私は買はざるを得なかつた……今夜の此の貴い夜は買ひ手の言ふまゝでした……あゝ、この小麥や、羊や、牛のためにあれ程の代價を拂つて、誰れが高くなかつたといふ……それで、あなた方は腹一杯に食つてお了ひなすつた、私はその償を拂つた……これで私は自由になつた、今一度主人になつた、私の恥辱を投げ棄てる！……

マルコー　ギドーや、お前の爲ようといふのが何んな事だか私には分らない、それから誰れも斯ういふ悲みに立ち入る權利はありません……言葉でば慰められない、其の本になつたお前の周圍の幸福が却つてそれを烈しく鋭くするといふ事も知つてゐる……ピザは救はれた。併し、其の救ひがお前には隨分高いものになつてゐるのを氣の毒だと思ひます、だから、

それだけの負擔を我慢させられたお前に對しては、私どもが頭を下げます……が、やつぱり昨日の事を思へば、私はあの通りにする外はない、同じ犧牲を選り出して、同じ不正を勸める。人といふものは、正義をしようとすれば……哀いかな生涯に幾つかの樣々な不正の間を辿らなくてはならない……何と言つてよいやら、たゞ一度は視んでゐた私のこの聲が、せめて是れ限りお前の胸に通ずるなら、お願ひだから、ギドーや、怒りと悲みの第一の言葉に盲從しないやうに……少くとも危險な時刻を通り越して、取り返しのつかない言葉を口にする恐れのなくなるまで待つて吳れ……ヴンナは間もなく歸るだらうが、今日あれを所置することは止めて吳れ、取り返しのつかない事をして吳れるな……すべて過度の悲みに支配せられて言つたり爲たりする事に、自然と殘忍なまでに取り返しのつかないものだ！……ヴンナは喜んで、同時に絕望して歸るだらう……叱つてはいけない。日數がたつてから話すのと同じ心持で話すだけの忍耐に熟ささうだつたら、あれに逢ふ事を延ばして吳れ……已みがたい自然の力に弄ばれて居る哀れな我々に取つてはな、過ぎ行く年月の中に、十分な善も正義も知慧も籠つてゐる。不幸に眼の曇つたとき我々が求めなくてはならない貴い言葉は、たゞ十分に理解し容赦して愛の還つて來た時に發する言葉のみだ

ギドー　すみましたか？　そこで今はもう文句に甘味をつけてゐる時でありません、今日そんなことに欺されるものは一人もゐない……あなたに是れ限りと思つて、言ふべき事を言はせたのは、あなたの知慧が何を代りにして、私の見事に壞れた一生を償はうとなさるか、知りたかつたからです――御覽なさい、私が貰ふものは何です！　待つてをれ、忍耐しろ、受けてやれ、忘れてやれ、許せ、泣け！　……ふむ、いけません！　それでは滿足されない！……私はむしろ聰明であらたくない、恥辱が遁れたい！　それは言葉では出來ません……私のつもりは、極めて簡單です――私のやらうとする事はつい四五年前ならあなたが私にお奬めなすつたに違ひない　ヴンナを私から奪つた男がある。ヴンナはもう私のものでな

いと共に、其の男は其のまゝでゐる。さう思つて下さい。私は動詞や形容詞の規則と違つた規則に導かれてゐる人間です。私の從つて行く大法則は、生きてゐるものが誰れでも頭を下げざるを得ない法則です……ピザは今や食物を得ました。武器を得ました。食ふことが出來る、戰ふことが出來る、さうです、私は私の得べきものを求めます。今日から以後、ピザの兵卒は私のものです、少くとも、其の最上の部分は――私が自身で見拔いて、自身で金を出して扶助してやつたものです。私のピザに對する義務は果しました――こんどは私が自分のものを要求します。私の番として、要求する權利を持つてゐます、それが果されない中は、此等の兵卒は返しません……其の他は、ヴンナは――許してやります、或はプリンチヴルレを亡ぼした後に許してやります…ヴンナは欺されたのです。惑はされたのです。けれども少くともあれが爲た事には義に勇む心がある……あれの慈悲心や寛かな魂が最も惡く利用せられたのだ……それもいゝ……ヴンナの此の所業を忘れることは不可能だらうが、少くとも、遙かの過去に薄れて了つて。愛もそれを尋ねられないやうにはなるだらう……たゞあちらに一人、私が見るさへ恥と戰慄を禁じない奴が殘つてゐる……又こゝに一人、偉大な高尚な幸福の案內者であり維持者であるのを一生の天職としてゐながら、其の敵となり禍となつた人がゐる、そのため今に皆の前に恐しい事が起るだらう、恐しいけれども正い事だ……一時世の中が轉倒して子が父を捉へて裁判をする、斥ける、呪ふ、卑み、憎んで押しのける……

マルコー　私は呪つて吳れ、併しヴンナは許して吳れ……萬一あれほどの人命を救つたヴンナの義勇な行に許しがたい過があつたとすれば、それは私のせいだが、義勇はヴンナの功だ……私の助言するのは私にとつて容易な事だつた。少しも犧牲には與らないのだからな。で今日は其の爲め私が此の世で大事にしてゐたものをみんな剝ぎ取られたが、それでも、私は尙一層よい助言だつたと思ひます……私はお前の捌きを爭ふ權利は持つてゐない、私が若かつたら、お前と同じ事をし

たらう……ギドーや、私は行きますよ、もう二度と私の顔を見せまい、お前が私を見るのを嫌つてゐることも、よく知つてゐます、私がまたお前を見に來る事はあつても、お前には氣のつかないやうにする……で、斯うして出て行く以上、私は、とてもお前をさういふ地位に陷れた罪の赦されるまで生てゐる望はない——私の過去に照して見ても、赦すといふ事は人生の盛りに立つてゐる間は急に出來ないものだから——斯うして出た以上、せめてお前の憎みと憤りと胸を剳るやうな記憶とをみんな私が持ち去つたと信じさせて與れ、そして、今こゝへ來るヴンナに對しては、何も殘つてゐないと思はせて與れ……此の外には、たゞ一つの願がある……是れを最後にヴンナがお前の腕に寄りかゝるのを見せてくれ……それで私は何にも言はず、何の不平もなく行きませう……人間の愁ひといふものは、一番年を取つたものが、一番多く荷つて行くがいゝ、其の重荷のすべり落ちる前に、もう幾足も殘つてゐないのだから……

（マルコーの終りの言葉の切れぬうち、もう漠然たる底強い呟きが外部から聞える。次の沈默のあひだ、此の騷音が段々近づくと共に段々はつきりとして増して來る。最初に何かを待ち設けるやうな動搖があつて、それから更に遠く群衆のあちこちと驅け廻りながら叫ぶ聲がする。間もなく漠然たる叫聲が形を成して、諸方から段々明瞭に、何百度となく繰り返へされる「ヴンナ、ヴンナ、ピザのモンナ●ヴンナ。モンナ●ヴンナ萬歲、ヴンナ、ヴンナ、ヴンナー」といふ聲。）

マルコー　（露臺へ通ずる廊に馳せ出でゝ）ヴンナだ！……歸つて來た！……あそこにゐる！　群集が喝采してゐる、喝采してゐる！　聞いて御覽、聞いて御覽！

（ボルソーとトレルロー、其後を追ふて露臺へ行く。ギドーは一人殘つて、柱によりかゝり、じつと前を見たまゝでゐる。此の間始終外部からの人聲が高く高くなつて、急速に近づいて來る。）

マルコー　（露臺上で）あゝ、御覽！　あの廣場を、あの町を、あの窓もあの木もみんな群衆がふつてゐる手や腕で眞つ黑に

見える！　屋根も、瓦も、木の葉もみんな人間に變つたやうだ……でも、ヴンナは何所にゐる？……見えるのは、たゞ雲のやうなものが閉ぢたり開いたりしてゐるばかりだ。ボルソーや、衰れた此の眼がな、私を惑はせて、私の愛に裏切りをする……老年と涙で見えなくする……あんなに待ちうけてゐた一人の人を見ることが出來ない……あれは何處にゐるか、あれは何處にゐるか？　何う行けばあれに逢へるか？……

ボルソー　（マルコーを引きとめながら）いや下へお出でなさいますな、人民どもが熱狂して居ります。全く統御を失つて居ります、興奮して逆上して居ります、婦人は卒倒いたしますし、小供は踏み倒されて了ひます！……第一、無益でございます、こちらへお出でになりますから、あそこへ見えました！……御覽なさい頭をお上げになりました！……私たちを御覽になりました……急いでこちらへお出でになります！　あゝ、見上げてお笑ひになりました！……

マルコー　お前さんには見えても、私には見えない！……此の死にかゝつた私の眼には何も見分けられない！……今はじめて、私は老年といふものを呪ふよ、是れまでお蔭で隨分色々の事を學んだが、今となつて、此の一つのものを私に見せない！……併しお前には見えるのだから、何んな樣子だか知らせて呉れ？……あれの顏が見えるかい！

ボルソー　意氣揚々として歸つていらつしやいます……人民の上に照り輝いてゐるやうでございます……

トレルロー　だが、お傍に一緒にあるいてる男は誰れだらう？

ボルソー　分らないね……ついぞ見た事がない、顏を隱してゐる……

マルコー　それ、みんなが大聲を揚げてゐるではないか……御殿中が震へるやうだ、瓶にさした花が、階段の上に落ちかゝる……敷石までが脚下から高まつて來て、此の大歡喜の中に私等を掃き去らうとしてゐる……あゝ私にも見えて來た……みんな門の近くへ押しよせてゐる！　群衆が二つに分れた……

ボルソー　はい、ヷンナ樣の前にでございます、あの方の爲めに道を明けて居ります、勝利の道でございます、愛の道でございます……道に花を投げて居ります、それから棕櫚の葉も、寶玉も……母親達は、子供を差し出してあの方にさはつて貰つて居ります。男どもは、お踏みになつた石に接吻しようとして屈んでゐます……お氣をつけなさいませ……群衆が近よりすぎました　みんな嬉さで氣狂になつて居ります……あれ等が此の階段まで來ましたら、私どもは、けし飛はされて了ひませう……あゝよかつた番兵が一方から突進してまゐりました、入口を閉めるのでございます……間に合ふなら人民をしめ出して、門を閉ぢるやうに命令いたしませう……

マルコー　いや、いや！こゝにも歡びの花を咲き盛らすがいゝ、人民の胸に咲き誇つてゐるやうに！　あれ等の廣大な愛が物を言つてゐるのだ――思ふ存分にさせるがいゝ！　あれ等も隨分苦んだ！……救ひの來た今日、關門を設けてあれ等をせきとめてはならない！　あゝ、氣の毒な勇敢な人民たちよ、私も喜びに醉うてゐる、私も君方と一緒に聲を揚げますぞ！……あゝ、ヷンナ、お前、ヷンナ！　お前か、階段の上に見えるのは！……（驅け出してヷンナに出逢はうとするのを、ボルソーとトレルローとが引きとめる）お出で！　ヷンナお出で！　皆で私を引きとめてゐる！　皆此の壯大な喜びに驚かされたのだ！　さあ、ヷンナ、さあ！　昔のジュディスよりも美しい、リュークリースよりも潔い！……お出で！……こゝへ、花の咲いてゐる中へ！（大理石の瓶の所へ走りより、花を掴んで階段の縁に投げる）私も花を持つてゐるよ、人生を祝福するために！　私も百合と月桂樹と薔薇の花を以て榮光の冠を飾りますよ！

（喧噪の聲一段と激しくなる。ヷンナはプリンチヷルレと一緒に階段の頂きに現はれ、マルコーの兩腕に身を投げかける。群衆が階段、廊、露臺に侵入する、併しヷンナ、プリンチヷルレ、マルコー、ボルソー、トレルロー等の一團からちよつと離れた所に留まつてゐる。）

ヷンナ　お父さま、私は幸福です……

マルコー　（ヷンナをしつかりと抱きながら）私もだよ、ヷンナや、今一度お前を見ることが出來たな！……此の涙の中からお前を見て置かう……天もお前の歸るのを歡呼してゐる、其の天のかなたから降りて來たよりも、もつとお前の身は光つてゐる！……如何に恐しい敵も、お前の眼から其の光明を奪ふことは出來なかつた、お前の唇からたゞ一つの笑みを奪ふことも出來なかつた！……

ヷンナ　お父さま、聞いて下さい……けれど、ギドーはどこに居ませう？……一番に聞いて貰ふのはあの人でなくては――聞いて安心して貰ふのは。

マルコー　ヷンナや、お前、ギドーはそこにゐるよ……お出で、……あれが私を遠ざけたのは、もつともな事であらうが、お前は赦される、お前の光榮ある罪は赦される。どうか私は、お前がギドーの腕に抱き取られるのを見たいと思ふ、それがお前の愛を目撃する最後にならうから……

（ギドー、ヷンナの方へ進みよる。ヷンナは何か言はうとし――ギドーの腕に身を投げかけやうとする――併しギドーはそつけない擧動で、ヷンナを止めて、突き放す。そして周圍を取り卷いゐてる人々に向つて。）

ギドー　（鋭い命令的な聲で）行け、みんな！……

ヷンナ　いえ、いえ、待たせて置いて下さい！……あなた、私はあなたにも言ふし、あの人だちに言はなくちやなりません……あなた、よく聞いて下さい！

ギドー　（ヷンナを止め、後の方へ押しやつて、段々怒りの增した聲を張り上げ）私の近くへ來るな、私の體にさはるな？（群衆の方へ進みよる、群衆は室の中まで侵入して來たが、ギドーを見て後へ下がる）私の言葉が聞えないか？　行けと言ふ

に！出て貰はう！　貴樣等の家では貴樣等が主人だらうが、こゝは私の支配だ！　ボルソー、トレルロー、番兵を呼べ！　あゝ、分かつたよ！　貴樣等は食物を得たから、此のおもしろい觀せもので眼を娛ませうといふのだな……ならない、ならない、貴樣等には食物もある、酒もある、そして其の代はみんな私が拂つたのだ、それで澤山ぢやないか？　行けといふに！（群衆無言のまゝ動搖し、そして徐々に散つて行く）一人もぐづ／＼してゐる事はならないぞ！（父の腕を烈しく捉へて）あなたもです！　誰れよりもあなたがです！　罪はあなたにあるのだから、あなたが眞つ先にです？　私の譯はあなたに見せられない！　私は一人でゐたい、知るべき事を知るために、墓場よりも寂しくしてゐたい！（身を動かさないプリチヴルレを見て）それから、君は？……誰れだ、そこに顏を包んだまゝ石像のやうに立つてゐるのは？……死の塊か恥の塊か？　行けと言つたのが聞えなかつたか？（番兵の持つてゐた戟を引つ摑んで）この戟で追ひ出さうか？……劍に手をかけたね？……私にも劍はある、併し是れは別に使ふことがある――……一人の男に對して使ふのだ、たゞ一人の男に對して……君が顏を隱してゐる所は何だ？……私は假面舞踏をする氣はないよ……返事をしないね……誰れだと聞いてゐるぢやないか？……待てよ――

（近づいて將に繃帶を剝がうとする。ヴンナ仲に走り入つて、ギドーを止める。）

ヴンナ　さはつちやいけません！……

ギドー　（驚愕して）ヴンナ、何だと、ヴンナ？　何うしてだしぬけにそんな力が出たか？

ヴンナ　此の人は私を助けた人です……

ギドー　はゝ！此の男がお前を助けた……もう役に立たなくなつて……大した事だ、全く……むしろ……

ヴンナ　（烈しく）だけど聞いて下さい、あなたお願ですから！一言、たゞ一……！――此の人が私を助けました、衞はつて

呉れました、尊敬して呉れました？……私が保護して玆まで連れて來たのです……保護すると私か誓つて置きました、あなたの代りにも誓つて置きました、二人で誓つて置いたのです！……あなたは今怒つてゐらつしやるが、私の言ふ事を聞いて下さい、よく聞いてゐて下さい！

ギドー　誰れだ、此の男は？

ヷンナ　プリンチヷルレ……

ギドー　誰れだと？……何だと？……其の男があれか？其の男がプリンチヷルレか！

ヷンナ　さうです、さうです！　あなたの賓客です！　此の方が自身であなたの手に身を委ねたのです！　私を救つたのは此の方ですよ、あなた……

ギドー　（暫く愕然としてゐた後、段々意氣が揚り激烈になつて來て、ヷンナには止められなくなる）あゝ、さうであつたか、ヷンナ！……あゝ、まるで天の奥底からしたゝる露のやうに、私の魂に浸みて來た！　……あゝ、ヷンナ、ヷンナ！……さうだお前の言ふ通りだ。當然の事だ、さうなくてはならなかつたのだ！　あゝ、お前の戰略が分つた！さうだ、すつかり分つた！併し今まで私には分らなかつた、氣がつかなかつた！　……敵を殺す女は多かつたらう、ジュディスがホロフェルニスを殺したやうに！……けれどもプリンチヷルレの罪はホロフェルニスよりも大いから、從つて大な復讐がいる！……其のために、お前は此の男をこゝへ連れて來たのだ。生贄になりかゝつた我々の眞中へ、此の男を連れて來たのだ、生贄が今度は殺し手になる！……あゝ、美事な勝利だ！……あいつ、おづおづとすなほにお前について來た。お前の奥へた接吻が、憎みの接吻であつた事に氣がつかなかつた！……こゝまでやつて來て、係蹄にかゝつた！……さうだ、お前のやり口は當然だ！　あの天幕の中で、恐しい罪惡のあと、あいつ一人を斬り倒して了ふ――それでは滿足が出來ないのだ……

あいつに……逢ふ事がなければ、疑ひはいつまでも殘つたかも知れない……此の忌はしい條約の事は、みんな知つてゐるのだから、斯ういふ惡巧に對して、どれくらゐの報があるか、世間へ知らせて置く必要がある！……でもお前は、どうして是れを爲とげたか！……昔から是れほどのことを爲果せた女は……あゝ、お前みんなに言つてお聞かせ！（露臺の方へ走つて行き聲を限りに叫ぶ）プリンチヴルレだ！プリンチヴルレだ！　敵がこゝにゐるぞ！　こゝへ捕へて來たぞ！

ヷンナ　（ギドーに縋りつき引き戻さうとしながら）　いけない、いけない！　聞いて下さい！　聞いて下さい、あなた、お願ひです！　あなた、あなた、さうぢやないのです！

ギドー　（振りはなして尚一層高く叫びながら）　構はないでお居で、今に分る！　みんなにすつかり知さなくてはいけない！　（群衆の方へ叫ぶ）　みんなやつて來い！　聞かしてやる、聞かさなくちやならない！……それから、あなたもお父さん！　そんな柱の後に蹲つて、神に祈つてゝもお出でなさるか、あなたのために生じた害惡を償つて、私の幸福を恢復するやうに、神の出現でも祈つてお出でなさるか！　戻つて來い！　めでたい事だ！　不思議な事が起つたのだ！　石にまで此の事は聞かせてやりたい！私はもうこそ／＼と隅へ寄つてあるく必要もなくなつた――そんな事は過ぎ去つて了つた――是れから私は、何人よりも純潔に、何人よりも富み榮えて行く！　あゝ今こそお前等は、私のヷンナを喝采して吳れ！　私も一緖になつて喝采する、お前等みんなよりも高い聲で喝采する！（人民が露臺の方へ急ぎ行くのを引きするやうにして廣間に入れる）今度こそ、お前等に見物させてやる！　つまりそれが正義を示す道だから！……あゝ私にも分つてはゐたが、併し斯う容易く結果があらはれやうとは信じなかつた！……敵を尋ねて、町に、森に、山に、私の生涯を費す間に、幾年となく經過しなくてはならないと思つてゐた！　……所が、御覽、敵は忽然として私の前に現はれて來たこゝに、此の部屋に、あの段の上に、我々の眼の前に！　驚くべき奇蹟ぢやないか！　……とにかく我々は饗應しなくて

はならない……是れを僞おほせたのはヷンナだ！……だから、ヷンナに聞かなくてはならない！（マルコーの腕を捉へて）あなた、あの男が見えますか！

マルコー　然、誰れだ！

ギドー　前にお逢ひなすつた事がある……お話しなすつた事がある……あなたに、あの男の忠實な使番でした……

（プリンチヷルレはマルコーの方へ顏を向ける。マルコーそれを認めて）

マルコー　プリンチヷルレ！

（群衆どよめく）

ギドー　さうです、さうです、プリンチヷルレです、一毫の疑ひもない……もつと近くおいでなさい、あいつを御覽なさい、さはつて御覽なさい、何かまたあなたに新しい使番を頼むかも知れません……あゝ、あいつはもうもとの威勢あるプリンチヷルレではない！　併しあいつに對して、氣の毒だと思ふ餘地は少しもない……あいつは、卑劣な奇怪千萬な策略で、私が世界の何ものにも代へない、たゞ一つのものを奪ひ取つた、そのあいつが今、私の家へ來てゐる！　正義の力で連れて來られたのだ、正義よりも更に驚くべき戰略の力で連れて來られたのだ、私が承知することの出來る一つの報を得ようとして……是れが奇蹟でなくてどうしよう？　もつと〳〵近くおいでなさい！　恐れるには及ばない、あいつは逃げはしません！でも氣をつけて戸をしつかりしめて置け、また別の蹟が見はれて、あいつを連れで行つてはならない……一時に處分しないで置かう……あいつのために末長く樂んでやらう……あゝ、お前たち同胞諸君、見て御覽、お前等にあれ程の苦痛を與へたのは此の男だ、お前等を虐殺してお前等の妻子を奴隷に賣らうとしたのは此の男だ！　さうだ、是れが其の男だ、それが私の手に這入つた、お前等の手に這入つた、我々の手に這入つたのだ、分つたか！……お前等もあいつ

のために苦められたが、併し私の苦みにくらべれば何でもない！……あいつは今にお前等に與れてやる……ヷンナがこゝへ連れて來たのだ、復讐をして我々の恥辱を雪がうとしたのだ！　……(群衆に向かつて)みんなよく見て置いて與れ、一點の疑ひがあつてもならない……是れが義勇から生じた奇蹟だといふことは、よく分つたらうな？……此の男が私のヷンナを奪つたのだ……私は途方に暮れて、どうする事も出來なかつた、お前等があれを賣つたのだ……私は誰れも呪ふのらない……過去は過去だ……お前等には、私の哀れな幸福よりも、お前等の生命の方が大事だつた、それがお前等の權利なのだ……併し、ヷンナが、私のヷンナが、一旦亡された愛を、其の亡したものから新に造り出し道を知つてゐた……お前等が打ちこはしたのを、ヷンナが建て直した……ヷンナの手柄だ！……リュークリースよりもジュディスよりも偉大な女だ　リュークリースは自殺した、ジュディスはホロフェルニスを殺した！　あゝ、そんなことでは、まだ／＼穏やかすぎる、簡單すぎる、音なしすぎる！……ヷンナは垂れこめた天幕の中であいつを殺しはしない、我々の所へ生かして連れて來てみんなの前へ差出した！……では、何うして此れだけのことをしたか？……謹聽せい、これからヷンナが話して聞かせる！

……………

ヷンナ　然、話して聞かせます、けれども、まるで違つた話ですよ……

ギドー　(ヷンナを止め、兩腕をヷンナの體に投げかけながら)先に接吻させて與れ、みんなの前で……

ヷンナ　(烈しくギドーを押しのけ)いえ、いえ、まだいけません！……いけません、私の言ふことをお聞きなさらないうちは、二度とそれはなりません！よく聞いて下さい、あなた！　私の言ふのはもつと本當の名譽にかゝることです、あなたの眼の暗んでゐる、そんな幸福よりも、もつと大きな幸福です！　あゝ、よかつた、多勢の人がみんな戻つて來て與れて！却つてあの人たちがあなたよりも先に聞いて與れるでせう、あなたよりも先に理解して與れるでせう！　お聞きなさ

い、あなた！……分るまで私にさはらないでゐて下さい……

ギドー　（ヴンナを押しとめ、また抱かうとしながら）分つたよ、分つたよ、知つてゐるよ――併し何よりも先に……

ヴンナ　お聞きなさい、私の言ふことを！　私は生まれてまだ一度も僞りを言つたことはありません、けれど今日は一生のうちで一番深い、眞實を打ち明けます、たゞ一度しかない眞實です、死ぬか生るのか眞實です……聞いて下さい、よく私を見て下さい、今が始めてのつもりで見て下さい、今よりほか、あなたが私の望み通り本當に私を愛していらる初めにないのです、其のつもりで見て下さい……私は、夫婦一緒に棲んで來た私の生涯を誓に立てます、私の身と私に下すつたあなたの身を誓に立てます！……信じられない事だとお思ひなすつても、信じて下さい……私は此人の思ひ通りになつて其の手に渡されたのですけれど、此の人は私の傍へ寄らないで、私の身體に手もさへさはりませんでした……私は兄弟の家に居たと同じ體で、此人の天幕から歸て來ました……

ギドー　何うして？

ヴンナ　私を愛してゐたからです……

ギドー　あゝさういふことか、お前が言はうとしてゐたのは！　それが奇蹟だつたのか？……さうだ、さうだ、お前の最初の言葉ですぐ、私は何か變つた事があるなと思つたが……ほんのちらりとだつたから、注意もしなかつた……私の考では、困難や恐怖が……併し斯うなれば、事情を見極めて置かなくちやならない……（急に靜な聲で）そんな風にして、夜中二人きり天幕にゐながら、あいつはお前をどうもしなかつたか？……

ヴンナ　いゝえ……

ギドー　さはりもしなかつたか、抱きもしなかつたか……

ヷンナ　私があの人の額に一度接吻してやりました、あの人はそれを反しました。

ギドー　あいつの額に！……私を見て御覽、それでお前は、私にそんな事が言へると思ふか……ヷンナ、ヷンナ、恐しい一夜でお前は氣が狂つたか？

ヷンナ　氣なんか狂つてはゐません、私は眞實を言つてゐます。

ギドー　眞實！、あゝ、私もそれを求めてゐる、たゞそれだけを求めてゐる！　けれども、眞實は人間の事でなくちやならない……何といふ！　此の男は自分の國に叛き、自分の生涯を亡ぼして、永久に世間を敵とする――それだけの事を、たゞお前に、一人で天幕へ來て貰ひたいばかりにするのだ――そいつが、額にたゞ一度の接吻を求めたきりだといふ。そしてこゝまでお前と一緒にやつて來て、それを信じさせようとする？……いけない、いけない、正しい道に戻つて、あんまり人の不幸を喜ばないやうにしなくちやいけない……若しそれがあの男の求めたすべてであつたら、なぜ是れほどの不幸をピザの人の上に蒙らせたか？　なぜ斯んな絕望の淵に私を沈めたか？……此の一夜が私には十年にもあたつた、殆と生きてゐようとは思はれなかつた！……あゝ、あいつの求める所が、たゞそれだけだつたら斯んな苦みはさせないで、ピザを救ふことが出來たらう！……あいつを神とも救世主とも思つて歡迎しただらう！　お前は頭を振つてゐる……御覽人民どもに判斷させやう、あれらの答を聞かう（群衆に向つて）お前たちは聞いたか？　私にはなぜヷンナが斯んな事を言つたか分らない。併し言つた事は言つたのだから、お前たちそれを裁判して見れい……お前等は、ヷンナに救はれたのだから、或はそれを信ずるかも知れない……若し信ずるなら、さう言へ……信ずるものは、群衆の中から出て來い！……さういふ人は、こゝへ來て、かはいさうな人間の理性を嘲けつてやれ！……出て來い、信ずるものは殘らず出て來い！……私は早く其の人々が見たい、どんな種類の人間たか見てやりたい！……

（マルコー一人群衆の中から立ち出づる。他にはかすかな、ぼんやりした、不明瞭な咳きが聞えるばかり）

マルコー（突進して）私がそれを信ずる！

ギドー　あなたが！　あなたはあいつらの仲間だ……併し他のものは何うだ、他のものは？　誰れか信ずるものがあるか？……（ヷンナに）お前、聞いたか？　お前が救つてやつた人民は、出て來ない、部屋の隅々に對しても恥しいからだ。……幾たりか呟いてゐたものも姿を見せない、で、私は――

ヷンナ　人民には、私を信じなくちやならない譯はありません。けれどあなたには其の譯があります、私を愛して下すつたあなたには！

ギドー　あゝ、お前を愛してゐた私は、そのためにお前の言ふ事なら、間拔になつて信じなくちやならないかね！　だめだ／＼！　これ、私の言ふことを聞いておいで！　私は冷靜に話すよ、もう憤りはなくなつたから……私には負擔が多すぎた、突然年を取つたやうに感じ始めて來た、いや、怒つてゐるのぢやない……もう私に怒りは殘つてゐない――其の代りに何か他のものが見えかけてゐる。それは――老年だか、狂氣だか、まだ自分にも分らない……差しあたり私は、私のものであつた幸福を、今一度見つけようと思つて眺めてゐる、探してゐる、自分の中をつまさぐつてゐる……一つの望がある、たゞ一つ、殆ど手に取れないほど微な望がある……口に出せば、もう壞れて了ふ、それでも私は、絶望の中にそれを捕へようと企てる外はない……ヷンナ、私が聞かない前にみんな呼び戻したのが惡かつた……あの化物めがお前を苦めた顚末を、人民の前で公言するのが、お前に取つてどんなに不愉快な事だか、それを私が氣づかなくてはならなかつた……さうだ、二人きりになるまで待たなくちやならなかつたのだ、さうしたらお前も眞實を白狀して呉れたらう、恐しい眞實を。だが、私は、もうそれを知つてゐる、他のものもみんな知つてゐる。ヷンナ、隱したつて役に立たないぢやないか？

もう時が遅れたのだ……今となつては仕方がない、お前もさう思はなくちやならない……斯ういふ時には、理性も用をなさないから――

ヷンナ　あなた、よく私を見て下さい、今斯うして話してゐる私の眼にありつたけの眞心も力も眞實も籠つてゐます！…………眞實です、眞實です、信じて下さい、あの人は私の體に手をかけませんでした。

ギドー　いゝ！　結構だ。大へん結構だ！　それでみんな分つた。みんなもう消滅して了つた……さうだ眞實だ、むしろ戀なのだ。あゝ、分つたお前はあの男を救はうとしてゐるのだね。愛してゐた女がさう急に變心するものとは思はなかつた。併し、然うしてあいつは救はせない！（聲を強めて）みんな、よく聞いて置け！　私は最後の誓をする……斯うなると自分を引きしめるために人間以上の力がいる、私の自制力が弱つて了ふ、是れが私の最後の努力だ、もう一瞬間で私は倒れて了ふ……今のうちだ……お前等、みんな私の言ふことが聞えるか、それとも私の聲が弱くなりすぎたか？　もつと近く來い、近く寄れ！……みんな、此の女とあの男を見て呉れ、あいつらは互に愛してゐる……いゝか、そこで、聞いて置け。私は一言一句死にかゝつてゐるものに呑ます藥のやうに、念入りに秤にかけて言ふ、此の二人はこゝから出て行かせる、私がそれを承知するから、自由に、困難なく、手もさゝれないで、何等の害を受けないで出て行かせる。二人に、欲いものがあれば、何でも持つて行かせる。お前等は隊列を明けて、二人のものに道を遣つてやれ。お前等の望なら、二人が通る道に花でも撒いてやれ。二人は愛の導くまゝに何處へでも行くがいゝ。それで、私が其の報酬として求めるのは、此の女が、何よりも先づ眞實を私に語ることだ、たゞ一つの本當の眞實を……それが、今では此の女に殘つてゐる、たつた一つの私の愛だ……私は眞實を求める、私が與へるものに對して此の女は、必ずそれをよこす義務がある……ヷンナ、お前も分つたか？　たゞ一言言へばいゝ……こゝにゐるものが、みんな證據に立つ……

ヷンナ　私は眞實を言ひました……あの人は私の體に手もかけませんでした……

ギドー　よろしい、お前は明言した――あいつに宣告を下したのだ。此上別にする事はない（番兵等を呼び、プリンチヷルレの方を指して）あの男は私のものだ、連れて行つてふん縛れ、そして此の下の一番底の穴牢へ押し込んで置け。私も一緒に行つて見やう。（ヷンナに向つて）お前は、二度とあいつに逢ふことはならないよ、たゞ、私が歸りがけに、あいつの最後の言傳は聞いて來てやる……

ヷンナ　（プリンチヷルレを捉へて連れて行かうとする番兵等の中に身を投げ入れる）いけない、いけない！　私が嘘を言ひました、私が嘘を言ひました！（ギドーに）さうです、あなたのおつしやるのが本當です！（番兵を突きのけ）あつちへおいで、私のものを連れて行つてはいけない、此の人は私のものです、私の自由です、お前たちのものぢやない！　私一人のものです！　私が懲らしてやる――あの卑怯者が、私のどうする事も出來ないのに乘じて……

プリンチヷルレ　（ヷンナの聲を溺らすやうに）それは僞りです！　それば僞りです！　私を救ふために僞りを言つておいでなさる。それよりも私は刑罰を受けます、どんな苦痛でも――

ヷンナ　お默んなさい！（群衆の方を向いて）恐れてゐるのですよ！（プリンチヷルレに近づく、其兩手を縛らうとする樣子で）繩をおよこし、鎖か手錠をおよこし！　さあ、私は白狀します、憎い奴だと思ひます、私が連れて來たのだから私が縛る！（兩手を縛りながらプリンチヷルレにさゝやく）默つてゐらつしやい！　ギドーは却つて私たちを救ふのです、默つてゐらつしやい！　一緒にして呉れるのです。私はあなたのものです、あなたを愛します！　あなたを愛します！　此の鎖はかけても、保護してゐて解いてあげます！　二人一緒に逃げませう（強いてプリンチヷルレを制するやうに叫ぶ）お默んなさい！　（群衆に向つて）助けて呉れと云つてるのですよ！（プリンチヷルレの顔を露出させて）此の顏を御覽、恐

しい夜の紀念が殘つてゐる！（自分の外套を開き、血のにじんだ肩のところを示して）私にも其の痕がある！……此の人を見ておやり……此の卑怯な惡魔を！（番兵等がプリンチヴルレを連れて行かうとする樣子を見て）いゝや、いゝや、此の人は私に任せてお置き！私の生贄だから、私の餌食だから！此の人を買つたのは私たもの！私のものぢやないか！

ギドー　なぜあいつはやつて來たらう、それから、なぜお前は私に嘘を言つたか？

ヴンナ（躊躇して、言葉をつぎ）なぜ私が嘘を言つたでせう……私にも分りません、言ふ必要はなかつたのです……あゝ、さう〳〵私、言つて了はなくちやなりません……世の中には、自分のしてゐる事が分らなかつたり、たゞ暗闇に手探りしてゐたりする事がたび〳〵あります……さう〳〵言つて了ふませう、言つて了ひませう、もう本性を現はしたのですから……私が心配したのは、あなたの愛と、あなたの失望とでした、けれどもあなたは（一層靜かな聲で、一層決心した樣子で）さう〳〵、おなやがおつしやるやうな考ちやなかつたのです……私はおなたと二人で、公然人民どもの眞中で復讐をしようと思つてあの人を連れて來たのぢやありません。私の考はそれほど高尚でなかつたかも知れないが、あなたに對する愛のためにしたのです……私はね、なの人を殘酷に殺してやりたいと思ひました、それから、其の恐しい一夜の想ひ出で、あなたの一生涯を不愉快にするのが嫌だつたのです……復讐は暗い中でしようと考へました……その上ゆる〳〵と嬲り殺しにしてやりたい……ね……あの人をゆつくり殺して下さい、段々と血が一滴々々にしたゝつて、其の罪を拭ひ消して了ふまで……そしてあの恐しい眞實は、少もあなたに知らせたくなかつたのです、私たち二人の仲にそんなものゝ影は入れたくなかたのです……打明けて言へば、こんな事の想ひ出があなたの愛を滅しはしないかと心配しました……馬鹿な事たつたとは思ひますが……それをあなたに信じさせようとしたのは、狂氣の沙汰でした……けれど、もう何もかも知らせます——（群衆に向かつて）私の言ふ事を聞いてお呉れ、そして判斷してお呉れ！さつき言つた事に、ギドーの話

を思つて言つたのですよ、私たちの愛の爲に言つたのですよ……今度は、すつかり本當の事を言ひますよ……私はあの男を殺さうとしてあんなに手傷を負はせてやりました……けれども武器を取られて了つて……仕方がないから、もつと深い復讐を工夫しました、そして笑つて見せたら、あの男はそれを信用して了つた……はゝ、男といふものは馬鹿ね！……嘘を言ふことを崇拜してゐる！　あの男は私を自分のものにしたと思つてる間に自分で囚へられて了つた。そして今こゝへ來てゐる。こゝはあの男の墓場ぢやないか。私が自身でそれをとざしてやります……接吻をしてやつたら、それを信じて小羊のやうについて來た……もう私の手のうちに摑んでゐる、二度と放しはしない！……

ギドー　（近よつて）ヷンナ！……

ヷンナ　よく私を見て下さい！……此の男は氣違ひです、私が「プリンチヷルレさん、あなたを愛してゐます！」とたつた一言言つたので、もう私を信じて了ひました……此の人は私についてなら、地獄の底までも來るでせう！……斯うして私を抱いてやりました……（熱情的にプリンチヷルレを抱く）そして言つてやりました……、「私はあなたを愛してゐます、さ、私の接吻を返して下さい！」さう言つてやりました　……其の人が今私のものになりました、神と世界に誓つて、私のものになりました！　私は勝利を得ました、其の人を買ひ取てやりました！……（よろめいて圓柱にすがり身を支へる）氣をつけて下さい、倒れさうです、嬉しいからです、喜びが多すぎるのです、復讐が出來るのですもの！（マルコーに）お父さま、私の氣分がなほるまで、あの人の事は、あなたに願つて置きます……あの人の番をしてやつて下さい、牢屋を見つけて下さい、一番深い窖牢で誰れも／＼來ない所を……そして其鍵を私に下さい、鍵は私が持たなくちやなりません、すぐそれが欲いのです。誰れもあの人にさわつてはならない、近よつてはならない、私が持つてゐるのだから、私のものだから私たゞ一人で處分します……あなた（ギドーに）あの人は私の自由ですよ！（マルコーの方へ二三歩よつて）お父さ

ま、あの人は私の自由です、あなた責任を以て引き受けて下さい！（じつとマルコールを見つめる）分つたでせう？　あなたがあの人の保護者です。責任を負うて下さい。指一本も指してはなりません。私が行くまで、此のまゝそつくりしてゐなくてはなりません、さあ、あなたに渡しますから、（プリンチヷルレあちらへ連れて行かれる）さようなら、あなた！

あゝ、また逢ひませう

（ギドーは兵卒等の中に立つてゐる、兵卒等は亂暴にプリンチヷルレを引き立てる。ヷンナは叫んでよろめいて倒れようとする、マルコー走りよつて、兩腕に支へる。）

マルコー　（腕に横はるヷンナの上に顏を俯せながら、低い聲で早口に）あい、ヷンナ、私には分つてゐます。お前の僞りが理解される。お前は出來ない事を僞とげた……正義であると共に正義でない事を僞とげた、人間のする事は皆さうだが……併し、正義はやつぱり生る事だ……氣をたしかにお持ち、ヷンナ。また僞りを言はなくてはならない時があらう、まだあれが信じないでゐるから……（ギドーを呼ぶ）　ギドーや、ヷンナがお前を呼んでゐる……ギドーや、ヷンナが正氣づいて來ました……

ギドー　（馳せて來てヷンナを兩腕に抱き取る）ヷンナ、ヷンナ御覽なさい、ヷンナが笑つてゐます！……ヷンナ、話をおし！……私は決してお前を疑はなかつた……もう一切濟んで了つた、忘れて了ふがいゝ――めでたい復讐を拭ひおつて了はう……みんな惡い夢に過ぎなかつた。

ヷンナ　（眼を開き微かな聲で言ふ）あの人は何處にゐますか、さう、もう分りました、思ひ出しました……私に鍵を下さい、牢屋の鍵を下さい、私よりほか誰れもいけません……

ギドー　番兵が歸つて來ると、すぐ鍵をお前に渡すだらう、そして一切お前の望み通りにするがい……

ワンナ　私は、私自身で貰ひます、たゞ一人で貰ひます、間違のないために、そして他の人を入れないために、あゝ、一場の悪い夢でした……けれど、これから美しい夢が始まるでせう、美しい夢が。………

………（幕）………

海の夫人

イブセン原作

(Fruen fra Havet—The Lady from the sea)

『海の夫人』は千八百八十八年十一月、イブセンが六十歳の時の作で、『人形の家』を出してから九年目にあたる。『海の夫人』の原名は、直譯すれば、むしろ『海からの夫人』または『海からの女』である。けれども今では『海の夫人』の方が廣く耳なれても居るし、稱呼としても簡潔である。且つ「の」も「から」も日本語は言ふに及ばず、洋語でも相通ずることが出來る。現に "Fruen fra Havet" はすぐに "Havfrue" であり "The Lady from the Sea" は "Sea-lady" 又は "Sea-wife" であるのだから『海の夫人』で差支ないわけである。

ノルウェー語で『海の夫人』といへば、其の同じ言葉がすぐ「人魚」といふ意味になつて、「人魚」といふ言葉のうしろには、昔々海を見棄てゝ哀れな最後を遂げた海の女性の傳說が連想せられるのであるが、そんな複雜な意味は到底譯語には現はれない。

此の劇はイブセンの作中で最も多方面なものゝ一つで、第一には彼れが後期の社會劇中唯一の喜劇である。第二には彼れか晩年の作に見はれた象徵的神秘的またはロマンチックな色彩を最も早く最も多く帶有した作である。第三には作中の思想として夫の『人形の家』『幽靈』等の續篇とも見られる程に婦人問題、結婚問題、戀愛問題が骨子となつてゐる。第四にはイブセンの他の作に多く見られない自然界の空氣が舞臺の上に導かれてゐて、五幕のうち四幕まですべて戶外の場面になつてゐる。第五にはその自然界でも北の海といふ一種特別のものを選んで、その中に自由とか神秘とかいふものを寓しやうとしてゐる。第六には喜劇として啻に結末がめでたく終つてゐるのみでなく、全篇に滑稽を點出して舞臺面を沈鬱に過ぎないやうにしてある。第七には繼母と繼娘との仲などの微妙な人情を描く點で殆ど人情小說のやうな味を持つてゐる。

たゞ此の作全體の組立については、稱讚するものと批難するものと、兩方の見かたがある。例へばゴッス氏 (Edmund Gosse's "Northern Studies") リー夫人 (Mrs. J. B. Lee's "The Ibsen Secret") 等の如く、全篇を詩として美しい光輝あるものとして推稱

するものと、アーチャー氏(W. Archer's "The Play Making")マクフォール氏(H. Macfall's "Ibsen")等の如く、舞臺に登す劇としての弱い所があると批難するものと　いづれも當つた批評である。西洋で此の劇を舞臺に登した結果もまた二樣であるらしい。イギリスは前後二回とも餘り好成績でなかつたが、ドイツ及び作者の本國では、非常な喝采を得て、彼れが作中最も人氣のある劇の一つになつたとゴッス氏が記してゐる(E. Gosse's "Ibsen")。

此の劇が初めて舞臺に上つたのは、千八百八十九年二月十二日クリスチアニアに於いてゞあつてイプセンのいふ所に從へば非常の稱讚を博したといふ。ドイツでは同年三月四日ベルリンに於いてゞあるが、その時のイプセンみづからの注文が友人のヨォナ・リー(Jonas Lie)教授に送つた手紙に見えてゐる。其の一節に、「番組の中へ一海員とか他國の船員とか一舵手とか書くのは不同意です。十年前エリーダが其の男に逢つた時は二等運轉士だつたが、七年後には普通の水夫長として雇はれて、段々目だゝないものになり、今は同航船の一乘客として現はれて來たのです。船手ではありません。何處を宛ともなく旅行するものゝ服裝で、たゞの旅客の服裝でもありません。何んな人だか何といふ名だか、少しも分からない。此の記號ともした所が即ち私の此の場合に特に選んだ特色です。アンノー氏(監督)が此の點に注意して稽古をして與れないと、此の劇の本當の感じが失はれる恐れがあるのです」と書いてある。つゞいてワイマーで演ぜられたのには滿足したと見えて、別の手紙に、其の時の他國人は最上の出來だつたと書いて、「脊の高い、痩せた、鷹のやうな顏、突きさすやうな眼、素ばらしい深い沈んだ聲」であつたと説明してゐる(Ibsen's "Speeches and New Letters")

イギリスでは千八百九十一年五月十一日エーヴリング博士(Dr. Aveling)の監督の下に初めてロンドンのテリー座で演ぜられたが、五日だけしか續かなかつたといふ。アーチャー氏は演出法が拙であつたと評してゐる。千九百二年五月に舞臺協會が同じくロンドンのロヤルチー座でやつた時は、初めて「人形の家」のノラに成功した有名な女優ゼネット・エチャーチ(Ja

Achurch）がエリーダに扮し、ローレンス、アーヴィング（Lau ence Irving）が他國人に扮し、ノーマン、マッキンネル（Norman Mckinel）といふのがヴングルに扮してゐる。

我が國では『藝術座』が、大正三年一月十七日から十五日間東京有樂座でチエホフの『熊』と共に此の劇を演じた。其の役割は

エリーダ……松井須磨子
ヴングル……中井哲
他國人……澤田正二郎
アルンホルム……宮島文雄
リングストランド……田中介二／田邊若男
バレステッド……倉橋仙太郎／波多譲
ボレツタ……波野雪子
ヒルダ……川路歌子

『海の夫人』の腹案は早くからイプセンにあつたものと見え、その初稿は千八百八十年に端を發してゐる。それから千八百八十六年の夏にはノルウェーのモルデといふ海濱の小町にゐて海に親しみ、翌年の夏はデンマルクのジェットランドのセービーといふ海濱町にゐて、フレデリックスハーヴンといふ港に好んで散歩などし、其の邊で同じく海や船や漁夫やに親しんだ。此のあひだに『海の夫人』の具體的な材料か調つたのである。イプセンはアーチャー氏への手紙か何かの中に、『今度は一つおどけ

たもの(Tomfoolery)を書いて見る」と言つてゐる。ゴッス氏の記するところによると「アーチャー氏は此のころイブセンをセービーに訪問したが自分は一二年後フレデリックスハーヴンでイブセンに關する逸話を聞いた。彼れはいつも兩手を後ろに組みフロックコードの鈕をしつかりとかけ、何時間となくフレデリックスハーヴンの海岸を獨りで大股にテクリ／＼とあるいて、その恐るべき瞑想に耽つてゐた』といふ。それから二年たつて『海の夫人』が出來たのである。

此の書の翻譯は、イギリス文ではエーヴリング夫人(Mrs. E. Marx Aveling)のもの、クララ、ベル(Clara Bell)のもの、ジー、アール、カーペンター氏(G. R. Carpenter)のもの及びエフ、イー、アーチャー夫人(Mrs. F. E. Archer)のもの丶四種が同じ千八百八十九年から千八百九十年にかけて出た。此の最後の譯がアーチャー氏監修の『イブセン散文劇集』に出てゐるものである。私の譯は、是れを基にして、エム、フオン、ボルヒ氏(M. von Borch)の獨譯を參照した。

大正三年二月

人物

醫師ヷングル(地方の醫師)〔Vangel〕
夫人エリーダ(ヷングルの妻)〔Ellida〕
ボレッタ(ヷングル先妻の娘)〔Boletta〕
ヒルダ(同前)〔Hilda〕
アルンホルム(教師)〔Arnholm〕
リングストランド〔Lyngstrand〕
バレステッド〔Ballested〕
他國人
町の若い人、旅客、避暑客等

場所

北ノルウエーの峽灣に濱した小さい町

時

夏

第一幕

左、大きな外廊の附いたヷングルの家、前及周圍は庭、外廊の近くに一本の旗竿が立つてゐる。右手、庭に四阿があつて、テーブルと何脚かの椅子が具へてある。後は生垣で小さい木戸がついてゐる。生垣の後から一筋の路が海濱に通じ、路の兩側に並木が立つて居る。其の間から峽灣の景色が見え、また遙かの向ふには高い山脈や山巓が見える。溫かに輝きわたる朗かな夏の朝である。

バレステツド、中年、古びた天鵞絨の短衣を着、鍔の廣い美術家帽を冠つて、旗竿の傍に立ち、旗綱を案排してゐる。旗は地上に落ちてゐる。少し離れて、畫布を張つた畫架が据えてある。其のそばの疊床几の上には幾本かの刷毛調色板、繪具箱。

ボレツタ、庭に面した室の、明いたまゝの戸口から外廊に出て來る。持つて來た大きな瓶に花の生けてあるのをテーブルの上に置く。

ボレツタ　何うして？　バレステツドさん、――うまく上つて？

バレステツド　えゝ、えゝ、あなた。雜作はありません――何ですか、今日は、お客樣なんですか？

ボレツタ　さうなの、アルンホルムさんが今朝見える筈ですよ。昨夜お着きになつたのですから。

バレステツド　アルンホルム？　待つて下さい――アルンホルムといふと、あの先生の事ですか、そら、何年か前にこちらであなたの家庭敎師をしてゐらつしやつた？

ボレッタ　さうですよ、あの方ですよ。

バレステッド　あ、さうですか。また此の土地へ入らつしやつたんですね？

ボレッタ　それで旗を上げやうといふの。

バレステッド　なるほど、さういふ譯ですか。

ボレッタはまた室内にはいる。と、すぐリングストランドが路を通つて右手から現はれ、畫架や畫具を見つけ、興味を覺えて立ち止まる。粗末ではあるがさつぱりした身なりで、弱々しい、きやしやな體つきをした若者である。

リングストランド　（生垣の外で）お早う。

バレステッド　（ふり返つて）や、お早う。（旗を上げる）さうら！――どん／＼上つて行く！（綱を結びつけ、忙しげに畫をかきはじめる）お早うさん。失禮ですが何方でしたか、まだ――

リングストランド　君は畫家でゐらつしやるのでせう？

バレステッド　さうですとも。畫家でなくてどうするものですか。

リングストランド　あゝ、さうでせう――一寸這入つてもいゝでせうか？

バレステッド　此の畫が見たいのかね？

リングストランド　えゝ、是非拜見したいのです。

バレステッド　まだ／＼、物になつちやゐないんです。併し、まあお這入んなさい――構はず、這入つていらつしやい。

リングストランド　どうも有難う。（庭の入口からはいる。）

バレステッド　（畫を書き乍ら）今描いてるのは、向ふの峽灣です、島と島の間の。

リングストランド　さうのやうですね。

パレステッド　併しまだ人物を入れないのです。町中探したつてモデルになるやうな者がないんだからね。

リングストランド　あゝ、人物が入るんですか？

パレステッド　さうです。此の前景の岩の所へ。人物と言つても、半分死にかゝつた人魚を置きたいと思ふんです。

リングストランド　何うして死にかゝつたのをです？

パレステッド　沖から紛れ込んで來て、歸ることが出來ないで、こゝの鹽からい水につかつたまゝ一寸々々死んで行くといふのです。

リングストランド　あ、さういふのですか？

パレステッド　僕にその意匠を授けて呉れたのは、この家の夫人なのです。

リングストランド　出來あがつたら、何といふ題になるのでせう？

パレステッド　さうさね僕は「人魚の最後」といふ題にしやうと思つてゐます。

リングストランド　それはいゝ――屹度好い作になるでせう。

パレステッド　（相手を見て）君も此の方をやるんだね？

リングストランド　畫をですか？

パレステッド　畫をさ。

リングストランド　いゝえ、僕は、畫はかきませんが、彫刻家にならうと思つてるんです。ハンス、リングストランドと言ふ者です。

バレステッド　彫刻家になるんですか君は？好いね、彫刻も立派な、いきな藝術だ。――僕は一二度君を町で見かけたやうに思ふがもう長く此の土地に滯在しでおいでですか？

リングストランド　いえ、まだ二週間にしかなりませんが夏中ずつと居て見たいと思ひます。

バレステッド　海水浴の樂しい氣分を味ふといふ譯だね、えゝ？

リングストランド　僕のは、も少し氣力を回復したいためですよ。

バレステッド　身體虚弱といふのかね？

リングストランド　えゝ、少しばかり其の方ですが、でも心配するほどぢやないんです。たゞ少し呼吸が苦しいだけですから。

バレステッド　なあんだ――それつぱかしの事か！だが、やつぱり良い醫者には診て貰ひ給へよ。

リングストランド　僕も、折があつたら、一度ヷングル先生に診て戴かうと思つてゐます。

バレステッド　あゝ、さうなさい。（左の方を見て）又汽船がはいつて來る。お客で一ぱいだ。實に驚くね、この四五年、旅行の盛んになつた事つたら。

リングストランド　さうですね、隨分と交通が盛んなやうですね。

バレステッド　それから避暑客で町は一杯だ。僕は時々心配するんだが、かう出這入りが烈しくつちや此の結構な町の特色が無くなつてしまやしないか。

リングストランド　君は、此の土地のお方ですか？

バレステッド　いや、さうぢやない。併し僕はもう此の土地にアックラー――アックリマタイズしてゐるんです。同化してゐる

るんです。時と習慣の力で引き付らけれちやつたのです。

リングストランド　ぢや、長くこちらに住んでゐらつしやるのですか？

バレステッド　さうさ、十七八年になりませう。僕はもとシイヴェ一座の演劇團に加はつて來たのですよ。それが君、儲からないで、御難と來たから、とう／＼散り／＼ばら／＼さ。

リングストランド　でも君だけは留まつたといふ譯ですか。

バレステッド　僕は留まつたさ。僕はさう困りあしないんです。重に背景の方をやつてゐたんだからね。

（ボレッタ搖椅子を携へて出で來り、外廊に置く。）

ボレッタ　（室の方へ話しかける）ヒルダや――そつちに縫のしてある足臺があつたらお父さんの分に持つて來てお上げな。

リングストランド　（外廊の方へ行き腰をかゞめ辭儀をして）お孃さん。お早う御座います。

ボレッタ　（欄の所で）あ、あなたでしたかリングストランドさん？お早う御座います。ちよつと御免下さいな――私ちよつと――（家の中へ這入る）

バレステッド　君は此の家を御存じかね？

リングストランド　知つてるといふ程でもないのですが、令孃たちに他の家で一二度逢つた事があります。それから、奥さんとも此の前見晴しで音樂のあつた時お近づきになつて、遊びに來るように言つて下すつたのです。

バレステッド　それだ君。――此の家と懇意にして置かなくつちやうそだよ。

リングストランド　ですから、一度おたづねしやうと思つてゐたのです――たゞ一種の訪問でいゝのですからね。何か好い口實がありさへすれば――

バレステッド　馬鹿な、口實なんか――（左方を見る）――大變々々！（道具を片付ける）汽船がもう埠頭へ横付けになりやあがつた。僕はすぐホテルへ行かなくちや。新しく着いたお客が僕を探してるだらうから。ねえ君、僕はこれで斬髪屋もやるんだからね。

リングストランド　君は中々器用だと見えますね。

バレステッド　そこがアック――クリマタイズする必要なのだ、郷に入つては郷に從へで、こんな狭い土地だと何んな職業にでも同化しなくつちやあいけません。若し君に、頭の物が――香油だの何だのと――お入り用の時は、舞踏教師のバレステッドへおたづねなさい、すぐ間にあひます。

リングストランド　舞踏教師ですか？

バレステッド　または音樂會會長とお尋ねなすつても分かる。今晩あの見晴で、音樂會をやります。左樣なら、左樣なら。

（道具を纏め、庭木戸を通つて左方に去る。ヒルダ足臺を持つて出て來る。ボレッタ更に花を持つて來る。リングストランド庭にゐてヒルダに一禮する）

ヒルダ　（欄干によりかゝり禮を返さいで）姉さんに聞きましたよ、あなたが今日だしぬけに入らつしつたつて。

リングストランド　えゝ、お許しも受けないでお庭へ這入つて來ました。

ヒルダ　朝の御散歩？

リングストランド　え、いゝえ、――今日はあんまり散歩しなかつたのです。

ヒルダ　ぢや海水浴？

リングストランド　えゝ、ちよつと浸つて見ました。おつ母さんもあそこにいらつしやいましたよ。丁度浴舍へお這入りの

所でした。

ヒルダ　誰がですつて？

リングストランド　あなたのおつ母さんが。

ヒルダ　おや〳〵さう。（揺椅子の前に足臺を置く。）

ボレツタ　（話を他へそらさうとするやうに。）あなた、峽灣の方に父の船らしいものを御覽なさらなくて？

リングストランド　えゝ、たしか、帆船が一艘這入つた來るのを見ました。

ボレツダ　それが屹度お父さんよ。お父さんはね、彼方の島へ患者を診にいらつしつたのですよ。

（卓子の邊りの物を片付ける。）

リングストランド　（外廊の最下の階段に立つてゐて）おや、綺麗な花ですねえ？

ボレツダ　えゝ、綺麗でせう？

リングストランド　實に美しいですね。何かお祝い事でもあるんぢやないかと思はれますね。

ヒルダ　それがあるのよ。

リングストランド　さう想ひました。お父さんの御誕生日ですか？

ボレツタ　（ヒルダを警しめるやうに）ふむ――ふむ！

ヒルダ　（それに構はず）いゝえ、お母さんの。

リングストランド　あゝ、さうですか――おつ母さんのですか？

ボレツタ　（低いたしなめるやうな調子で）まあ、ヒルダ――！

ヒルダ　（前と同じ調子で）構はなくてよ！（リングストランドに）あなた、もうお晝飯なのよ、お歸りでせう？

リングストランド　（階段を降り乍ら）　さうですね、何か喰らなくちやなりませんが。

ヒルダ　屹度何ですわね、ホテルではおいしいものが召しあがられるのでせう。

リングストランド　僕は今ホテルにはゐません。金がかゝつていけませんから。

ヒルダ　ぢや今は、何處にゐらつしやるの？

リングストランド　イェンゼンさんの所に間借をしてゐます。

ヒルダ　イェンゼンさんといふと？

リングストランド　あの、産婆のです。

ヒルダ　御免なさいよ、リングストランドさん、だつて私、忙しいんですよ――

リングストランド　あゝ、僕、失禮な事を申したのぢやありますまいか？

ヒルダ　何をです？

リングストランド　今申した事がです。

ヒルダ　（頭から爪先迄ぢろ／＼と見て）　私、ちつとも、あなたの仰しやる事が分からないわ。

リングストランド　いや、なに。何です、今日はこれでお暇します。さようなら、皆さん。

ボレツタ　（階段の所に進み出で）　左樣なら、左樣なら、今日はほんとに失禮でしたわね――でも此のつぎお差支がなくて、――お氣の向いたとき――いらつしやつて下さいな、そしたら父もお目にかゝれませうし――ほかのものもね。

リングストランド　どうも有難う。是非さうさせていたゞきます。

（彼は禮をして庭口から去る。外の路を左に出た時又外郎の方に禮をする）

ヒルダ　（聲を低めて）アヂュー、モッシュー！イェンゼン婆さんに宜しく。

ボレツタ　（腕を捉へて靜に）ヒルダ――！お前、仕樣のない子だね！氣ちがひだよ。聞こえるぢやないか！

ヒルダ　プー――それが何うしたといふの？

ボレツタ　（右手を見やつて）お父さんがいらつしやる。

（醫師ヷングル旅行服に手鞄を持ち、右手の路から來る。）

ヷングル　さあ、歸つたよ、お前たち！（庭口から入る。）

ボレツタ　（庭に出迎へて）おゝ、うれしい、歸つて來て下すつて。

ヒルダ　（矢張り降りて行つて）お父さん、それで今日の御用はすつかり？

ヷングル　まだ〳〵、も少し經つと、外科室の方へ行つて來なくちや――あ、さう〳〵――アルンホルムさんは着いたか
お前たち知らないかい。

ボレツタ　昨夜お着きになりました。ホテルへ聞きにやつたのですよ。

ヷングル　ぢやまだ會ひはしないんだね？

ボレツタ　えゝ、だけど屹度今日お午前にいらつしやるでせうよ。

ヷングル　あゝ、さうだらうな。

ヒルダ　（父を引つぱつて）お父さんてば、そら、よく御覽なさいな。

ヷングル　（外廊の方を見て）ほう、なるほどな――まるでお祭りだね。

ボレツタ　ねえ、綺麗に出來たでせう？

ヴングル　あゝ、全く綺麗に出來た……あれは――家にはお前達だけかい？

ヒルダ　さうなの。あれはね――

ボレツタ　（急いでそれを遮り）　おつ母さんは海水浴にいらつしやいました。

ヴングル　（物優しくボレツタを見て頭に手を置き。そしてためらふ樣に言ふ。）ねえ、お前達は――かうして終日飾つておく積りかい。それから旗も上げたまゝで？

ヒルダ　だつてきまつてるぢやありませんか、お父さん！

ヴングル　ふむ――そりやさうだがね、併し――

ボレツタ　（頷いて微笑し乍ら）ですけど、みんなアルンホルムさんが見えるからぢやありませんか。あんな舊友の方が始めてお父さんに會ひにいらつしやるのですもの――

ヒルダ　（笑ひ乍ら父を搖ぶつて）　ね、お父さん――あの方、姉さんの家庭教師だつたのぢやありませんか？

ヴングル　（半ば笑つて）　お前たちはいたづらつ子だね、――まあ〳〵――何といつた所で、亡くなつた人を紀念するのは自然の人情だ。併しそれはそうでも――さ、ヒルダ（手鞄を渡し）　これを外科室に持つて行つて呉れ――だが、やつぱりどうも――私は今日のやうな事をして欲しくないね――斯ういふやり口がいけないのだよ。毎年斯うして――まあ〳〵、仕方はない、外に方法もないだらうからね。

ヒルダ　（庭口から左手へ手鞄を持つて行かうとして立ち止まり、振り向いて指し）あの方を御覽なさい、こつちへ來ます乾度アルンホルムさんなのよ。

ボレツタ　（同じ方を見て）あの方だつて？（笑ふ）よかつたね、あんな好い年をした人がアルンホルムさんだなんて！

ヷングル　まあ、お待ち、たしかに彼れに違ひない！さうだ、屹度さうだ！

ボレツタ　（凝と見て、愕いて）さうです、さうなのですよ――

（アルンホルム瀟洒たる朝出服、金縁の眼鏡で軽い杖を持ち左手の路から現はれる。稍過労した風がある。庭にゐる人々を見て親しさうに禮をし庭口から入る）

ヷングル　（出迎へて）やあ、アルンホルムさん、よくお出で下すつた、君の古巣へよく歸つて來て下すつた！

アルンホルム　ありがたう、ありがたう、どうもありがたう（握手して、共に庭園を横切る。）やあ、お子さん達もいらつしやるね！（手を差し出し顔を見る。）お二人とも殆んど見おぼへがありません。

ヷングル　さうでせうとも、其の筈です。

アルンホルム　あゝ、さう――ボレツタさんだけは多分――さうです、ボレツタさんだけは知つてゐる譯です。

ヷングル　それも覺束ないでせう？さうさね、君が最後にあれにお會ひなすつてから、もう八九年たちます。あゝ、あの頃から見ると、大分世の中が變りましたよ。

アルンホルム　（四邊を見廻し）さうでもないぢやありませんか。庭木が幾らか大きくなつて、それから彼處に四阿が新築された位のものです――

ヷングル　いや、外見だけは恐らく――

アルンホルム　（微笑して）それから無論お家には、二人のお孃さんがあの通り大きくなつてゐらつしやるし。

ヷングル　それは、一人だけは全く大人びても來ましたがね。

ヒルダ　（少し聲高に）　ほら、お父さんが、あんな事を言つてるよ！

ヴングル　まあ、どうです廊下でおかけなすつては。あちらの方が此處よりは涼しいでせう。さあいらつしやい。

アルンホルム　ありがたう。

（二人は階段を上る。ヴングルはアルンホルムに搖椅子をすゝめる。）

ヴングル　さあそちらへ。まあ緩と樂にゐて下さい、旅行でお勞れのやうだ。

アルンホルム　おゝ、何でもありません。かうしてまた此方へ參りますと——

ボレツダ　（ヴングルに）　曹達水と單舍でも少しばかり其の部屋へ持つて參りませうか？外は今に暑くなりますから。

ヴングル　あゝ、さうして吳れ。曹達水と單舍とそれからコニヤック酒も少しある方がよからう。

ボレツタ　コニヤック酒もですか？

ヴングル　ほんの少しで宜い。その方を望む方があるかも知れんから。

ボレツタ　宜御座んす。ヒルダ、お前は手鞄を外科室へ持つて行つてお吳れな。

（ボレツタ室の中に入り、戸を閉める。ヒルダは鞄を取り上げ庭を通り左手、家の後ろに消える。）

アルンホルム　（ボレツタを見送つてゐたが）　いゝお娘さんだ——二人ともいゝお娘さんになりましたね！

ヴングル　（腰を下し）　ねえ、さうでせう？

アルンホルム　ボレツタさんには全く愕きました——ヒルダさんもさうだが——たゞあなた御自身は——どうですか、是れから先ずつと此處にお住ゐのお積りですか？

ヴングル　えゝ、えゝ、さうなる他は無いでせう。私は此の土地に生れて此の土地で育つた所謂土地兒です。こゝで亡なつ

た妻と何不足なく幸福な生活を送つてゐたのが、妻はあんなに早く世を去つて了ふし――あれの事は、君も以前こゝにゐらつしやつて、よく御承知の通りですがねえ。

アルンホルム　はあ――はあ。

ヷンゲル　で今の所ぢや、あれの代りに來て吳れた妻と極めて幸福な生活を送つてゐるのです。まあ、私も運がいゝと言はなくちやなりますまい。

アルンホルム　今度の奧さんには、お子さんは無いのでしたな？

ヷンゲル　男の兒が一人ありましたよ、二年か三年半程前でしたが、育たないでね、四五ヶ月目に死んで了ひました。

アルンホルム　奧さんは今お留守なのですか？

ヷンゲル　えゝ、でも、もうすぐ歸つて來ませう。海水浴に行つてゐます。妻は此の季節になると一日も缺かさず出かけるのですよ、天氣が好からうが惡からうが、お構ひなしです。

アルンホルム　お加減が惡いのですか？

ヷンゲル　いや、さう程でもないのですが、此の二三年、不思議に神經過敏になりましてね――時々變です。一體何でさうなるのか私には見當がつかない。兎に角斯うして毎日海に浸るのが、あれの生命でも喜びでもあるのです。

アルンホルム　考へて見ると、前からさうでしたよ。

ヷンゲル　（殆ど認め難い程の微笑で）あゝ、さうでせうとも。君はショルドヴィックで先生をしておいでの頃からエリーダを御存じでしたな。

アルンホルム　無論です。よく牧師館へいらつしつたものです。それから私もあの方のお父さんが燈臺守をしてゐられる所

へお話しに行つて、よくあの方にお目にかゝりました。

ヴングル　その燈臺の生活が、あれに深い印象を殘したのですよ。迚も此の邊の町に住んでゐるゝのには分らない事です。土地の人は彼女を『海の夫人』と呼んでゐますよ。

アルンホルム　さうですか？

ヴングル　えゝ。ですからね、君――彼女に昔話をしてやつて下さい、アルンホルムさん。そしたら、あれの爲に、どんなに効驗があるでせう。

――

アルンホルム　（訝しげに見て）と仰しやるのは、何か理由があつてですか？

ヴングル　あります、たしかに理由があります。

エリーダの聲　（外、庭園右手から聞える）あなた、そこにゐらつしやるの？

ヴングル　（起ち上り乍ら）あゝ、ゐるよ。

（ヴングル夫人、大きな輕い緩やかな外套を纏ひ濡れた髮を兩肩にゆるく垂れて、亭の側の樹木の中から出る。アルンホルム立ち上る。）

ヴングル　（微笑し乍ら手を差し延べて）あゝ、人魚さんが來たね！

エリーダ　（急いで外廊に上り來りヴングルの兩手を取り）まあよかつた、無事で歸つて下すつたわね！。何時歸つていらしたの？

ヴングル　唯今――ほんの少し前に。（アルンホルムを指して）だがお前、舊いお馴染に――何も言はないのか？

エリーダ　（アルンホルムの方へ手を差し出して）ほんとにあなたいらつしやつたのね？よくいらつしやいました！留守に

なんかしてゐて、御免下さいな——

アルンホルム　おゝ、そんな事を。どうぞお構ひ下さらないように——

ヴングル　今日は海水は綺麗だつたか、冷たかつたかい。

エリーダ　冷たい！だつて此處の海水は少しも冷たかありません——生温くつて、感じが鈍くて、つまらない！此の邊の峡灣の水は病んでるやうですよ。

アルンホルム　病んでゐますつて？

エリーダ　えゝ、病んでるやうですよ。浴びるものまで病みついて了ひさうですよ。

ヴングル　（微笑して）海水浴場に取つちや、有難い證明書だね。

アルンホルム　それよりか奥さん、私は、あなたが海といふものに一種特別の關係を持つてゐらつしやると言ひたいのです海と海に關するすべての物にね。

エリーダ　さあ、さうかも知れません。私も何だかそんな風に思ひます、それはさうと、御覧なさいな、娘たちが、あなたがいらつしやるといふのでそこいらを装飾しましたこと！

ヴングル　（當惑して）　ふむ（懐中時計を見て）時間になつから行つて來なくちやならない——

アルンホルム　實際私が來るためでせうか？

エリーダ　だつて、無論ですとも。不斷はこんなに綺麗にしちやゐませんよ——は！　こんな屋根下へ這入ると暑いこと、息がつまりさう！（庭園に降りる）此間へいらつしやいな！こゝだとせめて息がつけますから。（四阿の中に座る。）

アルンホルム　（其方へ行つて）此の邊の空氣は全く新鮮なやうですね。

エリーダ　あゝ、あなた方にはね、クリスチアニアの濁つた空氣に馴れていらつしやるとさうでせうよ。あの邊は、夏は全くひどいといふぢやありませんか。

ヴングル　（同じく庭園に降りて來て）ふむ、エリーダや、ぢや私はちよつと失禮しなくちやならないから、暫くのあひだお前こゝで久しぶりのお友達をもてなしておあげ。

エリーダ　あなたは何かお仕事？

ヴングル　あゝ、私は外科室へ行つて來なくちやならない。それから服も着更へなくちやならない。もつとも、さう長くはかかるまいよ――

アルンホルム　（四阿の中に席を取り。）何卒御緩くりと。私が奧さんのお相手はしてゐますから。

ヴングル　あゝ、さう願ひます――是非あなたでなくちや。さあ／＼少しの間失禮しますよ！（庭を通り左方に去る）

エリーダ　（ちよつと沈默の後）ここに腰かけてゐるといゝ氣持でせう？

アルンホルム　はあ、非常にいゝ氣持ですね。

エリーダ　こゝは私の四阿と言つてるのですよ、私が拵らへさせたのです。ヴングルが私の爲に拵へて呉れたのです。

アルンホルム　で、あなたは、いつもこゝにいらつしやるのですか？

エリーダ　えゝ、一日中大部分はこゝで過します。

アルンホルム　お娘さんたちと？

エリーダ　いゝえ――娘達は大抵廊下の方にゐます。

アルンホルム　そして御主人は？

エリーダ　あゝ、あれは往つたり來たりしてゐます。こゝで私と一緒にゐる時もあれば、あつちで子供等と一緒にゐる時もあるし。

アルンホルム　そんな風になすつたのはあなたの案ですか？

エリーダ　それがどちらの爲にも一番都合がいゝだらうと思ひますの、いつでも向うとこつちとでかけ合ひに話すことが出來て――何か言ふ事のある場合にはね。

アルンホルム　（ちよつと考へてゐて）此の前あなたの家へお邪魔に出たのは――ショルドヴ井ックでの事ですね――ふむ――あれからもう餘程になりますね――

エリーダ　ちやうど十年ですよ、あなたがあそこへ來て下すつてから。

アルンホルム　あゝ、そんな事でせう。けれども、あの燈臺に居らつしやつた頃のあなたは――！あの老人の牧師が『異教徒』と言つて居ましたつけ。お父さんが、洗禮の時にあなたの名を船の名から取つて、普通のキリスト教の名をつけなかつたからだと言つてゐました。

エリーダ　はあ、それから？

アルンホルム　斯うしてヴァングル夫人としてお目にかゝらうとは實に豫想しなかつた事です。

エリーダ　えゝ、あの頃は主人がまだ――あの娘達の初めの母が生きてゐた時でしたよ――あれらの本當の母がね――

アルンホルム　さうでした〳〵。けれども、そんな事がなくなつたつて――獨身でいらつしやつた所で――こんな事にならうとは豫期しなかつたでせうよ。

エリーダ　私たつてさうです。夢にもこんな事を――あの頃。

アルンホルム　ヷングルさんは實に立派な人です。あんなに高潔で、誰に對しても親切な善い人です。

エリーダ　（温情を持つて心から）えゝ、全くさうね！

アルンホルム　――併し、私の見る所では性質はまるであなたと違つてゐるやうです。

エリーダ　それも仰しやる通りですよ。私達は現にもう別々なのです。

アルンホルム　はあ　どういふ事からさうなりましたの？どうしたのです？

エリーダ、それは聞かないで置いて下さいなアルンホルムさん。私には説明することが出來ないと思ひますから。それに、説明が出來たとしても、私の言ふ事は、一句だつてあなたに分りますまいよ。

アルンホルム　ふむ――（更に柔かに）あなた、今までに何か私の事を御主人にお話しなすつた事がありますか？つまり、無論あの不成功に終つた、私の向ふ見ずな企ての事を。

エリーダ　いゝえ。そんな事を私が話すと思つてらつしやるの？一言も話した事はありませんよ――今おつしやつたやうな事は。

アルンホルム　それで安心しました。私は少し困つてゐたのです、若しやと思ひましてね――

エリーダ　ちつともそんな心配はいりません。私たゞ眞實の事を話したのです――彼地にゐるあひだ、私はあなたが一番好きで一番眞實な善いお友達だつたといふ事をです。

アルンホルム　それは有難う。併し、ねえ――なぜあなたは、お別れしてから、一度もお便りを下さらなかつたのですか？

エリーダ　それはね、私から便りをお聞きになるのは、あなたには苦痛でせうと思つたからですよ――あなたのお望みに従ふことの出來なかつた私ですもの。何だか古疵を發くやうだと思つたのですよ。

アルンホルム　ふむ——さうです〳〵。御もつともです。

エリーダ　けれどあなたこそ、なぜ一度もお手紙を下さらなかつたの？

アルンホルム　(顏を見つめて、半ば咎めるやうに微笑し)私？私から先に？そして、また盛りかへして來る氣かと疑くられてですか、一度撃退せられた鋒に？

エリーダ　いゝえ、それは私にも分つてゐますよ——で、あなたは、其の後他に許とも、何うといふ事はお考へなさらなかつたのですか？

アルンホルム　少しも。私はたゞ忠實にあの想出で滿足してゐました。

エリーダ　(半ば冗談のやうに)おゝ、くだらない！昔の悲しい想出なんか打ちやつてお了ひなさいな。仕合せな夫になる工風をなさる方が、ずつと優ですよ。

アルンホルム　さうだとも、もうぐづ〳〵しては居られませんよ、奥さん。ねえ——お耻しい次第ですが——三十七は二度來ませんらね。

エリーダ　それなら、猶の事急がなくちやならないぢやありまんか。(少しの間默つてゐて、そして熱心に低い調子で)ですけれどねえ、アルンホルムさん——私ね、あの頃自分を救ふ必要から、どうしてもあなたにお話し出來なかつた事を、今お話しますわ。

アルンホルム　何ういふ事でせう？

エリーダ　あなたが、——今仰しやつた不成功な事をお望へなすつた時は——私、あゝよりほかお答へのしやうが無かつたのです。

アルンホルム　それは分つてゐます。あなたが私に下さるものは、友情しか無かつたのです。それはよく承知してゐます。

エリーダ　併しあなたはあの時私の心も考も全く他の方へ傾いてゐた事を御存じないでせう?。

アルンホルム　あの時?

エリーダ　え〻、ちやうどあの頃。

アルンホルム　けれども、それは有り得べからざる事ですよ!あなたは時を思ひ違へてゐらつしやる!その頃あなたはまだヷングルさんを御存じの筈はないのですもの。

エリーダ　私の言つてるのはヷングルさんの事ぢやありません。

アルンホルム　ヷングルさんでないんですつて?併しあの頃――ショルドウィツクで――あなたの氣に入りさうな者は、他には一人も居なかつたと思ひます。

エリーダ　え〻、え〻――それやさうに違ひありません。全體が氣違ひじみたお話なのですもの。

アルンホルム　どうかそれを聞かせて下さい!

エリーダ　ねえ、あの頃の私は、自由でなかつたのですよ、それだけ言つて置けば澤山。お分りでせう?

アルンホルム　で、その時若し自由だつたとすれば?

エリーダ　それが何うといふのでせう?

アルンホルム　あなたの私に下さる御返事は違つてゐたでせうか?

エリーダ　どうしてそんな事が分かりませう?ヷングルの時には違つてゐたのですけれど。

アルンホルム　ぢや何のためにあなたは自由でなかつたなんて事を仰しやるんですか?

エリーダ　（心苦しく心配さうに立ち上り）だつて私、誰れか打ち明け話の出來る人が無くちや困るのですもの。いえ〳〵、坐つたまゝでゐて下さい。

アルンホルム　ぢや御主人は何も其の事を御存じないのですか？

エリーダ　私の心が一度他のあるものに引きつけられてゐたといふ話は、最初にしたのですけれど、夫はそれ以上聞かうともしないのですよ。それからといふもの、遂に一度もその話をしたことはありません。兎に角氣ちがひ染みたお話に過ぎないのですからね。そしてそれもすぐお了ひになつて了ひました。少なくも——或る意味では。

アルンホルム　（立ち上り）或る意味だけで？すつかりぢやないんですか？

エリーダ　いゝえ、それは無論片づいたのですよ！あなたね、そんな風にお考へなすつちや、まるで違ひますよ。まあ、到底言明の出來ない事なのです。何うといつて、お話しする言葉もないと思ひますわ。つまり私は病氣だつたのか、それとも氣が狂つてゐたかとしか思はれないでせう？

アルンホルム　ねえ、奥さん——いよ〳〵そのお話をすつかり私に聞かして下さらなくちやなりません、聞かして下さるでせう？

エリーダ　さう仰しやるなら、話して見ませうが、あなたの、その健全な常識で、どうして斯んな事が考へられませう——（外を見、そして止める）ちよつと。此の次にしませう——誰か來ます。

（リングストランド左手から路に現はれ、庭園に入る。釦穴に花を挿し、手には紙で包んでリボンをかけた大きな花束を持つてゐる。外廊の前で立ち止まり、ちよつと躊躇する）

エリーダ　（四阿の口の方へ來て）誰を探していつしやるのですか、リングストランドさん？

リングストランド　（振り向きて）あゝ、そこにいらつしやいましたか、奥さん（禮をして近寄る）いゝえ、さういふ譯ぢやございません――お孃さんたちぢやございません。奥さんをお探ししてゐたのです。伺がつてもいゝといふお許しでしたから――

エリーダ　えゝ、えゝ、さうですとも、いつでもいらしつて下さいな。

リングストランド　難有御座います。ちやうど運よく今日はお宅のお祝ひ日だと承はつたものですから――

エリーダ　あゝ、それを御存じですか？

リングストランド　はあ、で私はこれを奥さんに献じたいと思ひまして――（禮をして花束を差し出す。）

エリーダ　（微笑して）だつて、リングストランドさん、その綺麗なお花はアルンホルムさんにお上げなさるのぢやありませんか？今日はあの方のためなのですから――

リングストランド　（面くらつて二人の顔を見くらべ）どうも失禮を――私其の方を存じませんが。たゞ、その――奥さん是れはお誕生日のお祝ひのつもりでございます。

エリーダ　誕生日のお祝ひ？あなた、思ひ違ひをしていらつしやるのですよ。宅では今日誰れの誕生日でもございません。

リングストランド　（靜かに微笑して）いや、それは萬事承知して居ります。併しそれほど秘密な事だとは知りませんでした。

エリーダ　御承知だつて、何をですか？

リングストランド　あなたのお誕生日だといふ事です、奥さん。

エリーダ　私の？

アルンホルム　（不審相にエリーダを見て）今日が？なあに、そんな事はない。

エリーダ　（リングストランドに）どうしてさう思ひなすつたの？

リングストランド　ヒルダさんがさう仰しやつたのです。ちやうど今少し前にお伺ひしましたらお嬢さんがたが、花や旗をこんなに立派にお飾りになつてゐますから、お聞きしたのです――

エリーダ　それで？

リングストランド　――するとヒルダさんの仰しやるには、「おつ母さんの誕生日ですから」つて。

エリーダ　おつ母さんの――！あゝ、さう。

アルンホルム　ははあ！

（アルンホルムとエリーダとは分かつたといふ風に顔を見合はす。）

アルンホルム　ねえ、奥さん、その若い方がさう御承知の上は――

エリーダ　（リングストランドに）えゝ、あなたが御存じでゐらしやる以上は――

リングストランド　（花束を又差し出して）祝意を表させて下さいますやうに――？

エリーダ　（花を取り）どうも有難う、ちよつとおかけなさいませんか、リングストランドさん？

（エリーダ、アルンホルム、リングストランドみな四阿の席につく。）

エリーダ　此の事は一切――私の誕生日だと申す事は――秘密にして置く筈だつたのですよ。

アルンホルム　さうのやうですね。吾々外部のものにはおつしやらない事になつてゐたのですね。

エリーダ　（花束を卓上に置く）えゝ、さうなの。外部の方には申さなかつたのですよ。

リングストランド　私はお誓ひいたします、生きてる者には誰れにだつて此の事は口外いたしません。

エリーダ　お〻、そんな意味で申したのぢやありませんよ。――で、あなたお加減はどうですか？いつもよりい〻やうに見えますね。

リングストランド　はあ、段々よくなるやうに思ひます。來年になつて南の方へでも行けましたら――

エリーダ　行らつしやる御計畫ですつてね、娘どもがさう言つてゐました。

リングストランド　え〻、ベルゲンに私を保護して呉れる人がゐまして、來年は行かして呉れるといふ約束です。

エリーダ　どうしてその方とお知合におなんなすつたの？

リングストランド　それが實に不思議な縁でした。私は嘗て一度その人の船で航海をした事があるのです。

エリーダ　さう？ぢやその頃あなたは舟乘にならうとしていらつしやつたのですね？

リングストランド　い〻え、少しも其のつもりぢやなかつたのです。けれども母が亡くなりましてから、父が私を家にぶら〱させて置くのを好まないで、海へ出したのです。所が歸りの航海にイギリス海峽で難船して了ひました。それが私に取つて大事件だつたのです。

アルンホルム　といふと？

リングストランド　その難船のために、私は病氣を受けたのです――此の胸にです。人が來て救つて呉れるまで、隨分長いあひだ氷のやうな冷たい水の中にゐました。そんな事で私は海を廢めて了ひました――さうです、それが實際不思議な仕合せだつたのです。

アルンホルム　あ〻！さういふのですか？

リングストランド　えゝ、つまり病氣は言ふに足りません、それよりか、私はこれで自分の本心の希望から彫刻家になるやうになつたのです。考へて見て下さい――指先一つで自由自在に微妙な形を現はして來る、あの和かい粘土でモデルを取つて行くのです！

エリーダ　で、あなたは何をモデルになさるおつもり？人魚の雄と雌？それとも、昔の海賊王ですか――？

リングストランド　いゝえ、そんなものぢやありません。やれるやうになつたら、すぐ大作を一つやつて見やうと思ふのです――いはゆる群像をです。

エリーダ　さう。でその群像は何の像なの？

リングストランド　あゝ、それは私自身の經驗から得た或るものです。

アルンホルム　さう〳〵それをおやんなさい。

エリーダ　ですけど、どんなもの？

リングストランド　さうですね、私の考では、茲に或る船乘の妻君がゐましてね、若い女ですが、一種不思議な不安の狀態で横になつて、眠りかけてゐるのです。そして眠ると夢を見るのです。そこを誰れが見ても、夢みてゐると分かるやうに作つて見せるつもりです。

アルンホルム　それ限りですか？

リングストランド　いゝえ。其のそばにもう一つ人物が――あります。――たゞ一種の姿といつてもいゝでせうが、それは其の女の夫なのです、女は夫の留守中に不義をしてゐました。所が夫は航海中溺死したのです。

アルンホルム　え、どういふのですつて――？

エリーダ　溺死しましたつて？

リングストランド　はあ、航海中に溺死したのです。所が不思議な事にはその夫が家へ歸つたのです。夜のことですが、歸つて來て妻の寢床の傍に立つて見つめてゐます。ちやうど今海から引き上げられたといふ風に濡鼠になつて雫が垂れてゐなくちやなりません。

エリーダ　(椅子により、後へそつて)何て不思議な思ひつきでせう！(眼を閉ぢて)あゝ私あり〳〵と見える樣ですわ！

アルンホルム　併しおよそ世の中に、君――君――！君は御自身の經驗から來たのだと仰しやつたね？

リングストランド　はあ――私の經驗からです、或る意味から、さう言つていゝのです。

アルンホルム　君は死んだ人が來るのを御覽なすつたか――？

リングストランド　いや、それを私が確實に見たといふのぢやありません。無論外形的に見たといふのぢやありません。けれどもやつぱり――

エリーダ　(興奮してもだへて)その話をあなたが御存じの限り殘らず聞かせて下さい！私、すつかり知りたいのですよ。

アルンホルム　(微笑し乍ら)はゝあ、成程これはあなたの畑ですね――海の不思議といふやうな事になると。

エリーダ　それで、どういふ譯なのです？、リングストランドさん？

リングストランド　さうですね、私たちがちやうど歸りの航海でハリファックスと言ふ港から其の帆船を出さうとすると、水夫長が病氣になつて病院に置いて行かなくちやならない事になりました。で、その代りに一人のアメリカ人を傭つたのです。すると此の新しい水夫長が――

エリーダ　アメリカ人の？

リングストランド　はあ――其の男が或る日船長から古新聞を一束借りて來て、毎日一心に見つゞけてゐました。ノルウェー語が習ひたいのだと言つてゐましたつけ。

エリーダ　さう、それから？

リングストランド　それから、ある晩の事でした、非常な暴れで水夫どもは殘らず甲板で働いてゐて――跡にはその水夫長と私たけしか居ませんでした。水夫長は脚を挫いて歩けないでゐたし、私は具合が惡くて床の中に寢てゐたのです。で、その男は例の通り寢椅子の中に座り込んで、古新聞を讀みつゞけてゐましたが――

エリーダ　はあ？　はあ？

リングストランド　だしぬけに、鋭い叫び聲を揚げました。私は愕りしてその方を見ると、水夫長の顔はまるで白堊のやうに蒼白くなつてゐて、それからその新聞を揉みくちやにして、細かく細かくずだ〳〵に裂き出しました。もつともそれを靜かに實に靜かにやつてゐました。

エリーダ　全く何も言はないで口を利かなかつたのですか？

リングストランド　初めのうちは何も言ひませんでした。けれども、暫くすると獨語のやうに斯う言ひ出しました「おれの居ない間に、――他の男と――結婚した」

エリーダ　（眼を瞑り、半ば獨語のやうに）そんな事を言ひましたか？

リングストランド　え〻。そしてどうでせう――立派なノルウェー語でそれを言つたのです。語學の天才があるのですね、あの男には。

エリーダ　それからどうして？　次はどうなつたのでせう？

リングストランド　それからが愈々不思議な事になるのです――生涯決して忘れられない事なのです。その男は――やつはり極めて靜な調子で斯う言ひ足しました。『併しあの女は己の物だ、己の物にしなくちやならないんだ。己が溺死して噐い海からあの女を連れに歸つてもあの女は、必ず己について來なくちやならないのだ。』

エリーダ　（水をコップに充たす、その手が震へてゐる。）あゝ――今日は暑苦しい事――！

リングストランド　そしてその言ひかたが非常な決心を持つてゐて、屹度その通り實行する男だと思はれたのです。

エリーダ　それからあなた――その男がどうなつたか御存じ？

リングストランド　そりや無論、死んだのですよ、奥さん。

エリーダ　（急いで）どうしてさうお考へなさるの？

リングストランド　それは、私達の船が海峽で難船しました時私は船長と他に五人許り一緒に大ボートで遁れたのですが、運轉士は小ボートに乘り込みました、そしてそのアメリカ人と今一人其の方へ一緒になりました。

エリーダ　其の後その方の樣子は分からないのですか？

リングストランド　はあ、一言の便りも聞かないです。私の保護者の所からつい先日さう言つて來ました。つまり是れが私の心を感動させて、群像彫刻を作らうと思ひ立たせた理由です。その船乘の不貞節な妻君が、私の眼の前に生々と浮んで來ます。またその男も、溺れ死んだに拘らず、復讐の爲に海から歸つて來るのが、ありありと見えます。私には二人とも實にはつきりと見えるのです。

エリーダ　私にもそれが見える。（立ち上り）さあ――彼方へ這入りませう。それともヴングルのゐる室へ行つた方がいゝか知ら！私、此處にゐると息がつまるやうでならないから。（四阿から出る。）

リングストランド　（矢張り立ち上る。）私はもうお暇した方がいゝでせう。今日はたゞ御誕生日のお祝ひを申上げたいばかりに伺つたのですから。

エリーダ　あら、もう、いらつしやらなくちやならないのですか――（手をさし伸べる。）左樣なら、花を有り難う御座いました。

（リングストランド禮をして庭口から左方に去る。）

アルンホルム　（立ち上りエリーダに近寄り）今の事があなたには辛かつたやうですね、奥さん。

エリーダ　あゝ、ねえ、そりやさう仰しやつてもいゝでせうけれど――

アルンホルム　併しつまりは、あなたが覺悟してゐらしやらなくちやならなかつた事です。

エリーダ　（愕いて彼を見つめ）覺悟して？

アルンホルム　はあ、さうだらうと思ひます。

エリーダ　男が歸ると覺悟して――？そんな風にして歸るだらうと？

アルンホルム　下らない、どうして世の中に――！全體あの氣違じみた彫刻家のお話なんか――？

エリーダ　だつてアルンホルムさん、あの男は、あなたがおつしやる程氣違じみちやゐないでせうよ。

アルンホルム　あなたの心をそれ程痛めさせたのは、あの愚にもつかない死人の話ぢやないでせう？私は屹度――

エリーダ　屹度どう？

アルンホルム　言ふまでもなく、お話の方は、あなたに取つちや、たゞ假託で、本當は家庭のお祝ひがあなたに内證でせられるのを見て、辛いとお思ひなすつたのでせう？――御主人とお子供さんとか亡くなつた方を思つてゐられる、あなたは

其の中から除けものにされてゐらつしやる。

エリーダ　まあ、とんだ事を。私そんな事は大して苦勞にもなりはせんの、夫に對して私一人だけといふ權利はないのですから。

アルンホルム　いや、その權利をお持ちなさらなくちやいけないと思ひますね。

エリーダ　はあ、ですけど事實持つてゐないのですから。さうなつてゐるのですから。で、私も自分の生活を持つてゐて――他人はその中に入れません。

アルンホルム　あなた！（一層柔かく）それでは何ですか――あなたは――あなたは實際御主人を愛してゐらつしやらないと仰しやるのですか？

エリーダ　そんな事があるものですか――私はあゝつたけの眞心で夫を愛するやうになりました！其のためですよ、こんなに恐ろしい――こんなに譯の分からない――何とも言へない事になつたのは――！

アルンホルム　あなた御遠慮は要りません、さう聞けば、奥さん、いよ〳〵あなたの苦しみを打明けて頂かなくちやなりません。聞かして下さい。奥さん。

エリーダ　だめですよ、あなた――兎に角、今はだめですよ。いつか其のうち。

（ボレッタ外廊から出て降りて來る。）

ボレッタ　今お父さんが外科室からいらつしやいます。御一緒に庭向のお部屋へ行きませうか？

エリーダ　あゝ、さうしませう。

（衣服を更へたワ゛ングルがヒルダと共に後方左から出て來る。）

ヷングル　さあ、これですつかりお相手が出來る！何か冷たい飲みものがあるといゝな。

エリーダ　ちよつと待つてらつしやい。（四阿に戻つて花束を持つて來る。）

ヒルダ　あらまあ！綺麗な花だ事！何處から取つてらつしやつたの？

エリーダ　これはね、ヒルダや、彫刻家のリングストランドさんから戴いたの。

ヒルダ　（ぎよつとして）リングストランドさんから？

ボレッタ　（不安さうに）リングストランドさん此處へいらつしやいましたか――あれからまた？

エリーダ　（半ば微笑し乍ら）あゝ。此の花束を持つてゐらつしやつたのよ――誕生日のお祝にね。

ボレッタ　（ヒルダを偸み見て）まあ――！

ヒルダ　（つぶやくやうに）畜生！

ヷングル　（當惑して心苦しさうにエリーダに向つて）ふむ――ねえ、お前――エリーダや、お前に言つて置かなくちやならないが――

エリーダ　（遮つて）さあお前たち、お出で！私の花を水に活けませう、他のも一緒にね。

（外廊の方へ上つて行く）

ボレッタ　（ヒルダに柔かに）ねえ、御覽、あんなに優しいぢやないの。

ヒルダ　（少し聲高に、怒りを帶んで）お茶番よ！たゞお父さんに取り入りたいからなのよ。

ヷングル　（外廊の上で、エリーダの片手を固く握り。）有難う――有難う――！あんなにして呉れて私は實にうれしいよ。

エリーダ！

エリーダ　（花を揃へ乍ら）おゝ、つまらない事を――なんで私が御一緒に祝はないでいゝものですか――母さんの誕生日ですもの

アルンホルム　ふむ――？

（彼はヴングルとエリーダの方へ行く。ボレッタとヒルダとは庭の中に殘る。）

第二幕

町の背後、木立ある高臺の見晴の上、後の方に標柱と風信機か立つてゐる。腰掛に用ひる大きな石が幾つか標柱の圍り及前方に据えてある。遙か下の方に峽灣の沖によつた邊が、點在した島や突き出た岬などと共に見える。外洋は見えない。空の低い邊は夏の夜の蒼白い薄明りで一杯になつてゐる。上の方は遙か遠方の山の峰々からかけて橙色に染まつてゐる。四部合唱の聲がかすかに右手下方の傾斜地から聞こえる。町の若い男女、右手から一對づゝになつて上り來り、親しげに話し合ひ乍ら標柱の所を通り左手に去る。稍後れてバレステッド、一組の外人旅客の案内者となつて出て來る。婦人のショールや旅鞄などを背負つてゐる。

バレステッド　(杖で上の方を指して)　御覽なさい、マイネ、ヘルシャフテン(皆さん)あそこに今一つ、アンデレ、ハイト(ほかの高臺)があるでせう？あれへもベシュタイゲン(登る)しませう、それからヘルウンテル(下の方)に(英語であとを喋りつゞけて、旅客を右手へ導き去る)

(ヒルダ右手の傾斜地から急いで上つて來て立ち留まり後ろを振り返り見る。すぐ後からボレッタがその路を上つて來る。)

ボレッタ　ヒルダ、お前、何もリングストランドさんを置き去りにして、驅け出さなくてもいゝぢやないの？

ヒルダ　だつて私、坂道をあんなにのろ〳〵とあるいちやゐられないのだもの――ほら――ほら、ね這つて上つて來るぢやないの？

ボレック　だつてお前、病氣なのぢやないか？

ヒルダ　重い病氣だと思つて？

ボレッタ　あゝ、屹度さうですよ。

ヒルダ　今日お午すぎにお父さんに診て貰つたのね。お父さんは何う思つてらしやるか知ら。

ボレッタ　お父さんの仰しやるにはね、あの人は肺病か――何かそんな病氣ですつて。迚も長くは持つまいと言つてゐてよ

ヒルダ　さう言つて、お父さんが？そら御覽なさい、私が思つてゐた通り。

ボレッタ　けどねえ、決してあの人にそんな事を知らしちやいけないよ。

ヒルダ　そりや心得てゐてよ（低い調子で）ほら！――あの人がやつとの事で上つて來てよ。ハンスさん――！ねえ、あの人の顏を見るとハンスといふ名だらうとは思はない？

ボレッタ　（呟く）ふざけちやいけないよ！氣をおつけ！

（リングストランド右手から入り來る。蝙蝠傘を携へてゐる。）

リングストランド　どうも失禮しました。追付いて來られませんでした。

ヒルダ　おや、傘を持つてらつしやるのね？

リングストランド　こりやあなたのお母さんのですよ。これをステッキの代りにしてもいゝと仰しやつたのです。私が自分のを持つて來なかつたものですから。

ボレッタ　みんなだま下にゐますか？お父さんや他の人たちも？

リングストランド　はあ。お父さんはちよつと料理店へいらつしやいましたが、他の連中は外で音樂を聞いてゐます。併し

今に上つて來るといふおつ母さんのお話でした。

ヒルダ　（彼を見つめてゐたが）　あなた大層勞れてらつしやるやうね？

リングストランド　はあ、少し勞れたかも知れません、ちよつと腰かけてゐた方がいゝやうです。（右手前方の右に腰を下す）

ヒルダ　（彼の前に立つてゐて）今少したつと下の音樂堂の方で舞踏があるでせう、あなた御存じ？

リングストランド　はあ、そんな事を聞きました。

ヒルダ　あなた屹度舞踏が大好きでせう？

ボレッタ　（叢の中で小さい花を摘んでゐたが）まあ、ヒルダ――リングストランドさんは息んでゐらつしやる方がいゝのですよ。

リングストランド　（ヒルダに）えゝ、ヒルダさん、私も舞踏は非常にやつて見たいのですがね――踊れさへすれば。

ヒルダ　おや、さう。お稽古なさらなかつたの？

リングストランド　はあ、稽古しませんでした。併し私の言つたのは其の意味ぢやなかつたのです。胸が苦しくて踊れないと言つたのです。

ヒルダ　あなたがおつしやつた、あのお怪我のせいで？

リングストランド　えゝ、其のためです。

ヒルダ　あなたは其の怪我のために一生不幸だとお思ひなすつて？

リングストランド　いゝえ、さうとは限りません。（微笑して）皆さんが斯うして親切にして下すつて、親しくたよりになつて頂くのも、みんなあのせいだと私は信じてゐます。

ヒルダ　さうねえ、で、その病氣は全く心配する程ぢやないのですか？

リングストランド　はあ、少しも心配する病氣ぢやありません。その點では、父さんのお見たても、他の醫者と全然一致するやうです。

ヒルダ　そして外國へいらつしやれば、すぐ癒つて？

リングストランド　えゝ、癒りますとも。

ボレツタ　（手に花を持つて）御覽なさいな、リングストランドさん――これをあなたの鈕穴にお挿しなさるといゝわ。

リングストランド　おゝ、お孃さん、どうも有難う！御親切は忘れません。

ヒルダ　（右手丘の下を見下して）あら、みんなあの道から上つて來てよ。

ボレツタ　（も見下して）あそこで曲ることを知つて居るのか知ら。いけないいけない、違つた道へ行くよ。

リングストランド　（立ち上り）曲り角まで駈けおりて行つて、呼んでやりませう。

ヒルダ　ぢや、大きな聲で呼ばなくちや駄目よ。

ボレツタ　いけない、お止しなさいよ。また勞れる許りですもの。

リングストランド　なあに、降りるのは、譯はありませんよ。（右手へ出て行く。）

ヒルダ　えゝ、降りるのはね、（後を見送る。）あら、飛んで行くよ！又上つて來なきやならいのに、その方は忘れてゐるのよ。

ボレツタ　かはいさうに――

ヒルダ　若しリングストランドが姉さんに結婚を申込んだら承知して？

ボレツタ　お前、どうかしてゐるのよ。
ヒルダ　それはね無論あの病氣かないとしてさ――あんなに死にかかつてゐるのでなかつたらさ。あなた承知して？
ボレツタ　お前さんの方が好い事よ。
ヒルダ　いやな事だ、それこそ大變よ。あの人はね一文無しで自分さへもかつ〳〵なのよ。
ボレツタ　ぢやどうしてお前、さうあの人の事ばかり氣にしてゐるの？
ヒルダ　あら、それはね、あの人の『病氣』が氣になるのよ。
ボレツタ　だつて、お前は、少しも氣の毒がつてる樣子なんかないぢやないの？
ヒルダ　氣の毒とは思はないわ。けれど、私、なんだか斯う、面白くて釣り込まれるやうよ――
ボレツタ　何がさ？
ヒルダ　彼の人を見てゐると、そして、あの人に、心配する程ぢやない〳〵つて言はせてやると、そして、外國へ行つて美術家になる〳〵と言はせてやると。あの人はすつかりそれを自信してゐて、そりやもう喜んでゐるのだもの。で、つまりはそれがみんな當がはづれて、何も出て來やしない。それまで生きちや居られなくなつて了ふ。さう思ふと私ほんとうに痛快だわ。
ボレツタ　痛快だつて！
ヒルダ　えゝ。痛快よ――私、さう言つてよ。
ボレツタ　およし、ヒルダ、お前ほんとうに、驚いた子だね！
ヒルダ　えゝ、私さうなるつもりよ――馬鹿らしい（見下して）あゝ、やつて來た！アルンホルムさんは奇り道が嫌ひのや

うだわ。(向き返つて)あ、だけどね、――私、お晝飯の時アルンホルムさんに就いて發見した事があるのよ、何んだか分つて？

ボレツタ　なあに？

ヒルダ　あのね――あの人の頭が段々禿げはじめたのよ――ちようど頂邊のところ。

ボレツタ　まあ、嘘ばつかし！決してそんな事はなくつてよ。

ビルダ　いゝえ、さうよ。そうしてね、ここのところに、兩方の眼の縁に皺があつてよ。一體まあ、姉さんは、自分の家庭教師だつた人がどうしてそんなに好きになつたの？

ボレツタ　(笑ひ乍ら)　ねえ、分らないでせう？私ね、一度あの人に　ボレッタといふ名はいやな名だと言はれてひどく泣いた事があつたつけ。

ヒルダ　そらね！(又見下して)　ほら、あそこを御覽なさいよ！――あそこに「海の夫人」がアルンホルムさんと一緒にあるいてるてよ――お父さんとでなく、あの人と、べちやくゝ、お喋りをしながら。私、あの二人は、少し怪しいのぢやないかと思ふわ。

ボレツタ　お前ほんとうに恥知らずですよ。どうしておつ母さんの事を、そんなにはしたなく言ふのですよ。折角うまく行きかけてゐたのに――

ヒ・ルダ　さうでせうとも！――さう思つてるらつしやいよ、お孃さん！ほんとうはね、到底私たちとあれとは、うまく行きつこなしっ。向ふは私たちと氣が合はないし、私たちは向ふと氣が合はないんだもの。どうしてまあ、お父さんはあんな人を家へ引つぱり込む氣になつたのでせう！あの人だつて、こんな事をしてゐて、今に氣違にでもなるのが落ちよ、結構だ

わ。

ボレツタ　氣違だつて？どうしてお前そんな事を考へて？

ヒ・ルダ　別に不思議も何もないわ。あの人のお母つさんも氣が違つたぢやないの？氣が違つて死んだのですつて。

ボレツタ　まあ、お前は何にでも啄を突つこむ人ねえ。もう〳〵そんな事は言ひつこなし。おとなしくおし――お父さんのためだからねヒルダ？

（ヴンゲル、エリーダ、アルンホルム及リングストランド右方から上り來る）

エリーダ　（後の方を指して）あの邊に當りますよ。

アルンホルム　あゝそうです〳〵。あの方角でなくちやなりません。

エリーダ　彼處がすつと海なのですよ。

ボレツタ　（アルンホルムに）此處は見晴しがいいでせう？

アルンホルム　むしろ雄大、ですね――素晴しい景色です！

ヴンゲル　君はまだ一度もここへはお上んなさらなかつたか？

アルンホルム　いえ、まだ一度も。私のゐた頃には、また來られる場所　なかつたやうです。こんな路もなかつたのですから

ヴンゲル　地形なんぞも、少しもついてゐなかつたしね。それが出來たのはつい四五年の事ですよ。

ボレツタ　あの上の見晴臺の丘だと、景色がもつと雄大ですわ。

ヴンゲル　彼處へ行かうかね、エリーダ？

エリーダ　(右手の石に腰をかけて。)　ありがたう、私やめますわ。あなたがた行つていらつしやい。其のあひだ私はここで息んでゐますから。

ヴングル　さうか、では、私はお前とここで息んでゐやう。お前たちアルンホルムさんのお供をするがいゝ。

ボレツタ　私たちと御一緒にいらつしやいな、アルンホルムさん?

アルンホルム　はあ、ありがたう。そこへ行くにも路がついてゐますか?

ボレツタ　えゝ〳〵、廣い、いゝ路ですよ。

ヒルダ　二人並んで手を繋いで歩いても十分よ。

アルンホルム　(冗談のやうに)　ほんとうにさうですか、ヒルダさん!(ボレツタに)どうです二人でためして見やうぢやありませんか!

ボレツタ　(笑を抑へて)　えゝ、どうぞ。さあ、(二人腕を組み合つて左方に出て行く)

ヒルダ　(リングストランドに)　私達も行きませうか——!

リングストランド　手を繋いで——?

ヒルダ　いゝぢやないの。私平氣ですわ——。

リングストランド　(腕を貸し、嬉しさうに笑つて)　こりやおもしろいですね。

ヒルダ　おもしろい——?

リングストランド　でも、ちようど私たちが結婚約束をしてゐるやうぢやありませんか?

ヒルダ　あなた屹度まだ婦人に腕を貸して散歩したことがないのね。リングストランドさん。(二人は左方に出て行く。)

ヷングル　（後方標柱の傍に立つてゐて）エリーダや、これで少しの間やつと二人だけになつたね——

エリーダ　えゝ、此處へいらつしやい、此處へおかけなさいな。

ヷングル　（腰を下して）此處はからつとしてゐて實に靜かだね。ここで少し話したい事がある。

エリーダ　どんな事！

ヷングル　お前の事さ、それから私たちお互の關係に就いてもね。こんな樣子で長く續くものでない事は、私によく分つてゐるよ。

エリーダ　ぢやその代りにどうなさらうと仰しやるの？

ヷングル　何處までも信じ合はなくちや、お前。一心同體にならなくちや——もとさうだつたやうにさ。

エリーダ　あゝ、さう出來さへすればねえ！けど、とても／＼出來ない事ですわ！

ヷングル　お前のその心持は分かつてゐる積りだ。時々のお前の素振りから、私にはそれが分かると思ふ。

エリーダ　（激しく）いえ、あなたには分りません！分つてゐるとは言はせません——！

ヷングル　分かつてゐるよ。お前は眞直な性分だ。眞實な柄合を持つてゐる。

エリーダ　はあ、持つてゐます。

ヷングル　お前が安全だと思ひ、幸福だと思ふことの出來るのは、いつでも完全無缺な場合でなくちやいけないのだ。

エリーダ　（不安さうに見つめて）さう——だから？

ヷングル　お前は人の後妻なんかには適しない。

エリーダ　今になつてどうしてそんな事を思ひついて？

ワングル　たび〳〵さういふ疑ひは起こつたのだが、今日明かにそれを認めた。子供等の今日紀念祭に――お前は、私も一種の仲間だと見たやうだが――そりや勿論人の記憶といふものは拭ひ消すことの出來ないものだ。――とにかく私にはそれは出來ない、私の性分がそれを許さない。

エリーダ　それは知つてゐます。えゝ、よく解つてゐます。

ワングル　然し、矢張り、お前は思ひ違ひをしてゐる。お前は何だかまだ彼等の母が生きてでもゐるやうに思つて、我々の中へ、目に見えない姿を現してゐるやうに感じてゐる。私の心がお前とあれとの間に二分せられてゐると思つてゐる。其の考がお前の胸を掻き亂すのだ。お前には、私とお前の仲が、何か不德義なものでもあるやうに見えて、そのため、私と一緒に、私の妻としてやつて行くことが出來ないのだ。さうする氣が起らないのだ。

エリーダ　(立ち上る)あなた、それをすつかり御覽なすつて？すつかり見とほして御覽なすつて？

ワングル　然、今日私はとほ〳〵それを見とほした――底の底まで見とほした。

エリーダ　底まで見とほしたのですつて？おゝ、どうして、あなたにそんな事が言へませう。

ワングル　(立ち上り)　そりや、その上にまだ譯のあることも、私はよく知つてるよ、エリーダ。

エリーダ　(氣がゝりのやうに)まだ他に譯のあることを御存じ？

ワングル　然、其の譯といふのはね、お前にはこの邊の周圍が我慢しきれない。山が多くてそれがお前を壓迫して精神を滅いらせて了ふし、光線もお前には充分でないし――眼界も至つて狹いし――空氣も強くないからお前に取つては刺戟が足りない。

エリーダ　其の點は全くさうですよ。冬だつて夏だつて、夜晝なし私につきまとつて離れないのは――海です、海の戀しい

病氣です。

ヷングル　エリーダ、それはよく知つてゐるよ（エリーダの頭に手をあてゝ）だから可愛さうな病人はまた自分の郷へ歸らなくちやならない。

エリーダ　それはどういふ事？

ヷングル　言葉通りさ。引き移つて行かうよ。

エリーダ　移るのですつて！

ヷングル　さうさ。何處か外海に臨んだ所で――お前の氣に入つて、眞個の家だと思へるやうな場所へ。

エリーダ　まあ、あなた、そんな風にお考へなすつちやいけないのよ！そんな事は到底出來るものぢやありません。あなたには、ここよりほかに幸福に住める所は、世界中にないぢやありませんか？

ヷングル　そんな事はどうにでもなるさ、その上――お前がゐないとしたら――此處で私が幸福に暮して行けると思ふか？

エリーダ　だつて私ここにゐるぢやありませんか。斯うしてゐるぢやありませんかあなたの妻ですもの。

ヷングル　ほんとうに私の妻だらうか、エリーダ？

エリーダ　あゝ、もう、その事は言はないで頂戴。あなたは此處にゐらつしやれば、生活して息をついで行くものが揃つて居ます。あなたの生涯の仕事がみんなここにあるのですから。

ヷングル　そんなことはどうでもいゝと言つてるぢやないか。此の土地を引拂はうさ――何處か外海に近い所へ移らうよ、ね、私はもう決心をしたよ。

エリーダ　ですけど、そんな事をして、どんな益があるとお思ひなすつて？

ヴングル　お前の健康と心の平和がとりかへせるだらうさ。

エリーダ　私それを疑ひますわ。で、あなた御自身は！あなたの自身の事もお考へなさらなくちや。あなたはそれで何んな利益があるでせう？

ヴングル　私はそれでお前を取りかへす事が出來るよ、エリーダ。

エリーダ　けれど、それが出來ないのですよ！だめなの、だめなの、それが出來ないのです！そこが、考へてもぞつとするほど辛い苦しい羽目なのです。

ヴングル　それはやつて見なけりや分らない。とにかくお前がここにゐてそんな考に取つ付かれるといふのなら、こゝからお前を連れて退くに越した事はない。それも早いほどいゝのだ。私はもう固く決心したよ。

エリーダ　いけない！それよりか――あゝ、どうしやう――私、何もかも包まず言つて了ひますわ、ありのまゝに。

ヴングル　あゝ、あゝ、さうして呉れ！

エリーダ　私のためにあなたが不幸な思ひをなさらないやうにね、どうせさうしたつて、何の役にも立たないのですから。

ヴングル　お前は何もかも話すと約束したぢやないか――ありのまゝに。

エリーダ　話しますよ、私に分つてゐて、私に話せるだけは――さあ此處へいらつして、私の傍へかけて下さい。

（二人石の上に腰かける。）

ヴングル　それで、エリーダ？それで――？

エリーダ　あなたはね、あの日彼處へいらつしつて。私に、妻になつて呉れないかとお聞きなすつた時――何も隠さないであけすけに初めの結婚の事をお話しなすつたのね。大層仕合せだつたとおつしやつたのね？

ヴングル　そりや、さうだつた。

エリーダ　さうでせうとも、私にもそれはよく信じられます。けれどそれを今言はうと思つたのぢやありません。たゞそれと一緒に、私も自分の身の上を打ち明けて置いたからそれを思ひ出して貰はうと思つたのです。私は生涯に一度、他の或る人を思つた事があると、その時包まず言つて置きました。それも殆ど――一種の結婚約束をするまでになつてゐました。

ヴングル　一種の――？

エリーダ　えゝ、結婚約束のやうな事を。でもそれはほんの少しの間で、その男は行つて了ひましたの、それからしばらく立つて、私は約束を取り消しました。此の事はもうみんなお話ししましたね。

ヴングル　だから、エリーダや、どうしてそんな事を繰りかへすのだ？そんな事は要するに私に關係がないぢやないか？私はその男が誰だつたかさへ問つた事はないよ。

エリーダ　えゝ、さうでした。ほんとうにあなたは私のためにいつも氣を遣つてゐらつしやるのね。

ヴングル　（微笑して）いや、此の場合、其の人の名は聞くまでもなかつたのさ。

エリーダ　其の人の名を？

ヴングル　ショルド、ウィックからあの邊に、さう澤山これはといふ人はゐなかつた。といふよりも、一そたゞ一人しか居なかつたと言つていゝくらゐだ――

エリーダ　それでは屹度――アルンホルムさんだと仰しやるのでせう

ヴングル　さうだ――ぢやないのか？

エリーダ　違ひます。

―

ヴングル　さうぢやないのか？それぢや、どうも私には見當が付かない。
エリーダ　あなたは、何年か前に、秋の末ごろ、大きなアメリカ船が一艘、ショルドウィツクへ修繕のため這入つて來たのをおぼへて居らしつて？
ヴングル　あゝ、よくおぼへてる。朝起きて見ると船長が室の中で殺されてゐたのは、あの船だつた。私が檢視に行つた事をおぼへてゐる。
エリーダ　えゝ、さう、でした。
ヴングル　殺した犯人は、二等運轉士だつたね。
エリーダ　それは誰にも分かつちやゐません。證據は到頭上りませんでした。
ヴングル　でも、全くそれに疑ひないよ。でなくて何うしてその男が逃げたり、自分で溺死したりするものかね。
エリーダ　その男は溺死したのぢやありません。北行きの船に乘り込んで逃げたのですよ。
ヴングル　（愕く）どうしてお前それを知つてゐるか？
エリーダ　（一生懸命で）　それはね、あなた――それはね、その二等運轉士なのですもの、私が――結婚約束をしたのは。
ヴングル　（愕いて立ち上り乍ら）何うしたと？そんな事があり得やうか？
エリーダ　たしかに――その男とですよ。
ヴングル　けれども、お前、どうしてまあ――！一體どうしてそんな事が出來たのだ！自分から求めてそんな男と結婚約束をするなんて！まるつきり知らないものと！――その男の名は何と言つたのだ？
エリーダ　その頃は自分でフリーマンと言つてゐましたが、後に手紙を寄越した時は、アルフレッド、ジョンストンと書いて

ありました。

ヷングル　それで一體何處から來たのか？

エリーダ　フィンマルクからだと言つてゐました。もつとも生れはフィンランドの方で、小供のとき、なんでも父親に連れられて、國を出たのですつて。

ヷングル　それでは、クェーン人なのだ。

エリーダ　えゝ、さう言ふのですつて。

ヷングル　其のほかに、まだ何かその男の事を知つてゐるか？

エリーダ　唯ね、ごく若い時から船に乘つて、幾度も長い航海をしたといふ事だけです。

ヷングル　その外には何にも？

エリーダ　えゝ、何にも。そんな話はまるでしなかつたのですから。

ヷングル　ではどんな事を話してゐたのかい？

エリーダ　重に海の事を。

ヷングル　ふむ――！海の事を？

エリーダ　海に暴風が來たり凪いだり、暗い夜半の海だの、ぎら／＼日光を照り返してゐる海だの、いろんな事を話しました。けれど一番よく聞いたのは、鯨や海豚や、日中に暗礁の上で日向ぼつこをしてゐる海豹の話でした。それから又鷗や鷲や、其の外の海鳥の話もしました。すると――不思議ぢやありませんか？――そんな話につれていつか其の海の獸や鳥がみんなその男と血のつゞいたもののやうに思はれて來ますの。

一

ヴングル　でお前自身は――？

エリーダ　えゝ、私だつて、よつぽどさう思ひました、あれらと何所か命が通つてるやうに。

ヴングル　さうだらう、さうだらう――それでお前がその男と約束をするやうになつたのだね？

エリーダ　えゝ、その男が、さうしなくちやならないと言ひました。

ヴングル　しなくちやならない？お前は自分の意志といふものを持たなかつたのか？

エリーダ　その男が傍にゐるとさうでした。――後になつて見ると、まるつきり自分にも譯が分からなかつたのですよ。

ヴングル　その男には度々逢つたかい？

エリーダ　いゝえ、さうたび／＼ぢやありません。或日その男が燈臺を見に來たとき始めて逢つたのです。それから折々逢つてゐましたが、其のうちにあの船長の事件が起こつて、そこを去らなきやならないやうになりました。

ヴングル　あゝさうか、その話をして呉れ？

エリーダ　朝早くまだ薄暗い時刻でしたが、その男から私へ短い手紙が來たのですよ。それによると、私はブラットハムメルにゐる其の男に逢ひに行かなくちやならない。――そら、御存じでせう？ショルドヴォックの間の岬を。

ヴングル　あゝ／＼――よく知つてゐる。

エリーダ　何か話したい事があるから　私にそこまですぐ來なくちやならないと書いてゐました。

ヴングル　で、お前行つたのか？

エリーダ　えゝ、仕方がなかつたのですよ。でね――その男は昨夜自分が船長を刺し殺したといふ話をしました。

ヴングル　その男が自分でお前に有りの儘を話して！

エリーダ　はあ。ですけどそれはたゞ正當な事をしたに過ぎないとその男は言つてゐました。

ヷングル　正當な事？　ではどんな理由で刺し殺したと言つたか？

エリーダ　理由は話したくないやうでした。私の聞くべき事ぢやないと言つてゐましたつけ。

ヷングル　それをお前は言葉だけで信用したのかい？

エリーダ　はあ、私は初めからその男を疑ふ氣なんか起こりませんでした。で、まあ、とにかくその男は立ち退くことになつて、私に暇乞をしやうとした、其の間際に――ねえ、その男が何をしたとお思ひなすつて？

ヷングル　ふむ、言つて御覧。

エリーダ　隱しから鍵輪を取り出して、いつも自分の指に篏めてゐた指輪と私が持つてゐた小さい指輪とを取つて二つ一緒にその鍵輪に通したのです。そしてその男の言ふには私達二人、海と結婚をしなくちやならない。

ヷングル　結婚――？

エリーダ　えゝ、さう言ひました。それからその大きな輪と小さい二つの指輪を、出來るだけ遠い沖の方へ投げ込んでしまつた

ヷングル　そしてエリーダ、お前は？　お前は？　それを承知したのか？

エリーダ　えゝ、嘘のやうな話ですがその時は私、さうしなくちやならないのだと思ひました。――けど、仕合せと、これ限りその男は行つて了ひました！

ヷングル　でその男が行つて了ふと？

エリーダ　そりやもう、言ふまでもなく、私はすぐ正氣に返つて、すべてが馬鹿々々しい、意味のない事だと氣づきました。

ヷングル　併しお前は手紙の事も何か言つてゐたが、その後便りがあつたのか？

エリーダ　はあ、便りはありました。始め、アーチャンジェルから來た短い手紙にはたゞアメリカへ渡るといふ事しか書いてなくて、返事を送る宛がしるしてありました。

ヴングル　返事をやつたか？

エリーダ　直にやりました。無論、二人の間はあれ限り斷えた事にしなくちやならないと書いてね——私は決してもう其の男を思はないから、向ふも二度と私の事を思つちやならないつて。

ヴングル　それでもやつぱり手紙を寄越したのか？

エリーダ　えゝ、また寄越しました。

ヴングル　で、お前のいつてやつた事に、どういふ返事をして來たか？

エリーダ　一言も言つて來ないの。關係を斷つなんて話は、まるでなかつたやうな書きぶりで、私に待つて居なくちやならないと、極おとなしく言つてよこしました。用意が出來たら知らせるから、すぐその男の方へ來るやうにといふのです。

ヴングル　お前を手ばなすまいとするのだね？

エリーダ　えゝ、ですから私また手紙を出しました、殆ど一句々々、前と同じことを書いて、たゞもつと強い言葉で。

ヴングル　それで先方も我を折つたのか？

エリーダ　いゝえ、我を折る段ぢやありません。前と同じやうに穩やかな手紙をよこして關係を斷つなんて文句は、まるで氣がつかないやうでした。ですから、私、もう無駄だと思つて、それきり手紙もやらない事にしました。

ヴングル　向ふからもそれつきりか？

エリーダ　いゝえ、向ふからは其の後三通來ました。一度はカリフォルニアから、一度は支那から、その次には最後に濠州

から、よこして、金山へ行くのだと言つてゐましたが、それきり何のたよりもありませんの。

ヴングル　其の男はお前に對して、一種不思議な力を持つてゐたのだね、エリーダ。

エリーダ　えゝ、さうです。あの怖ろしい男！

ヴングル　併しお前、もうその事は考へちやいけない。決して考へちやならない！それを私に誓つて呉れ、ねえ、エリーダや！そこで今度はお前に別な療治をして見やう――こんな峽灣の奥の空氣よりも、もつと新鮮な空氣で、鹽分に富んだ軟かい海風で、ね！どうお思ひか？

エリーダ　あゝ、それを言はないで下さい！そんな事をお考へたすつちやいけません！少しも私のためにはならないのですから！他へ移つたからと言つて、やつぱり打つちやられるものでない事は、分かつてゐます。私さう感じるのですよ。

ヴングル　打つちやるつて、お前――何をさ？

エリーダ　その男の怖いのをですよ。あの底の知れない不思議な力が私の魂に被さつて――

ヴングル　だけどお前もうそれは打つちやつたぢやないか！ずつと以前、お前が其の男と緣を絶つた時に。今ぢやもう久しい前に濟んだ事だ。

エリーダ　（起ち上り）いゝえ、要點はそこですよ。まだ濟んぢやゐないのです！

ヴングル　濟んでゐない！

エリーダ　はあ、あなた――濟んでゐないのです！そして恐らく、いつまでたつても、濟みはしないでせう。此の世にゐる限りは濟まないでせう。

ヴングル　（息つまりのしたやうな聲で）それではお前、どうしても心の底からその不思議な男を忘れる事が出來ないと言ふ

のか？

エリーダ　一度ば忘れてゐましたが、だしぬけにまた戻つて來たやうに思はれます。

ヴァングル　いつ頃からか？

エリーダ　もう三年ぐらゐか、も少しになりませう――ちやうど――あの子の生まれる前でした。

ヴァングル　あゝ、あの時か？それでは、エリーダや――私にも事情が分かりかけて來たよ。

エリーダ　あなたそれは間違ひですよ！私の上へ被さつてゐる此の――あゝ、何と言ひませう、とても〳〵人に分かるものぢやありません。

ヴァングル　(見つめて心苦しげに)　此の三年間、ずつとお前の心が他の男の方へ行つてゐたと思ふと。他の男の方へ！私でなく――他の男の方へ！

エリーダ　あゝ、あなたはまるで私を誤解してゐらつしやるのねえ。私はあなたよりほか、誰をも愛しちやゐません。

ヴァングル　(低い調子)　でそれなら、なぜ、その間お前は私の妻として一緒に生活することを拒んだのだらう？

エリーダ　それは、あの不思議な男が私に怖かつたからですよ。

ヴァングル　怖かつたから――？

エリーダ　えゝ、怖かつたからです。その怖さと言つたら、ちやうど海から染み込んで來るとしか思へないやうな物凄さです。それはこれからお話ししますから――(町の若い人々左手から戻り來り禮をして右方に出て行く。それらと共にアルンホルム、ボレッタ、ヒルダ及リングストランドが出る。)

ボレッタ　(通りかけに)　おや！未だ此處にいらつしやるの？

エリーダ　あゝ、高臺の上はほんとうに涼しくていゝ氣持ですよ。

アルンホルム　私達の方は、これから降りて踊りに行かうといふのです。

ヷングル　それがいゝ。私達もすぐ降りて行きますよ。

ヒルダ　ぢや後ほど。

エリーダ　リングストランドさん——あなた一寸待つて下さいな。

（リングストランド立ち留まる。アルンホルム、ボレッタ及びヒルダ右手に出て行く。）

エリーダ　（リングストランドに）あなたも舞踏にいらつしやるの？

リングストランド　いゝえ、奥さん、私は行くまいと思ひます。

エリーダ　さうですよ、あなたは氣をお注けなさらなきや。その胸の御病氣がね——まだ十分よくなつていらつしやらないのだから。

リングストランド　はあ、十分治つて居ません。

エリーダ　（稍ためらふやうに。）あなたがお話の航海をなすつてから、何のくらゐになりますか——？

リングストランド　私が病氣を受けてからですか？

エリーダ　はあ、今朝お話しなすつた、あの航海ですよ。

リングストランド　あゝ、さうですか、それはちやうど——待つて御覽なさいよ——さうです、きつかり三年になる筈です。

エリーダ　三年？

リングストランド　或はも少し前かも知れません。アメリカを出帆したのが二月で、難船したのが三月でした。彼岸の狂風

に出くわしたのです。

エリーダ　（ヴングルを見て）ね、ちやうど其の時ですよ。

ヴングル　けれども、お前――？

エリーダ　ぢや、リングストランドさん、お邪魔をしてはいけないから、いらして下さいな、けれど、踊ることはお止しなさいよ。

リングストランド　はあ、たゞ見てゐませう。（右手に去る）

ヴングル　エリーダや――何故お前その航海の事を、證人調べでもするやうに聞いたのかい？

エリーダ　ジョンストンがその船にゐたのですよ。それは私、堅く保證して見せます。

ヴングル　どうしてそんな事が考へられるか？

エリーダ　（それには答へずに）あの男がその船にゐて、留守中に私が他の男と結婚したことを聞いたのです。そして其の途端に、私がこんなになつたのです！

ヴングル　怖いのがか？

エリーダ　えゝ。隙さへあれば、だしぬけにあの男の姿が見えて来るのです。すつくりと私の前に立つて、幾らか片方へ寄つてゐます。決して私を見つめないで、たゞそこに立つてゐるのですよ。

ヴングル　どんな風で現はれるのだ？

エリーダ　最後に逢つた時のまゝで。

ヴングル　十年前に？

エリーダ　えゝ、ブラットハムメルでね。そして私にはあの男の襟飾のピンが、一番はつきり見えます、大きな青味がゝつた眞珠が一つ篏めてあつて、それが死んだ魚の眼玉のやうにぎよろ／＼として私を睨んでゐるやうです。

ヷングル　あゝ――！お前の病氣は、想つたよりも悪い、お前が氣づいてゐるよりも悪いのだよ、エリーダ。

エリーダ　さうです、さうです――何卒私を救つて下さい！段々それに締めつけられるやうな氣がしますから。

ヷングル　それでお前はまる三年といふもの、こんな有樣でゐたのだね！こんな秘密な心配を打ち明けもしないで！

エリーダ　それは打明けられなかつたからですよ。今あなたの爲に必要になつて打ち明けたのですけれど、それまでは打明けられなかつたのですよ。若し殘らず言つて了ふとなれば、やつぱりあの――口で言へない事も――

ヷングル　口で言へない事――？

エリーダ　（避けるやうに。）いえ、いえ、聞かないで下さい！たゞもう一つ、それでお了ひです――あなた、どうしたらあの不思議が解けるでせう？――あの、子供の眼の――？

ヷングル　これ、エリーダや、それは全然お前の妄想といふものだ、あの子の眼も、普通の子供の眼と少しも違つちやゐなかつた。

エリーダ　いゝえ、さうぢやなかつたの！それが見えない筈はないぢやありませんか？あの子の眼は、海と一緒に色が變りました。入江に日がさして靜かな時だと、眼も靜かで明るいし、暴れの日だと眼もその通りに變る。あゝ、私、よくそれを見て置きました。あなたは御覧なさらなくとも。

ヷングル　（慰め乍ら）ふむ――さうかも知れない。が、さうだつたとしてもそれがどうと言ふのか？

エリーダ　（柔かく、彼に近づいて）私はね、それと同じ眼を、前にも見ました。

ヴングル　何時？・何處でさ――？

エリーダ　ブラットハムメルで。十年前に。

ヴングル　（一歩退いて）何うしたと――！

エリーダ　（震へ乍ら呟く。）あの子はあの不思議な男の眼を貰つたのですよ。

ヴングル　（思はず叫ぶ）エリーダ――！

エリーダ　（絶望して兩手を頭の上で握りしめ）それであなたも分かつたでせう？・私がどうあつても、あなたの妻として一緒に生活することの出來ない譯を、さうしない譯を！

（エリーダは急に振り返り一散に丘を右手に馳け下る。）

ヴングル　（後を追ひかけ呼ぶ）エリーダ！エリーダ！エリーダ！可哀さうに！

第三幕

醫師ワングルの庭の片隅。その邊りは濕氣多く、土が濡れてゐて大きな老木が茂つてゐる。右方に水の澱んだ池の端が見える。後ろに低いまばらな垣があつて路及峽灣と庭とを仕切つてゐる。遙か遠方、峽灣の彼方には山脈が見えて幾つかの峯を峙てゝゐる。午後遲く殆ど夕暮。

ボレッタ左手の石の上に腰かけて縫物をしてゐる。腰掛の上に二三冊の書物と仕事籠が置いてある。ヒルダとリングストランドは二人とも釣道具を持ち、池の端に立つてゐる。）

ヒルダ　（リングストランドに合圖をする。）ぢつとしてゐらつしやいよ！彼處に大きいのが一尾見えたから。

リングストランド　（見廻し乍ら）何處にです？

ヒルダ　（指して）見えなくつて――そら、あそこ。ほらまた！そこにも見つかつたり！（木立の間を透し見て）うゝ――向ふへあの人がやつて來たおかげで、みんな逃げちやつた！

ボレッタ　（見上げて）誰れが來るの？

ヒルダ　あなたの先生よ、お孃さま！

ボレッタ　私の――？

ヒルダ　はい。仕合せと私の先生にはならなかつたのですよ。

（アルンホルム右手、木立の中から出て來る）

アルンホルム　どうです、その池に魚がゐますか？

ヒルダ　はあ、非常に年を取つた鯉がゐます。

アルンホルム　へえ、そんなに年を取つた鯉がまだ生きてゐるのですか？

ヒルダ　え丶、中々丈夫よ。然し今に幾つか片づけてやつてよ。

アルンホルム　却つて入江の方がよくはありませんか？

リングストランド　い丶え、池がい丶ですね――池の方がいはゆる神秘的な分子に富んでゐます。

ヒルダ　さうよ、こ丶の方が一層痛快ですわ。――あなた浴びてゐらした所？

アルンホルム　たしかに。浴舍から眞直にこちらへ來たのです。

ヒルダ　あなたの圍の中だけでせう？

アルンホルム　はあ、私はあんまり泳げませんから。

ヒルダ　あなた仰向いて泳げて？

アルンホルム　い丶や。

ヒルダ　私泳げてよ（リングストランドに）向ふ側へ行きませう。

（二人は右手の方へ池の縁に沿うて出る。）

アルンホルム　（ボレッタに近寄り）あなたお一人？ボレッタさん。

ボレッタ　え丶、私大抵一人ですわ。

アルンホルム　お母さんはお庭ぢやありませんか？

ボレツタ　いゝえ、父と一緒に散歩してるだらうと思ひます。

アルンホルム　今日お午から何んな御様子でした？

ボレツタ　よく存じませんの。聞くことを忘れちやつて。

アルンホルム　そこにあるのはどんな本です？

ボレツタ　え、一つは植物の本で一つは地理ですわ。

アルンホルム　あなたさういふ種類の書物を讀むのがお好き？

ボレツタ　えゝ、閑暇のありますときは――。ですけど家庭の世話の方が第一ですから。

アルンホルム　併しおつ母さんが――今のおつ母さんが――其の方は助けて下さるでせう？

ボレツタ　いゝえ、私の役目なの。私ね、お父さんが一人でいらしたあひだ二年間其の世話をしたのですよ、で、それからずつと引き續いてやつてゐます。

アルンホルム　でもあなたは、前と同じやうに讀書がお好きなのですね？

ボレツタ　はあ、有益な書物は手にはいるだけみんなよみますの。幾らでも世間の事が知れると、ほんとにうれしうござんすわ。私たちは、まるきりかけ離れた生活をしてゐるのですもの――殆どまるつきり。

アルンホルム　なんです、ボレッタさん、そんな事を言つちやいけない。

ボレッタ　けど、私さう言ひますわ。私達の生活と、あの池の鯉の生活とたいした違ひはないのですもの。書物に入江があつてそこでは大きな自由な魚の群が、出たり這入つたりしてゐても、かはいさうな手飼の鯉とては、そんな事はちつとも知らないで一生、それに交ることも出來ない。

アルンホルム　入江に出て行つたとしても、鯉どもにそれが適するかどうかは分かりませんな。

ボレッタ　そんな事はさう構つたものぢやないと思ひますわ。

アルンホルム　それに、あなたは、こゝで、さう全然世間とかけ離れてるとも言へませんよ。少なくとも夏だぞはね。今日では、此の邊が世間の生活に取つて一種の地方的中心です――通りがゝりの澤山の流れが集まるところなのです。

ボレッタ　（笑ひながら）あゝ、あなた御自身が通りがゝりの流れに這入つてゐらつしやるのね。あなたがたには、そんないゝ加減な冗談をおつしやるのも、何でもありますまいよ。

アルンホルム　私がいゝ加減な冗談を――？何うしてそんな事を思ひます？

ボレッタ　だつて、やれ世間の生活の中心だの集まりだのつて、それはみんなこの町の人たちが言つてるのをお聞きなすつたのでせう？きまつてそんな事ばかし言つてるのですもの。

アルンホルム　えゝ、實は、私もよく氣がついてゐます。

ボレッタ　ですけど、あの人たちの言ふ事は皆嘘ですわ――始終此の土地に住んでる私達には、そんな事はありやしません。外の大きな世界の流れが、眞夜中の太陽を見に行く途中で私たちの戸の側を通つたからつて、それが何になるでせう？私たちが其の流れに這入れるぢやなし、私たちには眞夜中の太陽も何もありはしない。つまらない、私達はやつぱりこゝで、鯉と一緒に池の中をうろうろして滿足してゐなくちやならないのです。

アルンホルム　（彼女の傍に腰かけて）ねえ、ボレッタさん――私はさう思ふが、何か知ら――ある特別なもので――あなたが斯うして家にゐながら、あこがれてゐらつしやるものがあるのぢやないか？

ボレッタ　はあ、或はあるかも知れませんよ。

アルンホルム　ぢやそれは何でせう？何にあこがれてゐるのでせう？

ボレッタ　第一に、國を離れるといふ事。

アルンホルム　それが何よりも？

ボレッタ　はあ。それから次には、も少し學問がしたい事。本當に世間の事情を知りたい爲に。

アルンホルム　あなたと書物を讀んでゐた頃、お父さんは、よくあなたを大學へ入れると言つてゐられましたね。

ボレッタ　えゝえ、父も氣の毒な人ですわ——いろんな事を言ひますけれど、いざとなるどそれが——父には實行する氣力が少しもないのですから。

アルンホルム　さうです惜しい事には——それが無いやうですね。併し此の事は今までお父さんに話して御覽なすつた事がありますか？眞面目にせがんで見た事が？

ボレッタ　いゝえ、それ程の事もしませんでした。

アルンホルム　でも、あなた、言ふならあまり後れない方がいゝですよ、ボレッタさん。なぜ言つて見ないのです？

ボレッタ　それはね、つまり私にも實行する氣力が無いのでせうよ。私その點ぢや屹度父に似たのですよ。

アルンホルム　ふむ——そんな事を言つてる場合ぢやないと思ひますがね？

ボレッタ　いゝえ、ですけどね。それに父は私の身や私の將來の事などを考へて呉れる暇はないのですよ——それから其の氣もないのですし。父は出來るだけそんな事を避けて、たゞもうエリーダさんの事にばかりかゝつてゐるのですから。

アルンホルム　誰れですつて——？どういふ風に——？

ボレッタ　父と二度目のお母さんとは——（辭を途切らせる）父と母とは別々の生活をしてゐるのでせう？

アルンホルム　だから、尚あなたは家を出たくなる譯ぢやありませんか？

ボレッタ　えゝ、ですけど、何だか私、出て行く權利が無いやうにも思はれますの――父を見棄てゝねえ。

アルンホルム　けれども、ボレッタさん、どうせ何時かはお父さんの側を離れるのでせう？だから、早ければ早いだけよからうといふのです。

ボレッタ　えゝ、いづれはさうなる外なからうと思ひますの。私だつて自分の事も考へて何か地位をこしらへて置かなきや父が居なくなつた時によるところが無くなります――けれどもお父さんが氣の毒ですわ――見捨てゝ行くといふことが心配ですは。

アルンホルム　心配――？

ボレッタ　えゝ、お父さんのために。

アルンホルム　併し變ですね、繼おつ母さんはどうしたのでせう？あの方がお父さんには附いてゐられるぢやありませんか？

ボレッタ　そりやさうですけれど、あの人は、おつ母さんがよくしてゐらつしやつたやうな事には、まるで向かないのですよ。あの人には氣のつかない事だらけ、きつと氣をつけたくないのかも知れません――それともそんな事は構はないのか知ら。何うなのだか私には分かりません。

アルンホルム　ふむ――あなたのおつしやる意味は分かりました。

ボレッタ　お父さんが氣の毒です――どうかすると體が弱いのですから。あなたもそれはお氣がついだでせう？でね仕事だつて十分一杯〳〵にはないのです。それをあの人は構つてあげやうともしないのですよ――無論そりや、半分はお父さん

の罪かも知れませんけど。

アルンホルム　どうしてさうでせう？

ボツレタ　それはね、父はいつも周圍の者が愉快な顏をしてゐるのが好きで、家の中には日光と滿足が必要だと言つてゐます。で、父はよくあの人に藥を飲ませてゐるのですが、それが長いあひだには害をするのぢやないかと思つて、氣になるのですよ。

アルンホルム　ほんとにさう思ひますか？

ボレツタ　えゝ、私どうしてもさう思はれてならないのです。時々全く、あの人は變ですもの。（激しく）けど、つまり無理ですわね、私を斯うして、是非とも家に引きとめて置かうといふのは。實際父にだつて、何の役にも立ちはしませんし、私としてはまた自身に對する義務もあると思ひますわ。

アルンホルム　私はねえ、ボレツタさん、――此の事はもつと精しく言つて見なくちやいけませんよ。

ボレツタ　だつて、そんな事がどうなるものですか？　やつぱりこゝで、鯉と一緒に池の中で一生を送るやうに出來てるのでせうよ。

アルンホルム　そんな事があるものですか。それは全然あなた次第です。

ボレツタ　（熱心に）さう思つてらつしつて？

アルンホルム　えゝ、さうですとも。全然あなた一人の手できめられる事です。

ボレツタ　あゝ、ほんとにさうだつたら――！あなたね父にうまく言つて見て下さらない？

アルンホルム　それも言つて見ますが、それよりも先に、私はあなた御自身に打ち明けて聞いて貰ひたい事があるのです、

ボレッタ　さん（左方を見て）しッ！人が聞いちやいけないから――またあとで話しませう。

（エリーダ左手から這入つて來る。帽子は冠らないで輕いショールを頭から肩へかけてゐる。）

エリーダ　（無理に活氣づいて）何ていゝんでせう、こゝは！なんていゝ氣持でせう！

アルンホルム　（立ち上り）散歩してゐらつしやいましたか？

エリーダ　えゝ、家と一緒に長く〳〵散歩してゐました、いゝ氣持でしたこと。これからまた船に乘らうといふのですよ。

ボレッタ　おかけなさらない？

エリーダ　ありがたう、いゝのよ。

ボレッタ　（ベンチの席を明けて）よくかけられますわ。

エリーダ　（歩き廻り）いえ、いえ、いえ、私いゝのよ、私いゝのよ。

アルンホルム　散歩が利いたに違ひありません、活々していらつしやつたやうです。

エリーダ　もう、ほんとによくなりました！何とも言へないいゝ氣持です！ほんとに安心して了ひました！ほんとに安心して――（左手を見て）何て大きな汽船が這入つて來るのでせう？

ボレッタ　（立ち上り見て）屹度あの大きなイギリス船ですよ。

アルンホルム　浮標の所へ錨を下しますね。いつも此の邊へ泊るのですか？

ボレッタ　ほんの半時間ばかりで、ずつと奥の方へ上つて行きます。

エリーダ　それから明日はまた出て行きます、あの大きな廣い外洋の方へまつすぐに沖へ出て行くのです。一緒に行けたらどんなでせう！ねえ、どんなでせう！どんなでせう！

アルンホルム　奥さんは、まだ長い航海をなすつた事はありませんか？

エリーダ　一度もありません。たゞ入江の中を少うし乘つたばかり。

ボレツタ　（嘆息して）どうしたつて、私達は、乾からびた土の上に喰つついてなきやならないのですわね。

アルンホルム　まあ、とにかくそれ私たちの自然の領分ですからね。

エリーダ　そんな事はありませんよ。私さうは思ひません。

アルンホルム　陸がさうでないのですか？

エリーダ　はあ、私さう信じません。私、さう思ひますの、若し人間が最初から海の上か――ひよつとすると海の中にでも――住みつけてさへゐたら、今ごろはもつと／＼完全なものになつてゐたらうと思ひますの――もつと善くて、もつと幸福で。

アルンホルム　あなたほんとにさうお信じですか？

エリーダ　はあ、きつとさうだと思はれます。その事はワングルともよく話しました。

アルンホルム　それでお宅では――？

エリーダ　それはね、幾分の道理は其の中にあるといふのです。

アルンホルム　（冗談のやうに）まあ、ねえ。併し出來た事は出來た事で、吾々が一旦間違つた道を取つて、海の動物の代りに陸の動物になつた以上、今さら出直さうといつても、もう間にあはないと思ひますね。

エリーダ　えゝ、それが悲しい事實なのですよ。そして誰でも此の事はみんな自身でさう感じてゐて――其の感じがちやうど秘密な悲しみか嘆きのやうに誰れにでも附きまとつてゐると思ひますわ。人間全體の心の底にある愁ひは、これが本た

と信じます。きつとさうに違ひないのですよ。

アルンホルム　併し奥さん――私は人間がさう深く憂欝なものだといふ事實を認めません。却つて多數の人は人生を愉快に氣輕に過ごしてゐます。――大きな靜かな意識しない悅びで過ごしてゐます。

エリーダ　いゝえ、それはさうぢやありません。その悅びは――丁度長い明るい夏の日の悅びのやうなものです。その中にはもう暗闇の來る前兆が含まれてゐます。そして此の前兆が人間の悅びに影をさします――たとへば疾風雲が入江に影をさすやうに、今すつかり澄んで輝いてるかと思ふと、だしぬけに――

ボレツタ　そんな悲觀した考を起こしちやいけないわ、あなた。ちよつと前までは、あんなに活々して快活だつたのに――

エリーダ　然、然、さうでしたよ。ほんとにこんな――私、馬鹿ねえ。(不安相に見廻して)家で來て吳れるといゝのに。ちやんと約束して置きながら、まだ來ないなんて。忘れちやつたのですよ。アルンホルムさん、あなたいらつしつて探して來て下さいませんか？

アルンホルム　はあ宜う御座んすとも。

エリーダ　どうぞさう言つて下さい、ほんとうにすぐ來て吳れなくちやならないつて。私、もうあの人が見えなくなつたのですから――

アルンホルム　見えなくなつた――？

エリーダ　あゝ、あなたには分らないのです。私ね、あの人が居なくなると、よく何んな顏つきだつたか思ひ出せなくなるのですよ、そして全く見失つて了つたやうになるのですよ――それがたまらなく苦しいのです。どうぞ行つて下さいな。

(池の方へぶら〳〵と行く)

ボレツタ　(アルンホルムに)私一緒に行きませう、あなたに分からないから――

アルンホルム　なあに、御心配には及びません、どうにかして――

ボツレタ　(低い聲で)いゝえ、いゝえ、不安心ですから。父はあの汽船にゐるかも知れません、さうだと心配ですわ。

アルンホルム　心配?

ボレツタ　だつてお父さんは、いつも船客の中に知人がゐやしないか探しに行くのですよ、そして船には食堂の酒場があつて――

アルンホルム　あゝ!ぢやいらつしやい。

(ボレツタと二人左方に去る。)

(エリーダ池を見つめたまゝ、少時立ち留つてゐる。時々柔かに。切れ〴〵に獨語する)

(外の方、庭の垣の向ふの路に、一人の旅裝した他國人が左手から這入つて來る。濃く生えた赤い髮の毛と鬚があつてスコツチ帽を冠り、旅行鞄を紐で肩から斜めに釣り下げてゐる)

他國人　(垣に沿うてそろ〴〵と歩みより、庭を見込む。エリーダを見付け立ち留まりつく〴〵と探るやうな眼つきで見入つて、靜かに言ふ)エリーダ、今晩は!

エリーダ　(振り向いて叫ぶ)おや、まあ――とう〳〵いらつしやつたの!

他國人　えゝ、とう〳〵。

エリーダ　(彼を見、愕いて心配げに)誰ですあなたは?誰れか探してゐらつしやるのですか?

他國人　私だよ。

エリーダ　(愕いて)何うしたのだらう！變な風におつしやるのね！誰れを見つけてゐらつしやるのですか？

他國人　知れてるぢやないか？お前を見つけてゐるさ。

エリーダ　(びつくりして)あゝ――！(ちよつと見つめてゐて激しく後退りし、殆ど窒息したやうな叫び聲を立てる)あの眼！あの眼！

他國人　よし／＼――とう／＼私が分かりかけたね？私にはすぐお前が分かつたよ、エリーダ。

エリーダ　あの眼！そんなに私を見ないでゐて下さい！誰か呼んで助けて貰はう！

他國人　しつしつ！怖がるには及ばない。何も害はしないから。

エリーダ　(眼を兩手で抑えて)そんなに私を見ちやいけないといふに！

他國人　(兩腕を庭の垣に凭けて)私はあのイギリス船で來たよ。

エリーダ　(畏縮するやうにちらと見て)私に何の御用があるの？

他國人　私は出來るだけ早く返つて來ると約束したよ――

エリーダ　行つて下さい！――また行つて下さい！決して――決して二度とこゝへ來ちやいけない！二人の間はすつかり切れたのだと言つて上げたぢやありませんか！すつかり！さう言つて上げたでせう？

他國人　(それには答へずに、極靜に)　もつと早く來やうと思つたが、さう行かなかつた。やつと折を得て、斯うして來たのだよ、エリーダ。

エリーダ　私に何の御用があるの？何を考へてゐるのです？何のためにこゝへ來たのです？

他國人　分かつてるぢやないか、お前を連れに來たのさ。

エリーダ　（恐怖して後退りして）　私を連れに！そんな事を思つて來たのですか？

他國人　あゝ、さうとも。

エリーダ　だけど私が結婚した事は知つてるのでせう！

他國人　あゝ、知つてゐる。

エリーダ　それでも――それに構はずやつて來て――私を――私を連れて行かうとして！

他國人　あゝ、その爲に來たのだよ。

エリーダ　（兩手で自分の頭を掴んで）　おゝこんな恐ろしい――：こんな怖い事、こんな怖い事――！

他國人　きつと、來たくないのだらう！

エリーダ　（我知らずに）　そんな風に私を見ないで下さい！

他國人　來たくないのかい。

エリーダ　いけない、いけない、いけない――行きたくない！どんな事があつたつて、決して！決して行かない。行けもしないし、行きたくもない！（低い調子で）行くものか。

他國人　（垣を乘り越えて庭の中に入る）ではそれで宜しいエリーダ――私は行く前にたつた一言言つて置かう。

エリーダ　（逃げやうとするが逃げ得ないで恐怖の餘り失神したやうに立つて、池の傍の樹の幹に身を支へてゐる）私に、私に觸つちやいけない！傍へ來ちやいけない！そこに其のまゝゐて下さい！私に觸ることはならない！

他國人　（用心して、一二歩近より）そんなに私を怖がつてはいけないよ。エリーダ。

エリーダ　（兩手で眼を掩ひ）そんな風に私を見ちやいけない。

一

他國人　怖がらないで、怖がらないで。

（ヴングル、左手から庭を通つて來る）

ヴングル　（木立を全く出切らない前に）あゝ、大分待たせたね。

エリーダ　（急に走り寄り腕にしつかりと縋りついて叫ぶ）おゝ、あなた――助けて下さい！助けて下さい――どうぞ！

ヴングル　エリーダ――一體どうしたのだ――！

エリーダ　助けて下さいよ！あの人が見えませんか？そこに立つてゐます！

ヴングル　（他國人を見て）そこにゐる人か？（彼の方に近寄り）失禮だが、あなたは誰れです、なぜ此の庭へ這入つて來たのです？

他國人　（顋でエリーダを指して）あれに用があるのです。

ヴングル　あゝ、では君だな――？（エリーダに）見馴れない人がお前を尋ねて來たと聞いたよ。

他國人　はあ、それは私です。

ヴングル　で、妻に何ういふ御用があるのです？（振り向ひて）お前その方を知つてゐるか、エリーダ？

エリーダ　（兩手をしぼりながら、柔かに）知つてゐるかつて！さうですとも、さうですとも！

ヴングル　（急いで）ふむ？

エリーダ　おゝ、あれが此の人ですよ、あなた！この人自身なのですよ！此の人――ね、分かつたでせう――！

ヴングル　何？何だつて？（振り返り）君があのジョンストンと言つて――？

他國人　さやう、ジョンストででもよろしい、御隨意に。だがそれは私の名ぢやありません。

ヴンゲル　名ぢやない。

他國人　今はさうぢやありません。

ヴンゲル　で、妻を何うしやうといふ考へか？その燈臺守の娘が幾年か前に結婚してゐる事は御承知だらう。それから其の夫になつたのが誰たといふ事も御存じに違ひない。

他國人　この三年餘り前に、それを知りました。

エリーダ　（熱心に）どうして分かりました？

他國人　お前に逢はうと思つて歸りかけてゐた途で、此の地方の古新聞が手に入つて、讀んで見ると、その中にお前の結婚の事が出てゐた。

エリーダ　（眞直に前方を見て）私の結婚が――それぢや、あの――

他國人　それが私に妙な感じを與へたよ。あの指輪をつないだことが――あれがやつぱり一種の結婚だつたのだ。エリーダ。

エリーダ　（兩手で顏を掩ひ）おゝ――！

ヴンゲル　どうして君はそんな事を――？

他國人　お前それを忘れてゐたか？

エリーダ　（凝視せられてゐることを感じたやうに叫ぶ）そんなに、私を見つめてゐちやいけない！

ヴンゲル　（他國人の前に立つて）どうか私に言つて下さい、妻にでなく。要するに――成り行きは君に分かつてゐるのに――こゝで何うしやうと言ふのですか。なぜやつて來て私の妻をお尋ねになつたか。

他國人　私は出來るだけ早く逢ひに來るとエリーダに約束してあつたのです。

ヴングル　エリーダを――！まだ！

他國人　それからエリーダも私の來るまで待つてゐると、眞心で誓つたのです。

ヴングル　君は私の妻の名を呼んでおいでのやうだが、さういふお馴染は此の邊では許しません。

他國人　それはよく心得てゐます。併しあれは誰れよりも先に私のものになつてゐるいですからね。――

ヴングル　君のもの――まだそれを――！

エリーダ　（ヴングルの後ろに隱れ）おゝ――！どうしても私を離すまいとしてゐる！

ヴングル　君のもの！エリーダが君のものだと！

他國人　あれはあなたに二つの指輪の事を話しましたか？私の指輪とエリーダの指輪と？

ヴングル　たしかに聞きました。併しそれが何うしたのです？其の事は後にあれが破談の手紙を君に送つて、君も知らないとは言へない筈だ。

他國人　エリーダと私の契約では、指輪の事が結婚の證據として完全な效力を有してゐます。

エリーダ　けれど私はそれを認めない！何んな事があつたつて、私はこの上あなに用はありません！そんなにして私を見ないで下さい！用はありません、分りましたか！

ヴングル　君はこゝへ來てそんな子供の遊び事のやうな事で權利を主張しやうなんて、氣が狂つてるのぢやないか？

他國人　それは其の通りです。あなたの考方から言へば、私にエリーダを要求する權利はたしかにありません。

ヴングル　それならどうしやうと言ふのです？力づくで奪つて行けるものでもあるまいし――あれ自身の意志に反しては

ね！

他國人　いや、何でそんな事をする必要があらう？若しエリーダが私のものになるのならあれが自身の自由意志で來なくちやなりません。

エリーダ　(飛び立ち叫ぶ)私自身の自由意志で――！

ワングル　そんな事が――！

エリーダ　(獨語して)　私自身の自由意志で――！

ワングル　君は氣が狂つてゐるに違ひない。行きたまへ！此の上君に用はない。

他國人　(懷中時計を見て)もう間もなく私は船へ歸らなくちやならない。(一歩進んで)まあ、まあ、エリーダ、これで私は私の義務を果たしたのだ(猶近寄り)誓つた言葉を守つたのだ。

エリーダ　(後退りし乍ら嘆願するやうに)おゝ、どうぞ私に觸らないで下さい！

他國人　明日の晩まで待つてやるから、よくそれを考へて御覽――

ワングル　何も考へる事はない。君自身立ち去る仕度をしたらよからう！

他國人　(なほエリーダに)私はこれからあの汽船で入江を上つて行くのだが、明日の晩は歸るから、その時また逢はう。お前はこゝで、庭で私を待つてゐなくちやならない。この事はお前と二人きりで決したいから。分かつたか？

エリーダ　(柔らかに震へ乍ら)　おゝ、お聞きなすつて、あなた？

ワングル　驚かなくてもいゝ。來るのを止める工風があらう。

他國人　とにかく、さや、ならエリーダ。では明日の晩に。

エリーダ　(頼むやうに) いけない、いけない――明日の晩來ないで下さい　二度と來ないでゐて下さい!
他國人　それで若しその時までに、私と一緒に海へ行く決心がついたら――
エリーダ　おゝそんな風に私を見ないで下さい――
他國人　その場合には、すぐ出發するやうに用意して置かなくちやならない。それが分かつてさへゐればいゝ
ヷングル　家へお這入り、エリーダ。
エリーダ　這入れません。おゝ、手を貸して下さい、助けて下さい、あなた!
他國人　よくおぼえておいで、明日私と一緒に來なかつたら、それが最後だよ。
エリーダ　(震へ乍ら彼を見て)それが最後ですと? 永久に――?
他國人　(頷いて)一旦さうなつたら、取り返しはつかないよ、エリーダ! 私は二度と此の國へ歸らないから、此のゝち私に逢ふこともなからうし、便りを聞くことも無からう。私は死人のやうになつて永久にお前と分れて了ふのだらう。
エリーダ　(不安げに息をして)おゝ――!
他國人　だから、お前のする事によく氣をおつけ。左樣なら。(垣を乘り越え、立ち止まつて言ふ)いゝかい、エリーダ――明日の晩出發されるやうに支度をしてお置き。私が來て連れて行くから。
(路をそろと〱靜かに右方に去る)
エリーダ　(しばらく後を見送つて)私自身の自由意志でと、あの人は言つた! ねえ――あの人は私自身の自由意志で一緒に行かなくちやならないと言ひましたね。
ヷングル　氣を靜めなさい。あの男はもう行つて了つたから、二度と逢ふ氣遣ひはない。

エリーダ　あら、どうしてそんな事が言へて？　明日の晩また來るぢやありませんか？

ヷングル　來ても構はない。お前と逢はせないやうにするから。

エリーダ　（頭を振り）いゝえ、あなた、あの人を防ぐことは出來ませんよ。

ヷングル　出來るとも、――私にまかせてお置き。

エリーダ　（それには耳を貸さないで沈思し乍ら）　あの人がこゝへ來たら――明日の晩――そして海を越えて――あの船で行つて了つたら――

ヷングル　ふむ、さうすると？

エリーダ　あの人は決して――決して歸つて來ないか知ら。

ヷングル　然、エリーダや、それはもうたしかだよ。あゝして置けば、この後何うすることも出來ないぢやないか？　もうお前の口から、用は無いと言ひ渡したのだもの。それできまりは附いてゐるよ。

エリーダ　（獨語して）　ぢや明日――それとももう二度と。

ヷングル　その上、萬一あの男がまた來る氣になつても――

エリーダ　（興奮して）その時はどうするのです――？

ヷングル　何に、害にならないやうにする法がある。

エリーダ　あら、そんな事を思はないで下さいな。

ヷングル　する法があるといふのさ！　若しいよ／＼他で遁ける途がなかつたら、その時は船長殺しの罪に問へばいゝ。

エリーダ　（激しく）いえ、いえ、いえ――！　それはいけません！　船長殺の事は何にも分からないぢやありませんか、まるつきり何も！

ヴングル　何にも分からない！だつてあの男が自身でお前に白狀したぢやないか？

エリーダ　いゝえ、其の事は少しも！若しあなたが何かおつしやるなら、私、それを否定します。あの人を牢屋へ入れなければなりません！あの人の居所は廣い海の上ですもの、それがあの人の家ですもの！

ヴングル　（エリーダを見て徐かに言ふ）あゝ、エリーダ――エリダー！

エリーダ　（熱烈にヴングルに取りつき）あゝ、あなた、ねえ――あの男の手から私を救つて下さい！

ヴングルや　（やさしく離れて）さあ、おいで！私と一緒に！

（リングストランドとヒルダ、二人とも釣道具を携へて、池の右方から現はれる。）

リングストランド　（急いでエリーダの方に行き）あゝ、奥さん、どうでせう――不思議なお話があります！

ヴングル　何ですか？

リングストランド　どうでせう――例のアメリカ人に逢つたのです。

ヴングル　アメリカ人？

ヒルダ　えゝ、私も逢つてよ。

リングストランド　庭の後を廻つて行きました。そしてあの大きなイギリス船に乘り込みました。

ヴングル　あなたは何處でその人をお知りでした？

リングストランド　一度あの男と一緒に航海をしました。たしかに溺れ死んだと思つてましたがあゝして生のまゝで出て來たのです。

ヴングル　君はまだ他に其の男の事を御存しですか？

リングストランド　いゝえ、併しあれは、たしかに不義をした妻君に復讐をしやうと思つて歸つて來たのですよ。

ヴングル　といふと？

ヒルダ　リングストランドさんはね、群像の彫刻を作つて、其の中へ其の人を入れやうといふのですよ。

ヴングル　私には更に分からない――

エリーダ　其の事はあとで精しく話しますよ。

（アルンホルムとボレツタ庭の垣の外に沿うて左手から入り來る。）

ボレツタ　（庭にゐる人々に）來て御覽なさいよ！イギリス船が入江を上つて行くところですよ。

（大きな汽船が一艘向ふを除々とすべつて行く）

リングストランド　（庭の垣の傍にゐるヒルダに）あの男は、今晩きつとその女を襲ふでせうよ。

ヒルダ　（頷いて）不義した妻君をね――さうよ。

リングストランド　どうでせう――丁度眞夜中頃に。

ヒルダ　おゝ、どんなにか痛快な事でせう。

エリーダ　（船を眺め乍ら）ぢや明日――

ヴングル　それからは、決して二度と來なくなる。

エリーダ　（柔らかにそして震へ乍ら）あゝ、あなた――私を私の手から救つて下さい！

ヴングル　（心配さうに見て）エリーダ！私にはどうも――この事のうしろに何かあるやうに思はれるよ。

エリーダ　私を誘惑するものが其のうしろにあるのです。

ヴングル　誘惑するものが――？

エリーダ　あの人は海のやうですよ。

（エリーダは思ひに沈んだまゝそろ〳〵と庭を通つて左に去る。ヴングルは不安さうに傍についてあるき注意深く観てゐる。）

第四幕

醫師ワングルの家の庭に臨んだ一室。左右に扉。後方正面、二つの窓の間は外廊に通ずる大きな硝子戸。庭の一部が下の方に見える。前方左りに長椅子とテーブル。右手にピヤノの一臺、ずつと後ろに大きな花臺、中央に一臺の圓卓とその周圍に數脚の椅子。卓の上に滿開の薔薇の鉢が載つてゐて周りには種々の植木鉢が置いてある。午前の事。ボレツタは左手、テーブルの傍の長椅子に座つて、刺繡をしてをり、リングストランドはテーブルの上方の端の椅子にかけてゐる。バレステツドは庭で畫をかいてゐる。ヒルダその傍に立つて見てゐる。）

リングストランド　（兩腕をテーブルにもたせてボレツタの仕事してゐるのを暫く默つて眺めてゐたが）そんな風に縫を取るのは難しいものでせうね、お孃さん。

ボレツタ　いゝえ、そんなでもありませんわ。たゞ氣をつけて勘定を間違さへしなけりや——

リングストランド　勘定？勘定をするのですか？

ボレツタ　はあ、針の目を。ね、ほら。

リングストランド　なるほどさうですね！どうでせう！殆ど一種の美術ですね。意匠もおやりですか？

ボレツタ　はあ、下圖さへあれば。

リングストランド　下圖がないと？

ボレツタ　出來ませんの。

――

リングストランド　それではやつぱり、ほんとうの美術とは言へませんね。
ボレッタ　えゝ、まあ精々で――手なぐさみですわ。
リングストランド　併し何うですね、あなたは屹度、美術を習へば習へる方だと思ひますね。
ボレッタ　ちつともその傾向がなくつても？
リングストランド　えゝ、構ひませんとも――若しあなたが絶えず本當の美術家と一緒にゐらつしやることさへ出來たら！
ボレッタ　其の人から習へるとお思ひなさつて？
リングストランド　習へるつて、普通の意味ぢやないですが、段々に分かつて來るだらうと思ひます――一種の奇蹟のやうにね。
ボレッタ　妙な考へですことね。
リングストランド　（間を置いて）あなたは是れまで本氣でお考へなすつた事がありますか――つまり深く眞面目にですね、結婚といふ事を？
ボレッタ　（ちらと見て）あの――？いゝえ。
リングストランド　私はあります。
ボレッタ　あら、さう？
リングストランド　えゝ、私はそんなやうな事をしば／＼考へます。殊に結婚についてさうです。それから、之れに關する書物も隨分讀んで見ましたが、私の考へでは結婚は一種の奇蹟と言つていゝですね。女が次第にかう變形して、夫に似て來るものですよ。

ボレッタ　夫と同じ趣味を持つといふのですか?

リングストランド　はあ、それです!

ボレッタ　そりやさうでも、能力の方はどうでせう。——夫の才能とか技術とかは?

リングストランド　ふむ——さうですね!——それらもやつぱり、さうでない譯はありませんね——

ボレッタ　ぢや、何でせうか、男が書物とか思想とかで得たものも、そんな風に妻君に移つて行くでせうか?

リングストランド　はあ、それもです、段々に奇蹟のやうにしてね。併し無論こんな事は、眞實な結婚でなくては起こりません。相愛して本當に幸福な結婚でなくては。

ボレッタ　では、それと同じやう、夫が妻の方へ引きつけられて了ふ事もあるとはお思ひなさらない?つまり妻君に似て來るのですよ。

リングストランド　夫が?いゝえ、そんな事は、ついぞ考へたこともありません。

ボレッタ　けれど、どうして一方だつてさうならないのでせう?

リングストランド　なりませんね。男は一生を捧げるだけの仕事を持つてゐます。男が強くてしつかりしてゐるのはその爲ですよ。一生の事業があるのです。

ボレッタ　どんな男でも?

リングストランド　いや、私は主として美術家の事を考へてゐたのです。

ボレッタ　美術家は結婚していゝものだとお考へなすつて?

リングストランド　いゝですとも。眞に愛するものが見つかりさへすれば——

―

ボレツタ　其時だつて、美術家はむしろ自分の藝術だけに一生を捧げるのがいゝと私は思いますわ。

リングストランド　無論そりやそうなくちやなりませんが、併し結婚したつて充分に出來ることです。

ボレツタ　それならその女はどうなるでせう？

リングストランド　その女？どの女です――？

ボレツタ　その人と結婚した女。その女は何を目的に生活するのでせう？

リングストランド　その女も矢張り夫の藝術を目的に生活しなくちやなりません。それが女に取つては此の上もない幸福であるべきだと私は思ひますね。

ボレツタ　ふむ、――私はそんなにも思ひません――

リングストランド　ですけどお孃さん、たしかですよ。女が夫のために受ける幸福は尊敬とか名譽とかばかりぢやあないのです、そんなものは寧ろ言ふに足らない小部分なのです。女は夫の創作を助けることが出來ます――常に夫の傍にゐて勞作を輕くしてやるのです、夫に侍いて、其の生活を徹頭徹尾安樂な愉快なものにしてやるのです。女に取つてこれほど立派な幸福はないと思ひます。

ボレツタ　まあ、何てあなたは自分勝手な人でせう！自分ぢや分からないのですね。

リングストランド　私が自分勝手ですつて？とんでもない――！あゝ、も少しよく私を解してさへ下すつたら――（ボレツタの方に身を屈めて）お孃さん、――私が行つて了ひましたら――そして私は間もなく――

ボレツタ　（同情して彼れを見る）あら、そんな心細い考へを起こすものぢやありませんよ。

リングストランド　僕はさう心細いことだとも思ひません。

ボレツタ　どういふ譯で？

リングストランド　僕は此の一ヶ月許しの間に立ちましてね、最初に家へ寄つてそれからすぐ南の方へ行くのです。

ボレツタ　あゝ、さう。分かりました、分かりました。

リングストランド　で、時々僕の事も思ひ出して下さるでせうか、お孃さん。

ボレツタ　えゝ、そりやねえ。

リングストランド　（嬉しさうに）ぢや、どうかそれを約束して下さい。

ボレツタ　えゝ、約束しますわ。

リングストランド　きつとですかボレツタさん？

ボレツタ　きつと。（語調を變へて）ですけれどそんな事が何になるでせう？何にもならないものぢやありません！

リングストランド　だつてあなた？あなたが此處にゐて僕の事を思つて下さると思ふと僕は非常に嬉しいです。

ボレツタ　はあ、ですけれどそれが何になるでせう？

リングストランド　それが何ういふ事になるかは、僕にも分かりませんが――

ボレツタ　私にも分りません。其のあひだにはいろんな事が起こるものですから、もう、ありつたけの事が出て來るものですから。

リングストランド　さうですね、何か奇蹟のやうなものでも現はれるか知れない。運が向いて來るか――何かそんな事がありますよ。僕は確かに運の好い人間だといふ自信がありますから。

ボレツタ　（活氣ついて）えゝ、さうないよ！さうお思ひでせう？

リングストランド　はあ、確かにさう信じてゐるのです。そして――三四年たつと――有名な彫刻家になつて工面もよくなり、健康も回復して歸つて來て――

ボレツタ　はあ、ねえ、さうさせたいわね。

リングストランド　それはもう、さう信じてゐらつしやい――あなたがたゞ僕の南方へ行つてゐるあひだ、本當に溫い心で思つてゝさへ下されば、それで大丈夫です。あなたは其の約束をして下さいましたね。

ボレツタ　はあ、お約束してよ。（頭を振り乍ら）けどやつぱり、それが何にもなりつこはありません。

リングストランド　なりますともボレツタさん、少なくともそれが僕の群像を作る助けになつて、より容易く、より早く進步するやうになります。

ボレツタ　さうでせうか？

リングストランド　えゝ、僕さういふ感じがします。それからあなたにしても、張合があるだらうと思ひますよ――こんな邊鄙な土地にゐながら、――いはゞ僕の製作を助けてゐるのだとお考へなすつたら。

ボレツタ　（相手を見て）で――あなたは、あなたに取つちや？

リングストランド　私は――？

ボレツタ　（庭の方を見て）しつ！　か他の事を話しませうよ、アルンホルムさんが來てよ。

（アルンホルム左手庭の中に出て來る。立ち留まつて、バレステツド及ヒルダと話をする。）

リングストランド　ボレツタさん、あなたはあの、昔の先生がお氣に入つてるんですか？

ボレツタ　氣に入つてるんですつて？

リングストランド　はあ、お好きですかといふのです。

ボレツタ　えゝ、えゝ、私大好きですよ、お友達としても相談相手としてもほんとにいゝ方です。そして機さへあれば、いろんな助けになつて下さるのですよ。

リングストランド　あの方がまだ結婚しないといふのは變ぢやありませんか？

ボレツタ　それがそんなに變でせうか？

リングストランド　はあ、財産もあるといふぢやありませんか？

ボレツタ　さうだらうと思ひます。けれどあの方には屹度お嫁にならうといふ人のが容易に見つからないのでせうよ。

リングストランド　何故でせう？

ボレツタ　それはね、あの方のお近付の娘さんといへば、大抵その先生をなすつてらつしつたのですからね。自分でさう言つてらつしやいました。

リングストランド　でも、それがどうといふのでせう？

ボレツタ　だつて、あなた、自分の先生だつた人の所へお嫁には行かないでせう？

リングストランド　娘が自分の先生を愛する事は出來ないものでせうか？

ボレツタ　一人前になつてからは、さうも參りませんの。

リングストランド　おや／＼！奇態すね！

ボレツタ　（注意するやうに）しつ、しつ！

（リングストランドは少時の間道具を片付けてゐたがこれを携へて右手へ去る。ヒルダはそれを手傳ふ。アルンホルムは外

廊に上つて室に入る。）

アルンムホルム　お早う、ボレツタさん、お早う君——えゝ——えゝ——ふむ！

（リングストランドの立ち上り禮をするのを氣まづげに見て冷やかに頷く。）

ボレツタ　（立ち上り、近寄つて）お早う御座います　アルンホルムさん。

アルンホルム　今日は皆様お變りありませんか？

ボレツタ　え、有難う御座います。

アルンホルム　おつ母さんは、今日もまた海水浴に入らつしやいましたか？

ボレツタ　いゝえ、上の居間に居ります。

アルンホルム　御不快？

ボレツタ　どうですか？部屋をしめきつてゐるのですよ。

アルンホルム　ふむ——しめきつて？

リングストランド　奥さんは昨日のアメリカ人でひどく愕りなすつたやうでしたね。

アルンホルム　君御自身何か御承知なのですか？

リングストランド　僕が奥さんにお話したのです、その男がちやんと生きてゐて、庭の後ろを歩いて居た事を。

アルンホルム　あ、さうでしたか。

ボレツタ　（アルンムホルムに）あなたとお父さんは、昨晩遅くまで起きてゐらしやつたのね、さうでせう？

アルンホルム　えゝ、かなり遅くまで。或る重大な問題を議論してゐたのです。

ボレツタ　私の身の上に就いて幾らかでもお話しして下すつて？

アルンホルム　いや、まだです。出來なかつたのですよ。あなたのお父さんは何か他の事にすつかり氣を取られてゐらつしやいました。

ボレツタ　（ためいきをして）あゝ、さう――いつもあゝなのですよ。

アルンホルム　（意味ありげに見入り乍ら）けれども此の事に就いちや、いづれあなたと私とでお話しなくちやなりません。――お父さんはどちらですか？お出かけですか？

ボレツタ　きつと外科室の方でせう、私行つて連れて來ませう。

アルンホルム　いや、それには及びません。私が行つた方がいゝでせう。

ボレツタ　（左手の方に聞き耳を立てゝ）ちよつと、あなた。父が降りて來たやうです。さうです。ぢや、きつと上で、おつ母さんの所にゐたのです。

（ワングル左手の戸口から入る。）

ワングル　（アルンホルムに手を差し延べて）　あゝ、君もうお出で下すつたのですか？よくこんなに早く。實は今一度是非お話しなくてはならない事がありましてね。

ボレツタ　（リングストランドに）　少しの間庭へ出て見ませうか、ヒルダのゐる方へ？

リングストランド　結構ですね、ゐらつしやいませう、お孃さん。

（二人は庭へ降りて背後の木立の中へ消える）

アルンホルム　（二人の後を見送つてゐたが、ワングルの方に向いて）あの若い男の事をよく御存じですか？

ヴングル　いゝや、詳しい事は知りませんよ。
アルンホルム　では、いつもあんなにお孃さんたちと一緒にゐていゝのですか？
ヴングル　いつも一緒にゐますか？實は氣がつかなかつた。
アルンホルム　あゝ、言ふ事には氣をお付けなさらなくちやいけますまいね？
ヴングル　それは、たしかにさうですが、困つた事には私にそれが出來ないんでしてね。娘どもはみんな自分で自分の世話をするやうに仕つけられて來たものだから、私の言ふことは勿論、エリーダの言ふことも聞かうとしません。
アルンホルム　奧さんの仰しやることでも？
ヴングル　えゝ、其のうへ、妻も、そんな事に立ち入るのを好むかどうかは分りません。あれにはまるで方角違ひの事ですから。（急に話を切つて）併し、こゝでお話ししやうと思つたのはそんな事ぢやありません。どうですか――あの事をも一度熟考して下すつたか？――昨晩申しあげた事を？
アルンホルム　お別れしてから、ずつとあの事しか考へてゐません。
ヴングル　で一體どうすれば好いでせうな？
アルンホルム　それはあなた、あなたの方が、お醫者さまですもの、私よりもよく御承知の筈です。
ヴングル　いや、それがね、醫者に取つては自分のひどく愛してゐる患者だと、却つて正確な斷定を下しがたいものですよ！そしてこれがまた並の病氣でもなければ――並の醫者に分かるものでもなし、並の治療で行くものでないのですからね。
アルンホルム　今日はどんな風ですか？
ヴングル　ちやうど今迄上であれの所にゐたのですが、至極落ちついてゐるやうに見えました。併しどんな氣分の時でも、

其の奧の方に何か或るものが潛んでゐるやうで、それが何だか私に見當がつかない。そしてまた氣分が實に變り易くて――實に測りにくゝて――ひよい〳〵と、むら氣で動くのですからね。

アルンホルム　疑もなく頭が病的になられたせいですね。

ヴングル　全然さうでもないのですが、其の萠芽はあれの性質の中にあるのです。エリーダは海の人種に屬してゐます、それが根本なのです。

アルンホルム　といふと、精しく申せば？

ヴングル　君はあの荒海に生活してゐる人々が別な人種のやうに見えるのをお氣づきぢやありませんか？あれ等は殆ど海そのものゝ生活を自分等の生活にしてゐるやうです。海に太浪が立つても――潮の滿干があつても、――それがみなあれ等の思想にも感情にも現はれて來るのです。そしてあれ等は決して他で辛抱することが出來ない。あゝ、もつと早くその事に氣がつかなくちやならなかつたのです。エリーダを海から引離してこゝへ連れて來たのは、あれに對して罪を犯したやうなものです！

アルンホルム　このごろさうお考へなさるやうになりましたか？

ヴングル　はあ、段々と。併し最初から分かつてゐなくちやならなかつたのです。いや、實は最初からさうとは思つてゐたのですが、自分でそれを承認しなかつたのです。たゞもうあれを愛してゐたため、何よりも自分の思ひ通りにしやうとしたのです。私は實に申譯のない程自分勝手な事をしましたよ！

アルンホルム　ふむ――誰でもそんな事情の下には、少々自分勝手になるだらうと思ひますね。けれども、ヴングルさん、あなたにそんな過ちがあるとは言へますまい。

ヴングル　（不安さうにあちこちとあるき廻りながら）　いや、あります、そしてそれ以來ずつとさうでした。元來私はあれよりも遙かに年を取へてゐるのだから、あれに對しては一人で父でも案内者でもあつて然るべきでした。あれの思想を發達させて明瞭にしてやる爲には全力を盡さなくちやならなかつたのです。所が不幸にして少しもそんな効果が見えなかつたのは、私に充分な力がなかつたからですね！もつとも實際はあれをありのまゝ、そつくりして置く方が私には都合がよかつたのです。で、さうして置くとあれは段々惡くなつて來てとう／＼何うしていゝか分からない事になりました。（一層低い調子で）そこです、私が當惑のあまり君にお賴みしやうと思つてお出でを願つたのは。

アルンホルム　（愕いて彼を見つめ）　へえ！そのために手紙をお寄越しなすつたのですか！

ヴングル　さうです、併しそこに關しては何も言はないで下さいよ。

アルンホルム　あなた――一體どうして――私がどんなに役に立つとお考へなすつたのですか！私には解せません。

ヴングル　さうでせう、無論君には分りますまい。私が誤解してゐたのです。私はエリーダが嘗て君を思つたことがあつて今でも内々心を其の方に惹かれてゐるのだと想像しました。それで今一度君に逢はせて、國の事や昔の事を話させたら、恐らくあれの爲にいゝだらうと思つたのですよ。

アルンホルム　では奥さんの事でしたか、こちらで私を待つて、――待ち焦れてゐるものがあるとお手紙にあつたのは！

ヴングル　さうです、他に誰れがゐませう？

アルンホルム　（早く）　さうでせう／＼。――併し私には分りませんでした。

ヴングル　其の筈です、今もいつた通りでね、私が全く方角違の事を考へてゐたのだから。

アルンホルム　それでゐてあなたは御自身を自分勝手だと仰しやる！

ヴングル　いや、私は大變な過ちをしたのだから、それを償はなくちやならないと思つてゐます。少しでも妻の心を落ち着ける事ならどんな方法でも拒む權利はないと思つてゐます。

アルンホルム　あなたは、あの妙な男が奥さんの上に持つてゐる力を、どう説明しやうとなさるのですか？

ヴングル　ふむ、それはねえ――此の問題に説明を許さない方面があるかも知れない。

アルンホルム　何か到底説明し難いものがあるとおつしやるのですか？全然説明し難いものが？

ヴングル　兎に角、さしあたり説明しがたいものですよ。

アルンホルム　あなたはさういふものをお信じですか？

ヴングル　信ずるでも信じないでもありません。私には單に分からないといふだけです。だから、そんなものは、其のまゝにして置くほかはない。

アルンホルム　併し此の一點はどうですか――あの、子供の眼に關する、奥さんの不思議な奇怪な説は――

ヴングル　（熱心に）私はあの眼の事なんぞ少しも信じはしません。あんな事は信じやうとも思ひません！あれは妻の純然たる空想に過ぎません。

アルンホルム　昨日お逢ひなすつた時その男の眼を氣をつけて御覧でしたか？

ヴングル　えゝ、勿論見ましたよ。

アルンホルム　で少しも似た所は見えませんでしたか？

ヴングル　（避けるやうに）ふむ――實は何と言つていゝか分からないが、私が逢つた時は十分に明るくもなかつたし、それにエリーダから其の事をいろ／＼聞かされてゐたのですからね――どうも先入主となつてゐて、偏見なしに見ることは、むつか

しかつたやうです。

アルンホルム　さうでせう、さうでせう、それは其の筈です。では今一つ此の點はどうですか、奧さんの恐れと不安の念がちやうどその妙な男の歸らうとした時から起こつたといふ事は？

ヷングル　それもさ――やつぱり妻の空想で造りあげた夢を信じてゐるのですよ、一昨日からの事ですもの。あれの病氣は今あれが言つてるほど、さう突然――さう急に起つたのぢありません。それをあのリングストランドといふ若い男から、ジョヨンストド又はフリーマン――とか何とかいふもの――が三年前に歸りかけてゐた――三月の事だ――といふやうな話を聞いて、自分で自分を說きおとして、その氣病ひがちやうど同じ月から起こつたと極めて了つたのですよ。

アルンホルム　で、さうではなかつたのですか？

ヷングル　決してそんな事はありません。病氣の徵候はもう、ずつと前からありました。もつとも、ちやうど――偶然の事で――やゝ激しい發作にかゝたのが確かに三年前の三月でした――

アルンホルム　なるほど――！

ヷングル　もつとも、それも樣子を知つてゐればすぐ譯もなく說明の出來ることで――その頃あれが、――どういふ容態でゐるかといふ事さへ知つてゐればね。

アルンホルム　ではその徵候はどちらにでも取れるのですね。

ヷングル　（兩手をしぼつて）それでどうすることも出來ない！全く手段に盡きてしまつた！療治のしやうが無い――！

アルンホルム　何んなものでせう、一そお住まゐを變へる決心をなすちや……何處かほかへ移つて御覽になつてはッ・そしたら或はあの方に取つて一層居心地のいゝ所が見つかつて、萬事うまくは行きますまいか？

ヴングル　君、私がまだそれを言ひ出さないでゐたとお思ひかね？私はシヨルドヴヰックの方へ移らうと言つたのです。所があれはそれを望まない。

アルンホルム　それもいけないのですか？

ヴングル　いけない、そんな事をしたつて無益だと言ふのです、それもさうでせう。

アルンホルム　ふむ――さうお考へですか？

ヴングル　えゝ、それにね――も一歩進んで考へて見ると――私にも本當はどうしてそれがやれるか分つてゐません。娘等の爲めを思へばそんな隅つこの淺間な所へ移るのがいゝ事だとはとても言へない。つまりあれ等は何處かいゝ土地に住んで少なくとも何等かの機會があつたら、いざといふ時の仕度のして置ける所にゐなくちやならないのですからね。

アルンホルム　仕度ですつて？あなたもうそんな事をそんなに御心配になつてゐるのですかね？

ヴングル　でも君、勿論ですよ、其の事も考へなくちやなりません！併しまた――一方には――あのかはいさうな病人のヒリーダの事もある――！あゝ、アルンホルムさん――私は實際どちらから言つても、火水の間に立つてゐますよ！

アルンホルム　ボレッタさんの事は御心配に及びますまいね――（途切れて）何處へあの方は――あの二人は行つたのでせう？

（開いてゐる戸の所に行き外を眺める。）

ヴングル　（ピヤノの傍で）あゝ、私はどんな犠牲でも喜んで拂ふ――あれら二人のためなら――たゞ何うしてそれをやればいゝか！

（エリーダ左方の戸口から入る。）

エリーダ　（早口にヴングルへ）　今朝は外出なすつちやいけませんよ。

ヴングル　あゝ／＼行がないとも。一緒に家に居るさ。（寄つて來るアルンホルムを指して）たがお前まだこちらへ御挨拶をしないね？

エリーダ　（振り向き）おや、アルンホルムさん、そこにいらつしたの？（手を差し延べて）お早う御座います。

アルンホルム　お早う御座います奥さん。今日はまだ、いつものやうに海水浴にはいらつしやらないんですか？

エリーダ　どうして／＼、今日はそんな事を考へちやゐられないんです。まあちよつとおかけなさらない！

アルンホルム　有難う、又後ほど――（ヴングルを見て）お庭でお孃さん達にお目にかかる事にしてありますから。

エリーダ　どうですか、庭にゐますか知ら。あの子等つたら何處へ行くのだか少しも知れやしませんから。

ヴングル　さうさ、多分池の近所にゐるだらう。

アルンホルム　見つかるだらうと思ひます。

（うなづいて外廊を通り庭に下り右手に去る。）

エリーダ　何時でせう、あなた？

ヴングル　（懷中時言を見て）十一時少し過ぎてゐる。

エリーダ　少し過ぎてゐる。そして今夜の十一時か十一時半にはあの汽船が來る。あゝこれが通り越して了つたら！

ヴングル　（更に近く寄つて）エリーダや、私は一つお前に聞きたい事があるがね。

エリーダ　え？

ヴングル　一昨日の晩――あの見晴の上で――お前は此の三年間何度となくあの男をまざ／＼と眼の前に見たと言つたね。

エリーダ　えゝ、見ました。確かに見ました。

ヴングル　ふむ、併しどんな風に見えたのかい？

エリーダ　どんな風に見えたかつて？

ヴングル　つまりね、お前が目の前に見たと思つたとき、その男はどんな様子をしてゐたかといふのさ。

エリーダ　だつて、あなた――あなたはもう御自身でその男の様子を御存じぢやありませんか。

ヴングル　では、お前が見たと思つた時も、あの通りに見えたのかい？

エリーダ　えゝ、さうです。

ヴングル　昨夜實際に見た、あの通りに？

エリーダ　えゝ、あの通りに。

ヴングル　では、どうしてあの時すぐに、それとお前に見分けがつかなかつたのだらう？

エリーダ　(愕いて)見分けがつきませんでしたか？

ヴングル　さうさ。お前自身で後にさう言つたぢやないか、あの他國人が誰れだつたか最初には見分けられなかつたつて。

エリーダ　(感じて)さう、それは全くその通りねえ！不思議ぢやありませんか？すぐ見分けられなかつたなんて！

ヴングル　唯その眼で分かつたとお前は言つたね……あの眼で！あの眼で！

エリーダ　えゝ、さうです……

ヴングル　だつて、お前は見晴の上で、さう言つたぢやないか？いつも十年前に別れた時そつくりの姿で、現はれたつて

エリーダ　そんな事を言ひましたか？

ヴングル　然

エリーダ　ぢや、その頃も大體今のやうな樣子をしてゐたのでせうよ。

ヴングル　いや、お前が一昨日の晩、歸り途で話したのはまるで違つてゐたよ。十年前には鬚は無かつたといつたし、着物も全く違つてゐたらしい。それから眞珠の入つた胸飾りのピンはどうした？昨日は何もそんなものを着けてゐなかつたよ

エリーダ　さう着けてゐなかつたのね。

ヴングル　（尋ねるやうに見て）だからエリーダや、少し考へて御覧。多分お前はブラット、ハムメルで別れた時、その男がどんな風をしてゐたか想ひ出せないのだらう？

エリーダ　（考へて見るやうに一寸眼を閉ぢて）十分はつきりとは想ひ出せません。さうです……今日はちつとも想ひ出せません。不思議ぢやありませんか？

ヴングル　そう不思議でもないよ。新しい生きた姿が眼の前に現はれて古いのを掻き消して了つて、もう見えないやうにしたのだ。

エリーダ　さう思つて、あなた？

ヴングル　あゝ、そしてそれがまたお前の病的な色々の空想をも掻き消して呉れる。だから實體が現はれるといふ事はいゝだ。

エリーダ　いゝ！あなたはそれをいい事だと御覧なすつて？

ヴングル　さうさ、實體が現はれゝば救ひになるかも知れない。

エリーダ　（長椅子に腰を下して）あなた――此處へ來てかけて下さいな。私考へてる事をすつかり話さなくちやなりませ

んから。

ヷングル　あゝ、どうか、エリーダや。（卓子の他の側の椅子にかける。）

エリーダ　私たちは――實際非常な不幸でしたのね。……人も多からうに、斯うして私たち二人が一緒になるんて。

ヷングル　（愕く）何だと？

エリーダ　さうですとも、つまり……當然の事ですよ。不幸に終るほかは無かつたのですよ。……私たちが一緒になつた方法を考へて見ると尚さらさうです。

ヷングル　方法がどうして惡い……？

エリーダ　聞いて下さい、あなた……此の上もう私たちは自分を僞つたり……お互に僞つたりしてやつて行く必要はないのですよ。

ヷングル　私達がさうしてゐるだらうか？僞るつて？

エリーダ　えゝ、僞つて、でなければ少くとも……事實を隱してゐるのです。交り氣のない正味の事實といふものは……あなたが出向いていらつしやつて……私を買ひ取つてお了ひなすつたのです。

ヷングル　買ひ取つた……！お前……買ひ取つたつて？

エリーダ　あゝ、私だつてちつともあなたよりは善くはなかつたのです。其の取引に同意して、出かけて行つて、自分の身をあなたに賣つたのですもの。

ヷングル　（深く心苦しげに妻を見て）エリーダ、お前ほんとうにそんな事をいふ氣かい？

エリーダ　だつて、他に言ひやうはないでせう？あなたは家の中の空になつたのが堪えられなくて、新しい妻をお探しなす

つたのです――

ヴングル　それから子供等のために新しい母を、エリーダや。

エリーダ　それでもしたらう――言はゞついでにね。ちつとも――あなたは、私といふものが母となるに適するやら、適しないやら、少しも御存じなかつたのです。たゞ私に逢つて、一度か二度お話なすつたばかりで私に思ひついて、そして――

ヴングル　然、まあ何とでもいゝやうに言ふがいゝ。

エリーダ　それから私は、私として――どうする事も出來ない、賴りのない一人ぼつちでした。ですから、その取引に飛びついたからと言つて、少しも無理は無いぢやありませんか――あなたがいらして、一生私の身を支へてやるとお申し出しなすつたのですもの。

ヴングル　私はね、エリーダや、決してさうは思はなかつたよ。財產と名のつくものも少しはあるから、來て私や子供と一緒に暮しては呉れまいかと、むき出しに聞いたばかりさ。

エリーダ　はあ、さうでした。けれど私がそれを承知しちやならなかつたのです！何んな價がつかうと、決して承知しちやならなかつたのです。決して自分の身を賣つちやならなかつたのです！そんな事よりか、どれ程卑しい勞働でも――どれ程ひどい貧乏でも――自分の自由意志で――自分の選んだ道に行くのが優しでした！

ヴングル　（立ち上り）それでは、此の五六年一緒になつてゐたのがお前に取つては全然値打のないことだつたのか？

エリーダ　あゝ、さうお取んなすつちいけない、あなた！勿體ないほどあなたからは親切にして貰ひました。けれど私があなたの所へ來たのは自分の自由意志でなかつたのです――それが要點ですよ。

ヴングル　（エリーダを見て）お前の自由意志でない？

エリーダ　えゝ、私があなたに一生を任せたのは、私自身の自由意志ぢやなかつたのです。

ワングル　（柔かに）あゝ、考へて見ると――昨日あの男が其の言葉をつかつたのね。

エリーダ　すべてあの言葉の中に籠つてゐるのですよ。あの言葉が私に新しい光りを見せて呉れて事柄がはつきり分かるやうになりました。

ワングル　どういふ事が分かつたか？

エリーダ　私達二人が一緒になつてゐた生活は――ほんとうの結婚ぢやないといふ事です。

ワングル　（心苦しげに）それはお前の言ふ通りだ。私たちの現在の生活は全く結婚ぢやない。

エリーダ　過去の生活だつてさうです、ずつとさうです、始めからさうなのですよ。（前方を眞直に見て）あの最初の……あれが實際本當の結婚だつたのかも知れない。

ワングル　最初の？どの『最初』だといふのか？

エリーダ　私の――あの男との。

ワングル　（呆れてエリーダを見る）私には少しも分からない。

エリーダ　ねえ、あなた――お互に僞り合つてゐてもいけないし、自分で自分を僞つてゐてもいけないわ。

ワングル　そりやさうだ、勿論さうだ！けれども、それぢや何うするか？

エリーダ　ねえ、さうぢやありませんか――到底逃れられない事でせう？――自分の隨意で結んだ約束なら、どこまでも結婚と同じ力があるのですから。

ワングル　どうして、そんな事が――？

エリーダ　（激して立ち上り）　あなた！別かれませうよ！

ヷングル　エリーダ――！エリーダ――！

エリーダ　さうです、さうです――別かれませう！どうしても、つまりはそれより他にないのですから――二人でこゝまで來た以上は。

ヷングル　（抑へた熱情て）あゝ、到頭そこまで來たか。

エリーダ　來なくつちやならなかつたのです。他に道はないのですよ。

ヷングル　（悲しげに見て）そんな風にして、毎日一緒に棲んでゐても、お前は私のものにならなかつたのだ。嘗て一度も私のものになり切らな　。

エリーダ　あゝ、あなた――どうかしてあなたを愛することが出來たらねえ！私、心からそれを望んでゐるのですよどんなに優しくして上げてもあなたですよ！けれども私にははつきり感じられますの、それが到底出來ない事だと。

ヷングル　ぢや離縁しろといふのか？離縁――正式な法律上の離縁――それがお前には入用なのか？

エリーダ　まあ、あなたは少しも私を理解して下さらないのね。私が言つてゐるのは、形式の事なんかぢやありません。そんな上部の事に拘らつてゐるのぢやありません。私の望むのは、私達二人か銘々の自由意志で、お互に自由になる相談がしたいといふのです。

ヷングル　（氣持惡しげに頷く）　取引を無効にする――さうだ。

ゴリーダ　（熱心に）さうなの！取引を無効にするの！

ヷングル　そしてその後は？エリーダその後は？お前は私達二人の將來の事を考へだか？私たちの生活はどんな風になるだ

らう――お前のも私のも？

エリーダ　それはなるやうになるよりほかありません。未來は未來でいゝやうになつて行きます。お願ひしてる事が――その力が大事なのですよ！私を自由にして下さい！今一度私にすべての自由を與へて下さい！

ワングル　エリーダ、――それは私に取つて恐しい要求だよ。とにかく少し落ち着いて考へてから極りをつけやう。もつと根本から此の事は相談をしやう。それからお前も、自分のしてゐる事を反省して見る時間がいらう！

エリーダ　けれどそんな事で無駄にする時間はありません。今日すぐに私の自由を返して下さらなくちやならない！

ワングル　何故、今日さ？

エリーダ　あの人の來るのは今夜ですもの！

ワングル　（びつくりして）やつて來る！あの男が！あの他國人がそれに何の關係があるのか？

エリーダ　私、全く自由な身になつてあの人に逢はうと思ひますの。

ワングル　で、何を――それから爲やうといふのだね？

エリーダ　私は他人の妻だからとか――選擇の自由がないからとかが言つてそれを口實に逃げるのがいやだからですよ。そんな事をしてるちや、自分の行ひに少しもきつぱりした所が無くなります。

ワングル　選擇の自由だと！自由にお擇び、エリーダ！此の事について自由に擇んで呉れ！

エリーダ　はあ、擇ばなくちやなりません――自由にどつちかを擇ばなくちやなりません。あの人を一人行かすか――それとも私が一緒に行くか、私の自由でなくちやなりません。

ワングル　お前は自分の言つてることが分つてゐるか？あの男と一緒に行つて！生涯の運命をあの男の手に任して了ふ！

エリーダ　あなたの手にだつて、生涯の運命を任したぢやありませんか！熟考した譯でもなく。

ヷングル　そりやそうかも知れない。併しあの男に！あの男に！全くの他國人に！殆ど何も知らない男に！

エリーダ　あなたをだつて、もつと知らなかつたのですよ。それでもあなたと一緒になりました。

ヷングル　少なくともあの時は、是れからどんな生涯に這入るのだか、相應に分つてゐた筈だ。それが今度は？今度は？考へて御覽！今度は何が分かつてゐるのか？何にも分かつちやゐない。誰れだかさへも――第一人間だかどうかさへ。

エリーダ　（前方を眞直に見て）それはさうです。けれどそこが私たまらなく物凄いのです。

ヷングル　ああ、さうだらう――

エリーダ　その爲めに私は、どうあつても從はなくちやならない氣がするのです。

ヷングル　（エリーダを見て）たまらなく物凄いために？

エリーダ　ええ、そればかりに。

ヷングル　（近くに寄り）ねえ、エリーダ……その物凄いといふのは、實際どういふ意味なのだ？

エリーダ　（考へて）物凄いといふのはね――何だか誘惑せられるやうで、同時に怖ろしいのですよ。

ヷングル　誘惑？

エリーダ　誘惑だと思ひます、重に。

ヷングル　（徐かに）お前は海と生命が通つてゐるのだ。

エリーダ　海にも物凄いところがある。

ヷングル　お前だつてさうだ。誘惑せられるやうな、そして怖ろしやうな所がお前にもある。

エリーダ　さう思つてゐた？

ヴンゲル　私は今まで實際お前を知らなかつた。根本から知ることが出來なかつた。それが今やつと分りかけて來たよ。

エリーダ　ですから私を自由にして下さらなくちやなりません！あなたやあなたの家と私との關係を、すべて切り放して下さい！私はあなたが考へてゐらつしやるやうな女ぢやありません。それが今御自身で分つたでせう？さあこれで、私たちはお互に了解し合つて別れることが出來ます――銘々自分の自由意志で、

ヴンゲル　（沈んで）恐らくそれが二人の爲めに一番いゝだらう――別れるのが。併しさうは言つても、私にはそれが出來ない！私に物凄い思ひをさせるのは、お前だ、エリーダや。誘惑――それが何よりもお前なのだ。

エリーダ　さうでせうか？

ヴンゲル　今日一日を迷はないで過ごしたいものだ――冷靜によく考へてね。私は今日はお前を自由にして出て行かすことが出來ない。そんな事をしてはならない――お前のために、エリーダ。私はお前を保護するのが、私の權利だとも義務だとも信ずる

エリーダ　保護？何に對して私を保護して下さるのですか？私をおびやかしてゐるのは、何も外からの暴力や亂暴ぢやありません。物凄いのはもつと深いところにゐるのですよ。物凄いと言つても、たゞ私自身の心の中の誘惑に過ぎないのですからどうしてあなたがそれに對抗なさることが出來ませう。

ヴンゲル　それに負けないやうにお前に力を添へて助けてやることは出來やう。

エリーダ　えゝ――若しそれに負けないとする氣があつたら。

ヴンゲル　その氣はないのか？

エリーダ　あゝ、そこか私に分らないのです――

ヷングル　今夜すべて！極まるだらうよ、エリーダ――

エリーダ　（叫んで）えゝ、ねえ――！最後の極まりが、もうすぐつくので！す生涯の極まりが！

ヷングル　――そして明日は――

エリーダ　えゝ、明日は！私の本當の未來は壞れてゐるかも知れません！

ヷングル　お前の本當の――？

エリーダ　完全な自由の生活は壞れて了つて――私に取つても、それから多分あの人に取つても壞れて了つて！

ヷングル　（腰を捉え低い調子で）エリーダ――お前はあの他國人を愛してゐるのか？

エリーダ　私が――？あゝ、どうして分りませう！私はたゞ物凄いと思ふ一心で、そして――

ヷングル　――そして――？

エリーダ　（身を振り放して）――そして何んだか私の家はあの人と一緒の所のやうな氣がします。

ヷングル　（うなだれて）分りかけて來た。

エリーダ　で、どんな助けを、どんな療治をして下さらうといふのですか。

ヷングル　（悲しげに見て）明日は――あの男が居なくなるだらう。するとお前の災難も無くなるだらうし、そい時お前を自由にして行かせてやる。取引を帳消しにしやうよ、エリーダ。

エリーダ　あゝ、あなた――！明日では――もう遲いでせうよ。

ヷングル　（庭の方を見やり）子供等が子供等が――！少くともあれ等だけには――今はねえ。

（アルンホルム、ボレッタ、ヒルダ、及リングントランド庭に現はれる。リングストランドは家に入らないで、別れを告けて左方に入る。他の人々は室に這入つて來る。）

アルンホルム　あゝ、どうです、私達は大計畫を立てましたよ――

ヒルダ　今晩みんなで入江へ乘り出してね――

ボレッタ　いけない、いけない、默つておいでよ

ヴングル　私達も計畫を立てたよ。

アルンホルム　あゝ――さうですか？

ヴングル　明日エリーダはちよつとショルドヴィックへ行くのです。

ボレッタ　旅行して――？

アルンホルム　奥さん、それが何よりですよ。

ヴングル　エリーダは又家へ歸りたいのです、海の家へ。

ヒルダ　（エリーダの方へ小走りに走り寄つて）あなた、旅行なさるの？行つて了ふのだよ！

エリーダ　（愕いて）何ですよ、ヒルダ！どうしたのさ？

ヒルダ　（躊躇ふて）何でもないの、何んでもないの。（振り返り小聲で）是非いらつしやいよ！

ボレッタ　（心配げに）お父さん、あのね――あなたもいらつしやるのでせう――ショルドウィックへ！

ヴングル　いや、私は行かないよ！たゞ折々行つて見ることになつて――

ボレッタ　そしてまたお歸りになさるの――？

ヴングル　あゝ、歸るとも――

ボレツタ　――それも折々、でせうね？

ヴングル　お前、さうするほかはないよ。（歩み去る）

アルンホルム　（さゝやく）後に話したいことがありますよ、ボレツタさん。

（ヴングルの方に行き。低い聲で戸口の所で話す。）

エリーダ　（柔かくボレツタ）にヒルダはどうしたのだらう？ひどく氣を腐らしてるやうね！

ボレツタ　ヒルダが不斷から焦れてゐるものがあるのですよ、あなた氣がつきませんか？

エリーダ　焦れて？

ボレツタ　あなたが此の家へいらつしてからずつと！

エリーゲ　氣がつかないの――何だらう？

ボレツタ　唯一言、あなたから優しい言葉を。

エリーダ　あゝ――！私の生涯の仕事がこゝにあるのか知ら。！

（頭の上で兩手を握り、動かずに前方を見つめてゐる。思想や氣分の紛亂してゐるのに苦しむ如く。）

（ヴングルとアルンホルムに呟き合ひ乍ら前の方へ出て來る。）

（ボレツタは右手の隣室を覗きその戸を廣く明け放つ）

ボレツタ　さあ、お父さん――御飲になりましたから、――

ヴングル　（强いて胸を抑へて）あ、さうかい？よし〳〵。アルンホルムさん、おいでなさい！一つ別れの盃でも酌みませ

まう――『海の失人』とねえ。

（人々右人の戸の方へ行く。）

第五幕

ヷングル家の庭の片隅、鯉池の參り。夏の夕暮の光が黑んで行く。アルンホルム、ボレツタ、リングストランド及ヒルダ短艇を入江の岸に沿うて漕ぎ乍ら左手から現はれた。

ヒルダ　ほら、此處からだとすぐ飛び上れてよ!

アルンホルム　いけないく、お止しなさい!

リングストランド　僕にや飛べませんよ、ヒルダさん。

ヒルダ　あなたも飛べなくつて?アルンホルムさん。

アルンホルム　私は御免だ。

ボレツタ　浴舍の段々のところから上りませう。

(皆々右の方に漕ぎ出して行く。)

(此の時、バレステツト樂譜と佛蘭西式角笛とを携へて右手から路に現はる。短艇にゐる人々に挨拶し、振り返つて話をする。先方の答は次第々々に遠く聞こえる。)

バレステツド　何んですつてッ――さうです、無論イギリス船の爲めにですよ。今年の最後の航海ですからね。併しあなたがたも音樂か聞きたけりや、餘り長くなつちやいけませんよ。(叫んで)何ですと?(頭を振つて)何んだかちつとも聞えないや!

（エリーダ頭にショールをかけて、左手から入り來たる、ヴングルその後から續く）

ヴングル　だが、お前、時間はまだたつぷりあるよ。

エリーダ　いえ〳〵もうありません！あの人が何時來るかも知れない。

バレステッド　（外垣根の所で）やあ、先生、今晩は！奥さん今晩は！

ヴングル　（氣がついて）あ、君でしたか？今晩又音樂があるのですか？

バレステッド　はあ。音樂會が一つ出來るだけのことをやつて見やうといふのです。此の節はお祭りつづきで、今夜はイギリス人のためにやるのですよ。

エリーダ　イギリス船！もう見えて來ましたか？

バレステッド　まだですが、入江を下つて來てゐます、あの島の間を。もうすぐ、おやつといふ間に着きますよ。

エリーダ　あゝ、それですよ、私の言ふのは。

ヴングル　（半ばエリーダに）是れが最後の航海で、今夜が過ぎると、もう來なくなる。

バレステッド　濕つぽいお話ですな、先生。だが先も申したやうに、あの船のために音樂會を開かうといふのも、全く其の心持ですよ。さうですとも〳〵！樂しい夏が段々終りに近づいて來て、芝居の文句ぢやないが「やがて海峽は見渡す限り氷ににとざされん」

エリーダ　見渡す限りの氷にとざされて――ねえ

バレステッド　考へると悲觀して來ますね！長い間愉快な夏の子になつてゐたのが、之れからまた薄暗い日の中で過ごさなくちやならないと思ふと、辛いことですよ。もつとも、それも初めだけですがね、何故といふと。人間て奴はアックリー

アツークリマタズイして行けるものですからね、つまり其の季候に同化するのでさあ、奥さん。全くですよ。（禮をして左方に去る。）

エリーダ　（入江を見渡して）あゝ、斯うしてゐるあひだの苦しいこと！生涯の極りがつくのだと思ふと、此の半時間がもどかしくつてしやうがない！

ヷングル　ではお前まだあの男と直接に話をする積りかい？

エリーダ　是非自分で話さなくちやなりません、自分の自由意志でどちらかを擇ばなくちやならないのですから。

ヷングル　お前にその自由はないよ、エリーダ。自由に擇ぶことは許しません――私がそれを許さない。

エリーダ　あなたの力でそれを止めることは出來ません。あなたに限らず、誰れにだつて出來ない事です。それは、私があの人と一緒に行つて――生涯をあの人に任せるといふ場合に、それをお禁じなさることは出來ませう。若し私がさういふ擇び方をしたとすればね。つまり私の意志に逆らつて、體を無理やり此處へ引き留めるのですから、それならあなたに出來ませうさ。けれど私が魂の奥で自由に――あなたよりもあの人を擇んだとすれば――それがどうあつてもさうしか思はれない場合にはそれを止めることは出來ません。

ヷングル　なる程それはさうだ。それを私が止める事は出來ない。

エリーダ　それに私、行くのを拒む理由もないのですよ！こゝでは何一つ私を引き留めて放さないやうなものがないのですから。あなた私は此家に少しも根をおろしてゐないのですよ。子供は私のものぢやなし――あれらの心持がね、どうしたつて私のものにならないのです。若し私が出て行くとすれば――今夜あの人と一緒に行かうが明日一人でショルドウァックに立たうが――どちらにしても私には鍵一つ渡して行く世話もなければ指圖一つ殘して行くこともありません。何一つ私

がする事はないのです。そんな風にして、私は少しも此の家に根をおろしてゐませんの。この家へ來た初めから何事に限らずまるで除けものになつてゐたのですもの。

ヴングル　お前が自身でその方を望むのだ。

エリーダ　いゝえ、さうぢやありません。私はどちらを望むといふこともなかつたのです。たゞ何でも私が來たときのままに、そつとして置いただけ。却てあなたこそ――誰れよりも――そんな風にするのをお望みなすつたでせう？

ヴングル　私はたゞお前のためとばかり思つてやつたのだ。

エリーダ　えゝ、それはね、私がよく知つてゐます！けれどさういふやり口だと、報ひがついて來ます、自分で自分に復讐をするやうになります！そんな風にして私には、もう自分を結びつけて呉れるものも支へてくれるものも――助けて呉れるものも全くなくなつて、私たち夫婦の生活の一番貴い寶でなくちやならないものさへ、少しも私を引き留める力にならなくなりました。

ヴングル　それはよく分つてゐるよ、エリーダ。だから明日はお前が元の自由に歸れる。その後はお前自身の生活に戻られるのだ。

エリーダ　あなたはそれを私自身の生活だと仰しやるのね！どうしてそんな事がありませう？私自身の本當の生活に、あなたと一緒になつた時に壞れて了ひました。（恐れと不安で兩手を握りしめ）そして今――今夜――半時間の内に――私が振り棄てた人がやつて來る――その人の眞實に對しては、私だつて少しも不實な事をしちやならなかつたのですよ！いよ〳〵其の人がやつて來て私に――之れつきり最後だと言つて――新しい生涯を始める機會を與へやうとする――私自身の本當の生活を――あの引きつけられるやうな恐しい生活を――そして私はどうしてもそれを思ひ切ることが出來ない！私

身自の自由意志でも思ひ切れない！

ヴングル　だからお前には、夫であり――醫者である私がゐて――お前の手から其の力を取り出して、お前のためになるやうに取計らふ必要があるのぢやないか？

エリーダ　あなた、それはよく分かつてゐますよ。時々は私だつて無論さう思ひます、あなたの翼の下にしつかりと身をひそめて、あの恐ろしい誘惑の力を防いだら、どんなにか平和で安全だらうとは思ひますのよ。けれど私にはそれが出來ない。出來ない、出來ない――どうしても出來ない！

ヴングル　おいでエリーダ――少し散歩しやうぢやないか？

エリーダ　さうしたいのですけれど、私、出るわけに行かないのですよ。あの人が私に、こゝで待つてなくならないと言つたでせう？

ヴングル　まあ、おいで。まだ充分時間があるから。

エリーダ　さうでせうか？

ヴングル　大丈夫、充分だ。

エリーダ　ぢや少し歩きませうか。

（二人前方右手に出て行く。同時にアルンホルムとボレッタが池の向岸に現はれる。）

ボレッタ　（出て行く人影を認めて）御覽なさいな――？

アルンホルム　（柔らかに）しつ！打つちやつてお置きなさい。

ボレッタ　此の三四日のあいだ、あの二人の仲にどんな事が起こつてたか、あなたに分かりますか？

アルンホルム　何か氣づきましたか?

ボレツタ　氣づいたの――!

アルンホルム　何か變つた事を?

ボレツタ　えゝ、いろんな事を　あなたには分からなくて?

アルンホルム　さうさね、よくは分かりませんが――

ボレツタ　あら、きつと分かつてゐるのよ。たゞそれをおつしやりたくないのでせう?

アルンホルム　少し旅行をなさるといふのが、屹度お母さんに利くだらうと思ひますね。

ボレツタ　さうお思ひなすつて?

アルンホルム　えゝ、あの方が時々少しづゝ何處かへ出られると、すべての方面に都合がいゝだらうと思ひますよ。

ボレツタ　明日ショルドウィックへ行つたら屹度もう歸らないでせうよ。

アルンホルム　だつて、ボレツタさん、どうしてそんな事をお思ひですか。

ボレツタ　さうに違ひないと思はれますわ。見てゐて御覽なさい!きつと歸つて來ないから。とにかく、ヒルダと私が家にゐる間はね。

アルンホルム　ヒルダさんも?

ボレツタ　さうですね、ヒルダはそれ程でないかも知れません。あれはまだ子供ですからね。其の上、あの子はたしかに心の中ぢやエリーダさんを崇拜してゐるのですよ。けれど私とはさう行かないでせう?私とさう年の違はない繼母なのですから――

アルンホルム　ねえ、ボレツタさん、――あなたが家を出られるやうになるのも、さう遠くはありますまいよ。

ボレツタ　（熱心に）さうでせうか？あなたその事をお父さんに話して下すつて？

アルンホルム　えゝ、それも話して見ました。

ボレツタ　で――父はどう言ひましたか？

アルンホルム　ふむ――お父さんはね、丁度今、他の考へに氣を取られてゐらつしやつて――

ボレツタ　えゝ、えゝ、その事ですよ、私がさつき言つたのは。

アルンホルム　併しこれだけの事は探つて見ましたよ、つまりお父さんの方から補助を貰はうとお思ひなすつちやいけないといふ事です。

ボレツタ　いけない？

アルンホルム　お父さんはお家の現狀をすつかり私に打明けて、到底そんな事は出來ない相談だといふことを明かになすつたのです。

ボレツタ　（咎めるが如く）まあ、それでゐてあなたは、平氣でいゝ加減な事を私に言つてらつしやたのね？

アルンホルム　決してさうぢやな、のです、ボレツタさん。家を出ると出ないは、全然あなた自身にあることです。

ボレツタ　私にあるのですつて？

アルンホルム　世間へ出て行つて、心で望んでゐた事を學ぶのもです。こゝで斯うして焦れてゐる事に這入つて行くのもです。もつと幸福な中であなたの本當の生活をして行くのもです？ボレツタさんどうお思ひすです？

ボレツタ　（兩手を握り合せて）あゝ、ほんとうにねえ――！けどそれは到底出來ない事ですわ。お父さんにさうして下さる

力もなく、其の氣もないとしたら――。私が賴る人は世界中尋ねたつて他にないんですもの。

アルンホルム　あなたは其の補助を昔の――以前の家庭教師から受けて下さる氣はありませんか？

ボレツタ　あなたからアルンホルムさん？ほんとうにあなたが――？

アルンホルム　賴りになりますとも。喜んで助言でも御手傳でもしますよ。私にお任かせなさい。おや私の申出を受けて下さるか？承知して下さいますか？

ボレツタ　承知しますつて家を出て？――世間を見たい――實際の知識を廣めたい――私が樂しみにしてゐた、夢のやうな望みが叶ふのでせうか――？

アルンホルム　えゝ、それがみんな、あなたの決心一つで出來るのです。

ボレツタ　で、あなたが其の何といつていゝか分からない程の幸福に私を導いて下さるやうに力を貸して下さるのですね！あゝ――けれどねえ――私、他人からそんな事をして戴いて好いのか知ら？

アルンホルム　一向差支ありませんとも、ボレツタさん、私からなら、どんな事でも御遠慮はいりません。

ボレツタ　（彼の兩手を取り）えゝ、實際私もそんな氣がしますのよ。どういふ譯だか分からないけれど、――（感情が高まつて叫ぶやうに）あゝ私たゞ嬉しくて――たゞもう幸福で一度に泣いたり笑つたりしたいやう！あゝ――考へても御覧なさい、とう／＼世の中の學問が出來るのですもの。とても私には其の機會が無いのぢやないかと心配してゐたのに。

アルンホルム　そんな心配はいらないが、ボレツタさん、此所で是非明らさまに聞かして下さらなくちやならない事があります。それはね――何か緊累があつてあなたを此の土地に引き留めはしないかといふ事です？

ボレツタ　緊累？いゝえ、何もかりません。

アルンホルム　全くありませんか？

ボレッタ　はあ、何も。それはね――無論、父は一種の――繋累ですし、ヒルダだつてさうですけれど、併し――

アルンホルム　それはさうでも――お父さんは、どうせ、早いか遲いか、別かれる人でせうし、ヒルダさんだつていつかは自分自身の生活の道を歩まれる人でせう、たゞ時の問題だけです。けれども、其のほかには、何にもあなたを束縛するものはありませんか？何か結婚約束といふやうなものは？

ボレッタ　いゝえ、そんなものはありませんわ。その事なら、私、何所へでも自由に行けますわ。

アルンホルム　それでは、そんな風なら、ボレッタさん――私と一緒にいらつしやい。

ボレッタ　（自分の兩手を握りしめて）あゝ、私――ほんとうに嬉しうござんすわ！

アルンホルム　一切私を信じて、私をたよりにして下さい。

ボレッタ　えゝ、私さうしますわ。

アルンホルム　そしてあなたの身の上や將來の事も、すつかり、安心して私に任せて下さるでせうボレッタさん？さうなすつたらいゝでせう、え？

ボレッタ　えゝ〳〵、無論ですとも！極まついるぢやありませんが？疑ぐつてゐらしつて？あなたは昔の先生ぢやありませんか――昔一度先生になつて頂いたことのある方ぢやありませんか？

アルンホルム　そのためばかりで言ふのぢやありませんよ。その方面には、たう重きを置いてゐません。併し――さう――とにかく、あなたが自由だとして――少しも繋累がないとすれば――聞きたいのですがね――あなた其の氣になつて與れませんか――私と一緒になる氣に――一生涯？

ボレッタ　（恐れて飛びのき）あゝ——何を仰しやるの？

アルンホルム　一生涯ですよ、ボレッタさん。私の妻になつて下さい？

ボレッタ　（半ば獨語のやうに）いえ、いえ、いえいけない！出來ない事です！とても出來ない事！

アルンホルム　これがあなたに取つてそんなに出來ない事でせうか——？

ボレッタ　あなたの言つてらつしやるのは、そんな意味ぢやないのでせう、アルンホルムさん？（彼を見て）でなければ——それともあなた、何ですか、私のためにあんなに盡してやらうと仰しやつたのは、其の意味だつたのですか？

アルンホルム　まあ、ボレッタさん、落ついて私の言ふことをお聞きなさらなくちやいけない。あなたはびつくりしてお了ひなすつたやうだ。

ボレッタ　だつてこんなお話を——あなたから伺ふのですもの——愕かずにはゐられませんわ。

アルンホルム　そりや御もつともです。無論あなたは御存じないでせう——御存じの筈はないが、私が今度出て來たのは、あなたのためだつたのですよ。

ボレッタ　あなたのこゝへゐらしたのが——私のため？

アルンホルム　えゝ、さうですボレッタさん。私はね、此の春お父さんからお手紙を貰ひました。——その中の文面で、私は一圖にかう思ひ込んで了つたのです——ふむ——あなたが元の先生を忘れないで、——たゞの友情といふよりも、も少し以上の思ひ出を持つてゐて下さるといふ意味にね。

ボレッタ　どうしてお父さんが、そんな事を書いたのでせうねえ！

アルンホルム　ところが、お父さんのおつもりは、全たくそんな意味ぢやなかつたやうです。けれども私に取つては、いつ

も心の中で、この土地にゐる若いお娘さんか、私の歸るのを待つてゐて呉れるといふやうな考に耽つてゐました――いやまあ、じつとして聞いてゐて下さい、ボレツタさん！それでね――私のやうに、もはや青年の活氣の衰へたものに取つては、今言つたやうに信じたり――想像したりして見ると――それが非常に強く頭に殘るのです。で、あなたに對する若々しい嬉しい愛情が段々と心の中に生じて來て、是非今一度あなたに逢ひに來なくちやならないやうに思はれました。そしてあなたが私に對して持つてゐて下さると思つた感情を、私も持つてゐますと言つて了はなくちや濟まないやうな氣かしたのです。

ボレツタ　ですけど、もう、さうでなかつたと分かつたのですもの！間違ひだと分かつたのですもの！

アルンホルム　そんな事は構ひません。あなたの姿は――私の心の中に殘つて――いつまでも此の行違ひから生じた愛情のために生きて浮んでゐるでせう。あなたにそれは分からないかも知れないが、事實さうなのです。

ボレツタ　私、こんな事にならうとは、夢にも思ひませんでした。

アルンホルム　けれども、さうなつて見れば――ボレツタさんどうでせう？さう決心しては下さらないでせうか――私の妻になるやうに？

ボレツタ　あゝ、それは迚も出來ない事ですわ、アルンホルムさん。私の先生だつたあなたに！先生でない關係で御一緒にならうなんて、私には想像も出來ません。

アルンホルム　あゝ分かりました〳〵――あなたが本當にそんな事があつても、それは出來ないとお感じなさるのなら――それにして置いて私のあなたに對する關係は少しも變らない事にしませう。

ボレツタ　と仰しやると？

アルンホルム　勿論私はどんな事があつても、約束した事は變へません。どうにかしてあなたを家から出られるやうにして世間を見させてあげませう、あなたが本當に望んでゐらつしやるものを學ばせてあげませう、獨立して安全に暮らして行けるやうに。そして其の先の事も、私が困らないやうにしてあげます。私をいつまでも、たしかな、變らない友人だと思つてたよりにして下さい。決して間違はありません。

ボレツタ　あゝ――アルンホルムさん――今ぢやもう、そんな事も出來なくなりました。

アルンホルム　それも出來ないのですか？

ボレツタ　えゝ、さうお思ひぢやありませんか？あなたがあゝ言つてお了ひなすつて――私があゝお答へした以上――ねえあなたからそんな大變な御恩を受ける譯に行かないことは察して下さるでせう？私、あなたからは一文だつて頂けません一文だつて、此の後は！

アルンホルム　ではあなたは、家に座つてゐて、本當の生活も知らないで過ごして構はないといふのですね？

ボレツタ　あゝ、それを考へると、たまらなくなります！

アルンホルム　あなたは世間を見ようといふ望みも打つちやるつもりですか？焦れてゐるとおつしやる事に携はる機會を、打つちやるつもりですか？世の中にはいろんな事がありますよ――それをあなたは少しも本當に了解し得ないでゐるのですね。よう考へて御覽なさい、ボレッタさん。

ボレツタ　さうです／＼――あなたのおつしやる通りですよ、アルンホルムさん。

アルンホルム　その上――お父さんがゐらつしやらなくなれば――あなたは、たよりの無い一人ぼつちにおなんなさるかも知れない。恐らく他人に身を任せなくちやならない事になつて、――其の人といふのも――十中八九は――あなたの氣に、

るやうな人ぢやないかも知れない。

ボレツタ　さうですとも――私だつてきつとさうなるだらうといふ事はよく知つてゐます――あなたのおつしやる通りですよ。けれどやつぱり――！――それともひよつとしたら、つまりは――

アルンホルム　（早口に）はあ！

ボレツタ　（半信半疑で見て）　ひよとしたら、つまりは、それほど出來ない事でもないかも知れませんわねえ――

アルンホルム　何がですつて？

ボレツタ　私ね――ひよつとしたら――あの――あなたがおつしやつて下すつた事に御同意できるかも知れませんといふ事

アルンホルム　といふと、ひよつとしたら、あなたが――？少なくとも眞實な友人としてあなたをお助けする幸福を私に許して下さるといふのですか？

ボレツタ　いえ、いえ、いえ！決してそんな事ぢやありません！それは到底出來ない事ですよ。いけないの――あなた――！それよりか一そ私の身をあなたに任かせますわ。

アルンホルム　ボレツタさん！ではあなた――？

ボレツタ　えゝ、――私、さうした方が――いゝと思ひますわ。

アルンホルム　私の妻になつて下さる？

ボレツタ　えゝ、あなたがまだ――私でなくちやと思つてゐて下さるなら。

アルンホルム　思つてゐるなら――！（手を取つて）　有難う、ボレツタさん、有難う！　あなたが言つてゐらつしやつた――最初の心配は――もつともだと思ひます。若しまだ十分にあなたの情が移らないやうだつたら、私がどんなにも勤めま

す。あゝ、ボレッタさん、私、實にうれしいと思ひますさ。

ボレッタ　そして私は世間も見られるし、世間の生活にも這入れるし。あなたそれを約束して下すつたわね。

アルンホルム．私、其の約束を守りますよ。

ボレッタ　で、私は、何でも望みのまゝに習へますのね。

アルンホルム　それから私は昔のやうにあなたの先生になりませう。あの頃の末のことを想ひ出すと――

ボレッタ　（靜かにうつとりとして）ねえ、さう思ふと――これで自由な身になつて――知らない世界へ出て行くのですもの！そして將來の事も心配がなくて、どうして喰べて行くかといふやうなみじめな苦勞もいらす――

アルンホルム　えゝもうそんな事に氣をつかふには及びません。ねえボレッタさん、さうなるとそれもいゝと思ふでせう？

ボレッタ　えゝ、よ御座んすわ　一番いゝ道ですわ。

アルンホルム　（腰のまはりに腕をかけて）あゝ、どんなにか私たちの生活は、穩かな樂しいものになるだらう！そして二人はお互にたよりになり合つて平和に手固くやつて行きませうね、ボレッタさん！

ボレッタ　えゝ私にも段々それが。――私ほんとうにさう思ひますわ――一緒になつて行かなくちやなりませんわね。（右方を見やり、いそいで身を退いて）あゝ！どうぞ何も言はないでゐて下さいな！

アルンホルム　どうしたのです？

ボレッタ　あの、かはいさうな人が――（指して）そら、あそこに。

アルンホルム　お父さん――？

ボレッタ　いゝえ、あの、若い彫刻家よ。ヒルタと一緒にあそこを歩いてゐますわ。

アルンホルム　あゝ、リングストランドか。なぜ、あれの事を氣にするのです？

ボレツタ　あの人ねえ、それや弱くて病身なのですよ。

アルンホルム　さうでせうか、それとも自分でそんな風に想像してるのぢやないか？

ボレツタ　いゝえ、實際さうなの、もう長くは生きられないのよ。ですけど當人のためには却つてその方がいゝでせうよ。

アルンホルム　どうしてそれが當人のためにいゝのでせう？

ボレツタ　だつて――だつて、どの道さう大したものがあの人の腕で出來さうにも思へないからですよ。――なん、みんな來ないうちに行きませう。

アルンホルム　さうしませう。

（ヒルダとリングストランド池の傍に出て來る）

ヒルダ　もし／＼！私どもをお待ち下さる譯にはまゐりませんか？

アルンホルム　ボレツタさんと私は一寸お先へ。

（二人左手に出て行く。）

リングストランド　（靜かに笑つて）　これは面白い誰れも彼れも對になつて行きますね。いつも二人づゝで。

ヒルダ　（二人を見送り）　私誓つて斷言してやるわ、あの人姉さんを愛してるのよ。

リングストランド　さうでせうか？何かそんな風に思はれる事がありましたか？

ヒルダ　えゝえ、さうですとも。それが見えない譯はないぢやありませんか――あなたに眼さへあいてゐれば。

リングストランド　併しボツレタさんはあの方を愛しはしないと思ひますね。きつとさうですよ。

ヒルダ　えゝさうよ。姉さんはね、あの人を大變なお爺さんだと思つてゐるのよ。それから今に頭が禿げて了ふだらうと思つてるのよ。

リングストランド　いや、私はそんな事だけで言つたのぢやありません。どちらから見ても、あの方を愛しはなさるまいと思ふのです。

ヒルダ　どうしてそれがお分かり？

リングストランド　それはね、ボレッタさんが心で忘れまいと約束なすつた人が他にあるからです。

ヒルダ　たゞ心だけで？

リングストランド　えゝ、その人のゐない間は。

ヒルダ　あゝ、それはきつと、あなたね、姉さんが心で思つてるといふのは。

リングストランド　さうかも知れません。

ヒルダ　あなたにそれを約束したの？

リングストランド　えゝ考へて見て下さい、――姉さんが約束して下すつたのですよ！併しそんな事を知つてゐる風なんかしちやいけませんよ。

ヒルダ　心配しなくてもいゝ事よ。私、墓場のやうに沈默を守つてよ。

リングストランド　それはどうも、實にありがたいと思ひますね。

ヒルダ　それから、今度あなたが歸つていらつした時は――結婚約束になるのですか。姉さんと結婚するお積り。

リングストランド　いや、それはいけなからうと思ひます。結婚といふことは、私に取つちやまだ三四年、問題にやなりま

ん。それかと言つて私が一人前になつた頃には、ボレッタさんは、もう少しお婆さんになり過ぎて、私に不適當らだつと思ひます。

ヒルダ　それでゐてあれにあなたの事を思はせてゐやうと仰しやるの？

リングストランド　えゝ、それが大變私の助けになります、無論美術家としての私にです。それからあの方も別にこれといふ仕事を持つてらつしやるのでないから、そんな事は譯なく出來ます。それで私には實に有りがたいんですから。

ヒルダ　ぢや姉さんがあなたの事を此處で思つてゐるとさへ分かれば、群像彫刻が早く出來上るのですか？

リングストランド　はあ、さう思ひます　全體、世界のどこかで、若い、美しい無口な女が、誰れにも知らないで思ひつゞけてゐてくれるといふ事は――きつと、その――その――。まあ、何と言つていゝか分りませんがね。

ヒルダ　何でせう――痛快？

リングストランド　痛快ですつて？　あゝ、さうです。痛快です。それとも何かそんなやうなものです。（一寸見てゐて）あなたは實に活潑ですね　ヒルダさん。ほんとうにあなたは活潑です。私が夕歸つて來たら、其のころあなたがちやうど、今の姉さんくらゐな年になつてゐらつしやるでせう。きつと今の姉さんと似て來るでせう。それから心持も姉さんと同じやうに發達するでせう。言はゞあなたと姉さんは――一體のやうになるに違ひありません。

ヒルダ　さうなるとあなたは滿足して？

リングストランド　はつきりは分かりませんが、そんなやうな氣がします。併しねえ――此の夏中は――今のまゝのあなたでゐて欲しいですね――そつくり今のまゝで。

ヒルダ　今のまゝの私が一番お好き？

リングストランド　え〻、それが非常に好きです。

ヒルダ　ふむ――ではね――美術家として――あなたは、私がいつも薄い夏服を着てゐるのをい〻と思つて？

リングストランド　はあ、申分なくい〻と思ひますね。

ヒルダ　ぢや強い色が私には似合ふのですか？

リングストランド　はあ、私の趣味では美しいと思ひます。

ヒルダ　けれどねえ、あなた――美術家として――どうお考へなすつて、私が眞黒な着物を着たら？

リングストランド　眞黒の着物ですか、ヒルダさん？

ヒルダ　え〻、全體を眞黒にするの。綺麗に見えるでせうか？

リングストランド　眞黒の着物は夏には向きませんね。併しさうでさへなければ、黒もきつとあなたに似合ひます。さうです、あなたの柄が黒に適してゐます。

ヒルダ　（前を見つめて）頸まですつかり黒にして、黒い襞に――黒い手袋――、長い黒いヴェールを後へ垂れて。

リングストランド　あなたがそんな風をなさると、私は畫家になりたくなりませう。そして憂ひに沈んでゐる若い美しい未亡人を畫いて見たくなりませう。

ヒルダ　でなければ、若い娘が結婚約束をした人に死なれて悲んでる所をね。

リングストランド　え〻、さうだと、尚よくあなたに似合ひますね。けれども、まさかそんな風がしたいとは思はないでせう？

ヒルダ　どうですかねえ、けど痛快ですわ。

リングストランド　痛快？

ヒルダ　考へて見ると痛快よ、ねえ（急に左の方を指して）あら、あそこを御覧なさいよ！

リングストランド　（示された方を見て）あの大きなイギリス船ですね！丁度波止場へ着いたのです！

（ヴングルとエリーダ池の傍に現はる。）

ヴングル　いや、それはたしかだよ、エリーダ、お前が思ひ違ひをしてゐる！（他の人々を見て）おや、二人で此處にゐたのかい？船はまだ見えないやうですね、リングストランドさん？

リングストランド　あの大きなイギリス船ですか？

ヴングル　さうです。

リングストランド　（指し乍ら）彼處にもう着いてゐますよ。

エリーダ　あゝ――！さうだらうと思つた。

ヴングル　もう來てゐる！

リングストランド　さうですね、夜盗賊でも忍び込むやうに這入つて來たのですね――こつそりと音もたてないで――

ヴングル　君は埠頭へヒルダを連れて行つて下さい。急いでね！音樂を聞きたがつてゐるでせうから。

リングストランド　はあ、これから行かうと思つてゐたのです。

ヴングル　私達も後から行くかも知れません。すぐ行きますよ。

ヒルダ　（リングストランドに囁いて）又一組出來たわね。

（二人庭を通つて左手に行く、次に臺詞の間、遠く峽灣の方から音樂の吹奏が聞こえる。）

エリーダ　彼の人が來ました！もうこゝにゐる！さうです、さうです――私、感じで分ります。

ワングル　お前は家へ這入つた方がいゝ、私獨りで逢はう。

エリーダ　おゝ――そんな事が出來るものですか！出來るものですか！（叫んで）おゝ――あなた、あの人が見えますか！

（他國人左手から入り來り垣の外の路に留まる。）

他國人　（禮をして）今晩は。さあ、歸つて來たよ、エリーダ。

エリーダ　さう、さう、さう――時刻が來たのねえ。

他國人　出發する用意が出來たか？それともまだかい？

ワングル　君自身で見たら分かるだらう、あれが仕度をしてゐない事は！

他國人　旅行服だの鞄だの、そんなものは、心配するに及ばない。入用なものはすつかり船に用意して置いたからね。船室も一つ取つてある。（エリーダに）では、お前に聞くが、私と一緒に來る覺悟がついたか、お前自身の自由意志で私と一緒に？

エリーダ　（嘆願するやうに）おゝ、聞かないでゐて下さい！私をそんなに誘惑しないで下さい！

（船の鈴が遠くで聞える。）

他國人　さあ、乘り込みの第一鐘が鳴つてゐる。來るか來ないか、すぐ決めなくてはいけない。

エリーダ　（自分の兩手を握りしめて）決めなくちやならない！生涯の決定をつけなくちやならない！決めたらそれが最後になる！

他國人　それが最後だ。半時間たつともう間にあはないよ。

エリーダ　（おづ〳〵と疑はしげに彼を眺めて）　一體どうしてさう執こく私に附きまとふのでせう？

他國人　私たち二人はお互に離れられないものだといふことを、お前は私ほどに感じないのかい？

エリーダ　あの約束があるからと言ふのですか？

他國人　約束なんぞで、人が縛られるものぢやない、男でも女でも。若し私が執こくお前に附きまとふとしたら、それはそれはさうしか出來ないからだ。

エリーダ　（顫へ乍ら柔かに）何故もつと早く來て下さらなかつたのでせう？

ヷングル　エリーダ！

エリーダ　（感情が激して）おゝ――どうしてまあ、斯んなにまで私を誘惑して、むりやり引き入れやうとするのだらう――あの不思議なものの中へ！海の力が殘らず一つに集まつて、私の上に押し寄せて來る。

（他國人垣根を乘り越えて來る。）

エリーダ　（ヷングルの後にすさり）　何うしたのでせう？私をどうしやうといふのですか？

他國人　お前の樣子で分かつてゐる――お前の聲で分かつてゐる――お前が最後に選ぶ人は私に違ひない。

ヷングル　（彼の方に進み出で）妻はそんな事を選ぶ自由を持つてゐない。私がこゝではあれに代つて選びます、そしてあれを保護してやります。さうだ、保護するのだ！若し君がこゝから――此の國から――二度と歸らないつもりで立ち去らないなら、――どんな目に逢ふと思ふか？

エリーダ　いえ、いえ、あなた！それはいけない！

他國人　私を何うしやうといふのです？

ヴングル　君を捕縛させる――重罪犯人として！卽座に！君が船に乘り込む前に！私はシェルドウィックでの殺人罪の事を殘らず知つてゐる。

エリーダ　まあ、あなた、――どうしてそんな事を――？

他國人　私もその手段に訴へられた時の用意をして來た。だから――（胸のかくしから拳銃を取り出す）――これで身を固めてゐる。

エリーダ　（ヴングルの前に立ち塞がり）いけない、いけない――殺しちやいけない！殺すなら私を殺して下さい！

他國人　お前も其の人も殺しはしない。安心しておいで。これは私自身に用があるのだ。私は自由の人として生きもする死にもする！

エリーダ　（次第に激して來て）あなた！私はあなたに言つて置きます――此の人の聞く前で言つて置きます！あなたがこゝへ私を引き留めて置くことの出來るのは、私よく知つてゐます。あなたには其の權力があります、そして無論それをお用ひなさるでせう！けれど私の心や――考へや――抑へることの出來ない欲望は――あなたに繫ぎとめられるものぢやありません！それがみんな、向ふを慕つて、其の方へ行かうともがいてゐるのですもの――あの向ふにある、不思議なものの方へ――そしてそれが私の家なのです――それをあなたが私の意志に背いてせきとめてお了ひなすつたのです！

ヴングル　（靜かに心苦しげに）それはよく分かつてゐるよ、エリーダ！一步一步お前は私といふものからすりぬけてゐる。その廣大な、無限な手の屆かないものに對するお前のあこがれが、――結局お前の心を闇の中へ追ひ込んで了ふだらう。

エリーダ　さうですよ、さうですよ――私もそれを感じるの――そうつと私の上に掩ひかぶさつて飛んでゐる、眞黑な翼のやうに。

ヴァングル　では、それをそこまで行かせちやならない。それかと言つて他にはもうお前を救ふ道はない少なくとも私にはさうだ。だから――だから――私は――私は此の場で私たちの取引を破つて了ふ。さあ、それでお前は、今こそお前自身の道を選ぶことが出來る――完全な――完全な自由で。

エリーダ　（口も利き得ないやうに少時見つめてゐて）それは本當ですか――本當ですか――其の言葉は？それをあなたは――本當の心の底からおつしやるの？

ヴァングル　さうだこの苦しい胸の、本當の奥底から、私はさう言ふよ。

エリーダ　そして、あなたにそれが出來ますか？其の目的が實行されるでせうか？

ヴァングル　あゝ、出來るよ。私はやるよ――それもつまり、お前を深く深く愛してゐるからさ。

エリーダ　（顫へながら柔かに）そんなに深く――そんなに優しく、私を愛するやうになつて下すつたのね、あなたは――。

ヴァングル　一緒になつてからの年月がそれを私に教へて呉れた。

エリーダ　（自分の兩手を握つて）　それで私は――私はちつともそれを知らなかつた！

ヴァングル　お前の考へは他へ向いてゐたのだ。けれども今――今お前は私からも、私の家からも全く自由になつた。こゝでお前自身の本當の生活が――今一度正しい道に戻るだらう。今こそお前は自由に選ぶことが出來る、お前自身の責任でなエリーダや。

エリーダ　（兩手で頭を握み、ヴァングルの方をぢつと見つめて）　自由に――そして私自身の責任で？責任もですか？――それで、何もかもみんな變つて了ふ！

（汽船の鈴がまた鳴る）

他國人　聞こえるかいエリーダ？最後の鐘が鳴つてるよ。行かうか。

エリーダ　（彼の方に向き、ぢつと見て、決心の聲で言ふ）もう決して行かない、斯うなつた以上、もう決してあなたと一緒には行かない。

他國人　行かないか？

エリーダ　（ワングルに取りついて）おゝ――此の上は、私、決してあなたを棄てません！

ワングル　エリーダ――エリーダ！

他國人　ではそれが最後かい？

エリーダ　さうです！これが永久の最後！

他國人　さうのやうだ。何か私の意志よりも一層強いものが出て來たのだ。

エリーダ　あなたの意志はもう私に取つて毛ほどの重みもない。私に取つちや、あなたは死んだ人です。それが海から歸つて來て――そしてまた海へ歸つて行く。けれど、もう／＼私は、あなたを物凄いとは思はない。もう私を誘惑する力はなくなつたのです。

他國人　左樣なら、ワングルの奥さん！（垣を乘り越える）此の後あなたにもう、私に取つちや何でもない――たゞ私の生涯で通りかゝつた一つの難船に過ぎない。

（左方に去る）

ワングル　（少時妻の顔を見つめて）エリーダ――お前の心は海のやうだ、その中には潮の滿干がある。一體何がお前を一變させたのだらう。

エリーダ　あゝ、あなたに分かりませんか？私の心が變つたのは――變らなくちやならなかつたのは――私が自由に選ぶことが出來たからですよ。

ヷングル　それからあの不思議なもの――あれはもうお前を誘惑しなくなつたか？

エリーダ　もう誘惑もしなければ、恐ろしくもなくなりました。望みなら其の中まで見通して――這入つて行くことも出來るやうになりました。自由に選ぶことが出來るから、それで自由に斷ることも出來たのです。

ヷングル　お前が分かりかけて來たよ――段々と。お前はそれを幻にして考へてゐるのだ――目に見えるやうに描いてゐるのだ。お前の海に對するあこがれや――あの他國人からの誘惑は――つまり段々とお前の心の中に目ざめて來る自由の要求が姿をかへて現はれたのだ――たゞそれだけの事だよ。

エリーダ　あゝ、私、何と言つていゝか知らないけれど、あなたは私のためにいゝお醫者さまでした。いい藥を見つけて、それを思ひ切つてお用ひなすつたのです――私のためにはたつた一つの良藥でした。

ヷングル　さうだ、愈危篤といふ間際になると、我々醫者は隨分大膽なこともするが、兎に角これでお前はまた私の手に歸るのだね、さうぢやないか、エリーダや？

エリーダ　えゝ、あなた、ありがたう――これでまたあなたの手に歸るのですわ、本當に歸ることが出來るのですわ、自由に――私自身の意志と――私自身の責任とで歸るのですから。

ヷングル　(優しくエリーダを見て)エリーダ！エリーダ！あゝ――これで私達二人は全く一心同體になることか出來るのだと思ふと――

エリーダ　――そして、どんな思ひ出も二人一緒にするやうになつて、あなたのも――私のも同じやうになるでせう。

ヷングル　あゝ、みんな共にするやうにならなくちや、エリーダ！

エリーダ　それから、私達の子供二人も、ねえ――

ヷングル　私たちの？お前あれらの事をさう言つて見れるか！

エリーダ　まだ私のぢやありませんけれど――今にさうして見せます。

ヷングル　私達の！（喜ばしさうに急にエリーダの兩手に接吻する）あゝ、その言葉が私に何よりもうれしいよ。

（ヒルダ、バレステッド、リングストランド、アルンホルム及ボレッタ左方から庭に入り來る。）

（同時に町の若い人々及避暑客等路を通り過ぎる。）

ヒルダ　（リングストランドに、半ば聲高に）御覽なさいよ、――あれとお父さんと一對になつて、何だか結婚約束でもした人のやうよ！

バレステッド　（それを立聞いて）夏ですからね、お孃さん。

アルンホルム　（ヷングルとエリーダの方を見て）イギリス船が出て行きますよ。

ボレッタ　（垣根の所に行き）此處からが一番よく見えます。

リングストランド　これが此の夏の最後の航海ですね。

バレステッド　『やがて海峽は凍り閉す間の氷にとざゝれん』さ、詩人が言つてる通りだ。寂しい感じですね、奥さん！その上あなたもしばらくこちらにいらつしやらなくなるといふぢやありませんか。明日ン・ルドヴ・ツクへお立ちなさいますか、さうですか？

ヷングル　いや――その計畫は破れましたよ。今晩私たち二人は考へを變へました。

アルンホルム　（二人を次々に見廻して）あゝ――さうですか！

ボレッタ　（進み出て）お父さん――それは本當ですか？

ヒルダ　（エリーダの方に行き）では、やつぱり私たちと一緒にゐて下さるの？

エリーダ　然、ヒルダや――お前さへよければね。

ヒルダ　（涙と悦びの間にもだへて）あゝ――私さへよければだつて――！

アルンホルム　（エリーダに）これは實に意外ですね。

エリーダ　（重々しく微笑して）はあ、それはね、アルンホルムさん――。あなた、昨日話した事をおぼえてゐらつしやいますか？一度陸の動物になつたら最後――また海へ歸るといふことは容易ぢやありません、海の生活に歸るといふことも容易ぢやありません。

バレステッド　おや、それは、すつかり私が書いてる人魚と同じことですね？

エリーダ　えゝ、同じですよ。

バレステッド　唯これだけの違ひでせう、人魚は――そのために死んで了ふが、人間は其の反對に、アツクラム――アツクリマイズして行きます。さうです、奥さん、人間は、同化して行くことが出來るのですよ。

エリーダ　はあ、自由があればそれが出來るのですね、バレステッドさん。

ヴァングル　それから自分自身の責任でねえ、エリーダ。

エリーダ　（手を差し出して早口に）さうです／＼それが一番大事ですわねえ。

（大きな汽船が音もなく峽灣を辷り下る。音樂の海岸に近づくのが聞こえる）

幕

復活

（トルストイ原作
アンリバタイユ脚色）

トルストイの小說『復活』(Resurrection)は千八百九十九年の作で、晩年の作者の一面を代表する名篇である。是れが小說として、藝術として、乃至思想教義の宣傳として、社會組織の批評としての研究は、既に種々の人によつてなされた所であるが、その賛否いづれに拘らず、十九世紀末の最も重大な一著作として、世界を動かしものであることは言ふを待たない。

小說と劇とは固より方式を異にした藝術であるから、小說の寫すところが其のまゝ劇になることは困難である。たゞ如何なる程度まで原作の感じ、思想、人物、事件を劇中に生かし得るかといふだけが比較の興味である。從つて小說から脚色した劇の善惡が、原作小說の責任でないことは言ふまでもない。

小說『復活』を劇に脚色したものでは、フランスのアンリ、バタイユ(Henry Bataille)の作がある。私がそれを見たのは千八百三年にビアボム、ツリー(Beerbohm Tree)がロンドンの「陛下座」で其の英譯を演じたときである。

今回の此の脚本はトルストイの原作小說とバタイユの脚本とそれに小改竄を加へたツリーの所演と、三つを本にして更に「藝術座」第三回の上演臺本に適するやう、再脚色を施したもので、大正三年三月二十六日から六日間帝國劇場で演ずる重なる役割の定まつてゐるは松井須磨子のカチューシャである。

尙小說『復活』の飜譯には英譯にロイス、モード(Loise Maude)のがあり、邦譯に内田魯庵氏のがある

人物

ネフリュドフ（公爵）
シモンソン（國事犯囚）
チホン（老僕）
ファナーリン（辯護士）
陪審長、陪審の商人、同教師、同大佐、同職工組合長、他七人
病院の助手醫、同醫長
看守、押丁、小使、召使、護送兵等
男囚徒若干人
マスロワ（カチューシャ）（女囚）
フョードシア（女囚）
ミシー（コルチャーギン侯爵家の令孃）
マリア（國事犯の女囚）
一の叔母、二の叔母（ネフリュドフの）
老女中、若女中
老女囚、綽名大ロシヤ、綽名美人、無言の女等の女囚徒

時代

現時

場所

ロシアの田舎、モスクワ及びシベリア

第一幕

第一場

モスクワ市の貴族ネフリュドフの家の寝室の一部、中央下手に寄つて立派な寝臺、正面上手にカーテンを引いた窓、上手横に扉、又寝臺の前　は見事な小卓、其の上に火の獣もつた銀の蠟燭皿が載せてある。夜更けの心持。季節は四月。

ネフリュドフは上等の眞白なリンネルの寝衣を着て寝臺の上にすわり伸べた兩脚に羽蒲團をかけたまゝ、吸かけの紙巻煙草を吸ひながら蠟燭の火で一枚の寫眞を見てゐる。

ネフリュドフ　（生あくびをして）あゝあ。コルチャーギンの夜會もいゝが、あゝ、どうも立てつゞけにやられちや、たまらない、第一體がつゞかないからなあ。しかし、ミシーは憎くないね。初めの内あんまり持ちかけやうがしつこいので氣味が惡かつたが、今ぢや向うの仕うちも自然になるし、こつちもだん／＼なじんで來たせゐか、いゝ心持で、お相手が出來るやうになつた。ふゝ、ミシー！　ミシー！　（寫眞にちよつと接吻して）私がお前さんにきまつた返事をしないのは、お前さんが嫌ひだからぢやないのだよ。私には或るたある女で、少々困つたのがあるのだ。私の地面内の田舎にゐるのだが、どうしても女の方で切れて呉れない。併しこの頃はまた若い士官に離れして浮れてゐるといふから、今に片づくだらう。田舎女は思ひ切りの惡いくせに浮氣だからね、全くいやになるよ。田舎女と言や、あゝ、もう十年からになるが、カチューシャはどうしたらう。長い間の事だね。あれは復活祭の晩だつた。さう／＼あれと二人向かひあつて窓に腰をか

けてゐると、外は一面の靄のこめた月夜だつた。下の川からは氷の割れる音が聞こえて、遠くの方から復活祭の歌が聞こえる。あの時カチューシャが手拍子を取つて私も一緒に中音で歌を歌つたが、あゝああ、もうみんな遠い昔の事だ。明日はまたコルチャーギンへ行つてミシーのお供で美術館へ行くのかな。あゝ〳〵、（また生あくび）疲れちやつた！コルチャーギン、田舍貴族の細君の浮氣者、カチューシャ、復活祭の歌、復活祭の歌、あゝ〳〵、（寢て枕元の蠟燭皿を取り蠟燭の火を吹き消す、舞臺暗くなる、ダーク、チェーンジ）

第二場

舞臺の眞暗な中から復活の讃美歌が遠く聞こえて來る其うちにパッと明るくなると田舍の別莊の一室に變つてゐる。正面上手に作りつけて寢牀、カーテンがしぼつてある。下手は大きな窓、そこから月夜に遠く雪の野の景色が見える三月の復活祭の頃で薄い靄が一面にこめてゐる趣、時々向うの川の氷の破れる音が聞こえる。室の下手と上手に扉。女中二人、若い方は寢牀を直して居り年取つた方は窓から外を見てゐる。

老女中　もう何時だえ？

若い女中　（枕元の置時計を見て）もう十分で十二時ですよ。

老女中　ぢや、もう十分たつとキリスト樣が蘇がへらつしやるんだね――今夜は何ていふ氣候だらう？　明るくつて、それで暖い靄が立つてゐてまるで夏の晩のやうだ。接骨木の花が匂つてゐること！

若い女中　あなたもうおやすみなすつちやどう？　あとは私とチホン爺さんとで十分ですよ。

老女中　いゝえ、私はお歸りまで待つてゐて復活祭の接吻をしなくちやならないのだよ。瓶の水だの、タウエルだの石鹼

だのをよく見てお置きよ（遠くで此時鐘が鳴る）

若い女中　復活祭の鐘が鳴り出した！

老女中　「キリストは蘇がへり給へり」

若い女中　「キリストは蘇がへり給へり」

（二人一寸抱き合ふ）

若い女中　若旦那はまたすぐお立ちだつていふぢやありませんか？

老女中　あゝさうとも、明日の朝は是非立つていらつしやらなくちやならないのさ。トルコへ戰爭にお出でなさるのだよ。その前にちよつとソニヤ叔母さまとラウラ叔母さまに會ひに入らつしやつたのだから、どんな事があつても、それより長く御逗留は出來ないのだ。それやさうと、カチューシャは何うしたえ？

若い女中　あれは奥樣方と一緒の馬車で敎會のお祭りに行つたのですよ。白い服を着て赤い帶ふさして、めかしこんでさ。

老女中　奥樣方と一緒の馬車で？　へん、牛乳屋の私生兒が馬車に乘つてかい！　そして、若旦那さまも御一緒の馬車かえ？

若い女中　いゝえ、若旦那はお着きになるとすぐ、服もかへないで馬でいらつしやいました。此前いらつしやつた時よく運動にお乘り遊ばしたあの年とつた方の馬がお好きなのだよ。

老女中　此前たつて、つい一昨年いらつしやつたのだが、あの時はまだ大學生の帽子を被つて、書生々々していらつしやつたが、今度見ると立派におなんなすつた事ねえ。髭なんかはやしてほんとに立派におなんなすつたよ。

若い女中　（窓の方へ行きこ御覽なさい／＼、もうみんな敎會から歸ると見えて、提燈が見え出しましたこと！　あの一番早

い提燈が二つ、屹度家の方ですよ。
老女中　ぢやお迎に出なくちや……
（二人出て行く、戸の外で）
一の叔母の聲　さあ〳〵、お這入り。
二の叔母の聲　氣をつけておあるきよ。
ネフリュドフの聲　はあ〳〵、大丈夫です、よくおぼえてゐますから。
（ネフリュドフと二人の叔母入り來る）
一の叔母　之がお前さんのお部屋ですよ。すつかり元のとほりですよ。
ネフリュドフ　全く元の通りですね。
二の叔母　あの寢牀も、テイブルも、それから神さまのみ像も、みんなそつくり元のまゝだらう？
老女中　（勿體らしく進みよつて）「キリストは蘇へり給へり」
ネフリュドフ　（微笑して）さう、さう。私はお前をおぼえてゐるよ。
一の叔母　お前笑つてゐて、何もしないね。軍隊へ這入つてから、神さまの事を忘れたのぢやあるまいね？　復活祭にはお前、上下の隔てなくみんなが抱き合つて接吻するものぢやないか。此の邊ではまだみんな其尊い習慣を守つてゐますよ。
ネフリュドフ　さうでしたつけね、なに、忘れやしないのですがね。ついその、あちらにゐるとあんまりやらないものですからね（室内を見まはして心ありげに）全く何も變つてゐませんね。一昨年のまゝですね。それから叔母さんたちまでまだ白髪一本も見えませんねえ！

二の叔母　變つたのはお前ですよ。本統にこんな立派な軍人になつて、ちよつと見分けがつかない程ですよ。何よりも此髯が立派だねえ。

ネフリュドフ　また髯ですか？（笑つて）私がこゝへ來てから一等よく聞いたのはキリスト樣の復活と髯が生えたといふことです。近衛は中尉になるとこいつを生やすのが規則ですからね、髯は卽ち位なのです。

一の叔母　（寢牀を見て）お前蒲團を二枚かけたら、寒くはなからうね

二の叔母　湯たんぽでも入れてあげようか！

ネフリュドフ　いゝえ、叔母さま決してそんな御心配には及びません。暖です／＼。それよりかもうよつぽど遲いやうですからあなた方はどうかおやすみ下さい、さ、早くおやすみ下さい、風でもおひきになるといけません。

（扉を叩く音がする）

一の叔母　百姓家がお前に復活祭の接吻を に來たのですよ（ネフリュドフたぢろぐ）善い習慣だからしてやつて下さいよ。

ネフリュドフ　おはひり

・（一群の農民帽子を手に持ち這入つて來る。先づ神の前に一禮してからネフリュドフに辭儀をする）

農甲　（進み出て）若旦那さま御無事でお着きなさいましておめでたうございます。

ネフリュドフ　やあ、今晩は、お前の家はたしか川向うだつたね。今晩はお爺さん。私はいつもお前がたの事を思ひ出してゐたよ。今晩は。君にはたしか子供の折よく驢馬に乘せて貰つたつけね。やあ、今晩は、今晩は、今晩は。

甲　若旦那さま、私等みなして復活祭の卵を差上げに參りましたが、斯うして鬱金色に染めた卵でござさいます、爺さまの思召でございますから、どうぞ受けさつしやつて下さいまし。

ネリュドフ　ありがたう、見事な色をした卵だね！　さお前から手初めに接吻して呉れ。
甲　（袖で口を拭ひながら）若旦那さま待たつしやつて下さい。斯うして口を綺麗に拭いて置きますから……「キリストは蘇り給へり」

（ネフリュドフの顔に三度接吻する）

ネフリュドフ　それからお爺さん。それから

・（農民交る卵〴〵を捧げ、口を拭ひ「キリストは蘇りたまへり」と言つて接吻する）

一の叔母　さ、もう、お前は疲れたでせうからおやすみ。

ネフリュドフ　はあ疲れましたから、それでは明日、ぢや皆さん、卵をありがたう（農民出て行く、それを戸口まで見送つてあとをしめ）あの大きな口で三度もつゞけざまに接吻された時は、観念はしてゐてもちよつと驚きました。硬い髯で顔中引つかゝれるかと思ひました（大股に室内をあるきながら）此の机でしたね、私が一昨年卒業論文を書いたのは、あの時の紫のインキのしみがまだ殘つてゐますよ。

二の叔母　さうともお前そつくり昔のまゝにしてあるよ。それはさうとお前は明日立つて戰爭へ行くといふことだが、大丈夫だらうかねえ？

ネフリュドフ　大丈夫ですとも、六ケ月たつとまた休暇を取つてやつて來ますよ。そして昔のやうにいろんな面白い本でも讀んであげませう。

一の叔母　どうかねえ。では今夜は早くおやすみ、寢牀の仕度はいゝか知ら、（下手の戸口の所へ行つて呼ぶ）カチューシヤカチユーシヤ！　ちよつとおいで。

カチューシャの聲　はい〳〵。

一の叔母　(戸の外へ向つて)あゝね、私の部屋にある上等の石鹸と、それから新しいタオルとを若旦那さまに持つて來ておあげ。それから、チホンに水差を持つてお出でつてね。

カチューシャの聲　はい、かしこまりました。

(ネフリュドフはカチューシャの聲に聞耳を立てる)

ネフリュドフ　さあ、叔母さん、もういゝですよ。今夜はもう分かれにしませう。どうぞおやすみなすつて下さい。何も要りませんから。あれは今にチホンが來たら[illegible]を頼みますよ。御心配にはおよびません。どうぞ早くおやすみ下さい。私もすぐ寢ますから。

(二人の叔母の手に接吻する)

二の叔母　ではおやすみ、よく暖かにして、風をひかないやうにおし。おやすみ、おやすみ(額と兩頰とに三度接吻して上手口から出て行く)

一の叔母　明日の朝は乳入りのコーヒーにして置きますよ。ではおやすみ、おやすみ(之も三度接吻して上手口から出て行く。)

ネフリュドフ　(椅子に腰をかけぐつたりとなつて)あゝ、これでやつと獨りになつた。年寄りといふものは何うしてあゝ諄いのかなあ！　カチューシャは何うしたらう。早く會つて話して見たいものだ(扉の方を見るとやつと開く音がする)おゝ、カチューシャか？　おはひり！　(戸口まで行つて戸をあけると、老僕のチホンが水差を持つて入り來たる)なんだ！　お前か？

チホン　はい、若旦那さま、おめでたうございます。あなたさまは、さぞお疲れさまでいらつしやいませう。

（水差を盆に載せたまゝ卓の上に置いて頻りに口を拭ふのを見て）

ネフリュドフ　さあ〳〵、復活祭の接吻をして呉れ（チホン「キリストは蘇り給へり」といつて顔に接吻する）私も戰地へ行く前に斯うして皆と會へて實に愉快だよ。

チホン　わたくし共も、まことにありがたい仕合せでございます。斯うして立派におなり遊ばした若旦那さまにお目にかゝるのでございますもの、長年御奉公の仕甲斐があつたと申すものでございます。

ネフリュドフ　こつちではみんな變りはないか？

チホン　（行李を解きながら）へえ〳〵神樣のお蔭で此の爺まで、斯んなにぴんぴんして居ります。

ネフリュドフ　それからお前の子供も孫も？

チホン　はい、みんな息災でございます。それからあのお好なカメもまだ丈夫でございますし……たゞあの年取つた馬の一つの方、それ御存じでございませう？　今夜お乗りになつたのでない方のが、去年赤痢に取りつかれて死にましてございます、かはいさうな事をいたしました。

ネフリュドフ　さうか？　それはかはいさうだなあ。あゝその劍は出して置いて呉れ。それからそのリンネルと化粧箱だけ出して置いて呉れゝばいゝ。あゝ、その紙入れをお見せ。其の中にはな、一杯、女の手紙だの寫眞だのが這入つてゐるのだよ。

チホン　はゝあ、若旦那さま、いけませんぜ、いけませんぜ。成程これは可なり重うございますな。

ネフリュドフ　はゝ、お前等にはさういふ世の中は分からないだらう？　な、爺や。

チホン　若旦那さまは、きつい色男におなんなさいましたな、へゝ〳〵。

ネフリュドフ　馬鹿を言へ。これが世間並みなのだよ。みんなやるから俺もやるのだ。此の中には或大使館附の武官の妻君から來た手紙があるが、私は其女のために決闘までしたよ。

チホン　其女のために決闘をなさいましたつて？　へえ！　若旦那さまもえらい色事師におなんなさいましたな。

ネフリュドフ　それから此の包と紐とは或る女優が送つて呉れたものだ。

チホン　若旦那さまはまあ、お變り遊ばしましたなあ！　つい一昨年までは、まだほんとうの書生さまで、よく理窟ばかり言つていらつしやいましたが……何とかそれ、イギリスの學者でスペンサーとかおつしやいまして、今に此の御先祖からの大地面も財産も小作人どもに、たゞ呉れてやるやうな事をおつしやつていらつしやつたが。……まあ／＼、あれよりは今の方がよつぽどよろしうございます。若いときには女の二人や三人おこしらへ遊ばすのは當り前でございます。いやよく立派な旦那さまにおなりなさいました。斯んな風に軍服を召して髭をはやして……（ネフリュドフの顏を見ると頻りに一枚の寫眞を見てゐる）若旦那さま、それも女衆の寫眞でございますか？

ネフリュドフ　カチューシヤ！　カチューシヤ！

チホン　（不思議げに覗いて）……あゝ、一昨年の寫眞でございますな。私も寫つて居ります。眞中が若旦那さまで、右が大叔母さま、左がカチューシヤ其の前に私が坐つてをつて、カメも寫つて居ります。カチューシヤは全くいゝ娘になりましたな、若旦那さま。

ネフリュドフ　あゝ、いゝ娘になつたが、今夜はどうしたのか、さつぱりやつて來ないね。

チホン　また御挨拶にも出ませんか？　はゝあ、乾度恥かしがつて居るのでございますよ。御主人さまにそんな事があるものか。今に呼んでまゐります。

ネフリュドフ　いや〳〵。わざ〳〵呼んで來なくつてもいゝから、爺やはもうお寢。遲いからな。もう用はないから。

チホン　はい、さやうでございますか？　ではもう御用がございませんなら、これでお先へ失禮をいたします（また口を拭いてゐるのを見てネフリュドフ顏を差出すと「キリストは蘇りたまへり」と言つて三度接吻して出て行く。ネフリュドフ窓の前へ行き外の景色を見てゐる。戶を叩く音）

ネフリュドフ　どなた？

カチューシャの聲　カチューシャ

ネフリュドフ　カチューシャ、さあおはひり。さつきから隨分待つてゐたよ。

（カチューシャ祭の白の晴着に赤いリボンの釦をさしタウエルと石鹼と花束とを持つて這入つて來る）

カチューシャ　御免なさいな。花を揃へてゐたものですから、少し遲くなりましてすみません。此のタウエルとね、それから此の匂ひ入りの石鹼は特別に叔母さまからあなたに差上げるのでございますつて。それから此の花は……、つまらない花しか集まらないのですけれど……でも少しは香ひがございますわ。

ネフリュドフ　（石鹼と花とを兩手に持ち交る〳〵嗅いで見て）ぢや、此の花はお前が吳れたのだね。どうも、ありがたう。どうも、ありがたう。さあ、まあ、ここへ來ておかけ。

カチューシャ　（恥ぢらふやうに橫を向いて）もう遲うございますから、私、行きますわ、おやすみなさい。

ネフリュドフ　いけないいけない。來るとすぐ行かないで、少しの間でいゝから話して行つてお吳れ、私なんだかお前に行かれると淋しくていけないから。そら、あの枕がまだ袋にはまつてゐないよ。あれを拵へて置いて吳れなくちや。

カチューシャ　あら、まだでしたか？　いけないわね。私、うまく行きますか知ら。

（寢臺の傍へ行き枕を枕袋に入れようとする。ネフリュドフつか〳〵寄つて後から其頸に接吻する）

カチューシヤ　何をなさいますよ！（振り放して）……あなた、いけないぢやありませんか？　放して下さいよ、さ。後生ですから放して下さいよ！　いゝえ、よかありません！　よかありません！……（泣く）

ネフリュドフ　（手を放して）泣いちやいけない〳〵。私が惡かつたから勘忍してお呉れ。お前はそんなに私が嫌ひだつたのか？　私はもつと私を愛してゐて呉れると思ひ込んぢやつたのだよ。私が戰地へ行く前にこゝまで來たのはたゞお前の顏が一目見たかつた許りでだよ。今日私が初めてこゝの家へ着いた時も、一番にお前が玄關まで出迎へて呉れるか知らと、そればつかり樂しみにして來て見ると、お前の姿はどこにも見えないぢやないか？　もう此の家には居ないのだと思つたら胸が一杯になつて了つた。其うちにお前の聲が廊下の方で聞えたものだから私の心臟は一時に動悸がしはじめて、急に家の中が明るくなつたやうに思はれたよ。私はそれほどに思つてゐるに、お前は少しも私の事を思つて呉れないのだね！

カチューシヤ　それは私だつて思つちやゐますけれど、だしぬけに今のやうな事をなさるのですもの、びつくりしますわ。私だつて、あなたがこゝへお着きになつたと思ふと、ひどく動悸がし出して、顏が火のやうにほてつて來ました。そのために出ることも出來なかつたのですよ（うつむく）

ネフリュドフ　分かつた〳〵。だから私たちは、斯うして誰も居ない所でほんとうの話がしたいぢやないか……恐いことはないから、あすこへ腰かけてお呉れ。さ、お坐り、私決して亂暴な事はしないから。（脊に手をかけて椅子に坐らせる）恐かないよ。

カチューシヤ　もう恐かありませんわ。

ネフリュドフ　ね、さうだらう？　で、さき教會で、儀式のあつた時は、お前、少しも私の方を見なかつたね。なぜだ？

カチューシャ　でもきまりが悪かつたのですもの

ネフリュドフ　あの時お前は全く綺麗だつた、一方には燭臺の蠟燭が赤く燃えてゐて、戸の傍には銀色の袈裟をかけた坊さんが香爐を手に載せて立つてゐる、その眞中程に眞白の服を着て眞黒い髪をしてお前が坐つてゐて、ほんとうに美しかつたよ。

カチューシャ　あなたがそんなに見て下すつたのなら、半分嘘にしても嬉しうございますわ。

ネフリュドフ　嘘なことがあるものか！　さう／＼此寫眞を御覽、お前あの、一昨年の祭の時の事を覺えてゐるか？

カチューシャ　え〻、おぼえてゐます。

ネフリュドフ　二人一緒に駈くらをしたね。私がお前の手を引いて、一、二、三で駈け出すと、お前の糊のついた下着がガワ／＼音がしたつけ。

カチューシャ　あらいやだ！　そんな事をおぼえていらして！　だけどあなたはすぐ駈け越してお了ひなさいましたわね。

ネフリュドフ　あ〻。それからどうしたつけ！

カチューシャ　それから私あの連翹の茂みの後ろへ行つて、駈けることを止めてゐると、

ネフリュドフ　私がそこへ行かうと思つて、其の方へ駈け出すはずみに茨の生えてゐた溝へ落つこちて了つて、

カチューシャ　え〻、あの時は私、どうしやうかと思ひましたわ。

ネフリュドフ　やつとお前の手につかまつて這ひ上つたが足はづぶ濡れで手には引つ掻き傷が出來てみじめな樣だつたね。

カチューシャ　でもとう／＼連翹の木の蔭で二人一緒になりましたわね。

ネフリュドフ　あ〻、あの連翹の木の蔭！　お前あれを忘れて猶

カチューシャ　いゝえ、私、あなたの傍へよつて、何の氣なしにあなたの服についてる荻を取つてると、あなたは何時か私の上にのしかゝつていらつしやつて私の手をきゆと摑んで接吻なすつたわ。

ネフリュドフ　するとお前は驚いて一二間駈け出して、白い花の散りかゝつた連翹の枝を折つて眞赤になつた顏を煽いでゐたね。

カチューシャ　だつてひどいのですもの。でも、其爲めに、あなたを怨みなんかしませんでしたわ。

ネフリュドフ　あれから私はお前が忘れられなくなつたのだよ（腰を抱きながら急に立ち上り）お前、何も聞こえないか？あの音は何だらう？

カチューシャ　（耳を澄まして）ほゝ、あれは女中頭のお婆さんが鼾をかいてるのですよ。

ネフリュドフ　（笑つて）なんだい、女中頭の鼾だつて？　だが鐘の音か何か聞こえるね、（窓へ行つて明け放す）あゝ、好い夜だ！　潤んで暖かくて……さあ、ここへ、私の傍へお出で（二人向ひあつて窓に腰をかける）春になつたね！　あの月の眞下のところに割れ目の見えるのは、川の氷だらう？　あの音は氷の割れる音だね。

カチューシャ　春になつたのですね！　お聞きなさいよもう一番鷄が鳴いてゐます……氷の碎ける音はあの森の後の川から聞こえて來るのですよ。

ネフリュドフ　實にたまらなくいゝ景色ぢやないか？　斯うしてお前の手を取つて此の景色の中をいつまでも〳〵あるいてゐたい！　おや〳〵、田圃にはまだ人が大勢ゐるやうだね。

カチューシャ　あれは隣の村の人たちが夜通しの火を燃やしに來たのでせう。

ネフリュドフ　その前でみんな歌を唄つてゐるやうだね？

カチューシャ　そしておしまひにお祈りを言ふとそれが一年立たない内にかなふのださうでございます。
ネフリュドフ　お前も一つ歌をお唄ひ。そしてお祈りをして願をかけやうよ。ね。
カチューシャ　でも、私、できないのですもの。それに叔母さまのお目をさますと大變ですわ。
ネフリュドフ　大丈夫、低い聲で歌つたらいゝぢやないか。お前の名を入れた歌をお歌ひ。
カチューシャ　さうねえ、ぢや歌ひませうか？……（ちよつと考へて輕く手を拍ち）

カチューシャかはいや
別れのつらさ
せめて淡雪とけぬ間と、
神にねがひをかけましようか

ジ、ジ、ジジピチッチ

ネフリュドフ　もう一度、私も歌ふよ。

（二人して手を拍ち低く歌ふ）

ネフリュドフ　さあ、歌を唱へば、もう一つ、復活祭の儀式があるだらう？　私とお前と唇に接吻すること、今日はみんな平等なのだから。
カチューシャ　いゝえ、それは父親ばかりですよ、他人は額に接吻するのです。
ネフリュドフ　ぢや、この他人は額をお出し。
カチューシャ　はい。

(すなほに額を出す、それを兩手に挾んだまゝ接吻せんとして)

ネフリュドフ　でもこんなかはいらしい額では、接吻する場所がないよ。だから唇にしてもいゝだらう？

カチューシャ　いけない／＼。額だけ。(避けんとするのを制して、ちつと眼を見つめ口をつける。女それを唇に受ける。しばらくして目のさめたやうに)あゝ。私どうしたのでせう。　いけない／＼、後生ですから放して下さい。

ネフリュドフ　私はもうお前と此まゝには別れられないよ。

カチューシャ　(涙聲で)でも明日は戰地へお立ちなさるぢやありませんか。またいつお目にかゝれるか分からないものを、今夜きりそんな事をおすつて、殘酷ですわ。あゝ、私どうしたらいゝでせう。　私、もう行きますわ、いゝえ、行かなくちやならない、行かなくちやならない。

ネフリュドフ　(しばらく抱きとめようともがいて)そんなに言ふならお出で！

(女を手放して立つ。女はまた男の胸に頭をあて啜り泣きながら)

カチューシャ　私、やつぱり行かれない行かれない。

(ひしと男にすがる其時再びダーク、チェーンジ)

第三場

舞臺段々に明るくなると、第一場の場面に戻る、早朝の光が窓かけを透して射し入つて來る。

ネフリュドフは寢臺の上に眠つてゐると下の扉を叩く音に眼をさます

ネフリュドフ　あゝ、古い夢を見たな。(戸の音に耳を傾け)誰れだ？

召　使　コルチャーギン様から急のお使でございます。お手紙がこゝにございます。

（寢衣のまゝ起き出て戸口へ行つて手紙を受取り、寢臺に腰をかけてそれを讀む）

ネフリュドフ　「あなたさま昨夜は例の輕受合にて今日美術館へ御同道下され候やうのお言葉、樂しみにいたし居り候へど、よく〳〵考へ候へば今日あなたさまは、陪審官として裁判所へお出でなさる由のいつぞやのお語、萬一其方をお忘れ遊ばしては大へんと存じさつそく文してお知らせ申上候其代り裁判所の方すみ次第私宅へお越し下されたく、御用すみの時刻を見はからひ、私、馬車にて裁判所までお迎ひにまゐり申候、あとはお目もじの上、ミシーより」（讀み了つて手紙をテーブルの上に投げ出し）さう〳〵、今日は裁判所へ行くのだつたな馬鹿々々しい仕事もあつたものだ。どれ、もう起きよう

（ベルを押す。）

……幕……

第二幕

モスクワ巡回裁判所内審議室、中央に一脚の大テーブル、周圍に椅子、上手に長椅子、正面中程及び左右の横手に扉。小使甲乙テーブルの上を整理してゐる。

小使甲　今日の裁判は何の事件だらう！

小使乙　それ、あの、女郎の毒殺事件よ。知らないのかい！

甲　知らないよ。

乙　あんなに新聞で書き立ててゐるぢやないか！　マスロワといふ女が客の商人を毒殺した事件さ。

甲　さうかい。

（此時ドヤ〳〵と音して、正面の戸口からネフリュードフを始め十二人の陪審官等が這入つて來る。ネフリュードフは顏色が蒼ざめて、今にも卒倒しさうな樣子で、他のものに扶けられて入り來たり、長椅子に倚りかかる。他の人々は意屈したといふ風に腕を伸したり、息をついたり、煙草を吹かしたり、そこらを步き廻つたりしてゐる。小使出て行く）

陪審の教師　ネフリュードフ公爵、一たいどうなすつたのです。

陪審の商人　いや、誰でもあゝなると、氣絕したくなりますぜ。擂れなさも少々まゐりました、第一、女が不便でさあ。あれを罪に落とさうとは、檢事もひどいや、人情が無いといふものだ。

陪審の[illegible]職人作　では君？　この被告を無罪だと主張するのかね？

商　人　無罪さ、勿論無罪さ。あれは大佐、竊盜だの人殺だのと、そんな大それた事の出來る女ぢやごわせん。あの眼を見りやあ、分かつてるぢやないか。

大　佐　いや、大惡人といふものは、得てあゝいふ無邪氣な容貌をしてゐるものだ。君はいかんよ。被告が女だと、すぐ同情して了ふからいかんよ。

商　人　大佐、そいつはいけない、女だから同情するといふ法はない。少なくとも吾輩に取つてはだね、せめて、美人だから同情すると言つて貰ひたいね。マスロワは全く素敵な美人だ。ねえ、ネフリュドフ公爵さうぢやごわせんか？

陪審長　さあ諸君、どうか席について審議をお始め下さい。要するに問題は簡單です、本年二十七歳のカテリーナ、又はカチューシャ、マスロワがシベリヤの商人スメルコフを、其のダイヤモンド入の指輪及び所持金を竊取する目的で毒殺した。共犯人の一老婆は拘引せられる日に死んで了つた。被告人マスロワは有罪なるか、無罪なるか。といふのであります。

教　師　僕は、有罪ではあるが情狀酌量すべきものがあると考へます。

商　人　いや、吾輩は無罪放免を主張します。あの女は決してそんな惡事を行ひ得るものでごわせん、重なる共犯人といふのが死んだ以上、到底動かない證據は上りつこはごわせん。罪の疑はしきは何とやら言ふ本文がごわすからな。吾輩は無罪放免を主張します。

大　佐　これは怪しからん、他に二人までちやんと共犯人が出てゐるではないか君、彼等は既に竊盜をしたに違ひないと定まつて了つた。さうだとすると、若しマスロワが彼等と共謀しなかつたら、彼等ホテルの傭人どもが金のありかを知らう筈がないではないか？

陪審長　それに被害者の鍵は現にマスロワが預つてゐたのですからな。

敎　師　それだけでは證據にはなりますまい。鍵を預つたからうといつてホテルの傭人どもが、何も他の合鍵を用ひないとは限りますまい。

商　人　ヒヤ／＼。

敎　師　それから、金を竊んだといふが、此の女はその金を何所にも所持して居りません。境遇が境遇だから、そんな大金を盜んだつて、使ひ道がないのです。隱す場所も無いのです

商　人　ヒヤヒヤ。それが圖星だ。

大　佐　併し指輪を持つてゐる。

敎　師　それはたしかに貰つたのだといふ證據があります。

商　人　あの指輪はつぬけて大きいですねえ。被害者の身體檢査は何うとか言ひましたね、陪審長？

陪審長　こゝに要點が筆記してあります。丈が六尺五寸。

商　人　ふうん、見事な男ですな。

陪審長　年齡四十歲前後、全身悉く腫物を生じ、皮膚の色は濃い藍色になつて紫色の斑が出てゐる。髮の毛は赤毛で、さはるとすぐ脫け落ちる。眼球は飛び出してゐて、角膜は黑ずんで居り、鼻、耳、口から薄い鼠色のとろ／＼した液が滲み出てゐる。

ネフリュドフ（長椅子から立ち上り）陪審長、私は今日或る重大な理由で、あの被告人の身の上に關し、非常な感動を受け、それがため陪審の席にも居られない程精神が興奮して、皆さんの御厄介になつたのでありますが、マスロワが最後に泣き叫んで言つた一言は、神に誓つて僞りでありません。此の事を眞に斷言し得るものは恐らく私一人であらうと信じます

が、其の理由を、只今この席で述べるだけの決心がまだ私につきません、兎に角マスロワは竊盜を働いたり、人を殺したりする女でないことは、先程のお說の通りです。現に犯人はもう其罪を白狀して死んだではありませんか？　これ程の大罪を犯したものが、裁判廷に立つて、マスロワのやうな態度でゐられるものでは決してありません。千百の證人や證據物件よりも、このたゞ一つの心の證が大事であります。私はここで天地神明に誓つて、マスロワの辯明に僞りの無いことを繰返して置きます。

陪審長　併しマスロワがコニヤック酒に亞砒酸を混じて其商人に飮ませたといふことを自白して居ります。

大　佐　そして亞砒酸は毒藥ですからな。それについて自分の親戚に關する一つの例がありますから參考のためにお話しませう……

教　師　いや例には及びませんから、簡單に願ひます。亞砒酸の毒藥たることは吾吾もまた認めて居りますが、マスロワは其商人を少し眠らせる藥だといつて、老婆から渡されたのを、信じて飮ませたのです。ですから輕々しくさういふ事を信じた過失の罪はあるかも知れないが、殺意は無かつたものと認めざるを得ません。

大　佐　そこがさ、分からない所だよ君。知りませんでした、殺すつもりはありませんでした、と犯人が言へば君はすぐそれを信ずるのかね？　そんな言ひぬけは犯罪人のきまりぢやないか？

ネフリュドフ　成ほどそれは言ひぬけかも知れません、がまた眞實かも知れません。どちらとも分からない時には、たゞ其の當人について、さういふ事をするものであるか無いかを吾々が直覺で見とほす他はありません、其の心の證が何よりも貴いのです。證據などゝいふものは、たゞ物の外部だけしか照す力はありません。

大　佐　だから吾々は吾々の心の證で、有罪だと見とほしたのではありませんか！　吾々の方がよつぽど筋道が立つて居

る。

ネフリュドフ　それを見とほすには、何よりも其の當人を知つてゐなくちやなりません。マスロワの生ひ立ちから經歷、彼れが今日のやうな悲慘な境遇に陷つたまでの事情を、それも心の底の秘密にまで立ち入つて知つてゐる者でなくては正しい直覺は出來ません。

大　佐　ふん、ではあなたは何か被告人に關する、秘密を御存じですか？　これは聞きものだ。（立ちかゝる、皆々そのりへ向く）

ネフリュドフ　………（眼をつぶつてゐる）

陪審長　何か特別の秘密を御存じですなら、それを此の席で打ち明けて頂きたいものです。それが被告人のためにも何より利益な事と信じます。こゝでお打ち明けになることが出來ないやうな秘密だと、却つて公爵の心證に或る私情がまじつてゐるのぢやないかといふ疑ひを起こさせます。公爵の公平を疑ふ材料になるばかりです。さういふ事情なら却つて知らない方が公平な判定が下されませう。

ネフリュドフ　はゝ、公平！　私は事情も知らないで冷やかな心から公平だと思つてゐるものと、事情を知つて同感するために不公平だと呼ばれてゐるものと、どちらが果たして眞の公平であるかを疑ふものです。

陪審長　さういふ御議論は法廷では許しません。

商　人　公爵、兎に角その秘密な事情といふのを聞かせて下さい。吾輩は必ず何かそんな事があるのだと信じてゐましたぜ。不公平なんて、そんなべらぼうな事があるものですか。公平々々つて公平面を並べてる連中なんざ、ありやみんな人情無しでさ。だからそんな手合の鼻を明かしてやるために、その秘密の事情てのを、ぶちまけてお了ひなさい。吾輩は一

から十まであなたに同感でさ。

大　佐　ぢやあ、別に秘密の關係も無いものと認める外はありませんね。へつ／＼その方が公爵のためにもいゝやうだ。

ネフリュドフ　……（尙答へず）

あんな女と秘密の關係なぞがあるとなると、ねえ君……

商　人　あつたつて結構、憚りながらこゝにござらつしやる御連中でも、しかつめらしい顏はしてゐなさるが、どうだいあの女を別嬪でないとは言へますまい？　別嬪だと思へば、もう其の心には秘密の關係が出來たのぢやごわせんか？

陪審長　要するにマスロワの一身に關しては當然、法廷に立會はれる方々は、先刻檢事が述べられただけの事情を御承知の事と見るほかはありません。すなはち此女は立派な教育を受けて、フランス語までも解し得るに拘らず、私生兒といふ遺傳で、罪惡の血を生れながら持つてゐたのです。身分ある家に引き取られながら、正當な生活を立てることが出來ないで、其恩に背いて自墮落の行ひをなし、遂に自分から妓樓に身を沈めたのです。そしてお客の商人をたらして其の所持金と指輪とを卷き上げんがため、鍵を預つて客のホテルに行き、ちやうど犯罪を行はんとする所をホテルの傭人二人に見つけられ、遂に三人共謀して其金を盜み、尙其罪蹟を隱す目的で客を連れ歸つて毒殺したのであります。どうか是れだけの事實に基いて御意見をお述べ下さい。

大　佐　それから檢事はうまい論告をしましたね。斯ういふのが卽ちデカダンの標本で、教育ある墮落分子として最も多く社會に害毒を流すものであるから、社會は少しも之れを寬假すべき理由を認めないと、さういふ論告でしたね。

ネフリュドフ　此の女がそれほど惡むべき墮落者であるなら、其の罪は他人にあるのです。當人は却て純潔で正直であつたが爲に墮落させられたに過ぎません、それは到底あなた等に分らない事です。私はたゞあの女の顏にいかに哀れな不幸な運

命の影がありありと跡を殘してゐるかを見て貰ひたいと思ふばかりです。

牧師 ですから、あなたにしか分つてゐない其の哀れな事情をお話しなすつたら如何です。

ネフリュドフ ……（尙答へず）

商人 （側へ行つて）さうなさい〳〵。それが一番近道でさあ。えゝ、公爵？

ネフリュドフ （立つて商人の肩に手をかけ）許して下さい。今はどうも話せません。それといふのも私の卑怯からです。許して下さい、許して下さい。私はたゞ……私はたゞ……私の義務としてこれだけの事を言はなくちやゐられないのです。許して下さい。（椅子の上に倒れかゝる）

陪審長 さあ諸君、議論も盡きたやうですから、マスロワは謀殺犯として有罪なるか無罪なるか、情狀酌量の餘地があるか無いか、起立によつて決を取りませう。（無罪有罪の起立を命じ、其數を數へる）その隅の所に着席してゐられる方は初めからどちらとも意志を表明なさらないやうですが、無罪とお考へですか、有罪とお考へですか、どちらにでもお立ち下さい。

陪審の老人職工組合長 人間が人間を捌く權利はありません。

陪審長 陪審官として法廷にお出での上はさうはまゐりません。

組合長 世の中に誰れ一人罪の無いものがありませうか？ 私等は神さまぢやない。

陪審長・ではマスロワは有罪ですか？

組合長 ――すべての罪は赦されなくちやなりません。……

陪審長 ではマスロワは無罪ですか？

組合長　無罪です。

陪審長　おや〳〵。それでは採決の結果、二人の多數を以て殺人犯マスロワは有罪と決定しました。

ネフリュドフ　(立ち上り)有罪？

商　人　かはいさうになあ？

ネフリュドフ　それは實に殘刻です！　諸君、それは殘刻です！　私はそれを辯明する義務がある！　何もかも言つて了ひますから、どうか諸君お待ち下さい……

陪審官　公爵、もう間に合ひません。審議は終つたのですから、採決の結果を尊重なさるように希望いたします。さあ、皆さん。

(陪審長が先に立ち正面の戸口から出て行く。)

ネフリュドフ　(一人あとに殘つて小使を呼び)陪審長の所へ行つて、ネフリュドフは病氣で列席せられませんと言つて來て呉れ。それからあの辯護士のファナーリンさんが控室に見えてるやうだから、此名刺を渡してちよつとお暇ならこゝ迄來て下さいと言つて呉れ。それから、今の事件の宣告が濟んだら、其の結果を聞いて來て呉れ。

(小使出て行く、ネフリュドフは心の苦しみに堪へぬ樣子で室内をあるいてゐたが、テーブルの上にあつた法律全書を取つて、熱心に繰りはじめた。そこへファナーリンといふ名の賣れた辯護士か這入つて來る)

ファナーリン　やあ、ネフリュドフ公爵、今日は御苦勞さま、いかゞですか、裁判は進行してゐますか。

ネフリュドフ　今ちやうど宣告がある所です。

ファナーリン　あなたは何うしてこゝにおいでゞすか！　今日の陪審には列席なさらないのですか。ひどくお顏色が惡いや

ゝのですね。どうかなさいましたか？

ネフリュドフ　いや實は君に打ち明けて御相談したい事があるのです。私は此の事件の陪審官たる資格を斷つて被告マスロワのため控訴をし、それでいけなければ上告でも上訴でもして、是非ともあの女の寃罪をそゝいでやりたいと決心しました。

ファナーリン　大へん御執心ですね。併しまた裁判はきまりますまい？　有罪と定まつたのですか？

ネフリュドフ　陪審の方で謀殺犯として有罪に決めて了つたのです。けれどもそれが無實であることは私がよく知つてゐるから、是非救つてやるのが私の義務だと思ふのです。それで手續の御面倒を一つお願ひしたいと思ひましてね。

ファナーリン　なる程、それは、ほかでもないあなたの事ですから、出來るだけの御盡力はいたしませうが。併し妙ですね。一囚徒のためにそれほどまで熱心におなりなさるといふのは、一體そのマスロワといふ女はもとからお知合ひですか？

ネフリュドフ　知合ひです、或特別な關係を持つた女です。

ファナーリン　ふうむ！　あなたがねえ！　いや、併しそんな事は世間にもいくらもある事ですね。

ネフリュドフ　まあ其の先を聞いて呉れたまへ。關係と言つても、さう簡單なのぢやないのだ。今からちやうど十年前、田舍の別莊であの女が小間使をしてゐたころ、私が行き合つて軍隊生活の向う見ずから、つい一夜つきりに弄んで了つたのだ。

ファナーリン　ふむ／＼。

ネフリュドフ　それが元で、女の姙娠となり、流浪となりして、とう／＼今のやうな賣笑婦とまで墮落して了つたのです。

ファナーリン　さう聞けばかはいさうでもあるが、併しあなたに取つちや、そんな事は何でもありますまい。若いときには誰れでもやることです。あなた一人に限つた事ぢやない。それに、今日の墮落はあながち其の最初の誘惑のためだとは言へません。間接の遠因にはなつてゐるかも知れないが、直接の責任はあなたにある譯はありませんね。

ネフリュドフ　世間の人はさう／＼言ふさ、私もさう言つて今まで自分の心を押しつぶしてゐた。併し今日私の良心は目をさまして來たのです。第一の罪惡が無ければ決して第二の罪惡は生まれない。いくら遠い昔の罪惡でも、責任は其の第一歩にあるといふことをつく／＼感じました。罪は罪を生んで、段々大きくなつて行く。私のあの過ちがとう／＼斯んな恐ろしい結果になつたかと思ふと、私はもう此の裁判に立ち會ふ勇氣が無くなりました。

ファナーリン　で、其の女が冤罪だといふ理由はどこにあるのですか？

ネフリュドフ　それは第一が私の心證です。私は一目あれを認めると同時に、すぐ其の顏にそれが讀めたのです。さう思つて見て行くと、此事件のすべての證據はみんな不たしかなものばかりで、結局は人々の推定にすぎないと知れて來ました。斯ういふ境遇に陷いるくらゐの女は、罪を犯すのが當然だといふ假定を腹の中にたてゝ、それから割出して行く判決に過ぎないのだ。それに比べれば私は遙によくあの女の境遇の秘密を知つてゐる、その私の推測が誰れの推測よりもたしかでなくてはならない。ですから、君、此の裁判を無效にする正式の手續を考へて下さい。費用などは幾らかゝつても構はない。

ファナーリン　承知しました。併し、どうしてそれが其の女だと分かりましたか？　女が自身で法廷にそんな身の上ばなしをしたのですか？

ネフリュドフ　初めは私にも分からなかつたが、ふと呼び出された女の顏を見ると變つた中に不思議と昔のカチューシャといふ小間使に似た所があつて、それが私の眼さきにちらついてならない。何だか不安心でたまらないから、見まい／＼としてゐても、やつぱり目について離れない。そんな事のあらう筈はないと打ち消して見ても、心の底から／＼とカチューシャの記憶が出て來て、だん／＼はつきりとマスロワの顏に其の面影を認められるやうになつたのです。考へて見ると、をか

しな話だが、昨夜不思議に十年前の事を夢に見ました。今まで忘れよう／＼とつとめてゐた結果、まるで思ひ出しもなかつた事を、どうしたはずみかふつと夢に見たのが、今日の記憶を助けたに違ひありません。初めマスロワと言つてるあひだはまだ半信半疑でゐたが、カチューシャといふ名を言つたので愈それに違ひないと分かつたのです。そして向うも何度か私の顏を見たが、向うには私といふことは到底分からなかつたやうです起訴狀の朗讀や、檢事の論告のたびに、顏を赤くして自分の罪狀に驚いてゐる樣子や、最後にただそんな惡い事をした覺はないといつた限り泣きくづれたさまは、いぢらしくて見てゐられなかつた。そのため私はとう／＼卒倒しかけたのです。あゝ、あの最後の言葉を思ひ出すと、今でも體がふるへて來る。

ファナーリン　分かりました／＼。あなたは大分感情が興奮してゐるやうだから、早くお歸りになつた方がいゝでせう。

（小使入り來たる）

小　使　たゞ今宣告がすみました。マスロワは徒刑囚としてシベリヤへ移されることになりました。

ネフリュドフ　えゝ、シベリヤ？

（立ち上つたまゝ茫然としてゐる。小使去る）

ファナーリン　徒刑囚、シベリヤ。ようございます。早速一件書類を調べて控訴の手續をしてあげませうから明日にもちよいと私の事務所へお出でを願ひます、其のとき萬事御相談をしませう。今日は早くお歸りなさるがいゝと思ひます。

ネフリュドフ　ありがたう／＼。それでは何分とも願ひます。さやうなら。（ファナーリン下手口から去る。ネフリュドフしばらく立ちゐて）カチューシャがシベリヤへ。……それでいよ／＼私のする事も分かつて來た。私もシベリヤまで行かう。シベリヤはおろか、世界の果てまでもついて行つて、あれの體と靈魂とを救つてやらなくちやならない、さうだ、私にはも

う財産も地位も用はない、身の累ひになるものは一切棄てゝ了つて、明日からは體一つになつて過去の罪を償はなくちやならない。それでこそ、久しくなえてゐた良心に申譯が立つ。あゝさう思ふと何だか急に身が輕くなつて、淸々するやうな氣がする。カチューシャ、カチューシャ、決してお前一人をシベリヤへはやらないから堪忍して呉れよ。

（小使下手口から入り來たる）

小　使　御婦人のかたが、馬車でお迎ひに見えました。

ネフリュドフ　（ぎよつとして）今日は氣分が惡いから失禮しますと言つて呉れ。

（小使が出て行くと入れちがひにミシー盛裝して入り來たる）

ミシー　何うかなすつたの？　手紙であんなにお約束して置いたのに、今日は失禮するなんて、ひどいわ。ほんとに御氣分が惡いのですか？

ネフリュドフ　（慰めるやうにミシーの手を取つて）ミシーさん堪忍して下さい、今日の裁判が私の氣を顚倒させて了つたのです。今日は氣分がわるくて、とても御一緒に行くことは出來ません。（ぢつとミシーの樣子を見てゐたが突き放すやうにして）或はこれきり、永久御一緒に行くことは出來ないかも知れません。

ミシー　（泣き聲になつて）あら、私どうしようか知ら。なぜだしぬけにそんな事をおつしやるの？　何うかなすつたの？今日の裁判でどんな事があつたのですか、聞かして頂戴。

ネフリュドフ　まあ、ちよつとこゝへおかけなさい。今日は實に重大な事があつたのです。お宅でゆつくり話せばいゝのだがそれももう無駄な事のやうですから、こゝでかいつまんで言つて置きます。よく聞いて置いて下さい。

ミシー　（段々眞面目になつて）何でせう？

ネフリュドフ　私はね、今までまだあなたと公然結婚の約束をした事はないが、その前に斯う言つたらあなたはどうします？――私は決して清淨無垢の人間ぢやないと、さう言つたら？

ミシー　別に何とも思やしませんわ。何をおつしやるのだらう。ぐらゐにしか思やしません。

ネフリュドフ　私の過去には或る大きな罪惡があります。それを今いよいよ贖はなくちやならないやうになつたのです。それを贖はない内は私は決して無垢の人間ぢやありません。

ミシー　ぢやそれを贖つたらいゝぢやありませんか？　私どんな事だつて、あなたの爲ならお手傳ひしますわ。

ネフリュドフ　それを贖ふためには、あなたと此の上の御交際は出來ないのです。あなたのお家とも是れきりになる他はありません。私は明日から、地位も財産もない、貧乏な平民になつて了ひます。

ミシー　まあ、そんな大變な事になるのですか？　一體その罪惡といふのは何でせう？　聞かせて下さいな？

ネフリュドフ　それは私が過去の男の生涯です。それだけ言つて置けばいゝでせう。

ミシー　男の生涯！

ネフリュドフ　あなたはまだ年が少ないから、此のうへ打ち明けて聞かすことは出來ませんが、私は其罪を贖ふために、囚徒の女と結婚するかも知れません。

ミシー　まあ、どうかしていらつしやるのね？

ネフリュドフ　どうもしちやゐません、本當の事を言つてるのです！

ミシー　ぢや、まあ！　あなたは私をだましていらつしやつたのですね？

ネフリュドフ　だました譯ぢや決してありませんが今までは大して惡いとも思はなかつた事が、今日の裁判ではじめて恐ろし

い事だと分かつたのです。ですから此のうへあなたと御一緒にゐては、それこそあなたをだます事になります。どうか今までの事はあれきりにして忘れて下さい。お頼みです。

ミシー　あゝ、あなたは！（蒼白になつて）もう澤山です、もう澤山です！　分かりました。どうか御自由になすつて下さい。私もう歸りますわ。お母さまが待つていらつしやる筈だから……さやうなら。

（ミシー出て行く。ネフリュドフ見送つて立つてゐる）

……幕……

第三幕

モスクワ監獄の女囚室の一、正面中央に大格子窓、其奥は薄暗い室と假定する、格子窓の上手に大扉、其横手に格子窓、下手横に鐵の小さい扉。室内には隅に寄せてベンチや粗末な寢臺や木箱が置いてある。遲い午後、女囚三四人マスロワを取卷いて騷いでゐる。

大ロシヤ　（と綽名せられた女）（窓から外を見て）やい、そこにゐる爺い、てめえ、もう濟んだのかい？

老女囚　だまれつたら！　業つくばりめ。お祈りの邪魔になるぢやないか？

大ロシヤ　何だと？　牢に這入りやがつて、お祈りも神さまもあるかい？　大腸婆あめ。

老女囚　今に見てるよ、あたしが、何うするか（神の像の前に膝をついて）お救ひのマリアさま、どうか私たちをお守り下さい。そしてあの大ロシヤめを足腰の立たない目にあはせてやつて下さい。

美人　（と綽名せられた女）ほんとに、もう澤山だよ。あの肺病やみは奧でゴホゴホやつてゐるし、大ロシヤは窓にたいのつきどほし、お婆さんはクシヤクシヤお念佛ばかり言つてゐて、うるさくてうるさくてしやうがない。

大ロシヤ　（側窓の外へ）さうだよ爺、私窩子だよ、モスクワの私窩子だよ。若くて奇麗でさ……羨ましくはないかい？

美人　一體誰れと話してるんだ？　（覗いて見て）いやだ！　あの禿ちよろめ。碌ころ親爺とだよ！　呆れちまふよ

看守　（下手口から入つて來る）こら、靜にしないか？　大ロシヤ、窓の外へ何をいつてる？　窓を離れなさい、窓を離れなさい。

大ロシヤ　はい／＼、小言を喰ふのはいづも私ばつかりよ。

看　守　お前の聲が一番大きいからだ。

大ロシヤ　あの大腸婆さんだつて、隨分大きな聲をしますわ。

老女囚　餘計な事を喋るない。自分が叱られやがつたものだから、小言の相棒をこしらへようと思やがつて。看守さま、此の檻房で暴れるのはあいつ一人でございますよ。こつぴどく喰はしてやつておくんなさいまし。

大ロシヤ　何だとこの婆あめ。

看　守　こら／＼。二人ともそのざまは何だ？　靜にしないと、またひどい目に逢ふぞ。みんな仕事でもしてゐろ。

（マスロワは正面窓下のベンチに腰をかけ、兩手に顏を埋めたまゝ、初めから何も言はないでゐる。フョードシアが之も無言で其傍で編物をしてゐる。老女囚は床にすわつて縫物をしはじめ、大ロシヤ、美人等はそこらにぐつたり腰をかけてる。一人の無言の女は、始終室の端から端へ行つたり來たりしてゐたが、此時寢床の上に向うむきに寢て了ふ舞臺しばらく森となる。看守出て行く）

フョードシア　（マスロワに）お前さん、まだ泣いてゐるの？　ねえ、私、これからお前さんの事を姉さんと言はせて頂戴な。お湯を貰つて來てあげませうか？　其の巻パンでも喰べたらどう？　隨分お腹がすいたでせう？

美　人　この人がシベリヤへ流されやうとは、全く思はなかつたよ。無罪放免で、お金でも貰つて歸つて來るだらうと思つてゐたのさ。

フョードシア　一たい何年くらゐ向うに居ればいゝのだらう？

大ロシヤ　二十年ていふぢやないか。

フョードシア　二十年？　まあ！　そのあひだには死んぢまうわねえ。

大ロシヤ　死ぬとも。シベリヤへ行きや、大ていの奴は二年か三年でくたばつて了ふさうだよ。

フョードシア　（すゝり泣きながら）私、死ぬまで姉さんの傍に離れないわ。

老女囚　それだから私が言はないことぢやない。いゝ辯護士を頼んで、うまく言ひぬけなくちや駄目だつて。

マスロワ　（顔を上げて）あゝ、もう何も言つてお呉れでない。シベリヤだつて何だつて構ふものか。行けといふなら、何處へでも行くさ、シベリヤでもサガレンでも、私一人、此の世にゐるのがそんなに邪魔なら、いつでも來て殺すがいい、縛り首にでもするがいゝ。

老女囚　だつてお前、言ひぬけられるだけは言ひぬけなくちや嘘だよ。

マスロワ　言ひぬけるつて、私には、言ひぬけることも何もありはしないのだもの。私や、何もしやしないのだよ。たゞ私がこんな商賣をしてるばつかしに、みんなで、よつてたかつて私を罪人におとしちやつたのだよ。だから私もうあきらめちやつた。こんな體になつたのが私の不運だよ。

老女囚　世間の奴ら、ほんとに憎いつちやない。みんな大惡人の癖に大きな面をしてやがつて、こちと等のやうな弱いものが、何かするとすぐ罪人呼はりをしやあがる。こちと等の方がよつぽど善人だい。

大ロシヤ　全くさうだよ。

美人　正直なものが馬鹿を見るんだよ。

老女囚　あゝあ、お縋り申すのは神様ばかりだ。（また聖像の前に立つて）お救ひのマリヤさま、どうぞ私どもをお守り下さい。

大ロシヤ　およしよ、馬鹿らしい。

マスロワ　私たちの神さまは、もう疾つくに居なくなつたのだねえ！（次の臺詞のあひだ、マスロワはそつと奥の室へ這入つて行く）

老女囚　何がさ、お前、神さまがお出でなさらなきや、此世は全くの闇だ。せめて神さまお一人をたよりに、私たちが生きて行けるのぢやないか？　神さまのお心に背いちや、私たちだつても何も出來やしない。

大ロシヤ　もう何も出來ないぢやないか？　こんな所へ來ちやあ、生きてるも死んでるも同じことだ。神さまに守つてもらつてる奴が牢屋へ來るかい。

老女囚　だから世間が悪いといふぢやないか？　手前だつて、神さまのお心に背いたゝめにこんな所へ來たとは思つてゐまい？

大ロシヤ　私は世の中に神さまも何も居ないと思つてゐるよ。甥が間違つた召集で徴兵に取られやうとした時、村中のものが集つて巡査に手向ひしたのを、現在伯母の私がどうして默つて見てゐられるかい。私は飛び出して、甥を乘せた馬の鼻づらを押へて、巡査を刎ね飛ばしてやつた。それが悪いと言つてこんな牢屋へ入れやがつたのぢやないか、神さまがほんとうに居たら、こんな無法な眞似をさせて默つて見てゐるだらうか？

老女囚　さう言や、私だつて、二度目の亭主の奴が、爺の癖に私の連れ子の阿魔と巫山戯た眞似をしやあがつて、あんまり情ないから、ぶつた切つてやつたのさ。どつちが善いか悪いかは神さまが見てゐて下さる。それから此の人だつて（美人の方を指して）こんなにお洒落はしてゐても、娑婆ぢや鐵道の線路番のおかみさんで、信號の旗を振るのを間違へた爲に汽車が衝突したのだといふぢやないか？　誰れが好き好んで汽車を衝突させる奴があるものか？　ねえ、怪我だあね。

それを後の見せしめだといつてこんな所へ抛り込んで、抛り込まれたやつこそいゝ面の皮だ。お前さんが運わるく損な番に巡り合はせたのだよ。それからあの物を言はない女だつて、自分の子どもを河へ投げ込むにや、よくよく辛い譯があつたのだらうさ。それはみんな神さまが御承知だ。

（この時、ちよつと森となる、先ほど寢床の上に横になつた女の、啜り泣きの聲が聞こえる。みな／＼其方を振り向く）

フョードシヤ　あれはね、寢ると昔の事を思ひ出して、それが夢だか現だか、どうしても分からないのだつて。昔惚れてゐた錠前屋さんの事を想ひ出して泣くのだつて、かはいさうねえ。

（マスロワ奥から酒氣を帶び、ヴォッカの瓶を持つて出て來る）

マスロワ　さあ、みんな景氣づけに一杯やらないか？

（腰をかけ、一口喇叭飲みにして、大ロシヤに渡す。老女囚は顏をしかめる。美人寄つて來て、瓶を大ロシアの手からひつたくるやうにして飲んで、マスロワに返す）

フョードシヤ　（マスロワに）姉さん、またそんなに飲んぢやいけないわ、もうおよしなさいよ。

マスロワ　これが飲まずにゐられるかい、お前。飲むとこんなに、いゝ氣持になるぢやないか？　昔の事も今の事も、みんな忘れちやつて、たゞもういゝ氣持だが、今日は私、全く驚いちやつたよ。私が罪人だなんて、ねえ、どうすれば、そんな事が言へるのだらう？　このかはいゝカチューシャが人を殺したなんて。ほんとに驚いて了ふわ！　その癖、みんなで、私を見らやニコ／＼して喜んでゐた癖に、裁判所でも、あの意地のわるい檢事のほかは、みんな私に色目をつかつてゐたによ。

美　人　男といふ奴は、みんなそんなものよ。女と見りやあ、砂糖に蠅のたかるやうに集まつて來るのよ。

マスロワ　だけど、それが惡いのでもないし、誰れが惡いのでもないのよ。あたりまへの事なのよ。ねえ、私は斯う思ふのよ。一體世間の男は、どんなものでも、好い女を欲しがらないものはないし、好い女はさうして欲しがられるために出來たのだから、精々欲しがらすやうにするのが當りまへだわ、私も今まで隨分と、いろんな男に出くわしたが、たゞの一人だつて私を欲しがらないものは無かつたよ。私なにも、自分が好い女だか何うだか、そんな事は知らないけれど、みんなが欲しがるから好い女なのだらうと極めちやつたのよ。全く、出くわす男も、出くわす男も、みんな私一人を的に、いろんな知慧を絞つたり、金をつかつたり、喧嘩をしたりして來たのだもの。

大ロシヤ　さうだらうとも、其の話を聞かしてお呉れよ。

マスロワ　聞かさうかねえ。まづ一番にね、私にねらひをつけて來たのが、私の育てゝもらつた別莊の若旦那でね、身分の高い人だつたのよ、それがお前とうとう私を手ごめにして、翌くる朝、百圓札一枚私の懷へ押し込んだきり行つちまつて二度とたよりもしなくなつたのよ。

老　女　因　百圓札を！

マスロワ　あゝ、百圓札を。だけど其のころは私まだ金なんか欲しくなかつたものだから、其の金をみんなに呉れちやつてさうかうしてゐる内に私は姙娠したと分かつたのさ。それで別莊にも居づらくなつて、或る役人の家へ奉公したのさ。するとお前、そこの主人といふのが、五十面を下げで、うるさく私に附きまとつて來るぢやないか。あんまりうるさいものだから、馬鹿野郎とどなりつけといてそこも飛び出しさ、其のうち生み月になつたものだから、村で造り酒の拔け賣りをしてゐる産婆の家へころがり込んで、子どもだけはそこで生み落としたが、其の子はすぐ孤兒院で死んで了つた。

美　人　かはいさうにねえ。

マスロワ　其の次に奉公したのが山林の役人だつたが、そこの主人は前の役人よりも上手だと見えてね、とう／＼私をおびき出して、うまく手に入れて了やがつた。けれどそれも長くは續かないで、その家の細君と摑み合ひの大喧嘩をしてさ、給金を踏み倒されて飛び出しちやつた。（酒を又一口飲んで次へ廻はす）

大ロシヤ　そんな分からない奴は、張り倒してやればいゝのに。

マスロワ　それから何處だつけ？　さう／＼伯母が洗濯屋をしてゐるから、そこの洗濯女にならうかと思つたのだけどね、それもあんまりみじめだと思つて、桂庵の手から或る女主の家へ奉公したのさ。するとそこの總領息子で中學の五年生といふのが、もう口髭なんかはやしてゐてね、學校そつちのけに私の跡ばつかし追ひ廻してゐるものだから、私がそゝのかしてでもゐるやうに母親から睨まれて、そこも長續きはしなかつたのさ。

美　人　油斷もすきもあつたものぢやないね。

マスロワ　それから二度目に桂庵へ行くと、又傳手で或る旦那といふのに引き合はされたが、それが髪も髯も胡麻鹽になつた脊の高い男でね、無氣味な眼つきをしてニヤ／＼笑ひながら私にふざけかゝつて來たのよ、するとおかみが其の男を次の間へ呼び出して「どうです旦那、田舍から出たての手いらずの處女ですよ」つて頻りと取り持つてゐたが、とう／＼二十五圓で世話になることに話がついたの、でね、私は貰つた手附金で借りを返したり、着物や帽子を買つたりした。

美　人　つまり旦那取りだね！

マスロワ　あゝ。だけど私は、よく／＼男運の惡い女だと見えてね、その旦那の世話で引き越した下宿の隣り部屋に、面白い氣象のお店者がゐて、いつか其の男と出來てしまつたのさ。さうなると私の氣象で、其のまゝぐづ／＼にしてゐるのが

いやで、さつぱりと旦那に打ち明けて別かれて貰つて其の男と一緒に世帯を持つたよ。所がそのお店者め、いゝ頃合のところで、商用だとか何とか言つて出て行つたきり歸つて來ないで私を置き去りにして了やがつた。

大ロシヤ　憎いつたらありやしない。そんな奴こそ、目つけて引つぱたいてやるといゝのに。

マスロワ　さうなつて行くのが、つまり私の運だつたのだねえ。そして私はその頃からやけ酒を飲むことをおぼえて、一日酒浸りになつてることもあるし、しらふの時は、つく〴〵自分で自分に愛想のつきることもあつて、もう私〳〵の體は何うなつてもいゝから、したい三昧の事をして過ごせといふ氣になつたよ。そして或る女衒の手で、私はとう〳〵今までゐた家へ身を沈めて了つた。それがめぐりめぐつて、こんな落ちになつちやたのさ。ねえ、人の行末ほど分からないものはないわねえ！（また酒をあふる）はゝ、はゝ。今度はシベリヤかサガレンへでも行つて、そこの牢番のおかみさんにでもなるかねえ？

美　人　でも、其程の男の中で、お前さんの方から打ち込んだ男があつたかえ？

マスロワ　それは一人や二人はあつたさ。私を置き去りにした男だつて、憎くはなかつたよ。だけどやつぱり一番長く殘つて、今でも時々思ひ出すのは、初戀だね。その公爵の若さまだけは、其の頃の、うぶな心でしみ〴〵かはいゝと思つたつけが、今から思や薄情者だつたのねえ。

美　人　お店者でも公爵でも、揃ひも揃つて薄情者だつたのだね！

マスロワ　あゝ、だからもう〳〵男といふものはたよりにならないものと極めちやつたのさ。（また酒を飲む）あゝあ。隨分長い身の上話をしちやつたわね。

フョードシア　さあ姉さん。水をあげませう。もう其のお酒はおよしなさいよ。私が斯うしてしまつて置いてよ（ベンチの下

から薬罐を出し水をコップについですすめ、瓶をそこへ隱す）

マスロワ　あゝ、いゝとも。煙草が一服呑みたいねえ！　誰れも持つてゐないの！　おや〳〵、今日は不景氣だね

フョードシア　私、あとであの押丁さんにねだつて置いてあげるわ。

マスロワ　ありがたうよ。今度はお前さん一つ身の上ばなしをおしよ。そんな優しいいゝ人が、どうして自分の御亭主を殺さうなんて、大それた事を思ひたつたの！

フョードシア　それはね……私ほんとに不仕合だつたのよ。私がお嫁に行つた時に、やつとまだ十六だつたの。でね、見たことも無い人の所へ無理やりお嫁にやられて、私、たゞ恐いばかしで、ほかになんにもありやしないのだから、泣いて泣いて泣き通して、どうしても其の人と一緒になつてやらなかつたの、私、今考へると、あの時の心持が自分でも分からないわ。きつと魔がさしたとでもいふのでせうね、とう〳〵其の人を殺しても自由になりたいと思つて、そんな眞似をしちやつたのですよ、それだのに、不思議なこともあるものだわね、八月ばかり保釋になつてゐる間に、すつかり其の人が好きになつたの。馭者をしてゐるだけれど、それや氣立の優しい人でね、今ぢや兩方から離れられないやうになつてゐるのよ。それでどうか此の事を願ひ下げにしたいと思つたのだけれど、もう間にあはないのですつて。そして五年の宣告を受けて、此のさきどうして生きてゐられるでせう。ねえ、姉さん。察して頂戴。

（看守入り來たる）

看守　マスロワ。これをお前の主人だといふ女の人が差し入れて行つたよ。金が二圓五十錢と卷煙草が一函

マスロワ　お金と卷煙草！　さうね、言はないことぢやない。今日は何か福があると思つたのだよ。看守さん、どうもありがたうございました。

看　守　禮はその人に言へ。

マスロワ　それやさうですけどさ。その人はきつと私をかゝへてゐた家のおかみさんですよ。看守さん、どうぞよろしく言つて下さいな（看守の出て行く後から追うて行つて、出口の所で銀貨を一つ握らす）さあこれで、呑みたい／＼と思つた煙草にもありつけたと。マッチはどこにしまつてあるの？（一本つけて、うまさうに貪り吸ふ）あゝあ、酒と煙草の中に私の命はあるんだね！

（煙の香を嗅いで他の女等、羨ましさうに寄つて來る）

老女囚　（さつきから縫つてゐた針仕事を下に置いて）私にも一本相伴させてお呉れな。お前さん、辯護士に控訴の事を賴んだのかい？

大ロシヤ　私にも一本お呉れな。控訴する時には、お前さんの名を書かなくちやならないのだが、そんな手續はしなかつたらうね。私が知り合ひの上手な辯護士を世話してあげやうか知ら。

老女囚　そんな事は、お前さんよりも、私の方が明るいよ。

大ロシヤ　私、なにもお前さんに言つてるのぢやないよ。餘計な事をお言ひでないよ。

老女囚　へ、煙草が呑みたいものだから、急にお世辭をつかひやがつて。

大ロシヤ　どつちがだい？　この百ぴろ婆あめ。

老女囚　業つくばり、今に見てゐろ、晩になるとたゞぢや置かないから。

美　人　まあ靜におしよ。

大ロシヤ　へん、誰れが百ぴろ婆あなんか恐がるものかい。

(看守再び這入つて來る)

看　守　こら／＼。また騷ぎ出したか？　靜にしろ、靜にしろ。(鐘が鳴る)そら、もう晩のお祈りの時刻だ。みんな列をつくつて行くのだぞ。列をつくれ、列をつくれ。

(女囚一同列を造り看守の跡について上手口から出て行く。舞臺ちよつと空虛となる。やがて下手口から看守に伴はれてネフリュドフ、ファナーリン入り來たる)

看　守　囚人は今禮拜堂の方へ行つてゐますから、マスロワだけ先にこゝへ連れて來ます。御面會の時間はかつきり十五分ですよ。

ファナーリン　典獄に特別談判をして來たのですから、十五分と限つた以上、それより延びてはよくありませんし、他の囚徒の歸つて來ない前にお濟みにならないと、此の室で會つてゐるのが犯則になります。だから御用談はなるたけ早くお進めになる方がいゝでせう。

ネフリュドフ　ありがたう、ありがたう。ではしばらく、どうかあなた方はあちらでお待ち下さい。

(ファナーリン看守、出て行く。ネフリュドフはそこに立つたまゝ、室内を見廻はしてゐると、下手の戸があいて、マスロワ小きざみの足つきで這入つて來る。ネフリュドフの顏を訝り見ながら、ちよつと髮を撫て、數歩、前に立留まつて、此りうとした身なりを見、媚びるやうな微笑を浮べて)

マスロワ　今日は。あなたですか、私に面會したいとおつしやるのは？

ネフリュドフ　(胸を躍らせ聲をしやがらせながら)私だが、お前、もう忘れたらうね？

マスロワ　(まぶしさうにして媚びる態度で)さうね、どなたでしたつけか、今ちよつと思ひ出せませんわ。だけどきつと、私

をかはいがつて下すつた方でせう？

ネフリュドフ　（帽子をぬいで一二歩近より）私だよ、よく見て思ひ出して下さい。さあ――分かつたか？

マスロワ　（しつかりとは見ないで、そは〳〵として）えゝ、おぼえてゐます、おぼえてゐます。お名前はあの……さうでしたつけね？

ネフリュドフ　ネフリュドフ

マスロワ　（耳にとめないで）さう〳〵よくあるお名前でしたつけね。で、どうして私が分かりましたか？

ネフリュドフ　昨日裁判所で、陪審官になつてお前の裁判に立ち會つたが、お前は氣がつかなかつたらうね？

マスロワ　まあ、さうでしたか！　ちつとも氣がつきませんでした。ぢやあなたも御一緒で私を裁判なすつたのね？私シベリヤへやられるのですつてね？　（言つて唇をふるはせ）あんまりひどいわ、無實ですわ、まちがひですわ。私決してそんな悪い事なんかしやしません。……でもあなた、どうして逢ひに來て下すつたのですか？　裁判がどうかなるのですか？

ネフリュドフ　その事で來たのだが、私はどんな事をしても、お前のその無實の罪を救つてあげようと決心したのだよ。

マスロワ　ほんとうに御親切ね。（つゝましやかに男に近づき、娘らしい調子で）あなたね、若し實際私を助けて下さるおつもりなら、少しお願ひがあるのよ（賤しげに諂ひ笑ひをする）

ネフリュドフ　あゝ、何でもするから、言つて下さい。

マスロワ　かなへて下すつて？　どうもありがたう。私ね、何よりも先に控訴しなくちやいけないのださうですが、いゝ辯護士を頼むとお金が大へんかゝるんですつてね？

ネフリュドフ　その事なら、もう私が手續きをして來たから安心して下さい。今日來たのもお前にそれを承知して置いて貰は

うと思つたからさ、で、もし控訴でいけなければ上訴でも何でもして、是非ともお前を救ひ出すつもりでゐる。金のことなんか少しも心配するに及ばない。

マスロワ　(わざと嬉しげに)まあ、うれしいこと！　それで安心しましたわ。それから今一つのお願ひてのはね、……(躊躇して)私少し買ひ物がしたいのですけど、……あんまり澤山頂いても無駄につかつたり、みんなに借りられたりするばかしですから……ほんの少しばかり……、お錢をね……十圓でいゝのですよ、たゞそれだけでいゝの。

ネフリュドフ　お錢を？……(絶望の樣子で)あゝ、あゝ、いゝとも、上げるよ。

マスロワ　ちよつとお待ちなさい。看守があつちへ向くまで(外の方にゐる看守の樣子をふりかへり見て、後向きにさもしげな手つきで金を取らうとする。看守の姿見えなくなる)さ、さ、早く下さいな。どうも、ありがたう(急いで其金を靴下の中へ隱す)

ネフリュドフ　(ぢつと見てゐて絶望のためいきをする)あゝ、お前、そんなにまでなつたのか？

マスロワ　え？　何ですつて？　(見上げて媚び笑ひをし)そりや、もう、どうせ牢屋へまで來たんですもの、貧乏もしますわ。このつぎいらつしやる時に、若しまた願へたらまたお錢を少し貸して下さいな……、それから卷煙草を少し持つて來て下さるといゝのだけれど……あ、さう／＼、私、今一つお願ひがありますわ。(また看守の姿を見て)あなた、あいつに二圓ばかり掴ませておやんなさいよ。うるさくていけないから。

ネフリュドフ　よし／＼。

(看守の方へ行く。マスロワは其の間にベンチの下の酒の瓶を取り出し其の口から酒をあふる。ネフリュドフの入り來るのを見てあわてゝ瓶を後手に隱し壁の方へ寄る)

マスロワ　今、水とコーヒーと交ぜたのを飲んだところなの。私、一日中何も飲まなかつたものだから、喉が渇いて、こゝが焼けつきさう（苦しげに胸をたゝく）

ネフリュドフお前今、何かまだ私に頼みがあると言つたね？

マスロワ　さう〳〵、さうでしたつけ、……何だつたらう？　あ、さう〳〵、私の妹分でね、フョードシアといふ女囚がゐるのですよ。それやかはいゝ女でね、何も知らない内にお嫁にやられたといふので、御亭主を毒殺しようとしたのですつて。それが保釋されてる間にすつかり仲なほりが出來て、今ぢや羨ましい程な夫婦仲なのだのに、どうしても罪に落ちなくちやならないのださうです。あの子も、ついでに救つてやつて下さらない？

ネフリュドフ　ふむ……それは調べて見なくちや分からないが、辯護士に頼んで見ようよ。私はね、お前を一日も早くこんな所から救ひ出して、せめてもつと靜かな病院か何かの方へでも廻して置きたいと思ふのだが、何なら其の女も一緒にその方へ行けるやうに、運動しよう。

マスロワ　さうして下さるとありがたいわね、

ネフリュドフ　もつと周圍の靜な綺麗な所へでも移つたら、お前の眠つてゐる靈も眼をさまして來るだらう。

マスロワ　お說教のやうだわね。

ネフリュドフ　あゝ、カチューシャ、お前はまだ本たうの事を想ひ出して吳れないのだね？　ネフリュドフといふ名が分からないのかい？

マスロワ　何だか變ですわね。ネフリュドフだのカチューシャだのつて、あなたどうしてそんな名前を御存じ？

ネフリュドフ　（十年前の寫眞を取り出して女の手に渡し）どうか此の寫眞を見て思ひ出してお吳れ。

マスロワ　（寫眞を手に取つて）あなたのですか？　女のかたもいらつしやるのね？　綺麗ですこと！　（尚ぢつと見てゐる）

ネフリュドフ　よく見て下さい。十年前お前がまだ、私たちの別莊にゐた頃の寫眞だ。あの、復活祭の晩の事をお前はもう忘れたのか？

マスロワ　（男の顔に目を向け、ぢつと見て身ぶるひし寫眞を床の上に投げつけ飛び上がるやうにして、覺えず拳を固め）この惡魔め！

ネフリュドフ　（マスロワの擲らんとするのをぢつと受けて）カチューシャ、私はお前におあやまりに來たのだよ。

マスロワ　惡魔！　惡魔！　薄情者！　あなたのやうな薄情者は、私がこんなざまになつたのを見物する氣ででも來たのでせう？　よくも私の前で、あなたの名前が名乘れたものだ。

ネフリュドフ　カチューシャ、みんな私の罪なのだからどうか、許して吳れ。

マスロワ　それだけの事なら、何もこゝまで追つかけて來る必要は無いぢやありませんか？　こんなになつてる私を、なぶつてやらうと思つて來たのですか？　あなたにだけは私、こんな境遇で會ひたか無かつたのですよ。それをわざ／＼探し出して、こんな悔しい恥しい思ひをさせられて……あゝ、私、あひたくない、あひたくない！　（兩手に顔を埋めて泣く）

ネフリュドフ　私は實に申譯の無い事をした。十年前のお前に對する不始末が昨日の裁判を見て空恐ろしくなつて來た。私はどうかして其の罪が贖ひたいと思ふのだが、カチューシャどうか私を許して吳れ。

マスロワ　（顔を上げ涙を拭ひ拂つて）御免なさいよ。私が惡うございました。私もう疾くの昔あきらめた筈でしたつけ。つい、あなたのお顔を見たものだから、あんなに怒つちやつて。でも、みんな運ですわ。そんなに心配して下さらなくてもようございます。お互にあの頃の事は、もう／＼忘れて了ひませうよ。

ネフリュドフ　いや、忘れてゐるのが私の過ちだつたのだ。……(苦しげな沈默の後)子どもがゐたつてね。

マスロワ　え丶、ゐましたけれど、都合よくすぐ死んぢまひました……。

ネフリュドフ　都合よくつて、どうしてそんな事をいふのさ?

マスロワ　だつて、生きてゞも居られたら、私が死んぢまひますわ。私もその頃病氣だつたのですよ。

ネフリュドフ　叔母たちがお前に暇を出したのだつてね?

マスロワ　(娘らしい怒りをちよつと見せて)當り前ですわ。身重になつてるものを、誰れが使つて吳れるものですか。それよりか叔母さまたちは何うなすつたでせう?

ネフリュドフ　あれ等は二人とも先だつて死んでしまつた。

マスロワ　あら、まあ?……あ丶、もう、そんな事は考へつこなしにしませう。みんなお仕舞になつた事ですから。

ネフリュドフ　いや、まだお仕舞ぢやないよ。私はどんなにしてでも過ちを贖はなくちやならない。それのすまない內はお仕舞ぢやない。

マスロワ　つまらない事ですわ。何も贖ふものなんかありやしません。過ぎ去つたことはしようが無いぢやありませんか?

ネフリュドフ　一そ私の財產を殘らずお前に讓つて、それで罪亡ぼしをしようかとも思つたが……。

マスロワ　冗談はおよしなさいよ。もう時間が來ますよ。

ネフリュドフ　とても〳〵そんな事で濟むものぢやない。やつぱり、私のこの體で救はなくちやならないのだ。行くところまで行かなくちやならないのだ。ねえ、カチューシャ、私はお前の體の淸まりきるまで、何處までもついて行つて、どんな事でもするから、それで私を許して吳れるだらうね?

マスロワ　なんて諄いのでせう。私、あなたを許すことなんかありやしませんわ、昔の事なんか言ひつこなしですよ。さあ、もうお歸りになるのでせう？（輕く手を握つて）辯護士のお金の事はお賴み申しましたよ。

ネフリュドフ　その事はたしかに引受けたから、書類が出來次第、お前の名を書いて貰ひに來ます。けれどもお前は、たゞそれきりで別れるつもりかい？　他に言ふことはないのかい？　許すとも許さないとも、憎いとも懷かしいとも言つて呉れないぢやないか？

マスロワ　そんな野暮つたい話はもうお止しなさいよ。

ネフリュドフ　カチューシャ、どうか是丈は眞面目に聞いて置いて呉れ。私は今日限り地位も財産も棄てゝ了つて、お前を救ふ爲に、お前と結婚しようと思ふのさ。

マスロワ　（ぢつと聞いてゐて、屹となり）何ですつて？

ネフリュドフ　（決心の調子で）お前を救ふためには、お前と結婚でもする。

マスロワ　結婚もするのですつて？

ネフリュドフ　あゝ、それが私の、神に對する義務だと思ふ。

マスロワ　（ぢつと見すゑて、唇を顫はせ抑へがたい悲憤と冷笑の調子で）神に對する義務だつて！　はゝ、はゝ、神さまのお引合ひなんか、お止しなさいな。神さまを賴むのなら十年前だつたのでせう？（顔をネフリュドフの方へ突き出す。酒の息がする）

ネフリュドフ　お前、醉つてゐるね？　まあ少し落ちついてお呉れ。（肩に手をかける）

マスロワ　（振りはなして）私、落ちついてますよ。さう、醉つてゐますさ、けれど醉つたつて、言ふ事は正氣よ、ね、あ

なたお聞きなさい。私は醜業婦なのですよ―　人殺しの罪人なのですよ！　はゝ、私はさういふ身分のものですよ。そしてあなたは、公爵の御前でいらつしやる。それがまあ、私と夫婦にならうとおつしやるんだから、とぼけてるわねえ、隨分とぼけてるわねえ。そんな馬鹿な料見はお止し遊ばせ、御身分にさはります。あなたの奥方には、何處かのお姫さまでもお迎へ遊ばせ。私が御用なら、十圓札一枚で、いつでも御用を達しますよ！（酒瓶を片手に持ち片手を其の上に載せて憤怒の形相でつつ立つ、調子は初めわざと冷嘲であつたのが、段々怒りに移る）

ネフリュドフ　靜にして呉れ、カチューシャ、私がどれ程良心に恥ぢてゐるか、お前には分からないのだ。そんな恥かしい事を言つて……。

マスロワ　恥ぢだつて？　へッ！　どうせ私は醜業婦さ！　十圓札で御用を達すに不思議はなからう？　もつともお前さんはあの時百圓札を私の懐へねじ込んどいて逃げ出したつけね。

ネフリュドフ　カチューシャ、カチューシャ、みんな私が悪かつたのだ。だから正式に結婚して、罪を贖はして呉れといふぢやないか？　お前は正氣を失つてゐる。

マスロワ　まだふざけた事を言つてるのかい？　私をだしに使つて自分の罪を贖ふんだつて！　へ！　いゝ料見だ！　此のうへまだ私をなぶり物にしようといふんだね！　私に恥をかゝせようと思つてやつて來たんだね？　……さあ！私に指一本でもさして見ろ。お前さんと結婚する位なら、首でも縊つて死んだ方がましだ！　私、もう、その生つ白い脂ぎつた顔を見るのも嫌だ。さあ、もう、いゝ加減に歸つて行かないか？　出て行け！　出て行け！（地だんだを踏んで罵り、また酒をあふり瓶を傍に置く）

ネフリュドフ　（涙ぐんで）ぢや今日は歸るが、どうぞあとで、も一度思ひ直して呉れ。お前に見せようと思つて持つて來た寫

眞だから、之れは預かつて置いて貰ひたいよ。(寫眞を拾つてマスロワに渡す)

マスロワ　(寫眞を渡されて見るともなくそれを見込む　そして聲をあけて泣く)あゝ！　なぜ、あの時死なかつたのだらう？　なぜあの時死なかつたのだらう？　(寫眞を抱いたまゝ横倒しになる)死にたい、死にたい！　殺して下さい！

ネフリュドフ　(倒れたマスロワをぢつと見おろし、靜にその側によつて扶け起こす。マスロワ又酒の瓶を取つてベンチに腰をかけ飮まんとするのを、ネフリュドフ後から肩に手をかけ)お前の體が汚れてゐやうがゐまいが、そんな事は私に取つちや何でもない。私がお前と結婚しようといふのはその體の中に眠つてゐる、お前の靈魂を呼び覺ましたいからだ。お前の靈魂を今一度昔の淸いカチューシャにして、そのカチューシャと結婚したいのだ。お前をシベリヤから救ふだけが救ひぢやない。私のこの心持をよく呑み込んでお呉れ。私はもう、世間並みの結婚ばなしなども斷つて、堅い〳〵決心で來たのだから、かはいさうだと思つて私の願ひを聞いて呉れ。分かつたか？　(マスロワ次第に顏をあけ前面を見つめる)私は必すお前を救はなくちや置かないよ(マスロワうつとりとなつて、瓶を取り落とし立ち上る。看守入口から顏を出し)

看　守　公爵、どうしたのですか？　もう時間が切れましたよ。

ネフリュドフ　(カチューシャを見つめて)また來るよカチューシャ。

(看守のゐる方へ出て行く。マスロワは失神したやうになつて正面上を見つめたまゝ彫像の如く立つてゐる

……(幕)……

第四幕

監獄内の病院の一室、白い壁、正面中央に窓、其左右には藥品棚など、横兩方に入口、室の中程、稍上手よりに大きな木地の角テーブル、其の上に藥瓶、乳鉢など置いてある。テーブルの周圍に二三脚の椅子。

マスロワとフーョドシア椅子に腰をかけて丸藥を揉み居る。

フョードシア　でもよく酒も煙草も一どきに止されたわね。

マスロワ　もとから好きで呑み出した譯でないからだらうさ。

フョードシア　だつて、あんなにうまさうに呑んでたものを急に斷つて了ふつてのは、大抵のことぢやないと思ふわ。あの方の眞實が通じたのだわね。全くあの方は親切なお方ね。私までお蔭でこんな藥が出來て、私これなら、斯うして姉さんと二人でゐられるのなら、三年や四年の懲役くらゐ何でもないと思ふわ。こんど公爵さまが入らしたら、お禮を言はせて頂戴な？

マスロワ　あゝ、お禮をお言ひ。本當にあの女囚室からこゝへ來ると清々することね。藥の香ひだけでも胸がすくやうだし、こんなにまた白い前掛をかけて……私、前掛をかけるのはほんとに久しぶりよ、十年ぶりよ。こんなさつぱりした風をしてゐると、何だか昔のカチューシャに戻つたやうで、うれしくてたまらないのよ。

フョードシア　えゝ、昔の姉さんに戻つてお了ひなさいよ。私お話を聞いただけでも、其の頃の姉さんが懐かしいわ。

マスロワ　私だつて、あの頃が懐かしいけれど……、私だけ昔に戻つても、傍がさうでなければつまらないわね。

フョードシア　ネフリュドフ様だつて、さうに違ひないのよ。姉さんを、昔の清い姉さんに引き戻さうと一生懸命骨折つていらつしやるのですもの。姉さんはほんとに仕合せですわ。

マスロワ　だけど考へて見ると、その間の十年は長いわねえ！　變つたわねえ！　これでまた舊の私に戻れるものか知ら！　世間がさうさせて呉れるか知ら？

フョードシア　それは姉さんの心がけ一つよ……ねえ、姉さんはいつか、あの方と分かれた時の話をしましたつけね？　なぜあんな親切な方が、も一度その別莊へいらつしやらなかつたのでせう？

マスロワ　それはね、戰地からの歸りで、寄る暇が無かつたといふのよ。それで私は、夜わざ／＼停車場まで逢ひに行つたつけが……

フョードシア　さう？　で、逢へて？

マスロワ　私だけ一目見たけれど、それなり別かれて了つたのさ、あゝ、あの時ほど悲しい、情ない思ひをしたことはなかつたつけ。あの時私は、ふつつりと、世の中が頼みにならないものだと思ひ切つたのだよ。

フョードシア　どうしてさ？

マスロワ　其のころは私ね、まだ何も知らないものだから、お腹の子どもの事を思ひ出しては、嬉しいやうな心配なやうな氣持で毎日々々あの人の歸つて來るのを待つてゐたのよ。叔母さんたちも歸りには是非寄るようにと手紙を出して、待ち暮してゐると、こんどは、規則で中途に寄り道をすることは出來ないと電報を打つて來たのさ。

フョードシア　まあ！

マスロワ　だから私、是非會つて置かなくちやならないと思つてね、汽車の着くのは夜の二時だといふから、みんな寢たあと

で、料理番の娘を連れて、肩掛を頭からすつぽり被つて、停車場へ駈けつけたのよ。

フョードシア　大抵の事ぢやないわね。

マスロワ　其の晩は、生ぬるい風が吹いて、大雨が降つた後の闇夜でね、近路をしようと思つたのが、すつかり迷つてしまつて、停車場へ着いた時はもう發車の二番目の鈴が鳴つてるぢやないか？　だものだから、私、あわてゝプラットフォームに駈け込んで、一等室の前まで行くと、中にはラムプや蠟燭が目ばゆいやうにともつてゐて、二人の士官は天鵞絨の椅子に倚りかゝつてトラムプをしてゐるし、あの人はきちんとした裝で、椅子に肱をもたせて笑ひながら卷煙草を吹かしてゐたの。

フョードシア　で、向うでも姉さんに氣がついたの？

マスロワ　いゝえ。私、其の平氣な顏を見ると腹が立つやうな、懷かしいやうな、何ともいへない氣持になつて、いきなり拳で窓を叩く拍子に、列車はがたつと搖れて動きはじめたのよ。で、はじめは、せめて一言でもと思つて、其の箱と並んで走つてゐると、内から其の樣子を見た一人の士官が、硝子戸を明けようとして、しきりとがた〳〵させたの、するとあの人ゝ窓の側へやつて來て、二人でがた〳〵やつてる内に汽車は段々早くなり出してやつと窓の明いたときは、もう間に合はなかつたのだよ……（涙ぐんでうつとりとなる）

フョードシア　それから？　それから？

マスロワ　私がまだ一生懸命に追つかけてるものだから、驛の役人がやつて來て、引き戻して了つたのさ。私は雨で濡れてるプラットフォームから、危なく滑り落ちやうとしたのを、やつとの事でこんどは線路へ降りて追つかけたけれど、どうすることも出來やう筈はないし、水槽の所まで來たときは、肩掛は風に吹き飛ばされて、裾は泥と水でべた〳〵になつてる

た。それを、あとからいきせき追つついて來た娘が聲をかけたものだから、私は始めて氣がついて、べつたりそこに坐つたなり、泣き出しちやつたのさ。

フョードシア　私も泣きたくなつたわ。

マスロワ　づぶ濡れになつた娘も縋りついて泣くし、二人暗い中で、あの時こそしみ〴〵泣いたよ。あの人はあんな氣樂な眞似をしてゐて、私はこゝで斯うして土の上にすわつてゐると思ふと、なぜだかふつと生きてるのがいやになつてこのまゝ汽車に轢かれて死にたいと思つたよ。けれど、その娘にせがまれて夢のやうに家へ歸つて來た。

フョードシア　でも、よかつたわね。

マスロワ　あくる朝まで考へて、お腹の子どもがかはいさうだと思ふと、また氣が折れて了つて、今日まで斯うして生きて來たのさ……だけど、その時から、私やふつつりと、神さまも人間も賴みにしない氣になつたのよ……

フョードシア　もう其の話はやめませうね、また十年前に戻れるのだから……

マスロワ　考へて見りや、あの方ばかりが惡いのでもないわね。それに今ぢや、あんなにして下さるものを、こないだは私ほんとに濟まない事をしたよ、こんど逢つたらお詫をして置から。

フョードシア　私また、姉さんへ教はつた歌を歌つてあげませうか？

（ネフリュドフ、小使に伴はれて入り來たる）

マスロワ　（うれしげに走り寄り、手を出して握手し）よくいらして下すつたのね。丁度今も噂をしてゐたのですよ。フョードシアが一度お目にかゝつてお禮が申したいのですつて。

フョードシア　あなたが公爵でいらつしやるのですか？（ネフリュドフの前に膝をついて）私、お禮の申しやうもございませ

んわ。ほんとに〳〵ありがたうございます。どうぞいつまでも〳〵姉さんのお傍にゐられるやうになすつて下さいまし。

ネフリュドフ　（フョードシアを立たして）よし〳〵、そんなに禮なんかいふ程の事ぢやないよ。つまりあなたの心がけがいゝから。病院でも許して呉れたのさ。

フョードシア　いゝえ、みんな公爵さまのお蔭でございますわ。ぢや姉さん、私ちよつと看護婦部屋へ行つて來ますわ。

マスロワ　さう？

フョードシア　公爵さま、御免遊ばせ。（禮をして出て行く、ネフリュドフうなづく）

ネフリュドフ　今日はね、控訴の結果が分かる筈で、こゝで辯護士のファナーリン君を待ち合はす事になつてゐるが、お前もこゝへ移つてから、もう可なり日數が立つたから、大分馴れて來たらうね？

マスロワ　えゝ、馴れて來ました。實は早くお目にかゝりたいと思つて待つてゐました。

ネフリュドフ　何か用が出來たのか？

マスロワ　用事つてほどの事でもないのですが、ほんとうに伺つて見たいと思ふことがあつたのですよ。

ネフリュドフ　ふむ、何だらう？

マスロワ　ほんとうに伺つて見たいと思つたのはね、……何だか時々自分で獨り極めにそんな事を思ふものですから……まあよしませう。また此の次にうかゞひませう。それよりか、あなたは、あれからずつと田舍へ行つてらつしやいましたつてね？

ネフリュドフ　あゝ、私はね、今度の跡しまつの爲に久しぶりであの別莊へ行つたよ。そして其のついでにお前の伯母さんといふのに逢つて、子供の墓も尋ねて來たよ。

マスロワ　よくお前、分かりましたねえ。伯母さんはまだ達者でゐましたか？　私も行つて見たいわねえ。どんなになつてゐるでせうねえ！

ネフリュドフ　別莊にはもうチホン爺も居ないでね中學生上りの若い男が留守番になつてゐて、建物は恐ろしく荒れてるし、屋根の鐵板の剝げたなりになつてる所などもあるし、煉瓦塀の上には草が一杯生えてゐた。それから裏庭の大きい林檎や櫻の林はね、ちやうどこぼれるやうな花盛りで、あの垣根の接骨木の花も昔のやうに匂つてゐたよ。

マスロワ　あゝ、私、もう一度自由な身になつて行つて見たい！（うつとりとなる）

ネフリュドフ　それからあの、よく氷の裂ける音のした川では、パチャ／＼洗濯をする音が聞こえてね、あの窓に顔を突き出してゐると、和かな風が吹いて來て、しんとした中に蜂のうなり聲が聞こえてゐたよ。

マスロワ　もう雪は無かつたのでせうね。

ネフリュドフ　無論さ。そしてね、私はやつとの事でお前の伯母さんの家を尋ねあてゝ、逢つて見たよ。お前の事をよく覺えてゐたよ。

マスロワ　あゝ、昔の自由な身になりたい！……そして本當にかなふ事なら……

ネフリュドフ　私は誓つてお前を自由な身にする。そしてお前の癒つた心で私と一緒になつて呉れ。

マスロワ　それがかなふ事でせうか……

ネフリュドフ　かなうとも。お前の心はさうして今一度清い昔に戻るのだ。

マスロワ　さうでせうか……けれどだめですよ／＼。一ど汚れた體は誰れも信用して呉れないから。

ネフリュドフ　（肩に手をかけ、やさしく）そんな事を考へちやいけない、カチューシャ。

（助手醫入り來たる）

助　手　あなた、此の方が面會室で待つてゐられるさうです。

（名刺をわたす）

ネフリュドフ　あ、ファナーリン君が來たのだ。ではちよつと會つて來ます。

（マスロワと助手とに目禮して出て行く）

助　手　（マスロワの方に寄つて行つて）お前さんの名はマスロワだつけね？

マスロワ　えゝ。マスロワ。

助　手　何處で稼いでゐたの？　此の土地で？

マスロワ　（むつとして）何處だつていゝぢやありませんか？

助　手　以前のお前さんの馴染が、お前さんをこゝから救ひ出さうと骨折つてるといふぢやないか？　本當かい？

マスロワ　早くいらつしやらないと、院長さんが見えますよ。

助　手　大丈夫、今は誰れも來ないことになつてゐるよ。だが、私もそのお馴染さんになりたいものだね。一たいどんな人だい？　素敵に身分の高い人だといふぢやないか？

マスロワ　えゝ、えゝ、非常に身分の高い人よ。

助　手　名は何といふのだい？

マスロワ　うるさいぢやありませんか？（立つて窓の方へ行く）

助　手　そんなにうるさがらなくつたつて、いゝだらう？

マスロワ　よかありませんよ。早くあつちへ行つて頂戴

助　手　馬鹿にかたぎな事を言ふね。お前さんにも似合はないぢやないか？　いくら監獄の中だつて、おもしろい事も出來やうぢやないか？　看護婦さんのお手つだひなら、少しやお我々の方へもお愛相くらゐしても、損は行くまいぜ。

（女の傍へ行つて腰を抱かうとする。それを振り放して）

マスロワ　あんまり人を馬鹿におしなさんなよ。（又テーブルの方へ行き、腰をかけて丸藥を揉む）

助　手　（ついて來て横手から）新米にしちや、揉みやうがうまいね。その粒の切りかたがまづいや。さ、手つきを敎へてあげよう。

マスロワ　分かつてゐますよ（肱で助手を突き飛ばす）

助　手　（後から抱きすくめて）この性悪女め、そんなに人をぢらすものぢやないよ。ちよつとでいゝから、まあ私のいふ事をお聞き。お聞きつたらね。今夜ね、あの小さい廊下の戸を明けて置くから、そのすぐつき當りが私の宿直部屋だよいゝかい？　分かつたかい？

マスロワ　（立ち上りすりぬけて）知らないつてばねえ。私、聲を立てゝよ。

助　手　お前さん、おこづかひに困つてるやうだから、こなひだから是れを上げようと思つてたのだよ。取つて置いて頂戴（銀貨を握らせようとする）

マスロワ　（それを烈しく床の上に投げつけて）人を馬鹿におしでないよ。（助手が捉らへんとする手を振りほぐし、追つかけられるのを逃げ廻る）

助　手　いよ／＼おれに肘鐵砲を喰れるつもりだな。見やがれどうして喰れるか？

マスロワ　（また捉らへられて、）放さないか？　放さないと蹴とばすよ。畜生！　畜生！

（振りはなすはずみに、テーブルの上の物を床に落とす。騒音。その途端に下手口から醫長、ネフリュドフとファナーリンとを伴ひ入り來る）

醫　長　こら？　何をする？　なんだその騒ぎは？

助　手　（びつくりして）先生、どうも困りました。この室へはいるとすぐ此のざまですからね、實際あきれて了ひます。大抵様子で分かつてゐませうが……どうも明からさまに申上げるのも極まりがわるいやうでどうかお察しを願ひます。ちよつと油斷して優しい事を言ふと、もうすぐこの通りの事をしかけるのです、どうして／＼、なか／＼の女ですよ。

醫　長　一たい君、何をしたのです？

助　手　何つて、どうも驚きました。私が丸藥の揉みかたを説明してゐますと……此の女がだしぬけに私に接吻しようとするのです。

マスロワ　まあ！　大嘘つき！　嘘ですよ嘘ですよ。

助　手　嘘なものですか？　……こなひだから私につきまとつてる様子が、何か私をだまして、便宜を得やうとでもしてゐるらしいのです。

マスロワ　（泣き聲になつて）あんな卑怯な、自分でした事を私に塗りつけて、大嘘つき！　大嘘つき！

醫　長　默んなさい！　……そんなに騒いぢやいかん。それよりかそこらに落ちてるものを片づけなさい！

助　手　本とうに此の女には驚きました……

醫　長　もういゝから、君もあつちへ行きたまへ。君の部屋へ歸つてるがいゝ。マスロワ、お前はもう此處を出るのだ

ぞ！（大きな眼鏡越しにけはしくマスロワを見る。そしてまだ入口に立ちすくんでゐるネフリュドフを顧みて）かういふ種類の女は、どうも困りますね、公爵。

ネフリュドフ　分かりました、分かりました。ではどうか暫くこのまゝになすつて下さい。

（看守長出て行く）

マスロワ（おづ／＼と寄つて來て）御免なさいッ。私、あの騷ぎでびつくりして了つたのですよ

ネフリュドフ（冷かに）これが辯護士のファナーリンさんといつて、いろ／＼お世話になつてゐる方だ（マスロワ辭儀をする）

ファナーリン　今日はおもしろくない知らせを持つて來たのですよ。控訴は却下されて了ひました。

マスロワ　私、そんな事ぢやないかと思つてゐました。今さらしようがございませんわねッ

ネフリュドフ　併しほかにまだ方法があるから、失望しなくてもいゝ。こんどは直ぐ上訴して特赦を願ふことにするのだ。

ファナーリン　裁判の形式に手落ちがあるのですから、取り消すことの出來る裁判です。氣を落とさないでおいでなさい。

マスロワ（ネフリュドフに）私、もうその事はどうでもいゝと思ひますから、この上あんまり御心配下さらないようにね。どうせもう、斯うなつた私ですから。それよりか、私、お願ひがあるのですよ。私は今の騷ぎで、また前の監房へ入れられるのでせうけれど、あれは決して私がしたのぢやありませんから、どうかそれだけはね、惡しからず思つて下さいな。

ネフリュドフ　あゝ、もうそんな事を言ふ必要は無いよ。お前が何をしようと、それはお前の自由さ。私はどんな事があつても、一旦きまつた以上、お前を救ふといふ決心は變らないから。

マスロワ　あなたまでがそんな事をおつしやつちや、私の立つ瀬がありませんわ。ねえ、惡く思はないで下さいな。あの助手めが私を見くびつて……

ネフリュドフ　もういゝ、もういゝ。

ファナーリン　どうも困つたものですね。

マスロワ　私、どうしたらいゝでせう？（兩手を顏にあてる）

ネフリュドフ　（あはれみの眼で見て、其の手をおろさせ）もうんな事はいゝといふぢやないか？

ファナーリン　ではともかくも、此上訴書類に署名して下さい。

マスロワ　どこへですか。私、手がふるへてゐて書けさうもありませんわ。（襟卷の端で涙を拭ひ、歔り泣きながらテーブルに倚りうつむいて名を書く。辯護士は其の箇處を指定してゐる）

ネフリュドフ　上訴の結果の分かるまでには、手間取るだらうから、お前は多分この十日の護送隊に這入つて、シベリヤへ行かなくちやなるまい。併し特赦されれば、すぐ歸つて來られるし、私もお前の隊について行くから、宿場々々では會へるだらう。一時の事だと思つて辛抱して呉れ。

マスロワ　えゝ、もう、私、その事はちつとも苦にしてゐませんから、どうか御心配下さらないようにね。シベリヤへ行かうがこゝにゐやうが、どうせ私に取つちや同じ事ですから。

ネフリュドフ　途中でいるものを考へて置いて呉れ、持つて行けるだけは買ひとゝのへるから。

マスロワ　何もいるものはありませんわ。

ネフリュドフ　シベリヤで逢ふまでは、これまでまた當分逢へまいから何か私に言つて置くことがあるなら……

マスロワ　何もございません。

ネフリュドフ　では是れで用が濟んだから、私等は歸るよ。

ファナーリン　公爵、私は一足お先へ失禮いたします。

ネフリュドフ　いや、私も御一緒に行きませう。さやうなら。

マスロワ　さやうなら。

（マスロワは離れて立つたまゝ二人に挨拶し、其の出て行く後姿を見送つて、テーブルの前にぐたりとなり、淋しく頬杖をついて考へ込む。フォードシアが這入つて來る）

フォードシア（マスロワの傍へ行き覗き込んで）　監房へ歸るのだつてね？　私よく知つてゐますわ、姉さんが悪いのぢやない、みんなあの助手の奴が悪いのです。あいつが不斷してゐた事を、なぜ姉さんは言つつけてやらなかつたの？

マスロワ　もう何も言はないことにしたのさ。私たちの言ふ事を信じて呉れるものは、世間に一人もありはしないのだから。

フォードシア　でも、公爵だけは信じて下さるわ。

マスロワ　だめなの。誰れも信じちや呉れないの。……それもその筈だわね。私たちのやうになつたものは、實際自分で自分を信じることさへ出來ないのだもの。私ね、一ど、或るお祭りの晩だつけが、そんな身の上がつく／＼いやになつて、同じ家に居たピアノ彈きの女に其の話をすると、其の女もひどく自分の身をはかなんで、二人一緒にそつと家を出る相談を纏めたのさ。そして支度をしてゐると、そこへ男どもが大浮かれで上つて來て、ヴィオリンを彈く男は曲彈を始めるし燕尾服を着た大男と騎武者の小男とは私とピアノ彈きの女をつかまへて踊り出すしさ。とう／＼夜どほし踊つたり唄つたりして、あくる日からはまた元の通りさ。逃げ出す相談なんか何處かへ行つちやつた。何が何だか分かつたものぢやないのよ。

フォードシア　公爵は何か用があつていらつしやつたの？

マスロワ　控訴がだめになつて、私はこの月の十日にシベリヤへ行くのだとさ。

フョードシア　まあ！　何うしたのでせうね？　いよ〳〵さうと極まつたら、私も姉さんと一緒に行きたいわ。

マスロワ　そんな事が出來るかどうか分かりやしないよ。私ね、お前さんにがたみか上げだいのよ（棚の隅から小函を取り出す）私が是非シベリヤへ持つて行かうと思ふのは此の小函一つきり。この中にはそら（蓋をあけて品物を取り出す）あの寫眞と、それから昔つかつてゐた小鏡と、それから此の指輪と……此の指輪もあの方に始めて接吻された時の記念よ。これをお前さんに上げるから取つて置いてちやうだい。

フョードシア　まあ、どうもありがたう。

マスロワ　それから此の赤い花のリボン！　これを差して、あの晩教會へ行つたつけ。こんな風にさしたか知ら（鏡に向ひ昔のやうな身づくろひをして見る）こゝいらが襟飾りで一杯になつてゐて……（鏡の中の姿をしばらく見つめてゐて、がつかりしたやうに鏡を投げ出し）あゝ、もう、昔のカチューシャぢやなくなつた！

フョードシア　私、こんどこそ、あの歌を歌つてあげるわ。（低い聲で）

カチューシャかはいや
別れのつらさ
せめて淡雪とけぬ間と
神にねがひをかけましよか

マスロワ　（フョードシアと同音に）

カチューシャかはいや

別れのつらさ
せめて淡雪とけぬ間と
神にねがひをかけましよか
（此の歌をくり返すあひだに幕がおりる）

（幕）

第五幕

シベリヤ一寒村にある驛所の構内。奥は見わたす限り一面の雪の原で、谷の兩側に村のつゞいてゐる遠見。雪のつもつた並樹の向うが道になつて其の道を上手から下手へ、下手から前面へと出て來られる。下手に小屋あり、戸を明け放してある、其の軒下に腰かけ、數個のランプなど。また上手には岩に寄せてテントが張つてある、時刻は夕ぐれで、遙かの空には入日の影が赤く雪に反射してゐる。

奥の道からマスロワ等一隊の囚徒が護送の兵數人に導かれて出て來る。普通犯人はマントを着、國事犯は學生服でゐる。村の男女が、食料品など賣りに來る。囚徒は護送兵の指揮で小屋やテンドの中に這入り、焚火などはじめる。

女商人　(他の二三人と下手奥から籃など提げて出て來る)まだ一人も着かないね。この宿へは二三十人も來るか知ら?

男商人一　こんどは全體で七百人からの囚徒だといふぜ。今にシベリヤは罪人で一杯になるだらうよ。

男商人二　今夜は少しはいゝ商賣があるかなあ。

女商人　今夜は復活祭だから、囚人だつて少しは御馳走をするだらうよ。(上手奥を見て)さあ着いた〳〵。

男商人一　十四人は居るやうだ。(みな〳〵道の方へ出て見る。警護兵を先に立てた囚人の一隊、並樹の向ふを通つて出て來る)

女商人乙　さあ〳〵、魚はいかゞですか?　善い魚ですよ。安くして置きますよ。五錢に負けときますよ。

女商人甲　卵はいりませんか?　卵はいりませんか?　新しい卵ですよ、產みたての卵ですよ。

男商人　肉菓子に焼豚、素麺に羊の肝、おいしいものばかりでござい。おいしくて安いものばかりでござい。

（囚人等がやと〳〵寄り来たり、商人等と話す）

護送の士官　こら〳〵。こゝへ来ちやいかん。あつちへ行つて居れ、あつちへ行つて居れ。それから囚徒はそのテントと小屋に分かれて、いつものやうに夕飯の仕度をするのだ。

（病人を助けなどして、みな〳〵小屋とテントの中へ這入つたり、戸外に腰をおろしたりする。小屋とテントの中には火が燃え上がる。士官兵士とも去る）

三男囚　（テントの方で）おれはもう駄目だ！　二十時間もあるきつゞけたからもう駄目だ。

二女囚　まあ四五時間はこゝで休めるんだから、ゆつくり寝て休むがいゝよ、お爺さん。

若女囚　（獨語のやうに）虱婆さん！　お前さんも此の間に虱でも取つといてお呉れよ。私たちが助かるから。

マリー　まあ〳〵、皆さん、静かになすつて下さいよ。（小屋の方へ行つて病囚に）あなた寒かありませんか？　　蒲團にしつかりとくるまつてお在でなさいよ。今夜は復活祭ですね？

病　囚　（屋内で）みなさんが御親切にして下すつて、實にありがたいです。今夜は復活祭ですね。はゝ、世間は復活祭でも、私は死んで行くのです（咳をする）

若女囚　あの人、事によつたら今夜が持てないかも知れない。

老男囚　かはいさうだな。

一男囚　（奥の方で）此の柱にナイフで字が彫つてあるよ。えゝと―余は千八百八十年八月十七日刑事犯の一行と共に此の所を通過せり。國事犯人は余一人なり。一人の友人はカサ・の瘋癲病院にて自殺せり。余は主義のために倒るゝものなり」

マリア　名が書いてありますか？

一男囚　ペルキンとしてあります。

マリア　あゝ、其の人の事なら聞いたことがありますよ。

病　囚　私なんか、これくらゐの病氣でぐづ〳〵言つちやならないんですね。

マスロワ　あゝ、やつと寢かしつけた（小屋で言ひながら舞臺の中程へ出て來る）

マリア　マスロワさん、どうしたのですか？

マスロワ　あの子の父親はもうよつほどの年ですのよ。母親がチブスで死んでから、こゝへ來るまで十日間といふものあの子を抱きとほして來たのですつて。それをね、意地のわるい護送兵が急に手錠をはめろといつたものだから、子供が抱けないと言つたら、口返答をしたといつて、頰つぺたを血の出るまで撲つたのです。そして泣きたてる子供をむりやり引つたくるのですよ。私、あんまりかはいさうだつたから、すかして引きとつてやりました。

シモンソン　（奥手から出て來る）子供は靜まりましたね

マスロワ　えゝ、やつと靜まりました。私の頰ぺたを吸つて眠つて了ひましたよ。

シモンソン　さあ、みんなもう、大低にして中へ這入つたら何うだね？　食事の仕度をした方がいゝだらうよ。

（マスロワ、マリア、シモンソンの外皆去る）

マリア　マスロワさん、私はあなたにあやまらなくちやなりませんよ。實はね、あなたが斯うして特別に我々國事犯囚の方へ御一緒におなんなすつたのが不平でしたのよ。私たちは無論平等主義ですけれど、何だかあなたと御一緒といふ事が私たちの汚れのやうな氣がして、あんまり打ち解けられなかつたのですよ。それが此のごろから段々、あなたの御經歷に

似ず清い立派なお心だと知れて來て、私、實は恥ぢ入つてゐました。シモンソンさんが初めからあなたを大事になすつたのが本當だと氣がつきました、ですからね、どうか是れからは何もかも打ち明けて、お互に扶け合つて、このかはいさうな囚徒のために盡くしてやりませうね。私の了見の狹かつたのを勘辨して頂戴な。

マスロワ　マリアさん、何をおつしやるかと思つたら、そんなつまらない事を勘辨も何もありはしませんわ。私こそ、こちらへ御一緒になつてから、まるで別の世界へでも來たやうで今まで十何年ちつとも知らなかつた貴い仕事をしてゐる氣がしますの。これなら私、なまじいかあちらにゐるよりも、罪人になつてこゝへ流された方がよつぽどありがたかつたと思ひます。みなさんの方が世間の人よりもずつと立派な方ですわ。ですからどうか此のさきもみんな御一緒でいろ〳〵の事を教へて頂きたいのですよ。

シモンソン　もう四年たつと自由になりますから、それまで辛抱して下さい。自由になつたら、一緒にうんと立派な事をして、あれ等のために盡くしてやりませう。我々がこれまで嘗めて來た辛苦艱難の結果を、生かして世の中へ應用しなくちやいけません。あなたのその美しい顏にも、隨分長い辛苦の痕が見えてゐます。今まではつらかつたでせうが、こゝまで來れば、此のさきもう落ちつこはありません。こゝで新しい生涯が開けるのです。さう思ふと私は愉快でたまりません。

マスロワ　私も此のごろ何だかそんな風に思はれて來ました。

シモンソン　でね、私は——

（この時背後の道を通つてネフリュードフ、一人の士官に伴はれ急ぎ足に這入つて來る。）

マスロワ　（振りかへり見て、ネフリュードフと顏を見合はせ）あ！　ネフリュードフさまが……（シモンソンの後へ隱れるやうに

する）

シモンソン　さあ、また二人で病人の着物を乾かしてやらう。いらつしやい。

（シモンソン、マスロワ小屋の中へ這入る）

マリア　公爵、しばらくお目にかゝりません。私もう國へ御歸り遊ばしたかと思つてゐました。

ネフリュドフ　いや、トムスクで國からの通信を待つてゐたものですから、四五日遲れました。別に變つた事もありませんでしたか？

マリア　はい、變つた事もございません。あのシモンソンさんが、しきりと公爵にお目にかゝりたいといつてゐました。

ネフリュドフ　シモンソン君が？　何でせう？

マリア　マスロワさんに關した事ぢやございませんか？　シモンソンさんは、初めからあの方を親身のやうにして大事にしてあげてゐますし、いろ〳〵また考へもあるのでございませう。

ネフリュドフ　シモンソン君といふのは、實際立派な人物ですね。

マリア　はあ。あゝして、一度思ひ立つた事は實行しなくちや置かないといふ人ですから、どうしてもこんな事になります。御承知でもございませうが、菜食論者だものですから、着物まで一切動物の毛や皮は用ひないで、護謨製のものばかり着てゐます。あの人だけには、刑事犯人までが懷いてゐます。それにマスロワさんも實に立派な心がけの婦人になられましたよ。公爵のお骨折はむだぢやございませんでした。

士　官　さあ、もういゝから引つ込みなさい。（マリアを去らせる）公爵、乾いてゐてお寒うございますな。火がございますか（ネフリュドフ卷煙草を與へる）いや、御馳走さま。あの、閣下がお世話をしていらつしやいます、マスロワといふ婦人

は、全く感心な婦人でございますな。

ネフリュドフ　（うるさいといふ風で）さうですかね？　さうでせう〳〵。

士　官　（腰の水筒を取り出し）コニャック酒が少しばかりございますが、いかゞですか、公爵？　寒さ凌ぎに一口召し上りませんか？

ネフリュドフ　いりません〳〵（逃げ廻るやうにして）私は酒を斷つてゐますから。

士　官　ですか。ぢや私がちよつと失禮して（一口飲んでもとへ收める）併しこの邊鄙なシベリアで高貴のお方と御一緒になるといふのは、實に名譽ですな。いや、全くあのマスロワといふ女は……

ネフリュドフ　さうです〳〵。どうか君、その女に至急會ひたいのですがねえ。

士　官　承知しました。どうぞこちらへ入らつしやい（小屋の入口を覗くとマスロワとシモンソンが火の傍で病人の外套を乾かしてゐる。ネフリュドフをそこへ招いて置いて、士官は禮をして去る）

ネフリュドフ　（不快げに入口に立留まり）カチューシャ私はお前に用があつて來たのだが……

マスロワ　（冷淡に）あら、さうですか？　立たうとするのをシモンソンとゞめて）

シモンソン　それより先に、私が一つ公爵にお話ししたい事があるから、ちよつと待つて下さい。（外へ出て）公爵、私は是非あなたに聞いて頂きたい事があるのですが、お差支ありますまいか？

ネフリュドフ　いゝですとも、話して下さい。

シモンソン　それはカチューシャの事ですがね、あなたとカチューシャとの關係はよく承知してゐますから、一應御相談をするのが義務だと思ひまして……

ネフリュドフ　はあ、それは伺ひませう。

シモンソン　その御相談と申しますのはね、私とカチューシャとの關係を一應耳に入れて置きたいと思ふのです。

ネフリュドフ　（段々心配げに）とおつしやるのは？

シモンソン　實は私があれと結婚したいのです。

ネフリュドフ　（驚いてぢつと見つめ）ふむ！　それはカチューシャも同意ですか？

シモンソン　まだカチューシャの意志は聞いて見ませんが、これから打ち明けて聞いて見ようと思ふのです。

ネフリュドフ　（冷かに）それなら、私の關する事ではありますまい。カチューシャの心一つできまる事です。

シモンソン　それはさうですが、併し、あなたの許しが無ければ當人だつて、自由な返事は出來ますまい。

ネフリュドフ　どうして？

シモンソン　つまりあなたとの關係がはつきりしない内は、どちらへ行くことも出來ないのです。

ネフリュドフ　併しその問題はもうきまつてゐます。私は私の義務と信ずる事を行つて、カチューシャの負擔を輕くしてやれば濟むので、そのためにあれの自由を束縛する必要はありません。

シモンソン　それはさうでせうが、併しあれは、あなたのお世話になることを望まないやうです。これだけは間違なからうと思ひます。

ネフリュドフ　別に世話をするといふ譯ぢやありません。

シモンソン　でせうが、カチューシャは、あなたの折角の御好意も飽くまで受けない決心でをります。

ネフリュドフ　それなら、何も改めて御相談なさる必要はないぢやありませんか？

シモンソン　所がカチューシャは、あれの思つてる通りにあなたもなつて頂きたいと望んでゐるのです。

ネフリュドフ　といふのは、私が爲なくちやならないと信じてゐる事をやめて吳れといふのですか？　それなら無理といふものです。私は私の義務としてするのですから、先方の希望でやめるといふ譯には行きません。併し君、お互にこんなつまらない話はもうやめやうぢやありませんか？

シモンソン　いや、大事な事ですから、どうかよく聞いて下さい。それでは、あなたは、カチューシャの一身に關しては、手をお引き下さるのですね？

ネフリュドフ　それはカチューシャがいやだといふのならしかたもありません。

シモンソン　ではあれにさう言ひませう。

ネフリュドフ　私があれに話さなくちやならない事があるのです。

シモンソン　公爵、私は決してカチューシャの色に溺れて斯んな事をいふのではありません。誤解して下さらないやうに。私はたゞ彼れを苦勞した立派な婦人として愛するのですから、どうかして、あれとこれから半世の苦勞を分かちたいと思ふのです、あれの行くところは、何處へでもついて行つて、あれの重荷を輕くしてやりたいと思ふのです。

ネフリュドフ　カチューシャが君のやうな立派な保護者を得たのはあれの幸福です。

シモンソン　ではどうか、其の幸福のために、私とあれとが一緒になることを御承認下さい。

ネフリュドフ　私は何とも御挨拶していゝか分からないが、とにかくカチューシャに來るやうに言つて下さい。直接話して見たいと思ひますから。

シモンソン　（うなづいて入口の所へ行き）カチューシャ！　カチューシャ！　（呼びながら中へ這入る）

（マスロワ出で來たる）

マスロワ　（おづ／＼と出て來て、冷かに）何か御用ですか？

ネフリュドフ　（カチューシャの手を取つて）カチューシャ、今日はいろ／＼話したい事があるよ。だが何よりも是れが一番さきだ（ポケットから書類を取り出し）今度いよ／＼お前の上訴が聞き届けられたよ。今日この書類がファナーリン君から届いた。斯う書いてある。「請願局長は皇帝陛下の思召によりカチューシャ、マスロワが受けたる徒刑二十年の宣告を破棄し、シベリア附近の地方に於いて一年間の流刑に處す」ね、これでつまり特赦と同じ事になるのだ。

マスロワ　ぢや、こゝまで來なくてもよかつたのですかねえ！

ネフリュドフ　とう／＼私たちの望みが之れで半分成就した譯だ。お前は特赦になつた。

マスロワ　私ひとり他へ行かなくちやならないのでせうか？

ネフリュドフ　それはお前の自由だが、その前にお前に聞かなくちやならない事がある。私は今シモンソン君からお前の身の上について相談を受けたよ。

マスロワ　（うつむいて）何んな相談？

ネフリュドフ　シモンソン君がお前と一緒になりたいといふのだ。（言つて思ひに沈む、しばらく間を置いて）お前が承知さへすればいゝのだから、それにはまつさきに私とお前との關係をはつきりさせて呉れといふのだ

マスロワ　あなたと私の關係といひますと？

ネフリュドフ　私はこれまでも言つた通り、お前の體を救つた上でお前と結婚しようと思つてゐた。そしてお前も一時はあんなにして怒つたが、併し段々私の心持を解して呉れて、二人の結婚といふことが全くの空想でもないやうに見えて來た。

そこへシモンソン君が這入つて來たのだから、お前は今、私とシモンソン君と、二人に一人を擇ばなくちやならない地位に立つてゐる。つまり私と結婚して呉れるか呉れないかといふ問題を決めればいゝのだ。お前はどういふ氣でゐるか？シモンソン君とも親しくしてゐるやうだから、どうか本當の決心を聞かして呉れ。

マスロワ　（途方にくれた様子でしばらく默つてゐて）私の決心てそれはもう、疾くに決まつてゐるぢやありませんか？

ネフリュドフ　何う決まつてゐるのだ？

マスロワ　私のやうなものが、今さら人に妻になれつこはありません。私は一生獨りで暮します。

ネフリュドフ　カチューシヤ、それはお前の心得違だ。何でお前が人の妻になれない譯があらう。

マスロワ　いゝえ、こんな體で結婚するのは、其の人の顏をつぶすやうなものです。愛してゐる人の顏をつぶしてすむものぢやありません。

ネフリュドフ　ではお前はシモンソン君を愛してゐるか？

マスロワ　……はい、愛してゐます。

ネフリュドフ　あゝ、やつぱりさうだつたか？お前もシモンソン君を愛してゐたのか？……それでは私をどう思つてゐて呉れるか？　私はお前に取つちや何ういふ立場にゐるのかい？

マスロワ　あなたと御一緒になることも無論お斷りいたします。

ネフリュドフ　シモンソン君は、お前があれと結婚することを望んでゐると言つたよ。

マスロワ　さうですか？　（沈默の後）さうですか。本當は私、あの人と一緒になりたいのです。あなたには長くお世話になりましたけれど、どうぞ惡しからず思つて下さいまし。シモンソンがそんなに言つて呉れますなら、私、あの人と結婚

した方がいゝと思ひますから。

ネフリュドフ　それはお前本當かい？　本當に考へてした決心かい？　無論シモンソン君も立派な人物だから、それと結婚するのはお前の幸福かも知れないが、私もこゝまでついて來たのだから、お前の最後の言葉が聞きたいよ。

マスロワ　私、シモンソンと一緒になります。どうぞそれを許して下さい。

（沈　默）

ネフリュドフ　きつと決心したのか？

マスロワ　はい。決心したのですから、ね、どうか堪忍して下さい。

ネフリュドフ　ふむ、思ひもかけない事だつたね……ぢや、どうも仕方はない、さうするがいゝ。私の長い務めはこゝでお仕舞になるのだね？　あゝ、長い旅だつた！　それでは私はもうこゝに用の無い身だから、今夜にもすぐ跡へ引き返さう。お前の幸福を祈つて置くよ。カチューシヤ。

マスロワ　どうも濟みません、

ネフリュドフ　お前の將來はシモンソン君に賴むから、私の仕殘した務めを果たして貰ひたい。

マスロワ　あの人と一緒に、あなたのお志を守つて行きます。

ネフリュドフ　どうかさうして呉れ。では、之れで永いお別れになるのだね？

マスロワ　えゝ、永いお別れに。

（兩手を取る）

ネフリュドフ　そしてこゝで、私の義務も、お前の愛も、一緒に終つて了つたのだ。さやうなら、カチューシヤ（兩手を取つ

たまゝ、ぢつと見る)

マスロワ　(突然男の胸にすがり)あゝ！　私、このまゝぢや別かれられません、このまゝぢや別かれられません。どうして私の愛がこのまゝ消て了ひませう？　私はまだあなたを愛してゐます、あなたを愛してゐます。愛してゐればこそあなたと結婚することをお斷りしたのです。

ネフリュドフ　カチューシャ！　カチューシャ！

マスロワ　あなたが始めて監獄へいらつしやつた時は、たゞ譯もなく憎くて、殺して了ひたい程に思つたのですが、今ぢやもう、そんな心は無くなつて、昔よりも、もつと大切なあなたになりました。酒も煙草も斷つて、あなたのおつしやるやうに、段々昔のカチューシャに戻りかけて來たのも、みんな其のためですよ。

ネフリュドフ　カチューシャ！　カチューシャ！

マリロワ　それで時々は、ひよつとかすると、あなたのお言葉通り夫婦になつて、樂しい日が送れるものかと、己惚れてゐたことがありましたが、それは私の料見ちがひでした。一度汚れた身は、傍がそんな事をさせません。あの病院の事があつてから、私はふつ／＼己惚れの夢なんか見ないことにしたのですよ。

ネフリュドフ　あれは私が至らなかつたからだ、どうか許して呉れ。

マスロワ　許すの、許さないのといふお話ぢやございません。私に取つちや、それがみんな悟りの道になつたのですから、今ぢや誰も怨んぢやゐませんの。

ネフリュドフ　では、今でもお前は私を愛して呉れるか。

マスロワ　愛してゐます。深く／＼愛してゐ　す、ですから、私、どうしても此の體であなたと御一緒になることが出來な

いのですよ。私はどんなつらい思ひしても、あなたのお身に累ひかけちやならない。

ネフリュドフ　併しそれは私が承知の上だから、救はれ、體に累ひも何もある譯はないぢやないか？

マスロワ　いえ、いえ、いくらあなたは御承知でも、それをさせては私がすみません。これだけは何んな事があつても思ひ切らうと決心したのですから、どうぞ其のまゝにして置いて下さいな。途々も、お目にかゝつて親しくすればするほど執着が殘ると思つて、なるだけよそ／＼しくして來たのですよ。

ネフリュドフ　お前の志は實にうれしいが、そんなにしてシモンソン君と結婚して、これから後幸福に暮せるだらうか？

マスロワ　それはもう心配しないで下さい。あの人はあんな立派な人ですから、私の心はよく呑み込んでゐて、少しもそれを氣にかけませんし、私だつてこれから、眞心をつくしてあの人の仕事を助けて行きます。その内には自然と幸福な日が來るだらうと思ひますの。

ネフリュドフ　では是れでいよ／＼私の用は無くなるのだね？

マスロワ　隨分長いあひた御親切を受けましたわね。

ネフリュドフ　お前とシモンソン君とは、やつぱり長くシベリアに殘るつもりかい。

マスロワ　はあ、どうせ四五年はゐなくちやならないのですから、出來るだけ長くシベリアに居て、不幸な囚徒のために盡くしてやりたいと思ひます。あなたは？

ネフリュドフ　私も、一度モスクワへ歸つてから、またすぐ出直して北の方へ行き、そこで一生をあはれな人々のために捧げたいと思ふ。萬事の手筈はモスクワで定めよう。

マスロワ　モスクワからこゝまで何のくらゐありませうね？

ネフリュドフ　三千里以上だらうよ。

マスロワ　隨分遠く來ましたわね。

ネフリュドフ　あゝ、世界の果までもついて來ようと約束したが！

マスロワ　それから今夜は復活祭でしたね？　あの時から十年のあひだに、隨分變つた處で變つた復活祭をしますこと！

ネフリュドフ　十年のあひだにねえ！　そして今夜が私たち二人の永劫のお別れになるのだ。そして別れ／＼に新しい生涯に這入るのだ……私は是をお前に記念として上げよう。同宿したイギリスの紳士が呉れたバイブルだがね、ゆうべ私が偶然明けて見たところにしるしがつけてある。馬太傳の十八章だ。ちよつと讀んで御覽。

マスロワ　（書物を取つて燈火にすかして）「其のとき、多くの弟子はイエスに來たつて曰はく、天國に於いて最も大いなるものは誰れぞや？　イエス、幼子を呼び、彼等の中に置きて曰はく、我まことに爾曹に告げん、爾曹心を改めて幼子の如くならずんば、天國に行くことを得ず、凡そ此の幼子の如く自ら謙下るものは、天國に於いて最も大いなるものなり。

ネフリュドフ　さう！　ぢや、これでお別れにしよう。もうすぐ十二時だ。さやうなら（言ひながら、カチューシャを抱き昔のやうに脣に接吻しようとするのを、カチューシャ額で受ける、長い接吻）

（この時遠くの寺で復活祭の鐘の音か聞こえる。ネフリュドフ驚いたやうに「キリストは蘇りたまへり」と言つて離れる）

ネフリュドフ　ぢや御機嫌よう、カチューシャ！　（言つてすた／＼と逃げるやうに並樹向うの道へ出る）

マスロワ　（見送つて）さやうなら、あなたも御機嫌よう！

（ちよつと間を置いて鐘また鳴る、小屋及テントの中から「キリストは蘇りたまへり」といふ聲が幾つか聞こえる。）

マスロワ　淋しくこちらへ向き直つて、」「キリストは蘇りたまへ」（沈んで言ひながら次第に頭を垂れる。）

……（幕）……

クレオパトラ

（シエークスピア原作）

（アントニーとクレオパトラ）

此の脚本はシエークスピアの『アントニーとクレオパトラ』を私が改作したのである。改作の目的は、原作の散漫な點を緊縮しやうとするにあつたが、結果は單なる緊縮のみでなく、場合によつては原作にない人名や對話を加へたり、副人物の性格を變更したりするまでになつた。從つて要點はたゞ原作の情調と意義解釋とを存すればいゝといふ程度に止まつて、全くの自由改作となつた。

槪してシエークスピアの戲曲には、天才の着想が、砂中に散亂する寶石のやうに隨所に閃發してゐると共に、全體の構成を一の有機體として見るとき、そこに三百年といふ爭ひ難い年代のたるみがある。到底原作をそのまゝ現代の舞臺に直演して十分の效果を得ることは望まれない。之れを改作してよい理由もそこから生じて來る。殊に其の遊戲性が多過ぎて不眞面目に見えることや、脚色の細工的であることや甚しく多辯饒舌なことや、年月及場所の連結が餘りに放肆で活動寫眞式になることやはどうしても現代劇の傾向と相容れないものである。此の點でシエークスピアはちやうど我が近松竹田等の舊劇と似たものである。

『アントニーとクレオパトラ』は特に其の結構の上でエジプトとローマとの二つに分れた出來事が既に劇の集中性を損する許りでなく、其の一部々々の目まぐるしいまでな變轉がまた作の生命を弱くする。餘りに見世物的活動寫眞的である。そのため此の改作では舞臺をエジプト一方に限り、事件をクレオパトラのがはから見て統一した。

クレオパトラの性格は、史上では要するに一個の偉大なジプシーである。愛憎、嫉妬、復讐の感情が極端に强烈で、妖詐窮まりない性を持つてゐる。『サロメ』『カルメン』『ヘツダ・カブラー』等に共通した一つのタイプである。けれどもクレオパトラの生涯には一の問題が潛んでゐる。それは彼れが晩年に於いて、アントニーに對する愛のために救はれて、一代の妖詐の底に埋沒してゐた靈性に馴致せられはしなかつたかといふ事である。之れを然りと見ると否と見るとで、クレオパトラの傳記は相

反した二つの解釋を容れてゐる。シエークスピアはすなはち此の、然りと見る解釋を取つてクレオパトラの一生を愛の一生としたのである。クレオパトラが自分の死を詐り告げさせ、アントニーをして自殺を急がしむるに至つたのは、アントニーをシーザーに見かへんとする動機から來たものであるとすれば、彼れの一代は妖詐で一貫してゐる。それをシエークスピアは中途で愛のために緩和せられたものと解釋した。即ちクレオパトラはたゞアントニーの怒りを和げんが爲に一時の詐略を用ひたそれが過まつてアントニーの死を早めたのである從つてクレオパトラが最後にアントニーの愛に死ぬるといふ告白が眞實になつて來る。現代の作者が描いたら、或は前の方のクレオパトラに興味を持つたかも知れない。けれどもシエークスピアは後の解釋に從つて美化せられたクレオパトラに興味を持つたのである『アントニーとクレオパトラ』は要するに愛の悲劇である併し此の劇には其の上にまだ永久な二大解釋が矛盾の人生觀として殘つてゐる。ヨーロツパの批評家も、一方には之れを以て「凡ては愛のために失はれたり」(All lost for love) と詠嘆するものと、一方には凡ては肉欲のために失はれたり」(All lost for lust)と批難するものとある。そして此の二つの觀方は、人生のあらゆる方面に通ずる審美的と道徳的との矛盾價値である。アントニー、クレオパトラ等の悲劇も、また此の悲しむべき矛盾命題を提出するために生じた人生の一現象である。

此の作はシエークスピアの劇中で最も近世的な材料を取り扱つたものゝ一である。そして『シーザー』が大理石の彫刻のやうな味を持つてゐるのに比してこの作はチチアノなどの燦爛豊潤な油彩畫のやうな味のあるものだとせられてゐる。少なくとも題材に於いてさうである。

此の劇の初めて出版せられたのは千六百二十三年であるが、作られたのは千六百七年頃すなはちシエークスピアが四十四歳の頃であらうといふ。史傳は專らプルータルクに據つたものらしい。

尚此の改作劇『クレオパトラ』は大正三年十月廿六日から六日間帝國劇場で上演する藝術座劇のために筆を執つたものである。

大正三年十月

登場人物

クレオパトラ
チャーミアン（侍女）
ライナ（同上）
アイラス（同上）
侍女等

アントニー
シーザー
イノバーバス（アントニーの將）
フヰロー（同上）
エロス（アントニーの臣）
カニディアス（アントニーの將）
アレキザス（クレオパトラの臣）
マーディアン（クレオパトラの宦臣）
使者（アントニーより）

サイレアス　（シーザーよりの使者）
使者二人　（ローマより）
卜　者
侍者等
將卒等
奴隷等

第一幕

エジプト國の首府アレキサンドリアなる女王クレオパトラの宮殿内、庭向きの一室にて、西暦紀元前三十年七月初旬の夜の事。

幕あくとアントニーの侍臣エロスはナイル河に月のさした遠景を見ながら室の一隅で琴を弾じてゐる。しばらくして

エロス　（琴に合せて唄ふ）

ナイルの岸に咲く百合の
花より赤きエジプトの
王と妃の戀ものがたり。

こよひは月も冴えたれど
心に秋の露落ちて

故郷なつかしローマの空よ。

（フォロー、イノバーバス甲冑を着て奥から話しながら出て來る）

フォロー　アントニー大將のこの頃のだらけ方と言つたら、實に憤慨に堪へんではありませんか？　あれ程の勇士の魂が、どうした機で、あんな態になつたのでせう？　ローマの國の大黑柱が女一人のために蕩けて了つた！

イノバーバス　さう思うと、クレオパトラ女王はえらいね。一番に大シーザーがあの瞳の深みへはまつて了つて、それから今度はアントニー將軍があの眼の縁へ吸ひ付けられて了つた。あの美しい頬の肉が一分かたこけてるても、あの誘ひを持つた唇の色が一割がた褪せてるても、其れがために天下の形勢は變つたかも知れない。ローマの英雄もエジプトに來れば皆女王の奴隸に過ぎない。世界を支配するローマの歴史が女王の化粧刷毛で赤にでも青にでも繪どられて了ふのだ。ねえエロス君、アントニー閣下が此處でふやけてるられるのも無理はないと思ひませんか？

エロス　無理はありません。あの、情に脆い大將が美しい女王の前に跪かれたのに少しも不思議はありません。

フォロー　君は實にけしからん事を云ふね、大將のあの態が何で情に脆いのだ？　何で不思議がないのだ？　ローマの國に對する務めなどは忘れて了ひ、毎日毎晩たゞもう女王の機嫌ばかり取つてゐる。幾ら女王が美しくても高が女一人ではないか？　それをアントニー將軍が魂まで其前に投げ出すと云ふのは何と云ふ淺ましい事だらう。最初は將軍の政略だと許り思つてゐたが今になつて見ると私の買ひかぶりだつた。一身一國を女一人に取替へて惜いとも思はれぬ大將軍の料簡には、あゝ、天魔がみいつたのだ！　天魔がみいつたのだ！

エロス　天魔と云へば天魔かも知れない。今アントニー將軍が歩んでゐられる道は、人の力で何うする事も出來ない。否應なしに引張られて行くのだ。あれが將軍の運命なのだ。運命の力に引ずられるやうになつた人間は、一方から見れや弱

い、可哀さうなものだが、一方には其の運命の力が自分の身體に宿つてゐるのだから強い人間だ。私はアントニー將軍を今さら憎いとも悪いとも思はない。

フヰロー　其の運命の力が何だと云へばクレオパトラと云ふ女一人ぢやないか。女一人に引張られて行く將軍が何んで強い人間かい？

エロス　君は女一人々々々と云ふけれども、それが女であらうが男であらうが、一人であらうが千萬人であらうが、其處に上下は無い筈だ。たつた一本の百合の花を咲かす爲に、庭中の草木を皆切つてもいゝ場合がある。若しアントニー將軍が、ローマーよりも一人のクレオパトラ女王の方が大事だと云はれたら其れを吾々が兎や斯う云ふ事は出來ない。相手が女王であらうが、ローマであらうが、將軍の心に殘る執着は強い方が強いのだ。其の強い執着が將軍に取つては世界の凡ての寶よりも貴いのだ。

フヰロー　然しエロス君、さうしてアントニー將軍が取られる方針は、つまり其の身を亡ぼす事になるのだ。それがもう御當人には解らなくなつたのだ。それを傍で見てゐる我々が諫めないと云ふのは不忠だとは思はないか？

イノバーバス　駄目の皮だよ、フヰロー君。斯うなつちやもう諫める餘地はない。助かるものなら一度行き詰まつてから自分で懲りて助かるさ。見てるのが不忠だと思つたら自分で身を退いて見ないやうにすることだ。此の道許りは昔から人の諫めで踏み止まつた例はない。

エロス　その恐ろしい執着の力が、今でもアントニー將軍の命でも強みでもあるのです。何うかして過ちの無いやうにしたいものだ。

フヰロー　若しアントニー大將が此のまゝ墮落して行かれるやうなら、其の最後の恥辱を救ふために私は大將と刺し違へ……

死んでもいゝ。

エロス　私だつて大將のために死ぬる位は何でも無いが、併し此處で短慮な事はしたくない。此の後は必ず戰だと思ふから、フォロー君の樣な勇士は何うか其の時まで自重して呉れたまへ。勇士の死場はいくらでもある。

フォロー　君も其う思ふか？　アントニー將軍のために戰はなくてはならない時が必ず來るぞ、其時生恥をかゝせないやうに、いゝかい、屹度誓つたよ。

エロス　將軍に捧げる命だ、時さへ來ればちつとも惜くはない。

フォロー　ローマを出る時は、まさか此のエジプトで斯んな事にならうとは思はなかつたなあ。

エロス　あゝ、ローマ！　ローマ！　ローマがなつかしい。

フォロー　ねえ君、ローマ人の名譽のためにエジプトで死ぬるのだ！

（二人で相擁して泣く）

イノバーバス　君がたはまだ料簡が若いよ。世の中はさう思ひ詰めてはいかん。圓轉自在に、此處で行けなければ彼處へ行くさ。力の及ぶ限りを盡くしてそれで行かない時にはあきらめて、また其の次の事に移ればいゝ。さうして出來るだけ澤山の仕事をして死ぬるのが人間の務めと云ふものだ。さあフォロー君、行かうよ。

（フォローを促し立てゝ行く。エロスまた琴を彈ずる）

エロス　こよひは月も冴えたれど

心に秋の露落ちて

故郷なつかしローマの空よ

（この時クレオパトラの侍女アイラス奥から出て來る）

アイラス　あなた、其んなにローマが戀しいなら、早くお歸んなさいな。待つてる方があるでせうよ。お氣の毒さま。

エロス　（琴を置いて、アイラスの手に接吻し）待つてるものがあるのさ、ローマ國と云ふ戀人が待つてゐる。今にお前に引き合はせるから、會つて仲よくしてお呉れ。

アイラス　ぢや、あなたは本當にローマへお歸りのおつもり？　あれ程お誓ひなすつたこのエジプトを、矢張り見すてるつもりでゐらつしやるのね。私に嘘をおつしやつたのね？

エロス　決して嘘は言ひません、誓つた事を反古にしていゝものかね。ナイル河の水に月いさす限り、お前が此の地に居る限り、エジプトの國は決して見棄てないが、たゞローマの武士としてアントニー樣に捧げた此の身は、時と場合で果たさなくてはならない務めがある。其の務めのためにはいつ何時ローマへ歸るかも知れない。けれどもエジプトは決して見棄てない、私の思ひ一つでも此の國とローマとを一つにして、春夏はローマの都に、秋冬は此のアレキサンドリアに二人樂しく過ごす日を必ず待つてゐて呉れ。

アイラス　私もさうなれば嬉しいと思ひますけれど、此の頃何だか心細い事許りで、斯うして此のまゝ女王樣のお側にゐるのが不安心でなりません。

エロス　何うしてさ？

アイラス　何時女王樣のお怒りに觸れて此の身を滅ぼすやうな事になりはすまいかとそれが氣がゝりでなりません。此の身は何うなつても厭ひませんけれど、その爲め貴方とお別れするのが辛ら御座います。

エロス　別にクレオパトラ樣を怒らせた覺えは無いぢやないか？

アイロス　貴方との仲がもう知れてゐるので御座いますから、何時女王樣のお憎しみが私等の上にかゝつて來るか解りません。

エロス　女王樣だつて今アントニー樣と戀のさ中にゐられるのぢやないか。あの譯知りの女王樣が何で私達の仲を咎め立てなさらう？　そんな事はお前の思ひ過ごしと云ふものだ。心配するには及ばないよ。

アイリス　いゝえ、女王樣のお氣性はさうぢや御座いません。御自分より外に美しい男と戀をする者があれば、決して安穩にはお置き遊ばしませんし、美しいと云はれる女が御自分より外にあれば、其女は長くお側にはゐられません。野中の一本柏のやうに、御自分で大きく美しく茂つてゐらつしやる外には、傍に大木の立つてゐるのをお嫌ひなさいます。

エロス　それはさうかも知れないが、私達の仲が女王の戀の向ふを張つた譯でもなければ、お前が女王よりも美しいと云つた者も有りはすまい。

アイラス　あのお腰元のエレナは美しい女と云はれた許りに女王樣の御機嫌を損ねて、到々砂漠の方へ流されて、今は何處の砂山の中に埋んでゐますやら。それから若い士官のコリントは、エレナに戀をしてあれを救はうとした爲めに、ナイル河の鰐に食はされて了ひました。

エロス　あの血の熱い女王が何うしてさう殘忍な事をするのかなあ。氣に入つたとなれば獅子の兒の鼻づらにでも接吻をするが、一度其の嫉妬にかゝると何んな近親の者でも短刀で胸を抉ぐられる迄其の憎しみを受ける。火の玉の樣に熱いかと思ふと、氷のやうに冷たい、不思議な女王だなあ。

アイラス　ですから私達は何時何んな事になるかも知れません。何うぞ今の内に心の落ち着く樣にして下さいな。

エロス　お前を連れてローマへ歸るのは譯の無い事だが、左樣しては私がアントニー將軍への忠義が立たない。それかと

云つてエジプトの日の照る下で女王の心に負いては迚も生きてはゐられない。左樣なつたら只アントニー將軍のお力を仗りるより外はない。

アイラス　私、何だか先が見えてゐるやうで心細う御座いますわ。

エロス　まあ御覽。あの滿月が今宵限り力一杯に照つてゐて、明日からは虧けはじめるとも知れない樣に見えるぢやないか。私達の仲も今宵限り明日限り、滿ちる丈け一杯に滿たして行けばいゝぢやないか？　今エジプトにゐる者は、誰れでも先を思へば憂ひの種子だ。皆物悲しい、心細い氣持でゐる。さあ　あの月の樣に今宵限りに照つて〳〵照りぬくのだ。雲も通れ風も吹け。晴れても曇つても、何うせ又虧けて行く月影だ。

アイラス　左樣なれば、ほんとうに盛りの短い私たちの仲ですわね。

（二人相倚つて想ひに沈む。此の時奥からクレオパトラ一人、靜かに出て來る。二人飛び退く）

クレオパトラ　エロス殿、一寸此處へ。

エロス　はい殿下。（琴を傍に立てかけて置いて進む）

クレオパトラ　お前は此處に、私の傍にゐて下さい。さあもつと近くへ來て。そして其の白い手で私を扇いでお呉れ。（持つてゐる羽扇を渡す）お前の眼は此のエジプトの空に輝く星の樣に澄んでゐる。その眼でよく私をぢつと見ておゐでだね。それからお前の唇も男には惜しい程赤いが、其れで昨日私の手に接吻した時には、その口痕が紅の花の樣に私の手の甲につきましたよ。

エロス　殿下、何うぞおなぶり下さいますな。私風情の者が何うして其んな大それた事を致されませう。それは皆女王樣のお戯れで御座いませう？

クレオパトラ　はゝ、隱すには及びませんよ。其處にアイラスがゐると思つて白ばくれてゐるのかえ？　これ、アイラス、此の人は最う私の物だよ。私に心を寄せてる男ですよ。

エロス　殿下、何うぞ其んな事は仰しやつて下さいますな。眞と思はれては大變で御座います。

クレオパトラ　では眞では無いとお言ひかえ？　眞で無いなら此處で私が眞にしてやりませう。お前はよもや其の眼其の口で私を欺したのではあるまい。さあ、斯うして置いて、それから其の口で本音を吐かせなければ置きませんよ。ほゝ、ほゝ、アイラスはあちらへ行つておいで。（アイラス躊躇する）あちらへ行つておいでと云ふに、何故早く立ちませんか？

アイラス　はい、御免遊ばしませ。（出て行く）

クレオパトラ　（アイラスの姿の見えなくなるのを待つて、エロスを突き放して）さあ、最早是れでお前にも用は無いから下つてゐるで。（扇を取りながら）否え、お前は其方へ行つてはなりません。彼方へ、奧へ。そしてアントニー樣に此處へと左樣申してお吳れ。

エロス　畏りました（入る）

クレオパトラ　今夜こそあの人がローマに殘して置いたファルヴィアと云ふ婦人の容子をすつかり聞かなくてはならない。あの人が何時迄此處にゐるつもりか、其の料簡も聞いて置きたいし、行末ローマを自分一人のものにすると云ふあの人の望みが確なら、エヂプトの女王が夫に持つても不足はない。あの人も、此のエヂプトを夏にする爲めには詰まらないローマの女一人位棄てゝ了ふに極つてゐる。

（此の時喇叭の音に連れ、アントニー、侍者侍女等を從へて出てくる）

アントニー　やあ、お妃は此處に來てゐる。先刻から探しあぐんでゐた。何うしたのだ。茲で月でも眺めてゐたのか。

クレオパトラ　はい、あの若いエロスと月を眺めて居りました。

（侍女等ばら／＼と女王の背後に立ち、扇を持て扇ぎゐる）

アントニー　エロスと？　道理であれが奥へ貴方の居所を知らせて來た。エロスは何うして此處へ來ましたか？

クレオパトラ　私が呼んだのですよ、あの男は、あんなに若くて美しいのに、貴方は何うして左樣お年を召してゐらつしやるのでせう？　五十と云へば未だ男盛りでありながら、衰へて見えますこと。屹度ローマの水が貴方の性に合はないので御座いませう？　あのファルヴィア殿が貴方を其んなに老いこませたので御座いませう？

アントニー　あゝ、最早其の事は言はないでゐて下さい、聞くと不快でならない。これ皆は暫く彼方へ行つて居れ、用があれば呼ぶからな。

（侍者等退く）

クレオパトラ　お前達も彼方へ行つておいで。

（侍者等退く）

アントニー　貴方は自分よりも若い男がお氣に入ると見える、私は最早そろそろローマへ歸る時が來たのだらうさ。それでやれファルヴィアだのローマだのと要もない事を言ひ出すのだらう、あゝ、あゝ人間、男と生まれて美しい女王に想ひを掛けたりなぞしないことだ。

クレオパトラ　それは私の方から云ふ事ですよ、貴方こそもうそろ／＼ローマが戀しくおなりなされたので御座いませう？　あのファルヴィア殿が。其れを私がお引き止め申して誠に／＼お氣の毒さま！

（侍者一人入り來る）

侍　者　大將軍へ只今ローマからお使ひの者が見えました。

アントニー　ローマからの使ひだと、煩い事だな。何の用事か聞いて來い。

クレオパトラ　まあ、其んな事を仰しやらずに使者を此處へ呼んでよくお聞き遊ばせ。御用は大方あの金切聲のファルヴィア殿が私に對してのお怨みで御座いませう。それともあの小シーザーが貴方を國へ呼び戻す權柄づくの命令ででも御座いますか？

アントニー　なに、あのシーザーが命令だと？

クレオパトラ　多分そんな事で御座いませう？　いえ、屹度さうに違ひ御座いません。シーザーづれの命令で、貴方はもう此のエジプトにゐられなくなるので御座います。さあ精々シーザー殿の命令をお守りなさいませ。シーザー殿のお呼び出しは何處にゐる？　それともファルヴィア殿からのお呼び出しか？　さお其の使ひの者を此處へ呼び入れてお呉れ。

アントニー　いや、會ふ必要はないから、其のまゝ返せ／＼。

クレオパトラ　不可ませぬ／＼。早く會つて、早くローマへお歸り遊はせ。

アントニー　ローマの都などはタイバーの流れに沈んで了へ、私の此の美し、胸の思ひ一つには世界の何物もかへる事は出來ない。此處より外の國も都も私に取つては土塊だ。天が下に私の國は此處より外にはない。さあ、クレオパトラ（手を取つて）二人斯う並んだ姿の氣高さを、此のアレキサンドリアの高御座から世界の人々に見せてやらう。私の眞實思ふお人は御かけて貴方より外にはない。

クレオパトラ　（手を振り放し）まあ、大嘘つきのアントニー様、ローマのファルヴィア殿の戀婿が、はゝゝゝ。何故貴方は早く

本性をお出しなさらない？

アントニー　あゝ、もうそんな詰らない言ひ爭ひで此の貴い歡樂の時をつぶして了ふのは惜しいぢやないか。今宵は何をして遊ばうな？

クレオパトラ　さ、早くお使者にお會ひなさい。これ、早く使者を此處へ呼び入れませんか？

侍　者　はい、畏りました（退く）

アントニー　はゝ、其の氣色ばんだ所が一層美しいお妃に見える。まあ此方へお向きなさい。今宵は一つ皆の者と街を歩いて見ようぢやないか？　貴方は奥で仕度をなさい。私も彼方へ行つて待つてゐよう。

クレオパトラ　今にお使者が參ります。

アントニー　いや、用は誰かに聞かせて置く。それとも貴方が聞いて呉れるか？

クレオパトラ　私はお邪魔で御座いませうから奥へ參つてゐます。（立つのをアントニー引き止める。此の時使者二人入り來る）いえ〳〵彼方へ行つて居ります　ファルヴヰア殿から精々嬉しい便りをお聞き遊ばせ。

（クレオパトラ奥へ入る）

アントニー　困つた女だな。ローマからの使ひと云ふのはお前達か？

使者甲乙　はい。大將軍樣、お懷しう御座います。

アントニー　あゝ、お前達は私の家の者だつたかな？　いや、皆見忘れて了つた用と云ふのは何事だ？　誰からの使ひだ？

使　者　甲　誰れからと申して、最早其の主はゐられません。奥方ファルヴヰア樣はお亡くなりなさいました。

アントニー　なに！　ファルヴヰアが亡くなつたと？

使者甲　はい、暫くのお病ひでお亡くなりなさいました。委細は此の手紙にあるさうで御座います。（手紙を渡す）

アントニー　して、亡くなつたのは何日の事か？

使者甲　此のお手紙を頂きますと間もなく、丁度私共が出發する數日前で御座います。確か五月の末の日と存じます

アントニー　（手紙を讀み乍ら）なに、シーザーとルシアスが戰爭をして、ファルヴィアがそれに參加したとい

使者乙　はい。奧方が眞先きに御出陣なさいまして御座います。が、其の戰は身方の敗北となりまして、奧方はシシオンにお遁れなさいまして、其處で御病氣にお成りなさいましたので御座います。誠にお氣の毒な武運の果で御座います。

アントニー　それからあの小ポンペイは海軍の力を恃んでシーザーと戰はうとしてゐると云ふではないか？

使者乙　はい、其外東、アジアの方に當りましても所々に爭亂が起こつて居ります。それにアントニー將軍は何をして居られるか？………

アントニー　ローマの市民共が日々に罵つてゐると云ふのか？

使者乙　はい。左樣で御座います。それからシーザー樣も、レピダス樣も、皆貴方樣の御歸國を待つてゐらつしやいます
一日も早くローマへ御歸りなさいます樣にお願ひ致します。

アントニー　よし／＼。分つたから御前等は彼方へ行つて休息せい。そして明日からゆる／＼此處の町でも見物して歸れ。

使者乙　難有う御座いますが、私共此度は國の騷ぎを餘所にして見物の心も御座いません。一刻も早く歸國して、御方で
貴方樣の昔の勇ましいお顏が拜し度う御座います

アントニー　解つた／＼。別に返事は遣らぬが私も遠からず國へ歸ると、皆の者にさう言つて與れ。さあもうよいから休息して出立せい。

使者乙　では御免を蒙ります。是非早々御歸國をお願ひ致します。

(使者二人出て行く)

アントニー　(奥へ向つて)エロスはゐるか？　エロス！　エロス！

エロス　(出て來る)何か御用で御座いますか？

アントニー　おゝ、此の手紙を讀んで見い。愈々ローマへ歸る時が來たと思はれる。

エロス　(手紙を讀んで)ファルヴィア樣がお亡くなりなさいましたのですか？

アントニー　あゝ、あの女も拙い運命で死んで了つた。それから國は再び大亂になるかも知れない。だから、私も此の儘ではゐられまいよ。

エロス　では御歸國の事にお決めなさつたので御座いますか？

アントニー　あゝ、是非がない、今度こそ斷然此の重いエジプトの鎖を振り切つて了はなくてはならない。お前は彼方へ行つてイノバーバス等を呼んで來て呉れ。

エロス　畏りました(出て行く)

アントニー　(手紙を取り上げて見て)あの男勝りのファルヴィアが斯うした最期を遂げるのは當然の事であつたかも知れないが、今から思へば哀れなものだ。私も此處らで斷然と女王の手から離れなくては男の一生は此のまゝ腐つて了ふ。此の儘にしてゐたら凶事は後から〳〵と際限なく育まれて來る。あゝ、私も最早此處らで無明の夢を醒さなくてはならない。一つには我々が身の爲め、またローマの國に對しても濟まない事をした。あゝ一婦人のために危ふく半生を誤らうとした。

(イノバーバス、プヰロー、エロス登場)

イノバーバス　大將軍閣下は御歸國で御座いますつて？

フキロー　實に夢ではないかと存じます。それでこそアントニー將軍の御威光が地に墜ちないで濟む。皆は急けで御座います。さ、一刻も早く御出發の御用意下さいませ、

エロス　まあ左樣急くには及ばない。成程國に對し奧方に對しては君の云ふ通りでもあらうが、一度人間の胸に燃えた美しい熱火は、時として國をも家をも燒き盡す場合がある。さう土塊を割るやうに手短かには行かないのが世の中だ。まあ靜かにして將軍閣下のお指圖を待ちたまへ。

フ井ロー　私は其んな柔弱な事は聞きたくない。見度くない。國を燒き家を燒くのは罪惡の火だ、幾ら美しくても其れは世の爲にならないのだ。君等は美しい物を見て、爲になる物を見ない。アントニー將軍の一代を紅白粉で美しく塗り立てやうと云ふのが君等だ。私はそれを善の鎧、德の甲で世の爲めに堅めて貰ひ度いと云ふのだ。

イノバーバス　まあ〳〵兩君とも靜まり給へ。此處は御前ではないか？　君等の云ふ事は皆極端でいけない、何も善た德たと逸り立つて無理をなさるにも及はないし、美しいの醜いのと其んな事に氣兼ねをするにも當らない。大將軍のお氣の進む樣にさへなされば良いのだ。

アントニー　（默つて聞いてゐたが）いや、イノバーバス、私は是非共歸らうと思ふ、最早此の決心は動かないから皆の者に用意をさせて吳れ、用意が出來次第發足する。

イノバーバス　では本當にお立ちで御座いますか？　やれ〳〵、大變な御急發で御座いますな。でも跡に殘されるクレオパトラ女王を初め、エヂプトの女子共が可哀さうで御座いますね。女王樣なとは其の話をお聞きになつたら氣を失つてお了ひなさいませう。少し感情の激する事があれば、あの方は直く氣絕してお了ひになります。私が存じてからでも、最早二

三十度お死になさいましたよ。

アントニー　其れはあれの手管だ。

イノバーバス　否、手管では御座いません。自然と左樣なる程の、微妙な神經を持つてゐらつしやるのです。あの方の身體から出る涙一滴、溜息一つ並の者のとは違つて居ります。

アントニー　これ、イノバーバス！　ファルヴヰアは死んだのだ。

イノバーバス　奧方がお亡くなりですと？　其れなら尙の事、强ひてお歸りなさる必要は無いでは御座いませんか？　早速神樣にお供物をして、お禮を仰しやらなくてはなりますまい。自然の成り行きで、貴方樣の古い襦袢が新しい腰卷に取り替へられたので御座います。お嘆きなさるには及びません。涙と云ふ物は、葱を眼につけても出て來る物で御座います。

アントニー　ファルヴヰアが緖を開いたローマの騷ぎは、私が歸つて取り鎭めなくてはならない。

イノバーバス　では貴方樣が緖をお開きになつたエジプトの婦人方の騷ぎは、一層貴方樣がお取り鎭めなさらなくてはなりますまい。

アントニー　あゝ、もう輕口は好い加減にして呉れ。何事があらうと、私の此の決心は動かないから、皆の者に命令を傳へて、出發の用意をさせやう。

（アントニー先に立ち三人續いて下手に入る。引き違へて上手からクレオパトラ侍女等と入り來る）

クレオパトラ　アントニー樣は何處へゐらつしやつて？

チャーミアン　何處へゐらつしやいましたらう？　つい今迄此處で皆の者と話してゐらつしやいましたが、何うなすつたので御座いませう？

クレオパトラ　アレキザス、お前行つて見て來てお吳れ。そして誰と一緒に何をしておゐでなさるか其れも見て來てお吳れけれど私がお前を見にやつたと言つてはなりませんよ。そしてアントニー樣が沈んでゐらつしやる樣だつたら、私は浮かれて踊つてゐると言つてお吳れ。それからアントニー樣か浮々してゐらつしやる樣だつたら私は病氣で寢てゐますと言つてお吳れ

アレキザス　承知致しました。（退く）

チャーミアン　お妃樣、貴方樣が本當にあの方を想つてゐらつしやいますのなら、もつとあの方が貴方を窮屈がつてゐらつしやらないやうに、氣樂にさせておあげなさいませ。

クレオパトラ　それは何うすればいゝと言ふのかえ？

チャーミアン　あの方が外の女の事など仰しやつても、それを許してお上げなさいませ。あまり窮屈だと逐々嫌になるもので御座います。

クレオパトラ　其んな事を言つて、お前、男に我儘をさせて置くと、尚增長するものですよ。私は今其んな事所ぢやない。大事の場合だからお前も早く行つてあの方を呼んで來てお吳れ。

チャーミアン　あ、アントニー樣がいらつしやいます。

（アントニー、アレキザス出て來る）

クレオパトラ　あゝ、私、氣分が惡い！　腕が苦しい！

アントニー　おゝクレオパトラ！

クレオパトラ　チャーミアン！　早く私を彼方へ連れて行つてお吳れ。私、もう斯うしてはゐられない。私は病氣なのだか

ら。

アントニー　貴方、何うしたのだ？（傍へ寄り介抱する）

クレオパトラ　何うぞ、もつと彼方にゐて下さい。側へ寄らないで下さい。

アントニー　何うしたと言ふのだ？　何處か惡いのか？

クレオパトラ　貴方の其のお眼の色の嬉しさうですこと！　ローマから何んな良いお知らせが來たので御座います？　奥方から何と言つて來ました？　ローマへお歸りなさらなくてはならないのでせう？　それで其んなに嬉しさうな眼付きをしてゐらつしやるのでせう？　其れを私がお引き止め申しては濟みませんから、さあ、もう貴方は早くお歸り遊ばせ！

アントニー　私の心は神々が御承知だ。

クレオパトラ　世界の女王で此んなに迄男に欺された者が他にありませうか？　私、もう口惜しい／＼。

アントニー　クレオパトラ！

クレオパトラ　何うぞもう、お國へお歸りの言譯などは聞き度う御度いませんから、只さつぱりとお暇乞して、お立ちなさいませ。今迄はローマの國は土塊になれの、見向きもしないのと、私の氣に入るやうな事許し言つていらつしやつたそのお口でよくもまあ、其んな言譯が出來たものです、私の口や眼には變らぬ誓ひが御座います。私の眉には清い喜びが宿つて居ります。私は天が生ませた女王で御座います。それに貴方はまあ、世界の勇士から大嘘つきにお變りなさいました。

アントニー　これ、何を云つてゐるのだ！

クレオパトラ　あゝ、私も男に生れゝば良かつた。此のエジプトの女王にも勇氣のある事を世界の男と云ふ男に知らして遣り度い！

アントニー　まあお聞きなさい！　私の身體は火急の出來事で暫く勤めに出なくてはならないが、然し此の心はみんな貴方の所に預けて行く。國は今内亂が起つてポンペイは海からローマの港に攻め寄せやうとしてゐる。だから私は一寸歸つて其等の亂を鎭めて來る。さうしてこそ私達の仲は末永く平和になる譯だからね。

クレオパトラ　ローマが亡びたら亡びても良いぢや御座いませんか？　貴方の國は此處だと仰しやつたでせう？　ローマなんぞは土塊になれと仰しやつたのは誰ですよ！

アントニー　左樣癇癪を起こしては仕樣がない。其れに今一つ私に取つては大事件があつて、其の跡始末をして來なくてはならない。

クレオパトラ　ファルヴィア殿のお怒りを取り鎭めていらつしやると云ふので御座いませう？

アントニー　否、そのファルヴィアが死んで了つた！

クレオパトラ　え？　ファルヴィア殿が亡くなつて了ひましたか？

アントニー　あゝ、亡くなりました。それで其の跡始末をして來なくてはならない。その代り今度こそは少しも國に煩い物が無くなるから貴方も安心して呉れるだらうし、私もさつぱりして良い心持になる。さ、それが分れば機嫌を直して、暫くの間、笑つてお別れとしやう。

クレオパトラ　まあ、貴方は不實な方ですね？　ファルヴィア殿が亡くなられたと云ふに、泣いてお上げなさる涙は無いのですか？　もう／＼解りました、ファルヴィア殿が死なれても其んな風なら、私が死んだら何んな事をなさるか知れません。

アントニー　詰まらぬ爭論はもう止めにして、私の言ふ事をよく聞いて下さい！　私は貴方の指圖で立ちたいのだ。ローマへ行つて戰ふのも戰はないのも、皆貴方の指圖一つだ。

クレオパトラ　チャーミアン、私はもうアントニー樣の心變りで病氣になつた。彼方へ連れて行つてお吳れ。

アントニー　堪忍して下さい、私は決して心變りなぞしたのではない、一時此處を去るのも、世の務めなり私達の爲めなりだ。何うか私の愛情を信じて下さい。神の前に行つた時其れを保證して吳れるのは貴方の他に無いでいないか？

クレオパトラ　ファルヴォア殿が左う仰しやいました。まあ彼方を向いて泣いてお上げなさい。それから私に暇乞を仰しやつて、そして、其涙にはクレオパトラの爲めに泣くのだと言つてお聞かせなさい。兩面使ひの上手な物眞似屋さん、さあ〱たんとお芝居をしてお見せなさい。

アントニー　其んなに言はれると私は逆上て了ふ。

クレオパトラ　さあ〱今度は逆上る眞似をして御覽遊ばせ！

アントニー　クレオパトラ！

クレオパトラ　はい。

アントニー　私の言ふ事をお疑ひなら劍にかけても……

クレオパトラ　盾にかけても？　ほゝ、段々お上手になつて行きますこと！　チヤーミアン、御覽よ、ローマの勇士は怒りの所作が一番よくお似合ひなさるから。

アントニー　私はもうお暇乞する。

クレオパトラ　まあお待ちなさい！　私一言云つて置くことが御座います。貴方と私とはいよ〱お別れするのでございますね……けれど今其事を云ふのぢやありません。貴方と私とは愛し合つてゐましたね？……けれど今其の事を云ふのでもありません。あゝあゝ、私、あの頃はほんとうに樂しかつたが、アントニー樣はお立ちだし、エロスも居なくなるし、是

から私を慰めて呉れるのは誰だらう？　ローマから若いシーザー殿にでも來て貰ひませうよ！

アン：ニー　其んなたわいのない事を云ふものぢやない。私に云ふ事があると云つたのを早く聞かせて下さい。

クレオパトラ　あ、さう／＼、私にもアントニー樣が乘り移つて、何も彼も忘れて了つた。其の事はもう言はなくても貴方に解つてゐます。

アントニー　女王、此儘立つて行く私の胸が何んなに苦しいか察して下さい。何んなに此處で貴方の手管にさいなまれてももう斯うなつては、劍の手前、家來共の手前、是非共一旦歸國しなければなりません。其の代り馳かけで直ぐ歸つて來るから、何うか眞心を見せて下さい。

チャーミアン　お妃樣は貴方樣とお別れなさるのが辛くて、其れであんなに取り亂してゐらつしやるので御座いますから、貴方樣も其處をお察しなさいましてね。

クレオパトラ　チャミーアン、お止し。アントニー樣は最早お察しなんか無いんだよ。あゝ私は氣分が惡い、胸が苦しい、私もあのファルヴィア殿と同じ樣に死んで了はう、あゝ苦しい／＼（チャーミアンの手に倒れる）

アントニー　（側へ寄つて）たわいの無い眞似をしてはいけない。見つとも無いではないか。さあ、起きておいで／＼。

チャーミアン　では貴方樣は何うしても直ぐお立ちなさるので御座いますか？

アントニー　何うも立たなくてはならない。

クレオパトラ　チャーミアン、もう何もお言ひでないと云ふに！　ではアントニー樣、何うぞお達者でゐらつしやいませ。貴方は名譽の爲めにお歸りなさるのですから、私最早愚痴は申しません。何うぞ貴方の劍の上に勝利の冠がかゝりますやうに！そして私をお忘れなさらないやうに！

アントニー　貴方を忘れていゝものか、體は暫く別れ〳〵になつてゐても、魂は貴方の所に來てゐる。必ず歸つて來るから待つてゐて下さい。

クレオパトラ　では御横嫌好う！

（アントニー接吻する）

……（幕）……

第二幕

女王クレオパトラの宮殿内の一室にて、九月初めの或日の午後、幕開くと、チャーミアン、ライナ、アレキザス、卜者話し乍ら下手から出て來る。

チャーミアン　アレキザス樣、アレキザスの殿樣、アレキザス大明神樣、貴方が大層褒めて女王樣にお話しなさいました卜者は何處に居ります？　呼んで卜はせやうぢやありませんか？

アレキザス　よし〳〵、呼んで上げませう。（下手へ向かひて）卜者々々、出てお出でなさい！

卜者　（出て來る）はい〳〵。御用で御座いますか？

チャーミアン　まあ、此の人が卜者さんなの？　些とも知らなかつた。並の人と少しも異つてゐないのね？

卜者　へえ、並の人で御座います。

チャーミアン　其れで世の中の事を何でも知つてゐる人なの？　まあ綺麗なお髯だこと。（卜者の白髯に觸つて見る）

卜者　いや、ほんの少し許り、此世の秘密を讀む事が出來るので御座います。

アレキザス　先づ其の手を出してお見せなさい。

チャーミアン　はい〳〵、さあ見て下さい。そして思ひ切り良い運勢を私に授けて下さい、

アレキザス　慾張つてゐますね。

卜者　（掌を見ながら）運勢を授けて上げる事は私には出來ませんが、只是から先の事を見通し

チャーミアン　ぢや何うぞ先の事を見透して教へて下さいな。
ト　者　貴方は此の先づツと美しくお成りなさいます。
チャーミアン　其んな表面の事許りでなく、もつといゝ事を見て下さいよ。
ライナ　いゝえ、貴方も悟りが悪いわね。貴方がお年を召してから、白粉を眞白にお塗りなさると云ふ謎なのですよ
チャーミアン　馬鹿らしい。私は其んな皺くちや婆になぞなりません。
アレキザス　まあ、其んなに卜の邪魔をしないで、默つて聞いてるらつしやい。
チャーミアン　叱つ〱。靜に〱。
ト　者　貴方は今迄よりも、もつとよく男に惚られます。
チャーミアン　まあ。さうですか？　それで苦勞をするのでせうね。私困つて了ふわ。
ライナ　ほんとにお氣の毒な。矢張今迄通り、男になんか振り向かれもしないでゐる方が樂と云ふものね。其んな運命はお呪ひが何かで封じてお貰ひなさいな。
ト　者　では、もつと左樣云ふ苦勞のない方の運勢を見て上げませう。
チャーミアン　いえ〱。構ひません〱。苦勞のある事も知つて置かなくつちや爲になりませんから、何うぞ其の先を聞かせて下さい。何ですか？　女王樣の向ふを張つて……
ライナ　叱つ〱。
チャーミアン　(口へ手を當て聲をひそめて)ローマのシーザー樣のやうな男に思ひつかれる運勢はありませんか？
ト　者　貴方は屹度女王樣よりも長生をなさいます。

チヤーミアン　長生き、結構ですよ。私は甘い無花果よりも長生きの方が好きですから。

ライナ　貴方は女王樣よりも三つ年下だから三つ丈け長生きをなさる譯だわね。

卜　者　大體から申すと貴方の御運勢は此の先より今迄の方が良いやうで御座います。

チヤーミアン　おや〳〵。では澤山に父無子でも生むのですねえ。ぢや最早私のはいゝから、ライナさんのを見て上げて下さい。

ライナ　（手を出して）私の掌は此んなに清淨なことを見してゐます。

チヤーミアン　その脂ぎつた掌からは、子供がうよ〳〵生まれる前兆が見えてゐます。

ライナ　貴方ぢやあるまいし。

卜　者　貴方がたの御運勢は皆同じで御座いますな。

ライナ　何うしてさ？

卜　者　何うと云つて、皆、是から先お美くお成りで、男に惚れられて、長生をなすつて。

ライナ　ぢや、チヤーミアンさんのより少しも良くは無いのですか？

チヤーミアン　贅澤をお言ひなさんなよ。私程に行けりや勿體ないと思つてゐらつしやいよ。

ライナ　でも同じと云ふのは不思議ですね。

卜　者　へゝ、つまり平生から同じやうなお願ひが神樣にでも懸けてあるので御座いませうよ。

チヤーミアン　ライナさんも見かけによらない人ね。ぢや、今度はアレキザス樣、貴方の番です。何うぞ神樣、此方には醜女の奧樣を持たせて上げて下さい。そして其の奧樣が死ぬと今度はもつと醜女の奧樣が來て、其れが復死ぬと、少うしい

ゝ女の奥樣が來て、それが亡くなると、最後にやつといゝ女の奥樣が見えますやうに、そして其の最後の奥樣が姦通をして、夜逃げをして、到々此の方が間拔な亭主のお手本になります樣に、何うぞ神樣、お願ひ致します。

ライナ　何うぞ神樣、チャーミアンさんの願を叶へて下さいませ。

アレギザス　是は何うも驚いた。皆の手で私が女房を取られる男になるなら、皆は、さあ、賣女にでもなりやがれ、神樣何うぞ願ひます。

チャーミアン　叱つ！　女王樣がゐらつしやつてよ。

（クレオパトラ上手から出て來る。マーディアン從ふ）

クレオパトラ　チャーミアン！

チャーミアン　はい。御用で御座いますか？

クレオパトラ　早く、睡眠劑を持つて來てお呉れ！

チャーミアン　まあ、女王樣、何うなすつたので御座います？

クレオパトラ　もう〳〵アントニー樣のお留守中が永くて〳〵仕樣がないから、睡眠劑でも飮んで眠り通さうと思つてさ。

ライナ　女王樣は、あんまりあの方をお思ひ過ぎなさいます。御體にさはつては大變で御座いますし、第一、殿方と申すものは、あんまり此方で思ふと附上がるもので御座います。

クレオパトラ　お前達は其な不實な事を云ふかえ？　アントニー樣のやうな方に其んな事を云ふのは勿體ないとは思はないかい？

ライナ　女王樣、決して不實では御座いません。其れが却つて眞實になつて、何日迄も戀仲が續くので御座います。

クレオパトラ　私達の戀仲はいつまでも續きますよ。私が此のエジプトを支配する限り續きますよ。あゝ、日の、永いこと〳〵。私の力であの日神に、さつさと車を走らせて早くアントニー樣のお歸りの日を迎へいと命じて遣り度い。

アレキザス　女王樣がナイル河の岸にお立ちなされて、純白の裝ひで空を仰いで日神にお命じなさる姿は何んなに神々しいもので御座いませう。

クレオパトラ　マーディアンや、今日はお前の唄も聞き度くないから、一つお前にあやからせてお呉れ。お前は其んなにして女に對する情慾と云ふものをまるで無くされてゐるのね。私も其んな氣持ちになつて見度いと思ふよ。でもお前、少しは女に對する愛情と云ふものがあるかえも

マーディアン　畏れながら、其れは御座います。

クレオパトラ　ほゝ、其んなに謙遜しなくてもいゝよ。

マーディアン　併し、何うも本當の役には立ちません。只もう火の樣な愛情丈を持つて居ります。御用のお方には何時でも差上げる用意を致して居ります。

クレオパトラ　まあ、お前は甘い事を云ふね。あゝ、チャーミアン、アントニー樣は今頃何うしてゐらつしやるだらうねえ何處にゐて、何をしてゐらつしやるだらうか？　坐つてゐらつしやるか知ら、立つてゐらつしやるか知らん　それとも、歩いてゐらつしやるか知らん　馬にでも乘つてゐらつしやるか知らん　あゝあの方を乘せてゐる馬が羨ましい。お馬や、お前、その背中に乘せてゐるお方を誰だと思つてゐるかえ？　ローマの押へ、世界の飾り、此の世で一番偉い方なのだよねえ、ライナ、あの方は今何を云つてゐらつしやるだらうね？　屹度斯う云つてゐらつしやるよ『ナイルの美しい蛇は今何をしてゐるだらう？』と、ね、屹度其う云つてゐらつしやるよ。あの方は何時も私の事を『美しい蛇や』と呼んでゐら

つしやつたよ。

ト者　エジプトで一番美しいものは、あの樂しい笑顔の中に人を永久の眠りに就かす力のある、小さな蛇で御座います

クレオパトラ　お前は何者かい？

卜者　卜ひの者で御座います。

クレオパトラ　あゝ、さう〳〵、お前は卜者だつたね、さあ言つて聞かせてお呉れ、私はエジプト許りでなく世界の一番美しい女だとは思はないかえ？　あの額の廣い大シーザーが生きてゐた頃は、私を一國にも替へ難い寶だと思つてゐたし、あの大ポンペイは、私の顏をぢつと見詰めたなり、眺め死に死ぬ程の思ひをした。

アレキザス　女王樣、私は復ローマへお使ひに參らうと思つて居ります。

クレオパトラ　おゝ、アレキザス、お前御苦勞でもアントニー樣の所へ行つて來てお呉れ。そして精しい〳〵御消息を聞いて來てお呉れ。そして一刻も早く此のエジプトへお連れ申して呉れ、アントニー樣！　貴方は本當に不實者ですよ。私が此んなに待ち焦れてゐるものを、其儘何時までも〳〵待呆けにしてお置きなさいます。

ライナ　是でローマへお使ひが丁度二十人目で御座います。隨分夥しいお使者でございますこと！

クレオパトラ　あの方の所へ使ひを上げる事を忘れる奴は、乞食になつて死んで了へ。さ、チャーミアン、手紙を書くのだから紙と筆とを持つて來てお呉れ。あの方へ使者を立てる僞なら、エジプト中の人間を皆出しても構はない。あ、ライナ、お前はあの釣竿を持つて來てお呉れ、私は最早此處にゐるのが厭になつたから、川へ出て釣をしやう。そして私の曲つた鈎にぬら〳〵した魚の顎がかゝつたら、其れをアントニー樣だと思つて左う云つて遣らう『はゝ、とう〳〵貴方を生捕つた！』と、さう云つてやらう。

チャーミアン　女王樣がアントニー樣と釣りの賭事をなさいました時は面白うございましたね。海女に水を潜らせて、そつとアントニー樣の鈎に大きな鹽魚をかけさせてお置きなさいますと、アントニー樣は何も御存じなく大喜びで一生懸命にそれを引上げなさいましたつけ。

クレオパトラ　あゝ、あの頃は樂しかつたね。アントニー樣が向きになつてお怒りなすつたのを、其の晩私が散々笑つて機嫌を直して上げた、其の翌朝は九時にならないうちに、あの方を醉はせて了つて、そつと寢かした上に私の頭の飾りと上着を着せて、私はあの方の長い劍を佩いてみたつけ。

（此の時侍者者一人出て來る）

侍　者　ローマからお使ひが見えましてございます。

クレオパトラ　ローマから使ひが來たと？　まあ、いゝ所へ來て呉れた。さ早く此處へ通してお呉れ。

（侍者退く、使者出て來る）

使　者　女王樣へお眼通り致します。ローマのアントニー將軍からのお使ひでございます。

クレオパトラ　おゝ、待つてゐましたよ。さあ、早くいゝ便りを聞かせてお呉れ。でもまあ、ちよつとお待ち、あんまり初めから好い事許り聞くと感じが失せて了うといけないから、何か惡い事から聞かせてお呉れ。アントニー樣は亡くなられたのぢやないかえ？

使　者　とんでもない事でございます、女王樣。

クレオパトラ　ぢや、御機嫌好くてゐらつしやるのだね、それから何うしましたえ？　さ、最早好いからいゝ知らせを澤山聞かせてお呉れ、さうするとお前にも黄金の御褒美を持ち切れない程上げるよ。そして此の手に接吻させて上げやう。此

の手にはね、世界の王達が皆接吻しやうと焦つてゐるのだよ。それともまだ何か悪い知らせがあるのかえ？　あるなら其れを早く聞かせてお呉れ。

使　者　女王様……

クレオパトラ　左様だらう？　もう何も悪い知らせはないのだらう？　さうだね、お前。若し此の上まだ悪い事があるなんて云つちや承知しませんよ。私はお前を何んな眼に會はすかも知れないよ。褒美の黄金を沸かしてお前の喉に注ぎ込んでやるよ。お前の體を鰐に食はせて了うかも知れないよ。

使　者　女王様それは何うも……

クレオパトラ　だから其の善い知らせを早く云つてお了ひ！

使　者　女王様、私は生まれつきの正直者でございまして……

クレオパトラ　あゝ、さう見えるよ。だから有りの儘を云つてお呉れ。さ、御褒美を先へ〳〵と遣りませう。是はアラビヤから來た寶玉の頸飾、之れをお前にやりませう。

（首から外してやる）

使　者　何うも、其んな事をなさいましては、女王様、私が誠に困ります。

クレオパトラ　いゝから早く様子を聞かせてお呉れと云ふに。

使　者　はい〳〵、畏りました。その、先づ第一に、殿様は御機嫌麗はしくゐらつしやいます。

クレオパトラ　其れは最早先刻聞いたぢやないか？

使　者　それから殿様は明け暮れ女王様の事をお忘れなさいません。

クレオパトラ　さうかえ？　そら御覧、チャーミアン、さうなくてはならない筈だわね。さ、是をお前に上げませう。是はナイル河上で取る白い靈鳥の羽で作へたのだよ。それから、アントニー樣は私の事を何とおつしやつたえ？

使　者　ナイルの美しい蛇、ナイルの美しい百合とおつしやいました。

クレオパトラ　ねえ、ライナ。あの方はほんとに優しい方ね。何んな裝をしてるらつしやつたかえ？

使　者　丁度其の時はアラビヤの駒に跨つて、シーザー樣のお館へ談判か何かにお出かけの時でございました。

クレオパトラ　ねえ、チャーミアン、アラビヤ駒に跨つて、あの凛とした男らしいお姿で、胸を一杯に張つて、それでも眼には何時もの優しい光りが漂づてゐて……

使　者　それから此の眞珠の頸飾を貴方樣にお渡し申して呉れとおつしやいました。（函入りのまゝ渡す）

クレオパトラ　まあ、何か一品づゝ自分の身代りにと思つて贈つて下さるわね。（取り出して接吻して頸にかける）

使　者　殿樣は其の眞珠の輪に何度も接吻をなさいまして、それから函にお納めなすつて、『これを確に女王樣に渡せ。心變らぬローマ男が世界を照すエヂプトの女王に獻ずる此の寶玉は、ローマの海の底知れぬ深みに育つ貝の中に秘められたものであるから何うか自分と思つていつくしんで貰ひ度い。それから此れに附足して東の方の王國を獻ずるから其の國々の榮ある女王とおなりなさるやうに。』と、さう仰しやいました…………。

クレオパトラ　まあ、お前は何と云ふいゝお使ひだらう？　さあ、是を上げるよ（指輪を拔いて使ひの者の指に嵌めてやる）是はね、印度の金山から出る金で打つた指輪ですよ。それから？

使　者　それから、その……

クレオパトラ　それから何うしました？

使　者　それからその、女王樣……

クレオパトラ　あゝ、

使　者　殿樣にお目出度い事がございました。

クレオパトラ　お目出度い事？　それを聞かせてお呉れ。アントニー樣に目出度い事なら私にも目出度い事だから。

使　者　ところが女王樣、それがその――

クレオパトラ　何うしたと云ふのさ？

使　者　その、殿樣とシーザー樣と大層お親しくおなりなさいまして――

クレオパトラ　それは目出度い事だね。それでローマが天下泰平になつたと云ふのだらう？

使　者　はい、全く天下泰平で……

クレオパトラ　でもアントニー樣がシシー殿に従へられたと云ふ譯ではなからうね？　自由に此方へお歸りになるのだらうね？

使　者　はい、御自由ではございますが、併し……

クレオパトラ　まあお待ち、私は其の『併し』と云ふ言葉が大嫌ひ。その言葉は、今迄云つた善い事を皆打消して了つて、丁度自分の後に罪人を引きつれて來る獄卒のやうなものですよ。

使　者　實はその……

クレオパトラ　實は何うしたといふのさ？

使　者　實はそのシーザー樣と段々御親密になさいまして……

クレオパトラ　あゝあゝ。

使　者　到々シーザー様のお妹御のオクテヴィア様と御結婚なさいました。（一座騷き動揺する）

クレオパトラ　（倒れかゝる）チャーミアン〳〵、助けてお呉れ！

チャーミアン　女王様、氣を確にお持ち遊ばせ！　氣を確にお持ち遊ばせ！

クレオパトラ　（起き直り、屹と使者を見て）この大馬鹿者奴！　疫病にでも取りつかれて死んで了へ（突然使者に與へた扇で使者を續けざまに撲つ。周圍の者立ちかゝり、止めやうとして躊躇してゐる）

使　者　女王様、御免下さい、女王様、御勘辨、願ひます。

クレオパトラ　何を云ふのだよ、畜生奴！　お前のその眼玉を蹴返してやるよ。髪の毛を引拔いてやるよ。（使者を引摺り廻はす）鞭で叩いて鹽水に漬けてやるよ。

使　者　知らせは私が持つて參つたのでございますが、御縁組は私の知つた事ぢやございません。何うぞ御勘辨下さいませ

クレオパトラ　まだ其んな事を云つてゐるのか、此の疫病やみめ。疫病やみめ。（與へた頸飾で撲つ、頸飾の珠四散する）

使　者　女王様、私は正直に有の儘を申上げたのでございます。何うぞ御免下さいませ。

クレオパトラ　では早く本當の事を言へ！　もつと異つた事を言はないか？

使　者　本當の事を申上げます、オクテヴィア様と御結婚なすつたのが本當でございます。決して間違ひではございません

クレオパトラ　まだ其んな事を言つてるか、此の畜生奴？（短劍を拔いて切らうとする）

使　者　何うなさいます。女王様！　私は何も致したのではございません。お助け下さい、お助け下さい。

（下手へ驅け込む。マーディアン・下者、跡を追つて入る。クレオパトラ。狂亂的に追ひかけて最後の下者を刺す）

アレキザス　(クレオパトラを抱き止め)女王樣お靜かになさいませ、人違ひでございます。

チャーミアン　大變でございます。女王樣、正氣にお歸り下さいませ。

ライナ　女王さま、女王さま!

クレオパトラ　(短劍を投げ出して、眼の醒めた樣に)死んだのは使ひの者ではなかつたか?

アレキザス　先程の卜者でございます。

チャーミアン　可哀さうな事をなさいました。

クレオパトラ　はゝ、死骸を片づけてお遣り。(アレキザス下手へ入る。マーディアンを伴ひ來て卜者の死骸を運び入れる。チャーミアン、ライナ、女王の側により扇ぎなどしてゐる)

ライナ　あの卜者も、つい先程此處へ參つた時は、此んな事にならうとは思はなかつたでございませう。

チャーミアン　卜者も自分の身の上は見透されないものと見えますね。

クレオパトラ　(アレキザス、マーディアンの入り來るのを見て)使者は無事でゐるかえ?

マーディアン　はい、無事でございますが、身代りに立ちましたあの卜者はいゝ面の皮でございます。

クレオパトラ　ほゝ、可哀さうではあるが、此の女王の手にかゝつて死んだ當人は仕合せだと思つてゐるだらうよ。私のためなら、二人や三人の命は何でもないとは思はないかえ?

マーディアン　それは女王樣と釣合はせたら左樣でもございませうが、死ぬる當人々々は、さう安い命とも思つてゐないでございませう。それはさうと、あの使者が何かまだ肝要な事を申し殘したと云つて居りますが、併しもう女王樣のお眼通りへ出る事は厭だと申して居ります。

クレオパトラ　私もまた聞き度い事があるから、是非もう一度あの使者を此處へ呼び入れてお呉れ。

マーディアン　それは何うも。女王様……

クレオパトラ　いゝえ〳〵。此度は決して亂暴な事はしないから、安心させてお呉れ。もう私は武器も何も持つてゐないではないか。

マーディアン　では連れて參りますから、何うぞ二度とお怒りなさいませんやうに。

クレオパトラ　あゝ、もう怒りませんよ。

（マーディアン出て行く）

チャーミアン　全く使ひの者が惡いのではございません。アントニー様が御無情なのでございますよ、女王様と云ふ者のいらつしやるのに、今又御結婚をなさると云ふ法はございません。

クレオパトラ　お前また其んな事を云ひ出すから、私、怒りたくなつて來た。

アレキザス　ま、ま、お靜かになさいまし。チャーミアンさんも年甲斐のない事を云ひ出すぢやないか、女王様、只今使ひの者が參りますが、大丈夫でございませうな？

クレオパトラ　使ひは決して怒りませんよ。けれど、アントニー様は何とまア大嘘つきだらうねえ。エジプトの女王は甘々とローマの不實男に欺された。えゝ、もう此の國もナイル河の中へ溶け込んで了へ！

（此の時使者、おづ〳〵とマーディアンに伴はれて出て來る）

マーディアン　女王様、參りましてございます。

クレオパトラ　おゝ、お使者、お前もう怖がらなくともよいよ。もう〳〵あんな事はしないから、そのオクテヴィア殿の事を

もつと精しく聞かせてお呉れ。オクテヴィア殿は背は何尺あるかえ？　私よりも高いかえ？低いかえ？

使者　女王様よりも低うございます。

クレオパトラ　低いかえ？　背低だね？　それから、聲は何んな風かえ？　高い聲か低い聲か、澄んでるか濁つてるか？

使者　低くて濁つて居ります。

クレオパトラ　では舌が鈍いのだね。

チャーミアン　舌が鈍くて、背が低くて、それぢや女王様、とてもアントニー様のお氣には入りません、直ぐに倦きてお了ひなさいます。

クレオパトラ　私もさう思ふよ。濁聲の背低ではねえ。それから歩き振りは何うかえ？　立派かえ？

使者　その歩き振りののろさと云つたら、まるで死んだ造りつけの人形のやうでございます。

クレオパトラ　お前の眼は中々鋭いね。よく見て來ました。それから顏は、面長かい、圓顏かい？

使者　圓顏なのが疵でございます。

クレオパトラ　髮の毛は？

使者　鳶色でございます。そして額は思ひ切つて低うございます。

クレオパトラ　ほんとにお前の觀察は立派ですよ。アレキザス、此の使ひにね、お庫から黃金の粒を欲しいだけ出しておやり。さあ、もう用は無いから、彼方へ行つてお休み。

使者　まだ肝腎の御用が殘つて居ります。殿樣は急に此方へお歸りなさるおつもりでございます。

クレオパトラ　え？　アントニー樣がお歸り？　まあ、お前は眞實の事を言つてるのかえ？　私を喜ばせやうと思つて、

いゝ加減な事を云ふのではないかえ？

使　者　いや、決して左様な事は致しません。私は正直物でございますから、有りの儘を申上げて居るのでございます。

クレオパトラ　では、その譯を聞かせてお呉れ、さ、早く〳〵。

使　者　それは斯うでございます、シーザー樣がポンペイと戰を初めるに就て、此方の殿樣はシーザー樣のお身方であるに拘らず、シーザー樣が殿樣を輕蔑したやうな事を人民共の前で宣言致しました、それを殿樣が大層お怒りなさいましたのでございます。で、オクテヴィア樣がそれを心配なされて、色々仲に立つてお取持なされましたが、何うも甘く纏りませんで、殿樣は、自分の名譽が傷けば自分は死んだも同前だから、此儘には濟まされないと仰しやいまして、今にも兵を率ひて一旦このエジプトへお立歸りの上、改めてシーザー樣を御征伐なさるのださうでございます。

クレオパトラ　シーザーを征伐なさるのかえ？　まあ、それでこそアントニー樣だ。皆聞いたかえ？　チャーミアン！　ライナ！　アントニー樣はお歸りだよ。シーザーを打亡して、ローマの王におなりなさる下心に違ひない。では、直ぐお迎への仕度に取りかゝりませうよ　お前はほんとに好いお使ひだね。先刻はあんなに亂暴な事をしてすまなかつたよ。勘忍してお呉れ。さ、此の手に接吻してお呉れ。そして御褒美は何でも上げるから欲しい物をさう云つて貰つてお歸り、そして一刻も早く、アントニー樣にお歸りなさるやうに申上げてお呉れ。あ、さう〳〵、私手紙を書いて差上げやう。さあ、チャーミアン、奥へ行つて其の用意をしてお呉れ。（使者を顧て）お前は少し休んで待つておいで。アレキザス、あれをもてなして遣つて下さい。

アレキザス　畏りました。

（クレオパトラ室に入る、チャーミアン、ライナ、從つて入る）

……………（幕）……………

第三幕

前幕と同じ室、九月末の夜の景

アントニー座臺に倚り、クレオパトラは舞ひの樂器を手にしたまゝ其側に立つてゐる。侍者、侍女等居並ぶ、宴席の態。

アントニー　はゝ、はゝ、シーザーの事などは少しも心配するに及ばない。それよりも、久方ぶりに歸つて見ると、女王は段々若くおなりのやうに見える。あのピラミツドには何千年の昔が眠つてゐても、女王の顔には永久に若い命が宿つてゐる。私もエヂプトに歸つて、やつと人の世の若い命に息をつくやうな氣がする。さ、今一つ舞つてお見せなさい。

クレオパトラ　ではアントニー様の若い命をお祝ひ申して。

チャーミアン　さ、お舞ひ遊ばせ女王さま（手を取つて前へ出る。クレオパトラ舞ふ）

アントニー　（舞ひ了るのを見て）おゝ、見事〳〵。女王の體をこのまゝにして置くと天へでも昇つて了ひさうに見える。さあこゝへお出で（クレオパトラの手を取つて座に返る）

クレオパトラ　ですからめつたに私の體をお放し遊ばすな。さ、チャーミアン、お前も一つ踊つてお見せ。

チャーミアン　私が踊るのでございますか？

クレオパトラ　あゝ、それを持つてお踊り

クレオパトラ

チャーミアン　では御免下さいませ（樂器を取つて舞ふ。アイラス酒瓶を持つて出る。）

クレオパトラ　さあ、まあ此の杯をお受け遊ばせ。エヂプトの沙漠に生えた樹の幹から自然に湧く酒はローマの造り酒とは味が違ひます。それを斯うして私が黄金の瓶に貯へて、あなたお一人に侑めるので御座います、さあお受け遊ばせ。

アントニー　はゝ、ローマ女が手造りの酒の味などはもう忘れて了つた。エヂプトの女王が飲ませてくれる酒には、酒より外の味がある。なみ〳〵と注いで下さい、そして女王と半分づゝ一息に飲み干さう。その玉のやうな肝に瑪瑙の汁を含むだ所が見たい。そして私とあなたとどちらが早く醉ふか、今夜はきつとあなたを先に醉はせて見せる。醉はせて置いて留守中の浮氣の數を白狀させなくてはならない。留守中の戀の仕返しをしてやる。

クレオパトラ　（アントニーの杯を抑へて）まあお待ちなさい。その酒をめつたにお口へお入れ遊ばすな。毒が盛つてあるかも知れません。ほゝ、そんなにお驚き遊ばすには及びません。永いお留守中に、どんな男が私の心を吸ひ取つて了つたかも知れないものを、若し此の瓶の中に私の巧みがあつたらあなたは何うなさいます。

アントニー　あなたの手にかゝつて殺されたら私は滿足だ。死ぬる覺悟で此の杯を干さうよ。そして毒も藥もみんなあなたの口から吸ひ取つてやる。

クレオパトラ　でも、萬一私が今ローマで日の出の勢ひのシーザー殿に心を寄せて、アントニー樣に裏切りしたら、アントニー樣の命は風の前の燈よりも脆く消えるで御座いませうよ。

アントニー　女王！　シーザーなどの話は止めて下さい。シーザーは私よりも若いから、女王のやうな水性女は何時どんな心を起すかも知れないが、向ふの心は石のやうに堅いから、とてもあなたの手などに乘るものではない。

クレオパトラ　でもシーザー殿から、内々のたよりが御座いましたよ。私、何だかあの人に會つて見たくなりました。あの

人の體はあなたよりも痩せてゐるかも知れませんが、肉はきつとしまつて居りますよ。きりつとして、苦味ばしつた男でございませう？

アントニー　これ、クレオパトラ！　あなたは私を愚弄するつもりか？　若しシーザーが何か言つてよこしたなら、なぜそれを私に打ち明けて下さらない？

クレオパトラ　まあ、アントニー様、そんなにお怒りなさるものでは御座いません。ですからシーザー殿のたよりがあつたと申し上げてるでは御座いませんか？

アントニー　それは何と言つて寄越したのだ？

クレオパトラ　さあ、何と言つてよこしたので御座いませう？　あてゝ御覧遊ばせ。

アントニー　どうせ、あなたと密會の相談でもあらうさ。

クレオパトラ　ですから私の酒をお飲み遊ばすと危なう御座いますよ。それは毒酒に違ひ御座いませんもの。

アントニー　なぜそんなたわけた事をするのだ？

クレオパトラ　シーザー殿に實を見せやうと思つて。

アントニー　なに？

クレオパトラ　ほゝ、シーザー殿は若う御座います。一夜や二夜の逢瀬に心まで荒んで了ふ人ではございませぬ。アントニー様よりも實のあるお人のやうでございます。

アントニー　戯れにもそんな事は聞きたくない。そんな事を口にするからは、心にもたしかにその氣があるに違ひない。それ程シーザーがお氣に入つたら何時でもシーザーをお迎へなさい。私は潔よく彼れと一戰してローマへ引き上げる。はゝ

その後へシーザーを迎へて、世界の賣女の總頭となるがいゝ。

クレオパトラ　まあ、そんなにお怒りなさいますなと言ふに。さ、こちらをお向き遊ばせ。その可愛らしいお口から、よくそんな憎らしい言葉が出ますこと。さ、こちらを御覽遊ばせ。これチャーミアン、そのものに此の酒を飲ませておやり。

チャーミアン　此のお酒をでございますか？

クレオパトラ　あゝ、構はないから飲ませておやり。

チャーミアン　大丈夫で御座いますか、女王さま？

クレオパトラ　いゝから飲ませて御覽といふに。

チャーミアン　はい。（杯を黑人の一人に渡して）さあ、これをお飲み、女王さまが下すつたお杯ですよ。

黑　人　（頭をふりながら）どうぞ御免下さい。どうぞ御免下さい。

チャーミアン　そんな事を言つて女王さまのお言ひつけに背くと大變ですよ。おとなしくしてお飲み。

黑　人　それは毒酒で御座います。飲んだら死んで了ひます。どうぞお助け下さい。

クレオパトラ　これマーディアン、あれに飲ましておやり。皆のものも手傳つて飲ましておやり。

マーディアン　では御座いますが、若しや……ではございますまいな。

クレオパトラ　うるさいではないか。なぜ早く飲ませません？

マーディアン　はい／＼、では皆さん手傳つて下さい。さあ／＼、女王さまのお言ひつけだ。大丈夫結構なお酒だからぐつと一口に飲み干して御覽。私たちが手傳つて上げよう。

（皆々立寄つて無理に酒を飲ます、黑人それを飲んで杯を投げ出すと同時に苦悶し始め、やがて息絶える。皆々恐怖

する、アントニーも驚き見てゐる）

クレオパトラ　御覽遊ばせ、アントニー樣、毒酒のきゝめはあの通りで御座います。

アントニー　それを私に侑めやうとは何と云ふ恐ろしい巧みであらう。私はもう此のエヂプトにゐるのが恐ろしくなつた。

クレオパトラ　ほゝ、あれをあなたは、私の信實の證據とは見て下さいませんか？　まあ考へても御覽遊ばせ、若し私に毛筋だけでもあなたに背く心があつたら、あの酒をあなたの口から止めはいたしません。あれ程やす／＼とあなたの生命を抑へて置いて、それを種まで明かしてお救ひ申した私の心には塵ほどの曇りも無い事は分かつたでございませう？　私が信實の心を見ていたゞかうと思つて催した此の酒宴でございます。さあ、これからほんとうにお醉ひ遊ばせ。そしてあなたも本當に私を信じて下さるなら、その證據をお見せ下さい。これ皆のもの、あの醜い死骸を片づけてあちらへ下つておいで。（死骸を運んで皆々退場する）さあ、アントニー樣。今度はあなたが信實私を思つて下さる證據を見せて下さい。オクテヴヰァ殿に見かへられた私でないといふ證據を見せて下さい。

アントニー　私の信實は、あなたのやうな恐ろしい手だてを證據に立てるほどあぶないものではない。

クレオパトラ　私は人の命にかけて、誠の證據を見せたのでございます。それにあなたは、私といふものを措いて、オクテヴァ殿と夫婦におなりなさいました。あのオクテヴァ殿の小太りに太つた腕に脣をあてながら、エヂプトの女王が體にはもう香ひも澤もなくなつたと愛想づかしをおつしやつたでございませう？　まあ、信實堅いお誓いでございますこと！信實男のアントニー樣、さあ、早くローマへお歸り遊ばせ。エヂプトがさぞ恐ろしい事でございませうよ。

アントニー　私がオクテヴィアを妻にしたのは政略だ。それにもうあの女との縁も切れたといふではないか。

クレオパトラ　うまい事を言つておいでなさいます。政略ならなぜ前以て私にこれ／＼と御相談なさいません。もう／＼よ

うございます。私がだまされたのでございます。

アントニー　だましはしない。

クレオパトラ　では政略なら、私をどんな目にでもお會はせなさいますのね？

アントニー　馬鹿な事をお言ひなさるな。

クレオパトラ　いえ／＼。さうに違ひございません。私が一人であれ程淋しい思ひをして待ち焦れてゐるものを、あなたは少しも察しては下さらないで、是れ見よがしにオクテヴィア殿と睦じさうな御夫婦暮し、え丶、もうどうしやう。私一人が踏みつけられたのでございます。

アントニー　まあ、女王、お聞きなさい。それほど私の心をお疑ひなら、どんな事でもしてあなたの思ひの晴れるやうにしよう。どうしたらい丶のだ？

クレオパトラ　ですから私の證據にも增した證據を見せて下さい。あのオクテヴィア殿に見かへられたのでないといふ證據を。

アントニー　見せよう／＼。どうしたらい丶か、さ、言つて御覽。（手を把つて引きよせる）

クレオパトラ　いけませ／＼。證據をお見せなさらない内はいけませぬ。

アントニー　では今にオクテヴィアを虜にして、あなたの足元に引すゑてお目にかけよう。

クレオパトラ　あのオクテヴィア殿を虜にして？

アントニー　お、オクテヴィアを。そしてあなたの思ひのま丶にさせませう。

クレオパトラ　必ず？

アントニー　必ず！

クレオパトラ　そしてオクテヴィアどのを寢臺の前に坐らせて、其の前であなたとわたしと二人斯うして……

（此の時アレキザス入り來たる）

アレキザス　御免下さいませ。たゞ今フ井ロー殿エロス殿がお見えでございます。

アントニー　何の用だ？

アレキザス　火急な大事件の御相談ださうでございます。

（フ井ロー、エロス登場）

エロス　殿下、シーザー將軍の兵が、海からお跡を追うてまゐりました。一刻も猶豫はなりますまいと存じます。

アントニー　なに、シーザーの兵が追うて來たとか？

フ井ロー　ですから、すぐさま御出陣のお仕度が願ひたうございます。

アントニー　ふむ、シーザーめ、私をだしぬいたな……

クレオパトラ　アントニー樣、私の手に五百艘の兵船がございます、御心配なさるには及びません。シーザーの兵がいかに強いと申しても、遠い海を渡つて來る間には、必ず疲れて了ひます、それに其の兵の數にも限りがございます。

アントニー　ではお前等はすぐ陸の兵を出して呉れ。私はあとから海の兵をつれて行く。さ、早く行け。

（フ井ロー、エロス、アレキザス退場）

クレオパトラ　では私も御一緒に戰場へまゐりませう。

アントニー　おゝ、あなたの大將ぶりを見せて下さい。

クレオパトラ　さ、奥でお仕度をなさいませ。

（二人退場）

……（幕）……

第四幕

クレオパトラの宮殿内の大廣間。午後。

（イノバーバス兵卒を從へカニディアスと相語りゐる）

イノバーバス　いや、海戰が强ち惡いのではないが、クレオパトラ女王が陣頭へ出かけたのが惡いのだ。

カニディアス　一體なら陸で防ぐのが當然であるのに、何うしてわざ〳〵海へ乘り出したものかなあ。

イノバーバス　それが矢張り女王の誇からさ。女王は自慢の兵船を五百艘から持つてゐる上に、素晴らしく立派な御座船を持つてゐる。其の船が水の上に浮ぶと、まるで磨き上げた冠の樣に光り輝いて、艫は黃金で張り詰めてあるし、帆は紫の絹に風を孕ませて、その帆からは、焚き込めた香料の香りが匂つて來る。その風にあたつては戀病にでもなりさうな、むら〳〵とした氣持になる。笛の音に合はせて銀の櫂で水を打つ有樣は、何うしても龍宮のものとしか思はれない。

カニディアス　そんな見事な船で戰は出來ないだらうが、女王は其船で出かけたのかい？　それでは勝てつこはありはしない。

イノバーバス　いや、昨日はまさか、そんな船では行かなかつたが、併し何んな船で行かうが、女王が戰場へ出ては迚も駄目だ。アントニー將軍を弱い人間にして了ふから駄目だ。

カニディアス　陸でさへ戰へば、決して危げの無い戰だがな。

（此の時アントニー、甲冑をつけ、フォロー、エロス等を從へて出て來る。）

アントニー　あゝ、もう此のエヂプトの土地も私の足に踏まれる事を恥ぢるであらう。何と云ふ慘な負戰をした事か！　おゝ、カニディアス、イノバーバス、私はお前達に會はす顔がない。さ、皆近く寄つて聞いて吳れ。私は實に此の世の路を踏み迷つた。私の魂を導く物は滅亡の手であつた。私は只夢のやうに女王の跡を追うて陸へ逃げ歸つたが、陸に足を附けると同時に、愕然として眼が醒めて見れば、もう遲かつたのだ。何のために逃げ出したか、自分にすら分らない、戰はまだ逃げる程の負戰ではなかつた。あゝ、併し、もう云うても返らない事だ。躊躇してる内に、シーザーは此處まで攻寄せて來るであらう。お前達は早く何處へなりと落ちるがいゝ。船に黃金が積んであるから、それを銘々に分け取つて、シーザーの手に附くなり、他へ奉公をするなりして吳れ。私への遠慮は少しも要らない。

フォロー　殿下、それは最早駄目でございます。もう斯うなつては逃げられるものでもなし、また我々は斯う云ふ時にこそ御奉公の仕時と思つて居りますから、潔く大將軍と死出のお伴を致します。花々しく今一戰いたして死に度うございます。何うか大將軍にもお氣を取り直して頂き度うございます。

アントニー　いや、もう私は此の上戰ふ勇氣はない。今迄に今度程の情無い敗北をしたことはない、あの青二歳のシーザーに、すつかり遣られて了つた。迚も二度あれと戰場で顔を合はす勇氣はない。

フォロー　殿下の御氣象が此の頃殊に少しの事にも御興奮なすつて、一寸した事にお喜びかと思へば、直ぐに意氣沮喪して、女々しくおなりなさるのは、實に情無いと存じます。何うか昔のアントニー將軍にお返り下さい。情も武勇も兼備した、ローマの大丈夫にお返り下さい。

アントニー　あゝ、もう何も言つて吳れるな。私は戰場から逃げ歸つて、兵共に逃げる事を敎へた臆病者になり下つたのだ。

（言ひながら退場する、フォロー、エロス、カニディアス從ふ。）

兵　士　閣下、これから私共は何處へ行くのでございますか？

イノバーバス　行く先は大抵決まつてゐるさ。地獄へ行つて悪魔の子供にでもなるか、それとも何處か、もつと運のいゝ主人でも見つけて、奉公換をするかだ。

兵　士　貴方は是から何うなさいますか？

イノバーバス　私か？　私はもう此處らでアントニー將軍に見切りをつけて、何處か他にいゝ運を搜さうと思ふのだ。何日迄あの大將についてゐても、ああなつちや最早駄目だ。あゝして段々野たれ死をするまでの事だ。それよりかシーザー將軍にでもついて向ふの明るい道で仕事をするのが、自分のためでもあれば世のためでもある。最早向ふへ降つた者も大分ある。私も一つシーザー將軍の方へ行つて見るつもりだが、お前達も一緒に來るか？

兵　士　貴方のお出でなさる方へついて參ります。

イノバーバス　では私の指圖を待つてゐるがいゝ。（兵士等退場する。同時にクレオパトラ、チャーミアン、ミイナ出て來る）

クレオパトラ　おゝ、イノバーバス殿、私もいよ〳〵死ぬる時が來ました。

チャーミアン　女王樣、何うか其んな事をお考へなさらないで、アントニー樣の御機嫌を今一度取り直す法を。お工風下さいませ。

クレオパトラ　あれ程心が焦ら立つて了つては、最早何を云つても駄目ですよ。氣が狂つてお了ひなすつたのだから、此の先永く生きてはいらつしやるまいが、私も生きてお眼にかゝる氣はないよ。

チャーミアン　では斯うなさいませ。あのお廟の中にお隱れなすつて、女王樣は最早御自害なさいましたと云はせて見ませう

さうしたら如何に猛り立つてゐるお心でも、屹度靜まるに相違ございません。貴方樣の御生害の知らせをアントニー樣が何んな風にお受け遊ばすか、それを御覧なさいませ。そして其上で何うともお決めなすつたら宜しうございませう。

ライナ　何うかさう遊ばしませ、女王樣。

イノバーバス　それが宜しうございます。死ぬる迄手管はお忘れなさいますな。エヂプトの國は亡びても、クレオパトラ女王の美しい手管は跡に殘してお置きなさいませ。

クレオパトラ　イノバーバス殿、今日の負戰は私が惡いのか、それともアントニー樣が惡いのか聞かしてお呉れ。

イノバーバス　それはアントニー樣がお惡いのでございます。あの方の心が、愛情のために霞んでゐたからでございます。あれ程の大海戰には、兵士共でも霞へ上がつてゐるのでございますから、まして女子の身として、貴方樣がお逃げなされたのは、少しも無理はございません。お逃げなさるのが當然だと思つてゐなくてはなりません。それを總大將のアントニー將軍が、貴方の後姿を見て兵も船も置きざりに、ついて逃げると云ふ法はございません。

クレオパトラ　さう云へばアントニー樣も腑甲斐がない。何故あの時踏止まつて下さらなかつたのだらう？　アントニー樣は夢の樣に私の跡を追かけたと仰しやるが、私もあの時は、たゞもう自然と逃げ出す氣になつて了つた。少しでも氣が附いてゐたら逃げはしなかつたらうに、アントニー樣も私も、あの時は自分が自分でなかつたのだね。

イノバーバス　それが即ち、魔がさすと云ふやつでございます。私もこれからまゐつて惡魔の子供にでもなりませう。女王樣、御免下さい。

（イノバーバス退く）

チャーミアン　女王樣、若しシーザー將軍が此島へ見えまして貴方樣をローマへお連れ申さうといたしましたら？

クレオパトラ　エヂプトの女王クレオパトラがローマへ引かれて、シーザーの行列の飾物になつたら、その時から世界の歴史が新らしく初まらなくてはならないよ。アイラス、妾はお前に賴みがあるが、聞いてお吳れかい？

アイラス　勿體ない事でございます。女王樣のお言附けなら、何んな事でも致します。

クレオパトラ　お前あの、アスプと云ふ美しい蛇の事を聞いたかえ？

アイラス　はい、小さな恐ろしい蛇でございます。

チャーミアン　女王樣、貴方はまあ、何をお考へ遊ばします？　そんな恐ろしい事をお聞きになつて？

クレオパトラ　ほゝ、別に驚くほどの事でもないよ。人と云ふものは、何日何う云ふ事が起こるかも知れない、何んな事でも知つて置いて惡いと云ふ事は無い筈ですよ。

チャーミアン　若しや御自害なさるお覺悟ではございませんか？　未だそれには時が早うございます。何うぞ其んな事をお考へ遊ばさないやうに。

クレオパトラ　未だ死にはしませんよ。アントニー樣が生きてらつしやる間は私一人死にはしませんよ。アイラス、お前は此のエヂプトで、私に次いで美しい女と云はれてゐる、そのお前の死顏が私は見度いけれど、お前は死んで吳れるかえ？

アイラス　女王樣！

クレオパトラ　私は女と云ふ女の幸運の星と不運の星を身に受けてエヂプトの女王と生まれた誇りは、ローマの虜で死ぬる辱しめになつたけれど、妾の死際は、必ず世界の美女と歌はれて、跡に醜い死顏を殘し度くない。そのためには劍で死ぬる苦しみも毒で死ぬる苦しみも、みんな私の望みでない。唯あのアスプの蛇に嚙まれたものが、笑顏の中で喜死をすると云ふ、それが本當なら、私はさうしてアスプに嚙まれて死に度い。アスプの毒に醉うて、樂しい夢の中に踊でも踊りなが

ら死に度い。アイラス、お前もさうして死に度いとは思はないかえ？

アイラス　はい、女王樣、死にます時にはさうして死に度うございます。

チャーミヤン　私だつて、さうして死に度うございますわ、女王さま。

クレオパトラ　私はアイラスの嬉しさうな死顏が見度い、そしてアスプの毒の利目がためして見たい。

アイラス　女王樣、私は女王樣のお側にゐたうございます、そして女王樣と御一緒で死にたうございます。

クレオパトラ　一緒に死んで呉れる命なら、少し許り早くても遲くても同じ事とは思はないかえ？　私は是非お前にアスプの蛇の毒見がして貰ひ度いよ。それともいやとお言ひかえ。

アイラス　いゝえ、いゝえ……勿體ない事でございます。

クレオパトラ　では私のために死んでお呉れだね。難有うよ。チャーミアン、次で用意をさせてお呉れ。アイラスも一緒に行つて、心靜かに仕度をするがいゝ。さ、お立ち。

兩　人　はい。（下手へ立つて行く。）

（侍者登場）

侍　者　シーザー樣から女王樣へお使でございます。

クレオパトラ　え？　シーザーからの使ですと？　もうあのシーザーが此處へ押し寄せたのか？

（使者登場）

おゝ、シーザー殿からの使はお前か？

使　者　はい、貴方樣がエヂプトの女王でいらつしやいますか？　ローマ軍の總大將シーザーはあなた樣へ內々のお使

でございます。私はサイレアスと申す者でございます。

クレオパトラ　さあ、その用事と云ふのを聞かせてお呉れ。

サイレアス　そのお使者の趣きは、何うか、女王様お一人でお聞きを願ひ度うございます。暫くお人拂ひを願ひます。

クレオパトラ　此處にゐる者は、皆近しい者許りで、何を聞かしても、少しも差支はない。

サイレアス　でもシーザー様から左様のお言葉でございますから。

クレオパトラ　では皆暫く彼方へ遠慮してゐてお呉れ、あんまり用が長びくやうだつたら又出ておいで。

一同　畏りました。

（退く）

クレオパトラ　さ、シーザー殿の口上は？

サイレアス　シーザー様は御承知のやうに、至つて寛仁大度の大將でございますから……

クレオパトラ　それは分つてゐるから、その寛仁大度のシーザー殿が私に何う云ふ用があると云ふのか、それを早く。

サイレアス　シーザー様は、貴方様がアントニー將軍と御一緒にいらつしやるのを、至つて善意にお考へなすつていらつしやいます。

クレオパトラ　と云ふのは？

サイレアス　それは、貴方様がアントニー將軍を心からお愛しなされての事ではない、只怖れていらつしやるからだと云ふのでございます。

クレオパトラ　まあ！

サイレアス　貴方樣の操の上のお疵は、自ら好んでお求めになつたのでなく、全く餘儀なくお受けになつた汚辱だと仰やつて、ひどく御同情なさつていらつしやいます。

クレオパトラ　まあ、シーザー殿は御親切な方ね。本當の事をよく見拔いてゐて下さる。私の操は決して許したのではない唯仕方なしに從へられてゐるのだとシーザー殿に左樣申してお吳れ。

サイレアス　畏りました。そこで貴方樣が何かシーザー將軍にお賴みなさる事がございますなら私がお取次を致します。シーザー將軍は、貴方樣からお賴みがたんとあるやうにとお望みになつて居ります。

クレオパトラ　私も御親切なシーザー殿と見かけて、是非お賴みしたい事があるのよ。お前何うかそれを取持つてお吳れ。

サイレアス　まことに結構な事でございます。何なりと御遠慮なく仰しやつて下さいませ。何か貴方樣が此の後一生のたよりとなさる樣な事をお賴みなさつたら、シーザー將軍は何んなにかお喜びになるでございませう。

クレオパトラ　私もそれをね。

サイレアス　それと御一緒に、貴方樣がアントニー將軍とお別々だと申す事をシーザー樣のお耳に入れる事が出來ましたら尚結構でございませう?

クレオパトラ　別々と云ふと?

サイレアス　アントニー將軍を此處で斷然お見棄てになると申す事でございます。

クレオパトラ　あゝ、いゝよ。私アントニー樣と緣を斷つよ。

サイレアス　女王樣、それは本當でございますか?

クレオパトラ　本當ですよ。私もいつまで見込のない事をしてゐる氣もないからね。

サイレアス　シーザー様も其れをお聞きになつたら、何んなにか御安心なさる事でございませう？　そして貴方様は、此の後永く、世界の王たるシーザー大將軍の御保護の下に、此のエジプトの國を安泰に司つていらつしやる事が出來ます。

クレオパトラ　私はシーザー殿の勝利の手に接吻する代りに、お前の手に接吻するから、何うで歸つて然う傳へて下さい。それから私の王冠をシーザー殿の足下に置いて、世界に號令なさる其のお聲で、エジプトの女王が上に命令を下さるのを待つて居りますとね。

サイレアス　立派なお考へでございます。そしてシーザー將軍の思召では、これを機に、是非一度ローマへお越し下さるやうにとの事でございます。左樣致せば、將軍はじめ、ローマの市民共は、世界に名高い女王樣の美しいお姿を拜する事が出來て、何んなにか喜びも歡迎も致すでございませう？　出來る事なら、シーザー將軍がお供をされて、將軍と同じ輿にお乘せ申して、ローマの市民共にローマとエジプトの親しい仲を見せて遣り度うございます。

クレオパトラ　あゝ、シーザー殿に左樣云ふ思召があるなら、私喜んでローマへ行きますよ。私も今一度ローマの都が見て置きたいから。

サイレアス　それから、女王樣、アントニー將軍は、もとくシーザー樣とも親しいお仲で、少しの行違ひから斯樣な事になりましたものゝ、シーザー樣も決して本心から憎んでゐられる譯ではございませんから、此の上無益な血を流さないでシーザー樣に和睦の使をお出しになりますやう、貴方樣からお勸め下すつてば如何でございませう？

クレオパトラ　其れも良いでせうが、其樣なると、アントニー樣は矢張り此のエジプトに今のまゝお留まりなされて、東の國の總大將と云ふ事になるのかえ？

サイレアス　いや、それはシーザー樣のお心による事で、兎も角も一度ローマへお出になつた上、あなた樣に後の祟りの無

いやうに、シーザー様がうまく御處置をなさるでございませう。

クレオパトラ　みんな承知しました。ではシーザー殿に、私の仕度の調ふまでこのアレキサンドリアの城下にお討入りなさらないやうにと、きつとさう申し上げてお吳れ。

サイレアス　畏りました。では、何うか確なおしるしを頂いて歸り度うございます。そして陣營で貴方樣からのお便りをお待ち申す事に致しませう。其の聰明な御分別のぐらつきせません内に、早くお仕度をなさいませ。

クレオパトラ　では何をしるしに上げようか？　あゝ、さう、此の劍をお前に預けるから、之れをシーザー樣に渡してお吳れ。

サイレアス　何よりのおしるしでございます。では私はこれで御免を蒙りますから、何うか王の御手を拜借いたしまして、シーザー將軍に代つて敬意を表し度うございます。

（この時アントニー、エロス等と出て來る）

アントニー　やあ、無禮者奴、エロス、彼奴を早く取り押へい。（エロス使者の後を追つて這入る、侍女入り來る。つゞいてエロス再び入り來る）女王、貴女は何故さう逃げ廻つてゐるのだ？　貴方の船は皆敵に降つて了つた、シーザーの勢ひに恐れて、シーザーをこの私に見替へた賣女のやうな女王には、相應した海兵共だ。いづれ後から女王も逃げて行く手筈であらう。五十年の私の生涯と、ローマの運命を賣つた女、私はこの憎い女に復讐をして、それで私の一生を閉ぢるのだ。

クレオパトラ　貴方まあ何うしてそんなひどい事を仰しやるのです？　戰の勝敗は時の運ではございませんか？　船の兵共が敵に降つたからと云つて、それは私の指圖でもないし、第一陸の貴方の兵だつて、崩れて逃げる者もあれば降る者もあつたぢやございませんか？　其んな事は最早仰しやらずに、氣を靜かにお持ちなすつて下さい。

アントニー　いや〳〵、降伏したのは兵丈ではない、女王が自身でシーザーに降伏の證を捧げたではないか？　シーザーに捧げたあの短劍は何だ？　落目になつた此のアントニーを見放して、昨日迄の敵たるシーザーに心を寄せた證據ではないか？　貴方は嘗て死んだシーザーの膳に上つた喰ひ餘しの肉であつた、それを又ポンペイが嗅いで見たのを、私が拾ひ上げて折角清い皿に盛り直すと、最後に到頭其んな見下げた眞似をし出したのだ、貴方には操と云ふものが何んなものだか判らないのだ。

クレオパトラ　まあ、アントニー様！　私の操は國に捧げた操でございますよ。それを貴方が奪つてお了ひなすつて、今では私の操はたゞ貴方一人に捧げてるぢやありませんか？　それはよく知つて居り乍ら其んな殘酷な事を仰しやつて、貴方は氣か狂つたのでございますよ。

アントニー　あゝ、最早私等の上を照らす星も月も隱れはじめたのだ。

クレオパトラ　貴方にはまだ本當に私の心が判らないのでございますか？　シーザーに降伏のしるしが私の計略であつたとは見て下さいませんか？

アントニー　あゝ、駄目だ〳〵。そんな言拔けを聞く耳は持たない。貴方はシーザーが袴のこはぜをかける奴にまで色眼を使ふ浮氣者だ。私の一生は貴方に誤られたのだ。早く行つてシーザーの馬の後について、世界の女の恥さらしになつて了へ！

クレオパトラ　アントニー様！　アントニー様！

チャーミアン　さ、女王様、早くお廟へ入らつしやいませ。今は何を仰しやつても無駄でございます。彼方でアントニー様のお氣の靜まるのをお待ち遊ばせ。

アントニー　そのお側附の女迄が、一緒になつて私を欺さうとしてゐるのか？

チャーミアン　女王樣！　女王樣！

クレオパトラ　まあお待ち、アントニー樣、貴方はそんなにまでおつしやつて、なぜ私をお殺しなさいません？　私は一そ死んでこの苦しみが逃れたい。

アントニー　まだそんな事を言つてゐるのか？　私が之まで何度その手でだまされたと思ふか？　そんなに死にたければ一人で死んで了へ。今となつては殺してやるのも刀の穢れだ。

クレオパトラ　まあ、あなたは氣が狂つたのですよ。私、どうしよう？　私。どうしよう。

チャーミアン　まあ、あちらへと申してゐるぢやございませんか。

（クレオパトラを促し立てゝ退く）

アントニー　はゝ、行け〳〵、何處へでも行け！　行つて報いを受けるがいゝ。エロスー　おゝ、其處にゐたか？　お前だけはまだ私についてゐるな。

エロス　はい、何處迄もお伴を致します。

アントニー　私は時々空中の雲が龍の形をしたり、獸の形をしたり、塔の形をしたりして、そして其等の物が私の前にぴよこ〳〵とお辭儀をするのを見るが、お前も其んな物を見る事があるか？

エロス　はい、あるかも知れません。

アントニー　そして其の幻は何時の間にか朦朧と消えて了ふ。大抵は薄暗がりの晩けいに見えるものだ。

エロス　はい、左樣でございます。

アントニー　今になつて見ると、私の部下の大將共も、大方この幻のやうな物で、何時か何所かへ消え失せて了つた、エロス、私はエヂプトの女王のために此の戰をしたのであつた。そしてその女王の心と私の心とは確り結び合つてゐると信じてゐた。所があの女王奴は、シーザーと道に外れた骨牌をやつて、私を陥れて了つたのだ。エロス、泣くな。お前には腰元の中に美しい想ものがあると女王が云つてゐたが、その女はまだ女王の側にゐるか。

エロス　アイラスは最早死にましたでございませう。

アントニー　死んだと？　何してな？

エロス　女王樣の御命令で死ぬことになつたのでございます。

アントニー　女王の命令とは、女王に殺されたのか？（此の時マーディアン出て來る）おゝ、其方はあの義理知らずの女王の召使だな？　何の用事があつて此處へ來たのか？

マーディアン　畏れながら、女王樣からの悲しいお使ひでございます。

アントニー　默れ！　今になつて其んな手管で私を欺さうと思つても駄目だと早く歸つて然う云へ。

マーディアン　ま、ま、お聞き下さいませ。女王樣はお果てなさつたのでございます。

アントニー　まだそんな僞を言つてゐるか、あの女は二十度も三十度でも死ぬ女だ。もうそんな欺し事は無益だといへ。

マーディアン　いや、女王樣は本當にお死になさいましてございます。

アントニー　なに！　女王が本當に死んだと？

マーディアン　はい、今はの際に、アントニー樣と唯一言仰しやつて、御生害遊ばしましてございます。

アントニー　それは確か？

マーディアン　はい、確でございます。あんまり殿様がお怒りなさいますので、其のお怒りは死んで解く他はないと御決心なすつたのでございます。

アントニー　さうか……（沈默の間マーディアン竊にアントニーの樣子を見てゐる）エロス！　此の鎧を脱がせて吳れ。マーディアン！　お前は早く女王の所へ歸つて、跡の始末をせい。私も跡から女王の所へ行くからな。

マーディアン　でございますか？　では御免を蒙りますが、それでは貴方樣の女王樣に對するお疑ひもお憎しみも消えましたでございますな。

アントニー　女王の眞心は分つたから、早く行け！

（マーディアン退場）

エロス　では女王樣の御亡軀にお會ひなさいますか？

アントニー　いや、今更死んだ女王に合はす顏もないから、私は此處で相果てる。さ、此の鎧を早くぬがせて吳れ（エロス鎧をぬがす）私は最早武士ではない。此の傷だらけの甲冑にも今日限り暇をやつて、見えも誇りもない一肉團のアントニーに戻つて了ふ。そしてクレオパトラの跡を追うて其の許しを乞ふのだ。エロス！　お前は嘗つて、萬一私に絕對絕命の時が來たら私の言ひ附け通り私を殺して吳れると約束したな？

エロス　はい、殿下。

アントニー　さあ、今、その時が來たのだ。私を一思ひに刺し殺して吳れ。

エロス　何うか其れは御免下さいませ。いくら約束でも、それは神々が許しません。

アントニー　いや、是非お前が殺して吳れなくてはならない。私の此の醜い手で私の靈魂は斷たれない。

エロス　敵軍でさへ、貴方様に丈けは正面に矢を放つ事を避けて居りますのに何うして私が貴方様の體に刃を加へられませう何うかお許し下さい。

アントニー　ではお前は、私がシーザーの虜になつてローマへ引かれて行くのを見る氣か？

エロス　何うして其んな事がございませう。

アントニー　それなら早く、さ、早くその劍を拔け？　早く拔かないか。

エロス　殿下、この劍であなた樣を刺しますやうなら、私が先へ死にたうございます。

アントニー　たはけた事を言ふな、私が一生の間際に賴むこの賴みを聞いて吳れないお前ならもう用はないから出て行け出て行け？

エロス　では何うぞそちらをお向き下さいませ。

アントニー　おゝ、承知した。

エロス　さあ、劍を拔きましてございます。

アントニー　直に刺し通して吳れ。

エロス　ではお暇申し上げます、おさらばでございます。

アントニー　おゝ、おさらば、跡をよく賴むぞ。

エロス　殿下、此の通りでございます。（自殺して倒れる）

アントニー　やあ、エロス、お前は自分で死んだか？　（沈默）私は何と云ふ卑怯未練の臆病者であらう。エロス、お前は實に立派な武士だ！　ローマの武士の手本になつた。此の上は私も遅れはしないぞ。死んでクレオパトラの跡を追ふたの、

さあ。エロス、私は今、お前の弟子となつて死ぬるよ。お前が教へて呉れた通り、斯うして（短劍を拔き持つて其上に突き伏す。其時アレキザス急ぎ足に登場）

アレキザス　殿下！　女王樣からのお使ひでございます。やあ、しまつた？　遲れたか？　殿下、お早まりなさいますな。どうぞ氣をたしかにお待ち下さい。女王樣からのお使ひでございます。女王樣からの。

アントニー　なに？　女王からの使ひだと？

アレキザス　はい、女王樣が直ぐにお會ひ遊ばし度いとの事でございますのに何うしてまあ、斯う云ふ事になりましたか？

アントニー　女王はまだ生きてゐるか？

アレキザス　はい、まだ死にはなさいません、お廟で貴方樣のお怒りの解けるのを待つていらつしやいます。それを貴方樣が先へ御自害なさつたのでございます。

アントニー　では矢張私はだまされたのか？　憎くい女め！

アレキザス　いや、決しておだましなさつたのではございません。女王樣も疾くに死ぬ覺悟はしていらつしやいますが、あなた樣のお疑ひを和けて御一緒に死にたいといふお願ひで待つていらつしやるのでございます。おかはいさうだと存じます。

アントニー　では私を直に女王の所へ連れて行つて呉れ。會つて言ひ度い事があるから。

アレキザス　畏まりました。これ／＼、お次にゐられる方、次にゐられる方、大變です／＼

（兵士二三人走せ出る）

兵士甲　何事ですか？

アレキザス　殿樣が御生害だ！

兵士乙　や？　大將軍がお果てになつた

兵士丙　あゝ、とう〳〵エヂプトの星が落ちたのだ。

アントニー　おゝ、兵士共、お前等はまだ私の所にゐたのか？　その忠義にはお禮を云ふよ。そして之れが私の最後の命令だから、何うか私の身體を女王の所へ連れて行つて呉れ。

アレキザス　さあ、みんな來てお起こし申して呉れ。

（皆でアントニーを扶け起こし擔つて行く。）

……（幕）……

第五幕

廟内、前の幕と同じ日。

（クレオパトラ、チャーミアン、ライナ、其他侍女、マーディアン等出てゐる。）

クレオパトラ　チャーミアン、もう私は此處から一足も外へは出ないよ。

チャーミアン　女王樣、そんなに御心配遊ばすには及びませんよ。

クレオパトラ　いゝえ、油斷はならないよ。何時何んな事が起こつて來るか知れたものぢやない。あのあの謀略の多いシーザーが何んな策略で私を生擒にすまいものでもないから、些とも油斷はならないよ。それにアントニー樣のお怒りも恐ろしいよ。あの方はまた愈々となると無法な事をなさるから、何んな眞似をして私を虐殺なさるかも知れない。

ライナ　アントニー樣は、ひよつとすると最早御自害でもなされたのではございませんか。

クレオパトラ　あゝ、ライナ、そんなことを言つてお呉れでない。何故アレキザスは早く歸つて來ないだらうね。早くアントニー樣の樣子が聞き度い。マーディアン、お前最一度行つて見てお出で。一體何んな風だつたのかえ？　アントニー樣が鎧をお脱ぎになつて、それから何をなさりさうだつたかえ？　お前も氣が利かないぢやないか？　何故その後をよく見屆けて來ません？

マーディアン　いや、それは私もよく見て參らうと存じたのでございますが、殿樣が早く歸れ〳〵と急き立てなさいますものですから……

クレオパトラ　若しもの事があつたら、其のあとは何うなるだら？………

チャーミアン　女王樣？

クレオパトラ　え？

チャーミアン　其のあとへシーザー樣がゐらつしやいましたら？

クレオパトラ　シーザーが？

チャーミアン　アントニー樣のお亡くなりなさいました跡へ。

クレオパトラ　まあ、チャーミアン！

チャーミアン　何もお隱しなさるには及びません。あなた樣のお心にシーザー樣の影がさしたのではございませんか？

クレオパトラ　はゝゝ、左うなつたら私がシーザーを生擒るか、シーザーが私を生擒るか、二つに一つしか無からよ。お前は私にシーザーを生擒れと云ふのかえ？

チャーミアン　はい、アントニー樣をお生擒りなさいましたのと少しも違ひは致しません。みんなお國のためでございます。

クレオパトラ　それは最早駄目ですよ。シーザーとアントニー樣とは人柄が異ひます。シーザーは女の言葉に氣を許すやうな男ではない。それに、私も今では最早そんな心がなくなつた。昨日はわざとシーザーの使者に氣を持たせて返しよが、あれはほんの其場の出來心ですよ、あとでアントニー樣にすまないと云ふ氣がして仕やうがない。私も弱くなつたね、チャーミアン。

チャーミアン　アントニー樣はお仕合せな方でございます。それを聞いてお亡くなりなさいましたら、思ひは殘りますまい。

クレオパトラ　私も、アントニー樣の跡を追ふのなら、殘り惜いとも思はないよ。

ライナ　アレキザス殿が歸つて見えました。
チャーミアン　多勢連れて參つたやうでございますよ。
クレオパトラ　アントニー樣ではないかえ？　アレキザス！　アレキザス！
（アレキザス、兵士等にアントニーを擔はせて入り來る）
アレキザス　女王樣、アントニー將軍がお見えでございます！
クレオパトラ　え？　アントニー樣が？　早く此處へお連れ申して呉れ、變つた事はなかつたか？
アレキザス　いや、大變でございます、將軍樣は最早自害なさいました！
クレオパトラ　えゝ？　それは眞かえ？　そして最早お死になすつたかえ？
アレキザス　まだ息は殘つてゐらつしやいますが、迚も長くは保ちません、此の通り皆でお連れ申して參つたのでございます。
クレオパトラ　あゝ、とう／＼此の世の日も月も落ちて了つた。チャーミアン！　ライナ！　助けてお呉れ！　助けてお呉れ！
チャーミアン、ライナ　女王樣、女王樣、氣を確にお持ち遊ばせ。
クレオパトラ　おゝ、アントニー樣！　アントニー樣！　早くアントニー樣のお側へ連れて行つてお呉れ！
アントニー　クレオパトラ！　今こそアントニーは自分の力で自分に勝ちました。
クレオパトラ　さうです／＼。アントニー樣に勝つ者はアントニー樣より他にはありません。それにしてもまあ、何と云ふ悲しい御最期でございませう！

・アントニー　私は最早死ぬるから、さ貴方の唇に最後の接吻をさせて下さい。

クレオパトラ　何うぞ是で生き返れるものなら、私の唇の無くなる迄も。

アントニー　其の唇を、私はローマに換へ、世界に換へ、アントニーの一代に換へました。遂げやうと思ふ望みは多かつたが、五十年の生涯の最後の行詰まりは此の一つの接吻だつた。私は斯うして女王の胸に抱かれて、満足して死にます。

クレオパトラ　貴方は私の事は少しも思つて下さらないのですね？　此んな物憂い世の中に何うして私許り永らへて行かれませう？　私も直ぐに貴方のお後を慕ひます。貴方か居らつしやらなければ、穢い／＼此の世の中でございます。

アントニー　いや、貴方はシーザーに頼んで子孫の安全を計つて下さい。シーザーは頼みにならずとも、其の家来には頼もしい者がゐる。

クレオパトラ　私は此の上唯私の手を頼みにする計りでございます。シーザーなどを頼もうとは夢にも思ひません。シーザーが凱旋式の飾羽になりますやうなら、私の手に劍もあります、毒もあります。ローマへ行つてオクテヴ井ア　殿の貞女眼で見下げられて、その憫みを受ける程落ちぶれた私でばございません。

アントニー　それでは何うか貴方の得心の行くやうにして下さい。私も是迄世界の王がなすべき事はみんなして來たから此處で立派に其の冠をローマの武士として同じローマの武士たるシーザーに譲り渡す。貴方もエヂプトの王冠を脱いで、唯の美しいクレオパトラにおなんなさい、そしてアントニーが手を曳いてあの永久の國へ連入らう。

クレオパトラ　アントニー樣！　私は最後までエジプトの女王としてお供をいたします。

アントニー　ではお暇するよ。クレオパトラ、クレオパトラ！

（アントニー落ち入る）

クレオパトラ

クレオパトラ　アントニー樣！　おゝ、アントニー樣！

チャーミアン　お亡くなりでございますか？

ライナ　おゝ、世界の星が落ちて了つた！

マーディアン　おゝ！　おゝ！

アレキザス　さ、さ、泣き頽れてゐても仕方がない。女王樣も何うかお氣をお取り直し下さいませ。武士の旗柱と立てられた方の御臨終に、あまりお泣きなさいましては女々しくなります。それよりか、早く御遺骸を奥へ運ばせませう。斯うして居ります内にも、シーザー將軍が此の樣子を聞き知つて押し寄せたら面倒でございます。御遺骸に最後のお別れをなさいませんか？

クレオパトラ　おゝ、最後のお暇乞ひをするよ。アントニー樣、お後を慕うてまゐります。

（アントニーの死骸に接吻する）

アレキザス　皆さん、御苦勞でも、何うか御遺骸を奥へお伴して下さい。

（兵士等立寄りアントニーの死骸を運び行く）

クレオパトラ　あゝ、是で私も世の用がすんだから、早くあの國へ行き度い。シーザーの支配の下に何うして私が生きてゐられやう。死ぬのは永久の眠りだと云ふから、早く死んで氣樂に眠り度い。

（外方でシーザー、シーザーと呼ぶ聲がする）

チャーミアン　女王樣、シーザー將軍でございます。とう〳〵御門を押し破つて這入つて來たのでございます。

ライナ　何う致しませう？

クレオパトラ　短劍をお貸し。そして若かの時の覺悟はいゝかい？

チャーミアン　はい、承知致して居ります。

（シーザー部下を從へて入り來る。喇叭吹奏）

シーザーの臣　シーザー將軍がエジプトの女王に御挨拶を申上げられます。

シーザー　女王殿下、オクテヴィアス、シーザーがお眼通り致します。

クレオパトラ　（跪いて）世界の皇帝、シーザー陛下。

シーザー　さ、さ、お立ちなさい、跪くには及びません。

クレオパトラ　私は先づ何よりも、淺はかな女の過ちをお詫び致します。

シーザー　クレオパトラ女王、私は今、貴方の罪を數へやうと思つて來たのではありません。今迄の事は一切何もなかつた事として、此處で改めて貴方と御朋友になり度いと思ひます。

クレオパトラ　御親切のお言葉を嬉しくお受け致します。あの大シーザー樣との御縁は今も忘れは致しません。

シーザー　御親密のしるしに何か致し度いと思ふが何なりと貴方にお望みがあるなら聞かせて下さい。

クレオパトラ　別に只今是と申す事もございません。私は唯陛下のお足下に跪づいてお指圖を受け度うございます。

シーザー　何かお頼みがありはしませんか？

クレオパトラ　お頼みとあれば、よく大シーザー樣がさう仰しやいました、一國の女王として國を頂く位な權式は持たなくてはなりません。私の子孫のために此のエジプトの國をお立て下さいませとお願ひ申す他はございません。

シーザー　それは尤なお頼みだが、それには先づ貴方の御身分からお定めなさらなくてはならない。このシーザーの手につ

いてお出でなされば、必ず惡くは計らひません。けれども萬一我意の振舞ひをなさつて、アントニーと同じ樣に自殺などをなされば、何うも寛大のお取り扱ひをする事が出來なくなります。私の好意を無にして、貴方の子孫をも斷つ事になつて了ひます。此の邊の事情をよくお考へなさつて、是非私と一緒に今一度ローマへへお趣し下さい。さうなれば誓つて市民どもにあなたを歡迎致させます、そして貴方のお身も御子孫のお身も立派に立つやうにして上げます。この事丈けはシーザーが劍にかけて誓つて置きます。

クレオパトラ　御親切は身に泌みて忘れません、私が何うして今さらアントニー樣の後なぞを追ひませう。私は陛下のお裾に接吻致します。

シーザー　いや〳〵、そんな事をなさるには及ばない。

クレオパトラ　ではお手に接吻させて頂きます。

シーザー　いや、それは私こそ貴方のお手に接吻させて頂くべきだが、併しそれはまあ後の事として、兎も角も是から直ぐにお供をして私の陣へまゐりませう。是非一度あちらへお出で下さい。

クレオパトラ　まあ、直にまゐるのでございますか?。

シーザー　はい、どうかさうして頂きたいものです。

クレオパトラ　まあ、それではまるで引かれてまゐるやうなものでございますね。

シーザー　いや〳〵、決してさういふ譯ではありません。あなたの方にお間違ひさへなければ、歸つて暫くお待ち申してゐても構ひませんが……

クレオパトラ　では何うぞお待ち下さいませ。このまゝではあんまり醜うございますから、後程仕度をして陛下の御陣へま

ゐります。そして色々のお物語りが致したうございます。

シーザー　併し折角斯うしてお迎ひにまゐつたのですから成るべくは御一緒に馬を並べてお話ししながら歸りたいのでね。

クレオパトラ　こんな取り亂した風俗でお立派な陛下のお側へ並びますのは、女の身として死ぬよりもつらうございます。是非〱お後からまゐらせて下さいませ。

シーザー　さうですか……ではいたし方がないから歸つてお待ちして居ります、成る丈け早くお出で下さい。お出での時は部下の者に粗相のないやうに警護致させますし、彼方では及ぶ限りおもてなしの用意をして置きますから、何うかシーザーが二心のない所をお酌み下さい。

クレオパトラ　行き屆いた御注意で有難うございます。

シーザー　（部下に向つて）ではお前等の内から、女王殿下がお出での時迄御門前を警護して居れ。（アレキザス、マーディアンに）尚警護の者に粗相があつてはならないから、お側にゐられる兩人は門外へ出て見張つてゐて下さい。女王殿下は、何うか後でゆつくりとお仕度をなさい。私は飽く迄も貴方の友人として立つつもりであるから必ずお思ひ違ひのないやうに。

クレオパトラ　ではシーザー陛下。

シーザー　さあ、お立ち下さい。では後程お目にかゝります。

（シーザー、アレキザス、マーディアン等を引きつれ退場、喇叭吹奏）

クレオパトラ　はゝゝ、皆御覽よ。シーザーが私を一杯はめて行きました。私を生檎つてローマへ引かうとするのですよ。

チャーミアン　アレキザス殿まで引かれて行きました。
クレオパトラ　私の側に男を置いては手向ひするかと思つて體よく連れて行つたのだらうよ。
ライナ　それで女王樣、是から何うなさいます？
クレオパトラ　もう、此處迄來れば、行く先きは見えてゐるぢやないか！　言ひ付けて置いた物を持つてお出で。
ライナ　では御免遊ばせ。
（立つて行く）
チャーミアン　最早、私達の日は暮れたのでございますねえ、女王樣、
クレオパトラ　アントニー樣に會ふ時が來たのだよ。シーザーに鼻をあかせて遣る時が來たのだよ。私は斯うして、自分の身を殺してシーザーが勝利の獲物を奪つてやる。私を殺すのがシーザーへの復讐になるのだよ。さ、お前は私にあの冠を被せてお呉れ。私はさうして、エジプトの女王として死ぬのだから、そして、アントニー樣に初めてシドナスの河船でお會ひ申したあの時の心持で死ぬのだから。あゝ、あれは最早久しい昔の事だつたね。さあ、私は昔のシドナスへアントニー樣に會ひに行くのだよ。立派に着飾らせてお呉れ。
チャーミアン　女王樣、ほんとに昔の日がお懐しうございます。
クレオパトラ　あゝ、あの頃は私もまだ若かつたね、それが最早此んなお婆さんになつて了つて。もう是でいゝよ。それでお前の用も仕納めになりました。永い間よく勤めて呉れたね。
（ライナ、花籠に無花果を盛つた中へ、函に小蛇を入れたのを携へて登場）
クレオパトラ　おゝ、ライナ、その中かえ？

ライナ　はい、あのお言ひ付けの百姓が献納いたしました品でございます。

クレオパトラ　御苦勞だつたね。ライナも永らく忠義に勤めて呉れたが、それで私の用も仕納めですよ。

ライナ　女王様お名殘り惜しうございます。

クレオパトラ　あゝ、ライナや。

ライナ　私は一足お先へ………

クレオパトラ　んく　どノしにこ了

（ライナぱつたりと倒れる）

チャーミアン　ライナさん！　ライナさん！　まあ、私は貴方に先を越されて了つた。

クレオパトラ　ライナがアイラスの跡を慕うて、私のための露拂ひをして呉れたのだね。さあ〳〵、私も急ぎませう。アントニー様が呼んでゐらつしやるやうに聞こえる、遠い向ふの方に立つてゐて、ぢつと私のする事を見てゐらつしやるやうに見える。そしてシーザーの勝ち誇つた樣子を嘲つてゐらつしやるのだよ。貴方も一頃は世界の王として朝日のやうに輝いてゐらつしやつた。あの頃は、世界の國々の王達が皆貴方のお仕着せを着て、貴方の領地は丁度貴方の隱袋から拋出された貨幣のやうに世界中に散らばつてゐたが。

チャーミアン　ほんとに其の頃がお懷しうございます。

クレオパトラ　けれど、是からもつと好い國へ行くのですよ。それからあんなにも樂に美しく死なれるのだもの、暇乞ひをする程の値打もありはしない。

チャーミアン　あゝ、黒い雲は解けて雨となるがいゝ、神々も泣くでございませう。

クレオパトラ　さあ〳〵、躊躇してゐると卑怯に見える。ライナもアイラスも皆アントニー樣のお側について、私を待ち遠しがつてゐるだらう。アントニー樣、今參つて、その國で初めての接吻をして上げますよ。（アスプを一つ取り出して胸につける）お前のその鋭い齒でこの玉の緒を嚙み切つてお吳れ。さ、蛇よ、アスプよ、早く嚙んでお吳れ。

チャーミアン　おゝ、女王樣！

クレオパトラ　靜におし。この私の胸の、かはいゝ子供を見てお吳れ。乳母の乳でも吸つてゐるやう。

チャーミアン　あゝ、何と云ふ御最期でございませう。

クレオパトラ　まるで、膏藥でも塗るやうに氣持がいゝ。春風の誘ふやうに柔な心地がする。あゝ嬉しい。美い物が澤山眼の前に見える。アントニー樣！　アントニー樣！、今直ぐに行きます。（他のアスプを取り出して腕にあてる）何うして永く貴方とお別れしてゐられませう。今直ぐにお側へ行きます。

（安眠するやうに見える）

チャーミアン　おゝ、女王樣！　女王樣！　最早お出でなさいますか？　私も何うして此のまゝ永くこんな穢れた浮世にゐられませう。直ぐお跡を慕つてまゐります。（小蛇を取つて自分の胸にあてる）あゝ世界で一番美しかつた女王樣！　女王樣！　今お跡からまゐります。お靜にいらせられませ。

（チャーミアン倒れる。）

クレオパトラ　アントニー樣！

（靜に息絕える）

………（幕）………

大正八年七月廿二日印刷
大正八年七月廿八日發行

（豫約出版）



著作者　故島村抱月

發行者　東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社天佑社
代表者　小林政治

印刷者　東京市京橋區築地二丁目卅番地
川崎佐吉

印刷所　東京市京橋區築地二丁目卅番地
川崎印刷所

發行所　東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社　天佑社
電話番町長一一七九番
振替口座東京一〇一二八番








EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02954 9425